

傭兵少女のクロニクル

なうさま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東部戦線帰りの英雄、凄腕の傭兵、武地京哉（たけちきようや）は旅客機をハイジャックした。

しかし、そのもくろみは失敗に終り旅客機は墜落してしまう。

からくも一命を取り留めた彼だったが、目を覚ますと、なぜか金髪碧眼の美少女になっていた。

運がいい、そう思ったのも束の間、周囲には墜落を生き延びた乗客、修学旅行中の高校生まるごと1クラスがいた。

彼がハイジャック犯だとばれたら命はない。

「わ、私はナビーフイユリナー11歳。ハイジャック犯ですか？ し、知らないですねえ……、くつ……、くつ……」

そう、こんな少女の身体ではすぐに捕まってしまう……。

だが、しかし、

「え？ これが、私？」

そう、痛んだ髪をすっかりトリートメントされ、汚れた服も白いワンピースに着替えさせられてしまったのだ。

※小説家になろう様、アルファポリス様、カクヨム様にも投稿しています。

目次

第1話	パーフェクト・ソルジャー	1
第2話	ナビーフイユリナ	11
第3話	孤立	19
第4話	救難	25
第5話	純真無垢	30
第6話	遺書を	36
第7話	ルビコン川	41
第8話	ひとりマスコット班	47
第9話	脱柵	54
第10話	ヒンデンプルク	60
第11話	探索	66
第12話	シウスとチャフ	73
第13話	パシフィカ・マニフィカス	80
第14話	ピップとスカークとアルフレッド	86
第15話	露天風呂	93
第16話	追い風	102
第17話	お祭り	107
第18話	ファーストコンタクト	113
第19話	急襲	119
第20話	それでもナビーは諦めない	126
第21話	覚悟を	133
第22話	ルビコン川にて	139
第23話	ウエルロット	145
第24話	みなしご	152

第25話	いぎ、お風呂へ	158
第26話	奇策	164
第27話	索敵	170
第28話	切り札	177
第29話	勝負のゆくえ	183
第30話	運命を知る	189
第31話	エシユリン	195
第32話	わっぱ、ぷーん	201
第33話	ヒンデンプルク広場にて	209
第34話	ドラゴン・プレツシヤ	214
第35話	ほのかな杞憂	222
第36話	望まぬ客	229
第37話	交易	235
第38話	クルビット	241
第39話	地獄の火峠	248
第40話	魔王降臨	255
第41話	天つ風	262
第42話	清明の花風	269
第43話	ビンゴだぜ	276
第44話	闇夜のアノマリ	282
第45話	獣はいふなり	288
第46話	白いケープ	295
第47話	細糸のコンセンサス	302
第48話	弱さを許さない	309
第49話	風神の如く	316

第50話	青菜に藍いでる	325
第51話	落とし穴	332
第52話	一輪	340
第53話	一筋の光	347
第54話	久遠晴天	354
第55話	コールユージェン波動	360
第56話	もう一人	368
第57話	恋ひわたる	375
第58話	永遠に生きるつもりで	384
第59話	たゆたう一会	393
第60話	ナスク村	399
第61話	乱れそめにし	407
第62話	矢風涼静	414
第63話	双炎	421
第64話	武装中立	428
第65話	陽射しをうけて	434
第66話	フィユたん	441
第67話	灰の中のエビデンス	448
第68話	カチューシャ	455
第69話	たびなく白雲	463
第70話	エンゲージメント	471
第71話	逡巡夏雲	477
第72話	舞華のアイソセリーズ	484
第73話	金の斧の池	492
第74話	フラッシュ	499

第75話	凄然と沈黙のオデッセイ	506
第76話	うつりにけりな	513
第77話	アタック・ワーニング・レイド	520
第78話	かひなくたむけ	526
第79話	プラグマティツシエ・ザンクツイオン	533
第80話	一蓮戦ぐ	540
第81話	朽木の先に	547
第82話	淘汰覇議	553
第83話	ゆくえも知らぬ	560
第84話	さも風も寂しきに	567
第85話	キリング・フィールド	574
第86話	フェイスオフ	581
第87話	積雲紋もあやしく	588
第88話	ブリティツシュ・グレナディアーズ	594
第89話	ながながしあぜみち	602
第90話	再会	609
第91話	インシユアランス	617
第92話	苦渋一字	624
第93話	リープトヘルム砦	631
第94話	ベルゲンデン	638
第95話	投影	645
第96話	剣闘士	651
第97話	地下闘技場	658
第98話	ロツイエの血の夜	665
第99話	果てしなく	672

第100話	皆殺しのジョルカ	678
第101話	善因悪果	685
第102話	ガルディック・バビロン	692
第103話	花の色あせつつ	698
第104話	インデンスピット	704
第105話	立夏の朝風	711
第106話	花知るばかり	718
第107話	ピュアフサージ	725
第108話	その色としも	734
第109話	竜騎兵团	741
第110話	やがて帰り来む	748
第111話	叛旗	755
第112話	烈火爽来	761
第113話	闇夜に	767
第114話	乱殺	775
第115話	飛翔	782
第116話	セイレイ	789
第117話	超常	795
第118話	ザトー	802
第119話	古い木の水掻き	808
第120話	地獄の門	816
第121話	反撃	823
第122話	フレイジング	830
第123話	ブリザード	837
第124話	火の海	844

第125話	クロスフォー	850
第126話	反証可能性	858
第127話	謀を伐つ	865
第128話	胸に木の葉が沈む	872
第129話	決起	878
第130話	ワインシユー	887
第131話	マーチ	895
第132話	小雪の夕風	904
第133話	時知らず	913
第134話	三面等価の原則	919
第135話	ロジステイクス	925
第136話	天照る月	932
第137話	藍	938
第138話	希えれば	945
第139話	ランウェイインサイト	952
第140話	割りと普通な	960
第141話	雨水の神渡し	967
第142話	タンクデサント	975
第143話	インシデント	983
第144話	フェイルセーフ	991
第145話	絶えねば絶えね	998
第146話	隘なるものあり	1005
第147話	慈雨飛泉	1013
第148話	自然は真空を嫌う	1022
第149話	カウンタースナイプ	1030

第150話	勝兵は先ず	1139
第151話	かほりすぎて	1130
第152話	繚乱怒涛	1121
第153話	リムセラ	1114
第154話	花に風	1104
第155話	ライドオン	1096
第156話	アンダーバレルグレネード	1087
第157話	日に疎し	1079
第158話	ダブルタツプ	1071
第159話	鏡心明智	1106
第160話	ルクアールノとレイリー	1105
第161話	ラインオフ	1103
第162話	なかりけり	11038

第1話 パーフェクト・ソルジャー

それは穏やかなフライトだった。

空は綺麗に澄み渡り、眼下に広がる雲海はまるで白い絨毯のよう。皆様、当機は新千歳空港を離陸いたしましたして、只今水平飛行に入っております。高度は9500メートル、時速1050キロにて順調に飛行中です……」

そんな機内アナウンスも聞える。

俺は視線を戻し、広げたままの新聞に再び目を通す。

「あ、あの、これ、どうぞ……」

と、隣の女性客から箱のような物が差し出される。

人差し指でサングラスを少し下げ、その箱の中身を覗き込む。

「プレッツェル……?」

そう、プレッツェル、小麦色の焼き菓子だ。

「は、はい、よろしかったら……」

と、プレッツェルを差し出した女性客……、高校生だろうか、制服姿の彼女が顔を傾げて笑顔を作る。

「ああ、ありがとう、一ついただくと……」

俺はプレッツェルを一つ取り、それを口に運ぶ。

「うん、ぱりつとしていて、実にうまい」

「よ、よかった、手作りなんです……」

長い黒髪、整った顔立ち、穏やかな表情、育ちの良さそうなお嬢さんだ……。

「みんなで旅行かい? 卒業旅行かなにか?」

と、俺は機内を見渡しながら尋ねる。

「はい、修学旅行です。京都、近畿地方に……」

機内には彼女と同じような制服を身に纏った乗客が数十人乗っていた。

「そうか、京都か、それはいい思い出になるね」

「はい、でも、飛行機は初めてだったので、何か落ち着かなくて……」

と、彼女は少し不安げな表情で答える。

「もう一ついただいてもいいかい？」

「あ、はい、どうぞ」

俺はプレッツェルをもう一ついただく。

「うん、うまい」

と、俺は笑う、それに釣られるように彼女もまた微笑む。

そして、プレッツェルを食べ終え、ちらりと腕時計を見る。

「そろそろだな……」

「はい？ 何が、ですか……？」

「じきにわかるよ……」

そろそろ休憩の時間、もちろん、乗客たちではなく、機長と副操縦士の休憩の時間だ。

「機長です……」

その時、機内アナウンスが流れる。

「只今、当機のコックピットに乗客がおります……」

と、緊張した口調で続ける。

それを聞いたスタッフが血相を変えて客室から消えて行く。

これは隠語、客室乗務員、スタッフへの通達……。

コックピットに乗客がいる、それは、この旅客機がハイジャックされた事を意味する……。

俺はすぐさまスマートフォンを取り出し、トランスポンダの電波状況を確認する。

「スコーク7500が出ているか、意外と冷静だな、機長……」

スコーク7500はハイジャックされたことを周囲に伝える暗号電波だ。

「ど、どういう意味でしょう……？」

隣の彼女が不安そうな面持ちでつぶやく。

「これも、何かの縁だ」

俺はそう言い、シートのポケットから冊子を取り出し彼女に渡す。

「これでも読んでおけ、特に救命胴衣、酸素ボンベ、シートベルト、ドアの開閉、耐ショック、そのあたりを入念に読み込め」

「は、はい……」

彼女は意味もわからずに俺の指示に従い冊子に目を通し始める。
しかし、旅客機はハイジャックされたにも関わらず平穩そのもの、
別に客室乗務員の姿が見えない以外に変わったところはない。

一時間、二時間と時が進んでいく。

「確か、大阪まで二時間くらいだったよな……」

「うん、もう、着いてもいいはず……」

「スチュワーデスさんもいないし……」

不審に思った乗客がひそひそと話している。

「機長です……」

また、機内アナウンスが流れる。

「当機はハイジャックされました……」

そのアナウンスにそれまでひそひそ話しをしていた高校生たちが
押し黙る。

意外と冷静なもんだ……、知れば大騒ぎになると思ったんだがな
……。

隣の彼女が俺の手を握る。

その手がかすかに震えているのがわかる……。

「ですが、安心してください……」

機長の言葉が続く。

「犯人は一人です、どうか、乗客の皆様、行動してください……」

俺はその言葉を聞いて笑ってしまう。

意味がわかるやつはほとんどいないと思うが、機長は犯人を殺れつ
て言っているんだ、乗客たちに……、ホント、笑わせてくれる……。

「こ、行動……？」

「どうすればいいの……？」

そう口々に言い合う。

「大丈夫だ」

と、俺の手を握る彼女の手の甲をもう片方の手でぼんぼんと叩いた
あとに、その手を放させる。

「ごめんな」

そして、席を立つ。

次に座席上に收容棚を開け、自分のバッグを取り出す。

バッグを床に下ろし中から拳銃、ウニカセフトとファイティングナイフを取り出す。

俺は東部戦線帰りの元軍人だ、それも自衛官などではなく、本物の兵士、元傭兵、当然拳銃やナイフの扱いにも長けている。

「ひっ」

「え……」

それも見た高校生たちが小さな悲鳴を上げる。

驚くのも無理はない、こんなものは持込み禁止だからな……。

セキュリティーが穴だらけじゃなかったら、持ち込めなかった。

まず、清掃員に扮して職員用通路を通ってフライトデッキに出て、そのこのトイレに拳銃とナイフを隠し、そのあと戻り、普通に搭乗手続き、手荷物検査をパス、それから拳銃とナイフを回収して旅客機に乗り込む、ホント、簡単な仕事だったぜ。

カチリとウニカセフトのセーフティを解除する。

「は、犯人と戦うんですか……?」

「な、何か、俺たちも……」

と、高校生たちが勇敢にも言ってくれる。

俺はそいつらを見下ろし、そして頭に拳銃を突きつけ、

「やるわけねえだろ……、俺がそのハイジャック犯なんだからよ……」

と、凄惨に笑う。

「ああ、俺に向かってくるやつはいねえと思うが、一応言っておく、歯向かうやつは容赦しねえ、射殺する」

それぞれの乗客に銃口を向けながら言う。

まっ、拳銃で脅さなくても、身長190センチ、体重100キロの俺に立ち向かってくるやつなんていねえと思うけどな。

それに俺はCQCも超一流だ、向かってくるやつがいたら一秒で殺してやる。

「うん、いい子ちゃんだ……」

全員、凍りついたように身じろぎ一つしない。

「大人しくしているよ」

と、俺は言い、コックピットに向かって大股で歩きだす。
途中、客室乗務員の男がいた。

「おきや……」

やつが俺の接近に気付くが、

「どけ」

と、銃床で頭を殴りつける。

「かはっ」

さらに頭を押さえうずくまる奴の脇腹を激しく蹴り上げる。

「カスが」

そう吐き捨て、前方席を抜けコックピットに向かう。

コックピットのドアは開け放たれており、中の計器類が丸見えになっっていた。

俺はそのまま中に押し入る。

すると、頭に拳銃を突きつけられる。

予想通りだ。

「武地……」

拳銃を突きつけた黒覆面の男がつぶやく。

そう、俺の名前は武地京哉たけちきょうや、元傭兵だ。

「ああ、俺だ、兵藤……」

そして、こいつも元傭兵、同僚の兵藤明ひょうめい。

俺は手で拳銃を下ろさせる。

「で、交渉は決裂だったのか、兵藤？」

「ああ、燃料がないらしい、このままだと墜落しちゃう、どうする、武

地……」

「困ったなあ、機長さん？」

コックピットには機長だけで、副操縦士の姿は見えなかった。

「コパイは始末した、抵抗されたからよ」

俺の視線を感じてか、兵藤がそう説明する。

「そうか……、まあ、いい……」

と、俺は拳銃をゴツンと大きな音が出る強さで機長の頭に突きつける。

「なあ、機長さん、聞いていると思うが、俺たちは日本を出たいんだよ。東部戦線帰りで英雄として迎えられると思つたら犯罪者扱い、おまけにパスポートまで取り上げられ、さらに公安の監視まで付いてやがる。出国するためには国内線をハイジャックするしかなかったんだ、わかつてくれるよな？ そうそう、あの公安のお偉いさん、名前は忘れたが、あいつが言っていたんだ、おまえのような獣を世界に解き放つわけにはいかん、ってよ、酷い話だろ？俺がハイジャックしようとした気持ちもわかるだろう？」

「お、落ち着け、話せばわかる……」

機長は50代半ばくらいだろうか、白髪交じりに紳士風の男だった。

「心配するな、機長、これ以上ないくらい落ち着いている」

と、にやりと笑い言つてやる。

「最低でも第三国、それ以外の選択肢はない、この話も聞いたか？」

「ああ、ああ、それはもう何回も説明した、燃料がもたん、どこかで給油しなければ墜落する」

「本当か？」

俺は燃料メーターを見上げる。

「い、いや……」

機長は俺が計器類に精通していると悟つたのだろう。

「これだと、どこまでもつ？」

「待ってくれ、計算し直す……」

機長がマニュアルを取り出して計算を始める。

「ペイロード最大と仮定して……、台湾か……」

機長が計算する前に言う。

「あ、ああ……、おそろく……」

「もつと先まで飛びたい、なら、仕方ない、機体を軽くする、乗客をパーシする」

「しよ、正気か!？」

「冗談だ」

冷や汗をかく機長に軽く笑いかける。

「アー、ジャパンスター705、トーキョーコントロール、アー、キャンセル、ハイネーダコンタクト？」

などと云う無線が聞えてくる。

俺はトグルスイッチを指ではねて回線をオンにする。

「日本語で話せ、今は非常事態、スクーク7500が出ているのがわからないのか？ この場合は機長の母国語、つまり日本語で話すのが国際マナーだ」

と、からかってやる。

「失礼しました、これからの通信はすべて日本語で行います」

「わかればよろしい、で、東京コントロール、とりあえず台湾まで行きたい、誘導を頼む」

「了解しました、周波数を125.5に変更お願いします、そちらを専用チャンネルにします」

「断る、他の機に変更させろ、これが専用チャンネルだ、と云うか俺に指図をするな、俺は気が短いんだ、このまま京都の市街地に突っ込んでやってもいいんだぞ？」

「りよ、了解、ステーションコーリング、スタンバイ……」

そこで通信が終わる。

「そういう事だ、機長、あとはまかせる」

ゴツンと銃口で頭をつく。

「わ、わかった……」

従順な機長に満足し、俺は副操縦席に腰掛ける。

「兵藤、こっちは俺がやる、おまえは乗客の監視をやってくれ」

「ああ、わかった、武地」

と、兵藤がコックピットを出て行く。

とりあえず、台湾で給油か……。

「今のところ順調だな」

俺は窓の外の景色を眺めながら思考を巡らす。

それにしても、あの子、プレッツェルをくれた子、京都に修学旅行とか言っていたか？ 今頃、国内旅行から海外旅行にグレードアップして、さぞや喜んでる事だろうよ……。

口の端で笑う。

と、そんな事を考えていると、この旅客機と並行して飛ぶ機影が視界に入った。

「ベイパー……、F35レッドステインガー……、すでにスクランブルしていたか……」

だろうな……、あいつら、世間の評判とは裏腹に凶悪な連中だからな……、俺も昔、よくスクランブルしては旅客機の尾翼をロックオンして遊んでいたものだ……。

F35のパイロットを見ると、しきりに手を開いたり閉じたりしている……。

手信号だ。

「当機のあとに続け……?」

馬鹿かあいつは……。

俺も手信号で返す、

「死ね、豚野郎」
と。

すると、F35は交渉の余地無しと判断したのか、旋回を始め旅客機から遠ざかっていく。

派手なベイパーだけが大空に残る。

どう思う?

危険だな……。

「機長、大阪、兵庫、岡山、広島、極力市街地の上を飛べ」

万が一撃墜されたらかなわん、市街地上空ならやつらも手出しできない。
まい。

旅客機はバンクをつけ、方向を変える……。

そして、旅客機が水平飛行に戻った瞬間、機体に激しい衝撃が走る。

「なんだ、今のは、機長?」

俺は冷静に問いたです。

「わ、わからない、何か爆発した音だ……」

「た、武地!」

兵藤がコックピットに駆け込んでくる。

「兵藤、何があったかわかるか？」

「い、いや、わからない、それを聞きにきた」

「なんの衝撃だ……。」

「俺が指を噛んで考え込む。」

「ハイドロプレッシャー、オールロス、アンコントロールラブル、デイセント、ケベックダウン！」

と、機長が大声で叫ぶ。

まあ、一言でいえば、この旅客機は墜落するって意味だ……。くそつ、なんでだ、突然……。

「機長、APUを起動しろ、電力の確保からだ、それでも足りない場合はウインドミル、ラムエアタービンを出せ、オルタネートコントロールの経験はあるか？」

「あるわけないだろ！」

くそつ、一度落ちたハイドロは穴を塞がない限り戻らない。

「機長は操縦管を握れ、両手でだ、俺はスラストレバーをやる」

「わ、わかった！」

エンジンは無事だ、出力は安定している。

だが、これでどうする……。

その時また旅客機と並行して飛ぶ戦闘機の姿が見えた……。

さっきのF35だ……。

そして、そのパイロットがこちらを見て、ゆっくりと手を振る……。

それを見てすぐに悟る、

「あいつか!? あいつが撃ちやがったのか!?!」

F35は離脱して消えていなくなる。

なんだ、この判断の速さは……、市街地に入る前に手を打ってきやがった……。

くそつ、どこだ、どこを撃った!? そんなもの、狙うなら垂直尾翼、ハイドロ系統しかないだろ!!

「落ちる、落ちる、武地!?!」

珍しく兵藤が動揺したような声を出す。

「まだだ、まだ行ける、飛べるはずだ、兵藤、てめえは客室に戻ってろ!!」

「あ、ああ、頼む、武地、助けてくれ」

と、兵藤が客室に戻っていく。

「機長、フラップを下げる!!」

「もうやっている!! あと一分くれ!!」

「機首を下げる!!」

「やっている!! フゴイド運動だ!!」

ガタガタ、ガタガタと機体が激しく振動するフラッター現象。

「オーバーロード、駄目だ、ケベックダウン、墜落する!!」

機長が泣き言を言う。

「なんだ、なんでこうなった、何かあるはずだ、なんだ、探せ、何でもいい」

「どこだ、どれだ!？」

くそつ、コーションやワーニングのアラームがうるせえ。

俺は手の甲で滲んだ汗を拭う。

デッド・ステイック・ランディングか!？」

そんなもの不可能だ!!」

オーバーヘッドか、それともスラムダンクか、どっちだ!？」

どっちも不可能だ!!」

「くそつ!」

速度を落とせば即ストール、落とさなければ着陸できない、完全に詰んだ。

対地警報が鳴り出した。

もう地面はすぐそこだ。

ちくしよう、あんの野郎、あのF35のパイロット、よくもやりやがったな、必ず見つけ出して殺してやるからな!

「ちつくしよう!!」

そして、激しい衝撃と爆発音とともに旅客機は墜落する。

機体が引き裂かれる音、木々が折れなぎ倒されていく音を聞きながら俺は意識を失う。

第2話 ナビーフィユリナ

新緑の香り……。

頬に触れるひんやりとした草花……。

ぼやけた視界の端で揺れる小さな白い花……。

「俺は……」

そう、俺は武地京哉。

元傭兵だ。

それも超一流の兵士。

発すれば雷神の如く、動けば風神の如く、戦う様は鬼神の如し、戦場の魔神、パーフェクトソルジャー武地京哉、それがこの俺だ。

なつかしい日々……。

あの栄光に彩られた賞賛の日々がなつかしい。

もう、戻れないのだろうか……。

小さな白い花を見ながらまどろむ。

ああ、なんだろうな……。

目を開けているのも辛くなり、そのまま目を閉じる。

もう一度、戦場へ……。

「ね、ねえ、あなた、大丈夫!?!」

と、身体を起こされた。

「あ……?」

固く目をつむり、それから、ゆっくりとまぶたをひらく。

まぶしい……。

太陽がまぶしい……。

真っ青な空までまぶしい……。

「ねえ、大丈夫、怪我はない!?!」

声の主を見る。

長い黒髪、整った顔立ちの女性、どこかで見た顔だな……、ああ、そうだ、俺の隣の席だった女子高生、あのプレッツェルをくれた子だ……。

「あ、ああ……」

声がうまくでない……。

太陽がまぶしい……。

俺は手をかざして陽射しを遮る。

なんだろうな、この違和感……。

さらにもう片方の手でも陽射しを遮る。

空にかざした両手……。

俺は手の甲、手の平と交互にかえし自分の手を見続ける……。

小さな綺麗な手だ。

「ね、ねえ、だ、大丈夫……？」

プレッツェルの彼女が心配そうに俺の顔を覗き込む。

「あ、ああ……」

少しだけ声が出た。

そして、彼女の手を振り払うように半身を起こす。

意識が朦朧とする……。

俺は顔をぶるぶると左右に振る。

すると長い髪も左右に広がり、太陽の光をきらきらと反射した金髪

が視界を覆う……。

俺は邪魔な長い金髪を両手で掻き分ける……。

……。

手汗が凄い……。

自分の白いワンピーススカートの裾をハンカチ代わりにして手を

拭う……。

……。

俺は考え込む……。

そうだ、俺が搭乗していた旅客機が墜落したんだ。

少しずつ記憶が鮮明になっていく。

ハイジャックに失敗して、そして、墜落して……、それから、これ

は……。

ワンピーススカートの先から伸びた細い足と、さらにその先の可愛

らしいピンク色のサンダル……。

「えっと、キミ、お名前は、〴〵両親とかは……？」

プレッツェルの彼女が心配そうに尋ねてくる。

「なっ……、に……？」

俺は顔をしかめる。

「あ、え、うん、うん……」

のどに何か詰まっているような感じでうまく声が出ない……。

「えほん、えほん……、こほん……」

と、数回、咳をする。

……。

俺はとりあえず、長い金髪を両手で押さえながら周囲を確認する。

そこは広場のようになつた草原。

遠くには針葉樹の深い森と、さらにその奥に山々が見える。

そして、その広場の中央には大破した旅客機……。

しかし、奇妙な事に旅客機は爆発炎上どころか煙一つ立ち昇つてはいなかった。

旅客機はうしろ半分だけになっており、ただ、無残に大破した状態でそこに鎮座する……。

「大丈夫か!？」

「まだ中に人はいる!？」

「わからない、もう一回見てくる!!」

旅客機のそばには制服姿の高校生たちが大勢いて、しきりに旅客機に出入りしながら救助活動のような事をしていた。

その周囲には倒れている人や、それを介抱する人の姿も見える。

そして、ここでも奇妙な事、なぜか救助している人、倒れている人、介抱している人、そのすべてが同じような服装をしていたのだ。

そう、このプレッツェルの彼女と同じ制服を着た高校生ばかり

……。

おかしい……、あの旅客機には他にも大勢の乗客が居たはずだ……。

客室乗務員は？ 引率の教諭は？ 全員中で死んでいるのか？

「夏目さん、その子は大丈夫?」

と、もう一人高校生がやってくる。

そうか、このプレッツェルの彼女は夏目というのか。

「あ、和泉くん、たぶん怪我はしていないようだけど、ちよつと私じやわからない……」

「そうか……、キミ、名前は？」

と、和泉くんと呼ばれた男が俺の顔を覗き込む。

その顔は柔和、さらさらの黒髪の爽やかな感じのやつだった。

「えっ、あ……」

なんて言ったらいかかわからない……。

俺がハイジャック犯の武地京哉だとも言えいいのか……。

「たぶん精神的なショックでしゃべれないんだと思う……」

プレッツェルの彼女、夏目がそうフォローしてくれる。

「そうだよな、まさかハイジャックされて墜落するなんて思わないよな、普通……」

和泉が墜落した旅客機を見ながらつぶやく。

「えっと、ナビーフイユリナ・ファラウェイ……？」

と、夏目が俺の胸あたり見ながら言う。

「ナビーフ？」

「うん、ここに名札ある、5年3組、ナビーフイユリナ・ファラウェイって書いてある……」

俺は胸の名札を触り、そして、それを見る。

確かにそこにはナビーフイユリナ・ファラウェイとある……。

外国人だな、名前に……。

俺は長い金髪を両手ですくいながら、しげしげと眺める。

「うーん……」

綺麗だ……。

手も白い、まっしろ。

この皮膚が薄い感じ、透ける感じがなんとも不思議だ。

「ナビーフ？ お母さんたちは？」

と、夏目が笑顔を作り尋ねてくる。

「い、いや、ど、どうだったか……」

俺は視線を落としてそう答える。

「夏目さん……」

和泉が夏目の肩に手を置き、顔を左右に振る。

「あ、ごめんなさい……」

なぜか夏目が謝る。

「気をつけるよ、まだハイジャック犯がいるかもしれないからな!!」

「何か武器になるような物はないか!」

と、救助にあたっていている高校生たちが騒いでいる。

「機内に居なくても、その辺に隠れているかもしれないぞ!!」

「見つけたら絶対殺してやるからな!!」

「あんな凶悪犯、殺したって構わないだろ!!」

「とにかく武器だ、武器を探そう!!」

さらに、そんな事を大声で喚んでいる……。

でも、あいつらの気持ちもわかるぜ。

俺が逆の立場だったら、必ずハイジャック犯を見つけ出して八つ裂

きにしてやろうと思うはずだ。

いや、ただでは殺さん、拷問してからだ、苦しめてから殺す。

必ずそうするよな。

なら、殺られる前に殺るか?

幸いにして、俺がハイジャック犯だということは、やつらにはバレ

ていない、今が絶好のチャンスだ。

どう始末してやるか……。

少しうっむき、考え込む。

「どうしたの、ナビィ?」

夏目が心配そうに俺の顔を覗き込む。

彼女の顔を見つめる。

「うん?」

と、夏目が笑顔を作る。

こいつらは俺の事をナビィ・フィユリナ・ファラウェイという少女だ

と思っ込んでいる。

なにか、利用できないか……。

「バールだ、バールがあつたぞ!!」

「他にも武器になりそうな物はないか!？」

「こつちに鉄パイプがあるぞ!!」

ちっ、危険だな。

いつバレるかわからない、考えている時間はないようだ、バレないうちに行動に移す。

だが、こんな身体で戦えるのか……。

勝負どころだな……。

俺は自分のまっしろな細腕を見る。

……。

「よし」

逃げよう。

逃げて戦力を整えよう。

戦うのはそのあとでいい。

俺はゆっくりと立ち上がり、そして、森の方角に向きを変えて全速力で走りだす。

「ぎゃん！」

だが、その直後、太ももの裏、ハムストリングに鋭い痛みが走る。

「なっにい!？」

足がつった!

そして、そのまま足がもつれて草むらにダイブしてしまう。

う、うそだろ。

「ナビー!？」

夏目が血相を変えて駆け寄ってくる。

「怪我はない!？」

「くっ！」

脱走がバレた、今度こそ殺される。

俺は必死にもがきながら、草むらをかき分けて、四つん這いで進む。

「ナビー!!」

だが、しかし、すぐに追いつかれてしまう。

「くそお！」

こうなったら戦うしかない!

「かかってこい！ 俺はパーフェクトソルジャーだぞ！」

手をグーにして渾身の力でぐるぐるパンチしてやる。

「痛い、痛い、ナビー、やめて、落ち着いて、もう怖い事なんてないんだから！」

と、夏目が目をつむり顔や身体を庇いながら叫ぶ。

「このお！ このお！ このお！」

俺のぐるぐるパンチが次々と夏目の顔や身体にヒットする。

よし、いける！

「とお！ たあ！ はあ！」

俄然勢いづく。

「な、ナビー、どうしたの、も、もう、やめなさい！」

と、夏目が手を伸ばし、俺の額を押さえて近づけないようにする。

「な、なににい!？」

俺のぐるぐるパンチが届かなくなった！

「ちつくしよう！ このお！ このお！ このお！ このお！」

それでも俺は全力でぐるぐるパンチを繰り返す。

「このお！ このお！ このお！」

さらに、足も使う、キックだ！

だが、届かない。

「このお！ このお！ このお!?!」

そのとき、うしろから誰かに捕まえられた。

「ど、どうしたの、急に!？」

男の声だ、さっきの和泉とかいう男子学生か!?

「くそお！ くそお！ はなせ！ はなせえ！」

その手から逃れようと激しく抵抗する。

「ナビー！」

さらに前からも夏目に抱き着かれる。

「心配いらなから！ 悪いやつらが来てもみんなが守ってくれるから！ だから落ち着いて！」

彼女が俺を捕らえながら大きな声で言う。

「はなせ……、はあはあ……、はなせ……」

息が上がって苦しい……、本当に苦しい……。

もうぐったり、体力のすべてを使い果たしてしまった。

「殺すなら、殺せ……、はあはあ……」

「殺さないから！ 誰もナビーに酷い事なんてしないから！」

と、夏目が俺を強く抱きしめながら叫ぶ。

「はあはあ、はあはあ……」

「大丈夫、大丈夫……」

そんな時間が続く。

「しかし、どうしちやっただろ……」

しばらくして、和泉が心配そうな表情で俺の顔を覗き込む。

「錯乱してるんだと思う、あんな怖いことがあったから……、かわいそ

うに……、でも、もう大丈夫、落ち着いてきたから……」

「そうか、よかった……」

「大丈夫だよ、大丈夫だよ……、もう悪いハイジャック犯なんていない

からね……」

彼女がそう言い俺の背中をさする。

「それにしても、なんでハイジャックなんてするんだよ……、俺たちに

何の恨みがあるんだよ、こんな子まで……、あんなやつ永久に呪われ

ろ」

和泉が吐き捨てるように言う。

「ナビー、落ち着いた？ じゃあ、みんなのところに戻ろつか？」

と、夏目が俺の肩を抱いて立たせようとする。

「夏目さん、手伝うよ」

和泉も反対側から俺の身体を支える。

「うん、ありがとう、和泉くん」

そして、俺は高校生たちの輪の中に連れていかれる。

第3話 孤立

深呼吸を繰り返し、気持ちを落ち着かせる。

「それにしても、なんて手触りのいい髪の毛なんだ……」

呼吸を整えつつ、きめの細かい金色の髪をひたすらなでなでしたり手ぐしをしたりする。

「よし、少し落ち着いてきた……」

髪の毛を触りながらきよろきよろと周囲の状況をうかがう。

周囲には大勢の高校生たちがいて逃げ出す隙もない。

相手はただの高校生、元の身体ならば逃げる必要すらない、この場で全員皆殺しに出来た。

戦えない身体……、逃げ出せない身体……、か……。

視線を落とす。

「鏡……」

近くに落ちていた手鏡を取り、それを覗き込む。

「うーん……」

鏡に映るその顔は、まるで少女そのもの……。

快活に見開かれた、いたずらっ子のようなアイズブルーの瞳、細い

眉と細い鼻筋、薄いピンク色のつややかな唇……。

肌は白く透き通り、陶器のようななめらかさがある……。

これは……、可愛いというより、絶世の美少女だな……。

手鏡を置き、立ち上がってみる。

視界の高さからすると、身長は140センチ前後だろうか……。

そして、両手広げてその場でくるくると回ってみる。

白いワンピースの裾が広がる。

うーん、体重は30キロ前後だとは思いますが、どうも、筋肉が皆無の

せいか、以前より身体が重く感じる……。

鍛え直しか……、使い物になるまで10年以上かかるぞ……。

俺はワンピースの裾をつまんで太ももなどを覗き込む。

かかたが柔い……。

ピンクのサンダルを履いた足を何度かトントンとする。

爪も薄い、こんなのすぐ剥がれるぞ……。

と、俺はこの身体の特徴をつぶさに観察していく。

「ナビィ？」

その時、夏目が帰ってきた。

隣には和泉もいる。

「落ち着いた？」

と、彼女はどこからか持ってきた紙コップを手渡ししながら尋ねてくる。

「は、はい……、なんとか、ご迷惑をおかけしました……」

なんて可愛らしい声を出すんだ、俺は……。

俺は受け取った飲み物をひと口すすする。

ああ、生き返る……。

ちよつと目眩がして、その場にしゃがむ。

すると、夏目と和泉も俺の隣に座って一息つく。

「自己紹介がまだだったね、私は夏目翼なつめつばさ、高校二年生よ」

と、夏目がにつこり笑う。

「あ、俺は和泉、和泉春月いずみはる、よろしくね」

和泉も追隨して自己紹介する。

「ご丁寧にも……、えーつと……、たけ……、じゃない、ナビィ、えーつと、ナビィフィユリナ・ファラウエイです……」

と、俺も自分の名札を見ながら自己紹介する。

周囲を見渡してみると、他の高校生たちも救助などが終わったのか、一様に座り込み、大破した旅客機を呆然と眺めていた。

人数を数えてみると……、ちよつと三十人、全員同じ制服を着た高校生たちだ……。

不思議だな……。

「救助……、すぐ来るかな……？」

「どうなんだろう、捜索はしていると思うけど……」

と、隣の女子グループの子たちの会話が聞えてくる。

「山奥だったら見つけられないよね……？」

「うん、ここ、どこなんだろう……？」

「北海道から飛んで来たんだから……、金沢とか北陸……？」

「京都に向かってたんだから、その周辺、滋賀とか？」

違う、大阪の手前、奈良のどこかだ……。

といつても、それは口にしない、俺がハイジャック犯だと疑われたらかなわんからな……。

「なんにしても、すぐに救助がくるよ」

「そうだよね……、ヘリコプターとかで探せばすぐに見つかるよね、私たち……」

あまい。

捜索隊を出すか出さないかは、その墜落した旅客機の積荷による。

積荷に放射性物質があれば乗客の救助よりも、その周辺住民の避難誘導が優先される。

まっ、普通は積んでいるだろうがな……。

もちろん、放射性物質といつても兵器とかそういう類のものではない、レントゲンとか医療用のやつだ。

周辺住民の避難誘導に二日、それから放射線を測定しながら慎重に捜索……、救助が来るまで最短で三日、最長で五日つてところか……。

それまで、この少女を演じなければならぬのか……。

俺はひとつ溜息をつく。

「ナビー、暗い顔しないで、大丈夫だからね、すぐに助けがくるからね……」

と、夏目翼が俺の肩を抱いて言う。

「う、うん……」

俺は顔を上げて少し笑顔をつくる。

「あっ、そうだ……」

「携帯……」

と、別の男女のグループが大きな声を上げる。

「あっ！ そうだ、スマホがあった！」

「そうだ、そうだ！」

その彼らがポケットやポーチなどから携帯電話やスマートフォンを取り出す。

そして、電源を入れて操作を始める。

「はやく! はやく!」

スマートフォンを振ったりしながら起動するのを待つ。

「あ、圏外……」

「えっ、う、うそ、私も圏外」

「お、俺も……」

と、全員圏外なのか、落胆の色が広がっていく。
だろうな、こんな山奥じゃな……。

「あ、もしかして?」

と、その中の一人が携帯電話を耳にあてながら言った。

「え? 繋がったの?」

「ほ、ホントに?」

「よ、よかったあ、これで救助がくるよ……」

それぞれが安堵の表情を浮かべる。

「あ、俺だけど、えっと、味噌ラーメン一つに、あと半チャーハン一つ、ええ、ええ、いつもの……」

と、話し続ける……。

「えっ!? 今日ポイント二倍デーっすか!? マジっすか!? じゃあ、餃子もつけちやおつかなあ……、って、圏外じゃねえか!!」

と、携帯電話を地面に叩きつける。

「う、うそだろ、ここでそれかよ、佐々木……」

「し、信じられない……」

失望が変わる……。

「い、いや、お、面白かっただろ? つ、次、次、福井さんの番!」
と、その彼が福井という女性の持つスマートフォンを指さしながら

言う。

「え、なに? ボケないと駄目なの? そういうゲーム?」

彼女が適当に画面をいじったあと、スマートフォンを耳にあてる。
「あ、私だけど、うん、うん……、そうだね、あの約束覚えてる? うん、それ、よかった、覚えててくれたんだ……、ううん、なんでもない、ちよつと気になっただけ……、えへへ、それでね……、うん?」

もう、それはあとで……、うん、じゃあ、先に言ってくれたらいいよ……、うん……、ありがと、私も愛してる、チュ……、って、圏外どころか恋愛脳じゃねえか!!」

と、彼女がスマートフォンを地面に叩きつける……。

「すげえ、煩惱の塊だ……」

「熱演すぎるだろ……」

「衝撃のクライマックスとはこれの事ね……」

彼女には惜しみない称賛が贈られる。

「いい加減にしろよ、なに遊んでだよ、少しは真面目にやれ、死ぬかもしれないんだぞ?」

と、それを遠巻きに見ていた男が怒気をはらんだ声で言う。

「わ、私たちって死ぬの、せつかく助かったのに……?」

「だ、だよ、飛行機が墜落したんだから、みんな死んでると思って急がないよね……」

「やっぱりそうなんだ、このまま狼とか熊に食べられちゃうんだ……」

みんなが暗い表情でうつむき加減になる。

「お家に帰りたい、こんなところで死ぬのはいやだよ、う、う……、ひっぐ……」

と、そのうちのひとりがしゃがんで泣きだす。

「あーあ……、みんな山本のせいだよ、せつかくいい雰囲気になってたのに……」

福井が泣いている子の背中をさする。

「おい、山本!? 女の子泣かして、なにが楽しいんだよ!? 真面目にやってたら、こうなることくらいわかるだろ!」

と、最初の電話のネタをやっていた佐々木が山本に掴み掛かる。

「なんだよ、それ!? 茶化してるようにしか見えねえんだよ、全然面白くねえんだよ!!」

「なんだと、この野郎!? 俺のは面白くなくても、福井さんののは十分面白かっただろ!」

と、二人が揉みあいになり喧嘩を始める。

「やめろ、やめろ、はなれろ、俺のクラスで問題を起こすな」

髪を赤く染め上げているやつが割って入り二人を引き離す。

そいつは体格もよく、背も180センチは軽く超えているだろう。

「あの人は……?」

と、俺は彼を指さして夏目に尋ねる。

「うん? 東園寺くん、東園寺公彦くんよ、それがどうしたの?」

「ううん、なんとなく……」

切れ長の鋭い眼差し、なかなかに精悍な顔付きをしている……、そうか、あいつがこちらのリーダーか……。

「東園寺……、これからどうする?」

と、その赤髪の彼に銀縁メガネの頭の良さそうなやつが話しかける。

「人見……、考えよう……」

二人で相談を始める。

俺はその二人を観察しながら、紙コップに残った水をちびちび飲む。

第4話 救難

つぶさに観察した結果、どうやら、ここにいる高校生は全員同じクラスの生徒のようだった。

しかも、誰一人欠けていない、全員無事と云う話……。

俺以外の生存者は全員同じクラスのやつら……。

生存者と云う表現にも語弊があるか……、あの旅客機の中にも、その周辺にも死体はない、

うしろ半分で千切れた旅客機と、その周辺に散乱する荷物類……、あるのはそれだけ……。

つまり、行方不明者はいても、現時点での死者はゼロと云うことだ。

あの大破した旅客機を見て死者がゼロだなんて、誰が想像できる？

しかも、火災すら発生していない、そんな事、信じられるか？

違和感しかない。

「みんな聞いてくれ」

と、相談し終わったのか、東園寺が俺たちが座っている輪の中央に歩いていく。

「人見と話し合った結果を発表する」

彼が全員を見渡しながら話し始める。

「無闇にこの草原から出て行けば二次遭難の危険性が極めて高くなる。なので、ここで救助隊が来るのを待つことにする。で、どうやって俺たちの場所を知らせるのだが、焚き火、狼煙がもつとも効果的だろう。そこで、男子諸君にはこれから全員で薪、焚き木の収集を行ってもらおう、もちろん俺もだ、全員でやる、出来る限りの薪をかき集めてでかい狼煙にする」

賢明だな。

ここは直径数百メートルの草原、その草原は深い森によって包囲され、さらにその深い森の向こうには高い山々がそびえ立っている……。

あれはちよつとやそつとじゃ走破できん。

「女子諸君には食料の調達、夜に備えての毛布類の調達を行ってほし

い。そうだな、徳永、綾原、両名に指揮を執ってもらいたい」
「うん、わかった」

「了解……」

ポニーテールの元気が良さそうな子と頭が良さそうだが冷たい感じのする子が返事をする。

「よし、それでは作業開始！ 家に帰るまでが修学旅行だぞ!!」

と、東園寺が大声で作業開始を宣言する。

「おうー！」

「頑張ろうー！」

それに対して高校生たちが元気よく返事をする。

薪拾いか、しようがない、俺もやるか……。

俺は立ち上がり、男子生徒のあとに続いて歩きだす。

「あ、ナビーはこっちだよ？」

と、夏目に呼び止められる。

「あ？」

「こっち、こっち」

夏目は笑顔で手招きし、女子グループに俺を連れていく……。

おっと、そうだった、俺はナビーフィユリナ・ファラウェイー歳だった……。

「それじゃあ、私たちは食料と毛布拾いね」

と、女子グループの輪に加わると、そんな声が聞えてくる。

「とりあえず、レトルト食品とか、あとはまだ飲みそうな水、ペットボトル類、毛布はそうね、この際衣服とかでも、なんでもいいからあったかそうな物を集めましょう」

話しているのはポニーテールの子、確か徳永とかいう子だ。

「怪我している人はいないみたいだけど、具合悪くなったらすぐに言ってね。あとそっちの子は大丈夫？ 休んでいてもいいのよ」

と、もう一人の指揮官、冷たそうな子、綾原が俺を見て言う。

「あ、大丈夫です、何かお手伝いさせてください……」

俺は少女らしくかほそい声で答える。

「そう、無理はしないでね……、それでは始めましょうー！」

「はあー！」

「よし、やろう！」

と、女子たちが広場に散っていく。

俺はまず、最初に自分が倒れていた場所あたりの搜索から始める。

そう、俺が持っていた拳銃とナイフを探すためだ。

あれを高校生たちに渡すわけにはいかない。

落ちている物のほとんどは紙類、雑誌類だが、中には歯磨きセットや文房具類などもあり、俺はそれら拾い上げて何かに使えないかと考えてから、適当に放り投げる。

「あ、ナビー、仕分けしながら探しましょう、あとで何かの役に立つかもしれないから」

と、夏目が言う。

「うん、わかった……」

俺は放り投げた歯磨きセットやソーイングセットをもう一度拾い、一箇所に集めていく。

「紙、雑誌も焚き木の代わりになるかもしれないから、ついでに集めちゃいましょう」

「うん、そうだね、あとゴミもいっぱいだから、全部集めよっか？」

「いいね、そうしよう！」

と、女子グループがてきぱきと作業を進める。

俺もそれにあわせて片っ端から物を拾って仕分けしていく。

それにしても、拳銃とナイフはないな……。

もしかして、旅客機の中に残っているって可能性はあるか？

俺は旅客機に近づく。

近くで見る旅客機は思った以上に破壊されており、ほとんどスクラップ状態になっていた。

「よくこれで生きていたよな、俺たち……」

口を空けて旅客機を見上げる。

窓ガラスはすべて吹き飛び、外装も引き裂かれ、引きちぎられ、内装が剥き出しになっていた。

俺は手頃な隙間から中に入ろうとする。

「駄目、中に入っちゃ駄目」

と、綾原に止められる。

「火災は発生してないけど、いつフラッシュオーバーで爆発するかわからないから入っちゃ駄目」

フラッシュオーバーの可能性はない、あるとしたらバックドラフトだ、それでも可能性は限りなくゼロに近いが……。

「うん、わかった……」

と、思っても引き下がるしかない、俺がハイジャック犯だと疑われたらかなわんからな。

極力少女の振りをしなければ……。

俺はとぼとぼと引き返し元の作業に戻る。

作業を数時間ほど続けると、周辺に落ちている物はあらかた片付いてきた。

見ると、仕分けも行われており、女子数人でさらにそこから壊れている物とそうでない物の仕分けまで行われていた。

一方、男子グループはというと、薪拾いも終り、今は広場の中央で草むしりをしながら焚き火の準備をしていた。

その近くには薪を大きさによって分別した山が三つある。

しかし、この高校生たちって何者なんだ？　なんで、こんなに組織だっているんだ？

あいつら全員利口そうな顔しているし、あれか、進学校ってやつか？　たいしたもんだな……。

俺は感心しながら彼らの作業を見守る。

「よし、じゃあ、火を着けるぞ」

と、赤髪の彼、東園寺が積みあがった焚き木のそばに行く。

彼の手にはティッシュやノート、あとはライターなども握られている。

それで、火を着けるのだろう。

全員が固唾を飲んで見守る。

東園寺は紙類を雑巾絞りの要領で棒状にひねり、それに火を着けて焚き木の中に放り込んでいく。

やがて、もくもくと煙が上がる。

そして、ちらちらと炎が見え始める……。

「よかったあ、ライターもあつたんだね……」

「うん、これで、助けが来るね」

「どれくらいで来るかな？」

「発見されたら、すぐ？」

と、みんなが焚き火を見ながら話し合う。

炎の高さはすぐに2メートル以上となり、白い煙もまた高々と天に昇っていく。

「これなら、ひと目でわかるよね！」

「ああ、すぐに助けが来るぞ」

「一時はどうなる事かと……」

あとは待つだけか……。

ぼんやりと炎を見ながら考える。

夕方になり、俺たちは昼間に集めた食料、レトルト食品や菓子パンなどをいただき、救助がくるのをじっと待つ。

第5話 純真無垢

やがて陽は沈み、焚き火の周辺以外は闇に包まれる。

「救助、来ないね……」

「まだ発見されていないだけだろ、まず、ヘリが来るはず」

「飛行機も飛んでないし、ここどこなんだろう……」

「そうとう山奥なんだろうな、このまま発見されないんじゃないのか……」

「諦めるのはまだ早いだろ……」

と、時間とともに高校生たちの元気がなくなっていく。

「やっぱりさ、誰か助けを呼びに行ったほうが早いんじゃないのか？」

あの昼間に喧嘩をしていた山本とかいう男がそう提案する。

「どこにだ、山本、それに誰が行く、こんな右も左もわからないような森の中を誰が行くというんだ……」

それに対して、東園寺がうんざりした口調で答える。

「それだったら、俺らが行くよ、公彦さん」

「ああ、いいトレーニングになる」

と、坊主頭の二人組みと言う。

「おお、ホントにか、さすが野球部だぜ、気合が違う！」

「うん、有馬くんと清瀬くんなら大丈夫そう」

「私たちが行くより、二人に行ってもらったほうが安全だよね！」

みんなが歓声を上げる。

「そんなもの、俺と人見が5分で却下した案だ……、二人を行かせるとして、水や食料はどうする？ 一、三食分だけ持たせて行かせるのか？ そんなわけにはいかないだろ……、なら、全部持たせるか？ そのあと俺たちはどうする？ 飲まず食わずでじっとしているのか？

無理だろう、救助が何日後になるかわからんに……、俺たちがやる事は、まず、生き残るための基盤作りだ、明日は、水、食料の目処をつける、話はそれからだ……」

と、東園寺が淡々を話す。

確かに昼間集めた食料、水は、おおよそ二、三日分の量しかなかった

た。

「い、いや、でもさ、目処がつかなかったら？ このままだと全滅だよ、だったら、元気なうちに二人には走ってもらって、それで救助隊を呼んできてもらったほうが助かる確率が高いと思うんだ……」

「ギャンブルはしない、そういう方針だ。だいたい、命懸けで山道を走破してクラスメイトを救いましたってか？ そんな美談はいらん」

「い、いや、でもさ……」

と、山本が食い下がる。

「山本、下を見てみる」

銀縁メガネの男、人見が地面の草を指さし言う。

「草……？ それが、どうした、人見……？」

山本だけじゃなく、俺たちも地面の草を見る。

「植生を見れば、ひと目でわかる、ここは日本じゃない。俺もここが日本だと確信できれば、二人に行ってもらおう事にはやぶさかではない、日本ならどんな山奥でも50キロも行けばどこかの集落に辿り着くからな。だか、ここはそうじゃない、何百キロ行っても民家一つない可能性もある、あつたとしても言葉も通じない、そんな状況下で二人を行かせるわけにはいかない」

植生ねえ……。

俺は見慣れない、鈴のような形の小さな白い花びらを見る。

「ここ日本じゃないの？」

「じゃあ、どう？ 外国……、私、パスポート持って来てないよ？」

「な、なんで、日本じゃないの……、いきなり、そんな……」

と、みんなが地面に生えている草を見ながら口々につぶやく。

にしても、ここが日本じゃないとかって、こいつ頭いかれてんのか？ どうやって、奈良上空から、あんな短時間で海外に行くんだよ……。

あれだ、流行の外来種だ……。

「一つ、安心出来る材料があるとすれば……」

今度は空を指さす。

「それはここが地球で、そして北半球のどこかだという事は確実だ」

何を言っているんだ、こいつは……。

俺たちは空を見上げる……。

「うわ……、なにこの星空……」

「天の川って初めてみたかも……」

「なんか、宇宙にいるみたい……」

夜空に光が溢れる……。

それは星に手が届きそうな、どこまで深く、透きとおるような星空……。

宇宙に落ちていきそうだ……、立体的な深い宇宙、俺は無意識に両手を空にかざす。

「スピカ、デネボラ、アークトゥルス、こぐま座におおぐま座、かんむり座、それに金星まである、どれも普段見慣れたものばかりだ……」
光量が半端ない。

天の川の光で星座が消える……、おそらくそこにあるだろう、いて座やかんむり座が見えない……。

例えるなら、すべての星々がいつもより数十倍近づいたような、そんな印象だった。

「時刻と星の位置から推測すると、緯度、経度ともに元々居た場所と同じ、ここが日本だという事を指し示す、だが、ここは日本ではない、そこが不思議なところではあるが……」

と、補足する。

「日本じゃないよ、こんな星みたことない」

「うん、違う、身体が浮きそう……」

「じゃあ、なんだろうな……」

空を見上げながら口々に感想を言い合う。

「そういう事だ、山本。しかし、おまえの案も選択肢の一つとして残しておく、いずれ決断する時が来るかもしれない、その時まで我慢しろ」
と、東園寺が声をかける。

「あ、ああ……」

山本は納得したのか上の空で返事をする。

「今日は俺と人見が寝ずの番をする。他は身体を休めて明日に備えて

くれ」

と、しばらく星を眺めたあとに東園寺が焚き火に薪を放り込みながら言う。

「それじゃ、毛布や、その代わりになりそうな物をみんなに配りましょうか……」

と、徳永と綾原が立ち上がる。

それに呼応して他の女子たちも立ち上がり作業を開始する。

夏目もそっちに行ったので、俺も仕方なくそれを手伝う事にした。

とりあえず、毛布の山と衣服の山から適当にそれらを見繕って高校生たちに配っていく。

しかし、ここが日本じゃないかと、なんの冗談だよ……。

まあ、俺が気を失っているあいだに、グライダーして遠くに飛んでいった可能性も捨て切れんが……。

「ありがとね」

「いえ、いえ、どうぞ」

俺は考え事をしながら作業を続ける。

仮にグライダーしたとして、どのあたりまで飛べる？

四国か？ いや、空気の澄み具合から見てもっと人里離れた場所、なら種子島か？

そんな馬鹿な、さすがにそれは……。

「上着みたいなのはないかな？ ちょっと寒くて……」

「探してみます、お待ちください……」

俺は衣服の山からジャンパーみたいなものを探す。

なんにしても、グライダーして飛んだのなら、救助は相当遅れるな……。

今頃、救助隊は必死に奈良の山奥を探しているだろうから……。

俺は澄み渡った空を見上げる。

へりや航空機は一切見えなく、山向こうの街明かりもない。

少なくともここが奈良の山奥ではないという事の証明にはなるか……。

「それじゃ、ナビーはこっちなね」

と、夏目が毛布を敷いてくれる。

「ありがとうございます、夏目さん……」

「そんなかしこまらなくても、翼でいいわよ、ナビー」

最長でも五日だと思っていたが、もっとかかるかもしれないな……。

それまで、この少女を演じ続けなければならないのか……。

とにかく、俺がハイジャック犯だとばれたらおしまいだ、散々拷問された挙句殺される……。

俺は思い出して身震いする。

そうだな、ちよつとキャラ付けするか……。

こんな子がハイジャック犯なわけがない、つてキャラがいい。

なら、純心無垢、天真爛漫、ウイットに富んだ明るい優しい女の子か？ よし、それだな、それで行こう。

「どっこいしょういち」

俺はそう言いながら毛布の上に座る。

「お、おやじギャグ……?」

「な、ナビー?」

「お、おっさんみたいな事を言うのね、あなた……」

と、周りの女子たちが口々に言う。

やばい、いきなりばれたかも、なんでだ……。

「しよ、小学生なんだよね?」

と、近くの子が聞いてくる。

「あ、ああ、あ、あたりまえだのクラッカー……」

俺は激しく動揺しながらも、それでもウイットに富んだ明るい少女を演じ続ける。

「な、なにこれ、おっさんなの、あなたおっさんなの!? ドロンするの、今度はドロンするのね!?!」

「え、いや、違うでしょ、病気よ、頭打ったのよ!!」

「つ、墜落の時に!?! どどど、どうしよう!?!」

大騒ぎになる……。

「もう……、そんなわけないでしょ……、気を遣っているのよ、その子

なりに……、みんなが暗い顔しているからね、みんなももう大人なんだから、しつかりしないと駄目よ……」

と、綾原が毛布を被り直して言う。

「そ、そっか、ごめん……」

「そうだよね、私たちがちゃんとしないと、ナビーが不安になるよね……」

「うん、気付かなかった、ごめんなさい……」

みんなが口々に謝罪してくる。

「それじゃ、もう休もうね、ナビー」

と、夏目が毛布をかけてくれる。

「うん……」

こうして一日目が終わる……。

第6話 遺書を

二日目の朝を迎え、日の出の時間にはほとんどの人が目を覚ましていた。

朝霧に包まれる草原……。

俺は半身を起こし、軽く背伸びをする。

そして、手触りの良い金髪をなでなでしながら小さくあくびをする。

「全然眠れなかった……」

「私も、ほとんど寝てない……」

「というか、シャワー……、せめて歯磨きを……」

と、近くの女子たちが話している。

「救助来ないな、やっぱり、このままじゃ駄目なんじゃないのか、なんとかしないと……」

「といってもな、どうしようもないだろ……」

「どうなるんだろうな、俺たち……」

こっちは、山本をはじめとした男子たちだ。

その時、広場に光が差す。

背の高い広葉樹の上から太陽が顔を覗かせたのだ。

朝霧が消えていき、広場の草花がきらきらと輝き出す。

「それじゃあ、朝食の準備に取りかかりましょうか」

「うん」

「わかった」

と、徳永たちが朝食の準備をはじめめる。

俺もそれを手伝おうと、とりあえず毛布の片付けからはじめる。

「野郎どもは薪拾いだ、いくぞ」

男子は東園寺が指揮を執る。

「ういっす」

「おう」

と、男子16名がのろのと立ち上がり森に向かって歩き出す。

ほどなくして朝食の準備も整い、男子グループの薪拾いが終わるの

を待つてから、全員が揃ったところで食事をいただく。

「今日は森の探索に出掛ける」

食事を摂りながら、東園寺が話します。

「なんとしても、飲料水を確保する、出来なければ、俺たちの命もあと数日だ」

それは言いすぎだな、水はあと二日分しかないとはいえ、なければ、その辺の雑草から取ればいい、他にも朝露やらなんやら、なんでもある。

「人選はそうだな、有馬と清瀬はここに残って焚き火を見ていてくれ、それ以外の男子諸君は森の探索だ、遭難しないよう、道を作りながら進む」

「ういっす」

「おうっす」

「女子諸君には徳永、綾原両名よりやってもらいたい事があるそうだが、何かはわかるな？　そういう事だ」

どういう事だ……。

俺は冷たいご飯をちびちび食べながらそんな話を聞く。

そして、朝食も終り、本日の作業に取りかかる。

「それじゃあ、女子トイレから作りましょう、みんな困ってたと思うから」

と、徳永が森の近くに女子たちを集めて元気よく話す。

そうそう、この人は徳永美衣子とくながみいこ、学校では陸上部に所属しているらしい。

少し日に焼けたポニーテールの子だ。

「でも、作るって、どうやって……」

「穴掘って、何かで囲って見えなくする……?」

「匂いとか出ないようにするにはどうしたらいいんだろう?」

「小さな穴をいくつも掘って、こまめに埋める?」

と、みんなで相談する。

でも、まあ、確かに、男には聞かれたくない話ではあるよな。

「昨日からしているように、ビニール袋にして、それをすぐ埋めるよう

にしましょう」

「そうね、そのあとのことは、ビニール袋がなくなってから考えましょう、幸い沢山あるし」

「うん、じゃあ、今やる事は、トイレの個室作りから？」

「このあと女子更衣室も作るらしい。」

「うん、三つもあれば足りるかな？」

「女子は俺を入れて15名だ。」

「かなあ……」

「では、何か仕切りになる物から集めましょう！」

「はあい！」

俺たちは広場に散って、板とかそういう物を探しはじめる。

でも、そんなに都合よく見つかるものではない……。

「しよがない、あれを使いましょう」

と、綾原が旅客機を指さす。

そうそう、この人は綾原雫あやはらしずく、学級委員長らしい。

物静かで知的な感じの子だ。

「飛行機？」

「そういえば、そうね、壁とか床がめくれて散乱してたよね」

「大丈夫かな？ 危なくないかな？」

「とりあえず行ってみましょう！」

徳永が先頭をきって旅客機に向かう。

俺たちは旅客機の外装から調べ、はがれそうな物を手当たりしだいにひっぱたり、叩いたりしてまわる。

「気をつけてね、指とか切らないようにね」

「はあい！」

そして、はがれそうな物をあらかた回収したら、今度は機内に入って仕切りになりそうな物を探す。

旅客機の中は思ったよりも明るい。

それも当然、屋根のほとんどが吹き飛んでいたからだ。

床は足場もないほど散乱していて、座席の上には元は天井だろうか、そのプレートがいくつも落ちている。

「何か、手袋ないかしら、手を切りそう……」

「私、見てくるね」

「使えそうなプレートを値踏みする。」

「床にも穴が開いているかもしれないから、ゴミをどかして床があるのを確認してから進んでね」

「やっぱり、持ち込み制限が厳しかったから、飲み物とか食べ物全然ないね」

「自販機でいっぱい買っておけばよかった……」

俺たちは葉切り蟻のように、大きなプレートを旅客機内から外へと運び出していく。

「うん？」

プレートをどかせると、座席の上にノートの切れ端のようなものが落ちていた。

「なんだ、これ？」

と、俺はそれを手に取り目を通す。

「こわい、たすけて、しにたくない、どうして、わたしが」

なんだ、これ、ミミズが這ったような汚い字で書かれている。

隣の席にも同じような紙がある。

俺はそれも手に取り目を通す。

「お父さんとお母さんの娘に生まれて本当によかったです。どう

か、お身体には気をつけて。福井麻美」

……。

よく見ると床にも落ちている……。

「もう駄目みたいです。まともに親孝行もしないでごめんなさい。」

久保田洋平

次々紙を拾って目を通していく。

「今はすごく落ち着いています。だれかたすけて、なんでだ、だから、だれかたすける」

「こんなに早く遺書を書く事になるとは思いもしませんでした。何を書いていいかわかりません。もしあるのなら、来世でまたお会いしましょう。秋葉蒼」

遺書……。

これ、全部そうなのか……？

何と言うか、よっぽど怖かったんだな、かわいそうにな……。俺はさらに別の紙を拾って目を通す。

「あいつ、絶対許さない、死んでも許さない、永久に呪ってやる」そりやな、呪いたくもなるよな……。

こ、怖い……。

これ、本当に俺がハイジャック犯だとばれたらやばいよ、殺されるよ。

がくがく、全身が震える……。

なんか、怖くて涙が出てきた。

「ナビー……」

夏目がそつと俺の背中をさすってくれる。

「大丈夫だからね、心配しなくていいからね、みんな生きてるからね……」

「ナビーって優しい子だね、私たちのために泣いてくれるんだから……」

と、徳永が俺の手から遺書を取り上げる。

「先に手紙、回収しよっか？」

「そうだね、みんなに返してやろうよ」

と、他の女子たちが座席や床に落ちている遺書の回収を始める。

「それにしても、みんな手書きで書いてるんだね、私、スマホに残してた」

「私も、誰かに見られたら恥ずかしいよ」

「それは、ちよつと酷いよ、若菜」

「時代はアナログよ、機械なんて、壊れたらお終いなんだから」

暗い雰囲気を払拭するかのよう、冗談まじりに少し笑いながら遺書を回収していく。

「ナビーは休んでて、あとは私たちがやっておくから」

と、夏目にうながされて、俺は旅客機をあとにする。

第7話 ルビコン川

俺は毛布の上に座りながら、ぼんやりと焚き火を眺める。

「やっぱり、ここは危ないな……」

さっきの遺書の内容を思い出して考える。

「といつても、どうする、脱柵するか？」

「こんな身体じゃ無理だろ、すぐ飢え死にする……」

俺は真つ白な細腕を見ながらつぶやく。

とにかく、体力以前に筋力がない。

箸すら重く感じる……、関節も脆い、立っているだけで、足首にず

しりとくる、腕立て伏せをしようにも手首が折れそうになる……。

走れば息が上がる前に足の筋肉が悲鳴を上げるし……。

食事もちゃんと摂らないと、冷や汗が出て動けなくなる……。

「なんなんだ、この脆弱さは……」

ああ、俺は世界一弱い存在になっちまった……。

空を見上げて、ふわふわと浮かぶ積雲を見る。

「発すれば雷神の如く、動けば風神の如く、戦う様は鬼神の如し、戦場の魔神、パーフェクトソルジャー武地京哉……」

俺は世界一強かったのにな……。

パチパチ、パチパチと焚き木が弾ける音が聞える。

肌も弱く、焚き火の熱でさえ皮膚に突き刺さる……。

寒いのに焚き火に近づけない……。

俺はさらに、1メートルほど焚き火から距離を取り、毛布にくるまって暖をとる。

これは、誰かに守ってもらわないと、まともに生きられないぞ、そういう生き物なのか、このナビーフイユリナ・ファラウエイという少女は……。

そう考えると、この身体が絶世の美少女だって云う理由もなんとなくわかる、先祖代々美しくなければ生き残れなかったのだ。

この少女にも同情するな……。

「心配するな……」

と、俺は自分の胸をぽんぽんと叩く。

「しつかり鍛え直してやる、一人でも生きられるようにしてやるからな」

少し笑顔をつくる。

坊主頭の野球部二人が火加減を見ながら薪を放り込む。

一方、女子グループはと云うと、旅客機からの資材の搬出も終り、今は女子トイレの製作に入っていた。

白いプレートと赤い座席を組み合わせたような作り。

当然、仕切りだけで屋根はない。

と、その時、女子グループが作業を切り上げてこっちに戻ってくる。

「そろそろ男子たちが帰ってくる頃だから、昼食の準備をはじめましょう」

もうそんな時間か……。

空を見上げると太陽が真上に来ていた。

俺も手伝おうと立ち上がる。

とりあえず、冷たいレトルト食品を鉄板に乗せて、それを焚き火のそばに置いて暖める。

「水、見つかったかな、食器洗えないと不衛生だよ……」

「そうだね、これでいいのかな……」

と、食器担当の二人がウェットティッシュで鉄製の皿を拭きながら話している。

「飲み水もだよ、あとどのくらいもつんだろう……」

「じゃあ、節約する？」

「コップ半分くらいにすれば、あと三日はもつかな……」

こっちは、飲料水担当の子たちだ。

俺はレトルト食品の袋をひっくり返しながらその話を聞く。

「あ、男子が帰ってきた！」

と、森の方角を見て大きな声をだす。

「急いでやっちゃいましょう」

「ナビー、もうそのくらいでいいから、皿に盛り付けちゃいましょう」
「うん、わかった」

と、俺は鉄板からレトルト食品を回収して、夏目たちに渡す。
そして、それを彼女たちが皿に盛り付けていく。

「ねえ、お水あったってー!」

「ルビコン川があったってー!」

と、男子の話を聞きに行っていた二人が戻ってくる。

「る、ルビコン川!」

「あ、あのカエサル?!」

「ごこつて、イタリアだったの!?!」

などと口々に話している。

「はい、おみやげ」

「たくさん捕れたよ」

と、そろそろと男子たちがやってくる。

両手いっぱい洋梨のような果実を抱えて……。

「ら、ラ・フランス……」

「い、イタリアの次はフランス……?」

「ごこ、どこなのいったい……」

と、みんなで洋梨のような果物を見ながら話す。

とりあえず、この洋梨も昼食の足しにするようだ。

俺はみんなと一緒にタオルで洋梨を拭き、さらに、虫に食われて穴が空いてないかチェックしてから皿に乗せる。

「「いただきます」」

と、全員揃ったところで昼食をいただく。

「食べてみて、ナビー、おいしいよ」

と、隣にいた和泉春月いずみはる、そうあの爽やかな感じのやつだ、その彼が俺に洋梨を食べるように勧めてくる。

俺は言われるがままに、洋梨をじっと見つめて、そしてひと口かじってみる。

うーん……。

すっぱい、しかも腐った味がする……。

俺は反射的に吐き出そうと、顔をそむける。

いや、待て、俺はナビーフィユリナ・ファラウェイー歳だ、そん

なはしたない事は出来ない。

しかし、これ以上噛むのも嫌だったので、思い切ってゴクリと飲み込んでみる。

「どう、ナビー？」

「う、うん、まあ、まあ、かな……」

「そか、よかった」

と、和泉は笑って言い、手にした洋梨をむしやむしやと食べる。俺も彼にあわせて、洋梨をもうひと口かじる……。

まずい、これならレーシヨンのほうがましだ……。

「川はあったが、飲料水として使えるかどうかは若干の不安が残る」と、東園寺が話します。

「そこで、念の為、煮沸してから飲料水として使用する事にした。煮沸するには当然、大量の薪が必要になる。なので、男子諸君には午後から二手に分かれて、給水と薪拾い、この二つをやってもらおう
よく働くよな、こいつら。」

俺は洋梨をむしやむしや食べながらそんな話を聞く。

うーん、まずい、むしやむしや。

「徳永、そっちの進捗状況は？」

「まだ時間がかかるわ、そうね、でも、今日中には完遂できそう」

「そうか、引き続きやってくれ」

こうして、昼食も終り、またそれぞれの作業に戻る。

俺も午後からは女子トイレと女子更衣室の製作を手伝う。

赤い座席で白いプレートを挟む感じで囲いを作っていく、上部は木と木のあいだにロープを張り、それに毛布などをかけてカーテン状にして外から見えないようにする。

そんな作業を日暮れ近くまで続ける。

「よし、こんなものね、次は夕食の準備よ！」

と、次はまた食事の準備だ……。

忙しい……。

夕食の準備は昼間と同じ、鉄板でレトルト食品をあたたためる。
「よかったあ、あったかいお湯があるよ」

「うん、紅茶と珈琲、両方あるね」

と、川の水を煮沸させた水で紅茶や珈琲をいれていく。

そして夕食を済ませ、ほどなくして二度目の夜を迎える。

「疲れた……」

「ぐったり……」

食後はそれぞれ毛布の上に寝転がり疲れを癒す。

「今日も救助隊来なかったな……」

「注意して空見ていたけど、なんにも飛んでなかった」

「なんか、おかしいよな……」

山本や佐々木たちの会話が聞えてくる。

「なあ、人見はここが地球だって言ってたけど、本当に地球なのか？」

「なんだ、それ？」

「パラレルワールドとか異次元とか次元の狭間とか？」

「ああ、タイムスリップも考えられるよな」

などと、面白そうな話をしている。

「神隠しとか、あとは、集団催眠か？」

「最悪、そのどれであっても俺は気にしないよ、少なくとも生きてい

るって事だからな、俺が一番危惧しているのは……」

「なんだ、山本？」

「ここが死後の世界かもしれないって事だ……、俺たちは全員死んで

いて、幽霊になってあの世を彷徨っているんじゃないかって事……」

なんか、怖い話になってきた……。

しかし、今まで感じてきた違和感を説明するには十分だった……。

「ま、まさか……」

「考えてみるよ、飛行機が墜落したんだぜ？　なんで俺たち無事なん

だよ、しかも無傷で、おかしいだろ？」

怖い、怖い、怖い、あれか、恨みがあつて成仏できなかったってや

つか？

それで、呪いかなんかで、俺を変な姿で登場させたってわけか!?

復讐するために!!

しかも、たつぷり拷問するために、こんな弱々しい少女の姿にした

んだろ!?

なんてやつらだ!!

「見てみるよ、あの飛行機をよ、なんで、あれで生きてられるんだよ?」

「た、確かに、お、俺たち、もう死んでいるのか……?」

「ああ、実際はミンチになってるかもな……」

ひいひい、怖い! もしかして、あの名無しの遺書、永久に呪ってやるってやつ、山本が書いたのか!?

俺は頭から毛布を被ってぶるぶると震える。

成仏してください、成仏してください、成仏してください、俺を巻き込まないでください……。

「こら、男子、ナビーが怯えるから、そんな話はしないで」

「また山本、おまえか、昨日から言ってるでしょ、暗い話はしないで」

と、福井とかが山本たちの会話に割って入る。

「もう、ナビーが怯えてるよ……、かわいそうに……」

「大丈夫だからね、ナビー、怖い事なんてないからね……」

女子たちが俺を守るように周囲を取り囲む。

「ちっ、なんで俺ばかり、いつも悪者なんだよ……」

と、山本が不満なような声で言う。

第8話 ひとりマスコツト班

「よし、全員、その場で聞いてくれ」

と、東園寺の声が聞こえる。

俺は毛布からちよこんと顔を出して周囲を確認する。

まわりには女子たちがいる。

「会議の結果を発表する」

彼は焚き火の近くに立つ。

その近くには、銀縁メガネの優等生、人見彰吾ひとみしょうごや徳永美衣子とくながみいこ、それと和泉春月いずみはるもいる。

そういえば、いなかったな、会議をしていたのか……。

「人見などと話し合った結果、班分けして、分担して作業を行ったほうが効率がいいと云う事になった」

水汲みとか薪拾いとかそういうやつか。

「その班割りを発表する」

東園寺はメモを見ながら話す。

「まず第一班、俺と鷹丸、神埼、久保田、有馬、清瀬の6人だ。ここは基本的に安全管理だ、焚き火や広場周辺の危険物撤去、それに必要ならば道路も整備する、とりあえず、管理班とでも命名しておく」

坊主頭の野球部の二人や、不良っぽいやつ、基本的にガタイのいい連中が主だ。

「次に第二班、人見、綾原、南条、海老名、青山の5名、ここには指揮を執ってもらう、いや、アイデアを出してもらおう、生き残るための知恵だ、それとルール作りもだ。班名は参謀班とでもする」

ここは頭の良さそうな連中だな。

「次に第三班、福井、佐々木、村井、山本、安達、石塚、瀬戸内、伊藤、大内の9名、ここは広場で作業をしてもらおう、食事の準備や水汲み、トイレや更衣室の設置、生活をするための作業全般だ、班名は生活班とする」

普通っぽいやつらの班だな……。

「次に第四班、徳永、水野、小野寺、鹿島の4名、ここは特殊な班だ、

女性特有の要望、または権利関係を見てもらう。ここだけは全体の事は考えなくもいい、自分たち女性の事だけを考えろ、遠慮せずに主張してくれ、その要望には極力応える。班名は女性班とする」

当然、女4人の班だ。

「最後に第五班、和泉、秋葉、夏目、佐野、雨宮、笹雪の6名、ここは食料調達班だ、果物の採集、川魚などの狩猟、食べるものならなんでも集めてもらう、班名は狩猟班とする」

おなじみの和泉春月や夏目翼がいる班だ。

「班割りはこれで以上だが、生活班と狩猟班の負担が大きくなる事が予想される。そこで、生活班には人見の参謀班が、狩猟班には俺の管理班がヘルプにつく事にした。あとは班長、管理班は俺、参謀班は人見、生活班は福井、女性班は徳永、狩猟班は和泉にやつてもらう。それぞれの班で意見を出してもらい、それを班長会議で検討する、いちいち全員の話は聞いてられんからな。とりあえず、それらをまとめた物をそこに貼り出しておく、あとで確認しておくように」

東園寺が手にしたメモ用紙をひらひらとみんなに見せる。

「質問はあるか？」

あ、あれ、俺は……？

「あ、あの、私は……？」

俺はおそろおそろ手を挙げ、かぼそい声で尋ねる。

東園寺がじろりと俺を見る。

「ナビーフイユリナ、おまえは一人マスコット班だ、俺たちを元気付けてくれ」

お、おい……、さすがにそれはないだろ……。

「と云うのは冗談だ、そうだな、夏目、すまんがめんどろ見せてやってくれ」

「うん、了解した」

夏目と同じと云う事は、俺も狩猟班か……。

俺はちらりと横目で夏目と和泉以外の狩猟班のメンバーを見る。

まずは佐野^{さの}^{ぼくと}、こいつは、このクラスで一番身体がでかく、おそらく190センチは超えているであろう大男、そして、いつもここに

ルビコン川へと伸びる道はぬかるみ非常に歩き辛い……。

俺はピンクのサンダルが泥だらけになるのを嫌い、夏目の服をぎゅつと掴み、木の根や石の上などを選んで慎重に進む、

「これでもかなり歩きやすくなったほうだよ」

「そうだね、昨日は道なき道を切り開いていったからね」

と、先頭を歩く、和泉と秋葉が話す。

ああ、真つ白なワンピースチュニックにも泥が跳ねる……。

俺は服にこびりつかないように、そつと泥を指で挟んで取る。

すると、足元に何か落ちていている事に気付く。

「なんだ、これ？ 小瓶？」

俺はそれをポケットに入れる。

そしてまた夏目の服を掴んで歩きだす。

あの広場から1キロほど歩いたところだろうか、突然目の前に光が広がる。

「ここがルビコン川……」

広葉樹の森の中に現れた小さな川。

川幅はどのくらいだろう、10メートルくらいだろうか。

水位もそれほど深くはなく、大小様々な岩がそこかしこに転がっている。

俺は小川に近づき、水の中を覗き込む。

水質は驚くほど澄んでいて、川底もはっきりと見え、また、多くの川魚が泳いでいるのも確認できる。

「へえ、綺麗なもんだね、別に煮沸しなくても飲めるんじゃない？」

と、笹雪めぐみが俺の隣にしゃがんで手で川の水をすくいながら言う。

「たぶんね、まあ、でも、念の為煮沸消毒はしたほうがいいよ」

「あつちが、昨日のラ・フランス？」

今度は雨宮ひらりが森の方角を見ながら言う。

「そう、あれ」

彼女の視線の先を見ると、川沿いの広葉樹から、洋梨のような果実がたわわに実っているのが見えた。

「で、なんで、ここがルビコン川なわけ？」

と、笹雪が塗れた手をぶらぶらとさせながら言う。

「それは、昨日の東園寺の名演説からさ」

「こそ、その岩の上に立ってさ」

秋葉が川の真ん中の大岩を指さす。

「へえ、どんな？」

「えつとな、よつと」

と、彼が小さな岩を伝って大岩までいく。

「こんな感じでき。ここが俺たちにとつて生きるか死ぬかの運命の分れ道だった……、ここが俺たちにとつてのルビコン川……、とか、なんとか……、ハルあとなんだっけ？」

「いや、そんな感じ、俺も詳しくは忘れた」

と、和泉が明るく笑う。

「どこが名演説よ……」

俺はとりあえず、ピンクのサンダルを脱いで小川の中に入ってみる。

冷たい……。

雪解け水みたいなの冷たさだ……。

しかも、小魚が寄ってきて、俺の足をつつく。

「ナビー、危ないよ」

「大丈夫だよ、翼」

振り返って笑顔をつくる。

そして、小魚を捕まえようと水の中に両手を入れる。

「まーてー」

と、ばしやばしやと小魚を追い駆ける。

いやあ、実に少女らしいな、俺って。

「それにしても、いい人選だよね、この班割り」

と、雨宮が岩に腰掛ながらつぶやく。

「うん、そうだね、あたしらって団体行動苦手だから」

笹雪も岩に座り、靴と靴下を脱ぎ、足を水に入れる。

「ああ、静かなのいい……」

雨宮が空を見上げる。

「でも、和泉と翼はとぼっちりだよね？ あたしらのお守りなんてさ、
なんたつて、あんたら二人はクラスの人気者なんだから」

笹雪がけらけらと笑う。

「いや、そうでもないよ、少なくとも俺はね」

和泉も笹雪たちと同じように手頃な岩に腰掛ける。

「そう？ あのニヤニヤ笑いながらただ突っ立ってる佐野とか、あの
ゲテモノ秋葉と一緒にだよ？」

「ひどいなあ、めぐみ、そんな事言うなよ」

と、苦笑いしながら秋葉が言う。

「実際ゲテモノでしょ？ いったい、何人の女があんたのせいで学校
辞めていったと思ってるの？ あんなエロ同人誌みたいなことやっ
てさ？」

「いや、いや、いや、あれは俺の愛情表現みたいなものだから」

と、秋葉が髪をかき上げる。

「ナビーちゃん、こんなゲテモノに近づいちや駄目だからね」

「はあい！」

と、俺は手を挙げて元気よく返事をする。

「ひどいなあ、もう……」

しかし、楽しいなあ、普通の高校生の人間関係って。

「ほらあ！」

と、川辺で心配そうに俺を見ている夏目に軽くしぶきをかけてや
る。

「きやつ！」

「ほらあ！」

「きやつ、やめ、やめ……」

彼女が逃げ惑っている。

いやあ、楽しい……。

楽しいんだけど、ふと思い出したんだよね。

救助隊なんてこねえよ。

俺たちは墜落したんじゃないやなくて撃墜されたんだからな。

そして、なんで、撃墜されたかって言うと、俺が京都の街中に突っ込んでやる、って言ったからだ。

だから、救助隊なんてこねえ、国民に旅客機を撃墜しました、なんて言えるわけないからな、逆に生存者がいたら射殺したいくらいだ。

そう考えると、政府のやつらは、見当はずれな場所を搜索して、結局発見出来ませんでしたあ、って事にしたいはず。

「ほらあ、ほらあー!」

「も、もう、やめて、ナビィ、上がってらっしやい」

そこで、俺が取るべき行動だが……。

「足冷たあい……」

「靴下は足を拭いてからね」

「ありがとう、翼……」

俺は今日、この瞬間より、最強の傭兵、パーフェクトソルジャー武地京哉を捨てる。

そして、こいつらをとことん利用して生き残ってやる。

もう俺ではない、私だ。

私はナビィ・フィヨリナ・ファラウェイだ。

第9話 脱柵

あれから数日が過ぎ、私たちの生活の質も少しずつだけ向上していった。

まずはシャワー。

女子トイレや更衣室と同じように四方を囲んだだけのものだけど、プラスチック容器にいくつも穴を空け、それを上から吊るしてシャワー状にしてある。

水もちやんと焚き火で温めたものを使用する。

おかげで、昨日はじめて髪を洗うことができた。

なでなで、うん、いい手触り。

くんくん、うん、いい匂い。

次に寝室。

これは四方を囲むのではなく、コの字型にしてある、すべての寝室は焚き火側が開いていて、風はあるていど防ぎ、尚且つ焚き火の明かりと熱が届くような造りになっている。

あと課題もある。

トイレも更衣室もシャワーも寝室もすべてに屋根がない。

幸いにしてまだ雨は降った事はないけれど、いずれ必ず雨が降る時がくる。

それに備えて屋根を設置する事が急務となっていた。

まあ、でも、排水溝を掘って、あとはビニールなり、旅客機の鉄板なりを被せれば防げそうではあるけどね。

「お魚捕ってきたよお」

「おまたせ」

と、私と夏目はルビコン川の追い込み漁で捕った魚を手に調理室に入る。

「ご苦労様、ナビーちゃん、翼もお疲れね」

「わあ、いっぱい捕れたねえ」

魚の入った籠をテーブルの上に乗せる。

「じゃあ、さっそく捌いちゃいましょう」

「腸抜きからね」

と、福井麻美をはじめとした生活班のメンバーが籠から大小様々な魚を手に取り調理を開始する。

「次は洋梨の収穫だね」

「そうね、ナビー」

と、夏目を話しながら調理室をあとにする。

「野菜がもつとあればいいんだけど、どれが食べられて、どれが毒なのかわからないから手が出せないのよね……」

「基本的に動物が食べているものなら大丈夫だよ、これからはそれをよく観察するようにしよ、翼」

「うん、そうね」

そんな話をしながら、またルビコン川に向かおうとすると、

「だから、もう一週間だぞ、いつ救助隊くるんだよ、こんな事やっていていいのかよ!？」

そんな怒声が聞えてきた。

「有馬と清瀬に行かせるよ、あいつらも行きたいって言ってたんだからよ、いいトレーニングになるだろ、甲子園目指してるんだからよ!！」

騒いでいるのは生活班の山本新やまもとしんいち一だった。

「だから、それは危ないって話だろ」

「こうやって待っているほうが安全って判断なんだろ、東園寺たちの」

と、それを同じ生活班の安達一輝あだちかずきと石塚航いしづかわたるがなだめる。

「俺はそうは思わないね」

彼の焦燥感もわかる。

救助が来るかどうかもわからない、さらにはここがどこかもわからない、手探りの生活、日々ストレスを感じていても何ら不思議ではない。

まっ、私だけが、救助は来ないって確信しているけどね。

それを教えたなら、なんで？ って、なって、私がハイジャック犯の武地京哉だつてばれるから死んでも言わないけど。

「何を騒いでいるんだ……」

と、東園寺公彦と管理班の数人がやってくる。

その手には大量の薪を抱えられている。彼らは朝から晩まで薪拾いをしていた。

今は飲料水の煮沸消毒だけではなく、調理やシャワーのお湯まで、その焚き火の炎を利用して作られていたからだ。

当然、焚き火は一つでは足らなく、広場にはすでに10以上の焚き火があり、それぞれの上には鉄製のボウルが設置され、四六時中お湯を沸かすのに使われていた。

なので、薪はいくらあっても足りない。

木を伐採できれば、それも解決できるんだけどねえ……。

落ちていた数少ないナイフ類は優先的に調理に使う事になっていった。

ナイフじゃ、どうしようもないけど……。

「もう我慢の限界だ、東園寺、やっぱり、救助を呼びに行くべきだ」

と、山本が東園寺に詰め寄る。

「それは何度も言っているだろ、リスキーだ」

「リスキー？ 本気で言ってるのか、あんた？ ここで、生活するほうがリスキーだろ？ 誰か病気になっただらどうすんだよ？ 怪我したら？ オリエンテーションかなんかのつもりなんだろ？ 頭おかしいんじゃないのか、あんた？」

山本がくっつかかる。

「ふう……」

東園寺がひとつ溜息をつき、手にした薪を地面に降ろし、その仕上げをはじめめる。

難しい判断になるね、彼、山本新一の発言もある意味正論だと思う。

「それは今日死ぬか、明日死ぬかの違いでしかない。俺は今日生き抜く事を選択した、おまえは明日以降の事を心配している。確かにおまえの言う事は理にかなっている、しかし、今日を生き抜かなければ、明日病気になろうが怪我をしようが、そんなものは関係なくなる。とにかく今日を生きろ、その為は何をすべきか考えろ」

焚き火に薪を放り込みながら淡々と話す。

「な、なんだ、おまえ、東園寺……、いつからそんな人間になったんだ

よ、なんで怒らないんだよ……、前はあんなに傲慢で偉そうだったのに、いつも番長気取りで俺のクラスだとか言つてさ、それがなんで、急にそうなるんだよ、お、おかしいだろ……、それに、なんで、そんなに、ここに留まる事に固執するんだ……？ ま、まさか……」

と、山本が数歩あとずさる。

「さ、さては、おまえ、東園寺じゃないな……？」
「なに？」

東園寺が作業の手を止め、眉をひそめて山本を見る。

「自縛霊か？ 俺たちをここに留めて置くために東園寺に化けているのか……？」

尚も山本はあとずさっていく。

「い、いや、違う……、俺たちは、やつぱりもう死んでんだよ、ここがあの世なんだよ、なんか、おかしんだよ、みんなやたら落ち着いているし、冷静でさ……、おまえも、おまえもさ……？」

さらに、安達や石塚からも距離を取る。

「な、何を言っているんだ……？」

「ど、どうした、山本……？」

ああ……、山本がおかしくなった……。

いるんだよね、軍隊でも、ああいうやつ。

「い、いや、違う、俺は死んでない、死んでるのは、おまえらだ……、本当は、おまえら、あの飛行機の中で肉塊になってんだろ!! お、俺を騙してんだろ!!」

非常事態が起きると、人はかえって冷静になり、頭が冴えてくるもの……。

生存本能だよ。

逆に非常事態が起きても、そのままパニックを起こして大騒ぎするやつは異常。

そういうやつは鬱やPTSDなどの精神疾患を患いやすい。

私が山本の上官だったら、今すぐ部隊から彼を外すね。

「お、落ち着けて、そんなわけないだろ」

「山本、話せばわかる」

「うわわああああ!!? お、俺に近寄るな、この化け物、幽霊め!!」

と、山本が森に向かって走り出した。

「あ……」

「いっちゃった……」

私と夏目は彼の後姿を呆然と見送る。

「お、おい、山本、どこ行くんだ、待てよ!!」

「ど、どうする、とりあえず追いかけてよう!!」

と、安達と石塚が山本のあとを追う。

「あいつら……」

東園寺が立ち上がり、彼らの走り去った方角を見る。

「ねえ、公彦、脱柵は許しちや駄目だよ、士気に関わるから」

私は彼の上着の裾をちよんちよんと引つ張って忠告する。

「脱柵?」

おっと、つい、専門用語が……。

えっと、でも、なんて言うんだろう、逃亡? 脱獄? 違うなあ、なんだろうなあ、やつぱり、脱柵だよ、これは……。

「そ、その、追いかけて連れ戻したほうがいいよ、私、心配、新一も頭に血が登ってるだけだと思うから、ちゃんとお話をして……」

と、うつむいて、泣きそうな声で言う。

「そうだな、連れ戻すか……」

東園寺が私の頭をぽんぽんと叩いて少し笑う。

「管理班、追うぞ、山の形は頭に入っているな? 方角を見失うなよ」

「うつつ、公彦さん」

「大丈夫つつ」

と、彼らが山本たち入っていった森に向かい駆け出していく。

「翼、私たちもヘルプに行くよ!!」

「え、でも、迷子にでもなったら大変……」

「違うよ、翼、彼らが迷子にならないために行くの、目印とかけながら、声の届く範囲にいて道標になるのよ」

「そういうことなら、私たちも手伝うよ」

「うん、行こう、山本が心配だしね」

と、生活班の調理をしていた女子たちが手伝いを申し出てくれる。
「じゃあ、行こう!!」

「おう!!」

私たちも彼らのあとに続いて森の中に突入していく。

第10話 ヒンデンプルク

森の中はうっそうとしていて、薄暗く、すぐに私たちから方向感覚を奪う。

「ひとりここに居て！ 声で中継して！」

私はまだかろうじて広場の明かりが見えるポイントでそう叫ぶ。

「わかった、私がいる！」

と、生活班の伊藤楓いとうかえでが名乗り出てくれる。

「お願いね！」

伊藤を置いて私たちは先を急ぐ。

「次、ここ！」

「じゃあ、私がいるね！」

と、次々中継ポイントを作っていく。

こんな森の中で迷子になったら最後、おそらく、もうあの広場には戻れない。

東園寺たちは山の形を覚えていれば大丈夫だと思っているようだけれど、ここは樹冠、周囲の状況がわかる高さまで登れない。

山すら見る事は出来ないだろう。

だから、私たちが唯一の生命線になる……。

「史緒里聞える!?!」

「うん、聞える、こっちだよお!!」

微かにその声が聞こえる。

「次、ここ！」

「私の番ね！」

福井麻美が残る。

あとは、私と夏目の二人だけになった。

「な、ナビィ、夏目、何をやっているんだ?!」

と、少し離れた場所から私たちを呼ぶ声があった。

見ると、それは、管理班の鷹丸たかまる大樹だいぎだった。

彼は東園寺の右腕って感じのお洒落な不良風の男。

「そ、そっちこそ、公彦とか新一とか、みんなは？」

「先に行っている、俺は木の枝を折って、広場の方角がわかるようにしている」

なるほど、少しは考えているようね。

「どっちに行った？」

「あっちだ」

「ありがとう、私たちは私たちで声の中継ポイントを作っているから、道に迷ったら叫んでみて」

「お、おう、わかった、ありがとう」

と、私と夏目は彼が指し示す方角に走りだす。

「ナビー、あっちじゃない？ 男子たちの声がする」

夏目の言う通り声がする。

「じゃあ、最後の中継ポイント、翼はここにいて」

「うん、わかった、私の声の届かないところには行かないでね」

「うん、大丈夫、無理はしない」

と、男子たちの声のする方角に向かって走りだす。

その場所はすぐにわかった。

光に溢れていたから。

私は迷わず、その光に向かって走る。

そして、光に飛び込む。

一気に視界がひらけ、優しく風にそよぐ草花が目飛び込んでくる。

「あ……」

そこは草原……。

広葉樹の森に囲まれた直径数百メートルほどの静かな草原。

そう、私たちの広場と同じような場所だった。

ただ一つ、違いを探せば、それは墜落した旅客機がないこと。

その代わりに、そこには丘のような、または大きな木のような、複雑に枝が入り組んだオブジェのような物が鎮座していた。

「うわあああ、やめろ、やめろおお!!」

と、その叫びで現実に引き戻される。

おっと、そんな事より、山本はどうなった？

「くるな、くるなあ!!」

見ると、山本が木の枝を持ってぶんぶんと振り回して騒いでいた。その山本の周囲を東園寺と管理班の三人、あと生活班の安達と石塚が遠巻きに包囲している。

ああ、でも、よかった、そんなに遠くまで逃げてなかった……。

たぶん、私たちの広場から1キロも来てない。

私は息を整えつつ、彼らのもとに歩み寄る。

息よりも足の筋肉がやばい、ぴりぴり痺れて痙攣する感じ……、これはもつと走りこみをしなければ……。

いや、走つたらすぐに肉離れ起こすしなあ、まずは歩く事からはじめよう……、って、リハビリかよ……。

「どけろ、どけろお!!」

と、そんな声が近くで聞こえた。

視線を上げると、山本がこちらに走ってくるのが見える。

な、なぜ、こっちに……？

ああ、そうか、東園寺たちは山本の進行方向をふさいでいるからか……。

だから、山本は手薄な元来た方向、つまり私の方角に活路を見出したってわけね……。

でも、誤算だったよね、私を誰だと思っているの？ 私はパーフェクトソルジャー、ナビーフイユリナ・ファラウェイなんだから。

「な、ナビー、危ない!」

「逃げろ、ナビーフイユリナ!」

と、みんなが心配してくれる。

「どけろって、いつてんだろお、このお!!」

山本が木の枝を振り上げる。

枝が振り下ろされる瞬間、私は一步前に足を踏みだす。

そして、山本の軸足、そのかかとを私のかかとで強く打ち付ける。

「クロース・クォーター・テイクダウン」

そのまま水泳のクロールの要領で手の平、掌低で彼のおでこを突き飛ばす。

すると、山本の身体は腰を中心にして、後方にくるつと回転するよ
うに地面に叩きつけられる。

「まっ、テコの原理だよね、シーソーみたいな感じ。」

前の身体だったら、三回転くらいしてたと思うけど、今の身体では
これが限界かな……。

「く、くそっ！」

私は山本の手から木の枝を蹴り飛ばす。

「帰るよ、新一、みんな心配してるから……」

と、優しく諭し、手を差し出す。

「か、帰るわけないだろ、この幽霊め!!」

尚も彼は頭を押さえながら半身を起こし、そして周囲を見渡して、
武器になりそうな物を探している。

「山本……」

その時、東園寺がやってきた。

そして、山本をまたぎ、そのまま両手で襟首を締め上げる。

「いいか、山本、おまえは何も考えるな、何も心配するな、すべて俺に
まかせろ！」

彼が珍しく声を荒げる。

「おまえを、クラスの全員を、俺が必ず生きて日本に返してやる、家に
帰してやる、俺のすべてを懸けてやってやる、俺を信じろ、わかった
かあ!？」

あら……。

山本の心配ばかりしていたけど、東園寺も結構やばい。

そういえば、この人あんまり寝てないよね、いつも焚き火の番とか
して。

彼もまた、人知れず追い詰められていたってわけね……。

私はそつと彼のそばにしやがみ、その頬を両手ではさむ。

「どうしたの、公彦……? あなたはクラスの精神的支柱、そのあなた
がそんな顔をしていたらみんな不安になるよ……、そんなに声を荒げ
ては駄目……」

と、さらに東園寺の眉間によつたしわを指でつつく。

「笑えよ、クソガキ」

「ナビーフイユリナ……」

手本として、顔を傾けて笑ってやる。

「えへへ」

長い金髪が風にそよぐ……。

「あ、ああ……、そうだな……、心配をかけて悪かったな……」

と、東園寺は山本の襟首から手を放し彼を解放する。

「てか、なんなんだ、これ……?」

「なんか、人工物っぽくないか?」

少し離れたところにいる生活班の安達と石塚が広場中央の大きなオブジェを見ながらつぶやく。

私も興味を引かれてそちらを見る。

高さは、そうね……、20メートルくらい、横幅は50メートルくらいある。

「これ、骨組みじゃないか?」

「ホントだ、なんかの天井っぽい」

言われてみると、規則正しい、クモの巣みたいな感じの骨組みに見える。

それに、蔦や細い木の枝が絡みついている感じ。

「これって、船じゃないか……?」

「いや、テレビで見た事ある、これ飛行船だよ、その骨組みだよ」

「飛行船? ヒンデンブルク号か?」

と、みんながその骨組みの山に近づいていく。

「う、うわ!」

「え、なんだ、これ!」

と、先行していた安達と石塚が足元を見て悲鳴をあげる。

「うわ、うわ、骨、骨、白骨死体がある!」

「こ、ここつちにも!」

「あちこちにあるぞ!!」

うしろにいた管理班のメンバーも口々に叫ぶ。

大量の白骨化した死体がある……。

私は近づきそれを観察する。

「50年は経っているね……」

それでも服装は確認できる。

鈍色の鎧を着ている者、赤いクロークを身に纏った者、白いドレスを着た豪華な髪飾りをした者……。

とにかく、皆、古臭い時代劇のような格好をしていた。

「なんだ、ここは……」

東園寺が私の隣に立ちつぶやく。

「みんなが言っている通り、飛行船が墜落したんだね、で、この死体はその犠牲者……」

「墜落……、犠牲者……」

彼が反芻するように言う。

「それはあとで考えよう、山本、帰るぞ、おまえらも」

「ああ……」

山本がのそのそと立ち上がる。

私たちは、とりあえず、あの飛行船の詮索はあとまわしにして、山本を連れて元いた広場に戻る事にした。

第11話 探索

ああ……。

ちよつとでしゃばり過ぎたかな……。

昨日の山本新一脱柵事件を思い出しながら食事を摂る。

私がハイジャック犯だとばれてないよね……。

憂鬱な気分になってくる。

まずい、むしやむしや。

お昼ごはんの洋梨をかじる。

いや、大丈夫、みんなには、仲間のために必死で頑張る心優しい少

女の姿に映ったはず……。

まずい、小骨も多い……。

私は串に刺された焼き魚を頬張りながら考える。

うん、これは、おいしい。

まだ残っていた野菜スープをすする。

まずい、むしやむしや。

また、洋梨をひと口かじる。

「ナビー、ほかに食べたい物はない？」

と、隣の和泉春月が笑顔で聞いてくる。

「肉、お肉食べたい」

塩コショウががつつり効いたやつ。

「肉かあ……、そういえば、森の中には鹿とか猪みたいなのがいだよね

……、どうにか捕まえられないものかな……」

和泉が考え込む。

「に、肉って言っても、どうやって調理をすればいいの……？」

「私やった事ない、無理……」

「そ、そうだよね、ちよつと怖い……」

と、生活班の福井とかが会話に加わる。

「いいよ、私がやるよ、魚を卸すのと一緒だから……、たく、そんな事

も出来ないの……、女のくせに……」

最後に残ったスープをすすりながら言う。

「なっ!? ナビーがすんごい生意気な事言ってるんだけど!」
「い、いいわ、やってやるわよ!!」

「大変なのは血抜きだけでしょ? か、簡単よ、やれるわ」
「和泉くん!! 牛でも象でも連れてらっしゃい!!」

「もうこの際、マンモスでもなんでもいいから持ってこい!!」
と、なぜか大盛り上がりになる。

「よし、全員そのまま聞いてくれ」

昼食も終わりがけの頃、東園寺が口を開く。

「今日はこれから、昨日、山本が発見した広場を探索しに行く」

なぜか、あの広場は山本が身体を張って発見した事になっている。

「その前に名前を付けておく、そうだな、誰かが言っていたな、ヒンデンプルク号と……、そこから取ってヒンデンプルク広場とする。それに伴ってここにも名前が必要になるな、暫定でラグナロクとでもしておく」

つまり、この広場の名前はラグナロクで、それで、ここから北に1キロほど行った、あの飛行船のある広場をヒンデンプルクと呼んで、さらに、このラグナロクから南に1キロほど行ったところにある川がルビコン川になるってわけね。

「だいたい、位置関係はこんな感じ。」

「探索は俺の管理班と、あとは人見の参謀班にも来てもらう。他の班は通常通りの作業をしていてくれ」

こうして午後の作業が決まった。

私は狩猟班ではあるけど、管理班や参謀班の人たちと一緒にヒンデンプルク広場に行く事にした。

まっ、和泉とか佐野とか秋葉が、木の枝を削って槍を作っていたからなんだけどね。

本当に狩に行く気らしい。

なので、邪魔したら悪いので、私はヒンデンプルク広場へ。

ほどなくして、広場に到着。

広場は私たちのラグナロクとまったく同じ、違うのは中央の旅客機が飛行船に変わっている事くらい。

「とりあえず、埋葬からだ」

「うつつ」

「やっちゃいましたよ」

遺体の埋葬からはじめるらしい。

管理班のメンバーが手にしたスコップ、それとスコップのような物で広場の隅に穴を掘りはじめる。

「俺たちは死体から使えそうな物を回収する、衣服は出来るだけそのままにしておいてやれ」

と、参謀班の人見彰吾が言う。

「女性とおぼしき遺体は私たちがやるから触らないでね」

綾原雫が補足する。

ちなみに参謀班には女性が二人いる、綾原雫と海老名唯だ。

それにしても、遺体が点在しているね。

墜落してすぐ死んだのなら、こんなにはばらけてはないと思うけど……。

でも、墜落してしばらく生存していたのなら、死者が出たらちゃんと埋葬するはずだし……。

私は観察しながら色々見て回る。

「何があったんだろううね、ここで……」

草花に覆われて見えにくいけど、遺体の他にも彼らの荷物と思われる物が大量に散乱しているのがわかる。

「うお、なんだ、これ、ぴっかぴかだぜ」

と、参謀班の青山悠生あおやまゆうせいが遺体から回収した剣、中世のロングソードのような物を鞘から引き抜いて言う。

「ビンゴだぜ、やはり武器を持っていたか!」

と、同じ参謀班の南条大河なんじょうたいががそれを見て歓声をあげる。

「ああ、こいつらは相当昔の人間らしい。他にもあるはずだ、探せ」

人見が銀縁メガネを人差し指で直す。

「人見、鎧はどうする? これもまだ使えるぜ?」

「それも回収しよう、鎧を脱がしたら、適当にその辺の布で覆ってやれ」

「おーけー、回収する」

と、彼らは次々と武器や鎧を脱がして回収していく。

「人見、何か変よ、この髪飾りやアクセサリー類……」

綾原が銀色の髪飾りを人見に見せながら言う。

「変とは？」

「一切劣化がない、酸化どころか汚れひとつない……」

たしかに、彼女の言う通り、その髪飾りは太陽の光を反射してきらきらと輝いていた。

それどころか、うつすらとだが、自光している……。

「ふむ、わからんな……、一応、それも回収しておこう」

「了解……」

彼らは武器、それに鎧やアクセサリー類などを回収して一箇所に集めていく。

私はそれを横目に落ちている荷物を拾って何か手がかりがないか調べる。

「どこの文字だ……」

何かのケースだろう、そこに刻印された文字は見た事もないものだった。

ケースを開けてみる。

中には一冊の書物が入っていた。

私はそれを手に取り、ペラペラとページをめくる。

読めないけど、なんだろうな……。

どこかで……、魔女に与える鉄槌……、いや、違うな、ヴォイニツチ手稿のような印象だ……。

「ナビー、それは？」

と、うしろから人見に声をかけられる。

「うん？ わかんない、見る？」

「ああ、見せてくれ」

彼に書物を渡す。

そして私は落ちている物の探索を再開する。

しかし、さっきの綾原が手にした髪飾りと同じく新品同様な物があ

るかと思えば、その隣には完全に錆び付いた物があつたりと、何か二つの時間が同時に混在しているかのような印象だ。

「よし、いいぞ、遺体の搬入をはじめてくれ！」

と、東園寺が大きな声で叫ぶ。

それから遺体の埋葬を全員で行い、手を合わせてから、人見たちが集めた荷物、主に刃物類を持ってラグナロクに撤収する事になった。

まだ調べ足りないけど、それは明日以降だね。

でも、刃物類はとていい収穫。

これがあれば木の伐採が出来る。

そうすれば、薪の問題もクリアでき、尚且つ、困っていたトイレや寝室の屋根も作れてと、良いこと尽くめ。

「すごい、これ、刃渡り何センチ？」

「80センチくらい？　ここが日本だったら銃刀法違反だね」

「斧とか鉋もあるよ、助かるう」

と、ラグナロクのみんなも大喜び。

「あれ？　ハルとかは？」

槍を作っていた彼らがいないので、夏目に聞いてみる。

「狩の練習？　とか言ってる森の中に入っていったよ」

ふーん、もうそんな段階か……。

「これとか料理に使えないかな？」

「うーん、でも、これって武器だよな？」

「軽いなああ、材質はなんだろう？」

「危ない、振り回すな！」

広場では持ち帰った刃物類の値踏みが行われている。

「うわああああ!!」

と、森の中からそんな絶叫が聞えてきた……。

「た、大変だああああ!!」

森の中から槍を持った三人組みが出てきた。

そう、和泉、秋葉、佐野の三人だ。

「ど、どうしたの……？」

「な、ナビー、これ、どうしよう!？」

と、和泉が血相を変えて言う。
その手には……。

「めえ……」

「めええ……」

なんか、小さなヤギの赤ちゃんみたいなのを持つてるんだけど……。

それも二頭……。

「な、ど、どうしたの、これ……?」

「い、いや、ちよつと実践しようと思って、その辺を歩いてたヤギを狙ったんだよ、そしたら、そのヤギが逃げて行って、それで追いかけるように思ったら、そこにこの仔ヤギたちが残されていて」

「それで、拾ってきちゃったの……?」

「そう、かわいいそうになって!」

私は仔ヤギを見る。

身体は真っ白で小さく、猫くらいの大きさ。

「めえ……」

かぼそく、小さく鳴く。

「す、捨ててきなさい! 親ヤギもまだ遠くに行っていないと思うから!」

「いや、それが、もう一時間くらい探したんだよ!」

「いなかったんだよ!」

「うちで飼うしかないんじゃないかな……」

と、和泉だけではなく、秋葉や佐野までそう言う。

「ほら、ほら!」

和泉から仔ヤギを一頭渡される。

「めえ……」

つぶらな黒い瞳が私を見る……。

「めえ……」

かわいい……。

「めえ……」

すごくあつたかい……。

「めえ……」

えへへへ……。

私たちは仔ヤギを二頭飼う事になった。

第12話 シウスとチャフ

「この子たちって何食べるんだろう?」

「まだ小さいから母乳?」

「母乳かあ……、誰か母乳出る人いませんか?」

「いるわけないでしょ、ナビー……」

などと話し合いながら仔ヤギたちがよちよち歩くのを眺める。

たまにコロンと転がって四本足を空に向けるのが非常にかわいらしい……。

「あ、草食べてる」

「ホントだ、もう食べれるんだ?」

と、仔ヤギたちが広場の草をはむ。

「よかったあ、これでエサの心配はしなくていいね」

「でも、この子たちって生後どのくらいなんだろう?」

「三ヶ月くらい?」

口々に言い合う。

「なら、管理班、切れ味の確認だ」

と、東園寺がロングソードを手にとってきた……。

「な、何をする気なの、公彦、や、やめてよ……」

私は驚いて、仔ヤギたちを抱く。

「勘違いするな、こいつらのために柵を作ってやるんだ」

と、管理班の6人はそれぞれ手にロングソードを持って森の中に入っていく。

「び、びっくりした……、てっきり殺されちゃうものか……」

「そんなわけないだろ、ナビー。それより、名前を付けてやりなよ、キ

ミが、ね?」

和泉が笑って言う。

「な、名前か……」

私は仔ヤギたちをじっと見つめる。

草をはんではコロンと転がって空に足を向ける。

そんな事を延々と繰り返している……。

「ふかふかだね……」

枯れ草の山を手で触ってみる。

小屋自体の木の匂いと枯れ草の匂いが鼻をくすぐる……。

「めえー！」

「めええー！」

と、シウスもチャフも大喜びで枯れ草の上を転がりまわる。

「たった二日で造ったわりには、ちゃんとしてるよね」

仔ヤギたちを見ながら感心してつぶやく。

「それえ」

と、私も一緒に枯れ草の山に飛び込む。

すると、シウスとチャフが私のお腹の上に飛び乗ってくる。

「あ、やめて、くすぐりたい！」

なんか、じやれてくる、かわいい。

「だ、だめ、そんなとこ舐めないで、汚いから！」

もう、超楽しい、なんだ、これ。

「このお！」

と、シウスとチャフに枯れ草をかけてやる。

「あ、反撃してきたー！」

仔ヤギがぶるぶるとして枯れ草を巻き散らかす。

「あははっ」

なんか、枯れ草の匂いも心地いいし、すごく気分がいい……。

「ナビーフイユリナ」

と、大の字に寝転がっていたら、東園寺が大きな箱を抱えて入って

きた。

「うん？」

私は身体を起こして彼を見る。

「すまんが、そいつらにも仕事をしてもらおうぞ」

と、東園寺は大きな箱を下ろしながら言う。

「仕事？」

「そうだ、仕事だ」

大きな箱の中身を指さす。

見ると、沢山の野菜や山菜みたいな物が入っている。

ああ、そうか……。

「毒見をしてもらう」

まあ、そうだよね、ちようどいいよね……。

「もちろん、なんでも食わせる気は毛頭ない、明らかに毒だというものは入っていない、おそらく大丈夫だろう、だが、最後に念の為に毒見をしてもらう、そういう物だけだ」

私の表情が翳ったのを見て彼が付け加える。

「うん、それは信用するよ……」

「すまん」

「でも、ひとつ条件を出していい？」

「なんだ？」

「この子たちに食べさせるのは私、私から見て毒かどうかわからない物だけ食べさせる、他の人には勝手にやらせない。それが条件よ」

「もちろんだ、最初からそのつもりで持ってきた」

「ありがと、公彦」

私は無理して笑顔をつくる。

「じゃあ、置いていくぞ、おまえの好きなタイミングで食わせてやってくれ」

と、東園寺が出て行く。

残される私たち……。

「めえ……」

「めえ……」

シウスとチャフが私の手に鼻先をこすりつけてくる。

「大丈夫だよ、心配いらないよ、毒なんて入ってないからね」

と、私は仔ヤギたちの頭を抱く。

そして、立ち上がり、箱の前まで行き、しゃがんで中を覗き込む。

うーん、普通の野菜だねえ……。

と、ひとつずつ手に取って眺める。

でも、草、特にネギっぽいのは駄目だよね。

ぽいっと投げ捨てる。

あとは根菜だよね、じゃがいもつぼいのとかにんじんつぼいのがある……。

「というか、どう見てもにんじんとじゃがいもだよ、これ……」
窓から差し込む光にかざして見る。

「めええ」

「うん？」

と、見ると、チャフがさつき捨てたネギつぼい野菜をむしやむしやと食べていた……。

「ああ！ それは駄目だよ、チャフ！」

私は大慌てでじゃがいもとにんじんを放り投げて、チャフからネギつぼい野菜を取り上げる。

「だ、大丈夫!? 毒じゃないよね!？」

「めええ……」

「めえ」

シウスまで返事をした。

見ると、シウスがさつき放り投げたにんじんをばりぼりと食べていた……。

「ああ!? だ、駄目だつてば!!」

私は大慌てでネギつぼい野菜を放り投げて、シウスからにんじを取り上げる。

「めえ……」

「めええ」

「ああ!? チャフが箱に入って手当たり次第食べてる!!」

ああああ!? どうしたらいいの!?

チャフが箱の中で食い散らかして、シウスが外に落ちてる物を食べてるし、私の手にはにんじんがあるし……。

うん？

くんくん……。

これ、やっぱりにんじんだよね？

シウスが食べた反対側を袖でごしごしと拭く。

そして、食べてみる……。

むしやむしや……。

「うーん？」

ぱりぱり……。

「うーん……」

ぐぐり。

「おいしいー！」

甘いにんじんって感じ、味はいちごに近いかもしれない！

「めえー！」

「めええー！」

「こらあ！ シウス、チャフ！ そんなに食べないで！」

こうして、にんじんの争奪戦がはじまった。

「がるるー！」

私は四つんばいになって、頭でシウスとチャフを押しつける。

「めええー！」

「めえー！」

でも、シウスとチャフも抵抗してくる。

「あ、このネギっぱいのも食べれるよね？」

チャフも食べてたし。

袖でございしてからガリッと噛んでみる。

「うん、ネギだ……」

「めええ」

と、チャフが私の反対側からネギを食べだした……。

「ああ！ これは私のー！」

うん？ こっちのじゃがいもっぱいのは、やっぱりじゃがいも？

くんくん。

でも、なんか、泥だらけで食べる気にならない。

「ぽいっつ」

私はじゃがいもっぱいのを投げ捨てる。

「ナビー……」

誰かの声でした。

入り口のほうを見ると、そこには和泉と夏目が立っていた。

そして、和泉が私の投げ捨てたじゃがいもを拾い上げる……。

「ナビーって、本当にかわいいらしい性格してるよね……」

「うん、無邪気って言ってるのか、天然って言ってるのかかわからないけど……」

なんか、二人が笑うのを我慢しているような複雑な表情をしている……。

や、やばい、もしかして、見られていたの？

「い、いつからそこに……う？」

自分でも顔が熱くなってるのがわかる、もう耳まで熱い。

「結構前から……」

「うん、声をかけ辛くて……」

ああ!?! ち、違うの、そうじゃないから!!

私はただ、ナビーフィユリナと云う少女を演じていただけで、本当は最強の傭兵、パーフェクトソルジャー武地京哉なのよ!!

敵兵からは、発すれば雷神の如く、動けば風神の如く、戦う様は鬼神の如し、って、恐れられるほどのクールな男なのよ!!

戦場の魔神なんだから!! あら、かわいい戦場の魔神さんね、なんて、言わないでよ!!

勘違いしないでよね、超強いんだから!!

そう叫びそうになるのをぐっと堪える……。

第13話 パシファイカ・マニファイカス

ヒンデンブルク広場の発見、とりわけ刃物類の発見は私たちの生活に劇的な変化をもたらした。

とにかく、その刃物の切れ味は凄まじく、一刀のもとに大木を切り倒す。

短剣、斧、鉋なども非常に便利で、特に斧はノミのような使い方もでき、それで石を削ったり、真つ二つに綺麗に割る事もできる。

「よし、慎重にやれ」

薪拾いの呪縛から解放された管理班のメンバーは日々様々な物を作っていた。

私はルビコン川のほりどで釣り糸を垂れながら、そんな彼らの作業を見守る。

「いいぞ、心棒を通せ」

大きな木造の車輪状の物体……。

そう、水車だ。

「位置はいいな？ 固定するぞ」

で、この水車は何に使うかと云うと、水汲みだ。

水車にはいくつものバケツが取り付けられていて、水車が回転する事によって、水を汲み、そして、その水を水路に流し込む。

水路は別に地面を掘った手の込んだものではなく、木製の細い水路、よく屋根の端に付いている、のきどいみみたいな造りになっている。それを長く繋げてラグナロク広場まで通してある。

「よし、いいな、水を流すぞ」

と、川の一部をせき止めていた石をどかして水を流し込む。

すると、ゆっくりと水車が回りだす……。

そして、装着されているバケツが水を汲み、それを水路に水を流し込む……。

「おお、うまくいった！」

「これで、水汲みの重労働から解放されるぞ！」

「やったあ、うれしい！」

見学に来ていた生活班の人たちからも歓声があがる。

それは、そうだよね、管理班の薪拾いと生活班の水汲みが二大重労働だったからね、その二つがなくなるのは大きい。

「次はお風呂だよね、楽しみ！」

「念願の湯船が作れるぜ！」

「露天風呂は男のロマンだよな、いったいどんなドラマが待ち受けているんだろうか……」

次はお風呂を作るらしい。

さつきも説明した通り、斧を使って石を割る事ができる。

その平らな石材を使ってお風呂を作る計画が進行中だ。

私はみんなの喜ぶ姿を横目に釣竿をちよんちよんとする。

「ああ、またエサだけ取られたあ……」

と、糸を引き上げる。

釣り針には返しがついてないから、タイミングを合わせてひっかけないと釣れない。

「慣れだよ、ナビー、そのうちうまく釣れるようになるさ」

と、秋葉蒼が魚を釣り上げながら笑う。

私は虫の幼虫を掴んで釣り針に刺して、また川の中に放り込む。

しかし、もう二週間かあ、ここに来てから……。

長いようであつという間だったよね。

きらきら光る水面をみながら、しみじみ感慨にふける。

「水路の水漏れがない確認しながら帰るぞ」

「うっす」

と、管理班の人たちや見学に来ていた生活班の人たちがルビコン川から撤収していく。

「それじゃ、俺たちも帰ろうか、もう十分だ」

和泉が魚の入ったバケツを覗き込みながら言う。

「うん、そうだね、今日、明日分くらいは大丈夫そう、それにもうすぐお昼ごはんだしね」

私もバケツを覗き込んで答える。

だいたい、バケツいっぱいを二つ、50匹くらい釣れた。

「お腹すいたあ！」

と、背伸びをする。

「じゃあ、俺が持つよ」

佐野が荷物持ちを勝手出してくれる。

「帰ろう！」

「「おう！」」

と、私は先頭をきって歩きだす。

ちなみに、夏目とか雨宮とか笹雪は野菜の収穫に行っていて、午前中は別行動だった。

私は水路、幅10センチくらいの木をくりぬいて作った水路を見ながらラグナロク広場に向かう。

綺麗な水がさらさらと静かに流れていく、その流れる速さと一緒の速度で歩く。

そして、私たちは昼食を済ませ、午後の作業に取り掛る。

今度は、夏目たち女子三人を連れてヒンデンブルク広場に行く。

あつちには、葉の広い草じゃなくて、背の高い、葉の細い、イネ科の植物のような草が大量に生えていたからだ。

それを刈ってきて、天日干しして、仔ヤギたちのごはんやベッドにする。

一方、和泉たち、狩猟班の男子三人は懲りずに狩に行くらしい。

今日こそ成功させてやるって息巻いているけど、まだ一回も狩に成功したことがないんだよね。

まっ、健闘を祈るよ。

それから私たちは、たつぷり二時間ほど稲刈りして、それを紐でまとめてラグナロク広場に持ち帰る。

それを日当りの良さそうな場所に置いて並べる。

「ふう、重労働……」

額の汗をハンカチでぺたぺたと拭き、腰をどんと叩く。

「こっちはひっくり返すね」

と、夏目たちが昨日の分の干し草をひっくり返す。

「ねえ、なんかみんな集まってるよっ。」

私と同じように腰をとんとんとしながら、笹雪めぐみが広場の中央を見ながら言う。

「なにになに？」

確かに、中央の一番大きな焚き火の側にみんなが集まっていた。

「私たちも行ってみよ」

「うん、そうね」

と、私たちもその人だかりのところに行く。

そこは、管理班、女性班、生活班のほぼ全員がいて、そして、その輪の真ん中には参謀班の5人がいる。

「この本の名前は、パシフィカ・マニフィカス」

と、参謀班の班長、人見彰吾が一冊の本を見せながら話している。

「もちろん、そう発音するかどうかは不明だが、便宜上、そう代読する事にした……」

それは、豪華な革の装丁の分厚い本……。

どこかで、見た事ある本だなあ、と、思ったら、あれだ、以前、私がヒンデンプルク広場で発見した本だ。

「解読した、と云うのには、まだ語弊があるかもしれないが、ある程度は理解した……」

そこで言葉を切り、銀縁メガネを人差し指でなおす。

「で、何が書いてあるんだ？」

「もったいぶるなよ、人見……」

「はやく、はやく」

と、なかなか次を話さない人見に業を煮やす。

「ふっ、俺もまだ半信半疑だからな……」

いつも無表情の彼が珍しくにやりと笑う。

「な、なんだ？」

「まずいことが書かれているのか？」

「はやくしてくれよ、仕事が詰まってんだよ、なんなんだよ、それは……」

と、さらに彼をせかす。

「みんな、驚かないで聞いてくれ、こいつは魔法書だ、それも魔法の教

本だ」

自信満々に彼が言い放った……。

「は？」

「へ？」

「うん、なんて？」

ああ、人見がおかしくなった……。

山本、東園寺に続いて三人目の犠牲者が出てしまったか……。

「めえ……」

「めえ……」

あ、シウスとチャフが私を呼んでいる、いかなくちや。

まつ、彼なら大丈夫でしょう、頭いいし。

私はシウスとチャフを見て、両手で大きく手を振る。

「ふつ、信じられないか……、確かにな、俺もにわかには信じ難いからな、だが、これは紛れもない事実だ……、いいだろう、見せやろう……」

とか言ってるんだけど、この人……。

でも、ちよつと興味を惹かれて彼を見る。

すると、彼は人差し指を立てる。

そして、

「ハサヴィユヒト、星霧、星影、死色の空……」

と、呪文のようなものを唱えはじめた……。

「メンファイティティイス、森羅万象、創造の光よ、その身を焼き尽くせ、
天元金鎖リムロスチオウの円方灼炎」

その瞬間、人見の指先から炎が噴き出した。

「うおお!」

「う、うそだろお!」

「きやああ!!」

「あち、あちつ!!」

指先から噴き出した炎の柱は1メートル、2メートルと伸びていく。
肌が痛いほどの熱を感じる。

そして、彼が空を掴むように手を握ると、その高くの伸びた炎は綺麗さっぱり消えてなくなる……。

「どうだ、本物だろう…？」
人見が目を細めて酷薄に笑う。

第14話 ピップとスカークとアルフレッド

ま、魔法……？

みんなも啞然としている……。

「手品か何かか？」

「流石に信じられないだろ」

「人を騙すなよ、人見？」

今まで黙って見ていた管理班のメンバーが口々に言う。

「虚偽の場合、おまえでもペナルティを与える」

そして、最後に東園寺が口を開く。

「それに、疑問も残る。なぜ、呪文の一部が日本語なんだ？」

と、付け加える。

そう言えば、そうだよな、確かに日本語だったよね？

本物の魔法だったら、そのパシフィカ・マニフィカスって本に書かれている言葉での呪文になるはず。

「俺を疑うなよ、東園寺……、今説明してやる。この本に書かれている言葉の発音など、何一つわかってはいない……。だが、形式はわかっている。神の名と、その神に捧げる祈りの意味さえ一致していれば、魔法は発動する、それが日本語だろうと、なんだろうとな。神の名さえ、それを指す名詞ならば発音はなんでもいい……。そうだな、もう一つみせてやろう、南条、今度はおまえがやってみろ」

「おーけー、人見」

参謀班の一人、南条大河が手にした空き缶を持って、近くにある切り株を利用して作った椅子のもとに向かう。

「危ないから、少し離れていてくれ」

と、空き缶を切り株の上に置きながら言う。

みんなが切り株から距離を取る。

そして、南条も数メートルほど離れる。

「じゃあ、いくぜ……」

と、空き缶に向かって手の平を広げて向ける。

「クロルト、闇夜に沈む小さな闇よ……」

静かに詠唱が始まる……。

「アデユラン、広がり覆え、慟哭の虚栄、闇夜を飲み込め、魔王降臨」
詠唱が終わる……。

アルタス・トレス

「う、うん？」

「何も起きないぞ……」

「失敗か？」

みんなの言う通り、空き缶に変化はない。

「まあ、見てろって……」

と、南条が言い、その開いた手を閉じる、まるで何かを握りつぶすかのように。

その瞬間、空き缶はぐしゃりつぶれる……。

南条は尚もぐいぐいと何度も手を握る。

そのたびに空き缶はつぶされていき、最後には小さなボールのようになっってしまう……。

「ま、マジかよ……」

「やつぱり、本物か？」

「なんだよ、これ、すげえ……」

生活班の安達が切り株から小さな玉を取りつぶやく。

それは、本当に小さな銀色の玉、空き缶が直径1センチくらいのアルミ玉になった……。

「どうだ、東園寺、本物だろ？」

人見が微かに笑う。

「ああ、だいたい理解した。それで、おまえらは全員魔法を使えるのか？」

「ふっ、察しがいいな、東園寺、今の我々なら、おまえら全員まとめて1秒以内に殺せる」

「本気か、人見？ なら、試してみるか？」

東園寺以外の管理班のメンバーがロングソードの柄に手をかける。

「ふっ、冗談だ、東園寺、おまえらもやめておけ、死ぬぞ」

人見は空を見上げながら笑う。

「ああ、気分がいい……、世界のすべてを手に入れた気分だ……」

空を見上げながら、両腕を広げて目を瞑る。

そして、腕を降ろして、あらためて東園寺を見る。

「と、優越感に浸るのも、ここまでだな……、心配するな、東園寺、魔法は全員で共有する、参謀班でもその意見で一致している、全員が魔法を扱えたほうが生き残る確率は高くなるからな。これからは毎日、魔法の授業を開催する、手の空いた者は極力参加してくれ、俺からは以上だ、いいな、東園寺?」

東園寺は真意を凶りかねているのか何も言わない。

「私からもひとつ」

と、綾原雫が手を挙げる。

「女子は女子で別に魔法の授業をします。魔法は攻撃的なものだけではなく、防御や治癒などもあります。なので、女子には防御、治癒、解毒の三つを優先的に学んでいって欲しい、私からは以上です」

綾原の話が終わっても、みんなが押し黙っている。

「ああ、そうだ、今回の功労者を表彰しないといけないな……」

と、人見が南条にあの本、パシフィカ・マニフィカスを手渡し、ポケットから銀色のチェーンを取り出す。

そして、私のところに歩いてくる。

「パシフィカ・マニフィカスを発見したのはキミだ……」

と、そのチェーンを広げる。

それはネックレス……。

「これはアミュレット……、魔法の加護が付与されたネックレスだ、キミが着けていてくれ……」

私の首に手を回してネックレスを着けてくれる。

「ああ、やっぱりだ、キミによく似合う……」

銀色のネックレスを手にとってみる。

ペンダントの部分がひし形になっていて、中央には赤い宝石が付いている。

うーん……。

太陽にかざしてみる……。

うーん……。

「それは、現在効果が確認されている唯一のアミュレットだ、大切にしてくれ」

「効果？」

「ああ、そうだ、身を軽くしてくれる効果が付与されている、どうだ、身体が軽くなっただろう？」

軽く？

私はその場でくるくると回ってみる。

わ、わからない……。

「うわあああああ!!」

と、そんな事を考えていると、森のほうからそんな叫び声が聞えてきた。

「た、大変だあああ!!」

森の中から槍と弓矢を持った三人組みが出てきた。

それは和泉、秋葉、佐野の狩猟班三人だった。

「あ、あれ、い、いなかったの……？」

そういえば、午後から狩に行くとか言ってたっけ……。

「な、ナビー、これ、どうしよう!？」

と、和泉が血相を変えて言う。

その手には……。

「ぴよ、ぴよ……」

「ぴよっぴい……」

「ぴよお……」

ひよこ……、黄色い、小さなひよこ……。

それも三羽……。

「あ、え、ど、どうしたの、これ……っ？」

「い、いや、ちよつと、弓の試し撃ちをしてみたんだよ、その辺を歩いていたニワトリっぽいのに、そしたら、そのニワトリが逃げて行って、それで追いかけようと思ったら、そこにこのひよこたちが残されていた」

「それで、拾ってきちゃったの……っ？」

「そう、かわいそうになっただけ!」

私はひよこを見る。

身体は黄色くてふわふわ、野球ボールくらいの大きさで、なんかまん丸。

「びよお……」

かぼそく、小さく鳴く。

「す、捨ててきなさい！ 親ひよこもまだ遠くに行っていないと思うからー！」

「いや、それが、もう一時間くらい探したんだよ！」

「いなかったんだよ！」

「うちで飼うしかないんじゃないかな……」

と、和泉だけではなく、秋葉や佐野までそう言う。

「ほら、ほらー！」

と、ひよこを一羽渡される。

私の両手の上にちよこんと乗っている……。

「びよお……」

つぶらな瞳で私を見上げる……。

「びよお……」

少し、ぷるぷるって震えている感じ……。

「びよお……」

でも、あつたかい……。

「びよお……」

えへへへ……。

こうして、私たちはひよこを三羽飼う事になった。

「それじゃあ、名前を付けようか、ね、ナビー？」

と、余韻に浸っていると、そう和泉が言い出した。

「な、名前……」

私は自分の手の平の上にいるひよここと、和泉が持っているひよこ二羽を交互に見比べながら考える。

さ、三羽か……。

昔、戦友がよく話してくれたおとぎ話の内容を思い出す。

「えっと、じゃあ、こつちが、ピップで、そつちの二羽が、スカートと

アルフレッド、つてのは、どうかな……?」

それに出てきた動物の名前だ。

あいつ、元気にやっているかな、あの世で……。

「スコットランド民謡だね? ピップがウサギでスカークがイヌ、そしてアルフレッドがヒツジ。ナビーって、英国出身だったんだ?」
と、綾原が言いやがった。

やや、やばい……、私は墜落のショックで記憶喪失になった、かわいそうな少女って云う設定だったんだ……、どど、どうしよう、ハイジャック犯だつてばれちゃう……。

「イギリス人なんだ、やっぱり、そっち系統の人だね、ナビーって」
「うん、綺麗なブロンドヘアだし、アングロサクソンで間違いないよ」
「でも、日本語はネイティブだね、日本生まれで日本育ちのイギリス人?」

などと、みんなが詮索を始める……。

駄目だ、どう取り繕えばいいんだろう、下手に何か言つてボロが出るのも怖いし……。

「う、うう、よ、よくわかんない、なんとなく頭に浮かんだだけ……」

と、必死に考えをめぐらせて、当たり障りのなさそうな事を言う。

「そう……、でも、少しずつ記憶は戻ってきているようね……」

「そうだね、頭を打つたとかじゃなくて、やっぱり、精神的な問題かもね……」

「うん、変なプレッシャーを与えずにゆっくり思い出していけばいいよ」

よかった、疑われてない……。

でも、いつまでも記憶喪失のままって云うのも不自然だね、なんか、矛盾のない私の過去を考えておかないと……。

いや、それは厳しいよ、何かの拍子で私の身分証が出てきたら、一発でうそがばれちゃうから……。

うーん、困った……。

「ぴよお……」

心配そうにピップが私の顔を見上げている。

ごめんね、ピップ、少し暗い顔をしていたかも。
「びよ、びよ」
と、私は笑顔をつくる。

第15話 露天風呂

窓から心地いい風が吹き込む……。

天気もよく、柔らかい日差しも同時に差し込む。

「約5億年前に、植物が魚や昆虫に先駆けて陸上に進出します。この時代を古生代といい……」

今はこの小さなロッジのような建物の中で授業を受けている。

「昆虫はそのあと、約5千万年後に上陸します。一方、私たちの祖先である、脊椎動物はと云うと……」

今は理科の授業中。

「なぜ、昆虫や脊椎動物が地上に進出できたかと云うと、それより先駆けて進出していた植物が劇的な進化を果たし、地上に広大な森を形成したからであって、その堆積物により……」

先生は綾原雫。

彼女には申し訳ないけど、心底興味がない……。

私は窓の外が気になってしょうがない。

ああ、シウスとかチャフとかピップたちと遊びたい……。

「こら、ナビー、ちゃんとノートをとりなさい」

と、うしろで見張っていた女性班の班長、徳永美衣子に叱られる。

「はあい……」

と、私は授業の内容をノートに書き込む。

くっ、これは絶対、女性班の陰謀だよ……。

「虫、虫……」

小学校に戻っても、授業に付いていけないように、って事らしいけど、私だって小学校くらい出てるから、まあ、中学は中退だけどき……。

「ナビー、ここままで、何か質問はある？」

「うん？ む、虫……、えっと、む、虫って、どうして、幼虫と成虫ではあんなに姿が違うんですか……？」

と、ちゃんと授業を聞いているふりをして質問する。

「いい質問ね、ナビー、それは不思議に思うよね。一般的には環境の変化に対応するため完全変態すると言われるけど、最近の研究で

は、幼虫とは卵の一種、つまり、幼虫と成虫は同じ生き物ではなく、別の生き物、動ける卵という解釈が多数派を占めてきているわ。ピップも卵から成長してあの姿になったとは考え辛いけど、卵から孵ってあの姿になったと思えば理解できるでしょ？ それと同じよ」

意味がわからない、そもそも、興味もない、心底どうでもいい……。興味があるものと言ったら、やっぱり、シウスやチャフとかあのひよこたちだよね。

あとお洋服。

私に合うサイズのお洋服がなかったから、今、福井たちに作ってもらっている、真っ赤なやつ、超楽しみ。

それと露天風呂！

ついに完成したんだよ！

今日から入れるんだよ！

「それでは、本日の授業はここまでにします……」

「はあい！ 先生、ありがとうございました！」

と、私は急いでノートや筆記用具を片付けてロッジから駆け出していく。

石畳の道は走りやすく、足を踏み出すたびにワンピーススカートのすそが風に広がる。

私は強い陽射しの中、両手を広げて全力疾走。

「お、ナビィ、今日も元気がいいな！」

「転ぶなよ！」

と、屋根の上に登って作業をしている生活班の二人、佐々木智一と安達一輝が大きな声で言う。

「大丈夫だよ！」

私も大きな声で、大きく手を振りながら答える。

それにしても、ラグナロク広場もずいぶん町らしくなってきたよね。

……。 ロッジ風の小さな木造の家が10軒ほど、それを繋ぐ石畳の道

その街並みを抜けると、牧舎と放牧場が見えてくる。

「めえ！」

「めええ！」

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「びよおー！」

と、総出で私を出迎えてくれる。

「シウス、チャフ、ピップ、スカーク、アルフレッド！ ちょっと、待つててね、先にお風呂見てくるから！」

私は彼らがいる牧柵の前を走りすぎる。

やがて、木の囲いが見えてきた。

私は迷わず、その囲いにあるドアを開いて中に入る。

「公彦！ どんな感じ!?!」

露天風呂の床は、外の石畳の道と同じ素材だけど、外のより決めの細かいタイルのような感じになっている。

で、湯船はと云うと、かなり大きい、直径3メートルくらいある、8畳間くらいの大きさ。

「ナビーフィユリナ、まだ水漏れがあるが、まあ、大丈夫だろう、今、湯を沸かしているところだ」

お湯は湯船から鉄パイプを通して、その鉄パイプの下で火を焚いて沸かす方式を取っていた。

木の囲いの外にはもくもくと立ち昇る煙が見える。

私は湯船に近づき、しゃがんでお湯に手を入れて温度を確かめる。

「冷たあい、水だよ、これ……」

たぶん20度くらい……。

「もう一時間くらい焚いているんだがな……、少し湯船が大きすぎたか……」

そう、湯船が大きい、湯船自体は数日前には完成していたけど、水を入れるのに二日ほどかかっていた……。

「だが、心配するな、あと3、4時間もすれば沸くだろう、夜には入れるぞ」

「本当に？ 嬉しいー！」

そんな感じで交互に入るの、お風呂は六日に一回と云うことになる。

その間はシャワーで我慢。

「わあー！」

かがり火の中に浮かびあがる湯船と湯煙。

「今さらだけど、脱衣所を作るの忘れてるよね」

と、笹雪がぼつりと言う。

そう言えば、そうかも……。

でも、今更そんな事言ってもしょうがない。

私は服を脱ぎはじめ、その服を囲いの上にかけていく。

「よし、一番のりー！」

と、露天風呂に向かう。

天井がないせいかわ湿度はそれほどなく、タイルも乾いていて、ひんやり冷たかった。

「ナビー、駄目よ、ちゃんと頭と身体を洗ってからね」

綾原が衣服を脱ぎながら釘を刺す……。

「うー……」

と、私は置いてある桶を手に取り、それでお湯を汲んでシャワー代わりのバケツに入れる。

速攻で洗おう。

と、私は適当に髪を洗う。

「よし！ 終りー！」

再度、湯船に向かおうとする。

「まだよ、ナビー」

「ちよつと、待って」

みんなが服を脱ぎ終わってやってきた……。

私は椅子に座らせられる。

「ちゃんとトリートメントもしないとね」

「身体も洗ってないよね、見てたんだから」

と、私の身体が泡だらけにされる……。

「い、いや、やめて……」

「せっかく綺麗な髪なんだから、ちゃんと手入れしないと駄目よ」

「ほら、じつとしてて、ナビー、洗えないから」

くすぐりたい！

「ここも汚れているよね」

「あ、や、そ、そんなとこ、触らないで！」

やばい、超楽しい、なんだ、これ。

「あ、あつ！ きゃつ……、きゃつ！」

身悶えしちやう。

「こんなものかな……」

「うん、流しちやいましょう」

と、みんながそれぞれ桶を持って私の頭からお湯をかける。

「ひっ、えうっ……、きゃつ！」

変な声がでちやう。

私は顔のお湯を手で拭って、張り付いた髪をかきわけける。

「髪の毛が背中にくっついて気持ち悪い……」

「待ってて、ナビー、タオルで巻いてあげるから」

でも、そんなものは気にしない。

「大丈夫、あとでいいよー」

と、夏目の言葉を見無視して立ち上がり湯船に向かう。

そして、湯船につま先を入れる。

そのまま円を描くようにかき回す……。

うっ……。

なんか、深そう、ちよつと怖い……。

なので、足をひっこめて、湯船の縁に腰掛ける。

「よ、よし……」

そつと、お湯の中に入る……。

うーん、湯加減はあ……、普通と言うか、身体を念入りに洗ったせ

いか、丁度よい湯加減に感じる……。

深さは、だいたい太ももの上のほうまでくる。

私はおそるおそる、お風呂の真ん中まで歩いていく。

そして、真ん中まで行き、そのまましゃがんで肩まで浸かる。

座るとお湯が口までくる……。

ぶくぶく……。

ぶくぶくぶく……。

な、なにこれ、超楽しい！

「ぶるぶるぶるう……」

ああ、お尻が浮いてきた！

私は手を平泳ぎのようにして、身体が倒れないようにする。

うわ、うわ、うわあ！

倒れる、倒れる！

それでも仰向けに倒れてしまう。

でも、そのまま足を伸ばすと、なぜか、身体がすっとお湯の中に浮く……。

「ああ……」

ぶかぶかとお湯に浮く……。

長い金髪がお湯の中を気持ちよく漂い広がる……。

「ああ……」

両手を広げてお湯に浮く……。

「ああ……、星が綺麗……」

どこまでも深い空、満点の星空……。

不思議な浮遊感……。

宇宙の中を漂っているような、そんな感覚だった。

「ああ……、信じられないくらい気持ちいい……」

なんだろうね、これ……。

そつと、目を閉じる。

「でも、幸せだなあ……」

そして、胸を満たす、多幸感……。

「な、ナビー、溺れてないよね、生きてるよね？」

と、声が出したので目を開けてみると、そこには心配そうに私を上から覗き込む夏目の姿があった。

「もちろんだよ、翼……」

彼女の頬に軽く指をはわす。

「三週間ぶりだねえ……」

「うん、凄く久しぶり」

「はあ……、生き返る……」

と、みんなも身体を洗い終わったのか、次々湯船に入ってくる。

私は体勢を元に戻してぶくぶくする。

「それでも、たった三週間よ、ここまでくるのに」

「私たちって凄いよね、もう普通に生活してるし」

「開き直っている部分も大きいよね、覚悟を決めたっていうのか……」

ぶくぶくぶく……。

「うん、もう一生お家には帰れないかもしれないね……」

「そうだね、でも、こんな綺麗な星空を見ながらお風呂に入れるんだから、それでチャラでいいよ」

「みんなには叩かれるかもしれないけど、私は毎日が充実している、毎日が発見の連続で、今はここに来てよかったときえ思っているわ」

最後の言葉は綾原雫によるものだ。

ぶくぶく……。

泡がお鼻にかかって、くすぐったい。

「発見ねえ……、アスタナ、美しくしき、流れのほとりで、慈雨にその身を任せ、癒しの精霊糸」
ミインテールレット

笹雪の指先からクモの糸みたいなのが無数に噴き出す。

「この魔法にしても、どうしてこんな事が出来るんだろう……」

彼女がしみじみと、指先から伸びた白い糸を見る。

「やめて、めぐみ、お湯が汚れる」

「大丈夫だって、ひらり」

と、笹雪が指をパチンとすると、その白い糸は消えてなくなる。

「やっぱり、ここ地球じゃないのかあ……」

「魔法が決定打だったよね」

「東園寺くんたちの持っている剣も切れ味が異常だしね」

ぶくぶくぶく……。

「ナビーちゃん、それ、絶対よだれも出てるよね？」

「だよ、ナビーのまわりになんか浮いてるし」

「ああ!? 汚いからやめて、ナビー!!」

ぶくぶくぶくぶく……。

やだ、やめない、だって、楽しいんだもん。

「いいよ、かわいいから許す」

「何それ、確かにかわいいけどさ……」

「あはっ、かわいいは正義って本当だったんだね」

と、みんなで笑いあう。

ぶくぶくぶくぶく……。

第16話 追い風

さらさらと風がそよぐ草原……。

ここ、ラグナロク広場は中央付近の開拓が進み、十軒以上の建物が立ち並んでいるけど、それ以外の場所はまだまだ花々が咲き誇り、光溢れる美しい草原がそのまま残っていた。

また、木材を大量に消費するためか、この広場は最初と比べてふた周り以上大きくなり、だいたい、直径200メートルくらいの広さにはなっていた。

そして、木を伐採したあとには、そこに陽射しが届くようになり、すぐに草花が芽吹いてくる……。

「畑、作れそうだね……」

私は芽吹いたばかりの新芽を指でつつきながらつぶやく。

そう、畑、野菜はもちろんだけど、シウスたちのごはんやベッド用のイネ科の植物をなんとかしたい。

「基本的に攻撃魔法には、レジスト・ウィント 耐風、レジスト・ファイアー 耐火、レジスト・アイス 耐冷の三つで対応するけど、それを使用する前に、シユトラゼ 追い風を入れておくと便利です」
と、そんな声が聞えてくる。

「シユトラゼ 追い風はその名の通り、ただの追い風ですが、これにはもうひとつ特徴があって、こちら側の魔法を通しやすくし、また、相手側の魔法は通しにくくするという性質を持っています」

話しているのは、参謀班の綾原と海老名の二人だ。

今は魔法の授業中。

ちなみに授業を受けているのは、生活班や狩猟班の女子たちであつて、私ではない……。

私には魔法を教えてください……。

危ないとか、なんとか言つて……。

なので、どうしても魔法を習得したい私は、こうやって、大人しく遊んでいるふりをしながら聞き耳を立ててるしかないってわけ。

それにしても魔法は本当に死活問題だ、おそらく、もう、この身体では東園寺や人見には敵わないだろう、他の連中も時間の問題だ

……。

なので、私がハイジャック犯だとばれたらあつという間に捕まってしまう……。

恐ろしい、私がハイジャック犯だとばれた、いったい、どんな拷問が待ち受けているんだろうか……。

背筋が凍り、身体をふるふるとさせる。

「うう……」

想像してしまった、なんてひどい高校生たちなんだ……。

「シュトラゼ追い風は名前こそ風ですが、一応、障壁系の魔法なので、シロスを使います、シロスはさつき言った通り、自由奔放な神様です、なので、自由に空を飛びまわるイメージで呪文を唱えましょう」

ふむふむ、メモを取りたい……。

「では、行きます。シロス、権力によらず、暴力によらず、その身を押し、シュトラゼ追い風」

と、海老名が魔法を唱えると、ふわつとした生暖かい風が草原を駆け抜ける……。

「シロス、権力によらず、暴力によらず、その身を押し、シュトラゼ追い風……」
小さく、小さく、誰に聞えないように呪文を唱える……。

そわそわと、髪が浮く感じがする……。

あれ、できた……？

「こら、ナビー、今、魔法使ったでしょ？」

うっ……。

振り向くと、そこには綾原雫が立っていた……。

「うん、魔法の起動を観測した」

と、さらにうしろの海老名までもが言う。

「う、うう……、ご、ごめんなさい、ちよつと、真似したくて、でも、何も起こらなかつたよ……？」

涙目で言い訳をする。

「そうね……、魔力は放出したけど、魔法の発動までには至らなかつたみたいね……」

と、綾原が顎に手を当てて考える。

「ナビィにも教えてあげたら？　危ない事をするとも思えないし、そもそも、防御、治癒、解毒だけで危ないも何もないと思うけど、ナビィも魔法使いたいんでしょ？」

同じ狩猟班の笹雪めぐみがそうフォローしてくれる。

「うん、魔法使いたい！」

と、私は元気よく手を挙げて言う。

「別にナビィが危ない事をしそうだから教えないわけではないのよ、めぐみ……」

「じゃあ、なんで？」

「まだ魔法による副作用の有無がわからないから。身体が成長しきっていないナビィにどんな悪影響があるからわからない、ホルモンバランスが崩れて成長が止まってしまったり、臓器にも損傷を与えるかもしれない、人格形成にも影響があるかも……、危険って云うのは、そういう意味だよ」

「ああ、なるほどね……」

「本音で言えば、みんなにも魔法は教えたくないのよ、どんな副作用があるかわからないから……、でも、全員が対等、平等、それを実現するためには全員で魔法を共有するしかない、それが私たち参謀班の行き着いた結論よ……」

「色々考えてるんだね……」

「ええ、前に人見が魔法の力を見せ付けて傲慢に振舞っていたけど、あれは、みんなに魔法の危険性を認識させて、自分も魔法を覚えないと命が危ないと思わせるための彼なりの芝居よ、本気であんな事を考えていたら真つ先に私がぶん殴っていたところよ」

と、綾原がクスリと笑う。

実は綾原って冷たいように見えて案外優しいんだよねえ……。

それにしても、私の身体を気遣つての事だから、これ以上魔法を教えてって無理強いするのも悪いよね、困った……。

まあ、でも、最低限の防御魔法は学んだ、相手の攻撃魔法さえ防げれば、あとは私の無敵のCCCでどうとでもなる。

ちなみに、CCCとはクロス・クォーター・コンバットの略で、簡

単に言えば、軍隊式の近接格闘技のこと……。

「うわあああああ!!」

と、そんな事を考えていると、森のほうからそんな叫び声が聞えてきた。

「た、大変だあああ!!」

うん、もう嫌な予感しかしない。

見ると、やつぱり、森の中から弓や槍を持った三人組み、狩猟班の和泉、秋葉、佐野の三人が走り出てきた。

「ハル、今度はなんの赤ちゃんを拾ってきたの……?」

「いや、違うんだ、ナビィ、これを見てくれ!!」

と、和泉が血相を変えて言う。

「うん、うーん、うん?」

彼の後ろにいる二人、秋葉と佐野が何かを肩に担いでいる……。

「ああ!? そ、それは!」

「そう! 捕れたんだよ、獲物が、はじめて!!」

なんと、秋葉と佐野が木の棒に吊るした猪みたいな動物を肩に担いでいたの!!

「し、信じられない……」

てつきり、和泉たちは赤ちゃんキラーだとばかり思っていたよ。

「う、うそ、本当に捕ってきちゃったの?」

「なにこれ、なんていう動物!」

「ちよ、ちよつと待つて、まだ心の準備が……」

と、女子のみんなも興味津々で、秋葉と佐野の担ぐ猪みたいな動物の周りに集まってくる。

「いや、わからない、たぶん猪だと思う」

「それか、豚だね」

秋葉と佐野が猪みたいな動物を地面に下ろしながら答える。

「うわあ……、すごい、生々しい……」

「私、こんなのはじめて見たよ……」

「こ、これを調理するの……? 匂いも、なんか……」

確かに彼女たちの言う通り、傷口が生々しくて、また匂いも酷いも

のだった……。

「や、やるしかないわよ、前にもナビーに馬鹿にされたし、大人のすごいところを見せなくちゃ……」

と、生活班の班長、福井麻美が猪みたいな動物の耳をめぐりながら震えた声で言う。

「うん、そうね、麻美、やってやろうじゃないの！」

「不安だけど、私たちも遅しくなったし、このくらい出来るはず」

「そうよ、今夜はBBQよ！」

「「おう!!」」

と、生活班の女子たちがみんなで猪みたいな動物を調理室に運ぼうとする。

「じゃあ、私たちは詰め物用のネギとか香菜の採集に行ってくるね」

「あ、そうだね、それは必要ね」

「うん、やっちゃいましょう」

狩猟班の女子、笹雪、雨宮、夏目の三人も採集セットを取りに自分たちのロッジに戻る。

私も狩猟班なので、彼女たちのあとを追う。

どうやら、今夜はBBQになるみたい。

第17話 お祭り

夜はすぐに訪れる。

太陽は地平の彼方に沈み、それと同時に綺麗な星々が姿をあらわす。

森は黒々しくそこに佇み、何か不気味な印象を私に与えていた。

そんな森の中で唯一、光に溢れる場所がここラグナロク広場。

「いやあ、これで脚気の心配もなくなるなあ」

「運動量も多いし、ちゃんとお肉も食べないと脚気になるよねえ」

「ビタミンB1欠乏症って、どこの江戸時代よ」

と、楽しいな会話も聞えてくる。

パチパチ、パチパチと薪の弾ける音と肉の焼ける香ばしい匂いが広場を満たす。

「ナビー、お皿を用意して、たぶん足りなくなると思うから」

「はあい！」

私たち、狩猟班や生活班の女子たちは忙しくBBQの準備に追われている。

「まだ気が早いかもしれないけど、お塩とかコシヨウの残りが心配になるよね」

「うん、そうだね、でも、もっとたくさんあるはずなんだよ、見つけてないだけで」

「そっかなあ？ 国際線ならまだしも、国内線でそんなに積んでるかなあ？」

それは微妙なところだけど、通常、塩とコシヨウは座席分用意しているのが普通だと思う。

テーブルを見ると、塩とコシヨウのビンが20個くらいずつ置いてある。

おそらく、この数倍はあるはず……。

「今度注意して見ておくか……」

小さくつぶやく。

「よし、それじゃあ、切り分けるぞ、全員皿を持って並べ」

と、焚き火のほうから東園寺の声がする。

仕込みは生活班の女子たちでやったけど、実際に焼き上げる作業は管理班が行っていた。

「もういいみたい、行こー」

「やったあ、楽しみ！」

「ナビーも行こー！」

私たちもお皿を持って焚き火のほうに駆けていく。

焚き火の前では、すでに人だかりが出来ていて、みんなが皿を持って順番待ちをしていた。

「ああ……、出遅れたあ……」

「私たちの分もあるよね……？」

と、私たちも列の一番最後に並ぶ。

「大丈夫、大丈夫、あんなに食べ切れないよ」

「だ、だといいんだけど……」

そんな話をしていると、すぐに私たちの順番がくる。

猪の丸焼きは焚き火から引き上げられて、今は木の棒に吊るされていた。

ちようど、あれ、ケバブみたいな感じになっている。

その丸焼きの前には、東園寺をはじめとした管理班の6人が立っており、手には切れ味鋭いロングソードが握られている。

そのロングソードを使って、猪の丸焼きを削ぐようにして肉を切つて、それぞれの皿に取り分けていく。

「わあ、ありがとう」

と、私は目を輝かせて、お肉の乗った皿を覗き込む。

ちゃんと、仕込んでおいたネギや香菜もたつぷりと乗せてくれる。

「お祭りみたいだなあ、どこで食べよっかなあ……」

意気揚々と手頃な場所を探す。

「ナビー、こっち、こっちー」

と、和泉たちが大きく手を振っている。

狩猟班のみんなもいるので、私もそっちに行ってみる。

そして、夏目の隣に座り、お皿の内容を吟味する。

まず、ネギいっぱい……。

次に、香菜、ハーブっぽいやつ、これもいっぱい。

そして、最後に香菜の下に隠れているお肉。

薄くばら肉のように、スライスされたものが5枚ほど……。

うーん、うーん……。

脂身と焦げ目が絶妙で食欲をそそる……。

とりあえず、お肉をひと口かじってみる。

うっ……。

脂っこいよ……。

あと、味が薄くて、なんか生臭い……。

でも、ちよつと生臭いけど、香菜と一緒に食べると、あら不思議、

さっぱりとして、あとに引くようなジューシーさだけが残る。

むしゃ、むしゃ、うま、うま……。

「ごはん欲しいな……」

「パンでもいいかも……」

「その前に焼肉のタレくれ……」

と、和泉、秋葉、佐野が話している。

うん、確かにね、味薄いよね……。

私はポケットに入っていた小瓶を取り出して、お肉に振りかける

……。

そう、前に拾ったお塩だ。

そして、ひと口かじる。

おお！ おいしさが十倍以上になった！

しようがない、みんなのお肉にもお塩を振りかけてやろう。

「ハル、これこれ」

と、まず、和泉のお肉に振りかける。

「ナビー？ なにこれ？」

「いいから、いいから、食べてみて」

と、笑顔で食べるように催促する。

「おお、すげえ、うまい！」

「でしょ！ 次々、蒼と獺人も！」

私は大喜びでみんなのお肉にお塩を振りかけていく。

「いいねえ！」

「本格的にごはんが欲しくなるね！」

と、みんなも大喜び。

「ナビー、ちゃんと調理室に戻しておくのよ、調味料は貴重なんだから……」

「もう、ひらりも、口うるさいんだから、いいじゃん、おいしいんだから」

雨宮の小言に笹雪がフォローしてくれる。

「しかし、今日は会心の出来だったよな、ハル？」

「ああ、そうだな、俺と蒼で獲物を追い込んで、佐野が待ち伏せしてとどめを刺す、これが一番いいのかもな」

「佐野の投槍も凄かったよな？ ものすげえ音がしたぜ、ぶうおおおとおお、つてよ」

「いやあ、あれは人見さんに教えてもらった魔法のおかげだよ」

と、和泉たちが狩の感想を言い合う。

「でも、出来すぎた感も否めないな、毎日あんな感じだといいいんだけど」

「毎日は無理でも、特別な日、そうだな、誰かの誕生日とかそんな日に気合入れて狩るようにすればいいさ、今はな」

「誕生日か……、そういうえば、ナビー、キミの誕生日はいつなの？」

「うん？ 七月十日だよ」

と、和泉が聞いて来たので思わず即答してしまう……。

やばい、私は記憶喪失中って設定だったんだ……。

というか、七月十日はナビーフィユリナの誕生日じゃなくて、武地京哉の誕生日だよ。

「七月十日？ もう再来週じゃん？」

うわっ、笹雪が話しに加わってきた。

「そうなんだ？ 七月十日でいくつになるの？ 11歳？」

「う、うん……、11歳だよ、翼……」

ど、どうしよう、すくまずい……。

「じゃあさ、誕生会でもやろうぜ、すげえの捕ってくるからさ、な、ハル？」

「そうだな、蒼、そうしよう、班長会議で提案しておくよ」

えっと、旅客機に乗り込んだとき、何か身元を証明出来るもの持ってきてたっけ……。

め、免許証？ それが見つかったら、なんでハイジャック犯と同じ誕生日なんだよ、ってなって、さらに、ナビーフイユリナの本当の誕生日がわかって、やっぱりおまえかあ!? ってなって、それで、みんなから拷問されて、そして、殺されちゃうんだ……。

うわああああ!?

どど、ど、どうしよう!?

「ただ、た、誕生日なんて、どうでもいいよ、そ、それより、みんなの誕生会やろう……?」

私は激しく動揺しながら言う。

「高二にもなって恥ずかしいだろ、ナビーのだけでいいよ」

「そうそう、他は晩飯を豪華にするだけでいい」

誕生会なんてやったら、武地京哉の誕生日がみんなの脳に刻みつけられてしまう!!

「いやあ、楽しみだなあ、七月十日」

「七月十日かあ、七月十日、七月十日、忘れないようにしないと……」

そんなに武地京哉の誕生日を連呼しないで!!

私は思わず頭を抱える。

「全員、お疲れ、そのまま聞いてくれ」

と、途方に暮れていると、そんな東園寺の声が聞こえてくる。

「我々がここに来てから一ヶ月が過ぎた。手探りの生活、悪戦苦闘の日々の中で、皆、本当によくやってくれた、心から礼を言う、ありがとう」

彼が深々と頭を下げる。

「そして、これからの事だが……、いくら待てども救助は来ない、ここがどこだかもわからない、そもそもここが地球だという確証もない……、だから、救助隊は来ないものとする、これからは俺たちだけで

生きていく。だが、誤解するな、帰る事を諦めたわけではない、ここに来られたのだから、帰る方法もあるはずだ、俺は必ずその方法を見つけて出す、全員が生きてまた日本の地を踏めるように全力を尽くす。だから、その日まで俺に力を貸してくれ、頼む」

と、また彼は深々と頭を下げる。

彼の赤い髪が焚き火の明かりに照らされて今はオレンジ色に見える。

「なに言ってるんだよ、東園寺、あんたがいなかったら、今頃みんな死んでたよ」

生活班の山本新一が口を開く。

「頼むもなにも、俺たちはあんたを信じて付いて行くしかないんだよ、そっぴりだよな、みんな？」

「そっぴりだ、そっぴりだ、俺は東園寺を信じるぜ」

「人見くんも前に言ってたよね、お互いに協力しあうのが、生き残るための最善策って……」

と、山本の言葉にみんなが口々に言い合う。

なんて言うか、いいリーダーにいい部下だよね……、と、しみじみ考えながら、たっぷりのハーブと一緒にお肉を頬張る。

第18話 ファーストコンタクト

パチパチ、パチパチと焚き木が弾ける音がする……。

「それでは、そうだな……、全員からコメントを貰いたいところだが、時間も無い……、各班の班長、それぞれなにか一言ずつコメントをくれ、これからの豊富でも、目標でも、なんでもいい前向きなのを頼む、まずは参謀班の人見からだ」

と、何やら学級会みたいなのがはじまる。

「前向きなものか……」

参謀班の班長、人見彰吾が銀縁メガネを人差し指で直しながら、焚き火の前、東園寺の隣に歩いていく。

「知つての通り、俺たちには魔法がある……」

と、彼が話し始める。

「魔法には攻撃魔法、防御魔法、補助魔法、回復魔法があるのは周知の事実だが、俺たち参謀班の見解では、まだまだこれだけではない、他にも隠された魔法があるはずだという意見で一致している。で、どんな魔法があるかだが、さつき述べた四種の魔法以外で考えられるのは一つしかない、つまり移動魔法だ、俺たち参謀班はここを突破口として元の世界に戻る方法を模索している」

「おお……」

「なんか、本格的……」

「希望が持てるよね……」

と、みんなが感心して言う。

「必ず家に帰してやる、と、言いたいところだが、まだ不確定要素が多すぎる。今は期待して待っていてくれ、と云う表現に止めておく、俺からは以上だ……」

なるほどねえ、移動魔法ねえ、あればいいねえ、そういうの……、と、期待に胸を膨らませながら、たっぷりのハーブと一緒に肉を頼張る。

「ありがとう、人見、期待している。それでは、次は生活班、福井、頼む」

「あ、はい……」

と、生活班の班長、福井麻美が返事をして席を立つ。

「ハル……、気付いたか……?」

福井が焚き火の側に歩いていくのを目で追っていると、秋葉が和泉に小声でそう話すのが聞えてきた。

「ああ……、風が変わった……、鳥の鳴き声も消えた……」

和泉の言葉に背筋が凍りつく。

「ええっと、では、私たち、生活班はですね……」

福井が話しはじめる。

「参謀班とは違い……、ええっと、違います、もちろん、元の世界には帰りたいです、ですから、参謀班には大いに期待しています。ですが、私たち生活班は別のアプローチをしたいと思っています。それは、ここでの生活をより良いものにしようという試みです」

「何か来るな……、どう思う、ハル……?」

「新月か……、不吉だな……」

福井がスピーチをする間も秋葉と和泉のひそひそ話しが続く……。

背筋が凍った理由、それは、こいつら二人が私より異変に気付くのが早かったから。

私はパークエクトソルジャーよ……。

小動物の動き、鳥の鳴き声、風に揺らされる枝葉の音、それらすべてが敵の接近を教えてくれる……、そんなものは兵士の常識よ……。

では、なぜ、私は気付けなかったの……、こんな身体だから……?」

違う、索敵能力は以前と変わらない、こいつら二人が異常なんだ、私は見誤っていた。

「ここで普通に生活を送り、普通に笑って、普通に安心して生きていく、以前と変らない人生を歩む……、みんなが普通に恋をして、普通に結ばれて、やがては子供が生まれて、この広場に子供たちの元気な笑い声がこだまする。私はそうね……、5人くらい赤ちゃん欲しいかな……、えっと、でも、その前に旦那様よね……、うーん、駄目、目移りしちやつて、ひとりを選べない……、あーん、どうしよう……、つ

て、結局、恋ばなかよ、ふざけんなあ!!」

と、福井は小枝を焚き火に投げ入れる……。

「相変わらず、キレツキレだな、福井さんって……」

「尊敬するよな、ホント……」

「途中、なに言ってるかわらなかつたけど、なんか、勢いが凄かった……」

みんなが感心して言う。

「ありがとう、福井、おまえの熱意は受け取った、俺の第三夫人くらいにはしてやってもいいぞ」

「一夫多妻制か！ しかも第三夫人かよ！」

と、東園寺がボケて福井がツツコミを入れると、どつと笑いが巻き起こる。

ほのぼのとした、学級会そのものだね……。
だけど……。

「それでは、次……、狩猟班、和泉、頼む」

和泉春月が指名される。

「ああ……」

と、彼がゆっくりと立ち上がる。

「ハル……?」

「大丈夫だ、蒼、俺たちがいる……」

和泉が軽く手を上げて秋葉を制止させ、それから佐野にも視線を送る。

すると、佐野も小さくうなづく。

和泉はそのまま焚き火のほうへ歩いていく。

そして、東園寺の隣で立ち止まる。

「東園寺……」

「なんだ……?」

と、東園寺が聞き返した瞬間に和泉が彼を突き飛ばす。

そして、その直後に風きり音。

その風きり音の正体は弓矢、さつきまで東園寺がいた場所を高速で通過していった。

「狩猟班!!」

和泉のその声と同時に、周囲から無数の風きり音が聞えてくる。

「ナビー……」

と、私は夏目に抱きしめられて、そのまま地面に伏せられてしまう。ヒュン、ヒュン、と云う無数の風きり音が頭の上から聞える……。風きり音の他にも、カツン、カツン、と矢が何か突き刺さる音もする。

私は夏目の肩口から周囲を確認しようと顔をだす。

他のみんなも悲鳴を上げながらも、私たちと同じように、頭を庇いながら地面に伏せて身を守ろうとしていた。

でも、ゆらゆらと影も動いている……。

何人かが地面に伏せないで走り回っていたのだ。

カツン、カツン、と音がする。

その人影たちが何かで矢を受けている……。

「秋葉……、佐野……、笹雪に、雨宮も……」

そう、狩猟班の4人が手にした木の皿で次々と矢を受けていた……。

信じられない、こいつら……。

みんなに当りそうな矢を全部その手にした皿で受けて、今やそれぞれの木は剣山のようになっていた。

「参謀班、防衛陣敷くぞ、媒体照射いけ!!」

人見彰吾の叫び声が聞える。

「はい!」

「媒体照射いくぞ! ソプラナ、柔和なる方よ、旅路の果てに舞い降りた大地の支配者よ!」

「媒体照射!」

彼の叫びに呼応して、参謀班の面々が呪文を唱える。

すると、彼らの身体が光、そして、その光が吸い込まれるように人見の身体を中心に渦を巻くように集まっていく。

「アンシヤル・アシユル・アレクト、七層光輝の鉄槌、赤き聖衣を纏いし深淵の主……」

人見の魔法詠唱がはじまる……。

彼を中心にして渦を巻いていた白い煙のような光が彼の身体に吸い込まれて消えていく。

「エア、エンリタ、エシルス、舞い降りろ、死の女神、フォール・ザ・アルテミス光輝の流星陣」
そして、詠唱が終わる。

一気に人見の身体から眩い光がほとぼしり、それと同時に上空から赤い光がまっすぐに落ちてきて、それが弾けてドーム状に広がっていく。

やがて、放たれる弓矢がおさまり、あたりが静かになる。

「すまなかつたな、東園寺……」

と、和泉が倒れている東園寺に手を差し出す。

「いや、いい、助かった、礼を言う」

彼もそう言い、和泉の手を取り立ち上がる。

「もう大丈夫そうだよ、翼……」

「う、うん……」

やっと、夏目が私の身体を解放してくれる。

「な、なんなのいったい……」

「矢？ 弓矢？ なんで……？」

「ちよつと、待てよ、俺たち攻撃されてるのか？」

他のみんなもおおそるおそる周囲を警戒しながら立ち上がる。

「東園寺……、防衛陣が攻撃を受けている、時期に突破されるだろう、どうする……？」

人見が静かに問いかける。

「こんなものはヒンデンブルクの時から予想済みだ、この世界には何らかの文明人が住んでいる。そいつらが友好的ならば交渉もするが、今の先制攻撃には明らかかな殺意があった。看過できない、応戦する」
「だろうな……」

人見がメガネを直しながら微かに笑う。

「管理班、武器を取れ、戦うぞ!!」

東園寺が腰のロングソードを引抜き、それを天にかざして叫ぶ。

「「「おおお!!」」」

と、それに呼応して、他の管理班の5人も同じようにロングソードを天にかざして雄叫びをあげる。

「参謀班、俺と南条、青山は管理班のサポートに入る、綾原と海老名はここに残り、引き続き防衛陣の維持に努めてくれ」

「おう」

「わかったわ」

人見の言葉に参謀班の面々が返事をする。

「俺たちもいくよ、東園寺……」

と、和泉が歩いてくる。

見ると、和泉と秋葉が狩用の弓を持ち、そのうしろ、大男の佐野もこれまた狩用の大きな槍を握りしめている。

「ああ、わかった、来てくれ、管理班の6人、参謀班の3人、そして、狩猟班の3人、この12人で戦う、いくぞ」

「「おう」」

そして、彼らは歩きだし、戦場に向かう……。

第19話 急襲

しかし、切り替え早いよね、こいつらって……。

私は感心して彼らを見送る。

「ちよ、ちよちよ、ちよつと待ってよ!」

あ、切り替えの遅いのもいた。

「た、戦うってどういう事よ!? あれはいつたいたいなんなの、説明してよ!!」

女性班の班長、ポニーテールの徳永美衣子だ。

その彼女が東園寺に詰め寄りながら言う。

「見ての通りだ、徳永。俺たちは襲撃を受けている、現地人からな。それを今から撃退しに行く」

「げ、現地人? そ、それで戦うの? 危ないから、怪我したらどうするの、それに、人間なら情報を聞き出すチャンスよ、ここは交渉して、話し合いに持つていったほうが得策だわ」

「前から言っているように、俺はギャンブルはしない、徳永、おまえの案はリスクーだ」

「り、リスクー? 何を言っているの、戦うほうがリスクーだわ」

「交渉を持ち掛け、相手が聞く耳を持たず、そのまま先制攻撃を加えられたらひとたまりもない、ここは素直に応戦したほうが無難だ」

これは、東園寺の言い分のほうが正しいね、サーチ&デストロイが戦闘の基本よ。

「だ、だからって……」

「もう決めた事だ、徳永……、そこをどけ、いくぞ」

と、東園寺が徳永の肩を押して、道を開けさせる。

「わ、わかりました……、ぐ、ご武運を……」

彼女が小さく言うと、東園寺も小さくうなずく。

そして、そのまま戦場に向かう……。

徳永が胸に手をあて、大きく深呼吸をして、

「よ、よし、それじゃあ、怪我している人はいない? 女性班、みんなを見てまわって!」

と、大きな声で言う。

「そ、そうね、じつとしているのもなんだし、後片付けもしちゃいましょう」

生活班の福井も追隨して言う。

「唯、防衛陣の張り具合がいまいちね、レディクル媒体照射をもう二、三発入れましょう」

「了解、いくね、ソプラナ、柔和なる方よ、旅路の果てに舞い降りた大地の支配者よ、レディクル媒体照射」

こつちは、参謀班の綾原と海老名。

「あ、ごめん、みんな、ちよつと、いい……?」
と、そんなかぼそい声が聞こえてくる。

「ど、どうしたの、美咲?」

それは、女性班の鹿島かしまみさき美咲だった。

その彼女が腕を押さえている。

「あ、あのね……、なんかね、手に刺さってたから、そ、それをね、抜いたらね……」

「ちよ、ちよつと、美咲!」

「な、なんかね、血が止まらなくなっちゃった……」

彼女がそのまま地面にへたり込む。

そして、その押さえた腕、二の腕の上のほうからみるみる服が赤くなっていく。

「し、止血、はやく!!」

私は血相を変えて、彼女の元に走っていく。

「美咲、見せて!」

「な、ナビー、どうしよう……」

彼女がそつと手を放す。

すると、血が湧き出てきて、それがしたたり落ちていく。

「大丈夫、動脈はやられてない……」

動脈に穴があいたら、こんなものじゃない、噴水みたいに血が噴き出してくる。

私は傷口と、その上あたりを強く両手で押さえる。

「大丈夫、これは静脈の怪我よ、これで血は止まるはず」

「な、ナビー、ナビー……」

美咲が不安そうな表情をする。

「ナビー、そのまま押さえていて……。アスタナ、美しくしき、流れのほとりで、慈雨にその身を任せ、癒しの精霊糸」

すぐに駆けつけてくれた笹雪が呪文を唱える。

彼女の指先から蜘蛛の糸のようなものが無数に飛びだし、それを人差し指を使って器用に巻いていく、ちようどわたあめを作る感じ。

「みんなも押さえて、ほら、徳永も」

「う、うん……」

他に集まった女子たちも、笹雪の指示で鹿島の傷口を押さえる。

「ナビー、そつと、手を放して、そつとよ」

「うん」

と、私は言われた通りに美咲の傷口からゆっくりと手を放す。

笹雪は私の手の隙間にわたあめみたいになった指を差し込んで傷口を押さえる。

「もう放してもいいよ、ナビー……」

私は解放されて、ほう、と、大きく息を吐き出す。

そして、手の平を見ると、血がべったり……。

「ナビーは手を洗ってきなさい、あとは私たちが処置するから」

「うん、あとはよろしくね」

と、私は立ち上がる。

「めぐみ、そのまま、傷口を閉じるわよ。ラセンカ、精霊の森に眠る悠久の追憶よ、トウパ、審判の時に雨粒が草木を潤す、天の後の地知」

綾原が呪文を唱える。

私は血の着いた手をぶらぶらとさせながら、お湯のある場所、調理室に向かおうとする。

「ナビー？ 一人で大丈夫？」

と、夏目が鹿島の腕を押さえながら言ってくる。

「大丈夫だよ、翼、すぐだから、美咲についていて」

私は笑顔を作って返事を返す。

そして、そのまま調理室に向かう。

それにしても、あいつら本当に戦っているのかな？

人見とか南条もいるし、大丈夫だとは思うけど、でも、ちよつと心配だな……。

私はごしごしとお湯で手を洗いながら考える。

その前に鹿島の怪我也心配だよね……。

「あ、そうだ、お湯を持って行ってあげよう、血で汚れていると思うから」

と、木製の棚から、銀製のボウルを取り出す。

「よし、お湯を入れてつと……」

ポットからボウルにお湯を注ぎこむ……。

「めえ……」

そんな声が聞こえた気がした。

「シウス……う？」

私は顔を上げて周囲を見渡す。

でも、誰もいない、もちろん、シウスも。

牧舎まで100メートルくらいあるから、シウスたちの声は聞こえないはずなだけだ……。

「めえ……」

また聞えた、間違いなくシウスの声だ。

それも、私を呼ぶ声。

お湯を注ぎ込む手を止める。

そして、無意識に走りだす。

なんか、すごく、はらはらする、不安な感じ……。

もう全力疾走、無我夢中で走る。

絶対、シウスたちに何かあった。

なんか、知らないけど、不安で涙が込み上げてきた。

私は袖で涙を拭きながら全力で走る。

「はあ、はあ、シウス、チャフ……、ピップ、スカーク、アルフレッド……」

暗闇の中に牧舎見えてきた、星明りに照らされてうっすらと浮かび

上がっている。

「び、ちゃって」

「わ、ぱーす」

声がする、やっぱり誰かいる。

私は牧柵に手をつけて飛び越え、そのまま牧舎に向かう。

「でつど、ろーす、うっかろって」

「あ、はっぶ、ぱーす」

聞いた事もない言語、現地人か……、失敗した、どうして、東園寺たちに、牧舎を見てきてって言わなかったの……。

「あ、はっぶ」

「あ、はっぶ、ぷーん」

「めえ……」

シウスの声もする。

そして、牧舎の入り口が見えるところまでくる。

牧舎の前には5つほどの人影、そのひとりは何かを持っている……。

「めえ……」

それは仔ヤギ、シウスだ。

そいつがシウスの足を掴んで宙吊りにして振り回している。

「こ、んの、やろう……」

一瞬で頭に血が登った。

私はそいつ目掛けて一気に走る。

「アポトレス、水晶の波紋、水晶の砂紋、風を纏え、パピロンレイ静寂の風盾」

同時に防御魔法を一発入れる。

別にやつらの攻撃が怖くて、防御魔法をかけたんじゃない、私の拳や関節を守る為だ。

そして、飛ぶ。

「こんのやろう、シウスから手を放しやがれえ!!」

やつの顔面に飛び蹴りをくらわしてやった。

「わ、ぱーす!」

「び、ろって!」

私に蹴られたやつは盛大にひっくり返り、積み上げていた藁の山に頭から突っ込む。

そして、シウスは放り出されて、これまた藁の山に着地する。

「めえ……、めえ……」

と、シウスは小さく鳴いて、一生懸命私の側に来ようとする。

でも、うまく歩けない、足を引きずるようによちよち歩く……。

「け、怪我したの、シウス!？」

私はシウスに駆け寄って、しゃんがんで足元を覗き込む。

怪我はないようだけど、捻挫とかしたのかもしれない、もしかしたら、骨折かも……。

「でっど、ろーすー!」

「ほ、るつく、あ、はっす、すーん!」

「あ、はーぷ!」

と、現地人たちが藁の山に頭を突っ込んでるやつを助けようとしている。

「ごめんね、シウス、今は治療してあげられないの、あいつらをやっつけないといけないから……」

と、私はシウスを抱えて牧舎の入り口まで運んで、そこで放し中に入るようにとおしりを押してやる。

「めえ……」

「めええ……」

「びよ、びよ……」

「びよっぴい……」

「びよお……」

シウスと入れ替わるように他の子たちが出てくる……。

「だ、だめ、隠れてて!」

と、私はみんなを制止させる。

「でっど、ろーすー!」

「はっぷ、でっど、ろーすー!」

「でっど、ろーすー!」

と、現地人たちが大声を出している。

言葉の意味がわからなくても、口調がすごく敵愾心剥き出しだつて事くらいはわかる……。

私は立ち上がり、やつらに向き直る。

ギリースーツにも似た、短冊状の飾りの付いた民族衣装。

顔は黒の塗料でフェイスペイントをしている、見えにくいだが、濃いグリーン塗料な感じもする。

「でっど、ろーすー！」

と、やつらが手にした槍を構える……。

私は目を細めてやつらを見据える……。

「生まれてはじめてだよ、こんなに頭にきたのは……！」

よくもやってくれたな、シウスを……。

やつらに向かって足を踏み出す。

第20話 それでもナビーは諦めない

ゆつくりと、やつらの元に向かう……。

「なあ、おまえら、なんなんだよ、その顔は、迷彩のつもりか？ ああ、そうか小顔効果をねらってるんだな？ 笑わせんなよ……」

口の端で笑ってしまう……。

やつらは、槍で突くような仕草で威嚇しながら、じりじりと後退していく。

「俺が怖いのか？ そうだろうなあ……、俺と戦場で対峙して生き残ったやつはいねえからなあ……」

私は構わず無造作に距離を詰めていく。

そして、ポケットから小瓶、塩の入った小瓶を取り出し、一瞬それに視線を送ってから、空高く放り投げる。

なあ、今、塩を見ただろ？

「動けば風神の如く……」

私は姿勢を低くして走りだす。

親指を人差し指と中指で握るような形にして第二関節を突き出す、いわゆる、二本拳と云う握り方をする。

そして、一気に走り距離を詰め、やつのかめかみ目掛けて二本拳を突き刺す。

「戦う様は魔神の如し」

めきり、そんな音を立てながら頭蓋が砕け、耳から血を噴き出し仰向けに倒れていく。

「で、でつど、ろーすー！」

と、隣のやつが槍を突き出してくる。

私はそれをしゃがんで交し、そいつの足を払う。

「で、でつど……」

倒れた現地人は放した槍をすぐに拾おうとする。

「やらせるかよ」

私はやつの伸ばした腕、手首と肘を掴み、そのまま内側にひねりながら倒れ込む。

そして、肩を外したあとは前に倒れる勢いを利用して前転するように立ち上がる。

「あ、わーす！…で、でっど、ろーす！」
肩を外されたやつが地面を転がりまわって叫んでいる。

私はその横に転がっている槍をつま先で蹴り上げて、それを空中で掴み、そのまま渾身の力で三人目に投げつける。

「ぶっる、さっか!？」

その槍は現地人の脇腹あたりに突き刺さる。

次、四人目……。

「わ、ぱーす！…わ、ぱーす！」

「あ？…なんだ？」

四人目がなんか両手でバイバイするような感じで手を振っているぞ？

「なに？…トイレに行ったあとちゃんと手を洗ったよ、ねえ、みてみて、偉いでしょ？…なんだ、それ、第二次世界大戦かよ、ネタが古いんだよ、てめえ」

呆れて、半笑いになる。

「わ、ぱーす！…わ、ぱーす！」

「わ、ぱーす、ぷーん！」

と、五人目も加わって手を振る……。

そうこうするうちに、怪我をしたやつらに肩を貸したり、抱きかかえたりしてその場から逃げ出そうとする。

「どうする……う？」

殺すか……？…まあ、最初にこめかみを貫いたやつ、シウスに怪我をさせたやつはもう死んでいると思うけどな。

やつらが森に向かって必死に逃げていく。

「まあいい、見逃してやるか……、俺も随分、丸くなったもんだぜ……」

お、俺……、じゃない、私だ、私、私……。

頭の中でも、ちゃんとナビーフイユリナしてないと、とっさの時にでちゃうんだよね、あぶな、あぶない、気をつけないと……。

「つて、そんな事より、シウス！」

私は急いで牧舎に走っていく。
牧舎の入り口で照明用に吊るされている懐中電灯のスイッチを入
れる。

「めええ……」

「びよ、びよ……」

「びよっぴい……」

「びよお……」

と、明かりを点けるとみんなが私のところにやってくる。

「チャフ、ピップ、スカーク、アルフレッド……、あれ、シウスは？」

「めえ……」

声のするほうを見ると、シウスが干草のベッドの上にしゃがんで、
私のことをじっと見つめていた。

「シウス」

私はすぐにシウスに駆け寄って、その頭にそつと手を添える。

「シウス、大丈夫？」

その顔を覗き込む。

「めえ……」

「足痛いの……？」

そつと、痛めている足を触る。

「めえ……」

うーん、わからない……。

「あ、そうだ！ どこかに湿布あったはず！ とつてくるね！」

と、私は勢いよく立ち上がる。

「ナビー！」

その時、牧舎の入り口からそんな声が聞こえてきた。

「うん？」

見ると、そこには夏目をはじめ、綾原とか女子数人に立っていた。

「もう、ナビー、心配したんだから、黙って行かないの、馬鹿」

と、夏目が駆け寄ってきて私を抱きしめて言う。

「う、ごめんなさい……」

「しかも、魔法を使ったでしょ？ このあたりであなたの魔法を観測

した……、何があつたの？」

綾原が周囲を警戒しながら尋ねてくる。

「えっと、それは……、現地人がシウスを捕まえて連れて行くこうとしたから、えっと、だから、魔法を使って撃退しようと思つて、そして、あいつらびびつくりして逃げてつた……」

と、なんとか辻褄が合うように説明する。

あ、ちよつと待て、外にあいつらの血が大量に零れているはず、朝になつたら虚がばれちゃうよ……。

早起きして掃除しておかないと……。

「そう……、彼ら、魔法が使えないのね……」

綾原が顎のあたりに手をあてて考え込む。

たぶんね、魔法は一切使わなかつた。

おろらく、あのヒンデンブルク広場の人たちとは違う人種、文明水準も非常に低い、服装などからもそれがうかがえる。

「そ、それより、シウスが投げ飛ばされて怪我したの！」

と、私はもがいて夏目の腕から逃れようとする。

「シウスが？」

「そう！ 足怪我したみたいなの！」

私は夏目の手を逃れて、またしゃがんでシウスの足元を覗き込む。

「ごん、ごん！」

必死に助けを求める。

「ごんごん？」

と、綾原もしゃがんでシウスを見る。

「ごん、ごん！」

何度もシウスの足を指す。

「ごんね……、ラセンカ、精霊の森に眠る悠久の追憶よ、トウパ、審判の時に雨粒が草木を潤す、天の後の地知」

綾原の指がボウつとうつすらと光る。

それをそつとシウスの怪我をした足に添える。

「ど、どう、雫？」

「そうね……、軽い捻挫だとは思うけど、なんとも言えないわ、少し様

「いやあ、爽快だった、魔法打ち放題だったよな」

と、男子たちが盛り上がっている。

「もう、いい加減にしてよ、こっちはどれだけ心配したと思っているのよ。あと怪我している人はいない？　もう、大丈夫？」

徳永たちが怪我した人たちの治療にあたっている。

「大丈夫、大丈夫、怪我といっても、転んだり、枝を引っ掛けたりしただけだから」

「そう、そう、あんなやつらにやられるやつなんかいねえよ」

まあね、あの現地人たちって相当弱かったからね。

「それで、あいつらは何者だったの？」

そう話を切り出したのは、参謀班の綾原雫だった。

「不明だ」

東園寺がコップの水を飲みながら短く答える。

「やっぱり、今回は愚作だったと思う。もし相手が魔法を使えたら、我々の被害はこんなものではなかった。人見、彼ら、現地人をどう見る？」

と、綾原がちよつと怒った口調で言う。

「東園寺と同じ感想しかないが……」

人見が少しうつむく。

「ただの偵察……、やつらのその後の行動から考えると、今日は威力偵察だけだったと云う可能性が極めて高い……」

威力偵察とは相手の力を試すために、軽く戦闘してみてすぐに撤退する偵察の事だ。

「そう、それで、また来そう？」

「それこそ不明だ。ただ、知っての通り、ラグナロクの周囲数十キロ圏内に集落はない、つまり、やつらはそれより遠くからやってきたと云う事だ。そこから考えると、またすぐに次もやってくると云う事は考え辛い」

「そう……、それで……」

「詮索は明日以降だ。今日はもう休め、今夜は引き続き俺たち管理班で見回りを行う」

と、東園寺が議論の打ち切りを宣言する。

「あ、公彦、シウスたちも、牧舎のほうも見回りして、お願い」
私は彼にお願いする。

「もちろんだ、最初からそのつもりだ」

と、彼は私を一瞥して答える。

こうして私たちは現地人の再襲撃を警戒しながら眠りにつく事に
した。

第21話 覚悟を

あの現地人の襲撃から何事もなく三日が過ぎた。

幸いシウスの怪我も大した事なく、今も元気に草をはんでいる。

「めえー！」

「めええー！」

と、チャフと一緒に草を食べては、ごろんと転がって空に足を向ける。

「めえええええ!!！」

私も真似をして、草の上に寝転がって空を見上げる。

真つ青な空と、ふわふわとしたまばらな雲……。

「いつも天気いいよね、ここ……」

ぱらぱらと降ることはあっても、まとまった雨は今まで一度もなかった。

私は顔の横にある、小さなお花、鈴のような形をした白いお花を一輪摘む。

それを口の上、鼻の下あたりに置く。

「すー、はー、すー、はー……、いい匂い……、本当に平和だねえ……」

ぼんやりと空を流れるわた雲を眺める。

「めえー！」

「めえええー！」

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「びよー！」

シウスたちがじゃれてくる。

「もう、ごらあ」

と、私は横にローリングしながら彼らの攻撃を避ける。

「びよおー！ びよおー！」

すると、アルフレッドが先回りして、ぱたぱたと私の顔に乗ってくる。

「ご、ごらあー！」

手でガード。

「もう、怒ったぞ！ これでどうだ！」

両腕を伸ばして、連続ローリング！

「めえー！」

「めええー！」

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「びよおー！」

ぎゃあ！ みんな追っかけてくる！ 加速!!

ぐるぐる、ぐるぐる、と牧柵の中を何周もする。

「きゃああああ、目が回るう」

もう超楽しい！

「レージス、光を閉ざした虚無の剣、弾けて砕け、剣気破弾!!」

と、遊んでいたら、牧柵のむからそんなかけ声が聞えてきた。

「アスシオン、煌く光、花より美しく、風を纏え、希釈の風剣!!」

見ると、管理班の6人が剣の稽古をしていた。

ガキン、ガキン、とかやってる。

私はうつぶせのまま、一番下の横棒に顎を乗せて、その様子を見守る。

現地人の襲来以来剣の稽古に熱心なんだよね。

「うおおおお!!」

東園寺がその大きなロングソードを振り下ろす。

「はあ!!」

それを鷹丸が受け流す。

「甘い!!」

と、東園寺が受け流された剣の柄で鷹丸の胸を突く。

「うお!!」

鷹丸が数歩よろける。

そんな感じで稽古が続く……。

「いい事なんだか、悪い事なんだか……」

私は口の中でつぶやく。

「一番はやっぱり東園寺だね……。体格もそうだけど、筋力が他とは全然違う。次いで、その彼の相手をしている鷹丸つてところかな……」東園寺に勝つ自信は今の私にはない……。鷹丸もやってみないとわからない……。他は、まあ、余裕だろうけど……。

でも、その東園寺にしても実戦になれば、対抗策はいくらでもある、生き残るのは容易だと思う……。

問題はあいつら……。

私は立ち上がって、牧柵の反対側に行く。

「それじゃあ、投げるよ!!」

狩猟班の佐野が木の板を振っている。

「おお、出来るだけ高く投げてくれー」

「今度は負けないぜ、ハル!」

佐野から50メートルほど離れた場所に和泉と秋葉がいる。

二人は弓を構えている。

「いくよ!!」

と、佐野がブーメランの要領で木の板を空高く放り投げる。

木の板は高く、高く舞い上がる……。

「勝負だ、ハル」

「おう、蒼」

と、秋葉が先に矢を放ち、続いてすぐに和泉が矢を放つ。

どうやら、早撃ちの勝負しているようだった。

秋葉の矢はまっすぐに木の板目掛けて飛んで行く。

しかし、和泉の矢は上ではなく、平行に地面の草をかすめるように飛んで行く……。

「お、ハル、ミスったか!」

「いや、狙い通りだよ、蒼……」

「よーし! いったあ、ど真ん中だ!!」

秋葉の矢は正確に木の板目掛けて突き進む。

「ハザード」

和泉がなんか、二本指を立てて、下からくんってやる。

すると、地面すれすれを飛んでいた彼の矢が急上昇に転じる……。

そう、ここは地下室、現地人の襲撃の翌日から急ピッチで作った避難所だ。

「入りましょう……」

キイイ、と音を立てて扉が開く、

中は薄暗く非常に簡素なもの、5メートル四方くらいだろうか……、壁や天井は柱で補強されているだけで、ほとんどの箇所は土が剥き出しになっていた。

ちようど、炭鉱のトンネルみたいな感じ。

床も木の板が敷いてあるだけで、なんかぶよぶよしている……。

「ここは女子専用になります」

みんなが室内に入ったのを確認してから綾原が口を開く。

「急いで作ったから適当だけどね」

徳永が自嘲気味に笑いながら、剥き出しの土壁を触りながら言う。

「基本的にここには物は置きません、最低限の水だけ用意しておきます」

綾原が説明をはじめ。

「誤解しないでね、現地人が攻めて来ても、ここに立て籠もるつもりはないから……」

みんなが暗い顔をしてうつむく。

その表情を見て察する。

ああ、そうか、そういう事か……。

「ここに来るのは男子たちが全滅した時だけ、彼らが全滅したら、私たちも長くは生きられない、立て籠もっても意味ないから……」

徳永たち、女性班の3人が箱に入った木の棒をみんなに見せる。

木の棒は先が鋭く削ってあって杭のようになっている。

「刃物は貴重だから、ここに置いておくのはこれ……」

箱の中には徳永が持つのと同じような杭が何本も入っている。

「扉を閉めても、そう長くは持たないと思うから、ここに来る事が決まったら、その時点で覚悟を決めてね」

「ここは女子たちの自害用の地下室……」。

「了解……、ここに来る事のないよう祈るよ……」

「そうね……、でも、ここがあつたら、ちよつと安心出来るかも……」
「うん、いいね、いいアイデアだよ……」

「私たちは運命共同体だからね、男子たちがみんな死んだら、私たちも一緒に行かないとね……」

悲壮感が漂う。

「こう立てて、上から乗るように喉を突く、希釈パビロニイシルの風剣を入れておくと、楽に逝けると思います……」

綾原が使い方の説明をして、それをみんなが真剣に聞いている。
なんとなく、胸が張り裂けそうになる……。

第22話 ルビコン川にて

それにしても、自害用ね……。

まだ高校生なのに、覚悟がすごいよね……。

ちよぽん、と、ルビコン川に釣り糸を垂れながら昨日の事を考える。

川面を駆け抜けてきた風が私の額にあたり前髪が風に広がる……。

それと同時に陽の光を受けた長い金髪がきらきらと輝き、視界を覆う……。

私は髪を手で押さえて風がおさまるのを待ってから髪を整えて耳にかける。

「陽射しがあつたかい……」

それにしても、ここの季節ってどうなってるんだろ？

日本のカレンダーで言えば、今は六月下旬で初夏にあたるけど、こそも一緒なのかな？

と、私は川沿いの濃いみろり色の若葉が茂る広葉樹を見ながらぼんやり考える。

「あーん……、またエサだけ取られたあ……」

と、釣り糸を引き上げる。

そして、エサ入れの幼虫をひとつ掴んで、針に刺してからまた川に投げ入れる。

「でも、ナビーも随分うまくなったじゃん」

と、私と同じように、隣で釣りをしている秋葉蒼に声をかけられる。

「何匹釣れた？」

「うーん、十匹くらい？」

私はバケツを覗き込みながら答える。

「上出来、上出来」

と、彼はまた大きな魚を釣り上げる。

ちつくしよう、なんで、こいつ、こんなに釣りがうまいのよ……。

私はじつと水面を睨みつけてチャンスをうかがう。

ちなみに、今ルビコン川で釣りをしているのは、私と秋葉の二人だけ。

他の狩猟班のメンバーは、和泉と佐野が狩、夏目と笹雪と雨宮は野菜とかの収穫に行っている。

で、釣りの得意な秋葉はルビコン川で漁をしているというわけだ。私はその秋葉のおもり。

あの現地人の襲撃以来、ラグナロク広場の外での単独行動は禁止になったからね。

「ねえ、ナビー?」

と、秋葉にじり寄ってきた。

「うん?」

「その、ここで聞くのもなんだけどさ……」

彼の顔を近くに見える。

色素が薄いのか、染めているのかわからないけど、さらさらの茶色の髪が風にそよいでいる。

整った目鼻立ち、シャープな顎のライン、瞳も太陽のせいだろうか、うすい茶色でなにかすごく優しい印象を私に与える。

「うん?」

私は首を傾げる。

「あのさ、ナビー、俺の事、好き?」

くっそ……。

さすが秋葉だ、私の笑いのつぼを心得ている……。

「うん……、大好きだよ……」

でも、この程度ではまだ笑わない。

「本当に? みんなに同じ事言ってる?」

くっそ、やられる……。

「本当よ、みんなには言ってるよ、蒼にだけだよ」

まだだ、まだ我慢するのよ、ナビー……。

「本当かなあ……、信じられないなあ……」

「うーん、じゃあ、どうすれば信じてくれるの?」

「そうだなあ……」

と、秋葉が遠く見ながら髪をかきあげる。

そして、向き直り私の目を見つめる……。

「じゃあさ……、みんなの前で裸になってさ、私はメス豚です、秋葉くんの奴隷です、つて言ったら信じてあげるよ」

う、うそでしょ、こいつ!?

あ、思い出した、前に笹雪が秋葉が同級生にエロ同人誌みたいな事させて、学校に来られないようにしたつて言つてた!

この事か!?

あと、なんだっけ? ゲテモノ秋葉とか呼んでた!

「出来るよね、ナビー? 本当に俺の事が好きならささ?」

流し目で言いやがった!

こんの、ゲテモノ野郎!!

「そんな事、できるわけないでしょ! このお!」

と、私は腕をぐるぐるまわして秋葉をポカポカと叩いてやる。

「ははは、やめてくれ、ナビー、冗談だつてば」

彼は笑いながら大袈裟に顔を庇う。

絶対うそだ!

「このお! このお!」

ポカポカと叩き続ける。

「いたい、いたい、やめて、やめて、ははは」

と、秋葉が立ち上がつて逃げ出した。

逃がさん!

私も立ち上がつて彼を追いかける。

「このお! このお!」

「ははは、まいった、まいった、ナビーは強いなあ、ははは」

秋葉は私の攻撃を楽しそうにひよいひよい避けていく。

でも、楽しんでいるとこ悪いんだけど……。

「うおう!?!」

脇腹に強烈な一撃を叩き込んでやった。

「かつ、くつ!?!」

秋葉が両腕でお腹を押さえながら数歩よろめく。

痛いでしょう? 魔力も込みなんだから当然痛いはずだよねえ。

拳に魔力を込める。

これは魔法を禁止されている私だからこそ気付けた魔力の特性……。

よし！ 呪文を唱えるぞ！ って、思つて一文字目を口にしようとした瞬間になぜか、拳に魔力が集約される。

そして、そこで詠唱に入らなくても、魔力は消えてなくならない……。

しかも、これは厳密には魔法ではないので、魔法、魔力に敏感な綾原、海老名あたりにも気付かれない。

当然、秋葉クラスならば、私が魔法を使ったなんて夢にも思わない……。

「な、なんで、うつくう……」

よろよろ、よろよろ、と、その辺を彷徨っている。

滑稽だね、秋葉、油断したんでしょ？ 現地人の襲撃を警戒して、魔法障壁《イージス》を張っていたみたいだけど、そんなものは簡単にぶち破れるから……。

「あ、蒼、だ、大丈夫、ど、どうしたの？」

私は心配したフリをして彼に近づく。

「い、いや、な、なんか、みぞおちに入った、みたいだ……」

と、秋葉が何か言っているうちに、私は彼の足を引っ掛けて、そのまま肩を押してやる。

「うわっ、うわあああ!?!」

彼が腕をぐるぐる回しながらルビコン川に倒れていく。

バシャーン、と、盛大な水しぶきがあがる。

「う、うそ、うそだろ、今、わざと、やらな、かったか？」

と、水の中でもがきながら言っている。

「そんなわけないでしょ！ あはっ、えっと、ほら、これに掴まって、蒼！」

と、私は釣竿を差し出しながら言う。

もう駄目、笑えてくる、限界……。

「え、ちよつと、待て、今笑ってなかったか!?!」

「何を言っているの、蒼、それより早く、風邪引くよ!?!」

「お、おう……」

と、秋葉が私の差し出した釣竿の先を掴む。掴んだ瞬間、力を入れるその瞬間に釣竿を放してやる。バシヤーン、と、盛大にふっ飛んでいった。

もう超楽しい！

「わ、わぎとだ、絶対にわぎとだ……」

秋葉が両手で水と顔に張り付いた髪を拭う。

うん、でも、良い実験にはなった……。

彼、秋葉蒼は単純な戦闘能力で言えば、今の私より遥かに上。

でも、戦闘経験は私より遥かに下、全く負ける気がしない、たとえば、彼が今の百倍強くなったとしても、いくらでも手玉に取れる。

ああ、なんか、安心したなあ……、この調子だと、和泉も余裕っぽいなあ……、ああ、よかった、よかった……。

「ほら、蒼……、遊びは終り、早く上がってきて、風邪引くよ……」

と、私がかがんで秋葉に手を差し出す。

「お、おう……」

彼が私の手を握る……。

その瞬間、私は川の石目掛けて飛ぶ。

当然、秋葉はまたもや、バシヤーン、と、盛大にひっくりかえる。

私はスタツ、と、石の上に舞い降りる。

「あははっ、手を握った瞬間にわかるんだから、私を水の中に引きずり込もうとしたでしょ？」

川面を走る風が白いワンピーススカートのすそをひらひらとさせる。

「くそお！ くそお！ 今日なんか悔しいぞ！ このお！ このお！」

あ、秋葉が反撃に出た。

川の水をばしやばしやとして、思いつき私に水をかけてきた！

「きゃ、きゃ、やめ、やめ、ひっ！」

冷たいあ！

でも、しぶきが太陽の光を反射してきらきらと光って、とても綺麗

……。

「このお！ このお！」

尚も私に水をかけ続ける……。

「ひーん！ もう、やめて、降参、ごめんなさい、謝るから、もうびしよびしよだよ！」

でも、超楽しい！

「だめだ、ゆるさん！」

「ひいひい！ 蒼が怒った！」

と、私は川に点在する石を足場にして逃げ回る。

「まてえ！」

秋葉がばしやばしやと追いかけてくる！

「ひいひい、許してえ！」

と、私たちはそれからたつぷり一時間ほど追いかけてつこを楽しんだ……。

第23話 ウエルロット

「な、ナビー、どうしたの、びしょ濡れじゃない!？」

と、ニンジンなどの野菜を洗っていた夏目が大きな声を出す。

「翼あ……、寒いよお……」

私は泣きそうな顔で彼女にところまで歩いていく。

「ど、どうしたの、ちよつと待ってて、今タオル取ってくるから!」

と、夏目が走り出していく。

「あんたら、どうしたの、二人して? まさか川に落ちたんじゃないでしようね?」

夏目と一緒に野菜を洗っていた笹雪が私と秋葉を交互に見ながら尋ねてくる。

「い、いや、まあ、そのまさか……」

秋葉が困ったような、はにかんだような笑い方をして答える。

「たく、何やってるのよ、夏だからいいようなものの、これが冬だったら大変な事になるよ」

「ご、ごめん……」

と、彼が素直に謝る。

「ナビー、おいで」

すぐに夏目が帰ってきた。

手にはまっしろな大きなタオル。

「はあい……」

と、夏目が広げたタオルに飛び込む。

そして、そのままくるまれて、頭からごしごしと拭かれていく。

「あったかあい……」

「ほら、じつとしてて、ナビー」

「はあい……」

彼女が私の長い金髪をタオルで挟むようにして丁寧に拭いていくてくれる。

ああ、幸せだなあ、なんか……。

私はタオルに顔をうずめて大きく深呼吸をする。

「お風呂に入れば一番いいんだけど、まだ沸いてないよね？」

「うん、いつも通り、夕方までかかると思うよ」

そうだった、今日は露天風呂の日だった、超楽しみ！

「じゃあ、俺は釣った魚置いてくるね、あと着替えも」

と、秋葉が調理室に向かう。

「ナビーも着替えてらっしゃい、風邪引くよ」

一通り拭き終わってから笹雪にそう言われた。

「そうね、着替えてきたほうがいいよ、ナビー」

夏目もそれに同意する。

「はあい」

しようがないので、着替えてくる事にする。

私はタオルを羽織ったまま、自分のロッジに向かう。

着替えかあ……、実は二着しかないんだよね、服……。

私はロッジの扉を開けて中に入る。

中は何も無い、部屋の隅に畳んである毛布類があるだけ。

そして、壁には夏目や笹雪、雨宮たちの洋服や学校の制服がかけてある……。

そうそう、ここは狩猟班女子4人の部屋になる。

一番はしつこに私の服にかけてある……。

とりあえず、もぞもぞとワンピースを脱ぎ捨てる。

で、下着も交換っと。

そして、壁にかけてある服をとり、ハンガーをぽいっと投げ捨てる。

「こ、これか……」

私に手にしたのは真っ赤なお洋服……。

そう、福井たちが作ってくれた服だ……。

それを頭からかぶって着てみる。

「うーん……」

ひらひらの沢山ついた真っ赤なお洋服……。

まあ、それはいいんだけど、なぜか、胸パッドが付いてるんだよね、

これ……。

「着心地がなんか……」

私は走ったときに、風が服の中を通って、ふわっと襟元から出てくのが好きなんだよね、そう、いつも着ている白いワンピースみたい

に。
だから、いつも両手を広げて風を受けて走るの。

まっ、しょうがない、乾くまで我慢しよ。

「よしー！」

と、私は夏目のタオルを持って、ロッジをあとにする。

「翼あー！」

私はタオルをぐるぐる回して走っていく。

「お、きたきた」

「おかえりなさい、ナビー」

「似合ってるじゃん、やっぱり」

と、狩猟班の女子三人が迎えてくれる。

「いいね、かわいいよ、ナビー」

「おっきい……」

「お姫様みたいね」

みんなが私を見て感想を言い合う。

ふふふ……。

「うふふふ……」

私は上機嫌でその場でくるくると回ってみせる。

ひらひらがいつぱいのスカートが綺麗に広がる。

「えへへへ……」

今度は反対回転！

長い金髪がうずを巻くような感じについてくる。

「なんなんだろうね、このかわいさって……」

「見た目はもちろんだけど、ナビーって、性格や仕草が抜群にかわいいんだよね」

「わかる、それ、ホント、かわいさが尋常じゃない……」

ふふふ、なにしろ私は純心無垢、天真爛漫、ウイットに富んだ明るい優しい女の子だから。

でも、誤解しないでよね、そういう設定なんだからね！

本当はパーフェクトソルジャーなんだからね！

「うわあああああ!!」

と、そんな事を考えていると、森のほうからそんな叫び声が聞えてきた。

「うおおおおおお!!」

あれ、いつもと違う。

見ると、森のほうから弓と槍を持った二人組みが駆け出てくる。

そう、それは狩猟班の二人、和泉と佐野だった……、あ、あれ、秋葉は？

まっ、いつか……。

「な、ナビー！ 大変だああああ!!」

と、和泉が血相を変えて叫ぶ。

「うん？ なに、どうしたの？」

また、どうせいつものでしょ……、今度はなんなのよ……、と、私は少し呆れ顔になる。

「な、ナビー、これ、これ!!」

和泉が口をぱくぱくさせながら、佐野が抱えている物体を指さす。

「だから、なによ、もう……」

うんざりしながら、佐野に視線を向ける……。

うーん……、うーん……、うーん……。

「うん……、赤ちゃんだね……」

結構大きいね……。

真っ白で、そうね……、シウスやチャフより相当大きいね……。

つぶらな黒い瞳はおんなじ、耳がぴくん、ぴくんとして、とつてもかわいらしい……。

でも、これ、馬よね、お馬さんに見える……。

でも、さすがに、和泉たちでも……。

私は何度もその赤ちゃんを見る……。

「って、やっぱり、仔馬じゃねえか!」

やば、びつくりしすぎて、素が出ちゃった……。

「そ、そうなんだよ！ 仔馬なんだよ！ 大物狙おうとして、その辺を

歩いてきた馬を狙ったら、狙いが外れてダツシユで逃げていったんだよ！ そしたら、そのあとにはこの仔馬が取り残されていて！！」

うそだ、絶対うそだ。

「そ、それで、拾ってきちやったの……？」

「そう、かわいそうになつて！」

うーん……、うーん……、うーん……、うーん……。

何を言つても無駄な展開だ……。

「ほらあ！ ほらあ！」

と、私は背中を押されて、佐野の持つ仔馬の前に連れていかれる。

「ぶるるう……」

じつと仔馬が私を見つめる……。

「ほら、撫でてみて、ナビー」

「う、うん……」

そつと、面長な顔に手を添える……。

「ぶるるう……」

思ったよりも硬い、でも、毛並みはふわふわとして柔らかい……。

「ぶるるう……」

あ、最初はちよつと冷たかったけど、じんわりとあつたかくなつてきた……。

「ぶるるう……」

「どうしたの？」

優しく微笑んで顔を傾ける。

「ぶるるう……」

「大丈夫、大丈夫、怖くないよ」

なでなでする……。

いいなあ、こういうの……。

「それじゃ、名前つけよつか、ね、ナビー？」

と、和泉が私の顔を覗き込みながら言う。

名前かあ……。

「佐野、降ろしてやって」

「うい」

佐野が仔馬を地面に降ろす。
すると、仔馬はふらふらとよろける。

「ああ……」

と、私は仔馬の身体を支える。

あ、案外小さい。

体高、背中までの高さは1メートルもない、そして、顔の位置は私よりもかなり低く、たぶん120センチくらいしかない。

これ、馬……？

ロバとかポニーじゃないの……？

と、そんな事を考えていると、仔馬がじりじり、じりじり、と、後退りしていく。

「うん？」

そして、10メートルくらい後退ると、前足で地面をかくような仕事をして……。

「ああ!？」

私に勢いよく突進してきた!

なんでえ!?

あ! 赤いお洋服に反応したのか!

この子は牛だ!

「きゃっ!」

と、顔を庇おうとした瞬間、仔馬は走る速度をゆるめ、私の手前で歩く感じになって、コツンと、私のお腹のあたりに頭突きをする……。

全然痛くない……。

「ぶるるうー!」

そして、また仔馬はじりじりと後退っていく。

10メートルくらい離れると、前足で地面をかいてから、また突進してくる……。

そして、私の手前でゆっくりになって、またコツン、と……。

「ぶるるうー!」

また、じりじりと後退る……。

「むう……、むう!」

私も前かがみになって、仔馬に頭を向ける。
そして、仔馬と同時に走りだす。

でも、お互い近づくと、ゆっくりになって、そして、コツン、と、頭
同士をぶつける。

「ぶるるうー！」

「るるるるうー！」

額をつけたままぐりぐりしてやる！

「るるるるう!!」

「ぶるるう……」

負けを悟ったのか、仔馬が大人しくなる。

「よし、よし」

私は満足して顔を上げて、仔馬の頭を撫でてやる。

「どう、ナビー？ 気に入った？」

和泉が笑いながら歩いてくる。

「うんー！」

「そか、それは、よかった、じゃあ、名前をつけようか」

名前かあ……。

「ぶるるう……」

頭を撫でられて仔馬が気持ち良さそうにしている……。

うーん、でも、最初の突進は弾丸みたいだったよね、正直びっくり
した……。

よし。

「ウエルロット」

昔、私が愛用していた拳銃の名前。

「ウエルロットか、いい名前だ、よかったな」

と、和泉もウエルロットの頭を撫でる。

「ぶるるうー！」

こうして、私たちは仔馬を一頭飼う事になった。

第24話 みなしご

太陽は沈んでしまったけど、まだうつすらと光が残り、ふわふわのわた雲をオレンジ色に染め上げていた。

また、空は深く澄みわたり、地平の彼方がうつすらとしたみろり色に輝く……。

とても綺麗な空……。

私たちはそんな綺麗な空を見上げながら夕食をいただく。

「ねえ、ハル……？」

私は焼き魚の小骨を取りながら和泉に声をかける。

「うん、なに、ナビー？」

彼も同じようにフォークとナイフを使つて小骨を取り除いていたけど、その手を止めて私のほうを見る。

「あの仔馬、ウエルロット……、本当はどうしたの……？」

シウスたちの時からだけど、やっぱり三回連続で同じシチュエーションっていうのもおかしな話だ。

「うん、取り残されていた、っていうのは本当だよ、ナビー」と、彼は少し笑顔を作つてまた小骨を取り除く作業に戻る。

ああ……、なるほどね……、大体察した……。

「孤児か……」

「どうだろうね……」

シウスたちもか……。

「ありがとね、ハル……」

みんなを助けてくれて。

「うん……」

うん……。

それにしても小骨が多い！

私はお皿をカチャカチャとさせる。

「こら、ナビー、お行儀が悪いわよ」

と、夏目に叱られた。

「だってえ」

私は頬を膨らませる。
もう、こんなのならなあい。

私は隣の野菜たつぷりのポトフにスプーンをつける。
ちなみに、あの旅客機に残されていたレトルト食品はもうない。
全部食べてしまった。

なので、今食べている物はすべてここで調達した物になる。
この野菜たつぷりのポトフもそう。

ああ、でも、このポトフの味付けに使っている調味料や香辛料は別、
あの旅客機に残されていた物を使っている。

たぶん、あと二、三ヶ月は持つんじゃないのかな。

問題はそれとだよねえ……、お塩とかなくなったら、どうするんだらう……。

「うん、おいしい」

ほくほくのジャガイモを頬張る。

待てよ、自然の旨みだけでも十分いけるんじゃないのか……？

このにんじんはすごく甘いし。

うん、いける、いける……。

私はスープをすすする。

うま、うま……。

「それにしても、牧舎も手狭になってきたよね……」

と、笹雪が話題を振ってくる。

確かに、今はウエルロットがひよこたちを踏んでしまわないように、ピップたちには籠に入ってもらっている。

なので、ウエルロットには別の牧舎が欲しいところ……。

「うん、それにウエルロットはシウスやチャフたちと違って、いっぱい食べそうなんだよね、身体大きいし……」

それにたいして、雨宮が答える。

確かに、今でも毎日草刈して、彼らのごはんを確保している、それにウエルロットの分も加わるとなると相当な負担が予想される。

「ピンデブルク広場をウエルロットの放牧地に出来ないかな？」

「ああ、いいね、それ、ついでにシウスとチャフも連れていけばエサの

手間も省けるね」

「おお、いいアイデア！ それだったら、ピップたちも連れていくよ！」

「どう、和泉？ 班長としてこの案はどう思う？」

「笹雪が意見を求める。」

「うん、いいんじゃないのかな、班長会議で提案してみるよ、えーっと、牧舎の拡張とヒンデンブルク広場を放牧地にする案ね……」

と、和泉がポケットから小さなノートを取り出してメモを取る。

「あ！ できれば、ウエルロット専用の牧舎を作ってほしい！ ピップたちが危ないから！」

「私は身を乗り出して言う。」

「うん、わかった、そっちの方向で話しておくよ」

「やったあ！」

と、私は飛び上がって喜ぶ。

「全員、お疲れ、そのまま聞いてくれ」

喜んでいると、そんな東園寺の声が聞こえてきた。

「なんだろう、と思いきや椅子に座りながら彼を見る。」

「諸君らの頑張りにより、今日も一日無事に終えることができた、ありがとう、礼を言う。だが、まだまだ油断は出来ん、いつ現地人の襲撃があるかわらん、それに備えなければならぬ……」

一呼吸を置き、

「そこで、これより、夜間戦闘訓練をとりおこなう事にした」

そう宣言する。

「え？」

「戦闘訓練……？」

「今から？ なんで？」

女子たちの間からそんな疑問の声が上がる。

「ちよ、ちよっと待って、東園寺くん、今日はお風呂の日だよ、女子たちの？ みんな楽しみにしてたんだから、日にちをずらす事はできないの？」

女性班の班長、徳永美衣子が全女性を代表して抗議する。

そう、今日は待ちに待った露天風呂の日、一週間ぶりのお風呂！

「だからだ、だからこそ、今日なんだ、徳永……、女性陣は予定通り風呂に入っていていいぞ、いや、むしろそうしていてくれ……」

東園寺がにやりと笑う。

「え？ どういう意味……？ 女子は戦闘訓練に参加しなくてもいいって事？」

徳永が首を傾げる。

「いや、参加してもらおう、女性陣は防衛訓練だ、風呂場を防衛していてくれ……」

「はあ？」

「そして、男性諸君には攻城訓練をしてもらおう。今夜、俺たちは女風呂を覗きに行く!!」

さすがに吹くわ……。

「う、うそでしょ……？」

「み、見損なつたわ、東園寺くん……」

「有り得ない、本当に有り得ない……」

予想通り、女子たちの非難の声が飛び交う。

「みんな誤解しているようだが……」

参謀班の班長、人見彰吾が銀縁メガネを人差し指で直しながら東園寺の隣に歩いていく。

「別に俺たちは女風呂を覗きたいわけではない……。だが、戦闘訓練ともなると、何か張り合いが必要になる、つまり目的だ、女子諸君も覗かれたくはない、その一心で本気で防衛するはずだ、男子諸君はその本気の防衛ラインにチャレンジする、力と力のぶつかり合い、いい戦闘訓練になるだろう、ああ、重ねて言うが、俺たちは別に女風呂を覗きたいわけではないからな、そのあたりは誤解しないでくれ」

女子たちが顔を見合わせる。

「こ、これって、人見くんの提案？」

「まあ、覗かれたくないから、そりゃ、本気で防衛するけどさ……」

「でも、相手は男子だよ、無理だよ、そんなの……」

と、みんなで話し合う。

「人見くんの言う通り、いい戦闘訓練になるかもね……」

「うん、覗くのが目的じゃなかったら……」

「そうだね……、えっ、人見くん、鼻血出てるよ!」

見ると、人見の鼻の下に赤い物が見える……。

「えっ!?!」

人見が手の甲で鼻を押さえて、それを少し離してまじまじと見つめる。

「信じられない、一番覗きたかったのって人見くんなんですよ……」

「彼もまた男だったっていうわけね……」

「これ、やっぱり人見くんの差し金だよね……?」

「なんか、本当に見損なつた、っていうか、すんごい幻滅した……」

ひそひそと話し合う。

「ち、違う、俺の提案じゃない、あ、秋葉だ、秋葉が言い出したんだ!

俺は別に覗きたくなかなかつたんだ!」

と、人見が秋葉を指差しながら叫ぶ。

秋葉あ? 私は彼の顔を見る。

「ふっ、ナビー、昼間のリベンジだ、覚悟しておけ、絶対覗いてやるからな」

と、不敵に笑いながら言いやがった……。

秋葉が言い出したのか、秋葉ならしようがないか……。

でも、なんか、ふっふつと怒りが込み上げてくる……。

こいつら男子ってふざけすぎだよな。

私たち女がどんな気持ちで生きているかわかっているの?

あの自決用の地下室知っているでしょ、それだけ覚悟して生きているのよ。

それだけ、あんたたち男子に命を託しているのよ……。

それがお風呂を覗きたいだつて?

ふざけやがって……。

もう、あつたまきた!

「上等じゃないの! その挑戦受けてたつわ!!」

私はテーブルを両手でおもいきりバンつてやって立ち上がる。

「公彦！ 彰吾！ そして、蒼！ 好きなだけかかってこい！ ぼっこぼこにしてやるからあ!!」

と、ひとりひとり指差しながら叫ぶ。

「な、ナビーがキレた、な、なんで……?」

「ど、どうしちやったの、ナビー……?」

「な、ナビー、お、落ち着いて……」

みんなが私をなだめてくれるけど、怒りがおさまらない。

「みんなも悔しくないの!? あいつら女をなめてんのよ！ あんなにやけた顔してえ！ もう許せない、ぼっこぼこにしてやるよ、みんな!!」

私の魔力拳、ゴッドハンドでぼっこぼこにしてやる！

「そ、そうよ、ナビーの言う通りよ」

「私の言いたかった事を全部言ってくれたよ、ナビーは……」

「うん、ここは怒るところだよ」

「やろう！ 戦おう！」

お、みんながやる気になってくれた、もう一押し！

「男どもに目にももの見せてやるよ！ 私たちは強いんだから!!」

と、拳を突き上げて叫ぶ。

「「おお!!」」

女子のみんなも同じように拳を突き上げて叫び返してくれる。

第25話 いざ、お風呂へ

「それじゃあ、ルールの説明をするぞ」

私たちが盛り上がっているところに、東園寺がそう話しを切り出した。

「俺たち男子はルビコン川に集結し、そして、20時をもって作戦を開始する。女性諸君らは、風呂にでも入っていてくれ、人選は任せろ。ああ、ゼロってのはなしだ、最低でも数人は風呂に入っていてくれ」つまり、男子はルビコン川から攻めてくるから、ラグナロクの奥にある露天風呂に行く為には、その広場の真ん中を通ってくるしかない、主戦場はあくまでも、このラグナロク広場になるってわけね、ふむふむ……。

「攻撃魔法はなしだ、暴力も禁止だ、まあ、タツクルくらいはありにするか……。あと、現地人の襲撃があるかもしれない、男子、女子ともに防御魔法を怠らないように。そんなところか……。ああ、そう、そう、森の中には入るなよ、危ねえから」

ちよつと、待って、暴力禁止？

どうやって防衛するのよ？

うん、知らない、私はこつそり魔力拳を使って男子をぼっこぼこにしてやるんだ、うん、そうしよう。

「よし、解散、男子、食事の終わった者からルビコン川に移動しろ、最初に作戦会議をやるからな」

「「おう」」

と、男子たちがぞろぞろと席を立ち、食器を片付け始める。

私たちはその姿をじっと観察する。

「やつぱり、覗きが目的じゃないみたいだよ？」

「うん、普通の戦闘訓練って感じ……」

みんなの言うとおり、男子たちはいたって普通、別にこれからやましい事をする感じではない。

やがて、男子たちは去り、広場には私たち女子だけが残される。

「あと1時間ね……」

と、綾原が腕時計を見ながらつぶやく。

私も焚き火の近くにある掲示板、そこに立てかけてある時計で時間を確認する。

7時をちよつとまわったくらい。

「それでは、私たちも作戦会議を始めましょうか……、気が進まないけど……」

徳永が額に手をあてながら言う。

「とりあえず、先に誰がお風呂に入るか決めましょう……、立候補したい人いる?」

と、彼女が言うのと全員が一斉に視線を逸らす。

「いるわけではないよね……」

徳永が懐からメモ帳を取り出す。

「うんと……、雫と唯には防衛陣を張って貰いたいからパス……」

参謀班の二人は候補から除かれるらしい。

「女性班も男子たちが変な事しないように見張ってなきやいけないからパス……」

女性班も除かれるらしい。

「と、なると、生活班の5人、それと、狩猟班の4人から選ぶ事になるわね……」

私も含まれている!

「生活班がお風呂に入るよ」

どうしよう、と思っっているうちに、生活班の班長、福井麻美が名乗り出てくれたので、ほつと胸を撫でおろす。

「そうだね、麻美、狩猟班は戦えるし、私たちが犠牲になるのが一番だよね……」

「うん、うん、あ、ナビーもおいでえ、お風呂大好きだったでしょ?」

「一緒にはいろ」

ええ!?

私は口をぱくぱくさせる。

「うん、ナビーも入っただい」

「大丈夫、大丈夫、覗かれないから、私たちががちりガードしておく

「めええ……」

と、牧舎の近くを通りかかると、そんな声が聞こえてきた。

「あらっ？」

私は牧柵に駆け寄る。

「シウス！ チャフ！」

と、背伸びをして、牧柵の上からシウスとチャフの頭をなでる。

「ぶるるうー！」

お、隣にはちゃんとウエルロットも来てる！

「よし、よし、ちゃんといいい子にしてるんだよ、ウエルロット」

と、同じように頭を撫でる。

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「びよおー！」

牧舎の中からも声が聞こえてくる。

あ、そうだ、ピップたちは籠に入れてたんだ、ウエルロットが踏んじやいそうだったから。

「ピップ、スカーク、アルフレッド！ 今からお風呂だからあ、またあとで見にくるからねえ！ いい子にしてるんだよお！」

と、牧舎に向かって大きな声で言う。

「じゃあ、いこっか、ナビー」

「うんー！」

と、また私は上機嫌で先頭を歩きます。

からん、ころん、からん、ころん……。

そんな小気味いい音色を奏でながら……。

「お、きたきた」

「ごめんね、みんな、困になってもらっつて」

と、露天風呂の前に陣取っているみんなに出迎えられる。

「おお、かわいいー！」

「すごく似合ってるよ、ナビー」

「オプシヨンでお面とりんご飴も欲しくなるよねー！」

「あとわた飴もー！」

私のまわりにはすぐに人だかりが出来上がる。

ちなみに、露天風呂の前に陣取っている防衛隊は8人、参謀班の2人、狩猟班の3人、それに女性班の3人の計8人。

もともと女性班は4人だけど、鹿島美咲がここには来ていない。

数日前に負った怪我が治っていないから。

なので、彼女は自室でお留守番。

「それじゃ、よろしくね」

「入ってくるね」

「うん、まかせて」

「ごゆっくり」

と、私たちはドアを開けて露天風呂の中に入っていく。

もくもくと立ち昇る湯気の中に、四隅に配置されたかがり火の灯りに照らされて湯面が綺麗に浮かび上がる。

「脱衣所欲しいよねえ……」

「うん、服が湿っぽくなる」

と、私たちは風向きを考えて、なるべく風上になるほうで脱衣をはじめ。

「ねえ、ねえ、入り口に毘でも仕掛けておかない？ 魔法で」

「お、ナイスアイデア！ いいね、魔法のブービートラップ！」

と、服を脱ぎながら話している。

「ブービートラップとかって、どこの第一次世界大戦よ……」

私は帯をほどくのに苦戦しながら言う。

「駄目かなあ、いい案だと思うんだけどなあ」

「じゃあ、他にどんな案があるの、ナビー？」

そう聞いてくるので、私は人差し指を立てて、

「最近のトレンドはそうね、バンジステーク、にくだけ、ぎよく、これだね」

と、得意げに言ってみせる。

ちなみに、ぎよく、とは玉子の意。

そして、にくだけ、とはご飯なしのお肉だけってこと。

「バンジステーク……？」

「にくだけ……う？」

「ぎよく……う？」

福井たちが首を傾げる。

「まっ、意味は自分たちで考えて」

私もわからないから。

「よしー！」

全部脱げた！

私は最後の下着を囲いの上にかけて、一目散に湯船に向かう。

「こら、ナビー、ちよつと待ちなさい」

「変な事を言って私たちを煙に撒くつもりだったんでしょ？ そうはいかないんだから」

「そういう作戦だったのか！」

と、みんなに呼び止められる。

「湯船に浸かるときは、ちゃんと身体を洗ってからねえ」

「さて、最初にナビーを洗っちゃいませうか」

「髪もちゃんと洗ってあげるからねえ」

くっ……。

捕まえられた……。

そして、私はシャワーの前の椅子に座らせられる。

第26話 奇策

「ひゃう」

まずは頭からお湯をかけられる。

「シャンプーからね」

その声を聞いて、私はぎゅつと目を瞑る。

「ひう」

誰かの手が私の頭に触れるのを感じてびくつとなった。

そして、うなじのあたりから髪を引き上げられる感じもする……。

もう背筋がぞくぞくする……。

「じゃあ、一緒に身体も洗っちゃおうか」

と、スポンジを身体にあてられた。

「えっ、まっ、きやつー！」

目を開けちゃった。

「いたい、いたい、いたい！ 目に入ったあ！」

シャンプーが目には入ったあ！

私は目をこすろうとする。

「駄目よ、余計痛くなるから、ほら、目を閉じて」

と、手首を捕まれて下ろされた……。

しようがないので、両手をふとももの上に乗せて、ぎゅつと強く握る。

「シャンプーハットも作っておけばよかったね」

「さすがに、ナビもそんな歳じゃ……」

「でも、きつと、かわいいよ、黄色いやつね」

などと言って笑っている……。

「あう、きやつうっ、きやつうー！」

駄目、目を閉じてると、触られただけで反応しちゃう。

「ほうら、こども……」

「手を出して、ナビー」

「う、う……、ひっ！ きやつー！」

身体中を泡だらけにされているを感じる。

「しかし、なんで、ナビーってこんな反応するの？」

「ね、すごくかわいいよね」

「なれてないのかなあ、ナビーは、こういうのお？」

「ううー、ううー……」

と、片目だけ少し開けてみる。

でも、お湯なのか涙なのかよくわからないけど、それでよく見えな
い。

湯気の中にかすかにみんなが見える……。

みんなが楽しそうに笑っている感じがする……。

「お湯かけるよ、ナビー」

「うん」

と、私はまた目を固く閉じる。

ぎぶーん、とシャワーじゃなくて桶かなんかでかけられる。

「気持ちいいでしょ、ナビー？」

「うん！」

「お、ナビーの機嫌が戻ってきた」

「じゃ、トリートメントね、もつと綺麗になるからね」

「うん！」

気持ちいいなあ……、頭をマッサージされている感じ。

ついでに、身体の泡も流してくれている……。

「ふん、ふん、ふふん、へへん……」

もう上機嫌！

「こんなものかな……」

と、タオルで顔を拭いてくれる。

私はそれにあわせて顔をローリングさせる。

「よし、おっけ！ 湯船に浸かっていいよ、ナビー」

「髪はどうする？ タオルで巻く？」

「いらない！」

と、やっと解放された私は大急ぎで湯船に向かう。

そして、湯船の縁に座って、片足を入れて温度を確かめる……。
くるくるかき回す……。

うーん……。

両足入れてみよう……。

ぱしゃぱしゃ……。

よーし、頭から飛び込んじゃおう！

そのまま倒れるようにぱしゃあーんって行く。

「ぶくぶくぶくぶく……」

ぶくぶくしながら潜水して真ん中まで行く。

そして、浮いてきたら今度はくるっと回転して背泳ぎのような姿勢になる。

手は使わないで足だけで泳ぐ。

お湯の中を広がる長い髪と一緒に両手を大きく広げる。

「ああ……、星が綺麗……」

湯気と、その間に見え隠れする煌く星々……。

「星に手が届きそう……」

両手を空にかざす。

「えい、えい！」

と、星を掴もうとする。

「あはっ」

掴めるわけないか。

「ああ、幸せ……」

私はそっと目を閉じる……。

そういえば、男子がお風呂を覗きに来るんだよね？

もしかして、もう覗いているのかな？

と、足でお湯をかきながら考える。

でも、外の綾原たちが騒いでないからまだかなあ……。

早く来ないかなあ、覗いていたら、真空飛び膝蹴り行くのに……。

「きやうー」

目をつむって泳いでいたら、湯船の縁に頭をごつんとしちやった。

「あうう、頭ぶつけたあ……」

と、足について頭を押さえる。

「ナビー、大丈夫？」

「私たちも入るよ」

と、福井たちが身体を洗い終わったのか、こつちにやってくる。

「でも、覗くとしたら、どこから覗くのかな？」

「うーん、囲いの高さは二メートル近くあるし、肩車してかな？」

「それだったら、外のみんなに邪魔されて覗けないよ、タックルありとか言ってたし」

「そうだね、やっぱり、本気で覗く気じゃないんだよ」

生活班のみんなが、そんな話を話し合いながら湯船に入ってくる。

私はとりあえず、お鼻のちよつと下までお湯に浸かっ**て**ぶくぶくをはじめ。

「でもさ、やっぱり、覗かされそうになった時のために、何か考えていたほうがいいよ」

「そうね……、ナビーに言わせると、ブービートラップは古いらしいから……」

「あれね、バンジーステーク、にください、ぎよく、ね……？」
ぶくぶくぶく……。

「バンジーステークかあ、ということは、あれだよな？」

「うん、にください、つてことは、あれよね？」

「そう、そう、ぎよく、と、言えば、あれしかないよね？」
ぶくぶくぶくぶく……。

なんの話しをしてるんだろ、この人たち。

「ところで、いつまで入ってればいいの？」

「訓練が終わるまで？」

「のぼせちゃう……」
ぶくぶくぶくぶくぶく……。

「あつーいー」
と、私は我慢しきれなくなつて、立ち上がる。

「お外見てくる」

そして、湯船から上がり、踏み台を使って囲いにかけてあるバスタオルをとる。

「風邪引かないようにねえ」

福井がそう言うので、私は軽くバスタオルで身体を拭いて、それからそれを身体に巻く。

「それじゃ、私たちは罨を仕掛けておきましょうか……」

「そうね、バンジーステーク、にください、ぎよく、をね……」

彼女たちも湯船から上がってくる。

私はそのまま、バスタオルを一枚だけ巻いて露天風呂をあとにした。

ドアを開けると、すぐに涼しげな風が私の頬を撫でる……。

それと同時に汗ばんだ身体を優しく冷やしてくれる……。

それでも暑いから、バスタオルを開いたり閉じたりしてパタパタしてやるんだけどね。

「ねえ、まだ来ないの？」

と、パタパタしながら、防衛隊のみんなのところに歩いていく。

「うん、まだ……」

「スタートからもう20分、ちょっと遅いわね……」

と、笹雪と綾原が答えてくれる。

「ふうん……」

露天風呂の周りにはいくつものかがり火が設置されていて明るく、また、ロτζジに続くに道沿いにもところどころ設置されていて石畳の道を照らしてくれていた。

「静かだなあ……」

ぼんやりとつぶやく……。

「それにしても遅いね、どうなってるんだろ……」

「中止って事はないと思うけど、なんか、おかしいよね……」

みんなが不審を口にする。

「防衛陣には何もひつかからない、少なくともこの、ラグナロク広場に男子たちはいない……」

「魔法もルビコン川付近で観測して以来それっきり」

と、綾原と海老名が話している。

「森には入っちゃ駄目って言ってたから、正面から来ると思うんだけどなあ」

そう、森に入るなって、東園寺が言っていたよね。

「森かあ……」

なんか、いつもより静かなんだよね……。

いつもだったら、近くで鳥の鳴き声とかするのに……。

小動物の動き、鳥の鳴き声、風に揺らされる枝葉の音、それらすべてが敵の接近を教えてくれる……。

騙された、東園寺のあの言葉、森に入るなって言葉はフェイクだ、もう、そこから戦いははじまっていたんだ。

「あいつら森の中を行軍しているのよ!!」

私は大声で叫ぶ。

「ええ!!」

「だ、だって、森の中は立ち入り禁止じゃなかったの!」

「どうして、そんなことを!」

「ま、まさか、そこまでする……う?」

みんなが聞き返してくる。

「待って、ナビーの言う通りよ……、有り得ない話じゃないわ……」

と、綾原が顎に手をあてて考え込む。

「と、なると、彼らの狙いは正面突破ではない……、真の狙いは……」

「私たちの背後、露天風呂のうしろ、ボイラー室よ、そこから覗く気なんだよ!!」

私は綾原の言葉を遮るように叫び、ボイラー室に向かって走りだす。

「ナビー待って、危ないから!」

夏目がそう言うけど待ってられない。

やられた、あいつら、そこまで本気だったとは……。

そんなに女風呂を覗きたかったのか、あいつらの欲望を見誤っていた。

第27話 索敵

露天風呂の囲いの横を駆け抜けていくと、すぐにその曲がり角に差しかかる。

その角を曲がった先にあるのがボイラー室だ。

私は立ち止まり、壁越しに顔を出して、ボイラー室周辺に人がいないか確認する。

「人影は、見えない……」

ボイラー室周辺は薄暗く、遠くのかがり火の灯りがかすかに届くだけで、視認性は最悪。

見えるのは、ボイラー室と、その横に置いてある焚き木の山のみの……。

「いないかあ……」

もしかして、考えすぎだったかなあ……。

私はボイラー室の方へ歩いていく。

「うん……うん……」

と、思ったら、ボイラー室から誰か出てきた。

私は大急ぎで焚き木の山のうしろに隠れる。

相手は一人。

暗くてよくみえないけど、シルエット的に男子たちの誰かだね……。

「面白いなあ、もう偵察に来ていたのかあ……」

思わず笑ってしまう。

気付かれないように追跡する、本隊がどこにいるのか確かめないと。

私は彼のずっと後方をバスタオルをひらひらとさせながら追いかける。

「ビンゴだぜ、人見」

かなり奥にいるのかと思ったけど、結構近くにいた。

ここはまだ広場の明かりが届く範囲だ。

私は大木の裏に隠れて、息を潜める。

「正面で防衛にあたっているのは、参謀班、女性班、狩猟班の女性陣だけだ、生活班は確認できない、やはり、ターゲットは風呂の中にいる」
話しているのは、声からすると、参謀班の南条大河だろう。

「そうか、ご苦労だったな、南条……」

「こっちは人見彰吾かな。」

「青山、東園寺に伝令を頼めるか？」

「ああ、構わない、走る」

「突撃は予定通り30分、ターゲットは風呂の中にいる。そう、伝えてくれ」

「わかった、人見」

と、人影が一つ走り去っていく。

「南条、俺たちはもう少し前進する、風呂が見える位置まで移動し、そこで、管理班と生活班の突撃を待つ。魔法は使うなよ、綾原と海老名に感づかれる」

「おーけー、人見」

彼らがこっちにやってくる……。

私は木から木へと移動して、森の奥、彼らの背後に回りこむ。

なんだろうなあ、なんの話だろうなあ……。

ターゲット？

うーん……、でも、綾原とかに報告に戻ったほうがいいかなあ、突撃するとか言ってたし……。

と、私は腕を組んで考え込む……。

こっつん、と、足元からそんな音がした……。

やば、下駄で木を蹴っちゃった。

「なんだ？」

「どうした、人見？」

「何か音がしなかったか？」

「いや、気付かなかったな……」

「そうか、一応確認してくる、南条はそのまま見張っていてくれ」

「おーけー、気をつけてな」

人見がこっちにやってくる、逃げなきゃ……。

と、逃げ出そうとするけど、なんか、ひっかかった。
あ、バスタオルが枝にひっかかっている……。

人見の足音が近づいてくる！

私はそのままぐるぐる回転して、バスタオルを脱ぎ捨てる。

この際、しようがない、捕まるよりはいい……。

私は裸になって、さらに奥の木の影に隠れる。

「なんだ……？」

と、人見が私の脱ぎ捨てた白いバスタオルに気付く。

「タオル……？」

彼がそれを手に取る。

「あたたかい……、それに、少し湿っているな……」

そして、バスタオルを顔に近づけ匂いを嗅ぎ始める……。

くんくん、くんくん、と、匂いを嗅いでいる……。

「こ、これは……、くんくん、くんくん……」

匂いを嗅ぎ続けている……。

何をやっているんだ、あいつは……？

と、首を傾げるけど、これは、絶好のチャンスだよね。

私はそっと、彼の背後から忍び寄る。

「くんくん、くんくん……」

彼は夢中でバスタオルの匂いを嗅いでいる……。

そっと、そっと……。

「くんくん、くんくん……」

倒木の上にあがり……。

「くんくん、くんくん……」

そーっと、彼に覆いかぶさるように腕をまわして、その口元を押さえる。

「くん……？」

そして、彼の耳元に顔を近づけて言ってやる。

「めえ……」

間違った、それはシウスだ。

「ねえ……、彰吾……？ なにやってるの……？ それは、私のバスタ

オルだよ……?」

「おごっ?」

「黙って、聞いて、ナビーよ」

「なごお?」

「話は全て聞かせてもらった、そこで取引きしない?」

「とごお?」

「そう、取引きよ、私たちの味方になって。そうしたら、今の事みんなには黙っていてあげる」

「おごっ、もげお」

「なんか、人見がもごもご言ってる。

「もしこの事をばらされたら……、私の着けていたバスタオルの匂いを嗅いでいたなんて、みんなが知ったらどう思うかしら……、夕食の時の鼻血の件とあわせて、あなたの信用は地に墮ちるわ……、あの人見くんがねえ、って……」

「お、おごお……」

「だからね、言わないで置いてあげるから、私たちの味方になって、名誉挽回のチャンスよ、ね?」

と、彼の口元からゆっくり手を放す。

「わ、わかった……、キミの指示に従う……」

そう言いながら振り返ろうとする……。

「ふ、振り向くな、って、いかバスタオル返して」

「なんか、急に恥ずかしくなって、人見からバスタオルを奪い返して身体に巻く。」

「な、ナビー、そ、それで、俺はどうすればいいんだ……?」

私から視線を逸らしながら言う。

「そ、そうね……、公彦たちが突撃してくるんだよね……?」

バスタオルを直しながら人見に尋ねる。

「ああ、そうだ、まもなくだ」

「じゃあ、作戦はシンプルなほうがいいわね……、彰吾は私が合図したら背後から攻撃して、ああ、暴力は駄目なんだっけ……、じゃあ、防衛系の魔法で足止めして、転ばしてやる感じで」

人見が仲間に加わった事を言おうとしたけど、言葉を遮られるように綾原にそう言われた。

「うー……」

それもそうね、裸だった……。

「服着てくるー!」

と、私は露天風呂の中に走っていく。

お風呂場は湯気でよく見えないけど、湯船には誰も浸かっていないのは確認できる。

「あ、あれ? みんなは……う?」

私は湯船を見ながら、浴衣がかけてある囲いのところまで歩いていく。

「ナビー」

「遅かったね、お外どうだった?」

と、見ると、みんながボイラー室へと続くドアの前で何かやっていた。

「あ、いた! えっとね、もうすぐ男子たちが突撃してくるつて! 今からそれをみんなで迎え撃つの! 私も急いで服着て戻らなきゃ!」

私は踏み台に登って、囲いにかけてある下着を取りながら答える。

「そうなんだ、ついにはじまるのね……」

「緊張するね……」

「みんなは何してるの?」

私は下着を履きながら尋ねる。

「ふふ、もちろん、バンジーステーク、にくだけ、ぎよく、を設置しているのよ……」

「はあ?」

そんな事より、早く服を着て戻らなきゃ……。

私は浴衣を羽織って帯を取る……。

「麻美しい、手伝ってえ」

と、泣きそうな顔でお願いする。

「はい、はい」

福井が浴衣の着付けを手伝ってくれる。

おっと、これこれ。

ネックレス。

人見に貰ったアミュレット、そう、身を軽くしてくれるという魔法のネックレスだ。

着けている時は感じないけど、外すと身体が重くなったのがはつきりとわかる。

私は首に手を回してネックレスをつける。

「「おおお!!」」

その時、外からそんな雄叫びが聞えてきた。

「きた!!」

男子たちだ!

「よし、じゃあ、行ってくる!」

「いってらっしゃい」

「気をつけてね、ナビー」

生活班のみんなに見送られながら露天風呂をあとにする。

第28話 切り札

外ではすでに戦いが始まっていた。

「シロス、権力によらず、暴力によらず、その身を押し、追シュトラい風レーゼ」
「アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、静寂パビロンの風盾レイ」
綾原、海老名、両名の魔法詠唱も聞える。

私は周囲を見渡して、状況の確認を行う。

まず、正面、誰もいない！

そして、側面、こちらも誰もいない！

やっぱりボイラー室のほうだ！ そっちから声がする！

私は風を受けながら走っていく。

と云うか、風が強い、さつきより、強く吹いている……。

「唯、追い風負けている、方向を合わせて、もう一回、シロス、権力によらず、暴力によらず、その身を押し！」

「くう、人見彰吾、やっぱり強い、いくよ！ シロス、権力によらず、暴力によらず、その身を押し、追シュトラい風！」

そんな切羽詰った声も聞こえてくる。

私は強風の中、腕で顔を庇いながらボイラー室のほうを見る。

手前では、女性班や狩猟班の女子たちが右往左往している……。

そして、その奥には……。

人影……？

ではない、なんか、巨大な影が3つ……。

それが、どすん、どすん、つて、強風の中を歩いてくる……。

「な、なに……？」

やがて、その巨大な影がかがり火の近くまでやってきて、その正体があらわになる……。

そう、それは、騎馬戦のあれ、下に3人いて、その上に人が乗っているあれ。

「そ、そうくるのね、やっぱり、上から覗く気なのね」

ちよっと、吹きだしてしまった。

「ど、どうすればいいのっ！」

「こ、怖いよ!」

「と、とりあえず、タツクルして足止めとか!」

「よ、よし、いこう!」

と、女子たちが「わあああ」って、感じで騎馬に向かって走って行く。

「やあ!」

「たあ!」

そして、肩からタツクルする。

でも、びくともしない……。

「駄目、退散、退散!」

と、すぐに諦めて引き返してくる。

どすん、どすん、と、男子たちがこつちにやってくる。

「こ、怖い、こつちきたよ!」

「このままじゃ、覗かれちゃうよ!」

うーん、困った……。

あの騎馬を崩さないと何も始まらないよね……。

よく見ると、中央の騎馬の向こうにも誰かいるのね、騎馬にはならず、ひとりだけぼつんと立っている。

なんか、その人がしきりに私の事を気にしている……。

「うーん?」

と、目を凝らして見てみると、それは、銀縁メガネの男、参謀班の人見彰吾だった。

その彼が私に視線を送って、合図はまだかつて感じて催促してくる。

どうしよう……、いきなり人見を使うかあ?

でもなあ、切り札は最後まで取っておきたいのよねえ……。

と云う事で、私は人見に向かって首を横に振る。

あの騎馬は私たちだけでなんとかする。

人見はそのあと、騎馬が崩れたら、絶対ばらばらになってアタックしてくると思うから、彼にはその時に活躍してもらう。

「よし、翼、めぐみ、ひらり! こつちも騎馬よ! 準備して、私が乗

るから!!」

私は狩猟班の3人に指示を飛ばす。

「そこなくっちゃ!」

「騎馬には騎馬ね、わかったわ!」

「そ、それしかないよね」

と、3人が騎馬を組む。

私は急いでそれに飛び乗り、

「よし、出発進行!」

と、敵を指差しながら叫ぶ。

「!」

笹雪を先頭とした私たちの騎馬は敵に向かって走り出していく。

「お、きたぞ?!」

「迎え撃て!」

「左翼、右翼は散会して敵を包囲しろ!」

「了解!」

男子たちの騎馬の左右が展開して、私たちの騎馬の側面を付くような動きをはじめめる。

「な、ナビ!」

「大丈夫よ、翼……、全速前進! 敵の正面を突破する!!」

私たちの騎馬の走る速度が上がる。

「いけ、いけえ!」

正面には東園寺が乗る騎馬のみ、しかも、彼の体重が重いのか、その動きは鈍重そのものだった。

「よし!」

そして、お互いが衝突する瞬間、

「右に飛んで!」

と、ひよいっと、彼らを右にかわす。

すると、ぶつかる相手がいなくなった東園寺が乗る騎馬が前のめりになって倒れていく。

「ぐあ!!」

「き、消えたあ!」

「と、とまれえ!!」

彼らが折り重なるように倒れる。

「やったあ!」

見たか、これが機動力の差よ!

「美衣子、そっちはまかせた!」

「うん!」

「「わああ!」」

と、女性班の3人が左側の騎馬にタツクルして足止めしてくれる。

「よし、私たちはこつちをやるよ!」

「「おお!」」

私たちは右側の騎馬に向かう。

彼らもこつちに向かつてくるけど、さつきと同じように横にかわされるのを恐れているのだろう、速度を緩めて警戒しながら近づいてくる。

でも、予想通り。

「全速前進! おもいつきり正面からぶちあたれ!!」

「「おお!」」

どーんと、ぶつかると、相手の騎馬が少しよろける。

「お、おお!!」

と、騎馬に乗る騎手、参謀班の南条大河が騎馬から落ちないように手をぐるぐる回しながらバランスをとる。

騎馬同士が密着している……、そして、南条はバランスをとるのに意識を集中しているのか、こつちを見ていない……。

チャンス。

拳に魔力を込める……。

そして、ゴッドハンド!

がら空きの脇腹に強烈な一撃を叩き込んでやった。

「ひゅっ? あたっ!」

そして、両腕で脇腹を押しさえて、前かがみになる彼の頭を掴んで、そのまま転がすように、騎馬から引きずり降ろしてやった。

「うわああああ、東園寺と南条がやられたぞ! ひけ、ひけ!」

と、最後に残る騎馬の騎手、生活班の山本新一が叫ぶ。

「逃がさないよ！」

「おまえも落ちろ、山本！」

「この、このー！」

徳永たち女性班の3人がうしろから飛び乗るようにして、騎手の山本を引き摺り下ろそうとする。

「うわ、やめて、許してー！」

彼の必死の抵抗も虚しく、山本も地面に引きずり降ろされる。

「ちっ、まだだ、野郎ども、突撃するぞ、二人一組、肩車作戦だ!!」

東園寺が立ち上がりながら男子たちに指示を出す。

これも予想通り。

「みんな、降ろして、今度は地上戦よ！」

「「おおー！」」

私は騎馬から飛び降りて、やつらに向かって走っていく。

まだ、魔力拳は生きている……、全員南条みたいにしてやる！

防衛隊のみんなが男子たちを追い駆けるけど、彼らの数が多く追いつけない……。

しかも、あいつら足も速い……、こっちは浴衣と下駄で走りづらいのに……、全然追いつけない……。

「とめて、とめて、タツクルよ、膝を狙って！」

「膝じゃ駄目よ！ 足首を狙ってタツクルして！」

みんなが必死に防戦する。

「いけえ！ ターゲット、福井麻美は中だ、風呂の中にいるぞ!!」

「待ってるよ、麻美、今覗いてやるからな!!」

「ふはははっ、楽しみだなあ、福井い!」

とか言いながら、男子たちが囲いに殺到する……。

福井？ なぜ、福井麻美？ 彼女がいいの？

「ナビー、駄目、覗かれちゃうー！」

「ど、どうしよう、雫、何か策はないの？」

「ば、万策尽きたわ……」

「そ、そんなあ……、覗かれちゃうよお……」

「最初から無理だったんだんよ、だって、数が違うもん……」
みんなが泣き言を言う。

でもね、切り札はあるのよ、しかも強烈なやつがね……。

「彰吾ー やって!!」

私は後方で静観している人見彰吾に向かって叫ぶ。

第29話 勝負のゆくえ

人見は私の叫びに、軽くうなずき、目を閉じる。

「ジルアス、カルキアス、サムトリアス、告げ鳴く鹿よ、風かけたるひさかたの白雪よ……」

静かに、彼の魔法詠唱がはじまる……。

「デイウスグラム、インフェルベウム、ラミルダード、その身を引き裂く至れり永遠、狂騒と静寂の、累世永遠」
クラス・オ・ダール

そして、魔法は完成する……。

囲いの前で、肩車をしようとしていた男子たちの動きが止まる。

「な、なんだ……」

「か、壁が……」

「こ、これって、まさか、累世永遠か……？」
クラス・オ・ダール

囲いの壁が光る……。

青銀色に光る……。

「に、逃げろ、くるぞ、これは、累世永遠だ！」
クラス・オ・ダール

「うわああああ!!」

「おおおお!!」

囲いの壁がさらに強く光った瞬間、彼ら男子たちがバリバリという音とともに勢いよく弾き飛ばされる。

「ぎゃあああ!!」

「なんだあ!!」

「うおおお!!」

軽く5メートル以上は弾き飛ばされた。

「だ、誰の魔法だ!!」

「綾原か？ 海老名か……？」

「い、いや、累世永遠なんて、人見以外に使えねえぞ……」
クラス・オ・ダール

と、地面に転がりながら男子たちが口々に言う。

「ひ、人見？ ま、まさか……」

「う、うそだろ、おい……」

彼らが人見彰吾を見る。

その人見は困いに向かつて手をかざし、その手の平からはシューと云う感じでうつすらと白い煙が立ち昇っていた。

「な、なんで、人見が……?」

「ひ、人見、裏切るのか?」

「裏切ったのか、人見!? 何とか言ってくれ!!」

その言葉に人見が手を下ろし、かすかに口元を緩めてうつむく。

そして、顔を上げて言い放つ、

「裏切っただど? ふっ、最初からおまえらの味方などではない、俺は常に女性の味方だ」
と。

場が凍りつく……。

なにを言ってるんだ、こいつは……。

「さ、さすが、人見くん!」

「やっぱり、人見くんは私たちの味方なのね!」

「まっ、私は最初から人見の事は信じてたけど……」

「かつこいい、人見くん!」

でも、女子たちからはそんな歓声があがる。

「ふっ……」

人見がメガネを直しながら頬を赤らめる。

「う、うそだと言ってくれよ、人見、おまえが一番ノリノリだったじゃねえか!」

「そうだよ、あの熱意はどこにいったんだよ、人見!」

「人見、俺たちは仲間だろ、何とか言ってくれよ!」

もちろん、男子たちからはそんな非難が飛んでくる。

「黙れ、ケダモノども! おまえらと一緒にするな! 女性を泣かすやつは俺が許さん、全員かかってこい!!」

と、彼らの非難を遮るように腕を横に払いながら叫ぶ。

「きやああ! かつこいい、人見くん!」

「もう頼れる人は人見くんしかないわ!」

「私たちを守ってくれるのは人見くんだけだよ!」

「ふっ……」

その言葉にまた人見はメガネを直しながら頬を赤らめる。

「ひでえ……、ひでえよ……」

「信じられない、まさか、あの人見が……」

「これから、俺たちは何を信じて生きていけばいいんだ……」

うん、むしろ、これからの彼の人間関係が心配になってくるよ……。

でも、これで勝負ありかな、もう戦闘訓練は終りだね、私たちの勝利って事で……。

「さて、麻美たちに、終わったよおつて伝えてこよ……」

と、私は踵を返し、露天風呂の入り口に向かう。

「ナビー、どこへ行く気だ、最終決戦はまだだぞ!!」

人見がなんか言っている……。

「うん……?」

私は振り返る……。

すると、人影が三つ見えた、それも凄いスピードで囲いに向かって行っている人影。

「話を聞いていたんじやなかったのか、ナビー!? 今までのはずべて陽動だ、狩猟班がまだ残っている、やつらがフィニッシャーだ!!」

ええ!?

そ、そう言えば、和泉たち、いなかった気がする……。

「ぐおおおおお!!」

先頭は佐野獺人、その彼が2メートル近い巨体を揺らしながら囲いに突進していく。

「うおおおおお!!」

そして、両腕を囲いの前に張つてある人見のバリア、青銀色の半透明の壁に突っ込む。

「があああああ!!」

バリバリバリつて、放電するような音とともに激しい火花が散る……。

「はああああああ!!」

その雄叫びとともに、人見のバリアが砕け散った……。

そして、そのまま両手を囲いに打ち付け頭を少し下げてどっしりと

構える。

「な、なにをする気なの……?」

呆然とつぶやく。

「いいぞ、佐野!」

すぐ後方にいた和泉が反転して、佐野と背中と背中を合わせる形になる。

ちようど、空気椅子みたいな姿勢。

「こい、蒼!」

「おうさあ!!」

秋葉がそこに向かって全速力で走っていく。

そして……、

「うおおおお!!」

一歩目に和泉のふともも、二歩目に佐野の背中……、

「うおりやああ!!」

三歩目で空高く舞い上がる。

「行つてこい、蒼!! 俺たちの夢を乗せて!!」

和泉が空を見上げて叫ぶ。

「どうりやああ、まあみい!!」

困いの高さは2メートル弱、彼、秋葉蒼はそれを軽々と上回る高さまで飛び上がった……、おそらく、3メートルはゆうに超えている……。

と云うか、飛び越えていくって、もう覗きじゃないじゃない、これはもう立派な侵入よ……。

「まああみいいいいい!!」

ど、どんだけ、福井の裸がみたいのよ……。

そして、秋葉が困いを越える……。

その瞬間……。

困いの向こうから水の壁がせり上がってきた。

ウォーターカーテン……?!

「うおおおお!!?」

秋葉が水の壁にぶちあたって体勢を崩す。

そして、そのまま背中から地面に落ちていく。

「おげああああ!？」

背中からどすんって感じで地面に落ちた……。

「やったあ、決まったあー!」

「見たかあ! これがバンジステーク、にくだけ、ぎよくよ!!」

と、囲いの向こうから福井たちの声が聞こえてくる。

ああ、そっか、バンジステーク、にくだけ、ぎよく、か……、そっ

か、そっか……。

うん?

空からなんか降ってくる。

「あべっ!」

と、それが秋葉の頭にコツンとヒットする。

それは桶、丸いやつ……、丸いやつ……、ああ、これが、ぎよく、か

……。

それにしても、凄い戦いだった……。

でも、あれだよね、いいストレス発散にはなったよね、みんな団結して大盛り上がりだったし、運動会みたいで楽しかった。

東園寺はそれを見越してやったのかな? だとしたら、流石だよ
ね、彼も……。

「あ、ああ……、あ、あの……」

うん? なんか秋葉が地面に座り込みながら言っている。

「あ、ああ……、ご、ごめん、たぶん、折れちゃった……」

ええ!?

秋葉が肩を押さえながら、涙目で言ってるよ!

「だ、大丈夫、蒼、折れたって、どこ!？」

私は大急ぎで彼に駆け寄る。

「ご、ごご、ごごっご……」

震える手で肩の辺りを指差す。

「大丈夫か、秋葉!!」

「無茶しやがって!!」

「秋葉くん、見せて!!」

と、みんなも駆け寄ってくる。

「(こ)こ、(こ)こ(っ)っ……」

「(こ)こね!」

綾原と海老名がすぐに治療にあたってくれる。

「あつくつ、あつくつ、こ、こつちも、頼む……」

と、遠くでも地面に這いつくばりながら手を挙げている人がいた。よく見ると、それは参謀班の南条大河だった。

「あつくつ、ひつくつ、折れた、あばら、折れた……」

その彼が必死に訴えている。

「そ、そつちもか、無茶しやがって!!」

「騎馬から落ちた時か、なんで、早く言わないんだ!」

ああ!? 怪我人多数じゃない!!

「雫は秋葉くん見てて、私は南条くん見てくるから!」

「うん、唯、お願い!」

海老名が駆け出していく。

「私、包帯と消毒液取ってくるね!」

「うん、お願い、翼!」

夏目もロツジに向かい走りだす。

わ、私もなんかしなきゃ!

と、こうして、私たちは夜遅くまで彼らの治療に追われる事となつた……。

第30話 運命を知る

今日も雲ひとつない晴天。

川面を走り抜けてきた風がひんやりとされていて気持ちよく、水面ではぴちゃん、ぴちゃん、と、時折小魚が飛び跳ねて、その音がいつその涼しさを演出していた……。

さらさらと風に揺らされる広葉樹の葉が新緑の香りを運び、同時にその葉が強い日差しから私たちを守ってくれている……。

ここは、ルビコン川。

「いい釣り日和ね……」

ほんやりときらきらと光る川面を見ながら釣り糸を垂れる。

「みんな、悪いな、本当は俺の仕事なのに……」

と、秋葉蒼が石に腰掛けながら申し訳無さそうに話す。

彼は今昨日の怪我の影響で、包帯で腕をつった状態にいる。

そう、骨折の時にやるあれだ。

綾原が言うには、別に骨折はしていないけど、亜脱臼と重度の打撲があるそうなので、念の為の処置としてそうしているらしい。

参謀班の南条大河も同じ、骨折はしていなかった。

もう、大袈裟なんだから、驚かせないでよって話し……。

「気にするなよ、蒼、これも狩猟班の仕事だ」

「そう、そう、それに釣り嫌いじゃないよ、私」

「うん、いいよね、狩猟班のみんなでのんびり釣りつてのも」

みんなが笑顔で答える。

「おっし、釣れた!」

「いいぞ、佐野、もう少しリリースを遅めにするといいぞ」

「うい」

と、秋葉のアドバイスを受けながら釣りをする。

「あーん、またエサだけ取られたあ」

「ナビーは反応が鈍いなあ……、こう瞬間的に手首を返すように」

「ぶー」

彼が身振り手振りで教えてくれる。

この釣り師め、と、苦々しく思いながら、幼虫を釣り針に突き刺す。そして、また川に放り投げる。

ちよん、ちよん、としながらヒットを待つ。

でも、なかなか食いついてくれない……。

「そういえば、昨日の戦闘訓練、どうして麻美を狙ったの？ そんなに人気だったの、麻美って？」

と、暇なので、そんな話題を振ってみる。

ちよつと、気になった事でもあったしね。

確かに、福井って面倒見が良くて、しっかりしている優しい子だから、それなりにファンもいるとは思うけど、でも、みんながみんな福井を好きっていうのにも違和感を覚えた。

男子3人が顔を見合わせている。

「ああ、それはね、ナビー……」

と、秋葉が話し始める。

「昨日、ここで、作戦会議をしたんだよ、みんなでさ……、それで、最後に誰の風呂を覗きたいかって話しになって、それでアンケートを取ったんだよ……」

ああ、なるほどね、それで代表して一番人気の福井麻美をターゲットにしたってわけね……。

謎が解けてすつきりした。

私は釣竿をちよん、ちよん、として魚を誘う作業に戻る。

「で、結果は、まあ、大体均等にばらけたんだよ……、誰が人気って事もなくさ……」

うん……？

「一番人気で3人だったかな……、あとは2人とか1人って感じで、わかると思うけど、3人とか2人の投票があったものだから、0人って人もいたんだよ……、それで、0人つてのはかわいそうだからって話になって、再度決戦投票をすることになったんだ、0人だった人だけで……、そしたらさ、見事に福井だけがまたもや0人だったんだよね……」

はあ？

「それを見た東園寺が怒ってさ、おまえら、もっと福井を見てやれ、つて、いや、おまえが言うなって話なんだけどさ……、で、なんか、盛り上がって、そのまま福井の風呂を覗きに行くぞ！ て、感じで話が進んでいったんだよ」

おい……。

それは、あんまりだろ……。

私、福井の事好きだよ……。

「うん？ ちょっと待って、そのアンケートって、ナビーも含まれているんだよね？ 投票あつたんだ？」

と、笹雪が疑問を投げかける。

「もちろん」

秋葉が断言しやがった……。

「う、うそ……、男子の中にロリコンがいる……、ロリコンがひとり混ぜられている……、怖い、マジで怖い……」

まあ、どうせ人見だろうね、あいつ私のバスタオルくんくんしてたし。

それに、これ、魔法のネックレスもくれたしね。

私は襟元からネックレスを取り出して空にかざしてみる。

「綺麗……」

シルバーでひし形のデザイン、真ん中に赤い宝石がはめ込んであるやつ……。

「それがひとりじゃないんだなあ、めぐみ……、大物がこぞつてさ……」

まだいるのか……、まあ、どうでもいいや……。

「それで、ハルは誰のお風呂を覗きたかったの？」

と、私の話題は嫌だったので、適当に和泉に話を振ってみる。

「どうせ、翼でしょ？ この二人昔から仲いいし……」

「そ、そんなあ……」

と、夏目が恥ずかしそうに視線を逸らす。

「それが違うんだなあ……」

「えっ!？」

夏目が驚いて秋葉を見る。

「聞いて驚くなよ、みんな……、それはな……」

「蒼いいいいい!？」

なんか、和泉が釣竿を放り投げて秋葉のほうに走っていった……。
「言うな、言うなあ! 言ったら殺すぞ、蒼いいい!!」

と、秋葉の胸倉を両手で掴んでガクンガクン揺らしながら大きな声をだす……。

ど、どうした、和泉……。

「あ、あのいつも温厚で優しい和泉さんがキレた、しかも殺すぞって……、い、いったい、なにが……」

佐野までびっくりしているよ……。

「じよじよじよ、じよ、冗談に決まってるだろ、ハル、アンケートは誰が誰に投票したかは秘密って条件でやったんだから、い、言うわけないだろ、はははっ、や、やだなあ、もう……」

と、秋葉が苦しい言い訳をする。

で、今のやり取りを聞きながら気付いたんだけど、私の正面、向こう岸の森の中に誰がいるんだよね……。

広葉樹の陰にと云うより、葛のような下草に隠れている……。

最初は何か動物かな、とも思ったけど、今ははっきりとわかる、あれは人間だ。

「痛い、痛い、許して、ハル!」

「許さん、蒼!」

「もう、喧嘩はやめなさいよお」

と、まだ秋葉と和泉がじゃれていて、それを遠巻きに見てみんなが笑っている……。

そっか、防衛陣を張ってないのか、あれは、人見とか綾原クラスじゃないと張れないんだっけ。

「ねえ、みんな、あそこに誰がいるよ?」

しょうがないので、みんなに教えてあげる。

「え? どう?」

「誰?」

「うん？」

みんなも視線を対岸の森のほうに向ける。

「誰かいるの？」

「どこ、ナビー？」

「ほら、あそこに、私の正面、お花咲いていると」

と、私はその方角を指し示す。

「あ!？」

「動いた！」

そう、茂みに隠れていた人が立ち上った。

それは女性。

ラグナロクの誰かではない、見覚えのない女性。

格好は……、白い民族衣装のようなチュニックとスカート。

色とりどりのビーズのネックレスやブレスレット類……。

髪は薄い……、栗色よりも薄い、亜麻色の髪の毛、それが長く軽く

ウェーブかかって、さらさらと風にそよいでいる。

その頭には花の冠。

顔は……、幼い……、ラグナロクのみんなよりも若い、でも、今の

私よりは上だろう、おそらく15歳前後……。

うつすらと微笑みながら、その大きなエメラルドグリーン瞳で私

たちを見ている……。

「だ、誰……?？」

「現地人……?？」

「だ、だろいな……」

「あ!？」

その彼女が両手を前に広げて、敵意はありませんよって感じでこっちに歩いてきた。

「あつ!？」

「えっ!？」

そして、河原の石に躓いてトテン、と転ぶ……。

なんか、痛がつている、きゅー、きゅー、みたいな声を出して……。

しばらくして立ち上り、服についた砂埃をはらって、また、両手を

前に広げてこつちに歩いてくる……。

そして、また、石に躓いて転がる……。

「きゅー、きゅー」

と、痛がる……。

「あ、あなた、大丈夫!？」

「怪我してない!？」

と、みんなが我に返って、川を渡って対岸に行こうとする。

「待って、みんな!!」

私は止めるけど、みんなはそれを無視して川の中に点在する石を足場にして対岸に渡っていく。

「くっ……」

私も急いでみんなのあとを追う。

第31話 エシユリン

あれば芝居だ……。

ドジっ子プレイだ……。

私も最近よくやるからわかる……。

その証拠によく転ぶ割には服が綺麗、つまり、河原よりも歩きにくい森の中をちゃんと歩いてきた事の証明。

「だ、大丈夫、立てる!?!」

「きゅー、きゅー」

夏目が彼女に駆け寄り、その背中に手を添える。

「きゅー……」

現地人の彼女が涙目になった顔をあげる……。

「怪我はない?」

「ちよつと、膝を擦りむいたみたい」

彼女の膝に血が滲んでいる。

「わ、はっぶ、がっばぷーん」

と、笑顔を作り立ち上がる……。

「けしやふ、けせふい、ほつろー、すっしー、はっばぷーん」

そして、両手を広げて、ひとり一人顔を見ながら笑顔で話す。

「な、何を言ってるの……?」

「わ。わかんない……」

みんなが困惑するけど、そのまま彼女は話し続ける。

「るって、えしゆりん、でつど、ろーす、わ、ちゃつてぷーん」

とか言いながら、私に近づいてきた……。

そして、手を伸ばす。

私はその手を横に払うようにして手首を掴み、内側にひねる。

「きゅー、きゅー……」

そのまま、背中に腕を回して締め上げる。

やっぱりね、一番弱そうな私を狙ってきた。

でも、おあいにく様、私が一番強いだよ。

「きゅー…… きゅー……」

と、痛いのか、自分の肩を何度も叩いて、ギブアップって感じで訴える。

「な、ナビー、ど、どうしたの、やめて」

「い、痛がつているぞ!?!」

くっ、こいつのドジっ子プレイにみんなが気付いてない……。

しょうがないので、少し乱暴に突き放すように彼女を解放する。

「きゅ、きゅー……」

と、解放された彼女は手首を押さえながら涙目で振り返る。

でも、またすぐに笑顔をつくり、両手を広げて話し出す。

「なぎ、るって、えしゆりん、でっど、ろーす、ふ、みーす、うつらぷーん」

一生懸命みんなの顔を見ながら話す。

「なんて言っているんだろ?」

「さあ、なんか、困っているのかな?」

みんなが首を傾げていると、また、現地人の彼女が歩き出し、今度は和泉のほうに向かう。

そして……、河原の石につまずいて、トテン、と、転倒する……。

「きゅー、きゅー」

くっ……。

また、ドジっ子プレイか……。

負けない。

「だ、大丈夫!?!」

と、心配した振りをして、彼女に駆け寄り、とおおりやああ!! と、石に躓いた振りをして、前方回転受身!!

くるっ……。

「えうっ!?!」

いってええええええ!?!

背中に石あたっちゃった!!

「あう、えう、い、痛い、た、助けて……」

痛すぎて、涙がぼろぼろ出てきた……。

「な、ナビー、大丈夫!?!」

「えっ、い、今、自分で飛ばなかったか!？」

と、みんなが心配して駆け寄ってきてくれる。

「なぎ、るって、きゅーぷーん……?」

現地人の彼女が心配げな顔をして、うずくまる私の両脇にそっと手を添える。

「ううう……、きゅー、きゅー」

「るって、きゅーぷーん」

と、笑顔で私を立たせ、背中についた小石とか枯れ草をはらってくれる。

「うう……、痛いよお、痛いよお、きゅー、きゅー……」

零れた涙を指ですくう。

でも、この子、いい子かもしれない。

「あえい、きゅーぷーん……、あえい、きゅーぷーん……」

優しく背中をさすってくれる……。

うん、いい子だ。

「ありがとう、きゅーぷーん」

と、少し笑ってお礼を言う。

すると、彼女も笑顔で返してくれる。

なんか、お友達になれそう。

「よかった、なんともなさそうね……」

「びっくりしたよ、もう……」

みんなも、私たちがなんともなさそうなのを見てほっと胸を撫で下ろす。

「るって、えしゅりん。わ、はっぱぷーん?」

うん?

「私? 私はナビー、ナビーフィユリナ・ファラウェイ」

なんとなく、名前を聞いている気がしたので自己紹介してみる。

「ナビー!」

と、彼女が両手を挙げて私の名前を呼ぶ。

「ナビー! ……るって、えしゅりん!」

今度は自分の胸に手をあてて言う。

「ああ、エシユリンね、それがあなたの名前なのね？」

「るって、はっば、エシユリン！」

と、万歳して嬉しそうに答える。

「るって、はっば、ナビー！」

私も真似して万歳して言う。

「るって、はっば、エシユリン！」

今度は飛び跳ねながら万歳する。

「るって、はっば、ナビー！」

私も同じように飛び跳ねる。

「るって、はっば、エシユリン！」

「るって、はっば、ナビー！」

なんか、楽しくなってきた！

「るって、はっば、エシユリン！」

「な、ナビー、言葉わかるの？」

と、何度かそうやっていると思目に尋ねられる。

「ううん、なんとなく！ るって、はっば、ナビー！」

それから、私たちは十回くらいそうやって飛び跳ね続けた。

「でも、この子って、どこの子なんだろう？」

「うーん、迷子って歳でもなさそうだしな……」

「いや、遭難したって、可能性はあるだろ、蒼」

「とりあえず、うちで保護しておく？」

と、みんなが話し合っている。

「なぎ、るって、けしやふ、けせふい、ほつろー、すっしー、でっど、

ろーす、あ、がっば、ぷーん」

彼女がゆっくりと、身振り手振りで、なんとか自分の意思を伝えよ

うとしている。

「うーん、わからん……」

「なんだろうな、いったい……」

「なんか、ここう、意味がわかりそうで、わからない……」

「歯がゆいね……」

みんなが途方に暮れている。

「はあい、はあい！」

と、私は元気よく手を挙げる。

「ど、どうしたの、ナビー？」

「もしかして、わかったの？」

「うん！」

もう、超ご機嫌だから、サービスしちゃう！

「これ、ドイツ語だよ！」

「えっ？」

「ど、ドイツ語？」

「うん！ 私、少しわかるから話してみるね！」

「おお！ さすがアングロサクソン！」

「頼んだぞ、ナビー！」

私はエシユリンに向き直りドイツ語で話し始める、

「フンバルト！ ミーデル！ モーデル！ ヨーデル！ スゴイデル

！」

と。

「ふんばると？」

エシユリンが首を傾げる。

「そう！ フンバルト、ミーデルの！」

「ふんばると、みーでるの！」

エシユリンが万歳しながら飛び跳ねて復唱してくれる。

「フンバルト、ミーデルの！」

私も飛び跳ねてもう一回言う。

「ふんばると、みーでるの！」

「フンバルト、ミーデルの！」

もう、楽しすぎ！

「ふんばると、みーでるの！」

「フンバルト、ミーデルの！」

私たちは何回もそれを繰り返す。

「ちよ、ちよつと、それ、ドイツ語じゃない……」

「と、と云うか、そ、それ、下ネタ？」

「だ、誰か、ナビーを止めて！」

よし、このくらいでいいだろう、次のステップに進もう。

「うーん、ドイツ語じゃなかったみたい……。うーん、何語だろうなあ……」

と、腕を組んで考え込む仕草をする。

「あ、わかった！ これフランス語だよ、私、少しわかるから話してみるね！」

手をポンと叩いて言う。

「ちよちよ、ちよつと待って、ナビー……」

夏目の制止を無視してエシュリンに向き直り、

「ぼつとーん!!」

と、おもいつきり拳を突き上げながらジャンプする。

「また下ネタだあ!!」

「やめて、ナビー、下品な事言わないで！ せっかくかわいいのに!!」

「誰か、ナビーをとめろお!!」

みんなに羽交い絞めにされて止められた……。

「は、はなして、みんな！ まだ、イタリア語バージョンとかロシア語バージョンが残ってるんだから!!」

「駄目だ、もうやめろ、ナビー、キミの品位が！」

「ああ、ナビーのかわいいイメージが崩壊していく！」

こうして、私たちは謎の少女エシュリンを居住区ラグナロクに連れて帰る事にしたのであった……。

第32話 わっぱ、ぷーん

ラグナロク広場の居住区の真ん中にはひとときわ大きなロτζジが建てられている。

ここは居住用とかではなく、みんなが集まって話し合いをする場所、会議室として使用するために建てられたロτζジだ。

基本的には班長会議をする場所だけど、昼間の数時間は私のお勉強のための教室としても使用されている。

なので、私にとっては、あんまり近寄りたくない場所のひとつになっっていた。

ロτζジの中は広く、中央に大きなテーブルがひとつ、椅子は10脚くらい、それと、折り畳み式の椅子が20脚くらい壁にたてかけある。

全員分の椅子が用意されているけど、ロτζジの広さ的には全員を収容する事はできないと思われる。

立ち見だったら、いけるかな……。

それくらいの規模のロτζジだ。

そうそう、このロτζジには変な名前が付けられている。

えっと、確かあ……、割と普通なナビーフイユリナ記念会館……、だったかな……。

うん、かなり、ネタにされてるね。

「それで、どうするかだけど、彼女の知らない村まで送り届けるか、または、ここで保護して、彼女の家族が迎えにくるまで預かる、この二つしかないと思うけど、他に意見はない？」

と、女性班の班長、徳永美衣子が口を開く。

ちなみに、今、この割と普通なナビーフイユリナ記念会館に集まっているのは、東園寺公彦、人見彰吾、徳永美衣子、福井麻美、といった各班の班長と狩猟班のメンバー全員、それと、あの謎の少女エシユリンの12人になる。

その12人がテーブルを囲んで着席し、エシユリンの処遇をどうするか話し合っているところ。

「追い出すわけにもいかないから、その二つのどっちかでもいいよ」

「でも、名前しかわからないんでしょ？ エシユリンだっけ、その子？」

そのエシユリンはお行儀よく椅子に座って笑顔を振りまいている。

「そうだね、エシユリンだね、言葉が通じないから、他の事は何もわからない」

と、エシユリンの代わりに笹雪が答える。

「そっか、それは問題だね……」

福井が表情を曇らせる。

「そう、問題だ、まず、どうするかを議論するより、その子が誰で何の目的でここに来たのかを詮索するほうが先だろう。ただの迷子、若しくは遭難ならばいいが、これが、もし、この間の連中の仲間で、我々への偵察、或いは工作活動だった場合は対処が必要になる」

なんか、くんくんが偉そうな事言ってる……。

間違った、人見だった。

「わ、ぷーるす、はつぶ、ぷーん？」

うん？

隣に座っているエシユリンが私の顔を見ながら何か言っている。

「わ、ぷーるす、ぷーん？」

ああ……。

「うん、大丈夫だよ、飲んでも平気だよ」

と、私は自分のカップを口に運んで麦茶をひと口飲む。

それを見てエシユリンも一口飲む。

「ら、はーれす、ぷーん……」

「うん、おいしいよね」

と、お互い笑い合う。

なんか、言葉なんて、ニュアンスだよね、なんとなくわかるよ。

「わ、ぴちやって、るいーす、はつぶ、ぷるす、らっはちやりきゅりー、ぷーん」

ごめん、前言撤回、なんて言ってるかさっぱりわかんない。

「人見の意見はもつともだが、実害の有無で判断する。可能性があるだけでは根拠が薄い、今現在実害がない以上、対策を論ずるのは早計

なんか、気付いたけど、必ず語尾に、ぷーん、つてつけるんだよね。
日本語の語尾にもつける。

たぶん、敬語か敬称なんだろうとは思うけど、実際はどうなんだろうね。

「めえー！」

「めええー！」

と、牧柵の中に入ると、すぐにシウスたちが駆け寄ってくる。

「ぶるるうー！」

ウエルロットもきた！

しかも、また助走をつけている！

お、前足をしきりにかいているぞお。

「よーし」

と、私も姿勢を低くして……、ダツシユ！

そして、お互い近づくと……、走る速度を緩めて、歩く感じになっ

て……、最後は止まって、頭をコツン、と。

「ぶるるうー！」

「るるるうー！」

お互い頭をぐりぐりしあう。

「がるるるうー！」

額とか頬を使ってぐりぐりしてやる！

「ぶるるるう……」

と、ウエルロットが頭を下げて後退していく。

「うん、負けを悟ったか、もう少し修行が必要ね」

私は腰に手をあてて勝ち誇る。

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「びよおー！」

と、牧舎の中からピップたちの鳴き声が聞えてくる。

ウエルロットがいるから、籠から出してあげられないんだよねえ

……。

そういえば、和泉、ちゃんと話してくれたのかな、ウエルロットの

件……。

仔馬用の牧柵がないと、ひよこたちをお外に出してあげられない……。

たぶん、作るとしたら、この隣だけど……、誰もいない……、さらさらと草花が生い茂る草原が広がるのみ……。

「作業はまだか……」

ふー、と、一つ溜め息をつく。

あとで、ウエルロットを牧舎に入れて、ひよこたちをお外に出していっぱい遊んでやろ。

「めええ！　めええ！」

うん？　チャフが鳴いている。

「わっば、ぷーん、わっば、ぷーん」

「めええ！　めええ！　めええ！」

ああ!?

エシユリンがチャフをぶんぶん振り回している！

しかも、前足二本と後ろ足二本をそれぞれ両手で掴んで、ジャイアントスイングするみたいにくるぐると！

「わっば、ぷーん、わっば、ぷーん」

「めええ！　めええ！　めええ！　めええ！」

楽しそうにまわしてるよ！

「やめろお！　チャフをいじめるなあ!!」

私は大急ぎで、エシユリンにタツクルしてチャフを奪いとる。

「チャフ、大丈夫……?」

優しく草の上に置いて立たせる。

「めええ！」

と、チャフは元気よく鳴き、勢いよく草を食べだす。

「よ、よかった、怪我はしてないみたい……」

私はそつと胸を撫で下ろす。

「きゅー、きゅー」

私に弾き飛ばされたエシユリンがそんな事を言いながらゆつくりと立ち上がる。

「エシユリン、チャフをいじめないで、大事にしてあげて」と、注意する。

「わ、ぱーす、ぷーん、わ、ぱーす、ぷーん」

すると、エシユリンは両手と顔を何度も左右に振り、誤解です、つて感じで否定を繰り返す。

「うーん……う？」

私はちよつと眉間にしわを寄せる。

「わっぱ、あえい、きゅー、ぷーん、ぽぽつろ、みっちやきやりゆるりー、ぷーん」

うーん、エシユリンが一生懸命何かを説明しようとしているけど、全然わかんない……。

「めえ！」

と、今度はシウスがコロんと転がって足を空に向ける。

「わっぱ、あえい、きゅー、ぷーん」

エシユリンがシウスを指して言う。

そして、近づいていって、シウスのお腹を撫でて……。

「わっぱ、ぷーん、わっぱ、ぷーん……」

そう言いながらシウスの足を掴む。

ああ!?

また、やる気か!!

と、私は大慌てでエシユリンとシウスの元に駆け寄る。

「るって、でつど、ろーす、ぷーん」

でも、エシユリンは来ないで、つて感じで私を制止させる。

「うん？」

困惑する。

そして、エシユリンはゆっくりシウスをまわし出す、ジャイアントスイングみたいに……。

うう……う？」

「わっぱ、ぷーん、わっぱ、ぷーん」

「めえ！ めえ！ めえ！」

うーん、シウスの鳴き声からは、別に苦しいとか嫌だとかそんな印

象は受けない……。

やがて、エシユリンはジャイアントスイングをやめて、シウスをそっと地面に下ろす。

「めえー！」

すると、シウスは元気よく立ち上がり、勢いよく草を食べだす。

「うーん？」

もの凄い勢いでむしゃむしゃ食べてる……。

「きゅー、ぷーん……、きゅー、ぷーん……」

エシユリンが胸のあたりを押さえて、苦しそうな顔をしながら言う。

「わっば、ぷーん、わっば、ぷーん」

と、今度は笑顔になり、さっきのジャイアントスイングみたいな事をやる。

「るって、でつど、ろーす、ぷーん！」

そして、お腹をなでなでしたあと、元気よく両手を挙げてジャンプする。

うーん？

つまり、胸に詰まった食べ物が苦しい……、それで、ぐるぐるまわすと、それがお腹に下りてすつきり？

そういう事？

「めええー！」

今度はチャフがコロンと転がる。

「きゅー、ぷーん、きゅー、ぷーん」

エシユリンがチャフを指しながら言い、私の顔を見る。

「やってみろって？」

うーん……。

私はおそるおそる、チャフの足を掴む、
い、痛くないのかな……。

「わっば、ぷーん、わっば、ぷーん」

彼女が身振り手振りであつてくるまわすようにと促してくる……。
しょうがない……。

そつと、そつと、丁寧にゆっくり……。ぐるぐるとまわしてみる。

「ぱっわ、ぷーん、わっば、ぷーん」

「めええー！ めええー！ めええー！」

おお？

なんか、チャフが気持ち良さそうにしてる！

「めええー！ めええー！ めええー！ めええー！」

「あはっ、なんか、楽しくなってきた！」

「わっば、ぷーん、わっば、ぷーん」

そして、十回転くらいしてから、そつと、チャフを地面に下ろす。

「めええー！」

シウスの時と同じように、チャフも元気よく立ち上がり、そして、凄い勢いで草を食べはじめる。

「おおー！」

そつか！ シウスたちがよくコロンと転がって足を上に向けるのは、草がうまくお腹に入らなくて苦しかったからなんだ！

そんな理由があったなんて知らなかったよ！

さすが現地人、現地の動物に詳しい！

「るって、でつど、ろーす、ぷーん？」

エシユリンが笑顔で私に言う。

「うん、平気だったね、ありがとう、エシユリン」

私も笑顔で返す。

「めえー！」

「めええー！」

ああ！ またシウスとチャフがコロンと転がった！

「わっば、ぷーん」

「うん！ わっば、ぷーん！」

と、それから私たちはシウスとチャフがコロンと転がるたびに彼らを見るみるまわし続けた。

第33話 ヒンデンブルク広場にて

道は狭く歩きにくい。

道幅はどうだろう、おそらく2メートルもないだろう。

また、両側に広がる広葉樹の森がその枝を使って空を覆い隠し、道を薄暗くし、歩き辛い道をさらに歩き辛くしていた。

ルビコン川に向かう道と比べたら雲泥の差がある。

あちらは水路も通っている事もあって、道幅は広く、舗装はされていないものの人通りも多く、道は堅く踏み固められている。

でも、こっち、ヒンデンブルク広場に向かう道は酷いものだった……。

はつきり言つて泥道、雨か湧き水の影響かはわからないけど、あちこちに泥の水溜りができている。

私たちはそれらの水溜りを避けながらヒンデンブルク広場に向かう。

「めえ……」

「我慢してね、シウス……」

私に抱っこされたシウスにそう声をかける。

「めええ！」

「よし、よし、大人しくしてね、チャフ」

隣にはチャフを抱っこした夏目翼もいる。

「どう、どう！ ウエルロット！」

そして、先頭を歩くのは、ウエルロットを引いた和泉春月。

ウエルロットの首には布で作った首輪がはめられている。

一人で勝手に森の中に入らないようにするためだ。

シウスとチャフを抱っこしているのも同じ理由。

別に逃げ出すのを心配しているわけではない、彼らは私が呼べばすぐに戻ってくる。

でも、森の中に入ってしまつたら、そこは危険がいっぱい、何か得体の知れない肉食獣がいて食べられてしまうかもしれない……、それを危惧しての処置だ。

「ナビー、ヒンデブルク、あえい、るって、ぷーん？」

「うん、もうすぐだよ、エシユリン」

亜麻色の髪の少女、エシユリンもうしろからついてきている。

ちなみに、今ヒンデンブルク広場に向かっているのは、私と夏目と和泉とエシユリンの4人。

その目的はもちろんウエルロットたちを放牧するためだ。

そして、私たちは彼らを見守りながら草刈をする。

午後いっぱいそんな感じで過ごす予定。

「ナビー、るって、光？　ぷーん」

エシユリンが道の出口を指して言う。

彼女がラグナロクに来てから三日、言葉はまだまだ不自由だけど、それでも簡単な単語も覚え、最低限の意思疎通はできるようになってきていた。

たぶん、私が現地の言葉を覚えるより、彼女に日本語を学んでもらって、それで通訳になってもらったほうが早いと思う。

「ついたあー！」

と、私は少し駆け足になって、ヒンデンブルク広場のほうに走っていく。

距離にして1キロくらいだけど、シウスを抱いてぬかるむ道を歩いてきたせいで時間がかかってしまった。

たぶん、30分くらい。

暗いところから出てきたから光り輝くヒンデンブルク広場の草花が凄くまぶしい……。

私はまぶしすぎて、目を固くつむって顔をそむける。

そして、ゆっくりと瞼を開きながら明るさに目を慣らしていく。

「おう、ナビー、来たか！　相変わらずかわいいな！」

「大きくなったら、俺と結婚しような！」

と、広場の真ん中のほうからそんな大きな声が聞えてくる。

「大河！　悠生！」

そう、広場の真ん中で大きく手を振っていたのは、参謀班の南条大河と青山悠生だった。

その彼らの後ろにはくくんもいる。

くくんは私と目が合うと微かに笑い、そして、すぐさま視線を下に戻して作業を再開する。

彼ら参謀班は暇さえあればヒンデンブルク広場に来て発掘作業を行っていた。

その彼らが今いる場所は、あの大破した飛行船の中、外壁のほとんどが崩れ落ち、中が丸見えになっていたので、その作業風景がよく見える。

また、骨組みだけが残っているせいか、正面から見ると、ものすごく大きなクモの巣に見えて、なんとも不気味な印象だった。

「めえー！」

と、シウスが身をよじる。

「あ、ごめんね、シウス」

私は急いで牧柵のほうへ向かう。

最初のイメージではヒンデンブルク広場全体を放牧地にすると思っていたけど、この広場全体を柵で覆うのはさすがに無理だったらしく、結局出来上がったのは直径30メートルくらいの小さな放牧場のみ。

まっ、それでも管理班が三日がかりで作ってくれたものだから感謝しないといけないけどね。

おかげで、ラグナロク広場の牧柵にピップたちを放し飼いにしておけるよ。

「そおれ、行ってこい、ウエルロット！」

と、和泉がウエルロットの首輪を外して放牧場に解き放つ。

「ぶるるうー！」

ウエルロットが嬉しそうに放牧場を走り回る。

「チャフも行っておいでえ」

「シウスも行っておいでえ」

と、仔ヤギ二頭も放牧場に放す。

「めえー！」

「めええー！」

彼らも大喜びで走り回ってウエルロットのあとを追う。

天気の良い日、気持ち良い風のそよぐ草原をウエルロットたちが元気に走り回る……。

「ああ……、いい日だなあ……、こんな日がいつまでも続くといいなあ……」

心からそう思う。

「それじゃ、私たちも仕事に取り掛かりましょうか」

「そうだね」

「おう！」

と、夏目に言葉に和泉と私が返事をする。

「じゃあ、エシユリンはシウスとチャフが、きゅー、ぷーん、したら、わっば、ぷーん、ね！ あとウエルロットが柵を飛び越えないか見ててね！」

「るって、わっば、ぷーん」

私の言葉にエシユリンが手を振りながら笑顔で答えてくれる。

「よーし、やるぞお！」

と、半袖だけど、腕をまくる仕草をしながら、草刈の準備をしている二人の元へ歩いていく。

「はい、夏目さん」

「ありがとう、和泉くん」

「はい、ナビーも」

「ありがとう、ハル！」

和泉が草刈道具を渡してくれる。

「よーし、今日はどこを攻めようかなあ……」

と、私はカマではなくナタをぶら下げながらヒンデンブルク広場内の草の多そうなところを値踏みしてまわる。

「ここもあらかた探しつくしたか？」

南条の声が聞こえる。

「ああ、見えるところはな……」

「となると、土の中か、人見？」

「その可能性が高い……」

「くそつ、草が邪魔だな！」

と、南条が雑草を蹴り飛ばす。
はーん。

参謀班、また悪巧みしてるなあ……？

しようがない、私が手伝ってやろう。

「はあい、はあい！」

と、私はナタを振り回しながら、彼らのところに走っていく。

「ひいええ!? なんか来たあ!!」

「ちつちやい殺人鬼来た!!」

「ふつ、さすがの我々もあれには敵わんかもしれんな……」

飛行船の焼け焦げた骨組みを避けながら走っていく。

「ナビー、気をつけろよ、もしかすると、まだ刃物類が落ちているかもしれないからなあ！」

と、南条が忠告するも……。

「あっ!？」

「な、ナビー!？」

私は何かにつまずいて盛大に転倒してしまう。

「ひっ!？」

「ぎゃっ!？」

転んだ拍子に手にしたナタがすっぽ抜けて彼らのほうに勢いよく飛んでいった。

「な、なんで!？」

「よ、よける!!」

「おわっ!？」

と、彼らが大袈裟に避ける。

そして、ナタは飛行船の骨組みにあたって不快な音を立てながら地面に落ちる。

「きゅー、きゅー」

いたーい、何よ、もう……。

と、私は髪についた枯れ草などを顔をぶるぶるして払う。

第34話 ドラゴン・プレッシャー

私は自分を転がしたのは何かとうしろを振り返る。

でも、見えるのは青々とした草むらのみ……。

「ナビー、大丈夫か!？」

「怪我はないか!？」

「どれ、見せてみる!!」

私を心配して参謀班の3人が駆けつけてくれる。

「うーん、大丈夫、心配しないで……」

と、私は乱れた長い金髪を手で整える。

「本当か？ 立てるか?」

「挫いたりしてないか?」

「膝擦りむいてないか? どれ、見せてみる」

みんなが心配そうに私の顔を覗き込んでくる。

「もう、過保護なんだから……、大丈夫だってば……、ほら!」

と、私は元気よく立ち上がり、パツと体操選手みたいに両腕を開く。

「大丈夫そうだな、よかった……」

「それにしても、何につまずいたんだ? 何も無いはずなんだが……」

「わかんない、あの辺でつまずいたあ」

と、私はつまずいた辺りの草むらを指差しながら言う。

「この辺か……?」

「何かあるのか?」

「探してみよう」

参謀班の3人が雑草を足でかき分けながら辺りを搜索する。

「人見、これだ、見てくれ」

青山が何か見つけたみたい。

「お、でかしたぞ、ナビー、ビンゴだぜ」

「これか、あの魔力の正体は……」

「うーん? なぁに?」

と、私も背伸びをして、彼らのうしろからそれを覗き込む。

それは金と銅の中間みたいな色をした丸い棒。

それが斜めに突き刺さって地面から伸びている。

杖？ そう見えた、先端にシルバーで、天使のような彫刻が施されていたから。

「どうしたの、ナビー？」

「何かあったのか？」

「あ、うん、それにつまずいて転んじやった」

と、騒ぎを聞きつけて来てくれた夏目と和泉に事情を説明する。

「なんなのこれ？ 彰吾たちが探していた物ってこれ？」

人見に尋ねてみる。

「ああ、これだ……、不明な、微弱な魔力反応があつたものでね……」

「へえ……」

「だが、たいした代物ではない、場所も特定できないような微弱な魔力反応だったから……、ただ、その魔力を帯びた物が刃物類であつた場合は話が別だ、東園寺のバーサーカー・イン・ザ・ブレードや鷹丸のファルケン・シユベルトの切れ味は知っているだろ？ 魔力を帯びるとあれほどの切れ味になる……、もし、それと気付かず踏みつけてしまつたら大変だ、怪我じゃ済まない……」

確かにね、魔力が込められていなくても、剥き出しの刃物がその辺の草むらに落ちているだけでも大惨事になるよ。

「じゃあ、さっさと処分するか……」

「おうけー、やっちまおう」

と、青山と南条が、その杖みたいな棒に手をかける。

「せーの、で、いくぜ？」

「おう」

「せーの」

そのかけ声で杖のような棒をひっぱる。

「おう？」

「な、なんだ？」

二人の手が止まる。

「どうした？」

人見が怪訝そうな表情で尋ねる。

「い、いや、なんか、おかしい……、びくともしない……」

「ここ、地面だよな、土だよな？　なんで、びくともしないんだ、まるでコンクリートにでも突き刺さっているみたいだ……」

「あ、いや、これ、でかいんだ」

「ああ、そういう事か……」

と、彼らが何度も棒をひっぱりながら話す。

「船体の一部か？」

「そうかもしない、人見……」

「そうか……、なら、撤去は無理だな……、一応、本当に船体の一部か確かめよう、掘るぞ」

「おーけー、人見、シャベルだな」

「了解」

と、彼ら3人がシャベルを取りに行く。

「それにしても、綺麗な細工だよね……」

「そうだね、材質はなんだろう？」

参謀班がシャベルを取りに行っている間に夏目と和泉がその棒に近づいて彫刻部分を観察する。

私も何気なくそれを見ようと近づく。

濃い金色の棒と、その先についた銀色の天使の飾り……。

「うーん……」

よく見えん……。

私は顔を傾けて、その天使の飾りと角度を合わせる。

「うーん……、うーん……」

そして、その棒を掴んでさらに顔を傾ける……。

「うーん……」

顔を精一杯傾げるけど、あっちも逃げるように傾いていくぞお？

「あつー！」

「な、ナビー!？」

そのまま、トテン、と、身体ごと横に倒れた……。

な、なぜ……。

「えっ、倒れた？」

「な、なんだ、これ、剣……?」

と、夏目たちが言っている。

「うーん……?」

半身を起こしてそれを見る……。

私のお尻の下には濃い金色の棒がある、ちょうど私が跨る感じ、そう、魔女スタイルだ……。

そして、私の後方には……。

大きな、それは大きな刀身があった……。

刃渡り1メートルは優に超える大きな刀身……。

それは分厚く片刃、みねの部分には白いガードが付いていて、それに見た事もない青い文字がびっしりと書き込まれている。

「ど、どうした、ナビー!?!」

「ぬ、抜けたのか!?!」

と、人見たちも駆けつける。

「なんか、倒れたら、出てきた……」

「倒れた?」

「あんなにがちり埋まっていたのに?」

「ナビー、ちよつと、どいてくれ」

「うん……」

と、私は棒を跨いで立ち上がる。

「で、でかいな……」

「なんだ、これ……」

あらためて見ると、ホント大きい……、たぶん、棒、柄の部分を合わせる、私の身長より少し大きい、150センチくらい、いや、もつとあるかも……。

しかも威圧感も凄い。

「まあいい、掘り起こす手間が省けた……」

と、人見が柄を握る。

「な、に……?」

持ち上げようとするけど、ぴくりとも動かない。

「な、南条、青山、ちよつと、手伝ってくれ」

「おーけー、人見」

「重いのか？」

と、今度は3人がかりで持ち上げようとする。

「う、うそだろ……」

「え……？」

またぴくともしない……。

「い、和泉も頼む……」

「お、おう……」

4人でも動かない……。

「な、夏目さん、あと、ナビーも……」

最後はみんなで持ち上げる事になった。

なんで、私まで……、と、思いつつ柄の部分握る。

「いくぞ、せーのー！」

と、簡単に持ち上げられた。

しかも、超軽いよ。

なに、もしかして、今までのお芝居だったの？ 騙された……。

と、私は手を離す。

「ぎゃああああ!!」

「うわああああ!!」

「おげああああ!!」

私が手を離れた途端、みんなが支えきれずに剣はそのまま倒れた。

「な、なんで……」

「び、びっくりした……」

「こ、腰が折れるとかと思った……」

な、なんで、超軽かったよ……。

私はもう一度剣の柄を握ってみる……。

そして、力を入れる事もなく、すつと剣は持ち上がる……。

「なあんだ、やっぱり軽いじゃん」

と、私は垂直に剣を立てて、その美しい刀身を見上げる。

「な、なんで……？」

「うそだろ……？」

「し、信じられん……」

「ちよ、ちよつと、ナビー、貸してみても……？」

「うん、はい、ハル」

と、私は和泉に剣を手渡そうとする……。

「うっ」

うん？

あ、駄目だ、僅かに力を抜いて渡そうとした瞬間、和泉がバランスを崩した。

私はとつさに両手に持ち替えて、剣のウエイトが彼に行かないようにする。

あぶない、あぶない……、このまま渡していたら、和泉の指とか手首が折れてたよ……。

「あつっ……」

それでも、和泉が手首を押さえて痛そうに顔をしかめる。

「こ、これって、ナビーしか持てないの……？」

「み、みたいだね……」

うーん、なんだろ、いったい……。

「優れた剣は持ち主を選ぶと言うが……」

「じゃ、じゃあ、ナビーは選ばれたって事……？」

「ああ、おそらく……」

選ばれちゃったのかあ……。

と、また剣をかざして、綺麗な刀身を見上げる。

でも、選ばれた感じもするんだよね、この剣を持っていると身体が熱くなるの、なんか、不思議な力が働いている感じ。

それにしても熱い、身体が熱いというより、胸の辺りが焼けるように熱い……。

と、私は胸の辺りを手でまさぐる……。

あつちついいいい!?

ネックレスが超熱くなってる!!

と、私は慌てて、剣を地面に突き刺して、両手でネックレスを外そうとする。

「あ、あれ……う？」

熱くない……。

手の平に乗せて、指先でトントンとしてみる。

うん、常温。

「これは、ナビー専用だな」

「うん、やっぱりね、ナビーって特別だったんだよ」

「いいなあ、ナビー」

うーん……？

胸に手をあてながら、剣の柄を握ってみる……。

そして、力を入れて、引き抜いた瞬間……。

あっちついいいい！

と、ネックレスが高温を発する。

剣から手を離すとすぐに冷たくなる……。

ははーん……。

わかった……。

このネックレスは、魔力を込めたアミュレット、それは、ここヒンデンプルク広場にあったもの……。

効力は身を少し軽くしてくれるというもの……。

でも、効果はほとんど実感できなかった。

それもそのはず、これは身を軽くするものではなく、この剣を軽くするアイテムだったのだから……。

この剣とこのネックレスはセットだ。

ふふふっ……。

みんなには黙ってよつと。

「それはキミの剣だ、名前を付けてくれ」

「名前？」

と、人見が言ってくるので聞き返す。

「ああ、そうだ、その剣の名前だ。今のままでは放出魔力が微弱すぎて感知できない。だから、名前で紐付けして感知しやすくするんだ」

ああ、だから、みんな武器に変な名前を付けてるんだ、東園寺のバーサーカー・イン・ザ・ブレードとか人見のミスティック・オーバーロー

ドとか。

「なんでもいいぞ、好きな名前を付けてくれ、それで関連付ける」

うーん……。

「うーん……、うーん……」

悩むなあ……。

私はまた剣を空にかざして刀身を見上げる。

太陽の光が飛行船の骨組みに反射し、複雑な光がこの大剣に届く……。

なんか、光の加減か、ツバ、ガードの部分が竜の横顔のように見える……。

ドラゴンねえ……。

そして、この分厚いブレードの重厚な威圧感……。

うん、そうだね、決めた。

思いつきり腕を伸ばして天に掲げる。

「ドラゴン・プレッシャー」

そう、この大剣の名前はドラゴン・プレッシャーだ。

第35話 ほのかな杞憂

この日の昼食も天気の良い青空の下、みんなが揃ってから食事を摂りはじめた。

「なあ、ルビコン川に橋を渡さないか？」

「おお、いいアイデアだな、でっかい吊り橋だな」

「俺は風車が欲しい、ここにでかい風車があったら壮観だろうな……」

「風車かあ……、展望台みたいなのもいいよな、見張り台にもなるし」と、生活班の男子たちが夢を語りながらポトフをすすする。

「ナビーだけじゃなくて、私たちも勉強をはじめないといけないんじゃないのかな？」

女性班の鹿島美咲の声が聞こえてくる。

そう、なぜか私だけが勉強をさせられている。

今日も午前中いっぱいやらされた。

算数と社会。

みんなもやればいいんだ。

「そうは言ってもね、みんな忙しいし……」

「うん、教科書もないし、そもそも誰が教えるの？」

と、他の女性班の面々は否定的。

「うーん、厳しいかなあ……、教科書は参謀班に作ってもらうしかないと思うけど、それも、やってくれるかどうか……、一応、班長会議でかけあってみるよ」

と、班長の徳永美衣子が話をまとめる。

まあ、断言してもいいけど、それは廃案になるよ、だって、誰も勉強なんかやりたくないもん。

私は猪肉の燻製をむしやむしやと咀嚼しながらそんな事を考える。それよりも、昨日拾った大剣、ドラゴン・プレッシャーの使い道だよな。

うーん、むしやむしや……。

目をつむりながら燻製を噛み続ける。

あれは超重い、私以外に持てない……、わけではない……。

昨日、帰ってきてすぐに狩猟班の佐野獏人が持ち上げた。

鬼の形相で歯をがりがり、ぎりぎりさせながら、背中から白い蒸気みたいな煙を出して……。

正直言つてあれには恐怖を覚えた……。

人見たち4人がかりでもびくともしなかったやつだよ……。

ホントびつくりした……。

私は片目を開けて佐野を見る。

やつは私と同じように猪肉の燻製をにこにこしながら食べている。

あいつやばい、マジでやばい……。

おっと、話が逸れた、それより、ドラゴン・プレッシャーの使い道だ。

武器として使わなくてもいいんだよね。

私がこのネットクレスとドラゴン・プレッシャーがセットだつて事を内緒にしているのは、他の誰かにあれを使われるのを危惧しているからであつて、別に私が使いたいからではないんだよね。

だつて、ドラゴン・プレッシャーを東園寺や佐野あたりに使われたら大変だよ、絶対に勝てない。

そう、私が一番強くないと安心できないの。

うーん、となると、むしやむしや……。

また目をつむりながら燻製を噛み続ける……。

おもり……、漬物石……、そんな物作つてない……。

うーん、うまみ……、むしやむしや……。

うまみ、うま、うま……。

うまみ……。

「ナビー、ちよつといいか?」

「うん?」

私は片目をうつすらと開ける。

銀縁のメガネの頭の良さそうなやつ……。

くんくんだ。

「彰吾、どうしたの?」

と、噛んでいた猪肉の燻製をぐくりと飲み込んだあとに尋ねる。

「ああ、その、まだ試作品なんだが……」

彼は手にしたシルバーのネックレスを私に見せながら話す。

「以前、キミが今身に付けているネックレスの効果が実感出来ないと言っていただろうか？」

うん、言ったかも。

「だから、試しに作ってみた、この魔法のネックレス、アミュレットを。これからはこれを身に付けて生活してくれないか？ それで着心地や効果など、感じた事をなんでも報告して欲しい、それをこれからのアミュレット作りの参考にしたい」

と、私は彼からネックレスを受け取る。

「ふーん……」

デザインは今身に着けているのと同じ、ひし形のネックレス。

違いがあるとすれば、真ん中にはめ込まれている赤い宝石がない事くらい。

「じゃあ、さっそく……」

と、首に手をまわしてネックレスを着けようとする……。

「あ、ちよつと、待ってくれ、今着けている物を外してからにしてくれ、アミュレット同士が干渉して身体に悪影響が出るかもしれない」

「あ、うん……」

と、元のネックレスを外そうとする……。

「それは回収させてもらう……、キミが持つ事によって何か干渉、共鳴が起こるかもしれない……」

その言葉を聞いて、ぴたりと手を止める。

回収……？

取り上げられるって事？

それはまずい、このネックレスとあのドラゴン・プレッシャーはセットなんだから……、急に剣を持ち上げられなくなったら怪しまれる。

「どうした、ナビー、はやく外してくれ……」

「いや……」

「うん？」

最後に歯磨きをして、あとはお布団に入るだけだけど……。

「ほおら、ナビー、もつと足を開いて」

私たち、狩猟班の女子たちの毎夜の日課がある……。

「ちゃんと、両手も上げて」

笹雪めぐみが私に指図してくる……。

「うう……、恥ずかしいよ、エシユリンも見てるつてば……」

そう、あのみろり色の瞳の現地人の少女、エシユリンも私たち狩猟班のロッジで寝泊りしている。

そのエシユリンがポカーンと口を開けて私たちのやる事を見ている。

「そのまま上体を倒して、腕を伸ばす……」

言われた通りに身体を前に倒して、腕を真っ直ぐ伸ばす。

「次に左足を上げて後ろに伸ばす」

そして、片足を上げて、うしろに真っ直ぐ伸ばす……。

ちゃんと、つま先まで意識して……。

そう、これは、ピラティス。

ヨガみたいなやつ。

女子の世界三大モテ趣味の一つと言われているらしい。

みんなで作っていると恥ずかしくないけど、人に見られていると思うと、なんか恥ずかしいんだよね……。

格好がね、とつても……。

そうそう、世界三大モテ趣味のあと二つはパッチワークとスイーツらしい。

笹雪が教えてくれた。

「次は横になって腰を浮かせて」

くっ、ホント恥ずかしい。

もう、やめた。

私は身体を起こして、膝立ちになって、そのまま夏目のところにちよこちよここと歩いていく。

ふふふっ……。

彼女が腰を浮かせてピラティスしているところに、両足をかきわけ

るように身体をねじこんでいく。

「ナビー？」

そして、そのまま覆いかぶさり、彼女の顔を見ながら言っ

「めええ……」

と。

間違った、それはチャフだ。

「ねえ……、翼……、そんなことよりプロレスやろうよ……？」

とか、言っ

「えっ？」

よし、今度は夏目の首に腕をまわしてマウントポジションだ！

でも、届かない……、しかも、彼女の胸に顔が埋もれてよく見えな

い……、腕を伸ばして夏目の首を探す。

くっ、どこだ、どこだあ！

と、色々まさぐる。

そんな事をしてっていると……、だんだん、彼女が遠ざかっていく……。

ああ!?

身体を夏目の両足に挟まれて引き離されていく！

「プロレスね、ナビー？」

と、そのまま身体を横に倒された。

「ぎゃん！」

そして、また身体を起こされて、今度は反対側に倒された。

「ぎゃん！」

彼女の両足に挟まれたまま、左右に何度も倒されてる！

「ぎゃん！」

「ナビーって軽いよね、30キロないくらい？」

うーん、最近筋肉付いてきたから、もう少しあるはず。

「そうね……、30キロ、くらい、かなあ……」

と、夏目が私の身体を左右に揺さぶりながらつぶやく。

でも、ふり幅はさつきよりも小さい、チャンス！

と、腕を伸ばして彼女のウエストあたりを両手で掴もうとする。

「ぎゃん！」

トテン、と横に倒された！

「ぎゃん！」

今度は反対側！

「ぎゃん！」

ちよつと、待って、なんで、こんなに足腰強いのか!?

「ぎゃん！」

ピラティスやってるから!?

「ぎゃん！」

「あははっ、ナビーが死んじゃうよ、翼」

「でも、ナビーの声もおかしい、何よ、ぎゃんって」

と、今日も狩猟班のロッジには楽しげな笑い声がこだまする。

第36話 望まぬ客

私の誕生日が数日後に差し迫っていた。

それはナビーフイユリナの誕生日ではなく、武地京哉の誕生日なんだけどね……。

もういい、武地京哉の事は一旦忘れよう、そうしよう。

なので、私のお誕生会に向けてみんなが色々と準備をしてくれている。

「プレゼントはなにかなあ」

私は上機嫌で牧舎に向かいながら、そんな事を考える。

女子たちが何をくれるかはわかっている。

お洋服だ。

大概一緒にいるから、わかっちゃうんだよねえ。

真っ白なワンピース、私が今着ているやつよりもかわいいやつ、楽しみだなあ。

ちなみに、男子たちが何をプレゼントしてくれるかはわからない。生活班が使っている工房で夜な夜なみんなが集まって何かを作っているのは知っているけど。

まっ、それは詮索しないで、誕生日の楽しみを取っておこう。

ほどなくして牧舎に到着する。

「エシユリンがいないな……」

現地の人の少女、エシユリンが牧柵の中にいない。

「シウスたちの見張りをしていたはずなんだけど……」

いなくても、柵はしっかりしているから逃げ出す心配はないけど……。

と、私の肩くらいまである柵の棒を掴んで強度を確認する。

うん、しっかりと固定されている、大丈夫だ。

それにしても、エシユリン、どこに行っただろ……。

「ぶるるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

私に気付いたウエルロットたちが駆け寄ってくる。

「ウエルロット！ シウス！ チャフ！」

と、柵の上から手を伸ばして順番に頭をなでる。

「びよ、びよ！」

「びよっぴい！」

「びよ！」

牧舎の中からそんな鳴き声が聞えてくる。

「ピップ！ スカーク！ アルフレッド！」

と、大きな声で彼らを呼ぶ。

「よし、先にピップたちを見てこよう」

私は数歩、柵から距離をとり……。

そのままダツシユ、そして、柵に手をつき飛び越える。

「はっ！」

と、綺麗に着地！

「ぶるるう！」

「めえ！」

「めええ！」

私の見事な着地にウエルロットたちも歓声をあげる。

「びよ、びよ！」

「びよっぴい！」

「びよ！」

「ピップ！ スカーク！ アルフレッド！」

と、彼らの名前を呼びながら、思いつきり両手を広げて牧舎のほうに駆けていく。

「ぶるるう！」

「めえ！」

「めええ！」

ウエルロットたちも大喜びでついてくる！

「よーし、競争だ！」

と、もちろん私が牧舎に一番乗りする。

窓ひとつ無い牧舎の中は薄暗い。

でも、小まめにお掃除をしているおかげで匂いは清潔、ほのかに枯れ草の香りが漂うのみ。

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「びよおー！」

ピップたちが私を呼んでいる。

少し駆け足で彼らのところに向かう。

「おまたせ」

しゃがんで籠の隙間から指を入れてピップたちの頭をなでる。

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「びよおー！」

「いたい、いたい」

私の指を軽くつついてくる。

「よーし、負けないぞお」

と、指を左右に振ったり上下に上げ下げしたりして彼らの攻撃を避ける。

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「びよおー！」

「あー！ 食いついてきた！ はなして、はなして！」

えへへ、なんてかわいいんだろ……。

自然と笑みがこぼれる。

それにしても、ピップたちも大きくなったよねえ……。

もう20センチくらいある。

大きさもそうだけど、一番の変化は羽毛、黄色い産毛じゃなくて、茶色い羽毛が生えてきた。

黄色い産毛と茶色い羽毛が半々って感じでまだら模様になっている。

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「ぴよおー！」

籠の中を元気に走り回って三羽でじやれている。

「うーん、やっぱり狭いよね……」

縦横1メートルくらいの籠だからね。

ちなみに、ウエルロットの牧舎を作る話はなくなった……。

うん、よく考えて見ると、それで解決しないから。

だって、結局放すのは外の牧柵の中だからね、ピップたちが大人になって、自分の身は自分で守れるようになるまではどうしようもない。

「早く大きくなるんだよお、そして、タマゴをいっぱい産むんだよお」と、また指先で彼らの頭をなでる。

「ぴよ、ぴよ……」

「ぴよっぴい……」

「ぴよお……」

気持ち良さそうにしている。

「よしー！」

と、思う存分、ピップたちの頭をなでたあと立ち上がる。

「エシユリンを探しに行こう！ おいで、ウエルロット、シウス、チャフ！」

「ぶるるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

彼らを引き連れて牧舎をあとにする。

「今から翼たちと野菜を採りに行くんだよねえ……」

エシユリンにウエルロットたちを見ていて欲しかったのに……。

牧舎を出て、すぐ異変に気付く。

広場の向こう、ルビコン川に向かう道の入り口に人だかりが出来ていたから。

なんだろうと思ひ、その人だかりをじっと観察する……。

人が多い……。

たぶん、30人くらいいる……。

東園寺とか鷹丸、あと人見や南城、徳永までいる。

そして、その向こう、彼らと対峙しているのは……。

赤や黄色、みろり色などの原色系の民族衣装を身に纏った人々……。

「現地人？」

そう、それはエシユリンや前にラグナロクを襲撃したやつらと同じような衣装を身に纏った現地人の一団だった。

それが20人ほどいる。

「エシユリンか!? あいつが現地人を引き入れたのか!？」

彼女がいなかった理由がわかった。

「ウエルロット、シウス、チャフ、牧舎に戻って、危ないから!」

と、ウエルロットたちを牧舎に押し込んで、開け放たれていた扉を閉める。

「よし!」

私も応援に行く!

と、勢い良く走り出し柵を飛び越えて、人だかりに向かって全速力で走っていく。

「裏切ったな、エシユリン!」

と、一瞬思っただけど、別に戦っている様子はない……。

あ、あれか!?

エシユリンを迎えに来た人たちかもしれない、家族とかそういうやつ。

「ぽ、るっく、わ、ぱーす、ぷーん」

「なんて言っているんだ、エシユリン?」

「えっと、敵ではありません、ぷーん、るって、なのです」

近づくとそんなやり取りが聞えてくる。

「はあ……、はあ……、はあ……」

と、呼吸を整えつつ、みんなのうしろから背伸びをして現地人たちを覗き込もうとする。

うーん、よく見えない……。

よいしょつと……。

隙間から身体をねじ込んで前に進む。

「ナビーー！」

すると、私を見つけたエシユリンが嬉しそうに名前を呼ぶ。

「ナビーー！ こっち、こっち、ぷーん！」

と、彼女に手を掴まれて真ん中に連れていかれる。

「え、エシユリン、こ、これは……？」

ラグナロクのみなどと現地人の集団のあいだに大量の物資が置かれていた。

それは果物、野菜、肉の加工品などの食料をはじめ、衣類、毛布、さらには木彫りの彫刻と多種多様な物で構成されている。

「ぽ、るつく、るって、ちゃーりしりてりー、はーす、ぴゅってちゃりていりー、ぷーん」

と、現地人の年配の、真つ白い長い髭の人が両手を広げて満面の笑みで言ってくる。

「なんて言っているの？」

「お供え物、ぷーん、ナビーー！」

エシユリンが両手を広げて嬉しそうにそう通訳する。

「お、お供え物……？」

困惑する。

「私たちに、つてこと……？」

大量の物資を見ながらつぶやく。

「そう！ エシユリンが、持ってくるように、命令した、ぷーん！」

「はあ？」

「エシユリンは、姫巫女！ ナギ様方の、怒りを、鎮めるために、やってきた、ぷーん！」

ひ、姫巫女……？

まじまじと彼女の顔を見つめる。

第37話 交易

姫巫女か……。

いや、それより、エシユリンって、ここに来てまだ一週間ちよつと
だったよね、なんで、こんなに日本語達人なの……。

私なんて、現地の言葉はさっぱりなのに……。

うん？

「ナギ様方って誰？」

疑問を口にする。

「ナビー、プーン！ それと皆様方です！」

と、エシユリンは私と東園寺たちを手で指し示しながら言う。

「天から舞い降りた、世界を滅ぼす人々、プーン！ 100年前にも
あつた！」

天から舞い降りた……、まあ、確かに旅客機が墜落したんだけどさ
……。

「エシユリンは、ナギ様方に世界を滅ぼさないように、お願いしに来
た、プーン！」

うーん……。

だから、お供え物を持ってきて、怒りを鎮めようとしているのか
……。

「それは完全な誤解で、私たちには世界を滅ぼす力も、その意思もない
……、でも……、どうする、東園寺くん？ 誤解させたまま、お供え
物だけいただいたいちゃう？」

と、徳永がお供え物を吟味しながら東園寺に尋ねる。

「彼女の言葉をそのまま鵜呑みにすれば、それでもいいのかもしれないな
いが……」

東園寺もお供え物に近づき、そして、しゃがみ、手頃な果物を手に
取る。

「東園寺くん、どういう意味？」

彼がその果物の匂いを嗅ぐ。

そして、おもむろに、あの現地人の年配の人にその果物を差し出し、

「おい、食ってみろ」

と、睨みつけながら言う。

「あえい、わ、ぱーす、ぷーん？」

その年配の人が困惑した表情を見せる。

「エシユリン、通訳しろ」

「は、はい、ぷーん。わ、ぷーるす」

「るって、ぷーん」

と、年配の人が東園寺から果実を受け取り、ひと口かじる。

「わっば、ぷーん！」

うまい、といった感じで笑顔をつくる。

「もつとだ」

と、東園寺はジェスチャーを交えて指図する。

すると、年配の人はまたたくまに果実をたいらげる。

「ふむ……、今度はこつちだ」

ニンジン差し出す。

「わっば、ぷーん！」

同じようにたいらげる。

「次がこれだ」

キャベツのような野菜を差し出す。

「わっば、ぷーん！」

またたいらげる……。

「と、東園寺くん……？」

「黙って見ている、徳永……、次はこれだ」

今度は大きな干し肉を差し出す。

「わ、げふっ、わ、わっば、ぷーん」

なんとかたいらげる。

「これはどうだ？」

パンのようなものを差し出す。

「わ、わ、わっば、うぶ、ぷーん……」

苦しそうにたいらげる。

「なるほど……、次はこれだ」

チーズのようなものを差し出す。

「わ、わ、わ、っば……、ぷーん……」

それでもたいらげる。

「ほう……、なら、これはさすがに無理だろ……？」

鳥の手羽先のようなものを差し出す。

「わ、わ、わ、うおうふ、はっ、げほっ……」

ついに食べ切れずに吐き出してしまった……。

「やはりな……」

それを見て、東園寺が立ち上がる。

そして、苦しむ年配の人を見下ろしながら、

「貴様、毒を盛ったな？」

と、勝ち誇った顔で言いやがった。

い、いや、いや……。

「どう見ても、ただの食いすぎだろ!!」

と、思わずツツコミを入れてしまう。

ひどいものを見た……。

「おじいさん、大丈夫……？」

と、しようがないので、苦しそうにしているおじいさんの背中をさす。

「きゅー、ぷーん……、きゅー、ぷーん……」

とか言っている……。

きゅー、ぷーん……。

きゅー、ぷーん？

「ああ?」

きゅー、ぷーん、したら、わっば、ぷーん、しなきやー!

「猿人!」

と、狩猟班の佐野の名前を叫ぶけど、彼はいない……。

「くっ……、公彦! おじいさんの腕を持って、両腕よー!」

「あ? ああ……」

と、東園寺がおじいさんを仰向けに寝かせてその両腕を掴む。

「よし! えっと、じゃあ……、彰吾! おじいさんの足を持って、両

足よー！」

「えっ？」

「はやく、彰吾、わっぱ、ぷーん、よー！」

「わ、わかった……」

と、人見もおじいさんの足を持つ。

「さあ、二人とも、おじいさんを持ち上げて！」

「お、おう……」

「あ、ああ……」

と、彼らがおじいさんを持ち上げる。

「よし！ じゃあ、そのまま振り回して、ジャイアントスイング！」

わっぱ、ぷーん、わっぱ、ぷーん」

「無理だろ」

「ど、どうやってだ!？」

「え？ あ、こうやって、わっぱ、ぷーん、よ……、ああ？ どうやって!？」

あ、だから、こうやって、わっぱ、ぷーん……」

と、私は一生懸命彼らを誘導してジャイアントスイングみたいにやるけど、どうやってもうまくいかない……。

二人では無理だったみたい。

しようがないので、おじいさんを地面に降ろしてもらおう。

「るって、でつど、ろーす、ぷーん……」

と、おじいさんはお腹をさすりながら立ち上がる。

「わっぱ、ぷーん」

そして、笑顔を作る。

なんか、大丈夫だったみたい、よかった。

「それで、どうするの、これ？」

と、徳永が私たちが遊んでいると思ったのか、少し怒った口調で尋ねてくる。

「持ち帰ってもらおう、我々は人からめぐんでもらうほど落ちぶれてはいない」

東園寺が毅然とした口調で言う。

「持ち帰ってもらおう？ せっかく、持って来てくれたのに？」

「そうだ」

「食料もそうだけど、衣類は欲しい、積荷にあつた洋服を仕立て直して着るのにも限度がある、それはあなたも知っている事でしょ？」

「ああ、だが、無償で貰うわけにはいかない」

「どうして？」

「あいつら現地人は、俺たちを何か超常の存在、神のように思っている。そう思っているからには、必ず何らかの見返りを求めてくる。俺たちに出来る事ならばいいが、出来ない事、例えば、雨を降らせてくれ、豊作にしてくれ、などの要求だ。まあ、これはいい、出来ないものは出来ないで済ませられるからな。だが、問題はこの先、村、集落で不幸があつた場合、疫病が蔓延した場合、やつらはこう考えるだろう、良い事は何もしくせに、不幸だけが襲ってくる、お供え物だけむさぼり食って見て見ぬ振り……、あいつらは神ではなく悪魔だ、討ち滅ぼさなければならぬ存在なのだ、と……、いずれ必ずそうなる、断言してもいい」

うん、長い……。

聞いてられないから、私は木彫りの彫刻を見る。

「じゃあ、どうすれば……、関わりはもたないと……？」

「いや、俺たちに超常の力がない事を証明し、対等の関係で売買、交易するのならば関わりをもつてもいいだろう」

「交易……、私たちが何かを差し出すのね……、でも、いったい、何を……」

徳永が腕を組んで考え込む。

実際、こつちから売れる物って少ないのよね、結構ギリギリの生活をしているから。

「ありがたく貰っておけばいいのに……」

そう、小さくつぶやく。

「そういう事なら、ここは俺におごらせてもらおうか」

と、人見がポケットから何かを取り出しながら言う。

「エシユリン、すまんが通訳を頼む」

「はい、ぷーん！」

二人があのおじいさんのところに歩いていく。

第38話 クルビット

「これは魔法のネックレスだ」

人見が手にしていたのは、以前、私に渡そうとしていた、あのシルバーのネックレスだった。

「神の祝福を受けた魔法のネックレス……、これで、ここにあるすべての物を売ってくれないか？ それだけの価値はある」

と、そのネックレスを見せながら話す。

「るって、なぎ、きゆりていりーていー、はーす、ぽぼろりてい？ くわす、わ、はーす……」

それをエシユリンが通訳する。

「なぎ、きゆりていりーていー？」

あのおじいさんが物珍しそうにネックレスを覗き込む。

「どれ、着けてやろう、動くな」

「でっど、ろーす」

人見がおじいさんの首に手を回してネックレスを着けてあげる。

「ほっろー、すっしー？」

と、おじいさんが自分の身体をきよろきよろと見る。

そして、少しジャンプする。

「ほっろー？」

さらに小走りで走りだす。

「ほっろー！」

笑顔を走り回る。

「ほっろー！」

「ろーす、ぷーん！」

「ろーす、わっば、ぷーん！」

と、他の現地人たちも一緒に走り回る。

でも、かなり身軽に見えるよね、やつぱり、私のこのネックレスよりも性能がいいのかな？

「るって、ぽぼろりてい、ぷーん！」

と、ひとしきり走り回ったあとで、あのおじいさんが両腕を広げて

言う。

「えつと、十分です、全部大丈夫です、ぷーん」

エシユリンがそう通訳する。

「ふっ……」

それを聞いた人見がメガネを直しながらみんなに振り返る。

「聞いての通り、交渉成立だ」

にやりと笑い、メガネを光らせる。

「おお！ さすが人見、交渉上手だぜ！」

「凄いわ、人見くん、かつこいい！」

「きやあ！ 素敵、人見くん！」

「ふっ、ふふっ……」

人見が何度も人差し指でメガネをつんつんしながら照れ笑いする。

「すごい！ お塩もあるよ！」

「こっちはコシヨウだよ！」

「服！ サイズが合わなくても生地としても使えるよね！」

「肉だぜ、ハムか？」

「うん……？ 酒みたいなのもあるな……」

と、みんながお供え物に群がって、それらを手に取り見せ合いながら話す。

「ふっ……、すまん、ナビー」

人見が私の隣に来てそう話す。

「うん？」

「キミのタリスマンは後回しになるかもしれない、しばらくは外貨としてのネットワークス、アミュレット作成に忙しくなりそうだ」

「ああ……、いいよ、別に、待ってるから」

「だが、いくら時間がかかっても手抜きはしない、スペシャルなタリスマンを作ってる」

「うん、楽しみに待ってる」

みんなを見ながらそんな話をしていると……、

「うわああああああ!!」

「うっぎやおおお!!」

「どつりやああああ!!」

と、そんな叫び声が森の中から聞えてきた……。

もういい、ホント、もういい……。

「ナビー!! ナビーはどこいったあああ!」

「出て来い、ナビー! 大変なんだあ! ナビー!!」

「ナビー!! ナビー!! ナビー!!」

とか、私の名前を連呼しながら、狩猟班の3人、和泉と秋葉と佐野が走り出てきた。

「いた、ナビー!」

「ナビー、聞いてくれ! 大変なんだあ!!」

「もう、うちで飼うしかないんじゃないのかな?」

「さ、佐野、その台詞はまだ早い!」

もうコントだろ、こいつら……。

「う、うあ……?」

と、和泉が目の前まで来て、はじめて現地の人たちの存在に気付く。

「あ、あれ……? もしかして、エシユリンの迎えにいらしたの?」

「ハル、そんなのどうでもいいから、今度は何を拾ってきたの?」

まあ、おそらく、孤児だろうから、拒否は出来ないんだけどね……。

「そ、そうなんだよ、ナビー! 大物を狙って、追い駆けていたら、逃

げていったんだよ! そしたらこいつが取り残されていたんだよ!」

「たんだよ!」

「たんだよ!」

適当になつてきたな、こいつら……。

「うーん? どれどれ?」

今度はなにかなあ、と、思って佐野が持つその小さな動物を覗き込む。

「かわいい」

それは、小さな、小さな……。

「子犬?」

ふわふわとした毛並みの小さな子犬。

色は青、水色とまではいかないくらいの薄めの青。

「くるう……、くるう……」

ちよつと元気がないかな……。

そつと、その背中をなでる。

「くるう……」

うーん……、元気ない……。

「ねえ、エシュリン、このお供え物の中になにかこの子が飲めそうなミルクみたいなものないかな？」

たぶん、お腹が空いてるんだと思う。

「ある、ぷーん！」

と、エシュリンが走って、つぼと小皿を持ってきてくれる。

そして、小皿を地面に置いて、つぼに入っているミルクを注ぐ。

「できた、ぷーん！」

「よし、獾人、その子をミルクの前に置いて、そつとよ
「うい」

と、佐野が子犬を小皿の前に置く。

「くるう！　くるう！」

そうすると、子犬が勢い良く、ミルクを舐めだした。

やっぱり、お腹が空いてたんだ！

「よかつたあ、変な病気じゃなくて……」

子犬の横にしゃがんで、食事の邪魔をしないように、手の甲で優しくなでる。

「くるう！　くるう！」

「えへへ、よかつた、よかつた」

それにしても、変な鳴き声だよね、ワンワンじゃないんだ。

「それじゃあ、名前を付けよっか、ね、ナビー？」

と、和泉が私の隣にしゃがんで笑顔で言う。

「名前かあ……」

そつと、手の甲で子犬の頬のあたりをなでる……。

「くるう！　くるう！」

嫌だったのか、顔をぶるぶるとして私の手を振り払う。

「あ、ごめんね」

「くるう！　くるう！」

そして、またミルクを舐め出す。

うーん、くるう、くるう……。

うん、そうだね……。

「クルビット」

この子の名前はクルビットだ。

「クルビットか、いい名前だ、よかったな、クルビット」

と、和泉が微笑ましく子犬を見ながら話す。

ちなみに、クルビットは、私の必殺技、ポストストール機動クルビットから取った。

人は重力に囚われない、慣性に囚われない動きに対して、非常に偏差射撃を行いつらい性質を持っている。

それを逆手に取って、擬似的に重力に囚われない、慣性に囚われない動きを再現したのがクルビットだ。

通常は十字砲火や集中砲火をされた時の回避行動用を使用するけど、私は違う、クルビットをしながら敵に突っ込んでいく。

さすが私、かっこいい！

「くるう！　くるう！」

「クルビットもかっこいい！」

と、頭をなでようと思ったけど、また怒られそうなので、触れるか触れないくらいの感じで背中をなでる。

「大きくなったら、牧羊犬として活躍してくれそうだね」

と、和泉が話題を振ってくる。

「おお!?　それはいい！　そうなったら柵がなくてもウエルロットたちをヒンデンブルク広場に放せるね！」

「そうそう、森に入ろうとしたら止めてくれたり」

「あとは、危ない肉食獣の撃退！」

「うん、うん、それもだね」

なんか、夢が広がるね……。

「ありがとね、ハル……」

「うん……」

と、二人でクルビットがミルクを舐める様子を見ながら話す。

「ぼるつく、なすく、すつしー、わ、るって、ちゃはねすきー、ぷーん」
「では、我々はナスク村に帰ります、ぷーん」

と、あの現地人のおじいさんとエシユリンの声が聞こえてくる。

そうだった、あの人たちの事を忘れていた……。

「すまなかつたな、エシユリン、助かった」

東園寺がみんなを代表してお礼を言う。

「いえ、ぷーん……」

あ、エシユリンも帰っちゃうのか……、まあ、そうだよ、ここに
いる意味ないし……。

「るって、くわつど、ぷーん！」

「くわつど、ぷーん！」

と、現地人の人たちが笑顔で手を振り去って行く。

「ナビーー！」

と、エシユリンが駆け寄ってくる。

最後に挨拶に来てくれたのかな？

「エシユリン」

私は立ち上がり、握手をしようとして手を差し出す。

「るって、クルビット、ぷーん？」

でも、エシユリンはそれを無視して、クルビットをしゃがんで見る。

「そ、そうだよ、クルビットだよ」

「クルビット！」

と、つぼを取り、小皿にミルクを注ぎ込む。

「くるう！　くるう！」

クルビットも大喜びでそれを舐める。

「って、エシユリンも一緒に帰らないの？」

現地人の人たちももう随分遠くに行ってしまったている。

「エシユリンは帰らない、ぷーん！　エシユリンは、姫巫女！　ナギ様

方の怒りを鎮める仕事がある、ぷーん！」

「そ、そうなんだ……」

「クルビット！」

「うん、うん、クルビット、クルビット……」

と、一緒にしゃがんで、クルビットがミルクを舐めるのを眺める。

「山本」

「うん？　なんだ、東園寺？」

現地人の人たちを見送っていた東園寺が山本に声をかける。

「展望台、見張り台を建てたいと云う要望を出していたな？」

「ああ、それがどうした？」

「許可する、早急に建ててくれ、俺たち管理班も手伝う」

「あ、ああ、わかった、すぐに始める」

「頼む、山本」

さすがだね……、ちよつと感心してしまう。

「クルビット！」

「クルビット、クルビット……」

くんくん、意外と抜けているからね、東園寺はなんて言ったの？

「まっ、今更遅いか……」

と、私はクルビットの頭を優しく、軽くなでてあげる。

第39話 地獄の火峠

現地の人たちがラグナロクを訪れてから5日が過ぎた。

「高いなあ……」

そして、今日、ようやく見張り台が完成した。

私は下から口をぽかーんと開けながら見張り台を見上げる。

「よし、登ろう」

と、私は外周のらせん状に設置された階段を登りはじめる。

「1、2、3……」

とりあえず、何段あるか数えてみよう……。

「50、51、52……」

階段はまだまだ続く……。

ちなみに、この見張り台はすべて木造で、一段、一段登る度にぎしぎしと軋んだ音をたてて、私を不安にさせる。

「70、71、72、うう……、風が強くなってきた……」

長い金髪がはためき、スカートがめくりあがる……。

「くっ……、怖いから手すりは離せない……、残るは右手のみ……、どっちだ、髪とスカート、どっちを押さえる……、きやつ！」

と、反射的にスカートを押さえる。

この際、髪はしようがない。

「84、85、86……、到着！」

やっと見張り台のてっぺんに着いたあ！

86段と云う事は……、1段が20センチくらいだから……、大体17メートルくらいね。

「お、来たか、ナビー」

「大丈夫だったか？ 転ばなかったか？」

と、この見張り台を作った生活班の山本新一と佐々木智一が私を出迎えてくれる。

「大丈夫よ、新一、智一……」

私は乱れた髪を直しながら彼らのもとに向かう。

見張り台の頂上には屋根があり、そこは鐘楼のようになっていて、

中央にはちゃんと大きな鐘も設置されている。

「どうだ、ナビー、いい眺めだろ？」

「そうね……」

と、私は手すりを握って景色を眺める。

見える世界は広大な広葉樹の森々……。

見張り台はちょうど広葉樹群と同じくらいの高さ、身長の方だけ上にくるって感じ。

だから、この高さなんだね……。

また見張り台はルビコン川へと向かう道の正面に建っていて、その向こうにはルビコン川のきらきらと光る川面も見ることができた。

「いい天気……」

風は強いけど、強い陽射しが照りつけ、空は青く澄み渡る。

「いいだろお、ナビー、この割と普通なナビーフィユリナ記念タワーは？」

くっ……。

「苦労したからなあ、この割と普通なナビーフィユリナ記念タワーを作るのに」

ふざけやがって……。

割と普通なナビーフィユリナ記念会館といい、人の名前をネタにしやがって……。

まあ、いい、名前くらい……、さっ、気を取り直して、景色、景色……。

広葉樹よりも高い位置にあるおかげで、その奥の山々も見ることができた。

一周ぐるつと、見渡す限り、全方位に山がある。

おそらくカルデラだろうと云う話だ。

直径20キロくらいの巨大カルデラ……、阿蘇と同規模かな？

で、私たちのラグナロク広場はその巨大カルデラの中央付近にある。

そうそう、エシユリンたち、現地の人たちの村は、正面、ルビコン川の向こうの山を越えて、さらに20キロくらい進むとあるらしい。

なので、ここから30キロくらい先の位置となる。

正面の山々は、そうね、500メートルくらいの高さだと思われる。ちなみに、正面の山にも名前を付けた。

ヘルファイア・パス。

そう、地獄の火峠だ。

もちろん、私が付けた。

だって、放っておくと、ここと同じように、割と普通なナビーフイユリナ記念峠になりそうだったんだもん。

まあ、つまり、まとめると、見張り台の正面、ルビコン川の向こう、10キロほど先にある山がヘルファイア・パスで、それを越えて、さらに20キロほど進むと、エシユリンたちの村、ナスク村があるって感じた。

「じゃあ、見学は終りしよう、ナビー、どこかに不備があるかもしれない、もう一回点検する」

と、佐々木が私に見張り台から降りるように促がす。

「はあい！」

「それじゃ、俺は今夜の準備があるから先に行くぞ、佐々木」
「おう」

と、山本が先に見張り台を下りだす。

「いやあ、楽しみだなあ……、今日の誕生日……」

私が階段を下りだすと、うしろから、そんな佐々木の楽しそうな声が聞こえてくる。

「おい、やめろ、佐々木、思い出しただけで、腹がよじれる」

と、前を歩く山本までそれに追随する。

「だな、思い出しただけでやばい、ホント、楽しみだぜ、今日のナビーの誕生日」

そう、今日は私の誕生日、みんながお誕生会を催してくれる手はずになっている。

「おっと、それ以上はなしだ、佐々木、ナビーに感づかれちゃう」

「お、そうだな、楽しみは取っておかないとな」

もちろん、楽しみではあるけど、なんか不安……。

その時、ルビコン川に向かう道のほうから現地の人たちが広場に入ってくるのが見えた。

「うん？」

私は足を止めてそちらのほうを見る。

「がっぱ、ぷーん」

「るって、がっぱ、ぷーん」

「ご苦労だった、よく来てくれた」

「こんにちは、お疲れ様です」

と、それを、東園寺や徳永、人見たちが出迎える。

もちろん、その傍らには、通訳のエシユリンもいる。

「ああ……、また物を売りに来たのか……」

そういえば……、クルビットが飲むミルクがなかったよね、シウスたちも大喜びで飲んじゃうからすぐなくなる。

「買ってこよ」

と、私はそちらのほうに足を運ぶ。

「ナビー！」

エシユリンが私に気付いて駆け寄ってくる。

「あ、エシユリン、クルビットのミルクあるかな？ それ欲しい」

「ある、ぷーん！ 持ってくるように言った、ぷーん！」

「おお、それはよかった、猪肉の燻製もよく食べるけど、やっぱりミルクじゃないと駄目だよね」

「持ってくる、ぷーん！」

「うん、お願い」

と、エシユリンが現地の人たちのもとへ走っていく。

「あ、エシユリン、通訳して、この生地とこの毛皮が欲しい、それをこのボールペンとノートで交換するのはどうかしら？」

品物を値踏みしていた徳永がエシユリンを呼び止めて言う。

「はーす、ぽぽろりてい、かつぶ、るーす、あっす」

「ふーあー、ぽぽろりてい」

現地の人が首を横に振る……。

「足りないと言っている、ぷーん」

「ああ、やっぱり、これだけじゃ駄目か……、なら、このポーチも付けるわ」

徳永は茶色のサイドポーチを差し出す。

「ふーあー、ぽぽろりてい……」

また首を横に振る。

「ええ……、まだ足りないの？」

「ぽぽろりてい、わ、るって、きゅりていりーていー、はーす、ぷーん」

「あのネックレスじゃないと駄目と言っている、ぷーん」

「ネックレス……？ あの人見くんの……？」

徳永が人見を振り返る。

「ふっ、しょうがないな……」

と、人見がポケットから魔法のネックレスを取り出す。

「これが欲しいんだろ？」

現地の人にネックレスを渡す。

「ほっろー！」

と、その人がネックレスをして、その場で嬉しそうに飛び跳ねる。

「ぽぽろりてい！」

そして、最後に生地と毛皮を徳永に渡す。

「さすが、人見くん、ありがとう！」

と、徳永も大喜び。

「ふっ……」

「人見くん！ こっちもお願い！」

「やれやれ……、忙しいな……、エシユリン行こうか」

「はい、ぷーん！」

そして、次の商談に向かう……。

うーん……、東園寺が渋い顔をしているな……。

まあ、普通にまずいよね、あれは……。

もう、魔法のネックレス以外では何も売ってくれないよ。

そんな事より、私のミルクはどうしたの？

「ありがとう、人見くん、素敵！」

「ふっ……」

「人見くん、私も欲しい物があるの！」

「なんでもいいぞ、全部買ってやる、俺は女性の味方だからな……」

と、人見が次々と商談をまとめていく。

やばいわ、彼……、最初は沈着冷静で、凄く頭がキレるイメージだったけど、最近はなんかおかしい……。

そう、あの夜からだ……。

あの露天風呂攻防戦の時からおかしい……。

「きやあ！ かっこいい、人見くん！」

「次々、私も！」

「ふっ……、少しは休ませてくれ……」

それから、私は彼らの商談を見守りながら、自分のミルクが来るのをじっと待ち続けた……。

第40話 魔王降臨

夕方になると雲が出てくる。

低くわた飴のような積雲が空の大きさを表現し、空高くヴェールのように流れる巻雲が空の深さを表現する……。

そして、空の青さはそれぞれの雲の白さによって際立たされる……。

太陽が大きく傾くと、それに伴い風はひんやりと冷たくなり、その一方で湿度は上昇していき、昼間よりも暑苦しさを感じさせる。

それに虫の鳴き声も重なり、より一層の夏を演出する……。

風に前髪が広がる……。

服の様々な箇所から風が入り込み、私の体から昼間の熱を奪っていく……。

「えへへ……、機嫌がいい……」

そつと目を閉じ、風が私の髪で遊ぶのを黙認する。

「ナビーは座っててね、今日の主役なんだから」

「うん、翼」

私は目を開け明るく返事をする。

そう、今夜は私が主役、主賓だ。

なんたって、今日は私の誕生日なんだから。

広場はがやがやと騒がしく、楽しいな雰囲気にも包まれている……。

ここ、中央の大きな焚き火のある石畳の広場で私のお誕生日会が開かれる。

そこにテーブルが円状に置かれ、生活班の福井とかが飲み物や前菜などを配膳していく。

ちなみに、私の席は大きな焚き火の真ん前で、背中がじりじりと熱かった……。

まあ、主役だから仕方ない、一番明るい場所に座らせられるのは当然だよな。

「どうぞ、ナビー」

「ありがとう、麻美」

と、私のテーブルにも、飲み物と前菜、サラダみたいなのと、あと果物のデザートが置かれる。

「おいしそう」

私は目を輝かせて、色んな角度からサラダとデザートを覗き込む。

「ええ……、では、ナビーフイユリナ・アラウェイの11回目の誕生日を祝う会を始めさせていただきますと思います……」

始まるみたい。

「ええ……、司会は、参謀班の南条大河と」

「青山悠生でお送りいたします」

ほう、司会は参謀班か……。

「ええ、では、最初に乾杯をさせていただきます。ご出席の皆様、お手元のグラスをお持ちください」

私はグラスを取る。

「では、音頭を取らせていただきます……、まず、正面を御覧下さい」

と、南条が指し示す方角に視線を移す……。

「あそこに見えますのは、割と普通なナビーフイユリナ記念タワー、そびえ立つその姿はまさにバベルの塔、挑むのは我らか？ それとも神か？ やつらが神ならば、我々は悪魔なのか？ 傲慢なのはどっちだ？ さあ、戦おう、生き残るのはどっちだ？」

な、何を言ってるんだ……？

「そして、その向こうに見えますのは……、ヘルファイアーパース
!!」

急に大声出されてびくつとなった……。

「その名は地獄、その実天国、行った事はないがきつとそうだ、行こうじゃないか、地獄の火峠……、天国に乾杯！」

「「天国に乾杯！」」

ちよつと、待て、私の誕生日はどこいった？

ま、まあ、いい、いつもの事よ、あいつらいつつも、私の事からかって遊んでるから……。

「て、天国に乾杯……」

と、私もヘルファイアー・パスにグラスをかざしてから口をつける。

「お、おいしい！」

なんだろう、すごく冷えている炭酸飲料。

甘い、ミルクの炭酸飲料、うーん、それだけではない気もするなあ……。

コクコク、と、何度も口に含みながら考える。

「でしょ？ はちみつ入りのスペシャルドリンクなんだから」

と、夏目が説明してくれる。

おお、はちみつ入りかあ……。

言われてみると、はちみつっぽい。

「おかわり！」

と、私はからっぽのグラスを夏目に差し出す。

「はい、はい」

彼女は私のグラスにはちみつミルクソーダを注いでくれる。

「うん、おいしいー！」

と、それも飲み干す。

よし、次は前菜……。

むしや、むしや……。

うーん……、香菜と葉物野菜のサラダ。

ゴマと塩の味付け、でも、ちよつと浅漬けみたくなっている……。

むしや、むしや、うーん、まあ、まあ。

よし、完食！

次！

と、私は次のお皿に目を移す……。

「うーん……？」

なんだあ、これはあ？

お皿の上に洋ナシがひとつだけ乗っている……。

でも、普通の洋ナシではない、てかてかしている……、何かで漬けた感じ……。

私は指つついでみる……。

「こ、凍っている……」

そう、冷凍洋ナシだ、それも、舐みたいなのでコーティングしてあ

るやつだ……。

「それは、ひらりが考案したものよ、ナビーちゃん」

「まだ、試作品だけどね」

と、狩猟班の笹雪めぐみと雨宮ひらりが笑って言う。

おお……、スイーツ……、これが女子の世界三大モチ趣味の一つと言われるスイーツか……。

私は冷凍洋ナシのへた、果柄の部分をつまんで持ち上げる。

そして、そのまま、目線をより上に持って行って、下から洋ナシを眺める。

あ、したたってきた！

私は急いでそれを舐めとる。

ペロペロ……。

はむはむ……。

ペロペロ……。

はむはむ……。

えい、かじつちやえ！

すると、洋ナシの中からシャーベット状のアイスが出てきた！
なにこれえ、すごい。

私は無心でちゅーちゅーしてシャーベットを吸いだす。

「すごいでしょ、これ？」

と、雨宮も私と同じように下からちゅーちゅーしながら言う。

「うん！ 中にアイスでも入れてるの？」

「違うんだなあ、それが……」

「そうそう、ひらりだけの必殺技」

「必殺技あ？」

私は首を傾げる。

「よし、じゃあ、特別にナビーにだけ見せてあげよう！」

と、雨宮が普通の洋ナシを取り出す。

「あはっ、ひらり、ちゃんと持ってきてんじゃん、最初から見せるつもりだったんでしょ？」

「それは言わない約束よ、めぐみ……、じゃあ、見ててね、ナビー」

「うん……」

雨宮が左手の上に洋ナシを置き、そして、右手で何やら構える……。
「クロルト、闇夜に沈む小さな闇よ、アデュラン、広がり覆え、慟哭の
虚栄、闇夜を飲み込め、魔王降臨」
アルタス・トレス

彼女の魔法詠唱が終わる……。

「いくよ、ナビー」

そして、右手を洋ナシに近づける……。

「あ？」

不思議な事が起きた。

雨宮の右手が洋ナシの中に入った。

しかも、ねじ込んだとか突き刺したわけじゃなくて、すつと、すり
抜けように手が入っていった……。

まるで手が透明になったかのように……。

「不思議でしょ、ナビーちゃん、これね、ひらりだけが出来るの、そも
そも魔王降臨アルタス・トレスって、こんな魔法じゃないんだけどね、ひらりがやると
なぜかこうなるのよ」

と、笹雪が私と同じように洋ナシを見ながら説明してくれる。

「私は透過手って呼んでるけどね……、よし、こんなものかな……」
雨宮が手を引き抜く。

その洋ナシは最初と同じ、手を差し込んだのに、少しの穴も開いて
いない。

「はい、ナビー、食べてみて、それと同じように下から」

と、私は洋ナシを両手で受け取る。

「うっ……」

触れた瞬間にわかる、異様にぶよぶよしている……。

おそろ、おそろ、へたをつまんで、洋ナシの下から唇をはわす。

そして、少しかじってみる。

「あ……」

ミキサーで作った、どろつとしたジュースみたいなのがしたたり落
ちてきた。

「あ、あ、あ……」

と、零れ落ちないように一生懸命ジュースを舌や唇を使って吸う。
「ね、おいしいでしょ、ナビー？」

「う、うん……」

心底ぞつとした……。

これって、人に使ったらどうなるの？

心臓とか握り潰せるの？

いや、それよりも、服とか鎧もすり抜けられるの？

魔法障壁は？

「では、宴もたけなわとなってまいりましたので」

と、そんな事を考えていると、司会の南条大河の声が聞こえてきた。

「ここで、ひとまず休憩、主賓のお色直しのお時間とさせていただきます
す」

いや、まだ始まって30分も経ってないよ……。

「待ってました！」

「やったあ、楽しみ！」

「来ましたわ！」

と、女子のみんなが席を立つ。

「いこ、ナビー、お色直しよ」

「うん？ どこへ、翼？」

「あつちよ、記念会館で衣装替えよ」

と、夏目がウインクして言う。

あ、そうか！

プレゼントのお洋服か！

それに着替えて、みんなにお披露目するんだね！

と、私も大喜びで席を立つ。

「それでは、お色直しの時間を利用して、男性の皆様にはBBQの準備
に取りかかっていたいただきましょうか！」

「「BBQー！」」

「そおれ、BBQー！ BBQー！ BBQー！」

「「BBQー！ BBQー！ BBQー！」」

そのかけ声に送られながら、私たちは割りと普通なナビーフィユリ

ナ記念会館に向かう事になった。

第41話 天つ風

「それじゃあ、ナビー、万歳して」

と、割りと普通のナビーファイユリナ記念会館に到着早々、すぐに準備に取りかかる。

「はあい！」

と、私は言われた通りに両手を高くあげる。

下からワンピースをたくし上げられ腕がされていく。

下着一枚にされた……。

「くしゅん」

寒い。

夜になると冷えるんだよね……。

と、私は二の腕をさすり、膝と膝をあわせてもじもじする。

「サイズはどうかなあ……、ぴったりだといんだけど……」

と、福井が新しいお洋服を持ってきてくれる。

それはもちろん白いワンピース！

それも超かわいいやつ！

「じゃあ、着ようねえ、ナビー」

「うん！」

と、上から着せられる。

なんか、新しいお洋服の匂いがする。

私は顔を左右に振りながら襟を探す。

で、顔が出たら、次に袖に腕を通す。

「おお……」

と、背中ボタンを留めてもらいながら、ワンピースのデザインをつぶさに観察する。

フリルがいっぱい……。

いや、ひだひだだ、それが段々になっている……。

そして、二の腕のところ……、ふわつとなっていて、かなりすけすけ、肩のあたりまで羽衣みたくなっている。

「うん、ちょうどいいね、苦しくない、ナビー？」

「大丈夫、苦しくない！」

サイズはぴったり。

ちなみに、このワンピースを作るにあたって、最初に採寸したのよ。そしたら、身長が142センチで、体重は33キロだった。

そう、体重が増えない……。

毎日走り回っているのに、全然筋肉が付かない……。

うーん……。

ここに来てから、1ヶ月半、体力はかなり付いてきたと思う……、でも、筋力は全然、相変わらず細腕のままだ……。

私はすけすけの袖からのぞく、細く白い腕を見ながら考える。

「ナビー、髪をとかすね、じつとしててね」

「うん！」

「お化粧もしましょうね、綺麗になるのよお」

「うん！」

「靴下も履きましようね、はい、こっちの足を上げてねえ」

「うん！」

こんな感じで準備が続く。

「よし、出来上がり！」

「うん！ 綺麗だよ、ナビー！」

終わったみたい……。

「鏡見たい」

と、私は赤い靴をトントンとしながら言う。

「ふふつ、それはお楽しみ」

「自分がどれだけかわいくなつたかは、男子たちの反応を見て確認すればいいよ」

鏡はお預けらしい……。

いや、顔に落書きされてないか心配なだけだから。

あれでしょ？ 本当は顔に落書きがしてあって、私が自慢げに鼻高々で男子たちの前に行くのを見て笑うつもりなんでしょ？

さすがに泣くよ、それは……。

うう……、みんなはそんな酷い事しないから、信じてるから……。

い、いや、こいつらよくいたずらしてるから！

で、でも、今日は私の誕生日だよ、そんな酷い事しないよ、ちゃんと祝ってくれるよ……。

と、そんな考えが頭の中をぐるぐるとまわる。

「じゃあ、いこ、ナビー」

「いこ、いこ、早くナビーのかわいいところ見せよ！」

「う、うん……」

顔に落書きをされていないか、半信半疑のまま、割と普通なナビーフィユリナ記念会館をあとにする。

「なあに、ナビーちゃん、緊張しているの？」

私がうつむき加減なのを見て笹雪がそう気遣ってくれる。

「大丈夫だつて、すごい綺麗になってるから！」

「うん、びつくりするよ、本当に綺麗なんだから」

「ナビー！ 綺麗！」

みんながそう言うってくれるけど、なんか、ますます不安になってきた……。

「主賓、入場！」

と、司会の南条大河の声が響く。

その声と同時に拍手が沸き起こる。

私ははつとして顔を上げる。

「「おお……」」

そして、そんなどよめきが起こる。

「おお、かわいい……」

「やっぱり、ナビーはかわいいなあ」

「素材が違う、ナビーは何を着ても綺麗だ」

おお……？

なんか、すごく好意的、笑われている感じはしない。

「み、みんな……？」

私は振り返り、女子のみんなを見る。

「どうしたの、ナビー、不思議そうな顔して？」

「なあに、きよとんとして」

「自分がこんなにかわいい事、今まで知らなかったんでしょ？」

「ほおら、こっちばかりみてないで、前に進んで」

と、夏目に背中を押される。

「「おお……」」

またどよめきが起こる。

「もうこの反応でわかるよね？」

「一応、鏡持ってきたから見る？」

と、福井が少し大きめの鏡を胸の前に構えて私に見せてくれる。

そこに映るのは……。

絶世の美少女……。

ふわふわの白いワンピースとそれに負けないくらいの透きとおる

白い肌の美少女……。

長い真っ直ぐな金髪と、その頭に着けられた白いお花の髪飾り

……。

いや、そんな事よりも、顔……。

ちゃんとお化粧されている……。

ぱっちりとしたおめめと、ほんのりオレンジ色っぽい頬、それに、薄

いピンク色の唇……。

落書きされてない！

ああ、私……、みんなを信じきれなかった……。

うつく……、ごめんなさい……。

「み、みんな、あがりありがとう……」

あうー、涙が出てきちゃった……。

「みんなあ、ありがとう！」

と、女子のみんなの輪に両手を広げて飛び込んでいく。

「あ、あれ、そんな、泣くほどの事だった……？」

「いや、そんなに喜んでもらえて嬉しいけど……」

「ナビーって、本当にいい子だよ、徹夜して作った甲斐があったよ、

ぐすん」

「うん、本当によかった、私までもらい泣き……」

と、福井たちも涙ぐむ。

「ええ、それでは、BBQの前に司会から一言」

司会の南条が話し出す。

私はお化粧が崩れないように指で涙をすくいながら、男子たちのほうに向き直る。

「我々がここに来てから、約1ヶ月半、特段大きなトラブルもなく、大きな喧嘩もなく、全員で協力してやってこれたのは、すべて、ナビーがいたからこそだと思っています。普通に考えれば、有り得ない、派閥が出来、抗争が勃発し、やがては全員が散り散りになり別々の道を歩む、それが普通だろう……。だから、こうやって、誰ひとりの脱落もなくやっていけているのは奇跡的な事、その奇跡を起こしたのは、ナビーフィユリナ・ファラウェイに他ならない……。ありがとう……、ナビー、誕生日おめでとう!!」

「「誕生日おめでとう!!」」

「「お誕生日おめでとう!!」」

「ありがとう、ナビー!」

「キミがいてくれて本当によかった!」

「生まれて来てくれてありがとう、誕生日おめでとう!」

鳴り止まない祝福と、鳴り止まない拍手……。

ぽろり……。ぽろり……。と、涙が一粒、二粒と零れていく……。

「うぐ……。えぐ……。ひっく……」

「こんなに嬉しいの、生まれて初めてだよ。」

「みんなあ……」

両手の手の甲を使って涙を拭き取る。

「ナビー、ハンカチ……」

夏目からハンカチを受け取ってそれで拭く。

「あ、お化粧とれちゃった……」

ハンカチに黒いのかピンクいのが付いてる……。

「大丈夫よ、ナビー、あなたは化粧なんてなくても、十分綺麗なんだから」

と、夏目が笑顔で言ってくる。

「よーし、全員並べえ、BBQの時間だあ!」

東園寺が大声で叫ぶ。

手には切れ味鋭そうなロングソードが握られており、その目の前にはおいしそうな猪の丸焼きが吊るされている。

「『BBQ！ BBQ！ BBQ！』」

と、みんながお皿を手に取り、われ先にと東園寺のところに殺到していく。

「ああ!? 出遅れたあ！ 私のBBQがあ!!」

私も急いで自分のテーブルからお皿を取って走っていく。

「うわーん、うわーん」

と、みんなのうしろでぴよんぴよん飛び跳ねる。

「まずはナビーフイユリナからだ、通してやれ」

と、東園寺が言うのと、みんなが道を譲ってくれる。

「ありがとう、みんなあ！」

上機嫌でお皿を持って東園寺のもとに行く。

「はい、お願い、公彦」

と、彼にお皿を渡そうとするけど、受け取ったのは隣にいた鷹丸大樹だった。

「よーし、捌くぞ」

東園寺は右手にロングソード、左手にトングって感じで猪の丸焼きを器用に捌いていく。

それを鷹丸の持つ私のお皿に盛り付ける。

「リブ！ リブ！」

「お、こっちだな？」

「ヒレ！ ヒレ！」

「今度はこっちか？」

「香菜も！ 香菜も！」

「わかった、わかった」

と、彼は私の注文通りに取り分けてくれる。

「ほい、ナビー、誕生日おめでとう」

盛り付けが終わると鷹丸がお皿を手渡してくれる。

「おお……」

山盛り。

「あーん……」

我慢できずに指でつまんで、上から口に入れる。

「おいしい！」

指もぺろぺろつと……。

「よし、次だ！」

「次は俺だ！ 肩ロースを頼む！」

「私はもも肉！」

みんなも私と同じようにお皿に盛り付けてもらう。

「あーん……」

むしゃ、むしゃ。

「あーん……」

むしゃ、むしゃ。

なんて、おいしいんだろう。

「あーん……」

太陽が沈んで、星が見えるようになってきた。

「あーん……」

お星様が綺麗……。

ああ……、なんていい日なんだろう……。

第42話 清明の花風

お星様を見ながら、あーんして、指ぺろぺろ……。

「あーん……」

ぺろぺろ……。

そういえば、今日は7月10日、七夕ってもう終りだよね……。

おいしいなあ、こんなにお星様が綺麗なのに……。

お願い事しかなかったなあ……。

「あーん……」

ぺろぺろ……。

うーん……、お願い事かあ……、みんなが幸せになりますように、だよね、やつぱり、うん、それしかない。

「あーん……」

ぺろぺろ……。

「ナビー、はしたないよ、はい、お箸」

と、夏目がお箸を持ってきてくれる。

「ありがとう、翼」

私はそれを受け取る。

「星が綺麗ね……」

と、夏目も私と同じようにお星様を眺めながらBBQを食べる。

「うん、七夕とかしたかった」

「七夕？ 七夕は来月でしょ、来月の7日だよ？」

「うん？」

来月なの？

「そうだ、お祭りをやりましょう、飾り着けとかいっぱいして、みんなで短冊書いて、ね？ 今度和泉くんに言っつて、班長会議で提案してもらうね」

「おお!? それは楽しみー!」

そっかあ、七夕って8月7日だったのかあ、知らなかったなあ。

「あーん……」

と、星空に夢を馳せる。

「お？ 準備が整ったようですね」

と、司会の南条がなにやら話し出す。

「さっ、ナビー、こっちに」

彼が中央広場の東側から私を呼ぶ。

なんだろう、と思つて、手にしたお皿をテーブルに置いてそちらに向かう。

ちなみに、ラグナロク広場の位置関係は、中央に大きな焚き火のある直径50メートルくらいの石畳の広場があり、そこから道が四方に伸びている。

西に向かうとロッジが立ち並ぶ居住エリア、さらに、その先がトイレとか。

中央から北に向かうと広場の正面に建つように割りとは普通なナビーフィユリナ記念会館があり、そのすぐうしろに墜落した旅客機、その横を通つていくと工房とか倉庫があるエリアになって、そして、そこを過ぎるとヒンデンブルク広場に向かう道へと続く。

戻つて、中央から南に行くと、割と普通なナビーフィユリナ記念タワーがあり、その先はルビコン川に向かう道となる。

そして、こつち側、今、私やみんなが集まる東側、この道を進むと、まず牧舎があり、さらに進むと露天風呂になる、また、こちら側の森の木を集中的に伐採している事もあり、かなり広大な草原地帯が広がるエリアとなっている。

あとは、ルビコン川から水を引いて作った貯水池、金の斧の池は南東方向、露天風呂の近く、森側のほうにある。

まあ、簡単に説明するとこんな感じかな。

「お、来ました、来ました！」

「なあにい？」

と、みんなが見ている東側の道の先を覗き込む。

「ほおら、ナビー」

夏目が私のうしろから両肩に手を置いて前に押すように連れ出していく。

「うーん……？」

今日は道沿いの街灯が消えていて真っ暗……。何も見えない……。

カラン、コロン、カラン、コロン……。

なんか聞えてきた……。

カラン、コロン、カラン、コロン……、チリン、チリン……。

そして、その音が50メートルくらい先、広場の明かり届く距離までくると、その姿が見えるようになってくる……。

「ウエルロット……？」

そう、純白の仔馬、ウエルロットだった。

首にはなにやら大きな金色の鈴、鐘のような物を着け、さらに頭には大きな赤いリボン……。

ウエルロットの両側には、和泉や秋葉など、数人の男子たちが随行していた。

そして、そのうしろが見えてくる……。

「ば、馬車……？」

なんか、ウエルロットがピンク色の馬車を引いている……。

それも、もの凄くちっちゃいやつ……。

形は……、どう見ても桃……。

やがて、ウエルロットと馬車が私の目の前までやってくる。

うん、桃の形のちっちゃい馬車だね。

いやあ、ちっちゃいなあ……。

ウエルロット自体が小さいからそんなに大きな馬車は引けないにしても、それにしてもちっちゃい……。

高さは1メートルもない、幅も同じくらい。

奥行きは車輪も入れて2メートルくらい。

桃のてっぺんにはこれまた可愛らしい、ちっちゃいランタンを着けられている。

「ぷるるうー！」

「おお、よし、よし、ウエルロット……！」

と、私は歩み寄り、ウエルロットの頭を優しくなでる。

「どうだい、ナビィ？　これが、男子全員からのキミへの誕生日プレゼント

ント、割と普通なナビーフイユリナ記念ピーチ号だ！」

和泉が嬉しそうに両手を広げて言う。

「ここ、これが男子たちの誕生日プレゼント……。」

まあ、すごいかわいいんだけど、それにしても、ちっちゃいなあ。あ、そつか、模型なんかで、どっかに飾るんだ、で、たまに、ウエルロットに引かせて楽しむと、そういう物なんだね。

「見てくれ、ナビー、この車輪を……、これは、我々参謀班による渾身の力作だ、これには秘密があつてだな……。」

と、人見が車輪の前にしゃがんで説明を始める。

私も同じように彼の隣にしゃがんでその説明を聞く事にする。

「この前後の車輪を繋ぐ鉄の棒はサスペンションだ」

ああ、板バネね……。

原始的なサスペンションだ。

薄い長い鉄の板を長さ違いで何枚も重ねてバネのような効果を持たせるやつ。

「このサスペンションがあれば、振動や揺れが小さくなり、乗り心地が格段に向上するはずだ」

うん？

乗り心地？

まさか、これに私が乗るの？

こんなに、ちっちゃいの？

うーん？

「ナビー、こつちも見てくれよ、この車体、ボディは管理班によるものなんだぜ！」

と、声が出たので立ち上がる。

「見てくれよ、このなめらかなボディ、毎日、毎日やすりがけしたからな！」

そう話すのは管理班の久保田洋平、ちよつと不良っぽいやつ。

「このボディもそうだけど、この葉っぱのディテールもいけるよな！」

こつちは鷹丸大樹。

彼らの言う通り、馬車本体は、みろり色の葉っぱにつやつやな桃が

乗っているデザインになっている。

「じゃ、乗ってみようか、ね、ナビー？」

そう言うのは、御者役、ウエルロットの手綱を引いていた和泉だ。

「内装は俺ら、狩猟班によるものだ」

「いやあ、大変だったよ、ナビー」

秋葉と佐野も近寄ってきて言う。

う……、やっぱり私が乗るのか……。

「さ、乗って、乗って、ナビー」

秋葉が馬車の扉を開ける……。

すると、バサー、と、大量の紙切れが崩れ落ちてきた……。

「ああ!? さ、佐野、戻して、戻してー!」

「う、うい」

と、秋葉と佐野が外に落ちた紙切れを急いで馬車の中に入れる。

その紙切れはなんだろうな、細切れになった新聞紙に見える……。

それが、馬車の中に大量に入れてある、もう、ぎゅうぎゅう詰めて感じで。

う、うーん……。

「さ、乗って、乗って、ナビー!」

こ、これって、どういう反応すればいいのかな……?」

もの凄くちっちゃな馬車、そして、その中にある大量の新聞紙……。

「はやく、はやくー!」

「ナビー、早く乗って、ドライブに行こう」

くっ……。

しようがないので、私は前かがみ、ほとんど四つん這いの状態で馬車に乗り込む。

前が見えない!

私は細切れの新聞紙をかき分けながら、トンネルを掘るように中に入っていく。

コンコン、と、扉とは反対側から音がする。

音のするほうに進む。

すると、そこに小窓があった!

「ぶはあ！」

と、小窓から顔を出す。

「「おお」」

顔を出したらそこにはみんながいた。

「ナビー、ここに手を乗せて、両手をちよこんと」
「うん」

と、窓枠にちよこんと両手を乗せる。

「か、かわいい！」

「て、天使だ、天使が舞い降りたぞ！」

「ハムスターみたい！」

「衝撃的なほど、かわいい！」

と、みんなが大盛り上がり。

「じゃあ、進むよ」

と、和泉が言うと、馬車はゆつくりと動き出す。

カラン、コロン、カラン、コロン……。

小気味良い鐘の音を奏でながら馬車は進む……。

あ、でも、乗り心地は悪くないかな？

「かわいすぎるでしょ！」

「信じられない、もうだめ、かわいいよ、ナビー！」

「ナビー、手を振ってえ！」

と、そんな事を言いながらみんながうしろからついてくる。

しようがないのでみんなに手を振る。

「笑顔、笑顔！」

笑顔を作る。

「かわいい！」

「しびれた！」

「もつと、もつと！」

あ、なんか、楽しくなってきた。

「よーし」

私は小窓に肩まで入れて両手を出す。

「みんなあ！」

と、満面の笑みで、両手を大きく振る。

「かわいい！」

「天使すぎる！」

「反則だろ、その笑顔！」

「頭にいっぱい紙乗せてるのもかわいい！」

みんなも手を振りながら追い駆けてくる。

「みんなあー！」

何度も何度もみんなに手を振る。

なにこれ、楽しすぎるでしょ。

「よーし」

次はこれだ。

馬車の中から細切れの新聞紙を掴んでみんなに投げる。

「おお！」

「紙ぶぶきー！」

「綺麗！」

なんか、夜のせいもあつて、細切れの新聞紙が白っぽい綺麗な紙ぶぶきに見えた。

「もつと、もつとー！」

「もつと、紙ぶぶきちょうだい！」

「よーしー！」

私は大喜びで、新聞紙を掴んでは投げ、掴んでは投げを繰り返す。

紙ぶぶきが風に舞い上がる。

それをみんなで見上げる。

ああ、なんて、楽しいお誕生会なんだろう。

そう、心の中でつぶやく。

第43話 ビンゴだぜ

一通りパレードをしたあと、最初の中央広場に戻ってくる。細切れの新聞紙を大量に撒いたせいか、馬車の内装がよく見えるようになった。いた。

「なんにもない……」

そう、新聞紙以外になにもない。

見えるのは塗装もなにもしてない茶色い木目の内壁だけ。

「ど、どうせなら、ちっちゃい椅子も欲しかったな……」

と、思うけど、高さが足りない、たぶん座れないと思う、四つん這いでうずくまった姿勢じゃないと頭をぶつけちゃう。

「も、もう少し、大きく……、いや、でも、これくらいいいのかな……、みんなかわいい、かわいいって大好評だったし……」

私のもぞもぞと、馬車から這い出ていく。

そして、そのまま転がり落ちるように馬車から降りる。

「ふう……」

と、立ち上がり一呼吸つく。

「かわいかったよ、ナビー！」

「やっぱ、ナビーにはピンクが似合うな」

「うん、うん、ナビーには、白よりも赤系が似合うと思う」

みんなが私と馬車のまわりに集まってくる。

「乗り心地はどうだった？」

「うん、揺れも少なくて快適だったよ、彰吾」

「速度は怖くなかった？」

「大丈夫だよ、ハル、ちょうどよかった」

笑顔で応対する。

「ぶるるうー！」

と、ウエルロットがいなくなる。

「あ、ごめんね、ウエルロット、疲れてない？」

優しく頭をなでながら、その瞳を覗き込む。

「ぶるるうー！」

うん、元気、疲れてないみたい。

「せっかくみんなが集まったんだから、記念撮影でもしましょうか」と、女性班の徳永美衣子が三脚付きのカメラを持ってくる。

「お、いいね!」

「賛成! 修学旅行の集合写真ね!」

「撮ろう、撮ろう!」

みんなも大賛成。

「まだバッテリーあつたんだ?」

「私のスマホ、もう電源入らないよ」

「うん、まだ行ける、まだ大丈夫だと思う……」

と、徳永が撮影の準備をしながら答える。

「えーつと、じゃあ、暗いから、焚き火の前に移動して」

みんながその指示に従って移動する。

「真ん中はナビーと馬車ね」

私とウエルロット、それと馬車が真ん中で、女子が私の左右、男子が馬車のうしろつて感じに整列する。

「タイマーは10秒ね! 撮るよ!」

と、徳永がファインダーを覗き込みながら言い、そして、ボタンを押して、急いでこつちに走ってくる。

「みいちゃん、こつち、こつち!」

彼女は女性班の人たちの間に身体を滑り込ませる。

「4、5、6……」

と、徳永がカウントする。

「7、8、笑顔ね!」

私はそれを聞いて、ウエルロットの頭を両手で抱いて、精一杯の笑顔を作る。

じつと、笑顔で固定する……。

こ、固定する……。

「あ、あれ、シャッターがおりない、設定間違ったかな……?」

徳永がポツリと言う……。

「ええ!」

「お、俺の最高の笑顔が！」

「ひどい、みいちゃん！」

と、みんなが表情を崩して笑う。

「カシャ」

その瞬間シャッターがおりた……。

「ふふ、大成功……」

徳永がにやりと笑う。

その手には黒い物、リモコンが握られていた。

「ええ!? タイマーじゃなかったの!？」

「油断したと撮られた！」

「ひどい、みいちゃん！」

「変な顔になってないよな？」

「いや、でも、笑った」

「うん、さすが、徳永さん、ナイス」

と、みんなが大笑いする。

「もう、美衣子め、騙したな！」

私も便乗して、ウエルロットに頬ずりしていた顔を上げて叫ぶ。

でも、ちよつと笑っっちゃうよね、これは……。

「カシャ」

と、また、シャッターのおりる音がした。

「本命はこっち……、みんなのその笑顔撮りたかったの」

今度はにやりじゃなくて、顔を傾けてはにかんだような表情を見せる。

「に、二段構え……」

「完璧にやられた……」

「さすがだ、もう何も言えん……」

本当に、すごいな……。

最高の一枚になったと思うよ。

「もし、日本に帰れたら、プリントしてみんなに渡すね、それまで大切に保管しておく……」

と、徳永がカメラを片付けながら言う。

と、徳永がカメラを片付けながら言う。

「お、いいね！」

「楽しみが増えた！」

「へ、変な顔になってなきやいいけど……」

それにしても、イベント盛り沢山のお誕生会だったよね……。

楽しかったなあ……。

でも、細切れの新聞紙を大量に散らかしてしまった……、後片付けも大変そう……。

と、広場や草原に散らばる新聞紙を見ながら小さく溜息をつく。

「まつ！ それは明日だね！」

私はすでにテーブルの後片付けをしている女子たちのもとに走っていく。

「私もお手伝いする！」

と、その輪に入っていく。

「それでは、本日最後の大イベント！ 男子による出し物、全員参加型のゲームを執り行いたいと思います！ みなさん、こちらにお集まりください！」

と、司会の南条が大きな声で言う。

「あ、あれ？ 終りじゃなかったの？」

「そういえば、男子たちの出し物がまだだったね……」

「うん、いきましよう」

と、私たちは後片付けの手を止めてそちらに向かう。

中央の大きな焚き火の前にみんなが集合する。

「二応、このゲームが男子の出し物になりますが、ゲームの性質上、参謀班の綾原、海老名兩名にもお手伝いを願っております。それでは、例の物配って」

参謀班の面々がみんなに画用紙みたいな小さな厚紙を配る。

10センチ角くらいの小さいやつ。

それに、シールが貼ってあって、数字が書かれている。

横に1から4で、それが4列、16まである。

「うーん？」

私はその厚紙をひらひらして、焚き火に透かしてみる。

「うーん……」

わからん。

「えーっと、これから始めるのはビンゴゲームです……」

と、南条と青山がくじ引き箱みたいな物を四つ持ってくる。

ビンゴ？ それって、普通数字がばらばらに書かれているものじゃないの？

これ、1から16までちゃんと並んでいるよ。

「ですが、これはただのビンゴゲームではありません……、ビンゴだぜ！ です」

「「ビンゴだぜ！」」

男子たちが復唱した……。

「ビンゴだぜ！」

南条が拳を突き上げてもう一度叫ぶ。

「「ビンゴだぜ！」」

すると、男子たちも拳を突き上げてもう一度復唱する……。

「ビンゴだぜ！」

「「ビンゴだぜ！」」

なんか、楽しそうだなあ……。

と、私はビンゴシートをひらひらさせながら彼らを見る。

「では、ルールの説明に入らせていただきます……。これから、こちらにある抽選箱から番号の書かれた札を引きますので、みなさんはその出た番号と同じシールを剥がしてください。あ、ちなみに、シールの下に書かれている内容はそれぞればらばらですので、ご安心ください」

うーん？

書かれている内容？

数字が揃ったら何かプレゼントが貰えるんじゃないの？

「うーん……？」

首を傾げる……。

「それでは、試しにひとつ引いてみましょう……」

と、南条が四つある箱のうち一番端にある箱に手を入れる。

「引きますよお……」

彼が一枚の紙を取り出す。

「4です!」

そして、みんなにその番号の書かれた紙を見せる。

「4番のシールをめくってください!」

私は言われた通りに、自分のビンゴシートの4と書かれたシールを
めくる……、すると……、

「秋葉に……?」

そう書かれている……。

あ……、これ、やばいやつだ……。

直感的にそう悟る。

「ええ、二つ目引きます!」

南条が二つ目の箱から同じように番号の書かれた紙を取り出す。

「次は8です! めくってください!」

言われた通りにシールをめくる……。

「ルビコン川で……」

やっぱりだ、なんかやらせる気だ……。

「はい、三つ目! 10です!」

次に10のシールをめくる。

「服を脱ぎながら……」

おい……。

「最後、四つ目! 15です! めくってください!」

そして、最後の15のシールをめくる。

「愛の告白をする……」

ええっと、つなげると、秋葉に、ルビコン川で、服を脱ぎながら、愛
の告白をする?

吹いたわ。

まさか、こんなゲームを最後に持つてくるとはねえ……、正直、あ
いつら男子をなめてたわ……。

第44話 闇夜のアノマリー

「皆さん、シールは剥がし終わりましたか？ 4、8、10、15、ですよお、あ、そこ、そこ、シートを他の人に見せるのは禁止ですよ！ 口外するのも禁止です！」

と、見せ合いをしようとしていた女子たちに南条が釘を刺す。

「それと、4に書かれている相手と話せるのは8に書かれている場所だけで、それ以外の場所での会話は禁止となっております。なんとか周囲を利用してその場所に誘導して指示を実行して下さい、それが、この、ビンゴだぜ！ の基本ルールです」

「『ビンゴだぜ！』」

なぜか、男子たちが、ビンゴだぜ、に反応する……。

「あと、個人戦では面白くないので、チーム戦にする事にしました。男子チームと女子チームに分かれて戦ってもらいます。指示を実行出来たら3ポイント、指示を実行出来なくても2ポイント、ですが、ルール違反での失格は0ポイントになりますので、ご注意ください。最終的にポイントの多いチームが勝ち、負けたチームには後日、罰ゲームとして、第2回露天風呂攻防戦の防衛側、つまり、お風呂に入る側にまわってもらいます」

うーん……。

つまり、男子と女子の対戦形式で、指示を実行出来たら3ポイントもらえて、実行できなくても2ポイントはもらえると……。

で、直接指定された相手とは話せなくて、話せるのは指定された場所のみ、つまり、指示を実行する時だけ……、さらに、ビンゴシートの内容を他の人に教えたら失格、と……。

で、負けたらお風呂を覗かれる側になる、と……。

もう、びつくりするくらい露骨……。

ポイント配分といい、誰にも口外させないで、隠れてエロい事する気満々じゃない……。

ふざけやがって……、楽しい気分が台無しになった……。

「えーっと、あとは男子が有利になりそうなので、ハンデといたしまし

て、我々参謀班の男子3人は不参加、運営側、ゲームマスターとしてルール違反の監視や安全管理、その他もろもろを行いたいと思います。あ、あと、エシユリンもまだ不慣れなので運営側のお手伝いをしていただきます」

南条、青山、くんくんの3人がいないのか、それは助かるね……。

「ええ……、なんか、指示酷いよ……」

「うん……、それに、負けたらまたお風呂の防衛側にまわるんだよね」「なんか、ずるいよ、これ、女子に不利っぽいよ……」

女子のみんなが不満を口にする。

だよね、これ、おかしいよ、私の誕生日なのに、全然楽しくない……。

「みんな、心配しないで、これは接待よ」

「私たちの勝ちが決まっているから、今度の露天風呂攻防戦の攻めは私たちよ」

と、参謀班の綾原と海老名がこっちにやってくる。

「そ、そうなんだ？」

「私たちに勝たせるためのゲームなんだ？」

「だよね、2回連続防衛なんてずるいよ、その辺ちゃんと考えてるよね」

「うん、うん、だって、今日はナビーのお誕生日だから、私たちに勝たせてくれるよ」

と、みんなが明るい表情を覗かせる。

「ルールを熟知している私と唯がいて、あっちは人見たち3人がいない、ポイント的にも有利」

「うん、それにその指示を実行しなくてもポイントは入る。基本的にあっちの行動を妨害して失格に追いやって勝つ、それが、この、ビンゴだぜ、の基本的な考え方よ」

「みんな、接待を存分に楽しみましょう、勝ちが約束されているから」と、綾原は言うけど、甘い……。

あいつら、絶対手加減なんてしてくれないよ、だって、欲望の塊だもん、エロい事しか考えてないよ。

私がみんなを守らなきゃ……。

「みなさん、ミッションをコンプリートした際には、大きな声で、ビンゴだぜ！」と、叫んでください、それで、我々運営が駆けつけ、ゲームクリアの判定をさせていただきますので」

「ビンゴだぜ！」

「こちら、まだ早い」

と、男子たちは大盛り上がり。

くっ、ふざけやがって。

「それでは、みなさん、ビンゴシートの内容は暗記いたしましたね？これよりそれを回収いたします、その際、サインをいただいて、その内容をこちら、運営側で確認し、ミッションコンプリートの判断材料とさせていただきます」

と、参謀班の男子3人とエシュリンが広場をまわってビンゴシートの回収を始める。

「ナビー！ サイン、プーン！」

「あ、うん……、はい、エシュリン」

エシュリンからペンを受け取り、ビンゴシートに自分の名前を書き込んで、それをペンと一緒に返す。

「それでは、回収は終わりましたね？ まだビンゴシートを持っていない人はいませんか？ いませんか？」

と、南条が何度も確認する。

「それでは、ミッションスタート！ ビンゴだぜ！」

「ビンゴだぜ！」

男子たち全員が拳を突き上げて叫ぶ。

こうして、ビンゴだぜ、が始まった。

まず、どうすればいいんだろう……。

私は秋葉をルビコン川に連れ出して服を脱ぎながら愛の告白をすればいいんだから……。

直接話すのは駄目だから、誰かに頼んで秋葉を呼び出してもらって……、いや、それは、駄目だ、私のターゲットが秋葉だつてばれちゃう、ばれたら最後、秋葉は絶対にルビコン川には近寄らなくなる……。うーん……。

と、色々考えを巡らす。

「ねえ、ナビィ、機嫌はどうだい？」

生活班の佐々木が話しかけてくる。

「うん？ まあまあだよ？」

「そっか……、笹雪さんは？」

「普通」

「そっか……」

と、彼が変な質問を繰り返す……。

「徳永さん、さっきのカメラのトリックは凄かったね」

「うん、ありがと」

「綾原さんはこのゲームに詳しくそうだから強敵になりそうだなあ」

「そうね、私も一応ルール作成には一枚噛んでるから……」

と、中央広場のあちこちで男子たちが女子たちに話しかけている。

でも、どこかおかしい、男子たちが自分の話しかけた相手ではなく、

他の会話する人たちの様子を見ている……。

「あ、あれ！ どうしたの、伊藤さん、俺とは話してくれないの!？」

と、管理班の久保田が大きな声を出す。

それを男子たちが一斉に見る。

あ、わかった。

ターゲットの確認をしているんだ！

女子が男子の誰をターゲットにしているかの確認だ！

「みんな！ 男子たちと話しちゃ駄目！ 会話禁止、ターゲットがば

れちゃう！」

と、私は大声で叫ぶ。

「作戦がばれたぞお！」

「退却だあ！」

「逃げろお！」

「ひゃっほお！」

と、男子たちが草原のほう走っていく。

な、なんなんだ、あいつらのテンションは……。

「だ、男子たち、チームで動いているのね……」

「うん、こつちも、何か作戦考える？」

「雫、何か案はない？」

と、徳永が綾原に意見を求める。

「そうね……、とりあえず……」

「海老名さん！」

綾原が何か話そうとした時に、生活班の山本がこつちに走ってきた。

そして、海老名の前に着くと、しゃがんで靴紐を直し始める……。

「はい？」

海老名が首を傾げて聞き返す。

「あ、あの、海老名さんの気持ちは凄くありがたいんだけど、俺には、その、別に好きな人がいて……」

山本が靴紐をほどこきながら話す。

「は、はい？」

海老名が困惑したような表情を見せる。

「やっぱり、その……、ええつと、ごめんない！」

そして、山本が靴を両方脱ぎ立ち上がる。

「別れてくださいー！」

と、大きく頭を下げる。

「よし！ ビンゴだぜー！」

さらに、今度は拳を突き上げて叫ぶ。

「ミッショコンコンプリート！ 山本新一、ビンゴだぜー！」

「『ビンゴだぜー！』」

ええ!?

と、私は司会の南条を見る。

彼の手には、海老名に、中央広場で、靴を脱ぎながら、別れ話をする、と、書かれたビンゴシートが握られていた。

と云うか、ここも指定場所のひとつだったの!?

あ、そうか！ だから、男子たちが草原のほうに逃げていったのか！

「み、みんな、今すぐここから出て！」

他にもここが指定場所の人がいるかもしれない!

「あ、鹿島さん! 肩に毛虫いるよ!」

と、さらに、山本が言い出した。

「え、ええ!?! ど、どこ、山本くん!?!」

鹿島が大慌てで肩を手で払う。

「鹿島美咲、アウトー! ターゲットの名前を呼んでしまいましたあ
! 失格です!!」

と、南条が野球のアウトみたいなモーションで叫ぶ。

「よっしやあ! 二枚抜き!!」

山本がガッツポーズをする。

「さすがだぜ、山本!」

「おまえがうちのエースだ!」

「よくやった!」

「ひゃっほお!」

と、草原の男子たちが大盛り上がり。

「ご、ごめん、みんな……」

「山本が来たとき、逃げればよかったんだね、ごめん……」

鹿島と海老名が謝る。

「だ、大丈夫だって、まだ行けるよ」

「うん、始まったばかりだし」

「まだマージンあるし、大丈夫だよ」

と、みんなが二人を励ます。

これ、本当に、血も涙もない騙し合いなんだね……。

あーあ……、あつたまきちやった……。

あいつら、全員、ぼっこぼこにしてやるよ……。

私は目を細めて、やつらを見る。

第45話 獣はいふなり

「それでは、ミッションコンプリート者とゲーム失格者はこちらで待機しててください」

と、司会の南条が山本と鹿島にこっちに来るようにと促す。

「終了までここで静観しててください、手出し無用、口出し無用でお願いします。えーっと、では、見張りはエシユリンにやってもらいましょう」

「はい、ぷーん！」

そこは広場の北側、割と普通なナビーフイユリナ記念会館の前になる。

「あと、ゾンビはー3ポイントになりますからご注意ください、ああ、ゾンビとはミッションコンプリート、または失格したのにも関わらず、その後もゲームに参加し続け人の事ですからね」

つまり、ゲームのクリア、失格の判定は運営だけではなく、参加者の自己申告にも頼るってわけね。

「それでは、ゲーム再開！ ファイ！ ファイ！」

と、南条がプロレスのレフリーみたいな仕草でゲームの再開を宣言する。

「みんな……」

私はみんなに近寄り小声で話す。

「一回、ロτζジに帰ろう」

「ロτζジに？」

「そこに隠れるの、ナビー？」

「ううん、違うよ、みんな、こっちのターゲットがばれたから相当不利になった、だからね、それを補うために偽装するの、みんな、学校の制服に着替えて変装するの、あと、顔の見えにくい帽子もね」

と、私はみんなに作戦を伝える。

「うん、いいアイデアね」

「そうね、みんな一旦自分たちのロτζジに戻って着替えてきましょう」
徳永と綾原も賛同してくれる。

「あ、作戦がばれるの嫌だから、みんな適当にばらばらに走ってロツジを目指してね。あ、あと、美衣子、美咲の制服、上着だけ私に貸して」「うん、わかったわ、ナビー、準備しておく……、それじゃ、行くよ……、よーし！ 作戦開始！ 男子たちをぶっ倒すよ!!」

と、徳永が偽装用の掛け声を大きな声で叫んでくれる。

「「おお!!」」

それを理解した女子たちも、拳を突き上げて叫び、

「「わあああ!!」」

と、蜘蛛の子を散らすように、四方八方に駆け出していく。

「お!? 女子チームが本気になったぞ!!」

「やばい、やられる！ 一旦退却だあ!!」

「逃げろお!!」

「ひゃっほお!」

と、男子たちが一斉にルビコン川のほうに走っていく。

びつくりするくらい、簡単に引つかかってくれた……。

私は彼らを横目にロツジへと向かう。

それから、私たちはすぐに着替えて中央広場の手前に集合する。

まあ、私は着替えてはないんだけどね、とりあえず帽子だけ、この長い金髪をどうにかしたかった。

「はい、ナビー」

と、紺色のブレザーを徳永に着せてもらう。

「ありがとう、美衣子」

お礼を言いながらそれに袖を通す。

「よし」

帽子も大丈夫、ブラウンの帽子、探偵が被っているような帽子とぶかぶかのブレザー、丈が太ももくらいまできて白いワンピースが見えにくくなっている。

一番背の低い福井でも私より10センチ以上高いけど、遠目だったらわからないと思う……。

「よーしー・じゃあ、私はルビコン川の索敵に行ってくるね!」

と、私は手を振りながら男子たちが向かった先、ルビコン川へ続く

道に向かって走りだす。

「いつてらつしゃあい」

「気をつけてね、ナビー！」

「捕まっちゃ駄目だよお」

みんなも手を振って応えてくれる。

全速力で駆け抜ける、

ラグナロク広場を出て500メートルほど走ると、少し開けた場所に出る。

ここは、ちょうどルビコン川とラグナロク広場の中間地点にあり、資材置場などに使われている。

広さは、そうね、直径30メートルくらい、その真ん中に焚き火があり、明かりを確保してくれている。

「誰もいない！」

それを確認して、先を急ぐ。

「はあ、はあ、はあ……」

息が切れた……。

しかも、暑い、美咲のブレザーがとっても暑い……。

「はあ……、ひい……、はあ……、ひい……」

と、やっとルビコン川に到着。

「ふう……、ふう……、ふう……」

私は広葉樹と膝に手を付きながら呼吸を整える。

とりあえず、袖で額の汗を拭いながら、周囲を見渡す。

「焚き火がある……」

そして、その側には人影が一つ……。

「お、ナビーか？ どうした、その格好、偵察にでも来たのか？」

それは秋葉だった。

その彼が一人で焚き火に薪をくべている。

「あ……」

蒼、そう言いそうになった……。

危ない、危ない失格になるとこ……、いや、大丈夫、ここは、ルビコン川、私の指定場所だ……。

「あ、蒼……、どうしたの、一人で？」

と、私は他に誰かいないか警戒しながら彼に近づく。

「一応、危険があるかもしれないから、人が行きそうなところに明かりを点けてまわっているんだよ」

彼が優しい笑顔で話してくれる。

チャーンズ、私のターゲットが自分だって気付いていない。

「そ、そうなんだ、他のみんなは……」

そう言いながら彼に近づく。

「ふっ、敵に情報を教えるわけないだろ、ナビー？」

「ひどーい、蒼、教えてくれてもいいでしょ……」

とか言いながら、ブレザーのボタンを外し始める。

「いや、いや、って、なぜ、服を脱ぐ？」

彼が怪訝そうな表情を見せる。

「ふふ……、それはねえ……、誰もいないからだよ、蒼……、前に言っ
てたよね？ 俺の事が好きならどうとかって、それをね、今からしよ
うと思うの……」

「え？ ちょ、ちよつと待て、ナビー、あれは冗談だつて！」

秋葉が動揺している！

なんか、楽しくなってきた！

「ふふふ……、もう、遅いよ、蒼……、私、もう、決めたんだから……」

と、ボタンを全部外し終わり、ブレザーを脱ごうとする……。

「な、ナビー、やばいってー！」

秋葉が数歩たじろぐ。

私はそれを追う。

「ふふふふ……、ねえ、聞いて、蒼……？」

うん？

ちよつと待てよ、ここでミッションコンプリートしたら、もうゲ
ムには参加出来なくなるんだよね？

そしたら、みんなに男子の情報を教えられなくなる。

それをやったらゾンビで――3ポイントだからね……。

「うーん……」

と、脱ぎかけたブレザーを羽織り直す。

「じゃあ、他のみんながどこに行ったか教えて？」

すぐに切り替える。

「お？ 色仕掛けで情報を聞き出そうとしたのか？ 10年早いぜ、ナビー」

彼は察したのかにやりと笑う。

「教えてくれなくても、大体想像はつくけどね、また前と同じように森の中を行軍しているんでしょ？ たぶん、女子の背後を突く気だと思
うから……、ヒンデンブルク広場あたりを指しているのかな？」

と、適当な事を言う。

「うぐ、それは言えん……」

うん、正解だったみたい。

「ありがと、蒼、その反応でわかったわ」

よし、みんなに報告に戻ろう。

と、踵を返して歩きます。

「あ、蒼はずっとここにいるんだよね？」

立ち止まって彼に尋ねる。

「い、いや、俺もみんなと合流する……」

うん、その反応でわかった、ここで見張りをしているのね。

「ありがと、蒼、じゃあね、ばいばい！」

「お、おう……」

走りながら肩越しに彼を見る。

ふふっ……。

ずっとそこにいてね、あとで二枚抜きしてあげるから……。

そして、そのまま、来た道に戻る。

「みんなあー！」

と、ラグナロク広場に到着して、みんなのところに走っていく。

「みんなあー！ 男子たちの作戦がわかったよお！」

大きく手を振りながら走る。

「みんなあー！」

もう、大喜びで、帽子を取ってそれを振りまわしながら走っていく。

「ねえ、みんなってばあー!」

ついでに、髪をとめていた白いシユシユも外す。

ああ、長い髪が風に泳いで気持ちいい。

「な、ナビー……」

「おかえりなさい……」

と、みんなが中央広場の手前の草原で出迎えてくれる。

でも、みんなの元気がない……、と云うか人数が少ない……。

「あれ、他の人は? どこかに陽動でも行ったの?」

と、周囲をキョロキョロとしながら尋ねる。

「そ、それが……」

「あっち……」

みんなが広場のほうに視線を向ける……。

「ああ!」

笹雪とか伊藤とか女子4人が割りと普通なナビーフィユリナ記念

会館の前にいる!

「や、やられたの!?!」

しかも、山本の他にも男子が3人増えている!

「う、うん……」

「飛行機の前で楓と若菜が、調理室の前でめぐみと千香がそれぞれ

……」

し、失格が5人になった……。

「ど、どうしよう、全然手加減してくれないよ、男子たち……」

「このままだと負けちゃうよ……」

と、口々に弱音を吐く。

それに、なんか、クリアした男子たちがこっちを見てにやにや笑っ

ているし……。

「むっかあ! それで、男子たちはどっちに行ったの!?!」

もう、あつたまきたあ!

「うん? ナビー、会わなかった? ルビコン川のほうに走って行っ

たよっ!」

海老名が指を差して教えてくれる。

「誰とも会ってない……」

と、なると、やっぱりやつらは森の中を移動しているのね……。

なら、素直にそのままルビコン川に向かうはずはないから、迂回してヒンデンブルク広場に向かって、そして、また女子たちの背後を突く作戦に出るはず。

「よし！ みんなはそのまま警戒して！ 失格だけは気をつけてね！」

と、私はすぐさま、ヒンデンブルク広場に向かって全速力で走り出す。

第46話 白いケープ

ヒンデンブルク広場へ向かう道は狭く走り辛い。

「ひい、ふう、ひい、ふう」

走るのを止め、呼吸を整えつつ歩く。

ラグナロク広場からルビコン川往復で約2キロ、そして、ここまで500メートル、そのほとんどを全速力で駆け抜けたせいで、もう息も絶え絶え……。

なにより、上着のブレザーが暑い、超暑い、もう凄い汗だくになっている。

それから少し歩くと明かりが見えてくる。

ここも、ルビコン川へ向かう道と同じように、中間地点に広場がある。

真ん中に焚き火。

直径30メートルほどの広場の外周には切り倒した木材が積みまれている。

また、日が届くようになったせいか、今来た道とは違い地面が乾いていて、うっすらと雑草も生えだしていた。

「暑い、暑い……」

やばい、汗が滝のようにでる……。

鹿島のブレザーがびしょびしょになる……。

とりあえず、ブレザーを脱ごう。

「うんしょつと……」

と、脱いだブレザーを木の枝にかけて乾かす。

「だめだ、汗が止まらない……」

もう、これも脱いじゃえ！

と、白いワンピースも脱ごうと思ったけど……。

「あ、あれ……？」

なんか、取れた。

肩から羽織るようになっていた白いひらひらが取れた。

「おお、これ、ケープか！」

タオルみたいな長いやつ、それを両肘のところのボタンで留めるようになっていた。

「ふう……」

それで顔とか首の汗を拭き取る……。

ついでに肩とか背中とか色々なところも拭いちゃえ。

湿度が高いせいかな、全然汗が引かない……。

ごしごしと……。

こつちもつと……。

「こんなものかな……」

少しきつぱりした。

「うんしょつと……」

また木材に上がり、白いケープをブレザーの隣に干す。

「うーん、ちょっと、乾かしておくか、美咲に怒られそうだしね……」

と、ブレザーと白いケープが風に泳ぐ様を見上げながらつぶやく。

とりあえず、ヒンデンブルク広場の偵察、その帰りに回収でいいかな。

と、ヒンデンブルク広場に向かおうとすると、反対方向、ラグナロク広場方面の道から足音が聞えてきた。

だ、男子たちか!?

私はとつさに木材を飛び越えて森の中に隠れる。

ヒタ、ヒタ、と、足音が近づいてくる……。

音から察すると、相手は一人、誰だ……?!

と、私は木の影から顔を出して広場の中央付近を見る。
やっぱり一人だ。

その人物は銀縁メガネの頭の良さそうなやつ……。

「彰吾……?」

そう、参謀班の人見彰吾だった。

彼は運営、ゲームマスター、男子チームではない……。

「ほう……」

拍子抜けして大きく息を吐き出す。

「しょ……」

と、声をかけて出て行こうと思ったけど……。

あいつも男……、男子チームと繋がっているかもしれない。

このままやり過ぎるのが無難か……。

私は頭を引っ込めて息を潜める。

「うん……？」

と、人見が何かに気付いた。

「あれは……？」

こつちに歩いてくる音がする……。

やばい、気付かれたか……。

奥の木に逃げようと思ったけど、足音が止まった。

私はそつと、木の影から顔を出して辺りを確認する。

「制服……、それに、タオルか……？」

人見が私の干していたブレザーと白いケープの前に立っていた。

「誰のだ？」

彼が私の白いケープを手取る……。

「あつたかい……、それにかなり湿っているな……」

白いケープを手に取りながらつぶやく。

「くんくん、くんくん……」

そして、匂いを嗅ぎ出す。

「こ、これは……、くんくん、くんくん……」

くんくんがくんくんしている……。

「くんくん、くんくん……」

これは、チャンスだよね？

「くんくん、くんくん……」

彼は夢中で私の白いケープの匂いを嗅いでいる。

私は木の影から出て、遠回りに人見の背後を突く。

「くんくん、くんくん……」

そつと、置いてある木材に上がり、うしろから覆いかぶさるように腕をまわして口を塞ぐ。

「くん？」

そして、彼の耳元に顔を近づけて言ってやる、

「めえ……」

と。

間違った、それはシウスだ。

「ねえ……、彰吾……？ なにをやっているの……？ それ、私のケーブだよ……？」

「おごっ？」

「黙って、聞いて、ナビーよ」

「なごお？」

「でもさあ、前にもこんな事なかった？ 前は私のバスタオルだったよね？ それと合わせて、今回は私の汗がたっぷり染み込んだケーブ、その匂いを嗅いでいたなんて……、みんなが知ったらどんな顔をするでしょうね、もう、信用ガタ落ちよ、あの人見くんがねえ、って……」

「お、おごお……」

「だからね、この事は黙っていてあげるから、取引しましょう？」

「とごお？」

「そう、取引、私たち、女子チームの味方になって、これは名誉挽回のチャンスよ」

そつと、彼の口元から手を放す。

「わ、わかった、キミの指示に従う……」

と、人見が口元を押さえながら振り返る。

「私のケーブ返してー！」

彼から白いケーブを奪い返す。

そして、木材の上を両手で広げてバランスを取りながら歩き、風通しの良さそうなところにもう一度白いケーブを干す。

最後にパンパンとして、風に泳がす。

「そ、それで、俺は何をすればいいんだ、ナビー？」

「そうねえ……、何をやってもらいましょうか……」

気持ち良さそうに風に泳ぐ白いケーブを見上げながら考える。

「何か、全員の足止め、動けなくなるような魔法ってない？」

「ない事はないが、一人では厳しいな、南条、青山、それか綾原、海老

名、その誰かのサポートが必要だ」

そつかあ……、綾原と海老名か……。

「雫と唯には言っておく、なんて伝えればいい？」

「俺に向かつて、限界まで媒体照射レディッカルを撃ち続けろ、それだけいい、あとは俺がなんとかする」

「おお、頼もしい……」

さすが大魔道、頼りになる。

「じゃあ、彰吾、あなたはラグナロク広場に戻っていて、そこで私の合図を待つのよ！」

「わかった、キミは？」

「私はヒンデンブルク広場の偵察に行つて、出来れば、男子たちをラグナロク広場に誘導するから！」

「わかった、広場に戻る」

「お願いね、彰吾！」

「ああ、汚名返上だ」

彼がかすかに笑つて言う。

「うん！」

と、彼に手を振りながら走り出し、ヒンデンブルク広場に向かう。

中間地点を出て、50メートルも走れば、すぐに明かりは届かなくなり、暗闇が支配する世界に様変わりする。

道が狭く、広葉樹が伸ばした枝が樹冠を作り、星明りさえ遮る完全な闇……。

バチヤン。

「あつ！」

と、水溜りを気付かずに踏んでしまい、激しい水しぶきを上げる。

「ああ……、泥はねが心配……」

このワンピースは今日みんなからもらったばかりの誕生日プレゼントだからね……。

と、裾の泥はねを気にしながら走っていると、前方から明かりが見えてくる。

ボウツと、暗闇に浮かぶ火の玉みたいなの……。

「ううん……？」

目を凝らして見る。

「うーん……？」

なんだ？

「あーん……？」

わからん。

と、思ったら、それはランタンだった。

誰かがそれを持ってこつちに歩いてくる。

「だ、誰だ……？」

相手は一人、あつちももう私に気付いていると思う。

なのに無言で歩いてくる……。

「おーい！」

と、ちよつと怖くなったので、手を振りながら声をかけてみる。

でも、相手は無反応……。

段々近づいてくる……。

「お、おーい……」

や、やばい、お化けかも……。

と、思ったら、それは狩猟班の和泉春月だった。

「な、なんだ、ハルか……、驚かせないでよ……」

胸を撫で下ろす。

「それで、こんなところで何やってるの、ハル？ 見回り？」

秋葉もそうだけど、狩猟班の男子が安全管理をやっている感じがする。

「ハル？」

でも、その彼は何も言ってくれない……。

「ねえ、ハル……？」

不安になって彼の顔を覗き込む。

その表情はいつも通り、柔和なもの……、でも、何も言わない……。

「ど、どうして、何も言ってくれないの……、うん……？」

と、言うのと、和泉は笑顔でヒンデンプルク広場のほうを指差す。

「うーん……？」

何度も広場のほうを指差す。

「一緒に行こうって……?」

すると、和泉は大きくうなずく。

「うーん……?」

あーん……?」

ははーん……。

ははーん!

さては、和泉のターゲットは私だなあ? だから話せないんでしょ

!

そして、指定場所はヒンデンブルク広場!

「うん、いいよ、ハル!」

と、私は元気よく和泉の前を歩きだす。

くくく……。

ヒンデンブルク広場に着く前に勝負を決めてやる……。

第47話 細糸のコンセンサス

ランタンのゆらゆらとした明かりが道を照らす。

それは、後方からの明かりで、私の前方に長い、長い私の影を作り上げる。

私はその影を追いかける……。

歩く速度を上げれば、同じように私の影も速度を上げる……。

反対に追いかけるのを諦めて速度を緩めれば、私の影も速度を緩める……。

「くっ、弄びやがって……」

と、内心舌打ちをする……。

などと、遊んでいる場合ではない。

「ねえ、ハル……?」

と、私はうしろを歩く和泉に声をかける。

だが、返事はない……。

まあいい……。

私は水溜りを避けながら歩く。

「よっと」

さらに、時折落ちている少し大きめの石を飛び越える。

「なんか……、お化けで出そうで怖いから、お話しながら歩くね……」

当然、うしろからの返事はない。

「よっとー!」

また落石を飛び越える。

ちよっと、大きめの石だったので、着地の時に両手を広げてバランスをとる。

「100年前、この地に舞い降りた天滅あまほろぼすの伝説は知っているよね?

現地の人たちがナギと呼ぶ存在の事よ」

肩口に和泉をちらりと見て話し始める。

「世界を滅ぼす存在……、そう伝説は語る……、で、問題はここから、どうして彼らは世界を滅ぼそうとしたの?」

また小さな水溜りを避ける。

「エシユリンが言うにはね、それは彼らのお姫様がいなくなっちゃったからなんだって、綺麗な長い金髪の小柄でかわいらしいお姫様、アイスブルーの瞳で、純白のドレスを着た綺麗なお姫様……」

お姫様の容姿は全部嘘なんだけどね。

「お姫様がいなくなつて、現地の人たちがさらつたと思つた天滅あまほろぼすは怒り狂い世界を攻撃した……、でもね、それは誤解なんだって……」
うつむき加減に水溜りを避けながら歩く。

「お姫様はいなくなつてなくて、森の中で迷子になつていただけなんだって、でも、運の悪い事に、そのお姫様が木登りしたときに足に蔦かがからまつて取れなくなつた、お姫様の身体は木の枝から宙ぶらりん、一生懸命、蔦を取ろうと頑張つたけど無理だった……、何度も何度も、こうやって、足にからまつた蔦を取ろうとした……」

前かがみになつて、足にからまつた蔦を取る仕草をする。

「そうこうするうちに天滅あまほろぼすが現地の人たちを攻撃し始めた、世界を燃やす勢いでね……、お姫さまはそれを止めようと蔦を取ろうとする……、でも、取れない、一年、二年経つても取れない、お姫様の命が尽きても取れない、死んでも尚、天滅あまほろぼすの攻撃を止めようと、足にからまつた蔦を取ろうとする……」

私も蔦を取る仕草を繰り返す。

「それは、今でも続いている……、100年経つた今でも、お姫様は足にからまつた蔦を取ろうとしている……」

蔦を取る仕草を止めて、前を向いて歩きます。

「でね、ここからは私の想像なんだけど、その天滅あまほろぼすってヒンデンブルク広場の人たちの事なんじゃないの？ 時代的にも一致するし、もし、そうだとしたら、そのお姫さまが迷子になつた森って、このあたりなんじゃないの？」

今度は立ち止まつて顔だけ彼に向けて言う。

「あつ……」

森のほうを見て小さく声をだす。

「ねえ、ハル、あそこに誰かいない？」

「えつ……」

彼が小さな声を出す。

おいしい、今のはセーフか？

「だ、誰かいるよ、ハル！ 見間違いじゃないよ！」

と、私は森の中に駆け出していく。

「なっ!?」

ついて来い、和泉、勝負だ！

超楽しくなってきたあ！

ひゃっほおおう！

と、男子たちの真似をして内心そう叫ぶ。

「ほら、ハル！ あそこに、金髪の女の子がいるよ！」

倒木を飛び越え、木の枝を手で払い全速力で森の中を走っていく。

「なっ！ ツッ！」

おやあ、まだ私の名前を呼ばないのねえ……。

なら、これでどうだ！

と、私は木の影、和泉から見えない木の裏に隠れる。

「ほら、ハル、あそこに女の子がいるよ！」

そう、声をかけてから、木をよじ登る。

蔦の多い木を選んだから、それを足場にして登るのは容易だった。

そして、太い枝の上に登り、手頃の蔦を掴んで、それを足に巻き付

けて結ぶ。

「よーし……」

安全のために、蔦を結ぶのは片足だけ、もう片方の足は枝にかけて

おく。

そのまま、タイミングを見計らって、うしろに倒れるように枝から

宙吊りになる。

「蔦が取れないようお、助けてえ」

と、言いながら、両腕をぶらんぶらんさせる……、けど、

「いない……」

和泉がいない……。

帽子も取れて、長い金髪が垂れ下がる……。

そこにあるのは、ランタンのみ、それが明かりを確保してくれてい

た……。

まあ、相手は和泉だからね、これくらいは……。

おまえをなめちやいないよ。

私は反動をつけて、ブランコの要領で身体を前後に揺らす。

どこに行つたかは、大体想像がつく。

うしろに回ろうとするやつは二流、もし、和泉、おまえが一流ならば、必ず、私の上方を取ろうとするはず。

身体を大きく揺らし、そして、遠心力で半回転、くるつと、身体を垂直に立たせる。

「やっぱり、いたあ」

あいつ、私のいる枝に飛び乗ろうとしていた。

そのまま、和泉を空中でキャッチ！

ちやうど、サーカスの空中ブランコみたいな感じで。

「うっそっ!?!」

がっしりと彼の首に両腕で抱きつく。

「ハルう……、助けてえ……、薦がからまつてとれないのお」

と、思いつきり顔を近づけて、おでことおでこをくつつけて言つてやる。

「な、ナビー!?!」

よし！

言つたあ！

「ナビー!?!」

と、和泉がバランスを崩して横向きになって落ちていく……。

「くっそー!」

私も落ちていく……。

でも、大丈夫、こいつ結構やるから、私は何も心配していない。

「こんのー!」

と、和泉が片手で私の背中を抱いて、大きく身体をひねって腕を伸ばして枝を掴む。

ほらね、やっぱり大丈夫だった。

二人で木の枝からぶらんぶらんとなる。

「ナビー、怪我はない？」

「大丈夫、と云うか、ハル、私の名前を呼んだ、アウトー！」

「まったく、キミは……、危ない事するな……、足の蔦は取れる？ 下に降りるよ」

「うん、今取るね……」

と、私は足にからまった蔦を取ろうとする……。

「あ、あれ、取れない……」

「えっ!？」

「なんてね、冗談、取れた、いいよ」

蔦をほどいて、ぽいっと、その辺に投げ捨てる。

「まったく……、降りるよ、掴まって」

「うん」

と、強く抱きつく。

浮遊感……。

そして、直後の優しい衝撃……。

「もう、大丈夫だよ、ナビー」

と、彼は私を地面に立たせてくれる。

「ありがとう、ハル……」

お礼を言いながら、脱げかけた靴をトントンとして履き直す。

「それじゃ、俺は失格だからラグナロク広場に戻るけど、キミはどうする？」

「うーん……、男子たちの居場所を突き止めたい……、ハル、どこにいるか知らない？」

「それは言えないよ、それを教えたらゾンビだからね」

と、彼がかすかに笑って言う。

「そっかあ……」

少し考え込んでいると、遠くから複数の足音が聞えてくる。

「うーん……?」

こっちに向かってくるな……。

あ、ランタンの明かりか、それで、こっちに……。

「ああ、来た、来た……、俺は合流するね、ナビー」

と、思わせぶりな表情をして、彼はランタンを持って足音のするほうに歩いていく。

男子たちの本隊か！

私は木の裏に隠れる。

「和泉、どうだった？」

先頭の背の高い男が和泉に話しかける。

「すまん、東園寺、やられた、失格だ、もう何の情報提供も出来ない」

「え？ あの和泉さんが？ 誰に、もしかして、ナビーに？」

と、大男の佐野が和泉に尋ねる。

「ああ、佐野、まあ、そんなところだ……」

「信じられない、あの和泉さんが……」

「和泉がやられるって、相当だぞ……」

「でも、ナビーって、どこか神がかっているからな」

「ああ、天使だからな」

「かわいいよな、ナビーって」

と、みんなが口々に言う。

「で、和泉、失格したおまえが、どうしてここにいるんだ？ まさか、

今やられたのか？」

東園寺がこつちを見ながら話す。

私は急いで頭を引っ込める。

「さあな、東園寺……」

和泉が笑いを含んだ声で答える。

「なるほどな……、まあ、いい、このまま進軍を続けるぞ、ラグナロクで最終決戦だ」

「おーけー、ボス！」

「俺たちの完全勝利だぜ！」

「ビンゴだぜ！」

「ひゃっほお！」

と、男子たちが盛り上がる。

「和泉、おまえも来い、ああ、おまえは失格だったな、ランタンはつけっぱなしでいいぞ」

「ああ、すまん、東園寺……」

と、男子たちがラグナロク広場に向かって行軍を始める。

私は和泉の持つランタンの明かりを頼りに彼らのあとを追う。

第48話 弱さを許さない

木から木へ、木から木へと男子たちを追走する。

「おまえら、慎重にな、ゆっくり進め」

と、東園寺が言ってくれていたもので、彼らを追うのにはそんなに苦労しなかった。

やがて、前方にうっすらとした柔らかな光が見えてくる。

星光だ。

ラグナロク広場が見えてきた。

私は男子たちに見つからないように、遠回りに広場を目指して駆け出す。

そして、大きくジャンプして柔らかな光に飛び込む。

草原に着地！

「どの辺だ？」

と、私は広場を見渡す。

「男子たちが来たよ！」

「やっぱりこっちから来た！」

「唯、防衛陣、絞って、こっちよ！」

「わかったわ、雫！」

と、私が位置を確認する前に女子たちの声が聞こえてくる。

女子たちが開けた草原の真ん中に陣取り、魔法の防衛陣を敷いていた。

ここは、ヒンデンブルク広場に向かう道のすぐ横、道を並走する感じで森の中を抜けてきたのか……。

「みんなあー！」

と、私はすぐに状況確認をして、女子のみんなのところに行っていく。

「ナビーが来たよー！」

「防衛陣開けて！」

「追い風弱めて！」

私は弱めてくれた防衛陣をくぐってみんなのところに行く。

「みんなあ、えつとね！」

人見が味方になってくれた事を伝えようとするけど、

「追い風強めて、唯もう一発！」
シュトラゼ

「うん、行くね！ シロス、権力によらず、暴力によらず、その身を押し、追い風！」
シュトラゼ

「追い風！」

「媒体照射足りてる!? 光輝の流星陣の張り具合は!?」
フォール・ザ・アルテミス

と、みんな大忙し……。

「ほう、女子チーム、かなり本格的じゃねえか……」

そうこうするうちに、東園寺を先頭とした男子チームが、追い風に
シュトラゼ
よる強風の中、平然とこちらに歩いてくるのが見えた。

「だ、大丈夫、この防衛陣はそう簡単には破れないから」

「そ、そうよ、私たちが苦心して築いた防衛陣なんだから！」

と、女子のみんなが後退りながらも健気に言う。

「佐野、やれ」

「うい」

東園寺の言葉に佐野が一步前に踏み出し、

「うおおおおお!!」

と、雄叫びを上げながら猛烈な勢いでこっちに走ってきた。

「き、来た！」

「だ、大丈夫だって！」

「追い風もう一発打つね！」
シュトラゼ

女子たちが身構える。

「うおおおおお!!」

佐野が二メートル近い巨体を揺らしながら突進してくる。

「ぐおおおおお!!」

そして、光輝の流星陣の壁に両腕を突っ込む。

「があああああ!!」

バリバリと放電し、周囲に火花を散らす。

「うがおおおお!!」

やがて、パリンツ、という音を立てて光輝の流星陣は砕け散る。

そして、追い風までもが逆流し、強い風が私たちに吹き付ける。

「くっ……」

と、私は両腕でクロスするように、強風から顔を守る。

「プシュー、プシュー、ぐふふ、きかないっすわあ、そんな小細工……」
佐野の両方の口の端から白い煙が出ている……。

背中や肩からも煙が上がっている……。

しかも、化け物みたいな顔で笑ってやがる……。

「きゃ、きゃああああ!?!」

「ただ、た、退散!!」

「に、逃げて、みんな、逃げてえ!!」

と、女子のみんなが恐慌状態になり蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

「な、ナビー、退避よ!!」

「待って、雫」

一言かけてから逃げようとする綾原の手を掴む。

「な、ナビー!?!」

「聞いて、雫、私が合図したら彰吾に全力で媒体照射して、力が尽きるまで何発でも、それを唯にも伝えておいて」

「人見に? 彼は運営側よ?」

「大丈夫、話をつけておいたから、彼は私たちの味方よ」

「な、なら、今やりましょう、今こそ彼の力が必要な時よ」

と、綾原は言うけど、私は首を左右に振る。

「今はまだ早い、今、彰吾の魔法を使っても同じよ、あいつがいる限り……」

私は佐野に向き直る。

まだ口とか背中から白い煙を出してやがる……。

「佐野は私がやるから、彰吾の力を借りるのはそのあとよ……」

そして、一歩、やつに向かつて足を踏み出す。

あいつ、前にも、露天風呂攻防戦の時にも人見の魔法をぶち破っているからね。

「わ、わかったわ、唯にも伝えておく、無理しないで、危なくなったらすぐに逃げるのよ」

「うん、大丈夫、無理はしないから」

少し笑顔をつくり、そして、

「佐野おとおお!!」

と、やつに向かつて猛ダツシユする。

もう、こうなったら、ルール無視でぶちのめして気絶させてやる!

「アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、パピロンレイ静寂の風盾」

魔法を一発入れてさらに加速!

うーん! えい!

と、さらに、魔力拳、ゴッドハンド!

これが私の全力だあ、佐野おとおお!!

「ナビー? なに?」

やつが私に気付く、でも、もう遅い!

両肩をわずかに弾ませ、足首の力で身体全体を浮かせる。

すると、佐野は上を向く、その瞬間にやつの懐に潜り込む。

このタイミング!

眠れ、佐野おとおお!!

渾身の力でやつの脇腹にゴッドハンドを叩き込む!

ガギンツ!

と、変な音がした……。

い、いたい……。

「なに? ナビー、なんかした?」

佐野に二の腕を掴まれた……。

うそでしょ、こいつ……、魔法で補強した手首がじんじん痛いんだ
けど……。

「佐野、連れて行け」

「うい」

と、東園寺が言うと、佐野は私の身体を持ち上げ肩に担ぐ。

「くっ、はなせえー!」

私は足をじたばたさせ、佐野の背中をグーでポカポカ叩く。

「大人しくしてよ、ナビー」

と、言いながらやつはどこかへと歩きだす。

「ど、どこに連れて行く気よ!?!」

私はじたばたと暴れる。

「そうだなあ、もう教えてもいいかなあ……、えーつとねえ……、割と普通なナビーフイユリナ記念タワーだよ、そのてっぺん、そこがね、指定場所、東園寺さんのね……」

なっ!?

と、じたばた暴れるのを止めて顔を上げる。

すると、佐野のすぐうしろを歩く東園寺の姿が目に入る。

赤い髪を逆立たせた精悍な顔立ちの屈強な男、東園寺公彦……、その彼が私と目が合うと、かすかに口の端を上げて笑う。

こ、こいつら!?!

私はなんとか、佐野から逃げようと抗うけど、やつはびくりともしない、とにかく、私の腰にまかれた腕がガツチリと固定されていて動かない。

すり抜けようにも、もう片方の手で肩を捕まれているのでどうしようもない。

「くっ……」

ゆっくりと、佐野は割りと普通なナビーフイユリナ記念タワーに向かって歩いていく。

しばらく、逃げ出そうと暴れるけど、体力の消耗が著しい……。
がつくり……。

「疲れたのかい、ナビーフ?」

私はなんて無力なんだろう……。

「な、ナビーフをどこに連れて行く気よ!」

「ナビーフを返せ!」

「佐野お、ナビーフを放せ!」

その時、女子のみんなが駆けつけてくれる。

「みんなあ……」

と、私は力なく、顔を上げる。

「よし! やるよ、みんな! シロス、権力によらず、暴力によらず、

その身を押し、追い風！^{シュトラウゼ}」

「ハノーバ、冷たき地に身を休め、魔法障壁！^{イージス}」

「アスシオン、煌く光、花より美しく、風を纏え、希釈の風剣！^{バビロンイシル}」

と、女子のみんなが呪文を唱える。

「おい、おい、佐野と公彦さんだけじゃないぜ」

「こつちもいるぜ……」

「最終決戦らしくなってきたじゃねえか」

と、男子たちも東園寺を中心に集まってくる。

「こつちもいくぜ！ ベルベストーム、風説、邪説の最終速度、断ち斬

れ、風爪！^{テンベスト}」

「アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、静寂の風盾！^{バビロンレイ}」

男子たちも次々と呪文を唱える。

「佐野、先に行け、俺はあいつらを始末してから行く」

「うい」

と、佐野は東園寺の指示でまた割りと普通なナビーフイユリナ記念タワーに向かって歩きだす。

「シフトしつかり！ 唯を中心に防衛陣を敷いて！」

「サイドは私がやる！」

「和泉がいねえ！ ファイブエイスは誰がやる!？」

「秋葉は?! って、あいつもいねえ!!」

「いい、俺がやる、媒体照射よこせ!!^{レティクル}」

男女入り混じりの大声が広場中に響き渡る。

みんなが私のために戦ってくれている……。

「ナビー、暴れないでくれよ、落ちたら大変だからさ……」

やがて、私たちはタワーに到着し階段を登り始める。

一段、一段、階段を登っていく……。

みんなが戦っているのに、私は……。

「この野郎、佐野おお!!」

と、最後の力を振り絞る。

親指を人差し指と中指で握る、二本拳！

それを佐野のこめかみに突き刺す！

「うげえ!？」

と、佐野が悲鳴を上げると、私の身体を掴む力が僅かに緩まる。それを見計らって、佐野の腕をすり抜け、やつの肩を足場にして飛ぶ。

「ナビー!？」

佐野が振り返り、空中の私を両手で掴もうとする……。でもね……。

「ポストストール機動クルビット」

蝶のように、木の葉のようにひらりと佐野の腕をすり抜ける。

「このお!!」

そして、そのまま身体を反転させて、佐野の頭に回し蹴り!

「ぐおお!？」

さらに、タワーの外壁を蹴り、大きく飛び上がり、反対側の手すりの上に両腕を広げて、スタツと舞い降りる。

ふふっ……。

長い金髪が風に舞う……。

「決着をつけようか、なあ、猿人お……?？」

目を細めてやつを見やる。

「プシュー、プシュー、ナビー……、プシュー、プシュー……」

佐野は口から煙を噴きながら、こめかみを手で押さえながら私の顔を睨みつける。

第49話 風神の如く

風が吹く。

風が背中を押す。

枯れ葉が私を追い越す。

その瞬間飛ぶ。

そして、二歩目でタワーの壁を蹴り、高々と舞い上がる。

ふわりと髪と衣装が浮く……。

上昇から下降に転ずる瞬間、私の身体は仰向けとなり、両腕を広げて星空を見上げる。

こんな時でも星が綺麗だなんて思っちゃう……。

でもね、ここからだよね……。

「ポストストール機動コブラ」

私のすぐ隣を佐野が通り過ぎて行く。

やつが飛び上がって、私を捕まえようとしたのだ。

「ナビー!?!」

ふふっ、不思議な動きでしょ、佐野？ なぜか、あなたとは逆の動きをするでしょ？

「うがああああ!!」

再度、佐野は空中で姿勢を変えて、真横にいる私を両手で掴みにくる。

私は仰向けなんだよ……。

タワーの壁を軽く蹴る。

すると、私の身体は流れて、佐野の腕をすりにける。

やっと私の身体が交差する瞬間、私はもう片方の足の裏で佐野の後頭部を蹴る。

「うがおおおお!!」

と、佐野がタワーの壁に頭から突っ込んでいく。

私は姿勢を垂直に戻して、両腕を広げて、スタツ、と手すりに着地。

「な、ナビー……」

佐野は額を押さえながら私を探す。

「ふっ……」

手すりと壁、交互に飛びながら、やつとの間合いを詰める。

そして、佐野が私を視認する前に、その頭を蹴り飛ばす。

「うおおおお!!」

そのまま、壁を数歩歩いて、佐野の背後に回りこんで、オーバーヘッドキック、さらに、もう片方の足でやつの背中を蹴って、また手すりに着地。

「な、ナビー……、くっ、くそお……!!」

と、佐野が私に向かって猛突進してくる。

それを私はひよいっと壁側に飛んでそれを蹴り、反対側の手すりも蹴り、そして、もう一回壁に、そこで上に向かって走ると見せかけて、宙返りしながら、オーバーヘッドキック。

「あつがああああ!!」

私はまた手すりに着地。

「う、う、な、なんで、お、俺は強え……、和泉さんには敵わないけど、秋葉さんや人見さんより強え……、俺は東園寺さんと互角なんだぞお!!」

とか、言いながらまた猛突進してくる。

へえ、男子たちの間でそんな評価をし合ってたんだ……、初耳……。

私は佐野の突進に対して、まず手すりを飛び、次に軽く壁を蹴り、階段の真ん中でふわっと両腕を広げて舞い上がる。

「こい、猿人」

「うおおおお!!」

そして、突進してくる佐野の頭を両手で掴んで、そのまま跳び箱の要領で飛び越える。

「うおお、うおおお、うおお!」

すると、佐野が階段に頭から突っ込んでそれをぶち破る。

「うわ、うわあああ!! た、たっけ、助けてえ!! ナビ、ナビー!!」

佐野は階段の外に身体の上半身を出して、足をバタバタとさせてもがいている。

「くすっ、そこで遊んでろ、猿人……」

私は忙しいの……。

階段ではなく、手すりの上を走る。

佐野の横を通り過ぎて、上層へと登っていく。

この階段はらせん状になっている……。

つまり、一周ぐるつと、全方位を見渡せる。

「みつけたあ!!」

と、私は手すりから大ジャンプ!

両腕を大きく広げて空を舞う。

そして、身体を横向きにして、フライングボディープレス!!

「うお!!」

もちろん、東園寺目掛けて。

そして、彼の顔をお腹で抱くようにして、くるつと丸まって固定する。

「な、なんだ、なんだ!」

くくく……。

暴れる彼の耳元に顔を近づけて言っつてやる……。

「めええ……」

と、

うん?

もうそれでいいや。

「ねえ、公彦、私が誰だかわかる?」

「そ、その声、ナビーフイユリナか!」

東園寺が私の名前を呼ぶ。

「よし! 言ったあ! 大河、どう!」

と、私は運営の南条大河にジャツジを求める。

「東園寺公彦、アウトー! ターゲットの名前を呼んでしまいましたあ、失格です!」

その声が広場に響き渡る。

「やったあ!!」

「すごい! ナビー、東園寺くんを倒しちゃった!」

「私たちも頑張りましょう!」

「「おお!!」」

と、私も女子たちも大盛り上がり。

「よーしー!」

私は東園寺の頭を起点に回転して、そのまま彼に肩車をしてもらうような形で座る。

「行け、東園寺ロボ! 敵を蹴散らすのよ!」

と、彼の髪を掴み、もう片方の手で男子たちの群れを指し示す。

「な、なんで……?」

「なんでって、将棋と一緒よ! 取った駒は私の下僕なの! はやく、はやく!」

と、両手で彼の髪を掴んで、乗馬のように身体を前後に揺らして前に進むように催促する。

「お、おう……」

東園寺ロボが敵陣目掛けて走っていく。

「行け、行けえ!」

ちょうど、男子チームと女子チームが睨み合っている中間に突入していく。

「ふふふ……」

そして、男子たちに向き直る。

「東園寺……?」

「公彦さん、どうして……?」

男子たちがたじろぐ。

「ふふふ……」

切り札は東園寺ロボだけじゃないのよ……。

「彰吾、出番よ、やっちゃって!」

と、私が叫ぶと人見が小さくうなづく。

「雫、唯! 彰吾に媒体照射レティクルお願い、限界までやっちゃって!」

さらに、綾原、海老名両名にも指示を飛ばす。

「わかったわ、いくよ、唯、ソプラナ、柔和なる方よ、旅路の果てに舞い降りた大地の支配者よ、媒体照射レティクル!」

「うん、ソプラナ、柔和なる方よ、旅路の果てに舞い降りた大地の支配

者よ、レディックル媒体照射!」

二人がレディックル媒体照射を唱える。

すると、二人の身体から渦を巻くような煙が出てきて、それが人見に向かつての伸びていく……。

その煙も人見の身体を中心に渦を巻き、やがて、吸い込まれるように消えていく……。

「ライダード、比類なき天狼の尊名、パウセリアス、かひなく不可蝕の死影」

魔法の詠唱が始まる。

「アイロス、罪人の鎖を解き放ち、魂を食い尽くせ、グレイシス・バルド霊帝死影」
両手を合わせた瞬間、魔法は完成する……。

「う、うお!」

「な、なんだ……?」

「じ、地面があ!」

「ど、どうなってんだ、地面が泥に変わったぞ!」

男子たちが一斉に悲鳴を上げる。

「しず、沈む!」

「た、助けてくれえ!」

彼らが草原の上に倒れて、水に溺れるような仕草をしている……。

「うわ、あつぶ、あつぶ!」

「お、溺れる! 溺れるう!」

な、なんだろう、これ……?」

男子たちが草原に上でクロールとかしている……。

「ふっ、どうだ、幻術の味は……?」

と、人見が不敵に笑いながら、銀縁メガネを人差し指で直しながらこちらにやってくる。

「ひ、人見か、人見がやったのか!」

「幻術? う、うそだあ、やっぱり泥沼じゃねえか、ここはあ!」

「目が、目がまわりゆう!」

彼らは立とうとしてもすぐに倒れてしまう……。

「しかも、ただの幻術ではない、グレイシス・バルド霊帝死影だ、三半規管が死んだろ?」

人見が悪党面で男子たちを見下ろしながらせせら笑う。

「くつそお、人見の野郎、また裏切りやがった！」

「許せねえ、一度ならず二度までも！」

「つて、おまえは運営側だろ!？」

男子たちが草原を泳ぎながら口々に人見を非難する。

「裏切った？ 運営側？ 笑わせるな、俺は最初からおまえらの味方

でも、運営側でもない。俺は常に女性の味方だ」

「きやああ、かっこいい、人見くん！」

「さすが、人見くん、やっぱり頼りになる！」

「私は最初から信じてたけどね、人見の事は……」

「ふっ……」

と、人見が女子たちの歓声に頬を赤らめる。

「お、おかしいだろ、そもそも、ビンゴだぜ、つて、おまえのアイデア
だっただろ!？」

「あんなにノリノリで女子にやらせる内容考えたじゃねえか!？」

「また一緒に露天風呂覗きに行こうぜ、とか言ってたじゃねえかよ、あ
れはうそだったのかよ!？」

と、男子たちの非難が止まらない……。

「黙れ、ケダモノども！ おまえらと一緒にするな！ 女性の笑顔を
奪うやつは俺が許さん！ 全員でかかってこい！」

と、非難を遮るように、手をバツと横に払い言い放つ。

「きやああ、かっこいい、人見くん！」

「やっぱり人見くんは私たちの味方だったのね！」

「もう一生付いて行く！」

「ふっ……」

と、また人見は顔を赤らめてメガネを直す。

「よ、よし！ みんな、チャンスよ、今のうちにミッションを遂行して
！」

私は東園寺ロボの上からみんなに指示を飛ばす。

「「おう!」」

と、女子たちが男子たちに群がる。

「うわ、やめて！」

「た、助けてえ！」

男子たちが足を引きずられて指定場所に連れていかれる。

「ビンゴだぜー！」

「ビンゴだぜー！」

と、次々とミンシジョンをコンプリートしていく。

「うーん……」

得点はどうなっているんだろう……。

「東園寺ロボ、あっち行つて」

「お、おう……」

と、中央広場のほうに歩いていく。

そして、両手の指を使つて、割と普通なナビーフイユリナ記念会館の前にいる人たちを見て得点の計算をする……。

「み、みんな待つて！ ミッションコンプリートしないで、先に男子たちを失格にするのよ！」

と、大慌てで止める。

「あ、そうだね……」

「負けてるかも」

「うん、危ない、危ない……」

他の女子たちも記念会館の前を見ながらつぶやく。

「よし、じゃあ、こちよこちよ作戦よ！」

「「おうー！」」

女子たちが男子たちの脇の辺りをくすぐりだす。

「ひい、やめて、やめてー！」

「うひゃひゃひゃー！」

「ひい、うひ、うひー！」

と、男子たちが笑い転げる。

「ほら、やめて欲しいなら私の名前を呼んで」

「言わないと、もっとやっちゃうよお」

「わかった、わかった、徳永さん、わかったからやめてー！」

「雨宮さんもやめてー！」

「久保田洋平、石塚航、アウトー！ ターゲットの名前を呼んでしまいましたあ、失格です！」

と、次々と男子たちを失格にさせていく。

「ねえ、ナビীরターゲットって誰？ ミッション大丈夫？」
綾原が尋ねてくる。

「うん？ あ……」

くっ、名前を言いそうになった。

「ただだけど、ここにいない……」

そう、私のターゲットは秋葉蒼だ。

あいつは、たぶん、今もルビコン川にいるはず。

「よし！ 片付けてくるか！ 東園寺ロボ！ ルビコン川までダツシュよ！」

と、ルビコン川の方を指し示しながら叫ぶ。

「お、おう……」

東園寺ロボがのろのろと走りだすけど、その時、

「タイムアップまでまだお時間はございますが、男子チームの逆転が不可能となりましたので、ここで終了とさせていただきます！ 男子チーム23ポイント、女子チーム31ポイント、女子チームの勝利となります！ みなさんお疲れ様でした、ビンゴだぜ！」

と云う、司会の南条大河の声が響き渡った。

「「ビンゴだぜ！」」

「やったあ、私たちの大勝利だね！」

「嬉しい、楽しい！」

女子のみんなは飛び上がって大喜び！

「やった、やったあ！」

私も東園寺ロボの頭をペチペチと叩きながら歓声を上げる。

「くそっ、くそっ！」

「また負けた、これで二連敗だ……」

「俺たちは駄目なのか、男としてのプライドがずたずただ」

と、男子たちは悔しがる。

「次は頑張ってくださいね」

「今回はたまたまよ、次は勝てるわ」

「さあ、元氣を出して！」

戦いが終われば、敵も味方もない……、女子たちが男子たちに優しく手を差し伸べる。

「では、最後にみんなで乾杯をして頂けますようか、みなさんグラスをお持ちください！」

「「はあい！」」

「「おう！」」

と、みんながグラスを取る。

「ナビーフユリナ」

「ありがとう、東園寺ロボ」

彼からグラスを受け取る。

「乾杯！」

「「乾杯！」」

と、みんなで乾杯をする。

あ、秋葉だけいない……。

まあ、いいや……。

こうして、私の楽しいお誕生会は終りを告げたのであった。

第50話 青菜に藍いでる

私のお誕生会から一週間が過ぎたある日。

「ピッピ、ピッピ、ピッピ」

と、晴天のヒンデンブルク広場にそんな笛の音が響き渡る。

「ピッピ、ピッピ、ピッピ」

その笛の音は、私がかくわえた小さな黄色のホイッスルから出ている。

「ピッピ、ピッピ、プピッピ、プピッピ、ピー、よーし、全体止まれ！」

「ぶるるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

「くるうー！」

「ぷーん！」

と、私のうしろをついてきていたみんなが返事をしてくれる。

ちなみに、最後尾は現地の少女エシユリン。

そうそう、ピップたちひよこは連れてきていない、もう少し大きくなってから、彼らは今頃ラグナロク広場の牧柵の中を元気に走り回っているはずだ。

「あつ」

と、振り返った拍子に麦わら帽子が風に飛ばされそうになり、私へとつさにそれを手で押さえる。

「危ない、危ない……」

これは、大事な麦わら帽子、福井たち生活班の女子が夜なべして作ってくれたもの。

まっ、厳密には麦わらじゃないけどね、それっぽいやつで編んだもの。

それに、ピンクのリボンをつけて、かわいらしくしてある。

ちよつと、麦わら帽子をあげて空を見上げる。

雲ひとつない晴天、真夏が近づいているせいか、日に日に陽射しが強くなっていく。

「ぶるるうー！」

と、ウエルロットが私のお腹にコツンと頭突きをする。

「めえー！」

「めええー！」

さらに、シウスとチャフが私のワンピースの裾を噛んでひっぱる。

「くるうー！」

それに、子犬のクルビットまで加わって、私の服を脱がそうかという勢いでひっぱる。

「きや、やめ、やめー！」

と、私は服を脱がされないように、肩紐とワンピースの裾を手で押さえる。

「めえー！」

「めええー！」

「くるうー！」

こいつら、本気で私の服を脱がす気だ！

「ピーー！」

と、大きくホイッスルを鳴らす。

「駄目！・今は訓練中だよ、諸君！」

さらに、そうお説教をしてやる。

「めえ………」

「めええ………」

「くるう………」

うん、反省したみたい。

「よーし！・もう一周行くよー！・ピーー！」

と、笛を鳴らして、くるりと反転して前を向く。

「ピッピ、ピッピ、ピッピ、ピッピ」

そして、歩きだす。

牧柵の中、その外周をみんなで行進する。

「ピッピ、ピッピ、ピッピ」

行進は軍隊の基本だね、彼らの訓練は軍隊式でやらせてもらうよ。

「ピッピ、ピッピ、ピッピ……」

なんか、おかしい……。

「ピッピ……、ピッピ……、ピッピ……、あ、うん……」

お尻がくすぐりたい！

と、思ったら、みんなが私のスカートの中に頭を突っ込んで、なんかやってるよ！

「ふざけやがって！ 行進も出来ないのか、この弱兵どもめ！ 罰としてランニングだ！ ついて来い！」

と、私はみんなを振り切って走りだす。

「ぶるるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

「くるうー！」

「プーン！」

みんなも元気よくついてくる。

「負けないからねえ！」

と、さらに加速！

「ぶるるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

「くるうー！」

「プーン！」

みんなも負けじとついてくる。

「はあ、はあ、はあ……」

でも、10周くらいでギブアップ……。

「はあ、ひい、はあ、ひい……」

と、地面に手をつけて、そのままへたり込む。

「ぶるるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

「くるうー！」

ああ！

人が疲れて果てている時に、みんなが襲いかかってきたよ！

「はあ、ひい、はあ、ひい……、許してえ……」

でも、どうしようもない……。

目を固く閉じて、草の上に大の字に寝転がる。

「ぶるるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

「くるうー！」

色々舐めてくるけど、もう成すがまま。

「ナビー、お飲み物取ってくる、ぷーん！」

「うん、お願い、エシユリン……」

と、そのまま力なく手を振る。

「ぶるるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

「くるうー！」

うう……、くすぐりたい、くすぐりたい……。

と、目を開けてみると……。

「ああ!? いったい、どこを舐めてるんだあ!？」

ワンピースが色々めくれて、酷い事になってる！

私は急いで色々隠す。

実は、牧柵の外に結構人いるんだよね……。

「このおー！」

もう怒ったぞ！

反撃だ！

まず、ウエルロットの首を両腕で抱きしめて、その頬のあたりを額でぐりぐりしてやる。

「ぶるるう……」

次にシウスとチャフを太ももではさんで……。

こ、これは駄目だ、また下着が見えちゃう……。

「くるうー！」

そうこうするうちにクルビットが私の胸の上に乗ってふわふわの尻尾をぶるんぶるん振りながらお鼻のあたりを舐めてくる。

「うー、うー……」

私はくすぐったくて、顔をそむける。

「ああ……」

さらに、シウスとチャフがスカートの中に頭を突っ込んで、そこからお腹のほうまで登ってくる。

「もう、駄目え……、好きにして……」

と、諦めて、また大の字になって寝転がる。

「めえー！」

「めええー！」

そして、クルビットを押しつけて、ワンピースの襟元からシウスとチャフがちよこんと顔を出す。

「こらあ……」

と、両手でシウスとチャフの頭をなでてやる。

でも、幸せだなあ……。

大の字に寝転がりながら、真っ青な空を見上げる……。

そして、顔のすぐに横にあった白い小さなお花を一輪摘んで唇の上に乗せる。

「はむ、はむ……」

それを唇でもてあそぶ……。

ああ……、幸せ……。

「ナビー、持ってきた、ぷーん！」

と、エシユリンがお水の入ったペットボトルを二つ持って帰ってきた。

「あ、ありがとう、エシユリン」

私は身体を起こす。

すると、シウスとチャフがまたワンピースの中に入ってすると下に滑り落ちていく。

「ひゃー……、こらあ……」

スカート裾をつまんで、ひらひらとさせて彼らを追い出す。

「はい、ぷーん！」

「ありがとう、エシユリン」

あらためて、彼女からペットボトルを受け取る。

そして、キャップを外して、一口、口に含む。

一気にゴクゴク飲みたくなるけど、そうすると具合悪くなるんだよね、この身体は……。

なので、口に含んで、少しずつ飲み込む……。

「ぶるるう……」

「めえ……」

「めええ……」

草をはみだした彼らを見ながら、ゆっくりお水を飲む。

静かになって、さらさらとした風に揺らされる葉音が聞えるようになる……。

「くるうー！　くるうー！」

あ、またうるさくなつた！

クルビットが膝の上に乗って、遊んで欲しそうに私の顔を見上げる。

「クルビットはお腹いっぱいなんだよね」

そう、お昼に猪肉の燻製とミルクをいっぱい食べたからねえ。

と、優しく顎のあたりをくすぐるようになでてやる。

「よしー！」

と、私はペットボトルのキャップを閉め、膝の上のクルビットをどかして立ち上がる。

「くるうー！　くるうー！　くるうー！」

私が何をやるのか察したのか、クルビットも飛び跳ねながら、私の周囲を走り回る。

「よしー！　じゃあ、エシユリン、シススたちが、きゅー、ぷーん、したら、わっば、ぷーん、お願いね！」

落ちていた麦わら帽子をかぶりながら言う。

「わっば、ぷーん」

と、彼女は笑顔で返してくれる。

「いこ、クルビット!」

「くるう!」

私は笑顔で手を振りながら駆け出していく。

そして、子犬と一緒に牧柵から出て、その脇に置いておいたリュックサックから荷物を取り出す。

「よーし……」

私が手にしたのは黄色のフリスビー。

「くるう!　くるう!」

フリスビーを見たクルビットは飛び跳ねて大喜び。

「ふふふ、牧洋犬の訓練と言ったらこれだよね……」

私はフリスビーを構えて投げる仕草を繰り返し、そして、

「そおれ!　取ってこおい!」

と、空高く黄色のフリスビーを放り投げる。

「くるう!　くるう!」

クルビットが大喜びでそれを追い駆ける。

「よーし!　負けないぞお!」

私もそれを追い駆ける。

「あははは」

と、太陽を見上げながら、麦わら帽子が風に飛ばされないように手で押さえながら、空高く舞った黄色のフリスビーを追い駆ける。

第51話 落とし穴

「くるうー！」

と、青い毛の子犬、クルビットがジャンプして黄色のフリスビーを空中でキャッチする。

「くう、また負けた！」

小さいのに、足も速いし、1メートル以上はゆうにジャンプしやがる……。

「くるうー！ くるうー！」

と、ご機嫌に尻尾を振りながら私のもとにフリスビーを持ってくる。

「くるうー！ くるうー！ くるうー！」

そして、早く投げてと催促してくる。

「この子は将来きつと大物になるわ……」

額の汗を手の甲で拭いながらつぶやく。

「くるうー！ くるうー！」

と、クルビットが早く投げてと急かしてくる。

「わかった、わかった」

私は大きく振りかぶって、思いつきりフリスビーを空高く放り投げる。

「くるうー！」

それをクルビットが大喜びで追い駆ける。

「ふう……」

と、麦わら帽子を手で押さえながら黄色のフリスビーを目で追う。

私はもう追い駆けない、疲れた。

クルビットがフリスビーを追い駆けているあいだにヒンデンブルク広場を見渡す。

真ん中に骨組みだけの飛行船。

その南側に牧柵。

あるのはそれだけ、あとは草花が生い茂る草原が広がるのみ。

あと、この広場に来ているのは牧柵のエシユリンと参謀班の5人の

み。

狩猟班の夏目、笹雪、雨宮も一緒に来たけど、今はいない、周辺に食べられる野菜が自生していないか捜索に出かけている。

で、話を戻して、参謀班が何をしているかと言うと……。

私は広場のすみっこに座っている彼らのもとに歩いていく。

彼らは一様にスケッチブックを持ち、熱心になにやら書き込んでいる……。

「ねえ、どんな感じ、みんなあ？」

と、私は声をかけながら、みんなのスケッチブックを覗き込む。

「絵心ないから難しいな……」

「私はまあまあよ」

「細かいディテールがな……」

みんなが口々に返事をしてくれる。

「どれどれ……」

見ると、人見のスケッチブックには、骨組みだけの飛行船が精巧に描かれていた。

「おお……、上手……」

蜘蛛の巣のように張った骨組みが見事……。

「雫はあ？」

今度は隣の綾原のスケッチブックを覗き込む。

こっちは、麦わら帽子の女の子が描かれている。

両手で麦わら帽子を押さえている笑顔の女の子、うん、どう見ても私だ。

「おお……、かわいく描けてる……」

率直な感想を述べる。

「うん、自分でも上手く描けたと思う」

私の感想に彼女は少し表情を和らげる。

「くるうー」

あ、クルビットがフリスビーをくわえて戻ってきた。

「お！ さすがクルビット、偉い！」

と、しゃがんで顔をくしゃくしゃと両手でなでまわしてやる。

「くるう！　くるう！」

また、フリスビーを投げると飛び跳ねて催促してくる。

「わかった、わかった、じゃあ、行くよ！」

と、また大きく振りかぶって、思いつきりフリスビーを空高く放り投げる。

「くるう！　くるう！」

それ目掛けて、大喜びでクルビットが走っていく。

よし、それじゃあ、絵画鑑賞の続きを。

南条が描いているのは牧柵とウエルロットたち……。

海老名は草花……。

青山は……、山々……？　そんなものを描いている……。

「みんな、上手だねえ……」

と、感心してつぶやく。

「まあね、ずっと、描いているからね」

「銅版にしたら修正がきかないから」

「そうそう、失敗作が永久に残ったら恥ずかしいからね、満足がいくまで、何度でも書き直すよ」

と、口々に言う。

そう、この絵は銅版に彫って版画の原版にする。

で、その版画は何かと云うと紙幣だ。

今はその紙幣を作るための原画作りをしているってわけ。

紙幣を発行して何に使うかと云うと、もちろん、現地の人たちとの交易に使う。

人見のせいで、現地の人たちが魔法のネックレスでしか取引をしてくれなくなったから、苦肉の策として紙幣を発行する事になった。

魔法のネックレスやブレスレットはこの新しく作る紙幣でしか売らないようにして、紙幣が欲しければ、この紙幣で物を買わせろ、って云うやり方。

つまり、紙幣の価値を担保するのが魔法のネックレスやブレスレット、魔法本位制を取ると云うこと。

レートはめんどくさいから、日本円と同じレート。

ミルク一杯が100ラグナ、肉1キロが1000ラグナ、と云った感じで、こつちから売る魔法のネックレスは大人気だから、10万ラグナくらいぼったくる予定。

ちなみに、通貨名のラグナは、もちろんラグナロク広場から取った。

「あ、ちょうどいい、ナビー、ちよつとそこに立って横向いて」

「う、うん……」

と、言われた通りに横を向く。

「横顔を描かせてもらうわね……」

どうやら、私をモデルにするらしい。

「か、かわいく描いてね……」

「うん、大丈夫、まかせて」

みんなが向きを変えて、私を見ながら絵を描きだす。

それで、話を戻して、狩猟班の女子が放牧中にも関わらず、その時間も惜しんで自生している野菜を探しに行ったのかの問題に立ち返る。

それは、狩猟班の男子3人が忙しくなったから。

紙幣を発行して、本格的に交易を始めると、大勢の現地の人たちがやってくる事になる。

でも、ラグナロク広場に大勢の現地の人たちを招き入れるのも心配……。

なので、広場の外に大きな市場、交易所の設置が必要になってくる。

そう、和泉たち狩猟班の男子3人は、その市場、交易所の建設に借りだされているのだ。

場所はと云うと、ルビコン川の向こう、そこに作ることにした。

まずは、ルビコン川に石橋を架けるところからはじめる。

馬車も通るかもしれないから、木ではなく石橋にした。

全長は大体50メートルくらいになる予定。

ちなみに、橋の名前は、ブリッジ・オブ・エンパイア、うん、私が考えた。

だって、放っておくと割と普通なナビーファイユリナ記念ブリッジになりそうだったんだもん。

なので、結構な大事業になりそうなので、和泉たちも借りだされたってわけ。

それで、ブリッジ・オブ・エンパイアが完成したら、次に市場、交易所の建設に取り掛かる。

そんな理由で私たち狩猟班は大忙し、このあと草刈して、干草も作らないといけないし……、でも、それも、石橋と市場が完成するまで、それが、完成すれば狩猟班の仕事の大半はなくなる。

だって、食料は買えばいいじゃん、って事になるからね。

「ねえ、まあだあ?」

じっと立っているのも飽きてきた……。

「もう少し、もう少しだけ待ってくれ」

「私はいいよ、もうラフは出来た」

「俺も大丈夫、こんなもんだろ」

と、参謀班の面々がスケッチブックと私を交互に見ながら言う。

「大河も早くして、もう10分くらい経つよ、クルビットも……」

待っている、はず……。

と、私は周囲を見渡す。

「クルビット……?」

さらさらと風にそよぐ草花があるだけ……。

「クルビット?」

いない……。

「クルビット、どこ?」

私は目を凝らして、ヒンデンブルク広場のあちこちを探す。

「どうしたの、ナビー?」

「クルビットがいなくなった……」

「え?」

みんながスケッチブックを置いて立ち上がる。

「どこかで遊んでいるんじゃないのか?」

「おーい! クルビットー!」

みんなもクルビットを探してくれる。

でも、いない……。

「俺、こっち探してみるね」

「私はこっち見るね」

「じゃあ、俺はあっち」

と、広場に散っていく。

「クルビット!」

私は大声で名前を呼びながら広場を探し回る。

「クルビット、どこお!」

おかしい、いつもなら、呼んだらすぐに駆け寄ってくるのに……。

「クルビットー!」

まさか、森の中に入って、迷子にでもなっちゃったの……?

顔が青ざめていくのがわかる。

「クルビット! お願いだから、返事をして!」

「くるう……」

声が出た!

「どこ、クルビット!」

私は声が出たほうに全速力で走っていく。

「くるう……」

小さなかぼそい声……。

「くるう……」

私を呼ぶ声、怖がっている声……。

「クルビット!」

ここだ、ここから声がする!

そこは、骨組みだけになった飛行船の中、その草むらからクル

ビットの声がする。

「クルビット!」

私は草を掻き分けてクルビットを探す……、でも……。

「穴!」

ぽっかりと地面に穴が開いていた……。

「くるう……」

その穴の奥からクルビットの声がする。

ええ……?

直径30センチくらいの穴……。

「クルビット！」

「くるう……」

「やっぱり、ここに落ちたんだ！」

「ナビー？」

「クルビットはいたの？」

「みんなが駆け寄ってくる。」

「うん！　ここ、ここ！」

穴を指差して助けを求め。

「落とし穴？」

「なんで、こんなところに……」

「あ、ここって、ナビーのドラゴン・プレッシャーが刺さっていた場所じゃないのか!？」

「そ、そうだ、この場所だ！」

私は周囲を見渡して位置を確認する。

「しくじった、ちゃんと調べて埋めなおしておけばよかった……」

「すまん、ナビー」

と、人見たちが謝る。

「どうする、人見、相当深いぞ？」

と、穴に腕を突っ込んでいた青山がその腕を引き抜きながら人見に尋ねる。

「穴が小さすぎて入れん、掘るぞ」

「おーけー、人見」

「私、みんなを呼んでくるね！」

と、海老名がラグナラク広場に向かって走っていく。

「くるう……」

クルビットが私を呼んでいる……。

「ナビー、ちよつと離れて、今穴を掘るから」

と、綾原が私の肩に手を置く。

「待ってられない……」

「うん？」

穴は直径30センチ程度、みんなは入れなくても、私なら行ける……。
綾原の手に私の手を重ね、それから彼女の手を握って肩からどかせ

「行ってくるね……」

「え、ナビー!？」

そして、足から穴の中に飛び降りる。

第52話 一輪

両腕を上げて勢いよく滑り落ちる。

穴は垂直ではなく、わずかに傾斜がついている。

私は片膝を立てて、靴のかかとで速度を調整しながら落ちていく。もう片方の足はピンと伸ばし、障害物の排除に努める。

そして、ほどなくして垂直からほぼ水平に変わり、落下の速度は落ちていく……。

やがて、何事もなく、私の身体は止まる……。

そこは、暗闇、ではない……。

私は立ち上がり、お尻についた埃を手で払いながら辺りを警戒する。

「クルビット……?」

小さく声を出してみる。

クルビットからの返答はない。

「予想通り、ここはただの穴ではなかったね……」

目が慣れて、周囲の状況がわかるようになってきた。

ここは様々なものが散乱している通路のような場所。

「ここは飛行船のデッキ……」

操縦室や客室がある場所。

地上にあるのはエンベロープ、気球部分だけ、デッキ部分は地下に埋もれていたのだ。

「うーん……」

光が届かない地下にも関わらず、通路はほんのり明るい。

床、壁、天井すべてに蛍光塗料でも塗ってあるかのように、うっすらと光っているのだ。

「うーん……」

鞆、書類、蝋燭台、割れた食器類……。

それらを慎重に避けながら先に進む。

壁に指をあて、少しなぞって、その指についた埃を見る。

「うーん……」

デッキ自体はしっかりしている……。

とても、100年前の建造物とは思えない。

「これは、まずい……」

思わず、そうつぶやいてしまう。

上のエンベロープみたいに完全に朽ち果てているのならば問題はないが、この地下のデッキは保存状態が良すぎる……。

そもそも、この飛行船は、私たちと同じく、別の世界からここにやってきた来訪者と云う可能性が極めて高い。

現地の人たちとの文明水準や使用する文字の違い、何より魔法の有無で簡単に推測できてしまう。

つまりは、何らかのアクションがあつて、こつちの世界に来てしまったと……。

そこから、推測すると、私たちの旅客機と何らかの共通点が必要であるはず……。

その共通点を突き止めれば、私たちが元の世界に戻る方法も自ずと見えてくる……。

そして、このデッキの保存状態の良さ……、ここで、どんなアクションがあつたかを突き止めるのは容易なこと……。

「旅客機と飛行船、そして、墜落……、と云う共通点はあるけど、おそらく、それではない……」

壁にかけられた肖像画や風景画を観察しながら進む。

「共通点か……、おおよそ、想像がつく……」

みんなが元の世界に帰りたいたいと思う事は当然な事で、すぐに、ここを調べ始めるだろう……。

で、帰る方法がわかりました、と……。

その時、私はどうする？

一緒に日本に帰る？

私はハイジャック犯の武地京哉なんだよ？ 帰れるわけないじゃん、帰ったら極刑は免れないよ。

「ふっ……」

自嘲してしまふ。

「そうすると、みんなとは別々の道になるなあ……」

その前に極刑なんかより、シウスタちを残して帰れるわけないよ。そうだ、そうだ。

じゃあ、エシユリンの村に身を寄せてひっそり暮らすか……。

まっ、そうは言っても、みんなは納得してくれないだろうね。

力づくでも連れ戻そうとするよ。

その時、私は彼らと戦う事になる……。

「願わくば、それが遥か遠い未来の出来事でありますように……」

ふっ……。

くだらない……。

「帰りたいなら、帰ればいいよ、とにかく私は帰れない」

ここを破壊して証拠を全部なくしてしまってもいいけど、それはしない。

帰りたいなら自由にして、私はなんにも邪魔はしないから。

でも、手伝いはしない。

自力で頑張つて。

まっ、そう簡単には帰れないと思うけどね。

「くるう……」

小さな鳴き声が出た……。

「クルビットー！」

そんな、くだらない未来の事を考えていてもしょうがない！

「クルビット、どっこお!?」

まずは、クルビットの救出が先よ！

「くるう……」

私は声のするほうに走っていく。

「くるう……、くるう……」

ここか……。

崩れた瓦礫の向こう。

「クルビット、そこにいるの?」

私は通れそうな箇所を探して瓦礫の周辺を右往左往する。

「くるう……」

「もう大丈夫だよ、クルビット、怖くないから出ておいで」

と、通れそうな隙間を床付近に見つけて、しゃがんでその奥を覗き込む。

「くるう……」

「こつちにおいでえ」

と、精一杯隙間の中に手を伸ばす。

「クルビット……」

「くるう……」

「こない……」

もしかして、怪我でもしちゃった……？

「くっ……」

私は瓦礫の鉄骨などを掴んでその強度を確かめる。

崩れる可能性はあるけど……。

「行くしかない」

と、私は隙間に身体をねじ込んで、ほふく前進で前に進む。

お願いだから、崩れないでね……。

なるべく、鉄骨などの瓦礫に身体が触れないように慎重に前に進む。

「クルビット……」

そして、10メートルほど進むと、やっと出口に差し掛かる……。

「草……？」

背の低い、か細い草々が顔や腕に触れる。

私は急いで立ち上がって周囲を警戒する。

「()は……？」

そこはドーム状になっている広場、ダンスホールとでも呼べばいいのか、精巧な木材の壁ときらびやかステンドグラスの丸い天井、直径30メートルほどの円形のホールになっていた。

床はびっしりと草で覆われている……。

そして、天井に穴があるのだろうか、そこから一本の光の筋が降り注いでいる……。

その、光の下には……。

「お花……」

私が大好きな、あの小さな白い鈴状のお花が咲いていた。

「なに、(´▽｀)……」

私はしゃがんでそのお花を見る……。

「うーん……」

と、鈴を指で弾くように、その小さなお花を揺らしてみる。

リーン。

と、音はしないけど、綺麗な鈴の音が鳴った気がした……。

カタン、コトン。

その時、ホールの片隅からそんな音がした。

私は視線をそちらに送る。

薄暗闇の中、誰かが屈んで何かをしていた。

カタン、コトン。

幾重にも入り組んだ鉄骨の山の中に腕を入れようとしている……。

カタン、コトン。

その人は……。

人ではない……。

薄いブラウンのフルプレートアーマーを着込んだような出で立ちだが、明らかに各部のバランスがおかしい……。

あんなに細いウエストの人なんていない、ウエストが小さな銀色のボール状になっている。

手足も関節がない、いや、あれは多関節だ、どこからでも曲がりそう……。

「くるう……」

入り組んだ鉄骨の山の中に小さな子犬の姿が見える。

「くるう……」

カタン、コトン。

子犬が別の場所に逃げるたびに、その人のような物が追い駆け、捕まえようとする。

「何やってんだ、てめえ……」

私は頭にきて、そちらのほうに歩いていく。

すると、その人のような物ははじめて私に気付いたのか、動きを止め、顔だけをこちらに向ける。

バケツをかぶったようなフルフェイスのヘルム……、目はカメラのレンズのような赤く丸いのが二つ……。

顔にあるのはそれだけ……。

ギギ、ガガ……。

不快な、さび付いた鉄同士がこすれる音を響かせて、その人のような物が立ち上がる。

そして、そいつが私に向き直る。

身長は2メートルほど……。

薄いブラウンのフルプレートアーマーに覆われたその肢体は細くしなやか……。

「なんだろうなあ……、これ？」

ギギ……。

そいつが一步、私のほうに足を踏み出す。

「くるう！　くるう！」

と、それを見た子犬、クルビットが足元の黄色のフリスビーをくわえ、鉄骨の山の中から頭を出して、そこから抜け出してこちらに走ってこようとする。

「待って、クルビット！」

私は手を出して、それを制止させる。

「クルビットはここにいて、最初にこいつをやっつけるから」

「くるう……」

と、言葉を理解したのか、クルビットはまた鉄骨の山の中に頭を引っ込めて、足元にフリスビーを置く。

ギギ、ガガ……。

不快な音を轟かせながらにゆっくりと私のほうに歩いてくる……。

「あんだ、人間じゃないよね？　もしかして、ロボ？」

ギギギ、ガガガ……。

返事はない、ただ、ゆっくりとこちらに歩いてくるだけ……。

「ギーギー、ガーガーうるさいのよ、油くらいさしてあげ、バカ」

ギギギ、ガガガ……。

まっ、大方、ヒンデンブルクの魔法ロボットかなんかなんでしょ？

ドラゴン・プレッシャーの性能を見ると、それくらいやりそうだよ、
ここの連中は……。

「アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、パビロンレイ静寂の風盾」

魔法で各関節を保護する。

「ゴッドハンド……」

そして、拳の強化、さらに足の膝から下にもそれで覆わせる……。

「じゃ、やろうか、ロボ？」

私は姿勢を低くして、最高速でやつとの間合いを詰める。

第53話 一筋の光

急接近、互いの距離は1メートル以内。

風の動きで死角から何かが迫ってくる事がわかる……。

どうせ、横に払った腕だろう？

私はその腕を見もしないで、やつの手の甲に肘鉄をくらわす。

ギギギ、ガガガ……、キーン。

と、やつのレンズ状の目が私を捉える前に、最高速で崩れ落ちる。

そして、そのまま一回転して、やつの足をかかと側から払う。

まぬけなことに、人間の足と同じ形状をしてやがる。

そんな足は簡単にうしろから払う事が出来るんだよ。

ギギギ、ガガガッ。

と、やつが仰向けに倒れていく。

でも、それで終りではない。

私はすぐさま立ち上がり、倒れてくるやつの後頭部を渾身の力で蹴り上げる。

「ピポロポッポ」

お？ なんか、しゃべったぞ？

「ピポロポッポ」

倒れながらもやつは顔をこちらに向け、そして、腕を伸ばして私を捕まえようとする。

あまい。

私の足はまだ振り上げられたままなんだよ……。

足を振り下ろす。

私のかかとがやつの胸あたりを強打する。

やつの倒れる速度は加速し、一気に地面に叩きつけられる。

埃が放射状に舞う、その瞬間に、私はステップを踏んで三步ほど後退してそれをやり過ぐす。

埃と枯れ草が宙を舞う。

「うーん……」

弱い、なんだ、これ？

てつきり、もの凄い速度とパワーで苦戦するものかと思っていたのに。

あと、あの赤い目からレーザー光線を出したり、腕がガトリングになっていたり、背中からミサイルを発射したりしないの？ ロボットなのに来ないの？

これじゃ、東園寺ロボのほうが強いよ。

「ピポロポッポ」

ギギギ、ガガガ……。

やつがゆつくりと立ち上がり、頭をくるくると回転させ、私を探す。そして、私を見つけると、のろのろ、のろのろとこっちに歩いてくる……。

「うーん……」

向かってくるロボの顔を見つめる……。

バケツのような頭……、赤いレンズのような丸い目……、あとはリベットが打ち付けられているだけ……。

「うーん……」

戦う気がないように見えるけど……。

でも、万が一私を油断させる作戦だったら困るから、全力で破壊しに行くけどね。

と、姿勢を低くして、やつの懐に飛び込むタイミングを計る。

すると、ロボは私の3メートル先くらいで立ち止まる。

そして、その長い手を伸ばし私の前に差し出す……。

「うん……っ？」

ろ、ロケツトパンチ……？

腕は長く、ロボの手が私の目の前までくる……。

「うん？」

その手、指先の上にはお花が置いてある……。

あの小さな白い鈴状のお花が一輪……。

「わ、私に……っ？」

と、私は警戒を解き、そのお花を覗き込む。

「ピポロポッポ」

うん、どうやら、私にプレゼントって言っているみたい。

「あ、ありがと……」

と、手を伸ばして、そのお花を取ろうとする……。

「ピポロポツポ」

けど、ロボの手が私の手をかわす……。

「む……」

私はまた横に移動した手からお花を取ろうとする。

「ピポロポツポ」

また横にかわしやがった！

「な、なに、私にじゃないの?」

「ピポロポツポ」

駄目だ、ロボ語がわからん……。

「ピポロポツポ」

そして、またお花を差し出す。

「意味がわからん……」

諦めて放っておくと、ロボはさらに手を伸ばし、そのまま、私の胸付近にまでお花を近づける。

「うーん……?」

「ピポロポツポ、ピポロポツポ」

と、ロボが首を伸ばしたり縮めたりくるくる回転させたりしている……。

差し出された手は、ぴったり私の胸に触れるか触れないかの位置で固定されている……。

「ピポロポツポ、ピポロポツポ」

「うーん……」

私の胸か……。

そつと、胸を触ってみる……。

なで、なで……。

さらに襟元から手をいれる……。

さわ、さわ、ぎゅっ、ぎゅうう。

「ひっー」

強く握っちゃった！

と、思ったら、お花の位置が私のネックレスのペンダント部分と一致するね……。

私はワンピースの中からペンダントを取り出す。

「これ？」

そして、手の平に乗せてロボに見せる。

「ピポロポッポ、ピポロポッポ！」

おお、ロボが大興奮、さっきより高速で頭をまわしているぞ！

「ピポロポッポ……」

ひとしきり頭を回転させたあと、ロボは私の手の平の上、ペンダントの赤い宝石の上に白い小さなお花を乗せる。

「ペンダントにか……」

いや、このペンダントの本当の持ち主にかもしれないね……。

しみじみと赤い宝石とその上の一輪の小さなお花を眺める。

「ピポロポッポ」

と、目的を達したのか、ロボはゆっくりとどこかに歩いていく。

「くるう！ くるう！」

安全を確信してか、クルビットが黄色のfrisbeeをくわえて勢いよくこっちに走ってくる。

「クルビット！」

「くるう！ くるう！」

と、私の胸に飛び込んでくるクルビットをペンダントを持つ手とは逆の手でキャッチして抱っこしてあげる。

「クルビット、怪我はなかった？」

「くるう！」

と、frisbeeを私の胸と自分のあいだに挟んで、そのまま私のお鼻のあたりペロペロとなめはじめ。

「くすぐったいから、クルビット、でも、怪我はないみたいだね！」

両手が塞がっているから、ほっぺでクルビットのペロペロ攻撃を回避する。

「くるう！」

でも、お構いなしにクルビットはほっぺもなめてくる。

「ピポロポツポ」

あ、ロボが戻ってきた。

手にはなにやらコップが握られている。

「今度はなに？」

と、私はロボに向き直る。

「ピポロポツポ」

でも、ロボは私の言葉を無視して、その横を素通りしていく。

「うん？」

ロボはホールの真ん中、あの一筋だけ光が差し込んでいる場所に向かう。

私もそのあとを追う。

「ピポロポツポ」

と、ロボはその場所ですやがむ……。

「なにやってるの？」

私はロボの背中ごしに背伸びして、光の差し込んでいる場所を覗き込む。

「ピポロポツポ」

ロボがああ小さな白いお花に水をあげていた……。

「ピポロポツポ」

コップ一杯のお水……。

「お花……」

私はまわりこんで、ロボの正面にしゃがみ、一緒に小さな白いお花を見つめる……。

「これ、育ててるんだ？」

返事はないだろうけど、そう尋ねてみる。

「ピポロポツポ」

あ、返事があった。

「そっか、育ててるのか……、大事にしてるんだね……」

ここにだけお花が咲いている……。

「ピポロポツポ」

たぶん、このロボ、ずっとここにいたんだよね……。
100年くらい？

ずっと……。

彼に人間らしい感情があるのかはわからないけど、もし、あるのなら、このお花が唯一の心の拠り所だったのかもしれないね……。

「ピポロポツポ」

水遣りが終り、ロボが立ち上がる。

「あなた、名前は？」

私も立ち上がり、彼の顔を見て名前を尋ねる。

「ピポロポツポ」

「ピポロポツポ？」

うーん……？

それが名前なわけない……。

と、少し視線を落として考えていると、ロボの胸に変な文字が刻まれているのが目に入った。

「うーん」

くねくねした文字……。

「うーん？」

目を細めて、近づいたり、遠ざかったりしながらその文字の解読を試みる。

「シャ……」

SYAに見える……。

「ペ……」

PEに見える……。

「ル……？」

LUに見える。

それで全部。

「シャペルか！」

「ピポロポツポ」

「あなたの名前はシャペルか！」

「ピポロポツポ」

おお、やっぱりそうだったみたい。

「シャペル」

「ピポロポツポ」

「うん、シャペルだね」

と、私は笑顔をつくる。

「ナビー！」

「どこだ、ナビー！」

「クルビット、出ておいでえ！」

その時、遠くからそんな声が聞こえてきた。

「あ、みんなが迎えにきた！」

私は大急ぎで、ホールの隅、ここに入ってきた小さな隙間に向かって走りだす。

「みんなあ！ こつちだよお！」

と、しゃがんで、その隙間の向こうに声をかける。

「ここか!？」

「ナビー、怪我してない!？」

「クルビットも一緒!？」

私の声にかけてくれたみんなが口々に言う。

「うん、大丈夫だよ！ クルビットも一緒！ 崩れそうで怖いから、この鉄骨の山をどうにかして！」

と、私も返事を返す。

「わかった、すぐに撤去する」

「危ないから、ナビーは下がっている」

「もう大丈夫だからね、すぐに助けにいくからね」

みんなが鉄骨の撤去に取り掛かる。

「うん、お願いね」

と、私は立ち上がり、数歩下がって、みんなが助けにきてくれるのをじっと待つ。

第54話 久遠晴天

あの騒動から三日が過ぎた。

「やっぱり、あの飛行船は破壊しておくべきだった……」

私はルビコン川で釣り糸を垂れながらつぶやく。

「うん？　なんか言ったか、ナビー？」

隣で同じように釣りをしていた秋葉蒼が私の独り言に反応する。

「ううん、なんでもない」

エサだけ取られた釣り針を引き上げなら答える。

そして、またエサを付けて川の中に放り込む。

「ははは、ナビーは魚にエサやりしてるんだよな、優しいな、ナビーは」と、魚を釣り上げながら秋葉が笑う。

うるさい、この釣り師め……。

苦々しく思いながら、彼の釣り上げた魚を横目で見る。

みろり色の綺麗なお魚……。

「くっそお……」

聞えないように小さくつぶやく。

そして、またキラキラ光る川面をじつと見つめる。

で、話を戻して、ヒンデンプルク広場の飛行船の話。

あれはすぐに破壊しておかなければならなかった。

そう、私は大事なことを失念していた。

みんなが日本に帰ったら、見つかり次第殺されるよ。

だって、私たちの旅客機は撃墜されたんだから。

自国の旅客機を撃墜したなんて国民に知れたら大変、必ず口封じをしてくるよ……。

私もそうだけど、みんなもまた日本には帰れないんだよね。

「困ったなあ……」

魚が飛び跳ねて小さな波紋を川面につくる。

私はそれに合わせて、釣竿をちよんちよんとして魚を誘う。

ヒンデンプルク広場の飛行船の調査は始まっている……。

ほどなくして、私たちがなぜ、この世界に来てしまったのか判明す

る事だろう……。

そして、そこから逆算して帰る方法の模索に入ると……。そこからはそう簡単には行かないだろうけど、みんなって結構優秀だからね、なんとかかしてしまいかもしれない……。

そこで、日本に帰りましょう！ つて、なったら、私はどうすればいいんだろう？

私は帰らないにしても、そのままみんなを見送る？

帰ったら殺されるの？

じゃあ、止める？

なんて？

旅客機は撃墜されたんだから、帰ったら今度こそ殺されるよ、つて？

そんな話し、誰も信じないよ……。

私はハイジャック犯の武地京哉でこうこう、こういう理由で殺されます、つて、説得しない限り無理だよ……。

「死んでもいや」

「うん？」

「なんでもない、独り言」

そう、私がハイジャック犯だなんて死んでも言えない。

そういう理由からヒンデンブルク広場のあの飛行船は破壊しておかなければならかったのだ……。

「うーん……」

でも、もう遅い……。

あとは、私がハイジャック犯だとばれない範囲で妨害するしかないけど……。

あのロボ、シャペルは何かに使えないかな？

シャペルは今でも地下デツキのあの場所にいる。

ちゃんと、シャペルも通れるように瓦礫を撤去したにもかかわらず、彼はそこから出ようとしない……。

たぶん、あの小さなお花が心配なんだと思う……。

まっ、シャペルが寂しくないように、たまには遊びに行つてやるよ。

「とおりやあー！」

と、タイミングを見計らって、思いつき釣り竿を引き上げる。すると、みろり色の魚が水面から飛び出し、日の光を受けキラキラと反射しながら空高く舞い上がる。

そして、放物線を描いて私の頭を飛び越え背後の地面の上に落ちる。

「やったあー！」

と、私は立ち上がり、大喜びで魚のもとへ走っていく。

「おお、今のは見事だった……」

秋葉が感心して言う。

「えへへ……」

ちよつと、照れ笑い。

そして、20センチくらいお魚を持ってバケツのところまで行く。

それにお魚を入れ、逃げないように木の板をフタ代わりにして、さらにその上に手頃な石を置く。

「よしー つぎつぎー」

そして、また釣り針にエサを付けて川の中に放り込む。

ちなみに、どうして私たちが釣りをしているかと言うと、それは、もちろん、現地の人たちから買う食べ物は何れも生臭くておいしくないからだ。

やっぱり新鮮なのが一番だよな。

彼らから買う食べ物は基本的に加工品だけ、パンとかベーコンとかチーズとか、あと塩とかコシヨウとか。

それ以外の肉、魚、野菜の調達はこれまで通り、私たち狩猟班の仕事となっていた。

「ノルマはあと10匹くらいか……、もう少しだ、頑張ろうぜ、ナビー」

「うん、蒼……」

と、私と秋葉は釣りに集中する。

何しろ、私たち狩猟班は今人手が足りない。

秋葉もこれが終わったら、別の作業が待っている……。

午前中に釣りを終わらせなければならぬ。

で、人手が足りない理由は、もちろん、あれ……。

「そつと、運べ！」

「それじゃ、佐野頼む」

「うい」

私は視線を左、川上のほうに向ける。

「石灰岩は足りてるか？」

「こっちの足場はもう使わないよな？」

「切石の搬入が遅れているぞ、なにやってんだ」

見えるのは作りかけの橋、アーチ状の石橋だ。

急ピッチで石橋の建造が進められており、男子たちのほとんどがその作業にかり出されていた。

名前は、そう、ブリッジ・オブ・エンパイアだ。

全長は30メートルくらい。

今は兩岸部分が終わって、真ん中部分の作業に入っている。

組木で覆われてよく見えないけど、だいたい作業は大詰めって感じだ。

まあ、思ったよりは早いけど、こっちの仕事も大変だから早く終わらせてほしい……。

でも、石橋の建造が終わったら今度はあっちの作業が待ってるんだよね。

と、溜息をつきつつルビコン川の対岸に目をやる。

石橋から伸びる道の先……。

そこには、そこそこ大きな広場が作られていた。

石橋建造用の木材調達のために伐採された場所だけど、次はそこに市場、交易所を作る予定になっていた。

その広場ではすでに現地の人たちが訪れて交易をはじめている。

ゴザを敷いて品物を並べているのが見える。

その前に綾原とか南条といった参謀班の面々と通訳のエシユリンが立っており、なにやら交渉事をしているのが遠目でもわかった。

おそらく、あれ、紙幣が出来たから、その説明をしているものと思われる。

帰る方法がわかったってこと。

「ナビーフイユリナ、早くしろ」

「あ、うん……」

憂鬱な気持ちで彼らのあとを小走りで追う。

「はあ……」

どうやって妨害してやろう。

いや、私の考えが正しければ、私の協力なくして元の世界には帰れないはず。

正確にはハイジャック犯の武地京哉の協力が必要、つまり、私が秘密を守り通す事がみんなの命を守る事に繋がる……。

なあんだ、いつも通りでいいんじゃない！

ちよつと、気が楽になった。

私はナビーフイユリナ・ファラウエイ、ハイジャック犯の武地京哉じゃない、そうだ、そうだ、知らんぷりしてよつと。

そして、私たち5人は人見彰吾が待つ飛行船のデッキの入り口に到着する。

第55話 コールユーゲン波動

ヒンデンブルク広場の骨組みだけになった飛行船、その真ん中にぽっかりと大きな縦穴が開けられている。

今は当初の直径30センチ程度の穴から1メートル以上の大きな穴へと拡張されていた。

「よく来てくれたわね、みんな……」

と、私たち5人を出迎えてくれたのは人見彰吾ではなく参謀班の綾原雫だった。

「しずくっ!」

気が楽になった私は大喜びで綾原に抱きつく。

「あら、どうしたの?」

彼女の胸に顔をうずめてすりすり頬ずりをする。

「ううん、なんでもない、雫、良い匂いする……」

そして、彼女の胸に顔をうずめて深呼吸を繰り返す。

「そ、そう……?」

「うん、お花の匂いする……」

菊とかそんなやつ。

「ふふ……、ありがと、ナビー……」

と、彼女は私の両肩を抱いて引き離す。

ああ、柔らかくて、気持ちよかったのに、残念……。

「私は反対したのよ……」

と、彼女が私の頭を軽くなでながら話します。

「人見がどうしてもあなたにも来て欲しいって言うから仕方なく了承したけど……、気分が悪くなったらすぐに言うのよ、いい、ナビー?」

「うん?」

なんの話だろう?

首を傾げる。

「では、行きましようか、人見が待っている……」

と、綾原が下に降ろされたロープを掴んで飛行船のデッキ部分に降りていく。

「いくぞ」

「うん」

そのあとにみんなが続く。

「ナビー、先に行つて、しんがりは俺が務める」

「うん、ハル……」

と、私もロープを伝つて地下デッキに降りていく。

「よいしょつと……」

そして、到着。

デッキの中は前に来たときと同じ、完全な暗闇ではなく、壁や天井に塗られた蛍光塗料のおかげで最低限の明かりは確保されている。

ただ、通路の瓦礫はあらかた脇にどかされていた。

「では、行きましよう、こつちよ」

と、綾原が全員がデッキに降りたのを確認したあとに言い、目的の場所に向かつて歩きだす。

私たちは薄暗い通路を進む……。

途中、あのダンスホールの横に差しかかる。

「シャペル！」

と、私は薄いブラウンの背の高いほっそりとしたロボットを確認して、名前を呼んで大きく手を振る。

「ピポポツポ、ピポポツポ」

シャペルも頭を伸ばしたり縮めたりして返事をしてくれる。

その手にはコップが握られている……。

「ああ、水遣りの時間か……」

邪魔したら悪いね。

「また遊びにくるね！」

と、ダンスホールを素通りする。

「ピポポツポ」

うん、シャペルも返事してる。

私たちは再び、薄暗い通路を進む。

すると、すぐに下に降りる階段があらわれる。

通路よりもさらに薄暗い……。

「気をつけてね、暗いから……」

綾原が先頭をきつて降りていく。

私たちもそのあとに続く。

やがて、階段も終り、上の通路と同じような薄明かりに包まれた広間に到着する。

「ここは……」

私はきよろきよろと広間を見渡す。

広さは、そうね……、縦長、横幅は10メートルくらい、縦は結構奥まで続いている……。

高さも結構ある、5メートルくらい。

その天井から鎖がじゃらじゃらと幾重にも垂れ下がっている。

クレーンらしきものも見える。

「工場？」

「うん、工場っぽいね」

福井と徳永も私と同じように広間を見渡しながらつぶやく。

そして、先に進んでいくと……。

「シャペル？」

そう、壁際にシャペルと同じようなロボットがずらりと10体ほど並んでいたのだ。

「い、いや、違う……？」

こっちのシャペルは重厚……、装甲、ガードで全身が覆われている……。

「来たか……」

そのロボットの前に佇んでいた男が言葉を発し、こちらに向き直る。

それは、もちろん、銀縁メガネの頭の良さそうやつ、参謀班の班長、人見彰吾だ。

「ここは、なんなの、人見くん？」

福井が不安そうにロボットを見ながら人見に尋ねる。

「ふっ、見ての通り格納庫さ、それも兵器のな……」

彼がメガネを人差し指で直しながら笑って答える。

「へ、兵器……？」

「ああ……、だが、心配するな、重火器類は一切ない、あるのはこいつらのみだ……」

と、彼がロボットに手を添えて見上げる。

「兵器か……」

「動くのか？」

東園寺と和泉が無警戒にロボットに近づいていく。

それを見て、私たちもおそろ、おそろ、彼らのあと続く。

「気が早いな、和泉、その実験をするためにおまえらを呼んだのだ……」

近づいて、あらためてロボットを見ると、その大きさに圧倒される。

「おつきい……」

シャベルより一回りくらい大きい、多分、3メートル近くある。

「あーん……」

と、口を開けてロボットを見上げる。

顔のデザインは一緒かな？ 赤い、丸いレンズが二つついているだけ。

「それで、前提条件だが、こいつら……、ああ、そうだな、まず名称だな、俺はこいつらにヴァーミリオンと云う名前を付けた、これからはそう呼称してくれ」

ヴァーミリオン……、銀朱？

うーん……、私にはヴァーミリオンじゃなくてベージュに見えるけど……、他になにか意味はあるのだろうか……。

「前提条件だが、こいつらヴァーミリオンの動力は電気でも内燃機関でもない……、動力は魔力だ」

みんなが人見の説明を黙って聞いている。

「俺はこの実験のために、朝から5時間ほど魔力を注入し続けた……」
そういえば、くんくん、お昼もいなかったね。

昼食もとらないで、そんな事をしていたんだ……。

「じゃあ、動かせるのか？ 今？」

「ああ、和泉、やってみせよう……、みんな下がっていてくれ」

と、彼が少し下がるようにと手で促す。

十分下がったのを確認して人見がヴァーミリオンの胸に手を添える……。

すると、ヴァーミリオンの赤いレンズが光り……。

「う、動いた」

「ほ、本当に……?」

ギギギ、ガガガ……、と云うさび付いた金属同士が擦れる音を響かせてゆつくりと動きだす。

そして、ドスン、と、ほこりを巻き上げて一步目を踏みだす。

「うお……」

「す、すごい……」

でも、いつまで経っても二歩目を踏みださない……。

「止まった?」

「失敗か?」

完全に止まった、赤いレンズの光も失われている……。

「故障してるの……?」

「残念、これが動けば色々仕事が楽になると思ったのに……」

と、福井と徳永が落胆したように言う。

「いや、故障はしていない、ただの燃料切れだ……」

人見が一步目を踏み出したヴァーミリオンに再度近づいて答える。

「燃料切れ?」

「朝から5時間も魔力を注入してたんじゃないの?」

「そうだ、俺の5時間分の魔力ではこれが限界、稼働時間はせいぜい3

秒つてところだ……」

使えない……、そう思わざるを得ない。

「人見くんの魔力でも3秒が限界なの?」

「じゃあ、他のみんなでもやってもたかが知れてるね」

みんなで一日がかりで魔力を注入すれば、数分は行けそうな気がするけど……。

「使えん、そんなもののためにリソースを割くわけにはいかん」

と、東園寺が総括する。

まあ、普通に考えればそうだよ、ヴァーミリオンに魔力を注入していたら、他の事がなんにも出来なくなっちゃうよ。

「余興は終りだ、人見、本題に入れ」

と、さらに、東園寺が言う。

ほ、本題……。

やっぱりそれか……。

日本に帰るための方策だ……。

私はうつむいて顔をしかめる。

「余興？ 何を言っているんだ、東園寺？ これが本題だ、まだ終りではない」

と、人見が腰のナイフを引き抜く。

「人見くん？」

「な、なにをする気なの……？」

福井と徳永が後ずさる。

「ナビー……」

いつの間にか隣に来ていた綾原が私の肩をそつと抱く。

「うん？」

彼女の横顔を見上げる。

「怖いなら、目を閉じてなさい」

と、彼女は静かに言う。

「魔力とはなんだと思う……？」

綾原の横顔を見上げていると人見の声が聞こえてきたので、そちらのほうに視線を戻す。

「魔力とは、精神、人の想い……、そう勘違いしてはいないか……？」

人見がヴァーミリオンの前に立つ。

「そう勘違いしても仕方はない、俺も最初はそう思っていたから……、だが、魔力とはそんな単純なものではなかった……、いや、もつと単純だったのかもしれない……」

そして、彼がヴァーミリオンの胸に手の平を広げてピタリとあわせる。

「魔力とはもつと根源的なもの……、それは人の苦痛だ!!」

ドン、と、凄い音がした……。

人見がその広げた手の平の甲にナイフを突き刺したのだ。

「ひっ!？」

「え、きやつ!？」

福井と徳永が口元を押さええて悲鳴をあげる。

「うがああ、あがああああ……」

人見の手の甲から勢いよく血が吹きでる。

「ああああ!!」

と、さらに突き刺したナイフをひねり差し込む。

な、なにをやっているんだ、こいつは!？」

「ああああああ!!」

何度もナイフをひねり上げる……。

彼の手が凄まじい流血と共にぴくぴくと痙攣しはじめる。

「ああああああ!!」

そして、その突き立てたナイフを一気に引き抜く。

さらに勢いよく血が吹きでる。

「人見!？」

「大丈夫か!？」

東園寺と和泉が彼を心配して駆け寄ろうとする。

「黙って見ていろおお!!」

しかし、人見が血の吹きだす手を横に払い二人を制止させる。

今の動作だけでも、もの凄い量の血が飛び散った。

「うおおおお!!」

そして、血が吹きでる手をヴァーミリオンの胸に激しく叩きつける。

〃ゴールユーゲン波動〃

そう、彼の声が聞こえた気がした……。

「なっ……」

10体のヴァーミリオンの目が赤く不気味に光りだす……。

ギギギ、ガガガ……。

そして、そのすべてが一斉に動きだす……。

「ふふふふ……」

圧倒されて言葉もでない……。

第56話 もう一人

胸部を血で真っ赤に染めたヒンデンブルクの魔法兵器ヴァーミリオン……。

「血で赤く染まるからヴァーミリオンか……、いい、ネーミングセンスね……」

口の中で小さくつぶやく。

私の肩を抱く綾原雫の手に力が入っていて痛い。

私はぽんぽんと彼女の手を叩いて、大丈夫だよっていう合図を送る。

「あ、ごめんなさい……」

と、綾原は私を見て小声で謝る。

「うん」

それにたいして、私も少し笑顔をつくって返事を返す。

ギギギ、ガガガ……。

あらためて、人見彰吾と10体のヴァーミリオンを見る。

人見は手を押さえて動くヴァーミリオンに見惚れている……。

やがて、ヴァーミリオンは人見のうしろに整列し動きを止める。

もちろん、今回は燃料切れではない、その証拠にレンズのような赤い目がまぶしいくらい光を放っている。

「人見……」

と、綾原が私の肩から手を離して人見のもとに歩み寄る。

「見せて……」

そして、彼の手を取る……。

すると、滝のように血が滴り落ちる……。

「ひっ……」

「うつく……」

福井と徳永が目を背ける。

「無茶をして……、アスタナ、美しくしき、流れのほとりで、慈雨にその身を任せ、癒しの精霊糸」

綾原が人見の手の治療をはじめる。

「どうだった？ 何倍出た？」

と、人見がヴァーミリオンを子供のような目で見上げながら尋ねる。

「数万倍までは観測した……、それ以上は計測不能よ……」

手の治療をしながら綾原が答える。

「数万倍以上か……、予想以上だ……」

「ホントに、もう……、痛むわよ、ラセンカ、精霊の森に眠る悠久の追憶よ、トウパ、審判の時に雨粒が草木を潤す、天リリのラ後のル地知レイ」

「あぐつ」

人見が顔を歪ませる。

「傷は完全には癒えない、数日間の出血は覚悟して……、痛みは、もつとよ……」

そして、準備していたのだろう、白い包帯を巻き始める。

「覚悟の上だ」

不敵に笑ってみせる。

綾原はその顔をちらりと見ただけで包帯を巻き続ける。

「10万倍、と、仮定して、10体……、稼働時間は、ざっと計算しただけでも20分以上か……」

「そうね……、最低でもそれくらい行くと思うわ……」

「素晴らしい……、魔力が惜しい、戻れ、そして、スリープ状態で魔力を温存しろ」

彼の命令に従い、ヴァーミリオンたちは元と場所に戻っていく。

ギギギ、ガガガ……。

と、元の場所に戻り、活動を停止させる。

「どうだ、東園寺、これでも余興と言えるのか？」

人見が東園寺に視線を向けて言う。

東園寺は何も言わない、考えあぐねているようだ。

「おまえも心配していたのだろうか？ 現地人の再襲撃を、だから、あんな見張り台を作ったのだろうか？ だが、その心配ももう必要ない、こいつらがあれば防備は完璧だ」

人見がヴァーミリオンを見上げる。

「終りよ、人見、しばらく安静にしてて……」

「すまない、綾原……」

治療が終り、彼が包帯の巻かれた手を見る。

幾重にも包帯が巻かれているにも関わらず、その白い布にはうつすらと赤いものが滲んでいた。

「ふう……」

痛みが和らいだのか、人見が軽く息を吐き出す。

「評価は変わらん、使えないと云う考えに変わりはない」

東園寺がやつと口を開く。

「ほう？」

「通常では動かん、動かすためには、さっきおまえがやったような事をしなければならぬ、そんな事は許可できん、自傷行為は禁止だ、それはおまえでも同じだ、人見」

「ふむ……、それもそうだな……、なら、通常魔力でどこまで動かせるか試したい」

「くどいぞ、人見」

珍しく、東園寺が苛立たしげな声を上げる。

「昨日の班長会議で結論は出ている、ラグナロクの防備は管理班が行う、おまえの参謀班は我々がなぜここに来たのか、そして、帰る方法はあるのか、もしあるのなら、それは実現可能なのか、それらを調べるのが仕事だとな」

ああ……、もう、そこまで話し合っていたのか……。

「だが、我々の安全が脅かされては、日本に帰る方法がわかったところで意味はない、先にこちらの研究からはじめたい」

「人見……」

東園寺がいらいらした感じで頭をかく。

「人見くん、あなたの熱意はわかるけど、これは班長会議の多数決で決まった事なのよ、私たちは合議制だから、それに従ってもらわないと困る」

と、徳永がさとす。

「そうだな、確かに、3対2で日本への帰還が最優先って議決だったな

……、で、思い出したんだが……、班長は5人だけだったかな、と……、他にもう1人いたような気がしたんだが……」

と、人見が顎に手を当てて考え込む素振りをして言う。

「え……？ 管理班、参謀班、女性班、生活班、狩猟班の5人よ……？」
福井が首を傾げる。

「いや、もう一つ班があつたはずだ……、東園寺、おまえ、最初の班割りの方に言ったよな？」

「な、なに？」

東園寺が眉間にしわを寄せ、視線をそらして何かを思い出そうとする。

「そう、確かに言った、管理班、参謀班、女性班、生活班、狩猟班、そして、最後に、みんなを元氣付ける、マスコット班、と……」

あ……。

それ、私だ！

「おお……、ちようどよく、マスコット班の班長、ナビーフイユリナ、フアラウェイさんもいらつしやるじゃないですか」

と、人見がわざとらしく両手を広げて言う。

「ちようどいい……、班長6人、全員揃っている、あらためて決議を取ろうじゃないか」

彼が人差し指でメガネを直しながらにやりと笑う。

なるほどお……、だから、私が呼ばれたんだね……。

くんくんは頭いいなあ。

「い、いや、で、でも、ナビーが班長……？」

「た、確かに、東園寺くん、マスコット班とか言ってたけど、あれって、冗談じゃなかったの……？」

と、福井と徳永が困惑している。

「俺はナビーを班長の一人に加える事には賛成だよ、それだけの仕事はしていると思う」

和泉が手を挙げて発言する。

「ふっ……、だ、そうだ、東園寺……」

「で、でも、これは、さすがにずるいよ、班長会議の結果を覆そうと無

理矢理こじつけたようにしか思えない」

と、徳永が東園寺の代わりに言う。

「いや、徳永、これは重要な決議だ、我々の命、将来が懸かっている、もう少し慎重を期すべきだ、まず全員の身の安全を図りたい、その決意のあらわれがこれだ」

人見が包帯に血が滲んだ手をみんなに見せながら話す。

「だ、だからって……」

徳永が言葉を詰まらす。

「いい、徳永、人見の好きなようにやらせろ、もう一度採決するぞ、ナビーフイユリナ、おまえもだ」

東園寺が話をまとめる。

「すまん、東園寺……」

「だが、勘違いするな、ナビーフイユリナを加えた採決はこれ一回きりだ、次からはこれまで通り5人で行う」

「ああ、わかった……」

東園寺たちが人見を中心に集まる。

「さ、ナビー、あなたもよ……」

と、綾原が私の背中を押す。

「う、うん……」

私も班長たちの輪に加わる。

「それでは、採決をとるぞ、案は二つ、一つは、日本への帰還を最優先とし、参謀班は飛行船の調査を行い手がかりを探る、もう一つは、これまで通り、日本への帰還は最終目標とし、我々の安全、生活を最優先とする、この二つだ」

おお……。

なんて、好都合な……。

「ナビーフイユリナ、よく考えて答えをだしてくれ」

「う、うん……」

考える必要もないよね！

だって、私は日本になんて帰りたくないし、みんなも帰ったら殺されるし、ここに残るのが一番だよね！

「ここでの生活も二ヶ月近く……、限界が近づいていると思う……」

「うん、帰る道筋、何らかの希望を見出さないとたない……」

と、徳永と福井が暗い口調で言う。

う……。

みんなの帰りたいたい気持ち、ストレスはわかるけど、帰ったら殺されちゃうんだよ……。

「では、日本への帰還を最優先とする、この案に賛成の者、手を挙げてくれ」

東園寺の言葉に、徳永、福井が挙手し、さらに、発言者の東園寺も手を挙げる。

「前と同じ、3人か……、次、ここでの安全、生活を最優先とする、この案に賛成の者、手を挙げてくれ」

すると、人見と和泉が手を挙げる。

「ナビーフイユリナ、どっちだ？」

「ナビー……」

「ナビー、大事なことだ」

「ナビー、お願い」

「ナビー」

みんなが私を見る。

ああ、ああ……、目がまわるう。

ああ、ああ、ああ……、ここにいないみんなの顔まで頭の中でぐるぐるまわるう。

「う、え……、りよ、両方で、両方賛成で、両方最優先で……」

なんとか声を絞りだす……。

「ふはっ……、ナビーらしいな……」

「うん、ちよつと笑っちゃった」

「気が抜けたあ……」

「じゃあ、ナビーの言う通り、両方最優先にしようか？」

と、みんなが笑顔を覗かせて口々に言う。

「ふう……」

東園寺が溜息をつき、踵を返す。

「この件は保留だ、とりあえず、人見、両方だ、両方同時並行的に進めてくれ、以上だ、解散」

と、付け加えて、格納庫から歩き去っていく。

「うん、お疲れ様でした」

「もつと、ちゃんと考えておく必要があるそうね、この件は……」

福井と徳永もそのあとに続く。

「じゃあ、俺たちも帰ろっか、ナビー？」

と、和泉が私の顔を覗き込みながら優しい口調で言う。

「う、うん……」

私たちも出口に向かって歩きだす。

「ナビー、ありがとう、助かった」

と、うしろから声をかえられた。

「英断だったと思うよ」

それは人見と綾原の声だった。

私は立ち止まり、二人を見る。

すると、二人はかすかに笑顔をつくり小さくうなずいてくれる。

第57話 恋ひわたる

「ピッピ、ピッピ、ピッピ」

今日も天気がいい。

「ピッピ、ピッピ、ピッピ」

口にくわえた黄色のホイッスルも私の機嫌にあわせて軽快な音色を響かせる。

「ピッピ、ピッピ、ピッピ、ピー、よし、全体止まれ！」

「ふるるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「びよおー！」

「くるうー！」

「ぷーん！」

と、みんなも返事をしてくれる。

「うん、ひよこたちも、ちゃんと付いてきてるね」

そう、今日はひよこたち、ピッピ、スカーク、アルフレッドも一緒。それもそれのほず、ここはラグナロク広場の牧柵の中。

ひよこたち……、うーん、もう、ひよことは呼べないね……。

私は大きくなった彼らを見る。

真っ白な羽毛、トサカのないニワトリつて感じの姿……、あ、でも、まだ黄色産毛はところどころに残っている。

「やっぱり、まだ、ひよこだね……」

私はクスリと笑う。

「ああ、機嫌がいい……」

さらに、青空を見上げて笑みをこぼす。

機嫌がいいのはもちろん、昨日の事をうけてだ。

そう、あのヒンデンプルク広場の飛行船での出来事。

「ふふ……」

いい采配だったと思う。

日本に帰らない、帰らせない、と云うのは当然として、それをみんなに周知徹底させるのには抵抗があった。

だって、もう二度とお家には帰れないとわかったら、絶対気落ちするよ、落ち込んで元気がなくなるよ。

ここでの生活にも支障がでるよ。

そこで、日本に帰れるかもしれないと希望を持たせつつ、のらりくらりとここでの生活を長引かせる作戦にでる。

すると、あら、不思議、日本に帰りたいと云う想いも次第に薄まり、ここでの生活も悪くないと思いはじめてしまう。

そして、やがては、日本？ 何それ？ って、なる事請け合い。

うん、なんて、いい作戦なんだろ……。

何よりも、昨日、好材料を発見した。

それは、人見と綾原だ。

あの二人はたぶん日本には帰りたくないんだと思う。

だから、あんなに抵抗したんだと思う。

あとは、和泉、あいつも、どっちかといったら、ここでの生活を第一に考えているんだと思う。

でも、心配事がひとつあるとすれば、それは、東園寺……。

あいつ、前は和泉みたいに、ここでの生活基盤作りが最優先で日本に帰る事は二の次だって言ってたはずなのに、昨日は日本への帰還が最優先とか言い出しやがった……。

うーん……、何か心境の変化があったのだろうか……。

いや、徳永と福井に言いくるめられたって印象だったかな……。

女にうつつをぬかしやがってえ、許せん。

そんなのどうでもいいか……。

と、まあ、状況はこんな感じだけど……。

「そこで、私のとる行動は……」

ちらりとシウスたちの頭をなでているエシユリンを見る。

ウェーブかかった亜麻色の髪の少女、エメラルドグリーン瞳と明るい表情が好印象の美少女だ……。

「ぷーん？」

と、彼女が私の視線に気付いて、不思議そうな顔でこちらを見る。

「エシユリンって、狩猟班で面倒見てるけど……」

寝泊りも狩猟班女子のロッジでしている。

「ぷーん？」

でも、私と同じで正式には狩猟班のメンバーではないんだよね……。

よし、これだ。

「エシユリン、あなたは今日からマスコット班よ」

ピタツつとエシユリンを指差して宣言する。

「マスコット班、ぷーん？」

「そうよ、みんなを元気づけるマスコット班、そして、そのマスコット班の班長はこの私よ」

そう、私がマスコット班の班長！

「へへん」

腰に手をあてて大威張り。

「マスコット班、ぷーん！ エシユリンもマスコット班、ナビーと一

緒、ぷーん！」

エシユリンも飛び上がって喜ぶ。

これからは班長として班長会議にも出席する。

そして、また、日本に帰るのが最優先、いや、こっちの生活が最優先とかいう議題で揉めたら私の登場。

喧嘩は駄目、めっ！ とか言って仲裁する。

そして、どちらの言い分も正しい、どちらの案も最優先とか言って、どっちつかずで、のらりくらりと煙に巻いてやる。

「ぶるるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

「びよ、びよー！」

「びよっぴこー！」

「びよおー！」

「くるうー！」

みんながじやれてくる……。

ああ!?

また、みんなが私の服を脱がそうとしている！

「あ、あ……、やめ、やめ！」

「ぶるるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

「ぴよ、ぴよー！」

「ぴよっぴいー！」

「ぴよおー！」

「くるうー！」

私は必死に抵抗するけど、彼らはおかまいなしに服を引っ張ってくる。

「みんなでひどいー！」

ああ、みんなに包囲された……。

いつばいい……。

いつばいい？

「ピーー！」

と、思いつきりホイッスルを鳴らす。

いい事思いついた。

「いい、みんな……」

急にホイッスルを鳴らされてみんながキョトンとしている。

「今日からみんなもマスコット班よー！」

ウエルロット、シウス、チャフ、ピップ、スカーク、アルフレッド、

クルビット、これに、エシユリンと私をたして9人！

最大派閥の生活班に並ぶ！

これで影のリーダー、福井麻美にも対抗出来るよ！

「ぶるるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

「びよ、びよ！」

「びよっぴい！」

「びよお！」

「くるう！」

「おお……、みんなも、よろこんで……、ない！」

「また、私の服を脱がそうとしてくる！」

「よーし、こうなったらー！」

と、私はかぶっていた麦わら帽子を脱いで、それをブーメランのよ
うに空高く放り投げる。

麦わら帽子は青空の下をくるくると回転しながら飛んで行く。

みんながそれを目で追う……。

「チャンス！」

と、私は走りだす。

「ぶるるう！」

「めえ！」

「めええ！」

「びよ、びよ！」

「びよっぴい！」

「びよお！」

「くるう！」

「プーン！」

みんながそれに気付いて、私のあとを追い駆けてくる。

「よーし！ ランニングだ、ついてこい！」

と、両手を広げてさらに加速。

「あははっ」

風を受けて前髪がふわりと広がる。

ワンピースの中を風が駆け抜けていく。

「そおれ！ もう一周！」

柵沿いに全力疾走。

「ぶるるう！」

「めえ！」

「めえええ！」

「ぴよ、ぴよ！」

「ぴよっぴい！」

「ぴよお！」

「くるう！」

「ぷーん！」

みんなも元気よくついてくる。

「あはははっ」

もう、超ご機嫌！

と、機嫌よく走り回っていると、牧柵の外に夏目翼の姿が見えた。

彼女はいつもの紺色のジャージではなく、エシユリンみたいな民族衣装を着ていた。

「珍しい……、スカートだなんて……」

丈の長い黒いスカート、それに白いエプロンみたいなものをしている……。

「よーし！」

と、私は少し助走をつけて、そのまま牧柵目掛けて走っていく。

「とおう！」

そして、柵に片手をつけて、そのまま飛び越える。

「エシユリン、あとはまかせた！」

「わかった、ぷーん、エシユリン、見てる、ぷーん！」

エシユリンにそう声をかけながら夏目のところに走っていく。

「くるう！」

むむ……。

クルビットも牧柵を飛び越えてついてきちゃった。

まっ、いつか！

「つばさあー！」

と、首からホイッスルを外して、その紐をもってぐるぐる回しながら彼女のもとに走って行く。

「つーばーさー！ ねえ、つーばーさーってばあ!!」

もう、おおはしやぎ！

「つばさあ!!」

「な、ナビー!？」

と、私は思いつき彼女に飛びつく。

「おう……」

痛い……。

に、鈍い痛みが……。

私はその場にうずくまる。

な、なんか、お腹を強く打った感じ……。

「な、ナビー、大丈夫!？」

「う、うう……、なんで……?？」

と、少し顔を上げて夏目を見る。

すると、彼女は白いエプロンみたいなものの両裾を掴んで持ち上げていて、そのエプロンの上には大量のジャガイモが乗せてあった。

あ、あれにお腹をぶつけたのね……。

「くるう……、くるう……」

クルビットが心配して私の頬をなめてくれる。

「ただ、大丈夫よ、クルビット……」

彼の頭をなでて、お腹を押さえながら立ち上がる。

「ナビー、本当に? 怪我はなかった?」

と、夏目も心配そうに私の顔を覗き込む。

「う、うん、大丈夫、ちよつと、びっくりしただけ……、あ、ごめんなさい、ジャガイモ落としちゃったね……」

ころころと何個か落ちている。

私はジャガイモを拾って彼女のエプロンに戻す。

「ありがと、ナビー」

彼女は笑顔でお礼を言ってくれる。

「これで、最後つとー!」

と、最後のジャガイモをバスケットボールのシュートの要領で投げる。

「よつと……」

夏目がそれをエプロンでキャッチしてくれる。

「ナイスシュート、えへ」

と、彼女は笑顔を見せる。

「じゃあ、倉庫に置いてくるね、ナビーもくる？」
「うん、いく！」

と、二人で食料品倉庫に向かう事になった。

「ナビー、帽子はどうしたの？」

「うん？」

「そういえば、ない……。」

頭をぺたぺたと触る……。

「麦わら帽子がない……、あ、あれ……？」

「陽射しが強いから熱中症になるわよ」

「うー……」

夏目もちやんと麦わら帽子をかぶっている……。

「うー……」

「陽射しか……、陽射しを遮るものか……。」

彼女の黒いスカートをちらりと見る。

「えいー！」

と、彼女のスカートをめくって、そのまま頭にかぶせる。

「えっ、きやつ、ちよ、ちよつと待って、ナビー!?!」

彼女はそんな声を出すけど、それ以上の抵抗は出来ない、なにしろ

エプロンの上に大量のジャガイモを乗せているからね。

もぞもぞ……。

と、スカートの中を進む。

「な、ナビー、どこを?!」

そして、彼女の腰をがっちりキヤツチ。

そのまま、ほおずり。

「ああ、ひんやり冷たい……」

すりすり、肌とこのシルクのような布の肌触りが気持ちいい……。

「な、ナビー、出て、出てー！」

と、言うけど、お断り。

この場所気に入った。

「ほら、翼、足がお留守だよ、歩いて、歩いて」

「な、ナビー……」

と、彼女は仕方なく歩きだす。

私も夏目の腰に抱きついたまま、同じ調子で歩く。

「うーん……」

歩き辛い……。

こう、後ろにまわって、腕を前にまわして……。

顔はこのくぼみかな……。

おお……、ちょうどお鼻が挟まって収まりがいい……。

「ひっ、えっ、ナビー!?!」

「なあに? まっくらで何も見えないよお……」

そう、黒いスカートが太陽光を完全に遮って何も見えない。

腕の場所がなあ……。

こう、太ももの内側かなあ……、ああ、駄目だ、足が動いて掴み辛

い、もつと上だな……。

「こ、こら、ナビー、本当に待って、お、怒るわよ!?!」

「なあに? なんにも見えないんだよお、どこがどう待ってほしいの

か、ちゃんと言ってもらわないとわからないよお……」

「な、ナビー!?!」

と、こんな遊びをしながら食料品倉庫に向かうのであった。

第58話 永遠に生きるつもりで

食料品倉庫は調理室の隣にある。
建物の中はそれなりに広い。

また、倉庫は魔法の力で冷却しており、外と比べて20℃以上は低くなっていた。

「うう……、寒い……」

私はふるふると震え、二の腕をさする。

「お肉はなに使う？」

「野菜はこれでいいよね？」

「パスタになに入れる？」

と、お昼が近いせいか、生活班の女子たちがしきりに出入りしてくる。

基本的に食事の準備は生活班女子の仕事だけど、他の班の子も調理の時間になれば、自分たちの作業を中断して調理室に手伝いにやってきていた。

「ナビー、お願い」

「あ、うん……」

と、私はエプロンのジャガイモを手に取り、大ききごとに、それぞれのバスケットに仕分けしていく。

「これで、全部つと……」

すぐに仕分けは終わる。

「寒い！」

「くるう……」

「うん？ クルビットも寒いのか？」

と、クルビットを抱え上げて、胸に抱く。

「寒いねえ」

「くるう……」

顔をすりすりする。

「それじゃ、私はこのまま調理室に入るから、ナビーはクルビットを牧舎に戻していらっしやい」

「はあいー」

と、私は食料品倉庫をあとにする。

このあと、シウスたちの放牧を終りにして牧舎に戻して、それから、エシユリンを連れてきて、中央広場でお皿とかの配膳の仕事をする。「ああ、陽射しが強いからパラソルの準備もしておいたほうがいいね……」

と、空を見上げながらつぶやく。

「いそがし、いそがし……」

クルビットを抱いたまま、駆け足で牧舎を目指す。

男子たちは今、ルビコン川の橋作りや市場の建設で大忙し、その上、作業も大詰めで力仕事がメイン。

相当お腹を空かせているはず。

「急がなきゃ……」

と、思ったら、暇そうにしている男子もいた。

その人は牧柵の外からぼんやりとシウスたちを見ている……。

そう、それは、銀縁メガネの頭の良さそうなやつ、くんくんだった。

「彰吾……っ？」

と、小さく声をかける。

「ああ、ナビー、いないと思ったら、クルビットの散歩に行っていたのか」

彼は私の顔を見るなり笑顔をつくりそう言う。

「うん、まあ、そんなところ……、さっ、クルビット……」

と、クルビットを地面に下ろして、柵の戸を開け中に入るようにとお尻を押す。

「くるう……」

遊び足りないのか嫌がる……。

「クルビット……」

ぼんぼんとお尻を軽く叩く。

「くるう……」

と、しびしび中に入っていく。

「よし」

戸を閉めてパンパンと手を叩く。

「エシユリン、放牧はおしまいね！ みんなを牧舎の中に入れて！」
そして、大声で彼女にお願いする。

「わかった、ぷーん！」

と、エシユリンがみんなを牧舎の中に連れて行く。

「忙しそうだね？」

人見がその作業を見守りながら尋ねてくる。

「うん、まあね、このあと、すぐにお昼の準備をしなくちゃいけない」
「そうか……」

「彰吾は暇そうね？ 手、まだ痛むの？」

私は彼に向き直り、包帯の巻かれた手を見ながら聞く。

「痛まない、と、言ったらうそになるが、仕事が出来ないほどではない……、が、参謀班のメンバーが今は休んでろつてうるさいんでね、仕方なくこうやって時間を潰していたってわけだ」

「ぷーん……」

と、顔を近づけて、彼の手を見る。

昨日と違って血は滲んでない、ちゃんと新しい包帯に取り替えてある。

「それにしても、びっくりしたよ、何を思ってこんな事したの？」

と、手をつんつんしてみる。

「あぐっ!？」

びくつとなる。

やっぱり相当痛いんじゃない。

さらにつんつんする。

「ひっー!」

と、人見が手を庇う。

「ふふ……」

彼の顔を見る。

なんか、ひきつっている。

「で、どうして、こんな事したの？」
あらためて彼に尋ねる。

「いや、もちろん、あのヴァーミリオンの性能に興味があつたのは事実だが、それ以上にけじめをつけたかつた」

と、包帯の巻かれた手を見ながら人見が話す。

「けじめ？」

「ああ、けじめだ、俺はみんなの命を危険にさらした」

「そうなの？」

「そうだ、知つての通り、現地人は魔法のネックレスの性能を知つてしまった、やつらはさらにそれを欲しがらるだろう、取引に応じてくれる間はいいが、もし、やつらが力づくで来たら厄介だ、やつらだけなら撃退も可能だが、近隣の村々すべてで襲いかかつてきたら終りだ……」

ふーん……。

一応は理解しているみたいね。

彼らは文明水準が低い、それほど建設的な思考は期待できない。

金の卵を産む鶏みたいになりそうなんだよね。

で、将来、おとぎ話になつたりして、金の卵じゃなくて、魔法のネックレスで。

うん、それはそれで面白い。

「うかつだった……」

彼が苦々しく包帯の巻かれた手を見る。

「これは、そのけじめだ……、そして、ラグナロクの防衛力強化も急がなければならぬ……、あの飛行船を調査して日本に帰る方法を探している場合ではない……」

なるほどね……。

これは使える……。

「そうね、彰吾、生き残る事が先決よ、生きてさえいれば、いずれは日本に帰れる、まず、私たちが考える事はどうやって生き残るかよ、生きてさえいれば、どんな大怪我でもかすり傷、あとからいくらでもリカバー出来る、それだけは忘れないで」

「生きてさえいれば、どんな大怪我でもかすり傷、か……、いい言葉だな、肝に銘じておこう……」

「おいしい……」

あきらめてスプーンでポトフをすする。

そして、箸の先でジャガイモを刺して、そのまま口に運ぶ。パンも箸の先に刺してむしやむしや……。

そして、パスタも刺して……。

「くう……」

駄目だ、食べられない……。

なんで、フォークじゃないのよ、箸なんて使えないよ……。

夏目とかに箸の持ち方がどうかよく指導されるけど、私はフォークがいのよ……。

皿を持って、直接お口に流し込む！

「こら、ナビー、はしたないわよ」

と、夏目に注意される。

「はあい……」

皿をテーブルの上に戻す。

そして、また、箸でパスタを掴もうと悪戦苦闘する。

「ははは、ナビーは箸の使い方がヘタだなあ」

秋葉蒼に笑われた。

「こうだよ、ナビー」

さらに、和泉春月も箸を閉じたり開いたりしながら言う。

「こう……っ？」

と、和泉の真似して箸を閉じたり開いたりする。

「そうそう、うまいうまい」

よし。

その調子でパスタを掴もうとする。

でも、するすると落ちていく……。

くっそお！

「もう、しょうがないなあ、ナビーも……、食べさせてあげるよ」

と、秋葉が椅子を近づけて、私の箸を奪い取る。

「ほら、ナビー、口を開けて」

秋葉がパスタを掴んで私の口に近づける。

「え、ええ……う？」

「ほら、はやく」

満面の笑みで言う。

「あ、あーん……」

しようがないので、口を開ける。

すると、パスタが口の中に入れられる。

うん？

おお？

ちゆるちゆるとパスタをすすする。

「お、おいしい！」

ちゃんとしたパスタだ！

これって、ソースは普通のカルボナーラだね、缶詰かなんかで残っていたのかな？

「だろ、ほら……」

と、また秋葉がパスタを口の近くに運んでくれる。

「ありがとう！」

大喜びでパスタに食いつく。

ちゆるちゆる。

うまうま。

「次ター！」

催促する。

「ほら……」

と、なぜか、パスタの位置がどんどん上にあがっていく。

私は立ち上がって、パスタを下からちゆるちゆるすすする。

「今度はさ、この一本を噛まないで飲み込んでーらん」

「う、うん？ わ、わかった……」

と、秋葉の指図通りにパスタを下から飲み込んでいく。

おお、のどごしがいい……。

ちゆるちゆる、ごくごく……。

と、飲み込んでいたら、パスタがどんどん上にあがっていく……。

私は背伸びして飲み込もうとする……。

けど、もうこれ以上届かない……。

「ほら、ナビー、もう少し、口を開けてごらん」

「あ、あーん……」

口を開けたまま固まる。

「おお、ちゃんと飲み込んで……」

「すごい、こうなってるんだ……」

と、秋葉と和泉が私の口の中を覗き込む。

な、なにをやってるんだ、こいつら……。

「おこっ?」

ああ!?

パスタを引っ張られた!

「おげ、おげ、おこ……」

どんどんパスタが引き抜かれていく。

や、やめ、やめて!

「おこ、おこ、おこっ!?!」

もう涙目。

ぎゅつと手を握って耐える。

「おお、それでも飲み込もうとしてるよ……」

「すごいな、閉じたり、開いたり……」

な、なにこれ、なんの遊びなの!?

それでも、頑張ってパスタを飲み込もうとする。

「お? 負けないぞ?」

と、秋葉が椅子の上に乗ってさらにパスタを引っ張りあげる。

「おこ、おこ、おげ、おげ、おこっ!?!」

やばい、これ!

秋葉に釣り上げられる魚の気持ちがあったよ!

「こら、男子、食べ物で遊ばないの」

「そうだよ、みんなで一生涯命作ったんだから」

と、笹雪と雨宮に注意される。

「あ、ごめん……」

秋葉が手を緩める。

チャンス!

と、私はパスタをちゅるちゅる吸って、ごくんと飲み込む。

「あ……」

「へへん」

おいしかった。

いやあ、しかし、楽しい食べ方だなあ。

と、私はパスタを指でつまんで、先を見つけて、そこから嚙まずにちゅるちゅると飲み込んでいく。

おお……、おいしいというより、気持ちいい……。

こう、上からたらして飲み込んでいく感じ……。

で、途中で引っ張ると……。

「おこっ」

や、やばいよ、これ!

「ああ!? ナビーが変な食べ方おぼえちゃったよ!!」

「どうするの、男子たち!?!」

と、こんな感じで楽しい昼食会は続くのであった。

第59話 たゆたう一会

うつすらとした朝焼けが山々を照らす。

森は黒々としたモノトーンから朝日によって色を取り戻し、鮮やかな緑色へと変貌を遂げていく。

朝日は山や森を飛び越え、直接ラグナロク広場に降り注ぐようになる……。

今日も暑くなりそうな、そんな予感のする太陽だった。

「ナビー、忘れ物ない？」

と、中央広場で夏目翼にそう話しかけられる。

「うん、大丈夫だよ、翼、ハンカチとティッシュも持った」

ポケットからそれらを取り出して彼女に見せる。

「陽射しも強くなりそうだから、帽子はちゃんとかぶっててね、あと、水分補給も……」

「うん、大丈夫だよ」

私は麦わら帽子を直しながら笑顔で答える。

「気をつけて行ってくるのよ、気分が悪くなったらすぐに言うのよ……」

「大丈夫だって！」

しつこい！

「ああ、心配……、東園寺くん、ナビーの事、お願いね」

「ああ、わかった……、よし、おめえら、準備はいいか、忘れ物はないか!？」

と、東園寺が軽く返事をしたあとに声を張り上げる。

「大丈夫っす、公彦さん」

「ういーっす」

「準備おーけー」

「こっちも問題ない」

と、荷物の準備をしていた男子たちが口々に答える。

そう、私たちはこれから遠くにお出掛けする。

「それじゃ、行くぞー！」

「「おう」」

「おお！」

と、私は拳を突き上げて、先頭に行く東園寺のあとを駆け足で追う。

「エシユリン、どう？ お尻痛くない？」

「大丈夫、ぷーん」

エシユリンは笑顔で答えてくれる。

彼女は今、東園寺の背中に座っている。

そう、あれ、椅子。

東園寺がリュックみたいに背負った椅子に座っている。

これから、30キロ近く歩く事になるから、エシユリンはお座り。

別に彼女が疲れるだろうから、こうしているわけではない。

彼女も現地人、30キロくらいいたいした距離ではない。

でも、問題は速度。

エシユリンのペースで歩いていたら日が暮れてしまう。

私たちは魔法の力で強化しているからとにかく速い、エシユリンの倍以上のペースで歩いていける。

なので、エシユリンにはこうやって大人しく座っていてもらう事にした。

朝日を左手に見ながら進む。

目的地はナスク村。

そう、エシユリンの村だ。

これから、私たちは行商に行く。

いつも来てもらってばかりで悪いので、今回はこちらから行く、と云うのは建前で、主な目的は偵察だ。

村の状況、生活水準、人口分布、主要産業……、と、様々な事を、物売りながら観察する……。

で、私とエシユリンは通訳として同行する。

そして、私たちのうしろを歩く男子は5人。

管理班の鷹丸、神埼、久保田、参謀班の南条、最後に狩猟班の和泉。

それぞれ5人は山のような荷物を背負っている。

私はもちろん、小さなリュックのみ、通訳だからね。

管理班の面々で物を売り、その隙に参謀班の南条が偵察する、狩猟班の和泉は護衛、そんな役割。

なんだかんだ言って和泉は強いからねえ。

振り返って、ちらりと彼を見る。

いつもは弓だけど、今日は腰に長い細身の剣を差している。

私の視線を感じてか和泉がかすかに笑う。

しようがないので、笑顔で手を振ってやる。

和泉も手を振り返してくる。

そんな事をしている間にルビコン川に到着。

「おお……」

完成したばかりの石橋、ブリッジ・オブ・エンパイアの真ん中から

朝日を望む。

ルビコン川が金色に輝いている……。

「綺麗だね」

と、私のうしろを通過しながら和泉がささやく。

「うん」

よし。

また小走りで先頭を歩く東園寺のあとを追う。

そして、ブリッジ・オブ・エンパイアを過ぎるとすぐに広場に出る。

直径50メートルくらいの広場。

ところどころ石畳になっているだけの何も無い広場……。

そう、ここは市場予定地。

名前はまだない。

放っておくと、また割と普通なナビーフイユリナ記念市場とかにな

ると思うから、その前に名前を考えておかないといけない……。

「うーん……」

広場を通り過ぎながら名前を考える。

市場か……。

なんだ……。

思いつかない……。

まっ、帰りまでに考えておこつと。

広場をぬけて森の中に入る。

そこは、ちゃんとした道とは呼べないけど、現地の人たちが頻繁に行き来している事もあり、それなりに踏み固められ、道としての機能は最低限確保されている印象だった。

歩きやすい、といつても、そこは深い森の中、ぬかるむ泥溜まりがそこらかしこに点在する。

その泥溜まりを踏まないように避けながら先を急ぐ。

鳥の鳴き声を聞きながら1時間ほど進むと上り坂にさしかかる。

ここは、ヘルファイア・パスの麓。

坂道のおかげか、森の中に日の光が届くようになり、また、地面も乾いたものになっていき、登るたびに歩きやすくなっていった。

そして、数キロほど山道を進むと頂上に到着する。

「よし、休憩だ、各自水分補給を忘れるなよ」

「うーっす」

と、東園寺が休憩を宣言し、みんなが山のような荷物を地面に降ろす。

どのくらい来ただろうか、出発してから2時間ちよつと、15キロくらいだろう……。

そうすると、旅の行程はだいたい半分くらいか……。

「お昼前にはナクス村に着きそうだね」

私はリュックを降ろして、中からペットボトルを取り出す。

それに口をつけながら周囲を見渡す。

木々はまばら……。

大岩がそこら中に転がる殺風景な場所。

遠くからではわからなかったけど、ヘルファイア・パスって禿山だ。

でも、そのおかげで景色は抜群！

私はすぐに水分補給を済ませ、ペットボトルをリュックにしまつて、見晴らしのよさそうな場所を探して周辺の散策をはじめめる。

「おお……」

ラグナロク広場が見える場所を発見。

深い森の中にぽっかりと空いた草原、陽射しを受けて輝き、白く

光って見える……。

その少し奥にも、白く光った広場が見える、ヒンデンブルク広場だ。手前のルビコン川を探すけど、さすがにそれは見つからない。

「もう15キロくらい来たからね……」

そのかわりにこのカルデラ全体が一望出来る。

山々が一周ぐるっと森を囲み、まるで緑色の湖のように見える……。

「ナビー、こっち、ぷーん！」

と、エシユリンが来て、私の手を取りひっぱる。

「うん？」

「こっち、こっち、ぷーん！」

ヘルファイア・パスの反対側に連れていかれる。

「おお……」

こっちは大草原がどこまでも続く、くねくねと伸びる河川がいくつも流れる美しい景色……。

「あそこ、ぷーん！ あそこ、ぷーん！」

と、エシユリンがしきりに指を差す。

その先は……。

「あそこかあ……」

集落がある。

「あそこが、ナスク村？ エシユリンの故郷？」

「そう、ぷーん！」

彼女が飛び上がって喜ぶ。

村に帰れるのが嬉しいのかな？

エシユリンの喜ぶ姿を見てクスリと笑う。

そして、あらためてナスク村を見る。

まだ、距離はあるけど、その村の大きさは見て取れる。

「建物が1000以上はある。」

人口は500といったところか……。

ただ、定住しているわりには、周辺に畑がない。

何で食べてるんだ？

首を傾げる。

「あ、牧畜か……」

広がる大草原を見てつぶやく。

「休憩終了だ、出発するぞー」

と、東園寺の号令が聞える。

「あ、いこー」

「はい、プーン！」

私たちはみんなのところを走っていく。

それから、私たちは山を下りナスク村を目指す。

ひらけた草原に出て、小川を何本か越え、ぬかるむ湿地帯を抜け、歩
く事2時間、ようやく現地の人たちが住む、ナスク村に到着する。

村の前では大勢の人だかりが出来ており私たちを出迎えてくれる。

「ぽ、るつく、ナスク、わ、るって、プーン！」

「ナスク村へようこそ、プーン！」

と、真ん中のおじいさんの言葉をエシユリンが同時通訳してくれ
る。

「ああ、すまない、突然押しかけて」

「いえ、いえ、お待ちしております」

と、東園寺とおじいさんがハグするような感じでお互いの背中を叩
きあう。

「どこか、商売道具を広げられる、広場のような場所はないか？」

「ええ、ええ、ありますとも、こちらにどうぞ、みなさんも」

おじいさんが村の中に手招きする。

ちなみに、これはすべてエシユリンの同時通訳によるやり取りだ。

「いこ、ナビー」

「うん」

木造、からぶき屋根の建物が立ち並ぶ集落、通りは石畳ではなく砂
利が敷き詰められただけの簡素なもの……。

「まあ、想像通りか……」

私たちはナスク村に足を踏み入れる。

第60話 ナスク村

村長らしき、あのおじいさんの先導のもと私たちは村の中を進む。見えるのは、からぶき屋根の民家風の建物のみ……。

商店などは一切なく経済活動を行っている形跡は見当たらない。

「カナートがあるな……」

「ああ、上下水道は完備か……」

と、南条と和泉の会話が聞えてくる。

彼らの言うとおり、通りの真ん中にカナート、水路が設置されている。

赤レンガ造りで、幅は1メートル程度、それが村の中心にむかってゆっくり流れている。

私たちはその水路に沿って進む。

「姫巫女さまあー!」

「おかえりなさい!」

と、子供たちが走ってきた。

「おまえたち!」

エシユリンが両手を広げて子供たちを出迎える。

子供たちの服装は厚手の浴衣って感じ。

「姫巫女さま、いつまでお仕事?」

「うーん、それはね、もう少しよ、みんなそれまでいい子にしているのよ」

と、エシユリンが子供たちの頭をなでながら答える。

それにしても、このやり取りは全部現地の言葉で行われているけど、私も随分聞き取れるようになってきた。

まっ、そうじゃないと、通訳として役に立たないからね。

「さっ、おまえたち、もう戻りなさい、お家のお手伝いちゃんとするのよ」

「はあい、姫巫女さま!」

「お仕事頑張つてね!」

と、エシユリンが笑顔で手を振りながら子供たちを見送る。

「みんなに挨拶とかしてこなくていいの？」

考えてみれば、エシユリンって一ヶ月振りの帰郷だったよね。

「大丈夫、プーン」

「家族とかは？」

「いない、プーン」

「じゃあ、友達とかは？」

「いない、プーン、友達はナビーだけ、プーン」

「プーン……」

文化の違い……、そう言われればそれまでだろうけど、何か、違和感を感じる……。

そうこうするうちに広場に到着する。

「みなさん、こちらを好きなように使ってください」

おじいさんが手で広場を案内する。

広場は直径50メートルほどの円形状、真ん中には水路から水が流れ込む溜池がある。

「すまない、あるじ」

と、私たちは広場の外縁の手頃な街路樹の下に移動して荷物を下ろす。

うん、いいとこだね。

私は麦わら帽子を押さえながら空を見上げる。

雲ひとつない青空、広葉樹の隙間から、きらきらと木漏れ日が無数に降りそそぐ……。

「それじゃ、はじめろぞ」

「ういーっす」

と、管理班の面々が荷をほどき、まずはゴザから敷き始める。

「ハル、ハル、こっちもー」

「はい、はい……」

私も和泉の荷物からみろり色のゴザを取り出して、くるくるっと転がして地面に敷く。

そして、その上に箱を三つほど並べる。

それはひんやり冷たい……。

魔法の力で冷却してあるから。

その箱の中には、雨宮たちが作ってくれた冷凍果物がぎっしりと入っている。

「これは、おいしそう……」

果物の中だけをすりつぶして、それから砂糖水につけて凍らせて作った特製シャーベットだ。

で、冷凍果物を刺す木の串を並べて準備完了。

そして、顔を上げて広場を見渡す。

水汲みをする女性、走り回る子供たち、あとは、遠巻きに私たちのやることを見ている大人の集団……。

「まずは、客寄せからだね……」

すう、と、息を吸い込んで……。

「ラグナロクから参りました、割と普通なナビーフイユリナ記念行商団です！ 異国情緒溢れる、珍しい品々を取り揃えています、お気軽に見ていって下さい！」

と、大きな声で、現地の言葉で宣伝する。

現地の人たちが顔を見合わせる。

大丈夫かな？ 昨日、エシユリンに翻訳してもらったものそのままだから、ちゃんと通じているか心配……。

「な、何があるのかな……」

「こ、これは、何かな……」

と、現地の人たちが集まってくる。

おお……。

通じた。

「ノートとペンです」

「じゃあ、これと交換はどうですか？」

と、基本的に物々交換で取引が行われる。

私たちの通貨、ラグナで取引したいけど、あれは、ラグナロクに行商にくる人たちが魔法のネックレスを購入するために溜め込んでるので使用される事はまずない。

「これは、お菓子ですか……？」

と、クーラーボックスの中の冷凍果物を覗き込みながら年配の女性が尋ねてくる。

「はい、おいしい果物を凍らせたシャーベット、アイスです」
笑顔で答える。

「ひとつくださいな」

と、彼女は1000ラグナ札を差し出す。

おお、意外と流通しているみたい。

「ありがとうございます！」

と、冷凍果物と、おつりの900ラグナを彼女に渡す。

ちなみに、冷凍果物は1個100ラグナ、日本円に換算すると100円相当。

「お、おいしいわ！」

と、冷凍果物を口にした年配の女性が頬に手を当てて言う。

「さっ、子供たちも、これで、あるだけくださいな」

年配の女性が1万ラグナ札を出す。

おお、100個！

「よし、みんなおいで！」

と、1万ラグナを受け取って広場の子供たちを大声で呼ぶ。

「アイス？」

「凍っているの？ 夏なの？！」

「なに、なに？」

子供たちが興味津々で集まってくる。

「ハル、配って、配って、100個売れたから！」

「了解」

と、私と和泉が冷凍果物に串を刺して子供たちに配っていく。

「ありがとう！」

「すごい！ 本当に凍ってる！」

「なにこれ、おいしい！」

広場に子供たちの笑い声がこだまする。

「俺たちにもください」

「こっちも」

と、大人たちにも大繁盛！

300個ほど冷凍果物を持ってきたけど、瞬く間に全部売り切れてしまった。

「暇になった……」

と、クーラーボックスの後片付けをしながらつぶやく。

「これは小物入れ、収納ボックスです」

「では、こちらの織物と交換はどうでしょう？」

「問題ないです、商談成立です」

あちら、管理班のブースではエシユリンの通訳のもと交渉が行われているけど、お客さんもまばら。

まあ、本当の目的は偵察だから、別に売れなくてもいいんだけどね……。

南条、うまくやっているかな……。

彼の姿は広場にはない。

こっそり村の偵察に行っているはず……。

「お姉ちゃん、おいしいね！」

「それは、よかった」

と、広場の中央、溜池の縁に座る姉妹の会話が聞えてくる。

「お姉ちゃんは食べなくていいの？」

「うん、お姉ちゃんはいいいから、リジエンが全部お食べ」

「やったあ！」

年の頃は、妹のほうが小学校低学年くらい、姉のほうは、私と同じくらいかなあ……。

「冷たくておいしい！」

「そう、よかった」

なんか、姉のほうが冷凍果物を物欲しそうに見てるね……。

「よし」

と、私は自分のリュックからお弁当箱を取り出して、おやつ用の冷凍果物に串を刺す。

そして、あの姉妹のほうに走っていく。

「これ、食べて」

と、笑顔で姉のほうに、冷凍果物、黄色い洋ナシを差し出す。

「え？」

「どうぞ」

笑顔で受け取るように促す。

「でも、交換出来るもの何もないです……」

もじもじしながら答える。

「いいよ、いいよ、サービス、余り物だから」

「ほ、本当ですか？ では、お言葉に甘えて……」

おそる、おそる、私の手から冷凍洋ナシを受け取る。

そして、舌を出してペロリとなめる。

「冷たい！ でも、おいしいー！」

彼女が笑顔になった。

「こう、下から食べていくといいよ」

私は身振り手振りで食べ方の説明をする。

「こ、こうですか？」

「こう？」

妹のほうも食べ方を真似る。

「そうそう、とけてきたら、カジカジするの」

「あ、垂れてきたー！」

「なんか、出てきた、甘いのー！」

姉妹は夢中で冷凍洋ナシを食べ続ける。

「ふふっ」

と、私も彼女たちの隣に座る。

ああ、溜池のほとりって涼しい。

風も心地いい、少し汗ばんだ身体をやさしく冷やしてくれる……。

「あと一時間くらいかな……」

ぼんやり、空を見上げながらつぶやく。

あと一時間くらいで行商は終り、それくらいに村を立たないと日没までには帰れない。

「あ、あの、ご馳走様でした、とてもおいしかったです」
姉のほうがちち上がって深々と頭を下げる。

「おいしかったです」

妹のほうも姉の真似をして頭を下げる。

「いいよ、いいよ、それよりお名前は？」

「えっと、この子がリジエンで、私はシユナンです」

「リジエンです」

姉妹が自己紹介してくれる。

二人ともベージュ色の厚手の浴衣って感じの服装。

顔はそうだね、エシユリンと違って黒髪、黒い瞳の彫りの深い目鼻立ちをしている。

なんか、エシユリンと全然違う人種に見えるなあ……。

ラグナロクに来ていた人たちはみんな大人の男性で結構年配の人が多かったから気にもしなかったけど、こうして同じくらいの年頃の少女と比べるとその違いは一目瞭然。

ちよっと、首を傾げてしまう。

「うーん……」

シユナンたちと、あつちで通訳をしているエシユリンを交互に見比べる……。

エシユリンって、この村の出身じゃない？

いや、どうだろうなあ、アルビノって可能性もあるよね、だから、姫巫女なんて呼ばれているのかも……。

「ちよ、ちよっと、やめてくれ！ 誤解だ、俺は何もしていない!!」

と、考え事をしていると、広場の向こう、大通りのほうからそんな叫び声が聞えてきた。

「み、みんな、助けてくれえ!!」

見ると、大通りからこちらに全速力で走ってくるのは、参謀班の南条大河だった。

「あ、あいつ、偵察しているのがばれたのか!？」

そう叫んで立ち上がる。

「な、ナビー、みんなあ!？」

南条の後ろには盛大な砂煙……。

ドドドド、という重低音とともに、砂煙の中から姿を現す……。

騎馬だ。

それも、30騎以上はいる。

「ま、まさかの、大量トレイン……」

私はその光景に息を飲む。

第61話 乱れそめにし

南条大河を先頭にして、30頭以上の騎馬軍団がこちらに殺到してくる。

馬に乗る男たちは皆フル武装、鉄製のプレートアーマーを着用し、腰や背中に武器を携帯している。

「た、助けてくれえ!!」

と、南条が私の目の前までくる。

「な、なんで、追われてるの!?!」

「し、知らない、なんか、絡まれて、それで追い駆けられた!」

あ、そうか、南条は現地の言葉がわからないのか。

「な、なに、お姉ちゃん……?」

「だ、大丈夫よ、リジエン、心配いらないから……」

と、姉のシユナンが妹を抱きしめる。

この子たちから避難させなきや。

「さっ、二人とも危ないからこっちに……」

「きつさまらあ……」

と、姉妹を立たせようと手を差し伸べたところで、そんな野太い声が身近に聞こえてきた。

視線を向けると、すでに騎馬軍団は私たちの目の前まで来ていて、先頭の騎馬に乗る男が手綱を引き、赤いマントをたなびかせていた。

「きつさまらあ……」

そして、馬をなだめるようにその場でぐるぐるとまわりだす。

さらに、騎馬軍団の一部が退路を断つように、溜池を一周回って私たちの背後を突こうとする。

「なんだ、どうした?」

と、東園寺たちが駆けつけ、私たちを庇うように前に立ってくれる。

「ナビー」

和泉が私のうしろに立つ。

「きつさまらあ、最近うろついている、蛮族共と言うのは、悪さをしていたのか?」

先頭の赤マントの男が東園寺を睨みつけながら言う。

「なんと言っているんだ、エシユリン?」

現地の言葉のわからない東園寺はエシユリンに通訳を求める。

「我々はおまえたちを殺しにきた、殺されたくなければ、身ぐるみ全部置いていけ、と言っている、ぷーん」

と、エシユリンが通訳……、うん?

「な、なに!?!」

「こ、こいつら、賊かなんかか!?!」

と、みんなが武器の柄に手をかける。

「な、やるのか、蛮族共!?!」

「武器を持っているぞ!?!」

騎馬軍団もそれを見て、それぞれが武器に手をかける。

「や、やっぱり、やる気だぞ、こいつら、賊だ!!」

「南条、防衛陣いけ!!」

「おーけー、いくぞ!!」

と、いきなり臨戦態勢。

「仕方ない……」

東園寺がロングソードを引き抜こうとする。

「待って、公彦」

その腕を押さえて、剣を引き抜くのを止めさせる。

「ナビーフィユリナ?」

「何かがおかしい、話が食い違っている、私に話しをさせて」

「なに?」

「まかせて」

と、彼の前が出る。

「ねえ、あなたたち何者? 本気で私たちと戦うつもりなの?」

先頭のあの男に尋ねる。

「ふざけるな、戦おうとしているのは貴様らのほうだろう!!」

必死に馬をなだめながら、激昂した表情で叫ぶ。

「戦うつもりなんてないから、私たちはただ、行商に来ているだけだから……」

「うそを言うな、蛮族の小娘め、最近近隣の村々を荒らしまわっている蛮族とは貴様らの事だろう、我々帝国軍にまで救援要請が来ているんだぞ!?!」

帝国？

ちよつと待って、この世界って、そんな帝国が形成されるほど文明水準が高かったの？

エシユリンはそんな事一言もいってなかったけど……。

「ナビーを鉄串に刺して焼き火の上でぐるぐる回して丸焼きにして食ってやる、と言っている、ぷーん」

「な、なに!?!」

「塩コショウたっぷりふってジュージュー焼いてやる、と言っている、ぷーん」

「こ、こいつら、うそだろ……」

え、エシユリン？

私はびっくりしてうしろを振り返る。

みんなが武器に手をかけて、油断なく身構えている。

「やはり、やる気だな、騎士団、抜刀!」

「!?!おお!!」

騎馬軍団が雄叫びとともに剣や槌を引き抜く。

「ナビーの服をひんむいて、毛むしって鉄串に刺してやる、と言っている、ぷーん」

「な、なにい、や、やるぞ!!」

「もう、我慢出来ん、防衛陣いく、アンシャル・アシユル・アレクト、七層光輝の鉄槌、赤き聖衣を纏いし深淵の主!」

みんなが剣を抜き、南条の魔法詠唱が始まる。

「ちよつと待って、話が違う、エシユリン、あいつら、そんな事言っていないよ!?!」

と、両者を手で制止させながら叫ぶ。

「ナビーは馬鹿だから、わかってない、ぷーん、言葉が違う、ぷーん、ナビーが使っているのは、わ、ぱーす語、あの野蛮人共が使っているのは、る、てーす語、全然意味が違う、ぷーん、ニュアンスが違う、ぷー

ん」

にゆ、ニユアンスの違いで、こんなにも意味が変わるの!?

「さあ、ナスクの戦士たちよ、武器を取れ、帝国軍など恐れるに足らず！我々には神の使者、天滅あまほろぼす様方がついている!!」

と、エシユリンの号令に呼応し広場にナスク村の男たちが集まってくる。

その手には剣やくわなど、様々な武器が握られている。

「きつさまらあ、帝国軍に齒向かうというのか、百万紫影軍が相手になるぞ」

「ここは私たちの土地だ、帝国の支配など受けない!!」

「なんだと、蛮族共があ!?!」

でも、エシユリン、ちゃんと帝国つて言っていない?

「あ、あれえ、なんか、わけがわからなくなってきたぞお……」

と、云うのは冗談……。

大体理解した。

私はおもむろにエシユリンに近づいて……。

「な、ナビー、ぷーん?」

そして、彼女の胸倉を掴み、一瞬手前に引いて、エシユリンが踏ん張ったタイミングで大外刈りをしてぶん投げてやる。

「けふつ!?!」

こいつ、最初に会った時もドジツ子プレイでみんなを騙そうとしてたよね?

「けふつ、きゅー、けふつ、きゅー!」

と、背中を打ち付け、苦しそうに地面を転がりまわる。

私は彼女を見下ろし、再度その胸倉を掴みあげる。

そして、顔を近づけ言ってやる。

「めえ……」

と。

また間違えた。

「エシユリン、おまえ、なめてんのか? 戦場に於いて虚偽通訳はその場で射殺なんだよ、死にたいのか?」

「な、ナビー、誤解、ぷーん、誤解、ぷーん！」

彼女は涙目で弁解するけど、おもいつきり、地面に叩き付けてやる。

「けふつ、きゅーー！」

「だから、なめてんのか、おまえ？」

「私たちにも事情がある、ぷーん、一生懸命生きてる、ぷーん、もう帝国には我慢の限界、ぷーん！」

まあ、大方、年貢がきつい、関税がきつい、とか、そんなレベルでしよ？

「だからと言って、虚偽通訳の言い訳にはならない、なにもわからない私たちを騙して、無理矢理帝国軍と戦わせようとした行為は万死に値する」

私は腰から護身用の短刀を取り出して振り上げる。

「な、ナビー、ぷーん!?!」

そして、彼女の顔すれすれに短刀を突き立てる。

「一回だけ、一回だけ許してあげる、次、同じ事をやったら、その時こそ殺してやるから、いいね？」

「ひつ、わかった、ぷーん、エシュリンが間違ってた、ぷーん、ごめんなさい、ぷーん、ナビーは友達、ぷーん」

と、彼女は涙をほろほろ流して謝罪する。

「よし」

その言葉聞いて彼女を解放し、短刀をホルダーに戻しながら立ち上がる。

「みんな、武器はしまつて、通訳が間違っていただけだから」

「だ、大丈夫なのか、ナビー？」

「うん、大丈夫だから、今度は私が話す」

「そ、そうか……」

と、みんなが武器を鞘に収める。

「そつちも、武器はしまつてもらえるかな」

あらためて、騎馬軍団に向き直り、あの先頭の赤マントの男に言う。

「なにい？」

「こちらは武器を収めた、戦う意思はない、武器を抜いたままでは話に

ならない、無礼よ、しまいなさい」
彼の睨みを受け流し静かに話す。

「ふん……」

と、赤マントの男が軽く手を挙げる。

すると、後方にいた騎馬軍団たちが武器を収める。

「あと、そつちも、武器は家に置いてこい！」

ついでに、広場に集まったナスク村の男たちにも声をかける。

彼らは一且顔を見合わせたあと、のろのろと広場から出て行く。

「で、自己紹介がまだだったわね、私はラグナロクの名ビーフィユリ
ナ・ファラウエイ、あなたは？」

その瞬間、馬がいなくなき。

「くっ、どうどう……」

彼が手綱を引いて馬をなだめ、その場で二周、三周とまわる。

「俺か？ 本当に物を知らんやつのような……、おい、セスト、俺様
が誰か、こやつに教えてやれ！」

「はっ！」

と、副官らしき人物が答え、馬を前に出す。

「いいか、小娘、このお方はな、ラインヴァイス帝国、辺境伯、ダイロ
ス・シヤムシエイド様！」

へ、辺境伯、伯爵様……？

「配下……」

は、配下？

「東方辺境方面軍総司令官、エルナン・カルタラ様！」

そ、総司令官？

「配下……」

おい……。

「千騎長、アンバー・エルルム様！」

はいかあ。

「配下……」

やっぱり。

「第四特務部隊、マジョーライ様！」

はいかあ。

「配下……」

はいかあ。

「騎士長、シエイカー・グリウム様であらせられるぞ!!」

「はいかあ……」

はいかあ。

「どうだ、驚いたか、小娘め!」

「はいかあ……」

「ふふふ、驚いて声も出ないようだな……」

あ、自己紹介が終わってる。

だ、誰だっけ、ま、マジョーライ?

「そ、それで、マジョーライさん、あ、あなたたちの目的は……?」

「なっ?! 俺はマジョーライ様ではない、騎士長のシエイカー・グリウムだ!」

「そ、そうそう、シエイカー・グリウムさん……」

でも、聞いた限り、帝国軍って指揮系統がしっかりしてそうね。

第62話 矢風涼静

帝国か……。

非常に厄介だ。

私たちの存在を知れば、支配下に置き、その知識、技術などを利用したいと考えるはず。

「我々辺境守備隊の任務は治安の維持、並びに叛乱の芽を早期に摘み取る事だ、大人しくしていれば、そうそう手出しはせん、帝国はこんな辺境とも呼べないような未開の地に興味はない」

騎士長のシェイカー・グリウムが馬の上から私を見下ろしながら話す。

「それで、貴様らは何者だ、この村の人間ではないな？ さらに奥地の蛮族か？ 帝国の支配が及ぶ地域まで侵入してきて何をするつもりだ？」

彼の顔を見ながら考える。

長い目で見れば、帝国の庇護下に入る事はそれほど悪い事ではない……。

でも、そこまで行くまでに、私たちに苦しい要求をしてくる事は容易に想像出来る……。

「私たちは旅の行商、村から村へと渡り歩く、定住の地を持たぬ者。ここでの商売が終われば、すぐに別の村へと旅にでる。心配しなくても、村々を襲い、略奪行為をする気など毛頭ない、大切な商売相手だからね……」

ここは隠しておいたほうが無難ね。

「ほう、旅の行商か……、最近、奇妙な装飾品が出回っててな、それはなんでも身体を軽くしたり、傷を癒してくれたりする、にわかには信じがたい、魔法のような装飾品らしい……、それを売り歩いているのが、貴様らか？」

チツ……。

人見め、厄介な……。

「いえ、それは私たちとは無関係、あの品物を見ればわかるだろう、工

芸品、日用品を売り歩いているだけだ」

と、広げた商品を手で指し示しながら話す。

「ふむ……」

シエイカー・グリウムがそちらのほうに馬をやり、商品の確認をする。

「そうか……、違うな……、だが、何か情報はないか？ 伯がえらく興味をお持ちになってな、その魔法の装飾品とやらに、そうそう、伯が手に入れた魔法の装飾品はこんな形をしているらしい……」

こちらに戻ってきながら、シエイカー・グリウムが胸元から一枚の紙切れを取り出す。

「これだ、見覚えはないか？」

そして、その紙切れを私に見せる。

そこに描かれているのは、ひし形のネックレス。

そう、人見たち、参謀班が作った魔法のネックレスだ。

「見た事ないわね、知らないわ……」

首を横に振る。

「ほう、知らないとな？ なら、今、貴様が首から下げているものはなんなんだ？ この絵とそっくりではないか？」

うっ？

私はとつさに胸元に手をあてて、ネックレスの所在を確認する。

あっ!?

外に出てる！

な、なんで!?

ああ!?

そ、そうか、エシユリンを投げ飛ばしたりしたときに外に出ちゃったんだ！

「そ、それとは、違うわ、こ、これは、母の形見のネックレスだから……」

しどろもどろに苦しい言い訳をする。

「そうか、母君の形見か……、それは失礼した……、だが……」

と、シエイカー・グリウムが馬を降りる。

「見れば、見るほど、そっくりよのお……」

そして、私に近づきながらつぶやく。

「やはり、同じ物ではないのか？」

さらに、私の胸に顔を近づけて言う……。

「どれ、見せてみる」

おもむろに私の胸に手を伸ばす……。

「私に触るな、下衆」

と、反射的にやつ横つ面に肘鉄をくらわす。

「へげえ!？」

すると、やつのかぶるヘルムがぽーんと空高く飛んでいった。

「へげえ、おげえ、ほほっ!？」

よろよろと何歩よろめく。

ヘルムが脱げてその顔がよく見えるようになった。

短く刈った金髪に日に焼けたちよつと角ばった顔をした好青年つ

て感じの人。

おもったよりも若い、20歳前後だろう。

「き、騎士長!？」

「だ、大丈夫ですか、騎士長!？」

と、他の兵士たちが馬を降り、シェイカー・グリウムに駆け寄る。

「だだ、大丈夫だ、こ、これしき、こむ、こむ、小娘の肘、ななな、こつこつ……」

と、やつが腰から崩れ落ちる。

「こけ、こつこつ……」

「騎士長!？」

「こ、こつこつ……」

そして、他の兵士に両脇を抱え上げられながら、なんとか立ち上がろうとするけど、足に力が入らない。

「み、水、水だ……」

「どうぞ、騎士長!？」

と、シェイカー・グリウムが部下から水筒を受け取り、それを頭からかける。

「くうああ……」

ぶるぶるして、水をひと口飲む。

「な、なんなんだ、あの小娘は……、死ぬかと思った……」

と、彼は部下に手を借りながらなんとか立ち上がる。

「だが、惚れた、小娘、ともに来い、俺様の嫁にしてやる」

な、なに？

「よく見れば、美しい、ふむ、申し分ない……」

と、私の身体をじろじろと見る。

「や、やめて……」

彼の視線から自分の身体を隠す。

な、なんだろ、この身体の奥底から湧き上がるような恐怖は……。

「いやか、小娘？」

「も、もちろん」

「なら、仕方ないな、メイラス!!」

と、にやりと笑ったあとに叫ぶ。

「おう……」

すると、最後尾からのそのそと大男が歩いてくる。

フルプレートヘルムにフルプレートアーマーの大男、手には巨大な

メイスが握られている。

「ふははは、こいつはメイラス、我が帝国が誇る強戦士だ」

とすん、とすん、と歩いてくる、身長は2メートルくらい、佐野よ

り大きいかもしれない。

「今からメイラスと決闘をしてみよう、貴様らも一人だせ、それで白黒をつける、止太刀なしの死闘だ、もし、貴様らが勝てば、今日の一件はすべて水に流してやろう、但し、我々が勝てば、小娘、おまえは今日から俺様の嫁だ、毎日ヒーヒー言わしてやる」

な、なんだ、それ!?

「はやくしろ!!」

「ひい!」

と、私はみんなのもとに逃げ帰る。

「ナビーフイユリナ、どうなった？」

東園寺が尋ねてくる。

「い、いや、それがさあ……、なんか、よくわからないけど、あの大男と二対一の決闘をする事になっちゃった……、それで、勝てば、見逃してくれるんだって……」

「け、決闘……、ナビーが？」

「ううん、誰か一人出してって……」

「つ、強そうだな……」

「誰がやる？」

と、みんなでフルプレートアーマーの大男を見ながら相談する。

「和泉か……？」

「ああ、和泉が一番強え……」

彼に視線が集まる。

「かまわない、俺がやる」

涼しい顔で和泉が言つてのける。

おお、頼もしい、彼ならやってくれる、あんなやつ嫁になるなんて、まっぴらごめんだよ。

「いや、俺がやる……」

と、東園寺が前に出る。

「東園寺？」

「公彦さん？」

「大丈夫ですか？」

みんなが心配する。

でも。東園寺は無言で前に進み出る。

「ほう、おまえが相手か……」

シエイカー・グリウムがにやにやいやらしく笑いながら言う。

「こいつは、強えぞお……、もう50人は殺しているか？　なあ、メイラス？」

「もつとつす、騎士長」

「ほほう……、流石だな、強戦士……」

と、やつらは話しているけど、東園寺には何を言っているかわからなかっただろう。

「公彦」

彼と話をしようと駆け寄る。

「ナビーフイユリナ」

私に気付いた東園寺が顔だけをこちらに向ける。

「ボスとリーダーの違いはなんだと思う？」

「うん？」

「ボスとは後方の安全なところで偉そうにふんぞり返って指図するやつ
の事を言う……、その反対にリーダーは先陣をきって走り仲間を引
き連れていくやつ
の事を言う。俺はな、リーダーであり続けたいんだ
よ、和泉の背中に隠れているわけにはいかないんだよ」

なるほどね……。

「そっか、そういえば、あなたはいつもリーダーだったよね……」

旅客機が墜落したあの日から、あなたはいつでも先頭をきって働いていたよね……。

「さがっている、ナビーフイユリナ」

そして、前を向き、敵を見据えながら静かに言う。

「うん、ぐ武運を……」

徳永の真似して言ってみる。

「ああ……」

私は彼を見送りながら、後方のみんなのところに戻っていく。

「ナビー、心配するな、俺がやつても東園寺がやつても同じだ、勝つよ」
と、和泉が私を落ち着かせるように、軽く微笑みながらそう言うてくれる。

「うん、公彦は強いよね」

彼の背中を頼もしく見る。

「では、死闘を始める、ルールは至ってシンプルだ、どちらかが死ぬまで戦う、それ以上でもそれ以下でもない」

と、シエイカー・グリウムがルールの説明をする。

「それでは、構え!!」

その号令で強戦士のメイラスがメイスを両手で持ち、足を大きく開き腰を深く落としてどっしりと構える。

「公彦？」

一方、東園寺は棒立ちで、メイラスではなく、シエイカー・グリウムのほうを見ている。

ああ!?

そうだ！ 東園寺は現地の言葉がわからないんだった！

「公彦、武器を抜いて、決闘がはじまるよ!!」

「死闘、はじめ!!」

と、私の声とシエイカー・グリウムの声が重なる。

「うおおおおお!!」

そして、メイラスが低い姿勢のまま東園寺目掛けて突進する。

第63話 双炎

強戦士、メイラスの巨体が東園寺に迫る。

その動きは速く、一瞬で間合い詰め、最後の踏み込みで砂煙を巻き上げる。

「き、公彦!？」

それでも、東園寺は動かない。

視線をシエイカー・グリウムに向けたまま。

「うおおおおお!!」

メイラスの巨大なメイスが東園寺の頭上に振り下ろされる。

その瞬間、風がふわりと舞う。

東園寺が左手を上げた瞬間に風が舞った。

勢いよく振り下ろされたメイスのヘッドを手の平で受け、平然とそれを掴む。

「なんだ、もう始まっていたのか?」

東園寺が初めてメイラスに視線を向けて言う。

「ぐお、ぐお、動かん!？」

メイラスが必死にメイスを押ししたり引いたりけど、ぴくりともしない。

「ぐお、ぐおおお!？」

「なんだ、放してほしいのか?」

と、東園寺が押すようにして、掴んでいたメイスを放す。

「うお、うおおお!？」

すると、メイラスがメイスを振り上げた状態になり、そのまま後方に数歩よろける。

「く、くそ、少しはやるようだな」

と、メイラスが構えなおす。

「くそ、くそ……」

棒立ちの東園寺相手にメイラスがじりじりと半円を描きながら横に移動し隙をうかがう。

「くそ、くそ……」

今度はなかなか動かない、時間だけが過ぎていく。

「どうした、メイラス、帝国強戦士の名が泣くぞ?！」

シェイカー・グリウムの怒声が響く。

「くっ、うかつ……、うがあああああ!!」

ついにメイラスが動いた。

一歩、二歩、と間合いを詰め、同時にその巨大なメイスを振り上げる。

そして、三步目、最後の踏み込み、それと同時に東園寺が一步目を踏み出す。

姿勢は低く、腰に帯びた剣、バーサーカー・イン・ザ・ブレードの柄に手をかける。

「うおおおおおお!!」

雄叫びとともに、巨大なメイスが振り下ろされる。

バーサーカー・イン・ザ・ブレードの刀身が見えた瞬間きらりと瞬く。

振り下ろされたメイスの数倍の速度で東園寺の剣が下から払いあげられる。

インパクト。

炸裂する火花と、その直後の鼓膜を貫く甲高い金属音、それと同時に真つ二つに割れたメイスのヘッドが空高く舞う。

二人の関係が逆転する。

東園寺が剣を振り上げた状態で上になり、メイラスがメイスを振り下ろした状態で下になる。

「かつ……」

メイラスが見上げる。

でも、もう空を見る事は出来なかつただろう。

東園寺がバーサーカー・イン・ザ・ブレードを両手に持ち替え、そのまま振り下ろしたからだ。

剣が肩口から入り、フルプレートアーマーがひしゃげ、凄まじいスピードでメイラスの身体が頭から地面に叩きつけられる。

そして僅かな時差のあとに放射状に衝撃波が走り、直後に砂煙が舞

い上がる。

さらに少しすると、細かな金属片がぱらぱらと空から降ってくる……。

それはメイラスが着用していたフルプレートアーマーの破片だった。

「心配するな、峰打ちだ」

と、東園寺がバーサーカー・イン・ザ・ブレードを鞘に収めながら、動かなくなったメイラスを見下ろす。

「さつすが、公彦さん！」

「強え、公彦さん！」

「かつけえ！」

「まあ、東園寺ならあのくらいやるだろう」

みんなが歓声を上げて東園寺に駆け寄る。

「やったあ、公彦、すごい！」

私は両手を広げて彼のもとに走っていく。

「すまん、みんな、ちょっと、かつこつけすぎたか？」

と、東園寺が口の端で笑う。

「あの棒立ちは演出だったのかあ！」

心配したんだぞ！

と、彼の首に抱き着く。

「やめろ、やめろ、ナビーフイユリナ」

首にぶらさがって、ぶらんぶらんする。

「やだ、やめない」

もう目一杯ぶらんぶらんする！

「ははは、こら、こら……」

と、彼が私の背中に手をまわしてぶらんぶらんするのを止めさせる。

「しっかし、すげえな……」

「なんつう巨体だ、佐野よりでかいんじゃないのか？」

「鎧もなんか……」

と、久保田がメイラスの脇腹あたりをコツン、コツンと軽く蹴る。

「きつさまらあ！ 神聖な一対一の決闘に手を出すとは何事かあ!？」
「なんか、シエイカー・グリウムが顔を真っ赤にして騒ぎ出したぞ？」

「な、なんなの？」

「なんて言ってるんだ、ナビー?」

言葉の意味がわからないみんなが私に聞いてくる。

「え、えっと、決闘の邪魔をしたとかどうとか……」

もう、勝負はついているのに、何を言っているんだ、あいつは？

「許せん、騎士団、抜刀!!」

「!!おお!!」

と、シエイカー・グリウムをはじめとした騎馬軍団が武器を引き抜き、天にかざして叫ぶ。

「な、なんだ!？」

「あいつら、武器を抜いたぞ?!」

「決闘に勝ったら、見逃してくれるんじゃないのかよ!？」

みんなが武器に手をかけながら口々に叫ぶ。

「まつ、こうなるよな、最初から約束を守る気なんてなかったんだよ、あいつらは……」

と、和泉が顔を伏せて、騎馬軍団に向かって歩きだす。

「エンベラドラス、殉教者の軍勢、死の絶望が汝を燃え上がらせる……」

魔法の詠唱？

そして、剣の柄に手をかけ、音もなく引き抜く。

「炎を纏え、エゼルキアス双炎爆裂」

和泉の魔法詠唱が終わった瞬間、何かが爆発した。

「うくっ」

私は熱風を感じて、顔を両腕で庇う。

「とりあえず、全員死んどくか、俺は今機嫌が悪いんだ……」

和泉の声が聞こえる……。

おろる、おそる、腕をどけて彼のほうを見る。

「なんだ、あれは……」

細身の剣が真っ赤に燃えている……。

燃えているんだけど、それ以上に火柱が異様……。

刀身から優に10メートル以上は火柱が立ち昇っている……。

「これが何かわかるか？」

と、和泉が軽く炎の剣を振る。

すると、空高く伸びた炎が剣先を追い、鞭のようにしなりながら地面を叩き、その叩かれた地面が勢いよく燃え上がる。

「な、化け物!？」

「ど、どう、どう!!」

「騎士長、騎士長、退却の許可を!!」

「に、人間じゃねえ、に、逃げろ、殺されるぞ!!」

それを見た騎馬軍団が一気に恐慌状態になる。

私から見ても、これはぞつとする……。

「た、退却だ! 退け、退け、退避、退避!!」

と、シェイカー・グリウムが血相を変えて馬に飛び乗る。

「和泉、やめろ、こちらも一旦下がるぞ」

「ちつ、東園寺……」

私たちは10メートルほど後方に下がり、あの倒れている強戦士メイラスを救助する時間をやつらに与える。

「は、早くしろ、殺されるぞ!？」

「そんなやつは置いていけ、帝国の恥さらしが!!」

「置いて帰れるものか、仲間だぞ!？」

と、それでも、メイラスを数人がかりで担いで馬に乗せる。

それにしても、彼らの慌てぶりを見ると、よっぽど魔法が怖かったんだね。

「公彦……」

「ああ、わかっている、心配するな、ナビーフイユリナ」

和泉のあの炎の柱、そして、人見の魔法のネックレス、その二つはすぐに結び付けられてしまおうだろう。

東園寺は魔法の存在を悟らせずにうまく立ち回っていたんだけどね、ぶち壊しだよ……。

「あいつら、攻めてくるかな……」
小さくつぶやく。

「おい、小娘、もう怒ったからな、必ず俺様の嫁にして毎日ヒーヒー言わしてやるからな、朝晩問わずだ、覚悟しておけ!!」

と、最後の捨て台詞のようにシェイカー・グリウムが私に向かって叫ぶ。

……。

何がヒーヒーだ……。

と、私は足元に転がっていた彼のヘルムを足でリフティングして手に取る。

「ふはははは、楽しみだなあ!!」

高笑いしながらやつは走り去っていく。

「忘れ物だ、馬鹿」

と、私は助走をつけて、渾身の力でやつ目掛けてヘルムを投げつける。

「げべっ!?!」

見事にやつの後頭部にヒット。

「あへっ……」

そして、シェイカー・グリウムが馬から転がり落ちる……。

「あ……」

やばい、やり過ぎちゃった……。

「き。騎士長!?!」

「だ、大丈夫ですか、騎士長!?!」

と、副官がシェイカー・グリウムを抱え上げ自分の馬に乗せる。

「くそお、このままでは済まさんからな、化け物どもめえ!!」

「騎士長の敵は必ず討つからなあ!!」

と、今度こそ、彼らはそんな捨て台詞を残して走り去っていく。

「こつちも退却だ、帰るぞ」

「ういっす」

「おーけー、東園寺さん」

と、みんなが急いで帰り支度を始める。

「ナビー、ぷーん？」

うん？

「ナビー、ぷーん……」

なんか、エシユリンが泣きそうな顔をしている。

「ほら、エシユリン、いこー！」

と、手を出す。

「ナビー、ぷーん！」

と、彼女は大喜びで私の手を握る。

「いこー！」

「はい、ぷーん！」

と、二人でみんなのところに走っていく。

第64話 武装中立

日が明けて翌日。

ここ、割と普通なナビーフイユリナ記念会館では、昨日の事件を受けて班長会議が行われている。

もちろん、私もマスコット班の班長として、この班長会議に参加している。

中央に大きな楕円形の白いテーブル、そこに、議長の東園寺公彦を囲むように、各班の班長たちが着席している。

テーブルの上には地図が広げられていた。

これは、昨夜の夜、エシユリンに協力してもらって急ごしらえで作成したものだ。

「ラグナロク広場、そこから、北へ50キロほど進むとテルマカン砂漠がある……」

と、参謀班の班長、人見彰吾が地図を指でなぞりながら位置関係の確認をする。

「テルマカンとは、この世の果て、と云う意味になるだろうか、現地の人々が現世とあの世を繋ぐ境界線と考えている場所だ」

ラグナロクのある直径20キロのカルデラ、その北側に広大な砂漠が広がっている。

「その先は？」

女性班の班長、徳永美衣子が尋ねる。

「詳しくはわかっていない、彼女、エシユリンの話によると、少なくとも数百キロは続いているそうだ……」

「人類未踏の地ってわけね……」

「そうだ、北側には活路を見いだせそうもない、反対に南側は……、ここから30キロほど進むとナスク村があり……」

今度は地図の反対側を指でなぞる。

「向きを変え、南西に進み、細かな集落を過ぎ、200キロほど進むと帝国辺境伯の居城がある」

合計、230キロの位置だね。

「ここには城下町が形成されており、それなりの人口を抱えているよ
うだ、そして、ここからは帝国領、西に1000キロほど進むと、ラ
インヴァイス帝国の帝都がある……、ざっと、簡単に説明するとこん
な感じの位置関係だ」

「つまり、ラグナロクから南、南西方面が人類の支配地域で北側が人類
未踏の地つてわけね、じゃ、東側は？」

徳永が地図を真剣に覗き込む。

「東側……、帝国から見て奥地、辺境地域になる、おそらく、ナスク村
と同じような集落が点在していると思われるが定かではない、厳密に
は帝国領ではないが、彼らの支配域、管理地区はナスク村を東限とし
ている」

「なら、もし、帝国軍が攻めてきたら、私たちは東側に逃げればいいつ
てわけね？」

と、生活班の班長、福井麻美が顔を上げて人見に聞く。

「そういう事だ」

「ラグナロクの放棄は最終手段だ」

東園寺が口を開く。

「ラグナロクの旅客機、ヒンデンブルクの飛行船、この二つを失えば、
日本に帰る手がかりも失われ、我々は永久にこの世界を彷徨う事にな
るだろう」

「じゃあ、どうするの？ 戦うの、彼らと？」

徳永が質問する。

「まだ、戦闘になるとは決まっていない、可能ならば帝国と交渉する」
「甘いよ、東園寺くん、交渉なんてしてくれないよ、絶対、略奪しよう
としてくるよ、だって、普通に考えてそっちのほうが楽だもん」

「そうだな、楽だな、我々が無抵抗ならばな……」

「ある程度は戦うって事だな……」

と、人見が溜息混じりに言う。

「そうだ、やつらに交渉したほうが楽だと思わせたら我々の勝ちだ」

どこの第二次世界大戦よ、それが通用するのは身内、内乱や関係国
相手にだけだよ、全く関係のない他の民族、他の国家の場合はジェノ

サイドに突入する。

「雲行き怪しくなってきた……」

私は誰にも聞えないようにそうつぶやく、コップの水をひと口飲む。

まあ、でも、じゃあ、どうすればいい？ と聞かれたら困るんだけどね、徳永の言う通り、無抵抗ならそのまま蹂躪されるし、かといって戦っても交渉に応じてくれる可能性は極めて低い……。

逃げるのが一番だけど……、東園寺の言う通り、それだと日本に帰る機会は永久に失われる……。

八方塞がりだね、どうするんだろ？

「我々は武装中立を貫く」

非武装中立よりはいいけど、日和見の中立なんて真つ先に叩き潰すのが戦争の常識よ。

「帝国が我々と戦うと言うのなら受けて立つ、交渉をしたいと言うのなら交渉する、我々はあくまでも独立した集団、国家だ」

国家か……。

「そうだな、東園寺、我々には自決権があり、通貨発行権があり、法律施行権がある、その意味では立派な国家だ」

と、人見がかすかに笑う。

「まとめるぞ」

東園寺が立ち上がる。

「戦争の準備を進める、参謀班は全力でヒンデンプルクの飛行船の調査を行い、戦力増強に努めてくれ」

「わかった」

「生活班女子はこれまで通り、男子は管理班とともに、石垣、塹壕の整備を行ってもらおう」

「うん、伝えておく」

「狩猟班もこれまで通り、だが、中立化を進める上でナスク村との売買を制限し最低限の取引だけにする、当然食料調達のものほとんどを自力でまかなう必要がある、これまで以上に狩猟、採集に努めてくれ」

「了解した」

「まあ、死ぬよりはいいんだろうけど……」
小石を蹴る。

なにより、まだ子供なシウスたちが長旅に耐えられるとは思えない。

「そもそも、こんな事になったのは、全部、彰吾とハルのせいだよ、なんなんだ、あいつらは、もつと慎重に行動しろ」

と、小石を蹴りながら悪態をつく。

「くるう！」

牧舎のほうから青い子犬が元気よく走ってきた。

「くるう、くるう！」

それは、もちろん子犬のクルビット。

「クルビット！」

彼が私の足元を走り回る。

「くるう、くるう、くるう！」

そして、大喜びで飛び跳ねてくる。

「わかった、わかった」

と、クルビットを抱えあげる。

「よし、よし……」

「くるう……」

ふわふわの顔に頬ずりをする。

「でも、日に日に重くなっていくよね、もう5キロくらいあるかな？」

と、クルビットの青い瞳を覗き込みながら尋ねてみる。

「くるう」

「そっか、5キロくらいか！」

と、そんな事を話しながら、クルビットを抱っこしながら牧舎のほうに向かう。

「でも、まだ赤ちゃんだなあ……」

「くるう？」

ラグナロクを放棄して旅をするとなると、若干不安なんだよねえ……。

と言っても、置いていいたら確実に死ぬしねえ……。

「うーん……」

「くるう？」

「うーん……」

「くるう？」

「うん、置いて行けないし、そもそも、ここから出て行くつもりもない、
なら、戦うしかないよね」

と、笑顔でクルビットに話す。

「くるう！」

と、クルビットも大喜び。

「私のドラゴン・プレッシャーが火を噴くよ！」

「くるう、くるう！」

クルビットが大喜びで私のほっぺをなめてくる。

「こらあ、くすぐったいってば」

「ぷるるう！」

「めええ！」

「めえええ！」

「びよ、びよ！」

「びよっぴい！」

「びよお！」

牧舎のほうからみんなの声が聞こえてくる。

「みんなあ！」

と、私はみんなのもとへ走っていく。

第65話 陽射しをうけて

オレンジ色のリボンを手に取り、長い金髪のサイドをそれで結う。鏡を見ながらおかしくないかチェック。

「よし」

今度はみろり色のリボンで反対側を結う。

「うん、いい感じ、かわいい」

鏡に映る私は絶世の美少女そのもの。

白く透きとおるような白い肌とほんのりピンク色の柔らかそうな唇。

なによりあれだよな、目。

「私って、こんな目だったっけ？」

大きなキラキラとした水色の瞳、愛嬌のある、楽しげな、幸せそうな目をしている。

「もう、目だけで笑ってるよ」

クスツ、と、口元もほころんでしまう。

「そんな事より、髪型……」

左右を交互に見比べる。

これは、ツインテールのように髪を全部結うのではなく、適当に髪を一掴みして結う、ツーサイドアップとかいう髪型らしい。

全部まとめると背中が寂しいので、邪魔な顔にかかるサイドだけ結って、うしろはそのまま流すようにしてある。

「ちよつと、結び過ぎたかな、おでこがでちゃってる……」

前髪をなでなでして隠そうとする……。

「駄目だ、隠れない……、まっ、いっかー！」

と、私はスタンドミラーを机の引き出しに片付けて立ち上がる。

そして、茶色のカーディガンを羽織ってロッジをあとする。

陽射しは相変わらず強い。

「暑いー！」

カーディガンを着ているから尚暑い！

でも、気にしないで中央広場までダッシュユ！

「みんなあー！」

中央広場にいる、狩猟班のみんなを見つけて、大きく手を振りながら駆けていく。

「ナビー、こつちだよおー！」

と、夏目翼が手を振り返してくれる。

「おまたせ、みんな！」

到着！

「お、かわいい髪型してるな、ナビー？」

と、秋葉蒼が私の頭を覗き込んでくる。

「ふふん、かわいいでしょ」

腰に手を当てて自慢げにポーズをとる。

「うん、かわいいね」

和泉春月もそれに加わる。

「ツインテール……？ うなじも見えててかわいいね」

「や、やめろ、見るな、恥ずかしい……」

と、私は頭のとっぺんを両手で隠す。

「え？」

「うん？」

でも、やっぱり結い過ぎたかな、おでこも恥ずかしいし、次やる時はもう少し、少な目にしよつと。

「それじゃ、いこっか」

と、笹雪めぐみが足元のリュックを持ち上げ、それを背負いながら言う。

「おーけー」

「ういっす」

みんなも同じように荷物を担いだり背負ったりする。

女子の荷物はバケツとかスコップとかロープとかそんなのばかりだけど、男子は弓とか槍を担いでいる。

「よーし、今日は奥まで行ってみるぞおー！」

と、秋葉が元気よく先頭を歩きます。

「おおー！」

私は拳を突き上げてそのあとに続く。

そう、これから男女合同で食料の調達に行く。

女子は野菜とか果物の採集。

男子は猪とか鹿狩り。

の、適した場所の調査。

だから、今日は遠足みたいなもので、収穫がなくても別に構わない。

かなり奥地まで行く予定だから、服装もみんな長袖長ズボン、深い

森の中を進むので帽子はなし。

先頭を歩く秋葉が森の中に入っていく。

方角は東のほう。

そうそう、もし、帝国の侵攻が激しかった場合、ラグナロクを放棄して東のほうに逃げるから、その調査も兼ねている。

ちなみに、ここまでの話は狩猟班の話であってマスコット班の私には関係ない……。

私には別の目的がある……。

「ふふふ……、それはね……」

それにしても、秋葉の担いでいる弓の形状がおかしいんだけど……。

なんていうか、弓が二本……、十字に合わさったような形状、当然、弦も二本ある……。

「ねえ、蒼……、その弓矢、どうなっているの……？」

「お？ ナビー、よくぞ聞いてくれたな」

と、秋葉が弓を手に取り構えてみせる。

「これは、二段弓だ」

「に、二段弓……？」

「そうだ、これを見ろ、ナビー」

彼が弓筒から矢を二本取り出し弦に番える。

「同時に二本の矢が撃てる」

あ、あほだろ……。

「まっ、俺はまだ二段が精一杯だけど……」

と、秋葉が弓矢をしまいながら話す。

「ハルはもつとすごいぞ、何しろ四段弓だからな」
うしろを歩く和泉を見ながらにやりと笑う。

「よ、四段弓!?!」

びつくりして、私も振り返る。

「はは……」

と、和泉が照れ笑いしている……。けど、確かに彼の持つ弓は四段……。縦横に加えて、斜めに一本ずつ、計四つの弓が組み合わされたような形状をしている……。

な、なんだなんだ、こいつらは、大道芸人か……。

まあ、いいや……。

話を戻して、私が狩猟班の調査に同行する理由、それは、8月7日の七夕に備えて、短冊を飾るための竹とか笹とか、それに近いようなものがないか探すためだ。

割と普通なナビーフイユリナ記念タワーから色々探してみたけど、それっぽいのが東のほうに生えているような気がするんだよね。

なので、それが本当に使えるかどうか、直接見に行つて確認する事にした。

「楽しみだなあ、七夕あ」

と、思わず声に出てしまう。

「うん、そうだね、ナビー」

「東園寺たちが屋台とか計画してるらしいよ?」

「聞いた、聞いた、焼きソバとかやるらしいね」

「夏目や笹雪、雨宮が話しに乗ってくれる。」

「や、焼きソバ!?! じゃあ、たこ焼きも!?!」

「あはは、ナビー、それは無理だよ、たこがないよ」

「ええ……、残念……」

「残念がる必要はないぞ、ナビー、出来るだけ祭りっぽくする、金魚……。メダカすくいととか、射的とか、色々考えているんだから」と、先頭を歩く秋葉が話してくれる。

「そうそう、人見と花火みたいな事も出来ないか検討している」

「あと、りんご飴も」

「浴衣とお面とりんご飴……、かわいい、絶対かわいいよ、ナビー」などと、七夕の話に花を咲かせながら、私たちは深い森の中を進む。深い森の中といっても、それなりに明るい。

広葉樹の葉の間から光の筋、薄明光線が幾重にも差し込む。

そして、森の中も単調ではなく、木々にもそれぞれ特徴がある。

落ちている岩石や地盤の固さの違いなどで木々たちの形が変わり、それぞれが個性を主張する。

しばらく歩くと、少しひらけた場所に出た。

「今日はこの辺かな……」

と、秋葉が荷物を下ろしながら言う。

そこは木々もまばら。

地面は土ではなく砂利、さらに大小様々な石や岩などが点在している。

印象で言えば、川、水の干上がった河川って感じだった。

「どのくらい来たあ？」

と、笹雪も荷物を下ろしながら尋ねる。

「5キロくらいかなあ、ラグナロクと山のちょうど中間くらい」

「そんなものかあ……」

まあ、そんなものだね、1時間も歩いてないし。

「暑いー！」

と、私も羽織っていた茶色のカーディガンを脱いで、その辺の大岩の上に放り投げる。

「ナビー、帰る時忘れないのよ」

「大丈夫、大丈夫！」

とりあえず、ここには何があるのかなあ……。

私はそこら辺の石をひっくり返して、その裏側を覗き込む……。

「うわあ……」

と、すぐに石を元の場所に戻す。

「そ、そんな事より、竹、笹……」

「立ち上がって周囲を見渡す。」

深い森の中とは違って自生している広葉樹はすべて幹の細い若

木って感じのものばかり。

「干上がってそれほど時間が経ってないね」

砂利も角の取れた丸っこいのばかり。

元河川敷、その印象そのままに、砂利とまばらな若木が続く道がくねくねと伸びている。

幅は、だいたい30メートルくらいある、それがずっと先まで続いている。

「とりあえず、ここをベースにして、その周辺の探索からはじめよう」

「おう」

「みんな、あんまり森の中に入らないでね、迷子になっちゃうから」
「了解」

と、みんなの話し声が聞える。

夏目は森の中に入ると迷子になっちゃうとか言っているけど、慣れてくると案外迷子にならないんだよね。

木々には一つひとつ特徴があるし、その枝の伸び方でも方角がわかる。

だから、注意して見ていけば、よっぽどの事がない限り道に迷う事はない。

「いやな予感がするなあ……」

と、私はまだ背の低い広葉樹の若木の枝を掴んで揺らす。

「遠くから見えた竹っぽいのってこれだったんじゃないのかなあ……」

若木の葉は森の広葉樹たちよりも薄い黄緑色をしていた。

ちようど、竹とか笹っぽい色合い……。

「うーん……」

若木を見上げて目を細める……。

「いや、ちよつと待てよ、葉が小さくて、なんか竹っぽく見えない？」
と、目を細めながら、そのままうしろに下がっていく。

「おおっ……」

葉の垂れ下がり具合とか枝単体で見るとすごく竹っぽいよ！

「お、おおっ……」

もつと目を細めて、さらにうしろに下がっていく。

「おお!？」

なんか、バランスを崩した。

「ひっ!？」

腕をぐるぐるまわしてバランスをとろうとするけど、だんだんうしろに倒れていく。

「きゃあ!？」

な、なにこれ、じやらじやらと砂利が崩れていくよ!

「ナビー!？」

夏目が異変に気付いてこちらに走ってくる。

「っ、つばさあー!」

でも、私は大量の砂利に飲み込まれように、うしろに転倒する。

「な、ナビー!？」

「きゃ、つばさ、助けてー!」

そして、そのまま何度も後転しながら下に転がり落ちていく。

第66話　フィユたん

何メートル転がり落ちただろう。

2、30メートルといったところだろうか……。

「いたーい」

じゃらじゃらと丸っこい砂利の中で身体を起こす。

「なんなのこころは、いったい……」

と、私は肘や膝などについた細かな砂利を払い落としながら辺りを見渡す。

そこは薄暗いけど、暗闇というほどではなかった。

グレーの砂利が敷き詰められた空間、トンネル……。

「ではない」

空を覆っているのは広葉樹の若木たち、それが日の光を遮ってトンネルのような感じになっていた。

「騙された」

そう、騙された。

そこには生えていたのは普通の広葉樹ではない。

剥き出しの根、その根が高く伸び、地上まで届き、そして、地上からは普通の幹となり枝を伸ばす。

「普通に木が生えていると思ったら、実は下が空洞になっていたのね……」

たぶん、あれ、地面がもろくて、雨などの浸食で崩れていつて出来上がった空間だと思う。

「ナビー!!」

「大丈夫か、返事をしろ、ナビー!!」

と、上からみんなの声が聞こえてくる。

「みんなあ!!」

私は上を見上げながら返事をする。

「お、怪我はなかったか、ナビー!？」

「大丈夫だよお、ちよつと、肘とか膝を擦りむいただけえ!!」

「よかった、今助けにいくからな!!」

と、みんなが下に降りようとしているのか、勢いよく砂利が崩れ落ちてきた。

「きゃっ!?!」

私は崩れてくる砂利を回避しようと、数歩あどずさる。

「崩れるな、降りたら登れなくなるんじゃないのか?」

「ああ、ちよつと危ないな、佐野、ロープを持ってきてくれ」

「うい」

と、みんなが話している。

「ナビー、大丈夫だよ、危ない事ないよね!?!」

「助けに行くまで時間かかるかもしれないから、安全なところで休んで!!」

「うん、わかったあ!!」

返事を返して、さらに数歩さがる。

「うーん?」

数歩さがると、足元に何か落ちている事に気付く。

「うーん……?」

目を凝らしてそれを見る……。

「写真……?」

そう、写真のようなものが落ちていた。

私はしゃがんでそれを見る。

「うーん……?」

そして、それを人差し指と親指でつまんで拾い上げ、目線の位置まで持ってくる。

「うそ……」

それを見た瞬間凍りつく。

その写真に写っていたのは私……、ナビーフィユリナ・フアラウエ
イ……。

「なに、これ……?」

そこには大きなケーキの前に嬉しそうな顔で座っている私が写し出されていた。

「フィユたん……?」

ケーキにはそう書かれている……。

「あ……」

フィユたん……、フィユリナ……、私の事か……。
思い出した。

あの私が最初に身につけていた名札。

そこにはナビーフイユリナ・ファラウェイって書いてあったけど、
なんか窮屈な書き方だった。

あれは最初にフィユリナ・ファラウェイって書いて、そのあとにナ
ビーって上に書き足したから、あんなに窮屈な形になったんだ。

「私の名前はナビーフイユリナ・ファラウェイが正式な名前
なんだ……」

じゃあ、ナビーフって、どういう意味……？

「なんて、疑問はどうでもいい！」

問題は名前なんかじゃない！

「この身体って、別の持ち主がいたの!？」

って、こと！

いや、まあ、最初はそうかなあ、と思ったりもしたけど、よくよく
考えると、魂だけ入れ替わる事なんてないよ、なんか、違う世界に転
移した影響で、武地京哉の身体が変異して、ナビーフイユリナの身体
になったんだって思うようになっていた。

そう、この身体は武地京哉で、見た目が違うだけなんだって……。
だけど、こうして、私の身体の過去の写真が出てきて、ハンマーで
殴られたかのような衝撃を受けている……。

「誰なんだよ、このフィユたんって……」

写真の中で無邪気に笑う私を見てつぶやく。

「うん？」

なんか、よく見ると、この写真だけではなく、そこら辺に色々な荷
物が散乱しているぞ？

「ノート？」

その一つを拾ってみる。

それはうさぎのイラストが描かれた小さなメモ帳……。

「フィユたん……」

名前の欄にはそう書かれている……。

「何者なんだ、フィユたんって……」

さらに、よく見ると、衣類なども落ちている。

「サイズ的に私のものだ……」

一つひとつ手に取ってサイズを確かめていく。

「なんで、私の物がこんななままとまって落ちているのよ……、あ……」
その謎はすぐに解ける。

剥き出しの広葉樹の根つこのところに赤いアタッシユケースが引っかかっている、それが開いていて中身を全部ぶちまけていた。

「ふう……」

これ全部私のか……。

「ちよつと冷静になろう……」

額に手を当て目を瞑る。

これがみんなに見つかったらどうなる？

心配事はそれ。

たぶん、身分証とか全部ある。

私……、違う、この身体の持ち主、フィユリナ・ファラウェイがどこの誰かってすべてわかっちゃう……。

でも、私は記憶喪失って設定なんだから、それはそれで別に構わないはず……。

「駄目だ、何か見落としがあるかもしれない……」

憶えてないけど、この二ヶ月ちよつと、みんなと色々な話をした、そこから、整合性の取れない話が出てきて、それをきつかけとして、私がハイジャック犯の武地京哉だっばれてしまう可能性だっばある。

「もっと冷静になればよ、パーフェクトソルジャー……」

これはチャンスだろ。

「よし」

私は目を開ける。

そして、駆け出して元の場所に戻り、

「みんなあー！ ここは危ないよ、砂利が崩れて、もっと下のほうまで落

ちそうになっているよ!!」

と、デタラメな事を叫ぶ。

「え、マジ!？」

「ナビーは大丈夫なの!？」

「危ないから下がっている、ナビー!!」

「うん、逃げるね!!」

さらに、奥のほうに走っていく。

「みんなあ！ 安全に降りられそうなどこ探すね!!」

と、どんどん奥のほうに走っていく。

「みんなあ、こつちだよお!!」

奥のほうでみんなを呼ぶ。

「どつちだよ!？」

「どこ、ナビー!？」

「ここだよお!!」

「ここか!？」

と、さっきの場所よりも坂が急で岳も高い場所にみんなを誘導する。

「ここだったら、砂利も少なくて地面も固いから安全だよ!!」

「わかった、ロープを継ぎ足して、なんとか下まで降りてみる!!」

「また砂利が崩れるかもしれない、ナビーは危ないから下がっている!!」

「うん、お願いね!!」

よし、これで時間は稼げた。

私は方向転換して、荷物が散乱していた場所に向かって全速力で駆けっていく。

「とおりゃあー!」

と、そのままおもいつきりジャンプして、木にひっかかっているアタッシュケースを掴んで回収する。

「よしー!」

それを放り投げて、次は地面に散乱している荷物類の回収をはじめ

衣類、タオル類、お風呂セット……、それらをアタツシユケースのほうに掴んでは投げ、掴んでは投げを繰り返す。

「おお、下着もある」

と、それを手に取って広げてみる。

「うーん……」

赤いリボンのついた白いやつ。

正直、下着が全然なくて困ってたんだよねえ……。

でも……。

「気持ち悪い」

下着をぐるぐる回して、ブーメランのようにアタツシユケースのほうに投げる。

気持ち悪いよね、他人のはいたパンツなんて。

例え、この身体が以前に使っていたものであつたとしても、なんか、気持ち悪い。

「タオルくらいなら……」

と、くまのイラストが描かれたバスタオルを広げてみるけど……。

「フィユたん」

しつかり、そう刺繍で入っている……。

まるめて、ぽい！

「よし、これで最後っとー！」

コスメセットが入った小さなポーチを投げて回収を終える。

「次はー」

と、アタツシユケースのところに戻って、穴を掘り出す。

砂利の地面はもろく掘りやすい。

魔法、ゴッドハンドで手を保護しているからだろうけど、サクサク掘り進んでいける。

「それにしても……」

横目できつきの写真をちらりと見る。

「いい笑顔だけど、なんか、私じゃないみたい……」

普段、鏡で見る私とは全然違う。

表情の作り方が違う。

なにより、目が笑ってない、無理にほっぺとか使って笑わせている感じ。

こんなんじゃ、かわいくない。

なんにもわかってないよ、この子は……。

「かわいいとはなんぞや？　って、問い詰めたい……」

自然な笑顔、内面から湧き出るような笑顔が大切なよ。

「そう、こんな感じ」

と、笑顔を作ってみせる。

楽しそう、それを全面に押し出しつつ、隠し味で幸せそうをプラスする、その幸せそうの加減がポイントなのよ。

「ふっ、あなたとはレベルが違うのよ、フィユたん……」

なんて事を考えている間に穴掘り完了！

第67話 灰の中のエビデンス

まず赤いアタッシュケースを穴の底に置き、その中に写真や身分証、ノートなどを放り込んでいく。

一応、何かで使うかもしれないから、これらの保存状態はよくしておきたい。

「ケースを閉じて……」

パチン、パチンとロックをして、その上や横などに衣類やタオルなどを詰めていく。

「よし……」

最後に埋め戻し。

「砂利の前に土を入れて……」

そして、その上に白やグレー、比較的乾いた砂利で覆っていく……。で、今更だけど、気付いちやっただよね……。

ここ窪地って言うのかな、谷間って言うのかな、まあ、なんでもいや、これってどうやって出来たんだろうね……。

最初は雨の浸食や地下水脈で出来たと思っていただけ、このカルデラって雨が降らなくて水不足なんだよね……。

色々探してみたけど、あの小さなルビコン川以外に川らしい川がない、ここも元は河川敷だったと思うけど、水はかれている……。

じゃあ、水の浸食以外でこういった谷間が出来るには、どういうケースが考えられるかなあ……。

地殻変動？

なわけない。

じゃあ、風？

それも、現実的じゃない……。

じゃあ、何が考えられるかなあ……。

私は砂利をならしていた手を止める。

「何らかの生物の営み……」

こうやって、しゃがんで視線を低くして、はじめて気付ける。

地面と壁、その境界線に隙間が出来ている。

高さ10センチくらいの隙間。

そして、その隙間の手前が少し黒くなっている。おそらく、それは水分、地面が湿っているのだ。あきらかに何者かが埋め戻したあと……。

「誰が……?」

決まっている……。

ここは何らかの生物の巣、その主が埋め戻したのだ。

カサカサ、カサカサ、つて変な音が隙間からもれ聞えてくる。

「やばい……」

私はゆっくりと、そつと立ち上がる。

カサカサ、カサカサ……。

その音を聞いて、背中がゾクゾクつてする……。

「む、虫だ……、それも、結構大きい……」

この谷間の縁の崩れやすさ……、そう、これは大きなアリ地獄だ……。

「ひっひひひひ!!」

なんか出て来た!

隙間からおつきな虫が出て来た!

「キリキリキリ、ギー、ギー……」

セミ!

おつきなセミだ!

体長1メートルくらいある!

真つ赤複眼が私を見てるよ!

「キリキリキリキリッ」

つて、羽を震わせて、歯をギリギリさせてる!

お口もおつきくて、ネバネバしてるよ!

「いっひひひひひひひ!!」

もう、本能的に、身体が勝手に走り出していた。

「たたた、たす、たす、たっすうううう!!」

と、私はみんなが準備しているだろう、崖の下に行つて必死に助けを求め。

「たったった、たったった!!」

私は助けを待っていられなくて、崖をよじ登ろうとするけど駄目、砂利がもろくてすぐに滑り落ちてしまう。

「どうした、ナビー、何があった!？」

「怪我したの、ナビー!？」

「大丈夫、ナビー!？」

なんなのあれ、なんなのあれ!？」

全身総毛立つと云うか、鳥肌が立つと云うか、とにかくやばい!

「むむむ、虫いる! それもおつきな虫! こわい、早く助けて!!」

「ははは、ナビーは虫が怖いのかあ、かわいいなあ」

「もう、驚かせないでよ、ナビー……」

「うん、熊とか狼が出たのかと思ったよ」

な、なにに!？」

「だ、だから、本当におつきいんだよ、うそじゃないってば!!」

「ははは、大げさだなあ、ナビーも」

「虫は黒いものに寄ってくるから、黒いものは外しておくんだよお」

「スズメバチとかだったら危ないから、木の陰に隠れてなさい」

ええっ!？」

「キリキリキリキリ……」

「ひいひい!？」

と、壁を背負って、少しでも高いところに逃げようと足をじたばたさせる。

駄目だ、砂利がじゃらじゃらと崩れて登れない!

「キリキリキリキリキリキリキリキリ……」

ああ、甲高いキリキリ音で耳がキーンと鳴ってきた!

と、その時、遠くで砂利が崩れ落ちるような音がした。

「キリッ」

巨大な虫がそちらに反応する。

何かあつちで落ちたみたい。

「な、今度は、なに……?？」

と、目を凝らして見てみると、そこには小さな哺乳類、茶色い……、

鹿みたいな生き物がいた。

たぶん、落ちたんだろう、その場にうずくまっている。

「みーん……」

鹿のような生き物がか細く鳴いた……。

みーん？ セミ……？

あっちもセミなの!?

「キリキリキリキリ……」

と、興味を惹かれたのか、巨大なセミのような虫がそちらに身体の向きを変える。

「みーん……」

足をぶるぶると震わせながら鹿が立ち上がろうとする……。

でも、立ち上がれない、足を怪我したのか、すぐにその場にうずくまってしまう。

「キリキリキリキリ……」

巨大な虫が鹿に向かっていく。

あの鹿が囿になってくれている……、これはチャンス。

「み、みんなあ！ 早くロープおろしてえ!!」

と、上を向いて、大きな声で叫ぶ。

「わかった、今おろす、待ってる、ナビー!!」

「佐野、準備はいいか、しっかり結んだか!?!」

「ういっす」

「もうちよつとだ、ナビー!!」

よし、大丈夫、虫は鹿に夢中だ、私には興味を無くしたみたい……。

私は油断なく巨大な虫の動向を注視する。

「みーん……」

ぶるぶる、ぶるぶる、と、鹿は何度も立ち上がろうとするけど、すぐにへたり込んでしまう。

「立ち上がって、あっちに逃げて行って欲しいけど……」

駄目だね、立ち上がれない……。

「みーん……」

巨大な虫が鹿に迫る……。

「くっ……」

かわいそうだけど、助けてあげられない……。

私は目を背ける。

「みーん！」

その時、そんな大きな鳴き声でした……。

やられたか……。

私は視線をそちらに戻す。

「あ、あれ……う？」

巨大な虫がひっくりかえって、足をカサカサさせている……。

「みーん……」

「みーん」

うずくまっている鹿の隣にもう一つ、身体が二回りくらい大きな鹿がいた。

「親鹿？　じゃあ、あっちは小鹿？」

親鹿が小鹿のほほあたりを舐める。

「みーん……」

今度はおしりのあたりを鼻でつつく。

たぶん、立ち上がるように促しているんだと思う。

「みーん……」

でも、立ち上がれない……。

「キリキリキリキリ……」

ひっくり返っていた巨大な虫が反転して元の姿勢に戻る。

「みーん」

それに気付いた親鹿が小鹿を守るようにその前に立ちはだかる。

「た、戦う気……う？」

大きさは鹿と虫、同じくらいみえる……、けど、どう見ても、虫のほうが強そうだよ。

なにより、あの黒光りした外骨格は鹿の攻撃じゃどうにもならない。

「キリキリキリキリ……」

「みーん！」

と、親鹿が巨大な虫の赤い複眼目がけて勢いよく頭突きをして突き飛ばす。

「カサカサカサ……」

虫はまたひっくり返る。

「ナビー、掴め!!」

と、上からロープがおりてきた。

「ふう、間に合った……」

ほっと胸を撫で下ろし、おりてきたロープを掴む。

「ナビー、ロープを身体に巻いて、こっちで引き上げるから!!」

「うん、わかったあ!!」

と、身体にロープを回して、二周、三周して結んで固定しようとする。

「みーん!」

「キリキリキリキリ……」

巨大な虫が親鹿の頭突きをかわす。

「みーん!」

「キリキリキリキリ……」

また頭突きをかわす。

「みーん!」

「キリキリキリキリ……」

どんなに頭突きを繰り返しても、巨大な虫は器用にそれをかわす……。

「ああ、そういう事か……」

夢中で頭突きをする親鹿は知らず、知らずのうちに小鹿から引き離されていつていた。

巨大な虫は距離を取りつつも、半円を描き、親鹿と小鹿の間に割って入るような位置を取ろうとする。

「あいつ、小鹿を狙っているんだね……」

虫って、そんなに頭良かったんだ?

私は身体に巻いていたロープをほどき、その場に投げ捨てる。

なんか、現金なもので、あの虫に多少なりとも知性があるとわかっ

たら、急に恐怖が消えていった。

「アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、パビロンレイ静寂の風盾」

思考が読める。

それは重要な事で、それによって相手の行動の絞り込みが出来るようになる。

絞り込めれば、あとは作業的に戦闘を進めていけばいいだけ……。

負ける要素が完全になくなった。

「ナビー、どうした、早くしろ!!」

「どうしたの、ナビー!?!」

なんて、みんな言っているけど、返事をしている余裕はない……。

もう巨大な虫が親鹿よりも小鹿の近くにいる。

たぶん、次のタイミング。

親鹿が頭突きをしたタイミングで小鹿をあつ壁と地面の隙間に引きずり込もうとするはずだ。

「みーんー!」

私は瞬間的に地面を蹴る。

巨大な虫は親鹿の頭突きをかわし、その足で小鹿に襲い掛かる。

でも……。

私は姿勢を低くし、地面に鼻をかすめる低さで最高速で駆け抜ける。

「キリキリキリキリ……」

やつの直前で上半身を起こし、両腕を広げて飛び上がる。

「こんのやろうお!!」

そして、上空から両足のかかどを使い、渾身の力でやつの複眼を踏み抜く。

第68話 カチューシャ

グシャリ、と、巨大な虫の複眼が潰れ、体液が飛び散る。足がめりこむ……。

でも、そんな事は予想済み、つま先は複眼ではなく、その外側の外骨格部分にかかっている。

私は身体を前方に倒し、つま先に力を入れて前方に倒れるようにして離脱する。

じやらじやらと砂利の地面を三回転ほどして片膝たちになる。

やつは私の後方……。

「当然、反撃してくるよね、知能があるのなら……」

私は片膝立ちの状態から、そのまま真上に飛び上がり、棒高飛びの背面飛びのような姿勢になる。

その瞬間、巨大な虫が私の身体の下すれすれを通過する。

「やっぱり」

口の端で笑ってしまう。

身体は仰向けのまま上昇を続け、やがてその上昇もとまり空中で制止する瞬間が訪れる。

「ああ、少し青空が見えるね……」

広葉樹の若木の隙間から青空が覗き、それと同時に太陽の光も私の頬にあたる。

両手を広げて落下に備える。

手の平は右手が下、左手が上……。

「ポストストール機動クルビット」

身体が横向きなる動きをはじめた瞬間に右手の手の平も上に向け
る。

「アドバース・ヨー」

それまでとは逆の回転が加わり、身体が外に弾き飛ばされるように、くるくると横回転しながら高速で落下をはじめめる。

巨大な虫は私の身体から随分離れたところを上に向かって飛び跳ねていく。

「ふつ、ちよつとでも考えちゃうと、そのタイミングで攻撃しちゃうよね?」

と、私は三点着地する。

で、着地したところは、狙った通りにあの小鹿の近く。

「みーん……」

小鹿が不安そうに、弱々しくか細く鳴く。

「よし、よし、心配いらないよ、私が守ってあげるからね」

と、目で笑い、小鹿の頭を手の甲で触れるか触れない程度の強さで優しくなでる。

「みーん……」

小鹿が私の目を見つめる。

「うん」

と、満面の笑みで答える。

「キリキリキリキリ……」

いつの間にか、あの巨大な虫がこっちに向かってきていた。

「キリキリ、キキ、キキ、ガリガリガリ……」

不快な音、歯をかみ合わせる音かな……?

ブン。

羽音、それと同時に私たちに襲い掛かる。

「あれ? 何か忘れてない、虫さん?」

「みーん!」

親鹿が横から巨大な虫の複眼に頭突きをくらわす。

巨大な虫は突き飛ばされ二転、三転しながら吹っ飛ばされる。

私は斜め前に一步踏みだし、足を振り上げ、思いつきりその顎を蹴り上げる。

歯がろうか、外骨格だろうか、白と黒の破片が無数に飛び散る。

「親鹿、ナイス、アシスト」

と、親鹿に向かって親指を立てる。

「みーん!」

言葉が通じたのか、前足で地面をかきながら返事を返してくれる。カサカサ、カサカサ、と、虫はひっくり返りながらもがく。

「ガリ、ガリ……」

やがて、足の動きが鈍くなる。

「それにしても、こんな巨大な虫、はじめて見た……」

私は遠巻きに巨大な虫の周囲を歩き、その姿をつぶさに観察する。

普通の虫だね、姿かたちは……。

「ガリ、ガリ、ガリ……」

完全に足の動きは止まり、口からそんな歯軋りのような音がするけど、その音量は非常に小さいものだった。

顎、歯を破壊したからね。

虫の習性を考えると、ああやって、歯軋りをして仲間を呼ぼうとするからね、最優先で顎と歯を狙わせてもらった。

「もう、仲間なんて呼べないよ……」

ちなみに、虫が仲間を呼ぼうとする時って、バチン、バチンつてもの凄い音がするんだよね。

「ガリ……、ガリ……」

その音も次第になくなっていく。

終りかな……。

私はきびすを返し、うずくまっている小鹿のもとに向かう。

「大丈夫？」

そして、しゃがんで、目線をあわせて尋ねる。

「みーん……」

元気ない……。

「みーん……」

「うーん、困った……」

夏目とか笹雪の治癒魔法ってどうだったかな？

一回ラグナロクに戻って、綾原か海老名を連れて来たほうがいいかな？

と、私は思案しながら立ち上がる。

そして、振り向いて、もう一度あの巨大な虫を確認しようとする……。

「近寄るな！」

親鹿が巨大な虫に近づいて、その足あたりの匂いを嗅いでいた。
「すぐに離れろ！」

そう叫んだ時にはもう遅かった。
親鹿の頭がなくなった。

虫は死んでいても動く、神経さえ生きていれば反射で動く、親鹿の鼻が虫の足に触れた瞬間に反応しその首を切り落とした。

「あ、ああ……」
ばたりと親鹿が倒れる……。

「みーん……」
「小鹿がみなしごになっちゃった……」

「みーん……」
親鹿を呼ぶ小鹿の鳴き声がむなしくに響く。

「ごめんね、お母さん、守ってあげられなかった……」
小鹿の頭を抱く。

「みーん……」
「ごめんね……」

「みーん……」
「うわーん」
涙が頬を伝う……。

「お家に帰ろうね」
「みーん……」

「みーん……」
この子はラグナロクに連れて帰る。

そつと、抱きかかえる。

「みーん……」
「大丈夫、大丈夫、足も直してもらおうね」

そして、ゆっくりと歩きだす。
「ナビー!!」

「大丈夫か、ナビー!？」
和泉と秋葉が駆けつけてくれた。

「うん、大丈夫、でも、この子、みなしごになっちゃった……」

「こ、小鹿……?」

「つて、あれ、虫!」

秋葉がひっくり返っている虫の死骸を見て叫ぶ。

「うん、虫、親鹿があれにやられた」

「うわ……、信じられん……」

「あ、蒼、それに近づかないで、まだ動くかもしれないから」

と、軽く注意する。

「お、おう……」

秋葉が虫から距離を取る。

「あ、ナビー、その子、怪我してるの?」

和泉が小鹿を覗き込む。

「うん、すぐにラグナロクに連れ帰って雫に治療してもらいたい」

「そっか、じゃあ、俺が持つよ……」

「なんか、タオルとかあればいいんだけど……、お、あった、これ、ナビーの?」

と、秋葉がどこかからかバスタオルを持ってくる。

「えっ?」

「お、かわいいな、くまのバスタオルだなんて……」

彼がバスタオルを広げる……。

それは、もちろん、フィユリナ・ファラウエイのバスタオルだ。

あ、やばい、埋め忘れがあった……。

「フィユたん……?」

「フィユたん……?」

「フィユたんつて、誰?」

二人がそう書かれた刺繍を見て首を傾げる。

「た、たぶん、私……、お、お母さんとかにそう呼ばれていたんだと思

う……」

平静を装いつつ言い訳をする。

「あ、そっか、ごめん……」

「ああ、そうだったな……」

二人が顔を見合わせて謝罪する。

私が記憶喪失だという事を思い出したんだと思う。

「立たせてみる?」

と、和泉と秋葉がそつと小鹿を支える。

「みーん」

ぷるぷる、ぷるぷる、と震えながら小鹿はなんとか立ち上がる。

「おお?」

「みーん!」

立ち上がったたら、結構しっかりしている!

もしかして、びっくりして、腰を抜かしてただけ!?

「みーん!」

「よし、よし……」

と、膝立ちで小鹿の頭を抱く。

「怪我じゃなくてよかった」

「うん、うん、元気そうだね」

「それじゃあ、名前を付けようか、ね、ナビー?」

和泉が私の顔を覗き込みながら言う。

「な、名前か……」

「みーん……」

みーん……、みい……、駄目だ、それだと徳永美衣子と名前がかぶってしまう。

そ、それじゃあ……。

「カチューシャ、この子の名前はカチューシャで……」

と、なんとなく思いついた名前を言う。

「おお、カチューシャか、いい名前だ、よかつたな、カチューシャ」

和泉が笑顔でカチューシャの頭をなでる。

「カチューシャ……、ヘアバンド?」

「ナビー、カチューシャ欲しいの?」

「作ろう、作ろう、ナビーに似合いそうだよ、カチューシャ」

と、夏目たちが話す。

カチューシャはヘアバンドじゃないよ、あれ、トラックにロケットランチャーを取り付けた自走砲。

「えへへ」

でも、なんて言っていないかわからず、みんなを見て困ったように笑う。

「みーん！」

シウスたちがカチューシヤに興味津々で匂いとか嗅いでる。

「みんな、仲良くするんだよ」

こうして、私たちは小鹿のカチューシヤをマスコット班に迎え入れる事になったのであった。

第69話 たびなく白雲

「フィユたん……」

私は風になびくバスタオルを見て忌々しくつぶやく。

ここは、居住区の裏、女子たちの洗濯物干し場。

シーツとかタオルとか衣類とかが干してある。

その中の一枚、くまのイラストが描かれたバスタオルがひらひらと風になびいている。

あのバスタオルは昨日、あの虫の巣にあったもので、小鹿のカチューシャをくるんで運ぶために持ってきた。

「フィユたん」

もう一度溜息混じりにその名を口ずさむ。

バスタオルのくまのイラストの下に黄色の刺繍でそうはつきり書かれている。

幸い、あの虫の巣があつた場所の周辺は立ち入り禁止になり、フィユたんの他の荷物が発見される可能性は低くなつたけど、それでも、あのバスタオルだけでも問題。

昨日、あれから綾原たちに色々詮索された。

別に私がハイジャック犯の武地京哉と疑つての事ではないと思うけど、私の過去について色々な質問がなされた。

思い返してみても、失敗したと思う。

一切の個人情報話していないけど、普通におかしいって思われたに違いない。

だって、色んな知識があるのに、自分、フィユリナ・ファラウェイに関する記憶だけがすっぽり抜け落ちているんだから。

海老名が首を傾げていたね、記憶喪失つてこういうものだったっけ？ つて。

「はあ……」

まずい。

私の過去を詮索させないためにも、あのバスタオルは発見されてはいけないものだったんだ……。

「まあ、しょうがない、嘘をつき通すしかない」

と、私はバスタオルを横目にそこを通り過ぎ、表の石畳の道に出る。「カチューシャ、元気にしてるかなあ」

少し、機嫌を直して、新しい仲間、小鹿のカチューシャを思い浮かべる。

「それにしても、みーん、って鳴き声かわいいよね」

強い陽射しの中、足早に牧舎を目指す。

「うん？」

中央広場の真ん中に誰かいるぞお？

石畳に座り込んで何かしている。

こちらから見て後ろ向き、大きな背中と、色の抜けかけた赤い髪……。

そう、それは誰がどう見ても、東園寺公彦、その人だった。

「あいつ、この炎天下の中、何してるんだ？」

帽子も被らないでなんかやってる。

「ははーん……」

きつと、悪巧みしてるんだなあ。

今日の私は機嫌が悪い。

運がなかったな、東園寺……。

「よし、こらしめてやるー！」

と、私は足音を立てないように走りだす。

そして、彼の背中にむかって思いつきりジャンプ！

「ハロハロハー!!」

と、飛びついて、彼の耳元で大きな声を出す。

「耳が痛い、ナビーフイユリナ」

東園寺が顔をしかめて私をみる。

「なにやっているの、公彦、帽子も被らないで」

と、私が被っていた麦わら帽子を彼に被せてやる。

「やめろ、やめろ、前が見えん」

彼はその麦わら帽子を再度私の頭に乗せる。

「で、なにこれ？」

と、私は彼の背中に抱きつきながら、肩越しに石畳に広げられた紙を見る。

「ああ、塹壕と石垣の配置予定図だ」

「ふーん」

紙には地図が書かれており、ラグナロク広場を取り囲むように、塹壕と石垣が点線で書かれていた。

「穴がないか……」

と、東園寺が地図を見ながらつぶやく。

「ああ、そうね……」

アドバイスしてやろうかと思ったけど、

「あ、そうだ、カチューシャ！」

私にはまだやるべき事がある！

と、そのまま立ち上がり、麦わら帽子を被り直す。

「またね、公彦、頑張ってるね！」

そして、牧舎に向かって走りだす。

「おう……」

彼は私を見もしないで軽く手を振る。

「ふふふ……」

かかったな、東園寺……。

中央広場から出て、調理室の横を過ぎ、さらに食料品倉庫を過ぎたあたりで横道に入り建物の裏に出る。

「とりゃあー！」

そして、全速力で走って、中央広場を回りこんで、居住区の入り口のどこまで行く。

「はあ、はあ、はあ……」

息を整えつつ、東園寺のうしろから忍び寄る。

「ふふふ……」

ダッシュ！

「ハロハロハー!!」

と、うしろから飛びついて、耳元で大きな声で言ってやる。

「耳が痛い、ナビーフイユリナ」

東園寺が顔をしかめて私を見る。

「なにやっているの、公彦、帽子も被らないで」

と、私が被っていた麦わら帽子を彼に被せてやる。

「やめろ、やめろ、前が見えん……？」

彼はその麦わら帽子を再度私の頭に乗せるようとするけど、途中でその手を止め、私の顔をまじまじと見つめる。

「うん？ どうしたの、公彦？ それより、なにこれ？」

と、私は彼の背中に抱きつきながら、肩越しに石畳に広げられた紙を見る。

「あ、ああ……、塹壕と石垣の配置予定図だ……」

「ふーん」

さつき見た地図をさつきと同じように覗き込む。

「穴がありそうね……」

東園寺がさつきの台詞を言わないので、私が代わりに言ってやる。

「そ、そうだな……」

「そうねえ……」

アドバイスするふりをして、

「あ、そうだ、カチューシャ！」

と、彼の背中をはなして立ち上がり、麦わら帽子を被りなおす。

「またね、公彦、頑張ってね！」

そして、牧舎に向かって走りだす。

「お、おう……」

と、今度は私を見て、生返事をする。

「ふふふ……」

三回目いくよ！

楽しくなってきたあ！

「とおりやあ!!」

もう、全力疾走！

建物の裏、墜落した旅客機を横目に疾走する！

前髪が風に広がって、服の中にも風が駆け抜けてとつても気持ちいい！

「はあ、はあ、はあ……」

で、でも、さすがに疲れてきた……。

「よし……」

そーっと、うしろから東園寺に近づいて……。

ダツシユ！

「ハロハロハー!!」

と、うしろから飛びついて、耳元で大きな声で言っただる。

「ま、またか、ナビーフイユリナ、いい加減にしろ……」

彼は顔をしかめて私を見る。

「はあ、はあ、また？ 何の話？ それより、なにやっているの、公彦、

帽子も被らないで、はあ、はあ」

と、私が被っていた麦わら帽子を彼に被せてやる。

「な、何度目だ、いったい……」

彼はその麦わら帽子を再度私の頭に乗せる。

「はあ、はあ……、うん？ どうしたの、公彦？ それより、なにこれ？」

と、私は彼の背中に抱きつきながら、肩越しに石畳に広げられた紙を見る。

「あ、ああ……、塹壕と石垣の配置予定図だ……」

「ふーん、はあ、はあ」

さつき見た地図をさつきと同じように覗き込む。

「穴がありそうね……、はあ、はあ……」

「そ、そうだな……」

「はあ、はあ、そうねえ……」

アドバイスするふりをして、

「あ、そ、そうだ、カチューシャー！」

と、彼の背中を押すようにして立ち上がり、麦わら帽子を被りなおす。

「またね、公彦、頑張っただね！」

そして、牧舎に向かって走りだす。

「あ、ああ……」

彼は何か言いたさそうな顔をしながらも、軽く手を振って見送ってくれる。

「ふふふ……」

無限ループって怖いよね。

もう、やめられなくなってきた！

全速力で食料品倉庫から曲がって裏手に出る。

「とおおりやああ!!」

と、麦わら帽子が風で飛ばされないように手で押さえながら駆け抜ける。

「はあ、はあ、はあ……」

でも、もう息も絶え絶え……。

「も、もう少し、もう少し頑張るのよ、ナビー……」

息を整えながら表の石畳の道に出る。

「はあ、はあ、はあ……」

駄目だ、汗が垂れてきた。

でも！

と、最後の力を振り絞って、東園寺に向かってダツシユ！

足がもつれるけど！

「はあ、はあ、ハロ、ハロ、ハロ、ハー!!」

と、懸命に彼の背中にダイブする。

「だ、大丈夫か、ナビーフィユリナ……?」

東園寺が心配そうな表情で私を見る。

「はあ、はあ、はあ……、な、なにやっているの、公彦、帽子も被らないで、はあ、はあ、はあ……」

と、震える手で被っていた麦わら帽子を彼の頭に乗せる。

「いやいや、おまえが被っている」

彼はその麦わら帽子を再度私の頭に乗せる。

「はあ、はあ、はあ、で、で、な、なにこれ……?」

顔の汗を彼の肩で拭きながら地図も見ないで尋ねる。

「塹壕と石垣の配置予定図……」

「はあ、はあ、はあ、あ、あな、ありそうね、はあ、はあ、はあ……」

「そ、そうだな……」

「はあ、はあ、はあ、そ、そうねえ、はあ、はあ、はあ……」
アドバイスするふりをして、

「カチユ、カチユ、カチユ！」

と、最後の力を振り絞って立ち上がる。

「ま、また、またね、公彦」

私は弱々しく彼に手を振る。

「お、おう、無理すんなよ……」

彼も手を振りかえしてくる……。

く、くそつ……。

「いい加減とめろお!!」

と、振り向きながらおもいつきり怒鳴ってやる。

もう、あつたまきたあ!

私は自分じややめられないのよ!

「あ、い、いや、なんの遊びかなあと思って……」

「はあ、はあ、はあ……」

私はうつむき加減で東園寺の前まで歩いていき、そのままぐるっと反転して彼の膝の上に座る。

「はあ、はあ、はあ……」

そして、額の汗を拭いつつ呼吸を整える。

「大丈夫か、ナビーフイユリナ?」

東園寺が上から私を覗きこんでくる。

「はあ、はあ、はあ……」

麦わら帽子をとって彼の頭に乗せる。

「いや、これはおまえが被っている」

「ううん、それで日影作ってて、暑いから……」

と、彼の顔を見上げながら言う。

「そうか……」

東園寺が麦わら帽子を深く被りなおして、そのつばで日影を作ってくれる。

「ナビーフイユリナ……」

そういえばさ、こいつだけ私の事をナビーフイユリナって呼ぶよね？　なんでだろ？

「ねえ、公彦、どうして、私の事をナビーフイユリナって呼ぶの？　あなただけだよ、そんな呼び方するの？」

ついでに聞いちゃおう。

第70話 エンゲージメント

「ねえ、どうして?」

もう一度、彼を見上げて、その目を見つめながら尋ねる。

「それは……」

東園寺が視線をそらす。

「それは?」

「それは、おまえが、そう自分で言ったからだ……」

彼が少しに眉間にしわを寄せ、何か思い出すようなかのように話す。

「わ、私が……?」

私も少し眉間にしわを寄せて聞き返す。

「あ、ああ……、いや、俺の思い違いかもしれんが……、確かにそう言った気がするんだ……、いや、正確にはフィユリナと言っていたような……」

そんなはずはない、私は言っていない。

「い、いつ……?」

「最初に、飛行機から運び出すときに」

最初……。

この身体での一番最初の記憶は、草原、飛行機から少し離れている場所に倒れていて、顔のすぐ横には、あの小さな鈴みたいなお花があった……。

「もしかして……、公彦が私を飛行機の中から運び出してくれたの……?」

「ああ、そうだ……、その時には意識があったようだったが……、なにしろ俺も飛行機が墜落して気が動転していてな、とにかく他の奴らも気がかりだったし、おまえを抱えて急いで機外に出る事にした、その時におまえがうわ言のようにフィユリナと言っていたような気がしたんだ」

「そうだったんだ……」

うつむいて考え込む。

私が自ら、私の名前はフィユリナですって、自己紹介するわけがな

い。

だって、そのときには自分の名前がナビーフイユリナ・ファラウエイだって知る由もないんだから、それを知るのは、そのあと、名札を見てから。

「そっか、公彦が私を助けてくれたんだ、ありがとう」

と、彼を見上げて笑顔でお礼を言う。

「ああ、気にするな、ナビーフイユリナ……」

照れたように、彼が視線をそらす。

つまり、東園寺に名前を言ったのは私ではない、たぶんフィユたん、本来のこの身体の持ち主、フィユリナ・ファラウエイだろう。

そして、それは、こつちの世界に来てから身体が入れ替わった事を意味する……。

飛行機がこつちの世界に移した影響で入れ替わったと思っていただけ、そうじゃなかった……、じゃあ、原因は他にあるってことか……。

「うーん……」

「どうした、ナビーフイユリナ？」

「うん？ あ、これ、正面ばかりに気を取られてていいの？」

と、適当に目の前の地図を指差しながら言う。

この地図はさつきから東園寺がにらめっこしていた塹壕と石垣の見取り図。

「そうだな、敵が正面、ヘルファイア・パスから来るとは限らん……」

「うん、といつても、ラグナロクを一周ぐるっと取り囲むわけにはいかないよね……」

「そうだ、同時にヒンデンブルク広場も守らなければならない」

ヒンデンブルク広場の飛行船には私たちが日本に帰るために手がかりがあるからね。

まあ、そんなのどうでもいいわ。

どうして、私がナビーになってしまったのか、その理由と原因の究明が先よ……。

「敵の誘導を考えているのね、公彦……？」

彼が聞いて欲しいだろう質問を適当にしてやる。

「そうだ、よくわかったな、ナビーフイユリナ、正面からの攻勢の場合
は、ここで受けて、西に流す、背面からのケースはここだ、ここで迎
え撃つ、我々防衛側が圧倒的に有利だ」

と、東園寺が少し前かがみになり、私の身体を片手で押さえながら
地図を指でなぞる。

「ふーん……」

そもそもさ、入れ替わったとしたら、元のフィユたんはどこに行っ
たんだろ？

あれか？

武地京哉にでもなっているのか？

そうだとしたら好都合。

ハイジャック犯として始末してやる……。

明確にハイジャック犯を排除したとなると、私が真のハイジャック
犯だと疑われる事は未来永劫なくなる……。

「だが、時間もかかるな……、塹壕はまだいい、石垣がやかいだ、も
う少し簡素化したい……、ここは、効果が見込めないな……」

彼が赤ペンでバツテンをつける。

「石垣は石垣で必要だけど、それ以外の場所は有刺鉄線を使うとい
よ」

有刺鉄線の利点は人は通さないけど矢は通すストップピングパワ
ーにある。

「有刺鉄線か……」

「鉄は豊富にあるし、別に生活で使うものじゃないから、粗悪な溶鋸炉
でも十分な剛性は得られると思う」

そう、鉄は旅客機のやつを使えばいい。

「人見と相談してみるか……」

それにしても、そのうちフィユたんが武地京哉の身体で登場するか
もしれないのか……。

怖いわ……。

身長190センチ、体重100キロ……。

あほみたいに鍛え上げている身体だよ？

なによりあの顔だよ？

女、子供に見せるな、あんな顔、みんな怯えるから……。

私だって泣いて逃げ出すよ。

と、武地京哉の顔を思い出してふるふる震える。

「どうした、ナビーフィユリナ？」

「ううん、なんでもない……」

でも、頑張つて倒さないとね、そうしないと私がハイジャック犯の武地京哉だつてばれちゃう。

うん、この身体をフィユたんに返す気なんて毛頭ない。

この身体は脆弱だけど、ひとつもの凄い性質を持っているから。

それは多幸感。

なんか、ウキウキするんだよね、なんか知らないけど幸せなんだよ。

この感覚は何ものにも代えがたい。

あと情緒も豊かだしね、すぐに涙が出てちゃう、でも、不快な感じはしない、気持ちよく泣ける、そのあとはすつきり。

ホント、この身体は私の宝物だよ、武地京哉の時なんて酷かったよお、いつつも人を憎んでいたからねえ、妬んでいたからねえ、蔑んでいたからねえ、今思えば、あの感覚は苦痛、もう二度と味わいたくない、あと逆恨みもやばかった、人間不信つてやつだね、もつとみんなを信じろつて説教してやりたい、みんな仲間なんだからつて。

いや、説教したつて無理だね、大人になつても反抗期が直らなかつたやつだから、私の言葉に反発して、さらに意固地になつていくよ。うん、あれはもう手遅れ。

ああ、私は私でよかった、心底そう思う。

よし、私は武地京哉と戦う、この身体は絶対に渡さない。

強く決意する。

「公彦、もしき、もし、私がいなくなつたら、やっぱり、悲しい？」

聞きたいのは、フィユリナ・ファラウェイじゃなくて、私の事なんだけどね。

「なんだ、いきなり、どうした？」

「いいから、どう、悲しい？」

「おまえは俺たちを繋ぐかすがいだ、おまえがいなくなったら、俺たちは直ちに瓦解するだろう、もつともこれは南条の言いようだけだな、で、個人的には、そうだな、悲しいかな、おまえにはずっとここに居てほしい……」

「そっか、他のみんなもそうかな？」

「だと思うぞ」

「そっか……」

目を伏せる。

そして、前を向いて元気よく立ち上がる。

「よし、休憩終了！　ありがとね、公彦！」

「ほら、帽子、倒れるぞ」

と、東園寺も立ち上がり、私に麦わら帽子を被らせてくれる。

「ありがと、公彦、またね！」

私は大きく手を振りながら、その場から走り去る。

「おう、またな」

と、彼の言葉を背に受けて走る。

「武地京哉対策も考えておかないとね」

まっ、中身がフィユたんなら、そんなに心配する必要もないんだけどね。

あの写真の無邪気な表情の少女を思い出す。

「ふっ、あんなのに負けるわけがない」

両手を広げて機嫌よく中央広場を駆け抜けて、調理室の前を過ぎ、そして、さらに食料品倉庫を過ぎ、

「とおおりやああ!!」

と、そこから脇道に入っていく。

「無限ループってこわいよね！」

もう一回いくよ！

草むらを飛び越えて進むと、墜落した旅客機が見えてくる。

そこからぐるっと回って、居住区のとこまで全力疾走。

そして、女子たちの洗濯物干し場、風になびくバスタオルをかき分

けて進む。

「あはははっ」

楽しい！

「よし……」

と、中央広場の手前で立ち止まり、そーっと、足音を殺して東園寺のうしろから忍び寄る……。

「そーっと、そーっと……」

えい！

「ハロハロハー!!」

と、彼の背中に飛びつく。

「うわああああ!!」

お？

これは……。

なんか、東園寺が驚いているぞお？

「びっくりした？」

と、驚く彼の顔を覗き込みながら微笑む。

「あ、ああ……、今のは完全に予想外だった……」

「クスツ、なにやっているの、公彦、帽子も被らないで」

と、私が被っていた麦わら帽子を笑いながら彼の頭に乗せてやる。

「もういい、まいった」

彼も吹き出し、そして、麦わら帽子を取り私の頭に乗せる。

「ふふふ」

これで終りだと思おうでしょ？

甘いんだなあ、それが！

「今度こそじゃあね、公彦！」

もう一回いくよ！

そんな事を何度も繰り返す私であった。

第71話 逡巡夏雲

笹に見立てた広葉樹の若枝、それに飾り付けられた色とりどりの短冊が風になびいている。

「うん、綺麗」

私は青空の下、気持ち良さそうに風に泳ぐ短冊を見上げながらそうつぶやく。

「ナビー、そんなに口あけてたら虫が入っちゃうよ」

隣で私と同じように短冊を見上げていた夏目翼に笑われる。

「だつてえ」

と、少し頬を膨らませる。

だつて、今日は七夕なんだからね。

「よし！ もう一本行こう！」

と、立てたばかりの飾りとは別の、倒れている広葉樹の若枝のところに駆け足で向かう。

「じゃあ、私、広場のほう見てくるね」

「はあい！」

ここは中央広場のすみっこ、居住区へと伸びる道の入り口。

本当は広場の真ん中に飾り付けをしたかったけど、みんなが道の両脇に飾ったほうが綺麗だと言うので、ここに設置する事にした。

「まずは……」

若枝を少し斜めにして、私の目線の位置まで持ってきて固定する。

「次は……」

飾り付け。

色紙で作った吹流しをつけて……。

あとはみんなが折ってくれた色んな形の折り紙をつけて……。

「最後に……」

お願い事が書かれた短冊をつけていく。

「うん？」

短冊を飾りつける手を止める。

「うーん？」

そして、その短冊に書かれた内容に目をやる。

「おじいちゃんが早く死にますように?」

短冊にはそう書かれている……。

「うーん……」

私はその短冊を丸めてぽいつとその辺に捨てる。

「見なかったことにしよ」

よし、次、次……、新しい短冊を手取る。

「うん?」

またぴたりと手が止まる……。

「木星が落ちてきますように」

あーん?

また丸めてぽいつと捨てる。

「よ、よし、次、次……」

箱の中にまとめられた短冊を取ろうとする……。

もうひと目でわかる、変は事が書かれている……。

「止まったら死ぬ、俺たちはマグロです」

願い事じゃないじゃない……。

「くっ……」

まるめてぽい。

「誘惑、それが地獄に転がり落ちる第一歩」

なんだ、これ、なんかの格言?

まあ、さっきのよりはいいけど、願い事じゃない、まるめてぽい。

「ナビーならやってくれる、ナビーなら必ずオチを用意しているはずだ」

ここ、これは願い事ね……、採用……。

その短冊を飾りつける。

「よし、調子出てきた、次!」

うっく……、これはやばい……。

「ナビーのおっぱいがもう少し大きくなりますように……」

秋葉か? 秋葉だろ、これ絶対……。

セクハラはやめろって、いつも言ってるだろ、あの野郎……。

「ふざけやがって……」

私はその短冊を念入りに破いて捨てる。

「まあ、確かに頼んだのは私だよ、一人一枚だと寂しいからね……」

一人十枚くらい願い事を書いてもらったよ。

「でもね、誰もふざけて書いていいなんてひとも言ってるねえんだよ……」

ギリ、と歯をくいしばる。

「もう、あつたまきた、あつたまきちやったよ」

私は箱から何も書かれていない短冊とボールペンを取り出す。

「ふふん……」

そして、石畳に寝転がり、短冊に願い事を書きはじめる。

まずは……。

「福井麻美さんが好きです。もしこの願い事に気付いたら金の斧の池まで来てください。佐々木智一」

しめしめ、いい出来。

「南条大河さま、大事なお話があります。金の斧の池でお待ちしております。海老名唯」

うーん、ワンパターンか？

まっ、これはこれでいつか……。

「人見彰吾くん、あなたの落とし眼鏡は金の眼鏡ですか？ それともこちらの銀の眼鏡ですか？ 金の斧の池で待つ。綾原雫」

おお、綾原らしい……。

楽しくなってきた！

と、こんな感じで短冊に願い事を書いていく。

最後はやっぱり秋葉だよ。

「くくく……」

どうやって誘い出すか……。

私の名前を使うか？ いや、笹雪めぐみのほうがいいか……、迷うな……。

「あつ、でも、これって、みんなも見るよね？ 本人に確認されたら厄介だなあ……」

よし、差出人の名前は全部消しておこう。

と、私はさつき書いた短冊の差出人の名前をボールペンで消していく。

気を取り直してと……。

秋葉蒼用の短冊作成に取り掛かる。

「うーん……」

どんな文章だと釣れるかなあ……。

よし。

「秋葉蒼さま、以前おっしやっていたこと、覚悟が出来ました、金の斧の池でお見せします」

しめしめ、あいつ、絶対なんか心当たりあるだろう。

「あ、そうだ、時間指定も入れておいたほうがいいかな？」

うーん……。

屋台の焼きソバとか食べたあとだから、20時くらいでいいかな？

と、私はすべての短冊に20時に、って書き加えていく。

ちよつと窮屈な感じになっちゃったけど、まあ、大丈夫でしょう。

「よし、飾りつけー」

元気よく立ち上がって、今書いた短冊の飾りつけをはじめ。

「ふん、ふん、ふふん」

超ご機嫌！

「あとは、これをポールに挿して……」

飾りつけの終わった若枝を道脇のポールに入れて立てる。

「おお、両脇にあるとトンネル見たいになって綺麗……」

と、私は垂れ下がった吹流しのトンネルを何度も潜り抜ける。

「風が吹くともっと綺麗」

両手を広げて、真ん中でくるくるまわる。

「あはっ」

いーいー

「お、もう終わったのか、ナビー、なんか手伝おう思ったのに」「うまく飾りつけできたようだね」

と、秋葉蒼と和泉春月がやってきた。

「ハル！ 蒼！ みて、みて、綺麗でしょ!？」

私は大喜びで二人に駆け寄る。

「うん、うん、綺麗だね」

「わかった、わかった、ちよつと待て」

二人の手を取り、それぞれ名前の書かれた短冊の前に誘導してやる。

「へえ、みんな結構まじめに願い事書いてんじやん」

「蒼はふぎけすぎだ」

と、二人が目の中の短冊を見ながら談笑する。

「あっ」

「どうした、蒼?」

「あ、いや、なんでも……」

秋葉がああの短冊を発見したみたい。

「こ、これ、間違い? 何も書いてないな……」

と、秋葉が短冊をむしりとり、それをポケットに入れる。

くくく……、しらじらしいなあ、秋葉あ……。

「あ、こっちもだな……」

今度は和泉が短冊をむしりとり、それをポケットに入れる。

「ナビー、ちゃんと確認しろよ、白紙だったぞ」

とか、秋葉が言っている。

「あ、そうだった? ごめんね……」

ちよつと、首を傾げて、申し訳なさそうな表情で言ってる。

「いや、謝らなくていい、怒ってないから」

と、秋葉がバツが悪そうに視線をそらす。

「じゃあ、蒼、屋台の準備もあるし戻ろうか」

「お、おう、ハル」

二人が中央広場のほうに帰っていく。

くくく……。

「ナビー、一人で大丈夫?」

「やつほー、ナビー」

と、今度は生活班の女子たちがやってきた。

「麻美！ 千香！ みて、みて、綺麗でしょ!？」

また大喜びで彼女たちのもとに駆け寄る。

「角度もいいね」

「うん、ちょうどトンネルみたいになってるね」

「いいから、いいから、こっち、こっち!」

二人の手を取り、それぞれ名前の書かれた短冊の前に誘導してやる。

「あは、誰これ、ナビーが割りと普通になりますように、だつて」

「なんか、ナビーネタ多いね、ホント、大人気だね、ナビーは」

とか、短冊を見ながら笑っている。

「えっ?」

「なっ?」

二人が変な声をあげる。

「何これ、悪戯はやめてよね……」

「こつちも……」

二人が短冊をむしりとって、それをポケットに入れる。

くくく……。

「じゃ、じゃあ、私たちは戻るね」

「ひ、陽射しが強いから、無理しちや駄目よ、ナビー」

と、二人がよそよそしく去っていく。

「はあい!」

と、二人に大きく手を振る。

「おい、ナビー、調子はどうだい?」

「相変わらずかわいいな、ナビー、結婚しよう」

今度は参謀班の二人、南条大河と青山悠生が姿を見せる。

「大河！ 悠生！ これ、綺麗でしょ!？」

くくく……。

次から次へとカモがやってくるぜ……。

「なっ、どうした、ナビー、なんか、悪党面になってるぞ!？」
おっと。

「なんでもないよ！ ほり、ほり、はやく、はやく、こっち、こっち、みて、みて！」

と、表情を見られないように、彼らのうしろにまわって、その背を押して、二人の名前の書かれた短冊の前に誘導する。

「ちよつと待て、なんだ、これ……」

「あ、あれ……、う、うそだろ……」

お、さつそく発見したみたい。

と、こんな感じでやってきた人たちを自分の名前の書かれた短冊の前に次々と誘導していく。

「くくく……」

大体みんな確認したかな……。

でも、みんなを金の斧の池に呼び出して何をすればいいんだろう？

「うーん……」

「ナビー、そろそろ着替えちゃいましょう」

と、考え込んでいると、そう夏目翼に声をかけられる。

「そうだった！ 浴衣に着替えるんだった！」

髪も綺麗に結ってもらうの！

私は大喜びで夏目のもとに走っていく。

「浴衣かあ……、うん……？」

これは使える……。

第72話 舞華のアイソセリーズ

陽も大きく傾き、まもなく夕暮れを迎える。

窓から差し込む光は優しく、また、吹き込む風も涼やか。

「よし……」

私は何度も自分の顔を鏡で確認する。

白くきめ細かな肌がさらになめらかに、頬もほんのり色付き、唇はつやつやのピンク色。

「うん」

大丈夫、落書きされてない。

「そんなに確認しなくても、ちゃんと、かわいく仕上がってるよ」

「うん、うん、とつてもかわいいよ、ナビー」

女子のみんなにお化粧をしてもらったからねえ。

落書きされてないか心配……。

得意げに、鼻高々でみんなの前に行つて、もし顔に落書きされてて笑われでもしたら、傷ついて号泣する自信がある。

いや、待てよ……。

お化粧と同時に髪も綺麗に結ってもらったから、首筋も見えるようになってる……。

「くっ……」

鏡で見えない首の後ろに落書きがされているかもしれない……。

見えない……。

「どうしたの、ナビー、うしろも見たいの？」

「はい、ナビー、こうするとよく見えるよ」

と、福井麻美が手鏡をもう一本持ってきて、あわせ鏡にして見せてくれる。

「おお……」

ちゃんと綺麗になつてる……。

まあ、今まで、顔に落書きされた事なんて一度もないんだけどね。

でも、やりそうなんだよね、いまいち信用できない……。

だって、私が得意げに鼻高々で自慢げにしてるんだけど、実は顔に

夕焼けがあたりをオレンジ色に染め、石畳の道も例外なくそれに染め上げられて鮮やかな色合いを見せる。

「最初はないと思っていたけど、暗くなってくるとそれっぽく見えてくるな」

「ああ、いいね、風流だな」

「かがり火が強すぎない？ 燃え移ったりしないよね？」

と、中央広場の入り口の七夕飾りのところに人だかりが出来ていた。

「ナビ、綺麗、ぷん！」

まっさきに私に気付いて駆け寄ってきたのは亜麻色の髪の少女エシユリンだった。

「ありがと、エシユリン、ごめんね、今日一日シウスたちの世話を一人でさせて」

「ううん、大丈夫、ぷん！」

そう、今日は七夕の飾りつけに忙しかった。

「おお、かわいい……」

「なんだろうな、このかわいさは、人間離れしている……」

「透明感と清潔感だな、さぞやいい匂いがあるんだろうな……」

「ちよ、ちよつとだけ、負けたかも……」

みんなも私に気付いて口々に感想を述べる。

「ふふん……」

私は得意げ。

でも、私がかわいいのは当然、みんなの反応にも慣れてきた。

それよりも、今日の楽しみは他にあるんだよね……。

「くくく……」

おっと……、また、悪党面とか言われちゃう……。

私は表情を悟られないように、うつむき加減でみんなのもとに歩いていく。

「くくく……」

駄目だ、笑いが込み上げてくる。

「くくく……、くくく……」

だ、誰が笑いを止めて。

「うひひ……、うひひ……」

もう駄目、口元を押さえて声が出ないようにする。

「な、なんだ、ナビーが笑いを堪えているぞ?」

「いや、もう、肩で笑ってるし」

「さては、今更自分のかわいさに気付いたな?」

「あはっ、今頃?」

「やばい、こつちまで笑えてきた」

とか、みんなが私を見ながら口々に言う。

「もう、みんなあ!」

我慢出来なくなって、大喜びでみんなのもとに走っていき、一番手前にいた綾原雫に飛びつく。

「あら、あら、どうしたの?」

と、綾原が優しく抱きとめてくれる。

「なんでもないので、ただ、幸せすぎて、死んじゃいそうなの」

いつものように、胸にすりすりしたかったけど、お化粧が取れそうだから、それはやめておこう。

その代わりに、彼女の胸に鼻先をつけて大きく深呼吸をする。

「雫、いい匂いする、お花の匂い……」

菊とかそんなやつ。

「ありがとう、ナビー、あなたもいい匂いがするわよ……」

ええっ!?! 菊とかそんなやつじゃないよね!?

私はびっくりして、彼女の顔を見上げる。

「あっ……」

無数の吹流しが風になびいていた……。

そして、その向こうにはお星様、暗くなりはじめた空に星々が輝きはじめている。

「ね、綺麗でしょう?」

綾原も私の両肩を抱きながら、空を見上げてささやく。

「うん、綺麗……」

さらさら、さらさら、と、静かな葉の音も心地いい。

ああ……、ずっとこうしていたい……。

匂いも……、くん、くん……。

うん、香ばしい匂いがする……。

くん、くん……。

お肉が焼ける匂いだね……。

「やっぱ、肉はスライスにかぎるよな」

「ああ、厚いと歯が痛くなる」

「じじいかよ」

ああ!?

なんか、みんなが縁石に座って焼きそば食べてるよ！

ぎゅるるう……。

「私も食べたい！」

と、大急ぎで広場に走っていく。

そう、今日の夕ご飯は東園寺たち管理班が作ってくれたソース焼き

そば！

「公彦、大盛りね！」

「おう」

大きな鉄板の前にいた東園寺がお皿に焼きそばを取り分けてくれる。

まあ、でも、これでソースとはお別れなんだけどね。

旅客機にあったソースはこれで全部、この焼きそばでなくなる。

他の調味料もあとわずか……。

ちびちび使って、三ヶ月近くもたせたんだから上出来か……。

「おまち」

「ありがとう！」

と、お肉と野菜たっぷりの焼きそばを手渡してくれる。

「おいしそう……」

味わって食べないかね……。

それにしても、しょうゆは無理にしてもソースくらいは作れないかな？

案外簡単なはずだよ、これ。

これから、味付けは塩とコシヨウだけだなんて寂しいからね。

「うーん……」

ソースの入れ物に原材料は書いてある……。

「よし」

次の班長会議で提案してみよう。

と、私もみんなの隣の縁石に腰掛けながら、七夕飾りを眺めながら焼きそばをいただく。

うま、うま……。

いいね、このお肉、猪肉だと思うけど、薄くスライスしてあって、カリッとしてしっかり焼かれていてとっても香ばしい。

そばも、まあ、ちよつと太麺かな……。

そういえば、花火はどうなったの？

和泉たちがやるかもとか言ってたんだけど……。

むしゃむしゃ焼きそばを食べながら辺りを見渡す。

「うーん……」

別段、何かを準備している気配はない……。

もつと、お祭りみたいなのを期待していたけど、焼きそばと七夕飾りだけで終りっぽいなあ……。

ちよつと、残念。

「でも、焼きそばがおいしいからいつか」

いや、メインイベントはこれからだよ……。

「くくく……」

そう、メインイベントは金の斧の池で……。

と、私は浴衣の胸元を指で引っ張り中を覗き込む。

「準備万端……」

私は満足して胸元を整える。

「ナビー、りんご飴、ぷーん！」

「うん？」

なんか、エシユリンが持ってきてくれた。

「りんご飴？」

「そう、ぷーん！」

手渡されたのは串に刺さった黄色い洋ナシ。
それがテカテカと光を反射している……。

たぶん、砂糖水で煮詰めた洋ナシだと思う。

「りんご飴……」

赤くない……。

「食べて、食べて、エシユリンもお手伝いした、ぷーん！」

と、彼女が満面の笑みで言ってくる。

「う、うん……」

食べ終わった皿を横に置き、串に刺さった洋ナシを受け取る。

そして、おそろおそろひと舐めしてみる……。

「あまーい」

でも、甘さだけじゃない、ちゃんと洋ナシの味もする。

たぶん、洋ナシの果汁も一緒に煮込んでいるね。

「おいしい、ぷーん？」

エシユリンが私の顔を覗き込んでくる。

「うん、おいしい！」

と、彼女に向かって親指を立てる。

「よかった、ぷーん！」

すると、彼女が飛び上がって喜ぶ。

「ふふ……」

彼女の喜ぶ様を見ながら洋ナシをぺろぺろ舐める。

で、たまにかじる。

「おお……」

果肉まで甘い……。

時間をかけて煮込んだのかな？

「ぺろぺろ……」

おいしい。

「俺、一回ロッジに戻るわ」

「あ、俺も……」

「そ、そうだな、一回戻ろうか……」

と、生活班の山本とかが立ち上がり、居住区の自分たちのロッジに

戻っていく。

「そ、そうね……、寒くなるかもしれないから、一枚羽織ってくる……」

「うん、私も……」

「風、強いから、髪直したい……」

さらに、女性班の徳永たちもロッジに引き上げていく。

「ちよつと、俺、涼んでくる……」

「お、おう、俺もちよつと歩いてくるか……」

和泉と秋葉もよそよそしくどこかに歩いていく。

彼らの不可解な行動を見ながら、ちらりと時計で時間を確認する。

「19時半か……」

くくく、みんな行動が早いな……。

「よし、エシユリン！ 私たちもお散歩に行こうか！」

「はい、ぷーん！」

と、私は元気よく立ち上がる。

「行こう！」

洋ナシをぺろぺろと舐めながら目的の場所を目指す。

第73話 金の斧の池

光害のない空は暗く、星像をシャープに映し出してくれる。

「でも、見えすぎるのも困りもの、星が多すぎてベガとアルタイルが見つけられない」

ちなみに、ベガが織姫星でアルタイルが彦星と言われている。

「まあ、たぶんあの辺だね」

と、天の川を見上げてつぶやく。

「ぺろぺろ、ぺろぺろ……」

ここは牧柵の中、その真ん中で足を大きく広げて草の上に座り、洋ナシ飴をぺろぺろ舐めながら空を見上げている。

「こらあ、だめだつてば」

「くるう……」

洋ナシ飴を舐めようとしていたクルビットを軽く叱る。

「よしよし……」

と、クルビットの頭を手の甲でなで、また夜空を見上げる。

そういえば、前に人見が言っていたけど、星の見え方から緯度、経度を計算すると、ここは日本の近畿地方近辺になるらしいね。

私の記憶が正しければ、旅客機が墜落したのもその辺りになる。

もしかして、別の世界に来たというのは思い違いかもしれないね。

と、なると、考えられるのはタイムスリップか……。

いや、それは有り得ない、植生が違う、生態系が違う、それだけでここが日本でないという事がわかる。

なにより、植生や生態系が変わるほどの過去や未来に来てしまったのなら、星の見え方も当然変わる、太陽系も銀河系の中で動いているのだから……。

星々を見れば、時間の移動はないという事がわかる。

「なんなんだろうね、ここ……」

そんな事に思いを馳せながら、織姫星と彦星を探す。

「ぺろぺろ……、ぺろぺろ……」

洋ナシ飴を舐めながら空を見上げる。

ああ、そうか、前に山本が言っていた、あれか、あの世説。
実は旅客機の墜落でみんな死んでいて、魂だけがあの世を彷徨って
いるって話し。

みんなは笑い飛ばしていたけど、それを否定する材料ってないのよ
ね……。

いや、あるよ、旅客機とか荷物とかも一緒にあの世にきちやったの
？ でも、物理的には、物質もエネルギーの形態のひとつに過ぎない
から、あの世に旅客機とか荷物がそのままあっても、なんらおかしな
話ではない……。

「うーん、ミステリーだ……」

ペロペロ、ペロペロ……。

まあ、一番のミステリーは私なんだけどね……。

いや、一番のミステリーはヒンデンブルク広場の飛行船でしょう。
魔法っていったいなんなの、ちよつとデタラメすぎるでしょう
……。

「うーん、うーん……、ペロペロ、かじかじ……」

おいしい。

「よし」

と、立ち上がる。

「ナビー、ぷーん？」

隣で一緒に空を見上げていたエシユリンが私の顔を見る。

「時間だよ、エシユリン、金の斧の池に行くよ」

「はい、ぷーん！」

と、エシユリンも元気よく立ち上がる。

金の斧の池は広場の南東にある貯水池、主に露天風呂とかシャワー
用に水を溜めている池、大きさはそれほど大きくない、直径10メー
トルあるかないかくらい。

「みんなあ、行ってくるねえ」

聞えないだろうけど、牧舎の中にいるだろう、みんなに声をかける。

「クルビットも牧舎に戻りなさい、みんなをお願いね」

「くるうー！」

と、彼は牧舎に向かって走っていき、ジャンプして小窓から建物の中に入っていく。

「よし、行こう！」

「はい、ぷーん！」

私たちは駆け足で牧草地をあとにする。

とりあえず、他の誰かに見つからないように、露天風呂の後ろを回って、シャワー室の後ろを通って、金の斧の池に向かう。

金の斧の池には誰もおらず、ひっそりと静まり返っていた。

「おお……」

池の水面に星の光が反射している……。

さらに、水路から水が流れ込んでいるので、それにより小波、それより小さな波紋が池全体に広がり、ゆらゆらと星の光を乱反射させていた。

「じゃあ……、もってて」

と、私は頭のお面を取り、髪を結って紐をほどきエシユリンに渡す。頭をぶるぶるとさせて、長い金髪を風に泳がす。

「うん、こつちのほうがいい」

そして、今度は浴衣の帯をほどいていく。

くくく……。

「はい、エシユリン」

帯を渡して浴衣を脱ぐ。

「ふふふ……」

浴衣の下に水着を着ていただなんて誰も想像しなかつただろう……。

「これもね」

下駄も脱ぎ、彼女に渡す。

まあ、水着といつてもほとんど下着だけだね。

白い撥水性のある生地で作ったやつ。

ちなみに、この水着は水に濡れると、かなりすけすけになる。

なので、これを外で着るのは初めて。

たぶん、夜だから、そんなに見えないとは思っただけ……。

「よし、エシユリンは向こうに隠れてて」

「はい、ぷーん……」

小声で指示をすると、彼女も小声で返してくれる。

「そ、それじゃあ……」

エシユリンが隠れたのを確認してから、池の中につま先をちよんと入れてみる……。

「うーん……」

冷たい……。

けど、火照った身体には丁度いい！

そのままぎぶーんと池の中に入る。

「えうっ!？」

やっぱり冷たい！

でも、水は綺麗。

それも当然、露天風呂やシャワー、食器洗いにも使う水だから、毎日、虫取りや枯れ草取りを入念にやっているからね。

私は冷たさを我慢しながら、背泳ぎで池の真ん中までいく。

そして、両手、両足を大きく広げて、ぷかぷかと浮かぶ。

「いや、足は閉じよう、たぶん、すけて見えてる……」

いや、胸も見えてる、意外と星明かりが強い……。

「くっ……」

私は起き上がり、そのままお鼻が少し出るくらいの高さまで水につかる。

「ぷくぷくぷくぷく……」

ぷくぷく楽しい！

「ぷくぷくぷくぷく……」

泡が四方八方に流れていくよ！

いや、ちよつと待て、水着が予想以上にすけてるんだけど……。

これ、丸見えだよ、水の中でも見えてるよ。

「あれえ……」

こんなはずじゃ……。

あと、水もすんごい冷たいんだけど……。

「ぶく、ぶく、ぶく……」

なんか、ガタガタ震えてきた……。

「ひっ、寒い、凍える」

ガチガチ、ガチガチ、と歯が鳴る。

「あ、誰か来た……」

じよ、女子、お願い女子であつて、これ、水着がすけてて男子がいとこじゃ池から上がれないよ。

ひっ！ 寒い！

私は人影に向かつて、ぶくぶくしながら池の中を進む。

「たす、たす、たすけて……」

そして、池の端まで来て、縁を両手で掴みながら、人影に助けを求め。

「な、なんだ!？」

と、人影が悲鳴を上げる。

あ、やばい、男だ。

いや、ここは攻め時だ。

「たーすーけーてー」

ばしやーんと立ち上がる。

「いつひいいいい!？」

その人影が大袈裟に驚き、尻餅をついた。

「お、おば、おば！ おば？ あ、あれ、ナビー？」

おっと、正体がばれる、というか裸を見られる。

私は急いでしゃがみ、池の縁に隠れる。

「ナビーじゃないよ、お化けだよ」

池の縁から顔半分だけ出して、人影に言っでやる。

「お、おう……」

「あと、お化けがここにいて他の人に教えたら、不思議な力で死んじゃうからね、覚悟しておいてね」

「お、おう……」

と、動揺しながらも、人影が立ち上がり、お尻についた枯れ草などをはらう。

「し、しかし、予想外だったな、ナビーが池の中にいるなんて……」
それはそうだよ、これは、ふざけた短冊を書いたみんなへの仕返し
なんだから。

くう、でも、これは想定外だよ、本当はお化けのふりして、池から
飛び出して、びしょぬれのまま、みんなに抱き着こうと思っていたの
に……。

こんなにすけすけとは……。

あと、あなたが落とした物はどっちですか？ っつのもやりたかつ
た……。

「おつかしいなあ……」

と、すけた水着を見ながら溜息をつく。

「で、ナビーはいつまでそうしているつもりなの？」

「ナビーじゃないよ、お化けだよ」

「はい、はい、お化け、お化け……」

中央広場はこうこうとかがり火が焚かれている事もあって、こっち
から見ると逆光になって、その人影の姿がよく見えない。

でも、声からすると狩猟班の秋葉蒼だつてすぐにわかる。

「それで、ナビー、俺を呼び出して、どうするつもりだったの？」

あれ、ばれてる。

「な、なぜ、呼び出したのが私だつてわかつたの？」

ぶくぶくしながら上目遣いで彼に尋ねる。

「それはわかるよ、だって、ナビー以外に変な事言つてないから、特に
クラスメイトには絶対に言わない、冗談でもね」

少し笑いを含んだ声で言う。

「じゃあ、ここに書いてある通り、やつてもらおうか？ その覚悟とや
らをね？」

ええっ!?

「ほら、ナビー、池からあがつて、言つてごらん」

ちよ、ちよっと待って、水着がすけすけなのよ！

「ほおら」

と、秋葉が片膝をつき、手を差し伸べてくる。

こうなったら、やつを池の中に引きずり込んで、その隙に逃げるしかない。

「蒼……」

彼の手を握り、力を込める、

「うっぎやあああ!?!」

秋葉が手を放してすっぽ抜けた!

その勢いでばしやーんとなった!

「あう、あうー!」

ばしやばしやともがく。

「ははは、いつぞやの仕返しだよ、ナビー」

なっにい!?

「く、くっそお……」

と、なんとか体勢を立て直して、また池の縁に隠れる。

第74話 フラッシュ

池の縁から顔を半分だけ出して、周囲を見渡す。

人影はひとつ、秋葉蒼だけ。

ただし、中央広場のこうこうと焚かれたかがり火のせいで逆光となり、その表情をうかがい知ることは出来ない。

「見えなくなつてわかるよ、絶対勝ち誇った表情で私を見下ろしているよ……」

ゆるせん……。

ぎゃふんと言わせてやる。

必ずやつを金の斧の池に引きずりこんで、ぶくぶくさせてやるんだから……。

「ほおら、ナビー、仕返しは終りだよ、今度は大丈夫だから、あがつておいで」

と、秋葉が再度手を差し出す。

「もう騙されない」

そつぽを向く。

「ははは、疑り深いな、ナビーは」

そつぽを向くついでに後方の、エシユリンが隠れているだろう森の中に視線を移して、彼女の位置を確認する。

こつちから森の方角は順光になっていて、彼女、エシユリンの姿はすぐに視認することが出来た。

彼女は木の陰というより、下草の茂みの中にしゃがんで隠れている。

「うーん……」

私はエシユリンに手信号を送る。

自分と彼女の目に指二本を向け、そのあと人差し指で合図を出す。

「通じるかなあ……」

でも、私の不安とは裏腹にエシユリンは満面の笑みでうなずき、森の奥に消えていく。

通じたみたい。

「次はどうしよう、ぶくぶく……、蒼をなんとかしたい、ぶくぶく……」
「というか、寒い！」

「ナビーが上がって来ないんじゃないか……」

と、秋葉が伸ばした手を引っ込めて立ち上がる。

そして、振り返り向こうを向く。

「うん？ 諦めたのかな？」

よし、この隙に逃げよう、そして、浴衣を着てこよう、本当に風邪引きそうだから。

私は音を立てないように、平泳ぎで対岸に向かって泳ぎ出す。

「いや、待てよ、これはチャンスなんじゃないの？」

再度方向転換して、池の縁に向かう。

そして、また池の縁にちよこんと手をかけて周囲を見渡す。

「うーん……」

暗くて見えない……。

「あ、秋葉くん？」

と、きよろきよろ辺りを見渡しているとそんな声が聞こえてきた。

「あ、あれ？ 鹿島さん？ どうしたの？」

逆光でよく見えないけど、どうやらそれは女性班の鹿島美咲のようだった。

「どうしたもなにも……、秋葉くんが呼び出したんだよね？」

「いや、俺はなにも……」

「え？ だってほら？」

と、鹿島が秋葉に紙切れを差し出して、それを見せる。

「あ……」

秋葉が小さく驚く。

鹿島美咲かあ……。

どんな内容で誘いだしたんだっけえ……。

「うーん……」

首をかしげて思い出そうとする……。

「うーん……」

でも、思い出せない。

「うん、それでね、秋葉くん、やっぱり何回言われても出来ない……、みんなの前で服を脱ぐなんて……」

池の縁にかけていた手が滑り落ちて、ばしやんって音を立てた。

「え？ 誰かいるの？」

やばい、びっくりして音立てちゃった。

「さ、さあ、と、鳥かなんかじゃない？」

と、秋葉が動揺しながらも、ちらちらこつちを見ながら対処してくれる。

「そ、そう？」

「それより、そっかあ……、出来ないのかあ……、まあ、出来ないなら、出来ないでいいよ、冗談だからさ、ははは、気にしないで……」

とか秋葉が言ってる……。

いや、その前にさっきクラスメイトには変なこと言ってる、ナビーにだけだよ、とか言ってるなかつたっけ？

「え？ 冗談なの？ あんなに真剣に話してくれたのに……？」

「ははは、冗談だよ、そんなの本気にしないで、鹿島さん、ははは……」

うん、ウソなんだね。

あいつクラスの人にも同じようなことしてたんだね！

ゆるせん！

というより、寒い！

もう駄目だ！

私は音を立てないように、そーっと池から這い上がる。

そして、すけすけの水着を見られないように、ほふく前進で二人のうしろから忍び寄る。

「ひ、酷い……、真剣に悩んだのに……、いいです、このことはみいちゃんや東園寺くん、人見くんに報告させてもらいます」

「ち、違うんだ、誤解だ、それだけはやめてくれ、そ、そう、冗談じゃないんだ、本気なんだ！」

なんか、口論ぼくなってる……。

最初は寒いから鹿島のうしろから抱き着いて、冷え冷えの手を襟元

から差し込んであったためようと思ったけど……。

鹿島は秋葉の向こうで遠い。

「ほ、本気って、それじゃ余計……」

「そ、そうなんだよ、これは俺と君だけの秘密にしてほしいんだ」
ほふく前進で秋葉のすぐうしろまで来て、そのまま彼の背中を見上げる。

白いシャツ……。

それが風になびいてひらひらしてる……。

そして、あつたかそうな背中が見える……。

「おお……」

口の中でつぶやく。

のそのそと彼の足を伝って登っていき、ベルトに手をかけ、そのまま冷えた手を秋葉の背中にぴたりと押し当てる。

「ひっ!？」

秋葉が変な奇声を発する。

「あ、秋葉くん!？」

「い、いや、なんでもないんだ!」

白いシャツに頭を入れてつと……。

お? ぶかぶかのシャツに見えたけど、結構キツキツだぞお?

「ひゅ、えう、はう!？」

「ど、どうしたの、秋葉くん!？」

くっ、狭い……。

ぴったり彼の背中に張りつきながらシャツの中に入っていく。

おお……。

シャツがキツキツでずり落ちない。

これは楽……。

「ぶはあ……」

と、襟から顔を出して、大きく深呼吸をする。

彼の腰を両足で挟んでずり落ちないように身体を固定する。

そして腕も前にまわし、冷えた手を彼の胸あたりに押し付けて暖をとる。

あつたかあい……。

ぺたぺた、ぺたぺたと触りまくる。

おお、胸より、首元のほうがあつたかいぞお。

「ひっ!? え、ひゃ!」

「あ、秋葉くん、ホントにどうしたの!」

「え、ちよ、ナ、ナ——」

と、私の名前を出そうとしたので、耳元に口を近づけて、

「めえ……」

おっと、間違った、それはシウスだ。

「ねえ、いいの、蒼? 前に私に言つてたこと、美咲に教えちゃうよ?」
と、囁いてやる。

「え……?」

「え、つて、あれだよ、みんなの前で服脱いで、私はメス豚です、秋葉くんの奴隷ですつて言うやつ」

「うぐ、やめてくれ、そんなことしたら、本当に東園寺たちに報告されてしまう……」

「ね、困るでしょ? だからね、私が蒼の背中に取り憑いていることは、みんなには内緒にしてて、そしたら、言わないでいてあげる」
「わ、わかった、ほんの出来心だったんだ、もう許してくれ……」

よし、取り引き成立。

これで、秋葉は私の意のままに動く。

「ね、ねえ、秋葉くん、誰と話しているの……?」

「い、いや? 誰とも、ただの独り言……」

「そ、そんなことより、あ、秋葉くんのお腹、なんか、膨れてない? 服の中に何か入ってるの?」

「あ、ああ……、ちよつと寒くてね……、念入りに腹巻を巻いているんだ……」

と、秋葉が苦しい言い訳を繰り返す。

うーん、なんか、うまく抱き着けない……。

こう、腕を襟元から出して、首に抱き着くようにして……。

「ひっ!? なんか、秋葉くんの首から手生えてきたよ!」

「え？ いや、いや、そんなわけないだろ、ははは……」

と、秋葉が私の手を掴んでシャツの中に押し込もうとする。

だが、負けん！

彼の手を振りほどいて首に抱き着く。

「ははは、ははは……、くら、くら……」

さらに、秋葉がその腕を引き離して、尚もシャツの中に押し込もうとする。

「こ、怖い、なんなの……」

鹿島が後ずさっていく。

「あれ、鹿島さん？」

「それに秋葉も、二人で何やってんの？」

と、そんな声が聞こえてきた。

「お、おまえら……」

「山本くん、佐々木くん……」

それは、生活班の山本新一と佐々木智一だった。

「てか、なんなの、その服装、秋葉……、ひっ!？」

あ、やばい、山本と目が合っちゃった。

私はとっさにシャツの中に頭をひっこめる。

「な、なに、き、金髪でてるぞ!？」

「え？ ははは、エクステっていうか、マフラーっていうか、まあ、そ

ういうやつ、オシヤレだろ？ ははは……」

と、秋葉が私の髪をなでる。

うーん……。

塗れた髪の毛が背中とかに張り付いて気持ち悪い。

水着もびしょぬれで不快……。

私は秋葉のシャツの中でもじもじする。

「ひ、ひい、お、おまえ、絶対シャツの中になんか隠してるだろ!？」

「ち、ち、違うって、誤解だから、ははは」

と、秋葉が私の腰のあたりを掴んで動きを止めようとする。

「やつほー、みんな、なにしてるの?」

「おお、奇遇だな、おまえらも池に用事あるのか?」

「お、なんだ、なんだ、みんな集まって」

と、さらに数人がやってくる。

「おお、みんな、なんか秋葉がおかしいんだよ」

「そう、そう、このお腹、見て……」

そっか、もう20時頃になるのか、待ち合わせの時間だね。

第75話 凄然と沈黙のオデッセイ

人が集まってくる。

とりあえず、シャツから顔を出してあたりを見渡す。

逆光でよく見えないけど、十人くらいはいるだろうか……。

「というか、秋葉くん、なんでここにいるの？ 狩猟班は花火の準備で忙しかったよね？」

と、そんな言葉が聞えてくる。

そういえば和泉たちが花火がどうか話していたよね。

「花火、するの？」

私は小さな声で秋葉に尋ねる。

「そう、狩猟班でやる予定」

「へえ、打ち上げ花火だね、どうやって？」

「興味津々だな、ナビィ、聞いて驚くなよ、それはな、あれだ、ナビィは回転草、ダブルウィードって知っているか？」

「うん、知ってる、あれだよ、よく西部劇で風で転がってる丸い草のことだよね？」

「そそ、それに似てる草があったけど、それに火を点けて……」

「だ、誰と話しているんだよ、秋葉あ!？」

私たちの会話を遮るように、そんな大声が響き渡る。

うーん、誰だあ？ せっかく花火の話しをしてるのに……。

と、身をよじりながら秋葉のシャツから顔を出す。

「ひっ!!? なんか、出てきた!!」

それは、中肉中背、少し癖毛の神経質そうな表情の男、生活班の山本新一だった。

「な、なんだ、いったい、秋葉、何に取り憑かれているんだ……?」

と、山本が数歩あとずさる。

「え、ちょっと待って、あれってナビィじゃない……?」

「うん、どうみてもナビィだよ……」

と、鹿島たちがそう指摘する。

やばい、ばれた。

私は大急ぎでシャツの中に頭をひっこめて、

「ナビーじゃないよ、お化けだよ」

と、言い訳を言う。

「ほら、蒼からも」

「ははは、そうだよ、ナビーなわけないじゃないか、ははは……」

秋葉にもフオローさせる。

「はい、はい、お化け、お化け……」

「ずいぶん可愛らしいお化けさんだこと……」

「二人でなにやってるの……」

ああ、駄目だ、完全にばれてる。

くそお、なんでばれたあ……。

「くしゅん」

寒くてくしゅんやみ出た。

「大丈夫、ナビー？ 寒いのか？」

と、生活班の福井麻美が近づいてくる。

「くしゅん」

やっぱり、水着がびしょ濡れなせいか秋葉のシャツの中にも寒い。
い。

「ナビー？」

福井が覗き込んでくる。

「もう、ナビーじゃないってば、くしゅん」

秋葉のシャツで口と鼻を押さえながらくしゅんやみをする。

「ふ、福井、離れる、何かがおかしい!!」

うん？

それは山本の声だった。

「あ、秋葉、おまえ、最初から死んでたんだろ!？」

うーん？

「何を言っているんだ、山本、そんなわけないだろ、ははは……」

「い、いや、おかしいだろ、さつきから、ははは、って、なんだよ、秋葉らしくねえじゃねえか!？」

なんか、山本が凄い声を荒げている……。

「こ、これも、おまえの仕業か、秋葉!？」

と、山本がポケットから紙切れを取り出し秋葉に見せる。

「な、なんだ、短冊……?？」

それはみろり色の短冊。

そこには願い事が書かれている……。

その内容は……。

「山本さま、あなたの考えは正しい、生きているのはあなただけ、他のみんなはもう死んでいる。ここはあの世、その証拠は金の斧の池にある」

静まりかえる中、私が短冊の内容を読み上げる……。

そう、あれは私が山本を池に呼び出すために書いたものだ。

「な、なんか、今、背筋が凍った……」

「こ、怖い事言うのは、なしよ、ナビー……」

と、女子たちが口々に言う。

お?、もしかして、まだまだ、行ける?

「ここは、あの世、みんな死んでるんだ……」

って、言いながら山本も震えているし。

「お、おい、山本、そんなわけないだろ、みんな生きてるって、な、みんな!？」

同じ生活班の佐々木智一が必死に否定する。

「うん、私たちは生きてるわ」

「じゃあ、なんなんだよ、あの秋葉の腹はあ!？」

と、山本が血相を変えてこつちを指さす。

「な、なにつて、ナビーでしょ、ナビーが入ってるんでしょ?」

「そうよ、どう見てもナビーよ、落ち着いて山本くん」

よし、これは行ける。

「痛いよお……、痛いよお……、助けて、新一……」

と、か細い声で言っつて、シャツの襟から手を出して秋葉の顔をぺたぺた触る。

「ははは、ははは、こら、こら……」

秋葉が私の手を掴んでシャツの中に押し込もうとする。

「うわあ、やめてえ……、痛いよお、痛いよお……」

「ひいいい!? あ、秋葉、なんて声を出しやがるんだ、その腹の中に何が
いるんだ!?!」

「いや、だから、ナビィでしょ!?!」

「てか、秋葉くん本当にやめて、山本くんがこういうの弱いって知って
るでしょ!?!」

「お、俺は何もしてないって、ははは……、こら、こら……」

秋葉がそんな否定をしながらも、私のぺたぺた攻撃に顔をそらして
対抗する。

「おい、秋葉、山本になんか恨みでもあるのかよ、本当に怒るぞ!?!」

「そうよ、お化けとか幽霊なんかより、本気でそういうの信じてる人の
ほうが怖いんだから!!」

みんなが口々に秋葉を非難する。

「俺は何もしてないって、誤解だから、ははは……、だから、やめろっ
て、こら、こら……」

今度は両手で顔をぺたぺたしてやる。

「うわ、みえない、みえない、やめ、やめ!」

「ほら、ほらあ」

「はは、ははは……」

楽しくなってきた。

「秋葉あ……、いい加減にしろよ……」

「信じられない、悪ふざけしすぎよ……」

「もう許せない、秋葉くん、本当に性格悪い……」

と、秋葉がみんなから非難される中、真っ暗な空に火球が舞い上
がった。

それは、空高く舞い上がり、そして、火花を散らして弾け飛ぶ。

「おお、花火だ……」

そう、それはまるで花火のようだった。

次々と火球が舞い上がり、上昇の最高到達点に達すると勢いよく弾
けて、大空に大輪の花を咲かせる。

「すごい、どうやってやってるの、蒼?」

と、秋葉に尋ねる。

「すごいだろ、ナビィ、あれはな、さつき言った回転草、ダンブルウィードに火を点けて、それを佐野がハンマー投げの要領で空高く放り投げる、そして、空に上がった火の点いた回転草にハルが矢を射る、それも、ただの矢じゃない、矢尻を丸い石に代えた代物だ、それで射抜くことによつて、勢いよく弾けて花火みたいになる」

「へえ……」

と、秋葉の説明を聞きながら綺麗な花火を見上げる。

「まあ、あれは、佐野とハルの力技だからな、俺には真似出来ない」

火球が舞い上がり、それが弾けて、火の粉が飛び散り降り注ぐ……。

「綺麗だね」

「だろ？ 実は俺のアイデアなんだぜ」

音が無いのは物足りないけどね。

「落ち着けよ、山本、大丈夫だからさ、花火でも見ようぜ」

「うん、うん、みんなと一緒に見よ」

「あ、あたし、何か飲み物とつてくるね！」

と、みんなが山本をなだめて池の縁に座らせる。

「こっちはこれだけ？ よく見えると思っただけだなあ、花火」

「東園寺くんたちは割と普通なナビィファイユリナ記念タワーで見ると」

「みいちゃんや綾原さんたちはロッジのほうだつて」

「そうなんだあ……」

みんなが思い思いの場所に腰掛け花火を見上げる。

「くしゅん」

花火は綺麗だけど、とにかく寒い。

「大丈夫か、ナビィ？ 風邪引かないか？」

と、秋葉が小声で話しかけてくる。

「くしゅん」

駄目だ、寒い。

少しふるふると震える。

そういえば、エシユリンはどうしたんだろう？ 服を持って来てっ

て、手信号でお願いしたのに……。

私は振り返り、金の斧の池の向こうの森の中を見る。

広場に面した木々は枝打ちされており、そのおかげで焚き火の光も差し込み、かなり奥のほうまで視認することが出来た。

「いないなあ」

でも、エシユリンはどこにもいない。

困った。

彼女に浴衣とか下駄とかお面を持たせていたから。

「くしゅん」

寒い。

エシユリンを探しに行こう、このままじゃ本当に風邪を引いてしまう。

「よし、蒼、撤収よ、森の奥に向かうのよ」

と、私は秋葉の頭、びんの辺りを両手で掴んで森の方角に顔を向ける。

「うん？ 花火はもういいの？」

「寒いから着替えたい、たぶん、あつちにエシユリンいるから」

「ああ、そっか、わかった、行こう」

秋葉が森の方向に歩きだす。

「秋葉くん、どうしたの？」

「どこ行くの？」

すると、みんなに声をかけられる。

「い、いや、ちよつと、ははは……」

「ナビーは置いて行きなよ」

「そうよ、なんで、ナビーをおんぶしてるの？ しかもシャツの中に？」

「怪しいよね、ナビーに何かしたの？」

と、みんなが立ち上がり、私たちに向かって歩いてくる。

「ねえ、秋葉くん……？」

「最初は悪ふざけだと思ってたけど、何か隠してるの？」

「うん、おかしい」

「ほら、こっちに渡しなよ」

福井や瀬戸内、伊藤といった生活班の女子たちが近づいてくる。

そして、福井が手を伸ばし、秋葉の脇腹、私の腰あたりを触ろうとする。

「に、逃げるのよ、蒼！」

「わ、わかった！」

私の指示で秋葉が森に向かって駆け出す。

「ああ!？」

「みんなあ！ 秋葉くんがナビーをさらって逃げたよ!!」

「追って、追って、秋葉くんを捕まえて!!」

みんなも私たちを追って走り出す。

「飛んで!!」

「おう!!」

下草を飛び越えて勢いよく森の中に駆け込む。

「秋葉のやろう!!」

「おい、東園寺たちも呼んでこい、絶対捕まえるぞ!!」

「私、みいちゃんたち呼んでくるね!!」

「俺の言った通りだろ、あいつ、何かに取り憑かれているんだよ!!」

「お祓いしなきゃ!!」

そんな怒号も聞えてくるけど、私たちは構わず森の中を駆け抜ける。

第76話 うつりにけりな

森の中はうす暗く、明かりはすぐに届かなくなる。

暗くなるにつれ、それに合わせて走る速度を緩めていく。

秋葉が呼吸を整えつつ、周囲も見渡し現在地を確認する。

私も同じようにあたりを見渡し位置を確認しようとする。

枝打ちされた木々の割合とわずかに差し込む明かり、それを目安に

して広場からの距離を推し量る。

もちろん、下草の量と地面の固さ、乾き具合によってもある程度そ

れらを推察することが可能だ。

「で、エシユリンはどこにいるんだ、ナビー？」

秋葉蒼が尋ねてくる。

「うーん、わかんない……、たぶん、このあたりだと思うけど……」

周囲を見渡しながら質問に答える。

「これ以上奥には行ってないと思う」

この先は下草だらけ、尖った枝だらけ、しかも踏み固めてないからぬかるんでいて歩きにくい。

さらに下草や枝のせいで広場の明かりも届かず暗闇に包まれている。

なので、エシユリンがひとりで奥のほうまで行くことは考えづらい。

「うーん……」

「少し探してみるか……」

と、秋葉が注意深くあたりを警戒しながら歩きます。

「というか、ナビー、いい加減シャツの中から出てくれないか？」

「いや」

シャツの中に首をひっこめて彼の背中にしがみつく。

「いいやって、ナビーもいやだろ、いつもまでも俺の背中にいるの？」

「やだー」

と、力強く否定する。

「ナビーがいいなら、いいけど、俺もいやじゃないし……」

「うん」

出たくても出られないんだよね、水着がすけすけだから。
そして、しばらく歩くと、

「本当はこういうの危ないんだけど……、道に迷う原因になる……」
と、秋葉が足を止めてつぶやく。

「うん？」

もぞもぞと彼の背中をよじ登って前方を見る。

「ああ……」

そこは少しひらけた場所だった。

でも、完全に木を伐採したわけではなく、何本かの木はそのまま生
い茂り、また、伐採したばかりでありろ木材も無造作に置かれていた。

「星明かり、月明かりに照らされて、遠くから見るとラグナロク広場の
ように明るく見える……」

確かに危ないね。

勘違いから方向感覚も狂う。

「もしかして、エシユリン、方向を見失って森の奥のほうに行っちゃっ
たのかな……？」

「どうだろうな……」

彼女に限ってそんなわけないか……。

なにしろエシユリンは現地人間、こういった深い森には慣れてい
るはず。

私たちはひらけた場所に足を踏み入れる。

「おっ！」

なんか木の枝にひらひらとした被服のようなものがかけてあるぞ。
その被服のようなものの柄は白地に水玉模様……。

「あれはー！」

私の浴衣だ！

さらに、よく見ると浴衣の下にはちゃんとピンクの鼻緒の下駄まで
置いてある！

おお、やっと着替えられる。

塗れた水着を脱いで浴衣に着替えたい。

「よし、蒼、あそこに向かって！」

と、腕を出して浴衣の方角を指し示す。

「しっ！」

でも、秋葉に制止される。

「うん……？」

「誰か来た、隠れろ」

秋葉は数歩下がって下草の裏に身を隠す。

しゃがんであたりを警戒していると、ザツザツ、と云う足音が聞えてきた。

「本当に来た」

いつも思うけど、こいつの索敵能力って凄まじいよね……。

「それで、誰、追手？」

「おそらく……」

私は目を細めてその相手を確認めようとする。

森の奥、暗がりの中からランタンを携えてその人物は出てきた。

星明りに照らされたその姿は……。

綺麗に整えた黒い髪と銀縁のメガネ、その奥の鋭い目と聡明そうな瞳。

身長はそれほど高くないが、細身でバランスの取れた肢体を持つ男性。

「人見か……」

そう、それは参謀班の人見彰吾だった。

「彰吾……、金の斧の池にはいなかったよね、見回りかな？」

「こんなところを……？ 俺たちを探しに来たんじゃないのか？」

「うーん、どっちだろ、彰吾なら、みんなが迷子にならないように見回り役を買って出そうな気もするんだけど……」

「ええ？ あの人見が？ そんなイメーτζじゃないな……」

と、私たちはひそひそと話し合う。

そして、人見が広場の中央に進み出て手にしたランタンをかざしてあたりを見渡す。

明かりがこちらに向けられたので、私たちは茂みに身を隠す。

「誰もいないか……」

人見が小さくつぶやく。

やっぱり見回りだね。

私たちは、そつと茂みから顔を出して、人見の行動を見守りつつ、彼が立ち去るのを待つ……。けど……、

「うん？　なんだ、これは？」

人見が何かを発見したみたい。

彼がランタンをかざして見上げる先には……。

「服……う？」

そう、私の浴衣だ。

人見が近くの切り株にランタンを置き、そして、私の浴衣に手を伸ばす。

「こ、これは……、浴衣か……、帯もある……」

私の浴衣を手に取り、まじまじと見つめる。

そして、そのまま私の浴衣を口元に持っていく……。

「くん、くんくん……」

と、匂いを嗅ぎ始める……。

「こ、これは……」

少し離して、再度、私の浴衣をまじまじと見つめる。

「くんくん、くんくん……」

そして、また匂いを嗅ぐ。

な、なんていうか、親の顔よりよく見た光景だよね……。

「何をやっているんだ、あいつ……う？」

秋葉が怪訝そうに眉間に皺を寄せる。

「くんくん、くんくん……」

と、人見は夢中で私の浴衣の匂いを嗅いでいる……。

「くんくん、くんくん、くんくん……」

……。

これは、ひどいわ……。

「くんくん、くんくん……」

許せん、こらしめてやる。

「蒼、チャンスよ、立って」

と、小声で耳打ちする。

「チャンス？」

「そう、チャンス、彼を倒す大チャンスよ」

「ナビー、本気か？ やつは強いぞ」

「物理的に戦うのならね……、でも、これから行うのは心理戦、彰吾の心を折る戦いよ、蒼、私の指示に従って」

「わかった、どうすればいい？」

「まずは、彼が私の浴衣に夢中になっている隙を付いてうしろから気付かれないように近づいて、その先の指示は追って出すから」

「わかった」

と、静かに立ち上がり、茂みから出で広場の中に入っていく。

「そーっとね」

「おうさ」

私たちはそっと、彼の背後から忍び寄る。

「くんくん、くんくん……」

彼は夢中で私の浴衣の匂いを嗅ぎ続けている……。

「そっと、そっとね……」

「お、おう……」

慎重に、音を立てずに歩いていく……。

「くんくん、くんくん……」

くんくんは私の浴衣に顔をうずめて匂いを嗅いでいる……。

「くんくん、くんくん……」

匂いを嗅ぐのに夢中で全くの無防備に見える……。

「じゃあ、蒼、彼の後ろから手で目隠ししてみて」

「え、目隠し……？」

「そう、目隠しよ、私じゃ届かないから」

私は秋葉の背中、シャツの中にいるので手を伸ばしても届かない。

「目隠ししたら、あとは何もしなくていいから、交渉は私がする」

「わ、わかった……」

そーっと、近づき、秋葉が人見の前に腕をまわして、その目元を両

手で押さえる。

「くん……っ？」

くんくんが動きを止める。

そして、私は身を乗りだし、彼の耳元に顔を近づけて言ってみよう、
「めえ……」
と。

おっと、間違った、それはシウスだ。

「ねえ……、彰吾……、私、誰だと思っ……？」

と、言ってみよう。

「く、くん……、い、いや……」

匂いを嗅いでいた私の浴衣をゆっくりと下ろす。

「わかるよね、彰吾……？」

「ふっ……、さあな、誰だろうなあ……」

人見がかすかに笑うと、目隠ししている秋葉の手に自分の手を上から重ねる。

「わからないなあ……」

と、おもむろに秋葉の手を掴む。

「この手は誰のなあ……」

秋葉の手を掴み、そのまま口元に持って行き、唇をつける。

「うーん、誰のかわからないなあ……、味はどうなんだろうなあ……」

とか、言い出して秋葉の手の甲をぺろぺろとなめだした。

「ちよつと酸味があるかなあ……、どれ、こっちは……」

今度は秋葉の指をしゃぶりだす……。

「おお、酸味に加えて塩気もあるな、あと少しだけとろみも……」

こ、これ、どうすればいいんだろ……？

「でも、この味には覚えがある……、そう、この味は……、ナビー、キミだね……っ？」

と、秋葉の手を口から離して、ゆっくりと振り返る。

そして、秋葉と人見、二人の目が合う。

「い、いや、それ、俺の手だけ、人見……」

「いつぎやあああああああ!？」

よっぽど驚いたのか、人見がぴよんと飛び跳ねて、そのまま腰を抜かして地面にへたり込む。

「ああああ、ああ、ああき、あき、秋葉かああああ!？」

驚愕の表情で秋葉を見上げる。

「ああ、残念だけどな……」

「なな、な、なんで、秋葉が、ナビーはどうした、ナビーの声だっただろ!？」

「いや、それがな、なんか、ごめんな……」

「そ、それに、なんだ、その服は、伸びきっているじゃないか、何か入っているのか、その腹に!？」

と、秋葉の腹のあたりを指差して叫ぶ。

「いや、なんでもないぜ、ナビーなんていない」

秋葉が少し笑いを含んだ声で答える。

「じゃあ、なんなんだ、それはああ!？」

「いや、気にするなよ、人見……」

と、秋葉が人見のもとに歩いていく。

「それよりさあ、あの人見彰吾さんにこんな趣味があるとは思わなかったなあ……、あ、思い出したぜ、前の露天風呂攻防戦の時、その時もナビーの風呂を覗きたいとか言ってたよな？ みんなは冗談としか受け取ってなかったけど、まさか、本気だったとはなあ、いやあ、まいった……」

そして、人見がへたり込んでいる前にしゃがみ視線を合わせる。

「う、うぐ、そ、それは……」

「そこでさ……、ちよつと相談なんだが、取引しないか、人見……?」

秋葉が人見の肩に手を置き、ニヤリと笑う。

「取引?」

「ああ、そうさ、ちよつともみ消して欲しい案件があるんだ、実は……」

なんか、秋葉が人見を脅迫してるんだけど……。

第77話 アタック・ワーニング・レイド

ランタンの火が風にゆらされ、それに合わせるように二人の影もゆれる。

「もみ消し……、何の話だ、秋葉……？」

人見彰吾がやつとの思いで声を絞り出す。

「そんな難しい話じゃないんだ、ちよつと、鹿島と問題があつてな……」

「鹿島と……？ 何をしたんだ、秋葉……？」

あれだね、秋葉が鹿島美咲にみんなの前で服を脱いで私はメス豚です、つて言えつて言った事件のことだね。

「いや、俺は何もしていない、鹿島がちよつと誤解しているようなんだ、なんか、俺がセクハラ紛いのことをやらかしたつて、それを東園寺や徳永に報告するつて言うんだよ」

あれ、なんか話が違う。

「誤解なのか？」

「ああ、そうだ、誤解だ、完全に冤罪だ」

「なら、堂々としていればいいだろう」

「いや、いや、まあ、もちろん、そうなんだが、俺がいくら否定しても疑惑は残るだろ？ それが嫌なんだよ」

こいつ、本当はやつてただろ……。

というか、他にも色々悪さしてるだろ……。

「そうだな、疑いは完全には晴れんだろうな……、もう一度聞くが、本当に冤罪なんだな、冤罪ならば俺がなんとかしてやつてもいい」

「もちろんだ、鹿島もたぶんこつちの生活でストレスが溜まって少しおかしくなつたんだと思う、かわいそうにな……、とにかく、鹿島も悪気はないと思うんだ、だから、穏便に済ませてやつてくれないか、なあ、人見？」

「そうか……、わかつた、それとなく対処しておく……」

これは、ひどい、鹿島が悪者になつて……。
ゆるせん。

よし！

「彰吾……、彰吾……、聞えますか……、私です……、蒼の言うことを信じてはなりません……」

と、蚊の鳴くような声で言っている。

「そ、その声はナビー……?」

「ナビーじゃありません、イタコです」

「イタコ!?!」

ちよつと、姿勢が悪いので、シャツの中でもぞもぞする。

あと、べたべたして気持ち悪くなってきた。

「そう、イタコ、今は鹿島美咲の守護霊を降霊させています、このゲテモノ男の言うことを信じてはなりません」

「その声はやっぱりナビーだろ、どこにいる!?!」

人見がきよろきよろと辺りを見まわす。

「ははは、何を言っているんだ、やだなあ、ナビーなんて、いないさ、気のせいだよ、ははは……」

と、秋葉がシャツの上から私の顔をはさんで黙らせようとする。

「むぐ、むぐー!」

だが、まけん!

襟から両手を出して、秋葉の顔をぺたぺたしてやる!

ついでにシャツの中で暴れたり蹴ったりしてやる!

「こ、こら、こら、やめ、やめ、ははは……」

と、秋葉は顔を左右前後に動かしながら私のぺたぺた攻撃をかわし、なおかつ、シャツの上から私の口を押さえてしゃべれないようにする。

くっ、強敵だ……。

「やっぱり、そのびろんびろんに伸びたシャツの中にナビーを隠しているんだな、そうだろ、秋葉!?!」

「くそっ、ばれた、なんでだ……」

と、秋葉が立ち上がり、数歩後退り距離を取る。

「そう、この秋葉蒼は悪党、女の敵なのよ!」

シャツの中で暴れながら告発してやる。

「女の敵!？」

「違う、誤解だ、人見、勘違いしないでくれ、俺は何もしていない!」
秋葉が暴れる私の身体を必死に押さえつける。

「そうか、少しづつ話が見えてきたぞ……、ナビー、キミも秋葉にひどいことをされているんだな、鹿島美咲と同じように……」

人見が人差し指でメガネを直しながら立ち上がり秋葉を睨みつける。

「そう、私もまた被害者のひとり……、グスン……」

「ちよつ、う、うそだ! 最初に俺を脅迫してきたのはナビーのほうだろ!？」

「黙れ、ケダモノ! 女性たちを泣かすやつは俺が許さん、いいから、かかってこい!!」

と、人見が秋葉の言葉を遮るように腕を横に払いながら叫ぶ。

「きゃああ、彰吾、かっこいい!」

と、歓声をあげてやる。

「ふふっ……」

私に言葉にメガネを直しながら頬を染める。

「くそっ、こうなったら逃げるしかないか」

秋葉がシャツの中の私を両手で押さえながら方向転換する。

「逃がすか、ジルアス、カルキアス、サムトリアス、告げ鳴く鹿よ、風かけたるひさかたの白雪よ……」

人見の魔法詠唱がはじまる。

「馬鹿か、そんな長つたらしい呪文が通るかよ、シドヴィシヤス、真理は神の如く、星槍銀糸の黒衣《ティンギール》」

秋葉が短く魔法唱えると、輝きだした人見の身体を覆う光が一瞬でかき消される。

「ちっ、キャンセルか……、忘れていた、おまえはうちで唯一のキャンセラーだったな」

「よし、逃げるぞ、ナビー!」

と、秋葉が茂みの中に飛び込む。

「彰吾、助けて! あ、あと、ついでに私の浴衣と帯、それと下駄も持つ

てきて！」

「わ、わかった！」

人見が追走するのを中断して、浴衣などを取りに行く。

その隙を突いて秋葉が森の中を駆け抜ける。

星の位置から推測すると西の方角に進んでいるのが見て取れる。

「どこに行くんだろ？ たぶんラグナロク広場は北のほうだと思うんだけどなあ……」

と、私は襟からちよこんと顔を出して、枝の隙間から垣間見える星々を見上げながら小さくつぶやく。

その答えはすぐにわかる。

「とうっ!!」

と、秋葉の掛け声とともに宙を舞う。

そして、白い砂利道の上に着地。

振り返るとそこには木で作った水路がある。

秋葉はそれを飛び越えたのだ。

「ふう……、ここなら大丈夫だろう……」

そう、ここはラグナロク広場ではなく白い細かな砂利が敷き詰められた道、ルビコン川に向かう道の途上だった。

「ほら、見てごらん、ナビィ、花火がよく見えるよ」

「うん？」

北の方角。

道が真っ直ぐ伸びるその先……。

火球が空高く舞い上がっていく。

そして、頂点に達すると勢いよく弾けて、綺麗な、無数の火の粉を散らして舞い落ちる。

ゆつくりと舞い落ちる火の粉は辺りを照らし、正面の高い塔、割と普通なナビィフィユリナ記念タワーのシルエットを浮かび上がらせる。

「おお……」

距離があるせいで、ラグナロク広場で見たときよりも迫力はないけど、花火の全体像がよく見えて綺麗、なにより、静かに、ゆつくりと

舞い落ちる火の粉がとても幻想的だった。

「おお……」

まっすぐに伸びた白い砂利道がうつすらと光を放ち、その奥でオレンジ色の花火がきらめく、そして、それが消えると入れ替わりに空いっぱい、満点の星々が輝きを取り戻す。

「おお……」

感嘆の声は尽きない。

「ナビー、花火観賞もそこまでだ」

「うん？」

秋葉の言葉に視線を地上に戻す。

すると、森の中から誰かが飛び出してきた。

「はあ、はあ、はあ、秋葉、ナビーを返してもらおうか……」

「人見……」

それは、もちろん参謀班の人見彰吾だった。

手にはちゃんと私の浴衣や下駄が握られている。

「見つけた！ いたよ、こっちだよ！」

「秋葉がいたぞお!!」

「ビンゴだぜ、魔法に紐付けして正解だったぜ！」

さらに、大勢の人影がこちらに殺到してくる。

「観念しろ、秋葉、おまえの負けだ……」

人見が滴る汗を手の甲で拭いながら秋葉に歩み寄る。

「ナビー、大丈夫、変なことされてない!？」

「秋葉まだ間に合うぞ、自主しろ」

「そうだ、おまえは何かに取り憑かれているだけなんだ!!」

みんなが私たちを取り囲む。

「ふっ、ナビー、ついに最終決戦だな、覚悟は出来ているか？」

と、秋葉が私の頭に手を置き、少し笑って見せる。

「決戦ね……」

私は退路、ルビコン川方面に視線を移す……。

白く伸びた砂利道とそれに並走するように設置された木製の水路、そして、その先にあるだろうルビコン川と、遙か遠く of 山々、ヘルファ

イア・パス……。

空に浮かぶ、まばらな、僅かに赤みを帯びた雲……。

「どうして気付かなかったんだらうね……」

「ナビー？」

花火の明かりのせい？

ううん、違う、たぶん、七夕に浮かれていたから……。

私は秋葉のシャツからもぞもぞと這い出し、そのまま地上に降りる。

裸足で降りた砂利道はひんやりとして冷たかった。

「彰吾、浴衣ちようだい」

「ああ……」

私は人見から浴衣を受け取り無造作にそれを羽織る。

「どうしたの、ナビー？」

「もう、終り？」

「お祭りはこれからだよ？」

と、みんなが首を傾げる。

「公彦、気付いているよね？」

最後方にいた東園寺に尋ねる。

「ああ、当然だ、ナビーフィユリナ」

とだけ短く答える。

「エシュリンがいなくなった時点でこのことは予想していなければならなかった……」

人見から下駄を受け取り、それを履く。

「ナビー？」

彼が不思議そうな顔で私の顔を覗き込む。

「彰吾……、アタック・ワーニング・レイドよ」

彼の疑問に答えてやる。

「アタック・ワーニング・レイド……？」

わからないかな……。

「私たちはこれから何らかの攻撃を受けることになる」
わかりやすく言っただけ。

第78話 かひなくたむけ

アーベントロート。

それは、地平の彼方に沈んだ太陽の光によって、山肌や雲が赤く染まる現象をいう。

別に珍しいものではなく、晴れた日ならば毎日見ることが出来る。そう、いつものこと……。

だからこそ誤認した。

「雲が赤い……」

あの雲の赤さはアーベントロートによるものだと思っていた。

でも、日没から一時間以上、あの雲の赤さは異常だ、あれはアーベントロートによるものではない。

「燃えているな」

東園寺も私が見ている雲を見ながら言葉を発する。

「ええ、燃えている……、しかも、盛大に……」

と、相槌を打つ。

「どのあたりだ？」

「おそらくヘルファイア・パスの向こう、でも、確証はない、もしかすると、そのずっと手前かもしれない」

「そうか……」

彼が目線を落として思案する素振りを見せる。

「どう見る、人見……？」

人見彰吾に意見を求める。

「山火事だろうが……、敵襲の可能性もある……、が、なんとも言えない……」

歯切れが悪い。

まあ、それも当然か、情報が少なすぎる。

「か、火事、かな……？」

「うん、真っ赤だね……」

「うちの花火も大丈夫かな？」

「たぶん大丈夫、飛行機のとこの広場でやってるから、燃えるものなん

「何もないよ」

と、みんなが顔を見合わせて話す。

「よし、一度、ラグナロク広場に戻るぞ、祭りは中止だ」

と、東園寺が手を叩きみんなに指示を出す。

「うん、そうね、山火事だったら大変、何か対策を講じましょう」

女性班の班長、徳永美衣子も同じように手をパンパンと叩いてそれに追従して発言する。

「やっぱり火事かな……」

「うん、なんか怖い、禍々しい感じ……」

「とりあえず広場に戻りましょう」

「うん、急ぎましょう」

みんなが踵を返しラグナロク広場の方向に歩きだす。

「はあ……」

溜息が出る。

これはただの山火事ではない……。

「公彦、偵察を出したい、せめて、プラグマティッシュエ・ザンクツイオンに見張りを置きたい、なんなら私が行ってもいい」

プラグマティッシュエ・ザンクツイオンはルビコン川の向こうにある現地人との交易用の市場の名前だ。

うん、割と普通なナビーフイユリナ記念市場になりそうだったから私が名前を付けた。

なんか、かっこいいよね、プラグマティッシュエ・ザンクツイオンって、意味は、知らない、綾原が世界史の授業で言ってた、語感がいいから記憶に残ってた。

「駄目だ、おまえも広場に来い」

「公彦」

「じゃあ、俺が行くよ、エシユリンのことが心配なんだから、ナビーフは？」
なおも食い下がろうとしたら秋葉がそう助け舟を出してくれた。

「おまえは惨殺対象だろ……」

と、聞えないように小さくつぶやく。

惨殺対象、つまり、捕虜にしないでその場で処刑する対象のこと。

狙撃手や火付けなどがそれにあたる。

処刑もただ殺すのではなく、可能な限りの苦痛を味あわせてから殺す。

それほど狙撃手と火付けは憎まれているのだ。

「なんだ？ エシユリンがどうした？」

「いなくなったみたいなんだ、ナビーがずっと探してた」

秋葉蒼は弓兵、それも遠距離、高所から狙うスナイパー、十分惨殺対象に成り得る。

私が敵なら、投降してきても許さない、捕虜にしない、その場で射殺する。

「そうか、ならすまんが、秋葉、おまえが行って見て来てくれ」

「ああ、わかった、東園寺、見て来る。念の為に弓でも持っていくか、護身用にな」

と、秋葉はプラグマティツシエ・ザンクツイオンではなく、ラグナロク広場に向かって走りだす。

「よし、俺たちも行くぞ、ナビーフィユリナ」

「う、うん……」

私たちは列の最後尾を歩き、ラグナロク広場に向かう。

「まずい……」

そう思わざるを得ない。

エシユリンがいなくなった時点で確定なんだよ、敵の襲撃は。

なぜなら、あれがただの山火事なら彼女は真っ先に私たちに報告するから。

現地人であるエシユリンなら見間違うはずがない。

さらに言えば、想定外の敵襲、例えば帝国軍の襲撃であったとしても同じこと、すぐに知らせにくる。

知らせずに消えたということは、すなわち、それは彼女が意図したということの意味する。

「あいつが敵を招き寄せた……」

状況証拠すべてが、それを示唆している。

「外患誘致は極刑以外にないんだよ……」

あの時、殺しておけばよかった。
ナスク村で虚偽通訳した時、殺すべきだった。
昔の私なら迷わずそうしていた。

「うーん……」

額に手を当てる。

額がひんやり冷たい。

手が熱いのかな……。

「うーん、うーん……」

額に手を当てたまま目を閉じる。

エシユリンか……。

白い民族衣装のようなチュニックとスカート、色とりどりのビーズのネックレスやブレスレット類を身に着けた女の子。

亜麻色の、長く軽くウェーブがかつたさらさらした髪、その頭にお花の冠をのせて……。

顔は幼く、まだ少女のようなあどけなさ……。

いつも、その大きなエメラルドグリーンの瞳で、微笑みながら私を見つめていた。

ふふ、そういえば、今日も自分が作ったりんご飴を褒めてほしくて、私が食べているのをずっと見ていたね……。

「ふふ……、情が移ったか……」

二ヶ月近くも一緒にいれば情も移るよ……。

「いつまでも、私の味方でいてほしかったよ」

目を開ける。

「でも、殺す」

もう迷わない。

あいつは危険だ。

「風向きってどう？」

「相変わらず西風、それほど強くない、チベコウ、サブハイだと思う」

「じゃあ、延焼の心配はない？」

「今のところはね……」

広場ではそんな会話がなされていた。

「班長は来てくれ、会議をするぞ！」

と、東園寺が各班の班長を招集する。

「それ以外の者は中央広場に集合している、全員だ、欠けがないように点呼も取っておけ！」

「うつつ、公彦さん」

「うん、じゃあ、いこ」

班長は東園寺のところへ、それ以外の人は中央広場に向かう。

中央広場は文字通り、ラグナロク広場の真ん中にある石畳の広場だ。

「それぞれ班で集まって点呼取ってね、女性班はこっち」

「生活班全員おっけー」

「参謀班も大丈夫」

「管理班もいる」

「狩猟班は偵察のゲテモノ秋葉以外みんな揃ってる、あ、もちろんナビもね」

中央広場ではそれぞれの班が点呼を取っている。

「秋葉？　なんで、秋葉が偵察？」

「エシユリンがいなくなったんだって」

「ああ、探しに行ってるのか、それなら、みんなでやったほうが早くない？」

「うん、私もそう思う、でも、東園寺くんの命令だし……」

と、女性班の水野若菜が東園寺たちを見ながら言う。

ちらりと彼らを見る。

東園寺たちは中央広場の真ん中の大きなかがり火の前で班長会議をしている。

そういえば、私も班長だったね、マスコット班の班長。

私も班長会議に出席して、ぐずぐずしている暇なんてない、すぐに防衛体制を整えろ、って進言するのが無難だろうけど……。

でも……。

炎に照らされた東園寺の横顔を一瞥して方向を変える。

「ナビー？」

なんか、上機嫌になつてきた。

「ふん、ふん、ふん、ふん、ふん♪」

今度は結い紐で両サイドの髪を一つまみして結う、いわゆるツーサイドアップという髪型にしていく。

「いやあ、幸せだなあ……」

ああ!?

「池に入ったから、お化粧全部取れてるよ!」

やっぱり、夏目にも来てもらうべきだった……。

「くつそお……、お化粧したかったなあ……」

まあ、しようがない、このまま行くか。

と、ロツジをあとにする。

扉を開けた瞬間に風が舞い込む。

ワンピースの裾から入った風が身体を駆け上がり、それが襟から抜け、鼻先をくすぐりながらふわりと前髪を持ち上げ広げる。

「いい風……」

そよ風を感じながらロツジの裏手に回る。

「あつた、あつた……」

そこには巨大な剣が地面に突き立てられていた。

刃渡り1メートルは優に超える大きな刀身……。

それは分厚く片刃、背面、みねの部分は白いガードで覆われ、そこに青い魔法文字がびっしりと刻まれている……。

「ドラゴン・プレッシャー」

柄に手をかけ、もう片方の手は胸のアミュレットに添える。

「行くぞ、ドラゴン・プレッシャー」

渾身の力で大剣を引き抜き、そのままの勢いで一気に振り上げ天にかざす。

第79話 プラグマティッシェ・ザンクツイオン

掲げたドラゴン・プレッシャーの刀身に星々が映り込む。

「相変わらず軽い……、まったく重さを感じさせない……」

大剣を見上げながら、そつと、魔法のネックレスを手の平でつつむ。この魔法のネックレスとドラゴン・プレッシャーはセット、いや、おそらくネックレスのほうが本体なのだろう、その魔力によって大剣の重量を相殺している。

そして、魔力を放出している分、ネックレスは徐々に熱を帯びてくる。

「まだそれほどでもないけど……」

火傷をしないように、ネックレスのペンダント部分を服の外に出しておく。

「さてと……」

と、ドラゴン・プレッシャーを下ろし肩口に担ぐ。

「蒼を助けに行くか」

そのまま走りだし、プラグマティッシェ・ザンクツイオンに向かう。ルートは中央広場から伸びる石畳の道ではなく、誰にも見つからないように草原、それも背の高い草が生い茂った場所を選んで通る。

そして、ラグナロク広場からルビコン川に向かう道にすぐ出るのではなく、少し森の中を走ってから石畳の道に出る。

「よし、誰にも見つかってないな？」

と、うしろを気にしながらルビコン川に向かって走る。

ほどなくルビコン川が見えてくる。

「静かね……」

川面は星々の光をキラキラと反射し、かすかなせせらぎを立てる。それ以外に聞えるのは、回る水車から零れ落ちる、ちやぽん、ちやぽん、という水の音だけ……。

「まだ大丈夫かな……？」

私は周囲を警戒しながらルビコン川に架かった橋、ブリッジ・オブ・エンパイアを渡る。

橋を渡るとすぐに市場、プラグマティッシュエ・ザンクツイオンに辿り付く。

広さは、そうね、だいたい……、直径50メートルくらいの、いびつな円形状の広場って感じ。

石畳もルビコン川から真つ直ぐ伸びた細い道が縦断しているだけの中途半端な造りになっている。

「まあ、全面石畳なんて無理な話だよね……」

ラグナロク広場でさえほとんどが未舗装だし。

「で、蒼はどこいった?」

周囲をきよろきよろする必要もないくらい、すぐに秋葉蒼を見つめることができた。

彼はプラグマティッシュエ・ザンクツイオンの入り口のところにしゃがんで石畳の道を手でぺたぺた触ったり叩いたりしている。

「蒼、何してるの……?」

彼を脅かさないように、ゆっくりと歩いて近づく。

「うん……?」

と、秋葉が顔上げる。

すると、その顔が星々の光に照らし出されてあらわになる。

髪は色素が薄く、まるで染めているかのような栗色。

顔は鼻筋が通り顎のラインはシャープ、瞳も髪の色と同じ、薄い栗色で優しい印象を私に与える。

「誰か来たかと思ったら、なんだ、ナビーだったのか……」

と、彼は笑顔を覗かせる。

「それにどうしたの、それ?」

さらに私のドラゴン・プレッシャーを指差す。

「蒼と同じ理由、ただの護身用」

と、逆に石畳の上に置いてある十字の形になっている弓を指差して答える。

「で、何してたの、這いつくばって?」

私はドラゴン・プレッシャーを石畳の横の地面に突き刺して尋ねる。

「ああ、この辺って俺がやったんだよ、ちゃんとかくつついてるかなって……」

と、彼はまた石畳をぺたぺたしだす。

「ふうん……」

突き刺したドラゴン・プレッシャーの柄から手を放す。

そして、胸元のネックレスのチェーンをつまみ、ペンダント部分を口の辺りまで持ち上げてふうふう息を吹きかける。

「ふうふう、ふうふう」

すごく熱くなってる……、ふうふうして冷やさないと火傷しちゃう……。

「ふうふう、ふうふう」

お？ 秋葉も私の真似して石畳に息を吹きかけはじめたぞ？

「ふうふう、ふうふう、ふうふう」

「ふうふう、ふうふう、ふうふう」

私はペンダントにふうふう息を吹きかけながら秋葉の側にしゃがみ、彼の作業を見守る。

「いやあ、細かい作業でさあ……、石灰に砂を混ぜてセメント代わりにしてるんだけど、強度とか耐久性が心配なんだよなあ……、ちよつと乾きが甘いか……、ふうふう、ふうふう……」

「へえ……、ふうふう、ふうふう……」

セメントねえ……。

確か、ラグナロク広場の石畳の接着は泥に砂利を混ぜたやつでやったよね、方法変えたんだ……、ふうふう……。

「ふうふう……、ねえ、蒼、矢は何本持ってきたの？」

石畳に興味を失い、地面に転がっている矢筒を見て質問する。

「うん？ 矢？ 20本くらいかなあ……、それがどうしたの？
ふうふう……？」

「足らん……」

そんなんじや全然足りない。

「よし」

ペンダント部分の熱が冷めてきた。

ふーふーをやめて元の位置に戻す。

そして、ドラゴン・プレッシャーを地面から引抜き、秋葉が這いつくばっている目の前の石畳に再度大剣を突き立ててやる。

「いつ、ひいひい!?!」

秋葉が大袈裟に驚く。

「な、何をするんだ、ナビー!?!」

「何って、こうやって弾を作るのよ、20本じゃ全然足りないから」

と、石畳をドラゴン・プレッシャーでぎくさく突き刺して石片に変えていく。

「やめ、やめ、何をやってるんだ、ナビー、せつかく作ったのに、何時間かかったと思ってるんだ!?!」

「何よ、仕方ないでしょ、弾がないんだから、それに私、こういうの得意なんだから、昔、ゲバ棒でよくやってたんだから」

ゲバ棒でアスファルトを砕いて投擲用の石を作るんだよね……、だいたい4、5センチくらいの大きさが投げやすかった。

「げ、ゲバ棒……?」

「うん、ゲバ棒、ゲバルト棒の略だよ、ゲバルトっていうのはドイツ語で暴力って意味、つまり、人を殴るための棒ってこと」

昔、ゲバ棒の武地って呼ばれてたんだから。

世界一ゲバ棒が似合う男って言われてたんだから。

まさにインティファダってやつだね。

「そ、そうなんだ、げ、ゲバ棒ね……」

「ちなみに、内ゲバって言葉があるけど、こっちは内部ゲバルトの略、ゲバルトはさつき言ったとおり暴力のことで、内部というのは仲間や味方を指す、つまり身内で殺し合いをするってこと」

「へえ……」

秋葉が感心したように私が石畳を砕いていくのを大人しく見守る。
ぎくさく、ぎくさく、と石畳を砕いていく。

「さらに、どうして、ゲバルトなんてドイツ語を使っているかという
と、マルクスがドイツ人だったとか、そんな下らない理由」

さて、こんなものでいいかな……。

砕かれた石片を剣先で集める。

「あーあ……、それにしても……、どうすんだ、これ……」

と、秋葉が石片のひとつを手に取り呆れたようにつぶやく。

「その弓を使つてのスリング・ショットよ」

矢の代わりに石を使うスリング・ショット。

「そんなの、使い物になるわけ……」

秋葉が弓を手に取り、手頃な大きさの石片を選び弦につがえる。

そして、構えて……、

「アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、バビロンレイ静寂の風盾」

と、魔法を唱えて、石を放つ。

ピーン、とも、キーン、ともつかない音を立てて石が消えた。

そして、数十メートル先の大木から、ガンツ、という大きな音が鳴り響き、それとともに幹が揺れ、枝の葉がバサバサと音を立てる。

「ヒュー……、意外といけるな……」

「ねっ!? いいでしょー!」

と、私は手を叩いて大喜びする。

「でも、このままじゃ弦がもたないな……」

見ると、弓の弦のところから煙が出て、辺りには少しこげた匂いが漂っていた。

「なんとかならないの、蒼?」

と、彼の顔を覗き込む。

「一発、一発時間かかるけど、バビロンレイ静寂の風盾とイージズ魔法障壁の併用でやればなんとかかなると思う」

「ホントに? やった!」

と、ふたたび歓声を上げる。

「それで、矢が20本じゃ足りないって、何か心配事でもあるの? エシユリン絡み?」

と、秋葉が弓を構えたまま視線だけをこちらに向けて言う。

「うーん……」

視線を外す。

エシユリンのこと、なんて説明すればいいんだろう……。

「うーん、うーん……」

と、顎に手を当てて考え込む。

みんなはエシユリンのことを信用してきつっているんだよね、あの子のドジッ子プレイに完全にやられている。

だから、みんなには気付かれないうように、こっそり始末したい……。

「何か、悩んでいるようだね……」

と、秋葉が落ちていている矢筒を拾い、中から矢を一本取りだす。

「蒼？」

彼が取り出した矢は通常の白い羽の矢とは違い、赤い羽が取り付けられているものだった。

「100人以上」

そして、その矢先をマツチみたいにベルトで擦ると、パシユ、という音とともに赤い炎が立ち登る。

「100人以上？」

彼の言葉を聞き返す。

秋葉は火の点いた矢を弓につがえて空に向ける。

「ああ、100人以上だ」

そう言い、空に向けて火矢を放つ。

火矢はうなりを上げて大空に舞い上がり辺りを照らす。

「あーん……」

と、口を開けて火矢の弾道を目で追う。

たぶん、これは信号弾……、ラグナロク広場の東園寺に何かを伝え
た。

「敵かどうかわからないけど……、なんらかの集団がこちらに向かっ
てくる……、数は、そうだな……、100から150……」

秋葉が振り返り、南、ヘルファイア・パスの方角を見ながら言う。

「100から150……、やっぱり来たか……」

エシユリンの仕業だ。

「敵か味方かわからない、未確認の集団を発見した場合、なんて言えば
いいんだろう？」

私に対しての質問かわからないけど一応答えてやる、

「アンノウン・レーダー・コンタクト」
と。

第80話 一蓮戦ぐ

ルール・オブ・エンゲージメント。
つまり、交戦規定。

どのような状況で攻撃を加えていいのかという決まりごと。

それは、武器を持っていたら？

それとも、武器を構えたら？

まさか、発砲するまで我慢しろって話じゃないよね？

え？ 一発だけなら誤射かもしれない？

などなど、そういつたことを定めているのがルール・オブ・エンゲージメントになる。

そもそもこのルール・オブ・エンゲージメントは相手が軍隊であるということ的前提にしている。

軍隊の定義。

- 1、所属が明らかであること。
- 2、指揮権が明らかであること。
- 3、武装をしているのが明らかであること。

この三つを満たさなければ軍隊とは認められない。

それはもはやゲリラと同じ、ルール・オブ・エンゲージメントの適用範囲外、見つけ次第、即先制攻撃を加えることが出来る。

ジュネーヴ条約も、ハーグ陸戦条約も意味をなさない。

サーチ&デストロイ。

もつとも、この世界でも、そのような条約や法律が適用されるとは思わない。

だから、別に無視しても構わない……。

しかし、そもいかなないのが世の中、人というのは常に正当性を求めるもの。

自分がこれから行う不当行為を担保する正当性が欲しい。

その悪を肯定するのが条約であり交戦規定なのだ。

その条約や法律、交戦規定に効力、実効性のあるなしに関わらず……。

「自衛的先制攻撃を加える……」

相手が誰かなんて確認する必要すらない、もう既にこの時点で軍隊の定義から逸脱しているから。

つまり、所属を明らかにしていない。

「ゲリラと見なす」

私の正当性が証明された。

地面に突き刺さったままのドラゴン・プレッシャーの前に立つ。

まだ柄には手をかけない。

極力ネックレスを加熱させたくないから。

「ナビー、もうすぐくる、一旦退こう、ラグナロクに帰ろう」

秋葉が私の肩にそっと手を置く。

「何を言っているの、蒼、ここで迎え撃つよ、川を、ルビコン川を越えられたら厄介だから」

エシュリンからの情報が行っているのなら、敵は必ずここを通過するはずだ。

なぜなら、橋、ブリッジ・オブ・エンパイアがあるから。

たかだか十数メートルの川幅であっても渡河はしたくない。

なぜ川に入りたくないかっていうと、それは濡れるから、濡れると不衛生だから、不衛生だと病気になるから、遠くから行軍していくる部隊は極力日当りのいい場所、風通しのいい場所を選んで進むのは用兵の基本。

「いやいや、ナビー、駄目だ、ここは危ない、ラグナロクで東園寺たちが準備しているはずだ、戻ろう」

と、秋葉が首をふる。

「むう……、だから、戦うってば」

「戦うって、遊びじゃないんだぞ、ナビーが怪我したら、俺がみんなから叱られる」

と、彼が私の肩を強く掴む。

「い、痛いから」

反射的にその手を払う。

「ナビー……」

「それに、もう遅い……」

掴まれた肩をさすりながら言う。

「小動物の気配、鳥の鳴き声、風に揺らされる枝葉の音、それらすべてが敵の接近を教えてくれる……」

今や秋葉でなくてもわかる、敵がそこまで来ている。

「蒼、弓を構えて、見えた瞬間行くよ」

ドラゴン・プレッシャーの柄に手をかける。

「ほ、本気か、ナビィ、やっぱり遊びのつもりなんだろう……?」

と、困惑しながらも、秋葉は弓を手に取り、矢筒から矢を取出しつがえる。

「ゴツドハンド……」

手に魔力を込める。

最初から全力でいく。

プラグマティッシュエ・ザンクツイオンの向こう側の森の中が騒がしくなった。

そして、人影が見える……。

柄を握る手に力を込める。

先頭のやつが広場に足を一步踏み入れた。

私は勢いよくドラゴン・プレッシャーを地面をから引き抜く。

「蒼、斬り込む、制圧射撃お願い、足止めして!」

と、叫び、ドラゴン・プレッシャーを構え、姿勢を沈み込ませて、秋葉の第一射目を待つ。

深く、深く、姿勢が沈み込む……。

「すう……」

息を吸い込み、視線を落とす。

まずは秋葉の弓矢に動揺している敵を尻目に敵陣奥深くに切り込む、そして、最後方で高みの見物をしているだろうエシユリンを直接狙い、これを始末する。

私が戦っているところを秋葉に見られても構わない、今はエシユリンを殺ることだけに心血を注ぐ。

覚悟を決め、視線を上げて広場の先を見る。

早くしろ秋葉……。

でも、なかなか撃たない……。

「待て、ナビィ、何か様子がおかしい……」

「うん？」

私は油断なく剣を構えたまま目を凝らして敵を見る。

「あーん？」

弱々しい星明かりではよく見えない。

でも、そろそろ、そろそろとゆつくり広場に入ってくる大勢の人影は視認出来る……。

「あれって……、敵じゃないよな……、どう見ても……」

「はあ……？」

うーん……。

構えを解いて、さらに目を凝らしてやつらを見る。

それは、ベージュ色の厚手の浴衣って感じの服装の年配の人、少し小太りなおじいさん風な感じ……。

そのうしろにも同じような服装の女性や子供たちが助け合い、支え合いながら広場の中に入ってくる。

「あれって、ナスク村の村長さんたちじゃないか？」

と、秋葉が私の隣まで来て言う。

「うーん……」

確かに、私にもそう見える……。

「何しに来たんだ、こんな時間に、行商ではなさそうだし……」

誰も荷物を持っていない、物を売りに来たわけではなさそうだ。

「うーん……」

と、真意を測りかねて首を傾げてしまう。

私が首を傾げている間にもナスク村の人たちがそろそろ広場に入ってくる。

「ほつろー！」

と、村長さんが私たちに気付いて大きな声で叫ぶ。

「ほつろー！」

「ほつろー！」

「ほつろー！」

と、他のみんなも同じように大きな声で叫び私たちに向かって手を振る。

「ほ、ほつろー……」

私もつられて片手を挙げて言葉を返す。

「なんだよ、ナビー、そういうことかよ、祭りの見学に招待してたのか……、ということはエシユリンもグルか、村長さんたちを迎えに行っていたんだな……、いやあ、騙された……、おかしいと思ったんだよ、ナビーが戦うとか言い出したからさ……」

と、秋葉が苦笑いして頭を掻く。

「ほつろー、すっしー！」

「きゅー、きゅー！」

「きゅー、きゅー、たまごぼろぼろまい！」

「きゅー、きゅー、ふらむ、きゅっきゅー！」

村長さんたちが必死に何かを叫んでいる。

よく見ると、広場に入ってきた人たちが座り込み、中にはそのまま倒れ込む人までいた。

「な、なんだ……？　ちよつと待て、ナビー、なんか怪我してないか……？」

村長さんの白い頭に赤い物が混じっているね。

それ以外にも腕を押さえていたり、足を引きずっている人が大勢見受けられる。

「やっぱり怪我をしている、助けに行くぞ、ナビー！」

と、秋葉が駆け出していく。

「あ、蒼ー！」

私もそのあとを追う。

「罨の可能性もあるな……」

私はドラゴン・プレッシャーの柄をしっかりと握り締めて走る。

「ぞ、村長さん、大丈夫ですか!？」

と、秋葉が倒れ込んでいる村長さんに駆け寄り背中に手を添え尋ねる。

「ほつろー、すっしー……、けしやふ、けせふい……」

「何があつたんですか、村長さん、これは!?!」

「かつつお、まどんな、たまこ、ぼろぼろまい……、でつど、ろーす……」
と、村長さんが息も絶え絶えで訴える。

「それにしても、これは……、罨、では、なさそうね……」

私は周囲の惨状を見渡しながらつぶやく。

「けしやふ、たまこ、でつど、ろーす、わ、ぱーす」

「な、ナビー、なんて言ってるんだ、通訳頼む!」

秋葉が振り返り、私に通訳を求めろ。

私はネックレスが熱くなるのを嫌い、ドラゴン・プレッシャーを地面に突き立て手を放す。

「けしやふ、たまこ……、ふらむ、でつど、ろーす……、わ、ぱーす……」

「うーん……、カタコトだけど、たぶん……、村が火事になった……、災いが来た、助けて……?」

「な、なに!?!」

あ、いや、違うかも……。

同じけしやふでも、高音と低音じゃ意味が違くなるんだよね……、よく聞き取れなかった……。

でつど、ろーすは中音だと不幸とか災いだけど、低音だと苦しいとか気持ち悪い、高音だと悪党とか犯罪者っていう意味になる……。

音調言語っていうのかな……、これはネイティブじゃないとなかなか聞き取れない。

「秋葉、どうなっているんだ!?!」

「なんなんだ、これは!?!」

と、うしろから足音とともにそんな大声が聞えてきた。

「怪我をしているのか?」

「ナスク村の人たちか、どうしたんだ?」

管理班の二人、神埼竜翔と久保田洋平だった。

「いや、村が火事らしいんだ、それで避難してきたらしいんだ」

「そうか、やはり、火事か!」

「なら、急いで公彦さんに報告だな!」

と、神埼がきびすを返す。

「待って、ただの火事なら、どうしてこんなところまで避難してくるの？」

もう一人いた。

「ナスク村からここまで何キロあると思っているの、30キロ以上あるのよ、変よ」

それは参謀班の綾原雫だった。

第81話 朽木の先に

ここはプラグマティッシュエ・ザンクツイオン。

ルビコン川を越えたところにある、現地の人たちと交易をするために作られた市場だ。

そのプラグマティッシュエ・ザンクツイオンは今や大勢の怪我をした現地の人たちで溢れかえっていた。

その数は……。

「いったい、何人いるんだ……?」

すでに50人以上はいる。

「まだまだ来るぞ、公彦さんになんて報告すればいいんだよ……?」

管理班の久保田洋平が森から広場に入ってくる彼らを見ながらつぶやく。

「それに火事じゃないって? だって、あいつらが火事だって言ったんだろ、秋葉?」

と、同じ管理班の神埼竜翔が秋葉蒼に尋ねる。

「あ、ああ、そうだよな、ナビー……?」

と、秋葉が私に話しを振る。

「う、うん、た、たぶん……」

自信なく視線を逸らす。

「だから、そんなはずないわ、距離もそうだけど、村の人たちの服装が変よ、全員服が汚れていない、火事なら少なからず、すすで汚れていてもいいはずよ、それに、切り傷、私には刃物によるもの見える」

綾原雫がそう話を切り出す。

「あと、ナビー、あなた、どうしてここにいるの? 翼が探していたわ

よ、どうして黙って行くの、すぐに戻りなさい」

私はビクツとして首をすくめる。

うく、怒られた……。

「いや、でも、やはり、火事じゃないのか? あんなに空が赤いし」

「ああ、燃えているのは確かだ、その原因の話しか? 公彦さんに報告に行かないといけないから早く結論を出してくれ」

と、管理班の二人が言う。

「火事以前にこの大勢の怪我人をなんとかしなきゃいけないだろう」
秋葉も追隨する。

「待って、初動を誤ると大変なことになるから、まずは状況確認と情報収集が先よ、どうするかはそのあとでいい」

「悠長すぎるだろう、とにかく公彦さんに報告しないと始まらない」

「そうだ、そうだ、俺らは行くぜ、この状況を報告する」

「だから、待って」

なんか、揉めてる……。

「かつつお、まどんな、たまこ、ぽろぽろまい、でつど、ろーす」

へたり込んでいた村長さんが私の顔を見上げてゆっくりと言葉を話す。

「うーん……」

「けしやふ、たまこ、ふらむ、でつど、ろーす、わ、ぱーす」

「うーん……」

顔の上げ下げ、手の上げ下げでも高音、低音を表現出来るんだよね、確か……。

「けしやふ？ るって、わ、ぱーす、でつど、ろーす？」

と、私は手を上げ下げしながら聞き返す。

「けしやふ……、でつど、ろーす……」

村長さんも私と同じように手を上げ下げして言葉を確定しながら話してくれる。

「おお……」

意外と通じるものね。

「かつつお、まどんな、わ、るって、ふらむ、どうわゆー、まーも」

と、村長さんが言葉を続けてくれる。

「ふむ、ふむ……、なるほどね……」

私はこくこくとうなずく。

「な、なんて言ってるんだ、ナビー？」

「やはり火事なんだろう？」

「どうなんだ？」

と、秋葉たちが尋ねてくる。

「えつとね……、どうわゆー、まーもがね、村に火をつけたって」

「どうわゆー、まーも？」

「えつとね、なんて言うんだろ……、不死身の騎士……？」

「不死身の騎士!?!」

いや、不死の軍隊、のほうがしつくりくるかな……。

「その不死の軍隊ってなに？」

と、現地の言葉で村長さんに聞く。

「それは……、帝国軍特務部隊、不死者マジョーライの軍隊……」

「帝国軍、不死者、マジョーライ……」

どこかで聞いたな……。

「やつらが村を襲った……、みんな殺された……、生存者をまとめ、なんとか、ここまで逃げて来たが……、それももう……」

がつくりとうなだれる。

つまり……。

「ナビー、村長はなんて言ってるんだ、ノイズが混ざる、おかしい、森の中に村の人ではない、何か得体の知れないのがある、なんなんだ、あれは!?!」

秋葉が叫ぶ。

「森の中から悲鳴が聞えてくるぞ、どうなってるんだ!?!」

「どうする、助けに行くか!?!」

「駄目よ、危ないから、今は情報収集に徹して」

森の中に助けに行こうとする神崎と久保田を綾原が制止する。

「きゅー、きゅー、たまこぼろぼろまい!」

「きゅー、きゅー、ふらむ、きゅつきゅ!」

「どうわゆー、まーも、きゅー、きゅー!」

と、ナスク村の人たちが慌てて這うようにして広場の奥のほうに逃げて行く。

「駄目、逃げる、一回ラグナロク広場に戻りましょう」

「怪我人を放っておけって言うのかよ、綾原!?!」

「だって、どうしようもないでしょ、人見の意見を聞きたい、とにかく、

ラグナロク広場に帰る、行くわよ、ナビー」

「何しに来たんだよ、おまえは!?!」

と、綾原と久保田が言い争う。

「綾原、言い合いをしている場合じゃないだろ、いいから防衛陣をし
け」

秋葉が静かに、でも、よく通る声で言った。

「ぼ、防衛陣、ど、どうするつもりなの!?!」

「いいから早くしろ、久保田、神埼、剣を抜け、センターをやれ、俺が
フィニッシャーをやる、ナスク村の人たちが避難するまで時間を稼ぐ
ぞ」

「おう」

「わかった、センターをやる」

秋葉が立ち上がり、矢筒を開け逆さにする。

すると、矢が高速で落下し、20本の矢が地面に突き刺さる。

「ああ、そうだ……、アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、
静寂の風盾」

と、呪文を唱えて、石畳の上に踵を叩きつける。

すると、石畳の道が砕け、大小様々な石片が出来上がる。

「ゲバ足ってやつか、ナビー?」

口の端で笑い、石片の一つをサッカーのリフティングの要領で蹴り
上げて手に取る。

「ハル、東園寺、佐野、人見……、俺らはあの辺りの人外じゃないけど、
まっ、なんとかなるさ」

手にした石片を手の平でポンポンしながら軽く笑う。

「おまえも十分、人外だろ、秋葉」

「そうだ、そうだ、おまえもやばい」

神埼と久保田も笑う。

「ほ、本気なの、相手が誰かもわからないのに……、もう……、アンシャ
ル・アシユル・アレクト、七層光輝の鉄槌、赤き聖衣を纏いし深淵の
主……」

それでも綾原が渋々呪文を唱え始める。

「エア、エンリタ、エシルス、舞い降りろ、死の女神、フォートル・ザ・アルテミス光輝の流星陣」
詠唱が終わると、彼女の身体から眩い光がほとばしり、それと同時に上空から赤い光がまっすぐに落ち、それが弾けてドーム状に広がっていく。

そして、ドームの端が森に到達する瞬間、

「うおおおおおおおっ!!」

「おがおおおおおおっ!!」

と云う、人とも獣ともつかない雄叫びが広場中に響き渡る。

「ひっ?」

綾原が反射的に身をすくめる。

これは、ウォークライ。

獣が無意識に行う雄叫びではなく、人間が意図して、自らの力の誇示、敵への威嚇のために行われる叫びだ。

「うがおおおおおおっ!!」

「うがあああああおおっ!!」

複数の敵が広場に侵入した。

姿は……、艶のない、マットブラックの鎧、同色のバケツヘルム、手には大きな戦斧……。

濃いグレーのクロークを身に纏い、その手にした戦斧を振り上げた瞬間、クロークも同時に舞い上がる。

振り上げた戦斧は身近な村人へと振り下ろされようとしていた。

「アスシオン、煌く光、花より美しく、風を纏え、バビロニヤ希釈の風剣」

呪文とともに、秋葉の弓から石によるスリングショットが放たれる。

放たれた石は空気を切り裂き、凄まじい音を立てて黒色の鎧の男の腕、振り上げた戦斧を持つ腕の肩辺りにヒット。

肩に石を受けた男は爆撃でも受けたように吹き飛び、森の中まで飛ばされていった。

「ビュー、やっぱ、いいな……、石……」

と、秋葉が短く口笛を吹く。

そして、またサッカーのリフティングの要領で石を蹴り上げ手に取

り弦につがえる。

「よーし、行くぞ、久保田、戦線を支えるぞ、フィンツシャーの秋葉に絶対近づけるな！」

「おおう、わかった、やってやるぜ、遅れをとるなよ、神埼！」

管理班の二人、久保田と神埼が剣を握り締めて敵目掛けて駆け出す。

二人は剣を両手で握るバーサーカースタイル、当然、盾は所持していない。

「きゅー、きゅー、るって、なぎ、ぱーす、ぷーん！」

「きゅー、きゅー、ふらむ、きゅつきゅー！」

「どうわゅー、まーも、きゅー、きゅー、なぎ、ぷーん！」

大勢のナスク村の人たちが私たちの後方にわれ先にと逃げ出していく。

久保田と神埼がそれをかき分けながら進む。

「シロス、権力によらず、暴力によらず、その身を押し、シュトラーゼ追い風」

綾原が彼らのために補助魔法をいくつか施す。

「戦闘なんて、想定外よ、お願いだから怪我しないでね、つていうか、死んだりしないよね……、ラセンカ、精霊の森に眠る悠久の追憶よ、トウパ、審判の時に雨粒が草木を潤す、天のリラレイ後の地知」

二人の身体が薄つすらと光り出す。

そして、接敵、互いの刃が届く距離に到達。

戦いが始まる。

第82話 淘汰覇議

マツトブラックの鎧の男が、その手にした戦斧を振り下ろす。
それも無言で。

先程のような雄叫びはない、ただ無言で振り下ろす。
それだけで、相手が歴戦の兵士だとわかる。

「うおつと!？」

振り下ろされた戦斧を神埼が大きく横に飛び退いてかわす。

「あぶね……」

だが、攻撃はそこで終わらない、敵が身体を横に一回転させながら
戦斧を払う。

「あめえよー!」

と、神埼が戦斧に剣を合わせる。

戦斧と剣が触れた瞬間、火花が散り、戦斧が真つ二つに割れる。

「おしー!」

と、神埼が返す刀で斬ろうと剣を振り上げたと同時に敵がもう片方
の手に持つ盾を思い切り神埼の顔面に叩き付けた。

「あぐつ!？」

鼻と口から血しぶきが飛ぶ。

「くそっ!」

神埼が反射的に剣から片手を放し、鼻と口を押さえる。

これが戦闘慣れ、している、していない者の差だろう、普通は戦闘
中に自分の怪我なんて気にしない。

敵はヘッドが真つ二つになっていようが構わず、戦斧を神埼の脳天
に叩き落とそうとする。

しかし、その戦斧が振り下ろされることはなかった。

「ヒュー……」

僅差で秋葉のスリングショットが決まる。

「すまん、秋葉……」

と、神埼は鼻と口の血を袖で拭う。

「おまえらとはかく足止めだ、倒すことを考えるな」

「ああ、わかった！」

剣の性能と魔法の力で私たちが圧倒的に有利なものにも関わらず危うい。

「うらあああ!!」

「どらあああ!!」

と、大声を出すのは神埼と久保田だけ。

敵は淡々と無言で応戦する……………。

戦闘経験の差が歴然だった。

「きゅー、きゅー、ふらむ、きゅつきゅー！」

「やらせるかよ」

秋葉は背後から村人を襲う敵を優先して排除していく。

誰を第一に守らなければいけないか、見誤るなよ、秋葉……………。

「シロス、権力によらず、暴力によらず、その身を押し、追シュトラゼい風！」

綾原も両腕を大きく広げて必死に魔法を唱え続ける。

その額に汗が滲む……………、無理をしていることは明白だった……………。

「まづいな……………」

前衛、近接壁役が東園寺と佐野、遠距離アタッカーに和泉、後衛サポートが人見、この最強布陣ならば安心して見ていられただろうけど、今は不安しかない。

「うらあああああ!!」

「どりゃあああああ!!」

勇ましいけど、非常に素人くさい……………。

それでも防御に徹すれば持ちこたえることくらいは出来る。

持ちこたえて、なんとか秋葉の弓で倒してもらおう、その繰り返しだ。

「何もかも終りだ……………、不死の軍隊に追いつかれた……………、みんな殺されてしまう……………」

「おじいさん……………」

私は村長さんの横にしゃがみ、その背中を優しくさする。

「ごめんなさいね、村長さん……………、苦しいでしょうけど我慢してくださいね、あとで治癒魔法をかけて差し上げますから……………」

綾原も魔法と魔法の合間にそう声をかけ励ます。

「く、くそお、どうなつてんだ、全然、減らねえぞ!？」

「はあ、はあ、はあ、汗が目に入った、ちくしょう!!」

戦闘が始まって、まだ二、三分だと思うけど、もう二人の息が上がってしまっている。

そして、最悪なことに敵の数はどんどん増えていく。

次から次へと、森の中からあらわれる。

広場にはすでに二十人以上の敵兵がいた。

「どうした、足を止めるな、戦え!!」

秋葉が二人に檄を飛ばす。

「くそ、はあ、はあ、はあ……」

「ひい、はあ、ひい、はあ」

でも、神埼、久保田の動きは鈍い。

「終了だね、あの二人はいずれ殺される」

私は村長さんの背中をぼんつと軽く叩いてから立ち上がる。

「お嬢さん……?」

と、村長さんが私を見上げる。

「不死の軍隊だっけ? あいつらをやつつけてくる」

「や、やつつけて……?」

「まっ、見てて」

と、笑顔をつくる。

「お、おい、神埼、カバー頼む……」

「無茶言うな、こつちも限界だ!」

二人がじりじりと後退してくる。

それに呼応するように、敵の集団が半包围状に距離を詰めてくる。

「あ、秋葉、頼む、なんとかしてくれ!？」

「綾原も、なんか、防衛陣、強力なのをしてくれ!!」

と、二人がうしろを向いて叫ぶ、そのタイミングを敵は見逃さない、一気に距離を詰め、神埼と久保田に襲いかかる。

「前を向け!!」

「あ、危ない!!」

秋葉と綾原も二人に危険を知らせるけど、たぶん、間に合わない。

「もう、しょうがないなあ……」

私はドラゴン・プレッシャーを地面から引き抜き、

「とおりりやああああ!!」

と、渾身の力で投げつける。

そして、投げると同時に走りだす。

「アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、パピロンレイ静寂の風盾」

魔法もかける。

ドラゴン・プレッシャーはうなりをあげながら突き進み、敵兵と神埼たちの間の地面に突き刺さり、盛大な石片と砂煙を巻き上げる。

「ひっ!？」

「な、なにっ!？」

それに驚いた二人がその場に尻餅をつき顔をかばう。

「なんで、あんたらが腰を抜かすのよ……」

私は走りながら首にかけていたネックレス、魔法のアミュレットを手に取り、くるくる回し、空高く放り投げる。

「邪魔、しゃがんでて」

そのまま走りぬけ、尻餅をついている二人の頭上を飛び越える。

そして、空中で地面に突き刺さっているドラゴン・プレッシャーの柄をキヤッチ。

「こんの野郎!!」

柄を掴み、遠心力によって身体は回転し、そのまま敵の顔面に強烈な蹴りを食らわす。

グシヤリ、そんな金属がひしゃげるような音を立てて、敵にバケツヘルムが空中に舞う。

「ぐあっかつ」

蹴られた敵は血を撒き散らしながら、くるくる三回転くらいして地面に沈む。

私もドラゴン・プレッシャーの柄を握りながら三回転くらいして地面に降り立つ。

「ふっ……」

そして、敵を見据えながら手を天にかざす。

すると、その手に先程投げたネックレスが落ちてくる。

そう、ネックレスをしたままだと、さくつと抜けちゃうから、一回空に放り投げた。

「じゃあ、やるか、不死の軍隊？」

ドラゴン・プレッシャーを横に払うように引き抜くと、大量の石片がやつらに向かって飛んでいく。

「うおおおおおおおっ!!」

「おがおおおおおおっ!!」

「うごおおおおおおっ!!」

やつらが獣ともつかないような雄叫び上げやがった。

「なに、いまさらウオークライ？ 笑わせんなよ、シャバ僧」

クスリ、と、笑ってしまふ。

「それとも、なに、それはウオークライじゃないの？ 怖くて叫んでしまっただけなの？」

でも、怖くて当然か……。

たかだか身長140センチ程度の少女が刃渡り1メートル以上、柄を合わせると2メートル近くの、重量100キロ以上ありそうな大剣を軽々と振り回しているんだから、彼らの目には異様に映ったはず。

「ドラゴン・プレッシャー……」

それは分厚く片刃、峰や柄の部分には流線形の白いガードが付いている美しい造詣の大剣……。

柄の部分も根元と先では太さが異なり、両手で握る両手剣を意識されてか、押し手である左手部分は太く、切り手である右手部分は細い造りになっている。

「強く押し込み、鋭く切裂く……」

それを自然と意識させてくれる大剣だ。

「うおおおおおおおっ!!」

「うごおおおおおおっ!!」

左右から敵が襲いかかる。

ドラゴン・プレッシャーを正面に構え、すつと前に出す。そして、両側から振り下ろされる戦斧を軽く左右に払う。

戦斧の刃に対してドラゴン・プレッシャーのしのぎ、刀身の腹の部分に当てる。

接触と同時に小さな火花を散らし、敵の戦斧が左右に弾かれ勢いよく飛んで行き、数十メートル先の地面に突き刺さる。

「うん、いい剣だ、あらためてそう思う」

しのぎも厚く頑強。

基本的に相手の武器は刃ではなく、しのぎ、つまり刀身の腹の部分の真ん中で受けるのが定石となる、まともに受けたら刃こぼれしちゃうからね。

ここは刀身の中でも、もつとも厚く、また、折れにくい箇所になる。

「やごと」

カチャリと刃を逆にして峰打ちの格好に握り直す。

いくら敵でも思いつきりたた斬って殺したら、綾原とかがドン引きするからね……、っていうのは冗談で、敵は金属製の鎧を着ているので、刃こぼれする可能性がある、なので、峰を鈍器のように使って撲殺することにした。

「手加減してやる気なんてさらさらないから……」

敵に向かい歩きだす。

私はだらんとドラゴン・プレッシャーを降り、石畳を引きずりながら歩く。

剣先から火花が散る。

「う、うおおおおおっ!!」

それは恐怖からだっただろう、敵の一人が大きく戦斧を振り上げ向かってくる。

「遅いわ」

振り下ろされる戦斧を下から斜め上になぎ払う。

戦斧は粉々に砕け散り、さらに、敵の身体を打ち砕き、細かな金属片を巻き散らし、身体は回転させながら空を舞い、数十メートル先に落下、そのまま動かなくなる。

「次」

今度はドラゴン・プレッシャーを地面に突き刺し手を放す。

「早くしろ」

「くっ……」

「くあ……」

「おう……」

警戒したのか、不死の軍隊の連中はじりじりと後退していき、そして……、

「どうわゆー、まーも、わ、ぱーすー！」

「でっど、ろーす、ぷーん！」

「ちや、るって、ぷーん！」

と、連中が振り返り、全速力で森の中に走っていく。

「あ、逃げた……」

私はやつらを追うことなく、その背中を見送る。

第83話 ゆくえも知らぬ

やがて、広場、プラグマティッシュエ・ザンクツイオンから敵の姿が消える。

「ふう……」

と、一息つく。

そして、襟元のネックレスのチェーンをつまみ、ペンダント部分を持ち上げて、そこにふうふう息を吹きかける。

「ふうふう、すごい熱くなってる……、ふうふう」

ただ持ち歩いている時よりも、戦闘で使うほうが熱くなるのが格段に早かった……、まあ、当然と言えば当然だけどね、魔力の使用量が全然違うだろうし……。

「でも、いい剣だね、あらためて気に入ったよ」

と、地面に突き刺さっているドラゴン・プレッシャーの柄を軽くポンポンと叩く。

「な、ナビィ、大丈夫か、怪我はないか……」

近くで腰を抜かしていた神埼竜翔がふらふらと立ち上がり、私の身体を気遣ってくれる。

「りゅ、竜翔こそ！ 血出てるよ！」

と、私は慌てて彼に駆け寄り、その身体を支える。

「だ、大丈夫だ……」

と、彼は言うけれど、口元を押さえた手の隙間からポタポタと血がしたり落ちていた。

「雫！ 魔法、魔法！」

私は両手を大きく振って綾原雫を呼ぶ。

「どんな感じ？ 痛む？」

と、彼女はすぐに駆けつけてくれる。

「ああ、ちよつと、い、いや、だいぶ……」

そのまま、その場に座り込む。

「手を放して……」

「ああ……」

と、神埼が口元から手を放すと、血がポタポタではなく、一本糸を引くように地面にこぼれ落ちた。

「うわぁ……」

久保田があとずさる。

「歯が抜けたとか、そんなんじゃないやなくて、顎とか鼻が折れてるんじゃないのか、それ……」

秋葉も眉間にしわを寄せて言う。

「わからないわ……、とりあえず、応急手当をする……、アスタナ、美くしき、流れのほとりで、慈雨にその身を任せ、癒しの精霊糸」

綾原の指先からふわふわとした糸が吹き出し、それをわた飴の要領で指にくるくると巻いていく。

「止血するね……」

そして、それを神埼の口元、鼻元にあてる。

「ラセンカ、精霊の森に眠る悠久の追憶よ、トウパ、審判の時に雨粒が草木を潤す、天の後の地知」

さらに魔法を唱えると、優しい光が神埼の身体を覆う。

「そ、それにしても、ナビーが走ってきた時はびっくりしたよ」

と、久保田が神埼から視線を外して別の話題を振る。

「だけど、神埼を殺ろうとしてるやつに飛び蹴りを食らわした時はスカツとしたね、痛快だった！」

明るい口調で続ける。

たぶん、血を見るのが嫌なんだと思う、必死に視線を逸らしている。

「いやあ、でも、秋葉の弓での牽制があつたとはいえ、ナビーのハツタリが効いてよかった、まさか、逃げていくとはな、いやあ、大手柄だよ、ナビー、でも、もうあんなことはしちや駄目だぞ、危ないから、怪我しても知らないぞ」

「うん……、ごめんなさい……」

神埼の治療を見守りながら、適当に返事をする。

「綾原！」

「これは!？」

と、走ってくる人影見えた。

「悠生！ 大河！」

それは、参謀班の青山悠生あおやまゆうせいと南条大河なんじょうたいがだった。

「竜翔が怪我したの！ 助けてー！」

と、私は彼らに助けを求めた。

「ええっ!？」

「うわっ、なんだ、これ!？」

二人は大量の血を見て言葉を失う。

「よかった、来てくれたのがあなたたちで……、ありったけの力で媒体照射レティクルお願い」

「わかった、行くぞ」

「おーけー、ソプラナ、柔和なる方よ、旅路の果てに舞い降りた大地の支配者よ、媒体照射レティクル」

と、質問もそこそこに綾原の指示で呪文を唱え始める。

詠唱が終わると、二人の身体から渦を巻くような煙が出てきて、それが綾原に向かっての伸びていき、その煙が彼女の身体を中心に渦を巻き、やがて、吸い込まれるように消えていく。

「ありがとう、安定した、血は止まった……、それで、状況はどうなっているの？ 人見はなんて？ あ、これで押さえて」

と、綾原はポケットからハンカチを取り出し、それを神埼の口元に運び、自分で持たせる。

「すまん……」

口元を押さえながらお礼を言う。

「で、状況は……?」

立ち上がり青山、南条に向き直る。

「状況って……、俺らはそれを聞きに来たんだが……、なあ……?」

「あ、ああ……、いったい、これは……、それに、この鎧のやつら……、戦闘でもあったのか……?」

二人は顔を見合わせ、さらに周囲を見渡す。

「うん、戦闘があった、私たちは必死に応戦した……、それで、来たのはあなたたちだけ?」

綾原がもう一つのハンカチを取り出し、血まみれの手を拭う。

「戦闘って、マジかよ……、ああ、俺たちだけだ……」

「途中まで、有馬と清瀬と一緒にだったけど、途中で大勢のナスク村の人たちに出くわして、怪我人もいるようだったので、二人には村の人たちの避難誘導を頼んで、俺たちはこっちの偵察にすることにした」

有馬仁と清瀬達也ありましん きよせ たつやは管理班の人で、背の高い、坊主頭の野球部の人たちだ。

「そう……、人見はなんて……？」

「いや、別に、これといつては……」

「そう……」

綾原は少しうつむき、考え込む仕草をする。

「というか、ナビィ、ちゃんといえるじゃないか、誰だよ、行方不明とか言ったの」

「おお、かわいい子がいると思ったら、やっぱりナビィだったか、相変わらずかわいいなあ」

二人に話しかけられる。

「みんな探してたんだぞ、特に夏目さんが」

「まあ、でも、綾原と一緒にだったのなら、心配いらなかったな、それにナビィはいい子だから、ひとりでもっか行ったりしないさ、こんなにかわいいんだから」

と、南条に頭をポンポンされる。

「にゃん」

おっと、思わず声が出てしまった……。

「それでは、こっししましょう」

考えがまとまったのか、綾原が口を開く。

「私と南条、青山で市場に集まった人々の具合を診て、怪我の程度の軽い者から順次ラグナロク広場に送りだす。重症の者はあとからラグナロク広場から応援を呼んで運ぶから、どこか、安全な場所に集めておく、いい？」

「おーけー、さっそく始める」

「じゃあ、俺はこっちか診るぜ」

と、南条と青山が広場に散っていく。

「あと、秋葉と久保田は周囲の警戒、侵入者を発見したらすぐに教えて、その際、戦闘は極力避けて、すぐに避難するから」

「わかった」

「危ないのはこっちの森側だな」

秋葉と久保田も自分の仕事を確認して配置につく。

「最後に、神埼は……、申し訳ないけど、治療は後回しで、ナビーを連れてラグナロク広場に戻ってちょうだい、そして、人見と東園寺くんにごこの状況を説明して、大至急応援を寄こすように伝えて」

「ああ、わかった、了解した……」

と、神埼が立ち上がる。

足元がふらつくこともなく、しっかりとした足取りだった。

「よし、いくぞ、ナビー」

と、口元のハンカチを離し、それを見る。

確かに、出血は止まっているようだった。

「ちゃーりしりてりー、はーす、なぎ、るつて、ぱーす、ぽろぽろまい、ふらむ、ろーす」

と、座り込んでいた村長さんが話す。

「ナビー、なんておっしゃっているの？」

綾原が私に通訳を求める。

「うーん……、自信ないけど、たぶん……、まだ森の中に大勢の村人がいるから助けて、かなあ……」

「そう……、助けたいのは山々ですけど、敵兵が潜んでいる可能性がある限り、我々が森の中に分け入り救助活動を行うことはございません、我々は我々の命を最優先に考えていますので、そう伝えて」

「うん……」

と、言われた通り通訳する。

「きゅー……」

村長さんが肩を落とす。

「それにしても、ナビーを連れて行っていいのか？ 通訳はどうするんだ？」

と、神埼がハンカチで鼻を押さえながら言う。

「そうね……、でも、あつちにも通訳が必要でしょうし、何よりここは危険、ナビーをこのままにしてはおけない」

「そうだな……、こんな時、エシユリンがいてくれたらな……」

と、またハンカチを離し出血を確認する。

「えしゅりんー！」

その単語に反応して村長さんが叫ぶ。

そういえば、エシユリンの存在をすっかり忘れてた、あいつどうしたんだ？

「エシユリンを助けてくれ！ 彼女はまだ森の奥にいる！」

現地の言葉でそう続ける。

「森の奥に？ なぜ？」

「子供たちの足が遅い、置き去りにされた子たちもいる……、それを迎えに行ったのだ……」

表情を曇らせ視線を落とす。

「ナビー、なんて？ エシユリンって単語が聞えたようだけど」

「うん、エシユリン、彼女が森の奥に行ったって、他の村人を助けに」

綾原にそう通訳する。

「はあ……、信じられない……、次から次へと問題が……」

大きく溜息をつき、額に手をあてる。

「厄介事だな、どうする、計画を変更するか？ 俺がエシユリンを探しに行ってもいい、おまえの治療のおかげで痛みもほとんどない」

「いや、駄目よ、計画通り進めて、あなたの怪我も心配、ラグナロク広場に戻って、ちゃんと唯に診てもらって、エシユリンのことは、応援が来てから考えるから」

「そ、そうか……」

と、綾原と神埼で話し合う。

「頼む、エシユリンを助けてくれ!!」

村長さんが必死に訴える。

「あの子は不幸な子なんじゃ！ こんなところで死んではいけない子なんじゃ！」

さらに続ける。

「あの子は貧しい村の生まれで、わずかな金銭でナスク村に売られてきた……」

叫びすぎて苦しくなったのか、両手を地面につく。

「村長さん……」

その背に手をあて優しくさする。

「それでも、あの子は、文句一つ言わずに村のために必死に頑張つて、皆から認められて、今や姫巫女と呼ばれるまでになった……、これからなんじゃ、あの子の人生はこれからなんじゃ、頼む、助けてやってくれ……」

息も絶え絶えで訴える。

「うーん……」

どうしたものか……。

第84話 さも風も寂しきに

「それじゃ、ナビー行くぞ」

先を行こうとする神崎に声をかけられる。

「うん」

と、私は駆け足でドラゴン・プレッシャーを取りに行き、地面から引き抜き、それを肩に担いで先を歩く神崎の後ろを急いで追い駆ける。

「お嬢さん……」

村長さんに声をかけられたけど、それには返事をしない。

残念だけど、綾原の言う通り、こんな夜中に真っ暗な森の中に入って救助活動を行うことは自殺行為に等しい、自力でなんとかここまで来てもらう他に手立てはない。

彼を一瞥して先を急ぐ。

「頑張ってください、ここは安全ですからね！」

神崎が一緒に歩くナスク村の人たちを励ます。

「ラグナロク広場はすぐそこですよ、心配しないでください！」

と、声をかけ続ける。

もちろん、言葉は通じないけど、その気持ちは十分に伝わっているはずだ。

すぐに、プラグマティッシュエ・ザンクツイオンを抜け、ルビコン川に架かる橋、ブリッジ・オブ・エンパイアに差し掛かる。

橋の上から見る川面が星々の光をキラキラと反射させ、また、川の兩岸に生い茂る照葉樹にも光が当たり、深いみろり色のシルエットを暗闇に浮かび上がらせる。

「リジエンとシユナン、大丈夫かなあ？」

と、小さな子供の声が聞こえてくる。

「大丈夫よ、今、姫巫女さまが迎えに行っているから」

それに対して母親らしき人が答える。

「それに、ナギさま方もいらっしやるし、すぐに追ってくるわ」と、先を歩く神崎に視線を向けて言う。

「そっか！ リジエン、まだ、ちっちゃいから心配しちゃった！」
その子が明るく話す。

「う、うーん……」

姫巫女……、エシユリンかあ……。

通訳として非常に有用だし、性格も明るく働き者、みんなにも好かれてはいるけど……。

でも、あんまり信用出来ないんだよね。

あのナスク村での虚偽通訳の一件もそうだけど、何より、エシユリンの主体、彼女の優先順位に問題がある。

つまり、ラグナロクのみなどと、ナスク村のみなど、どっちかの命を選べ、って言われたら、どっちを選ぶかと云う問題。

彼女は間違いなく、ナスク村のみなを選ぶ。

別にそのことについて非難はしないよ、だって私たちも同じだからね、さつき綾原が言った通り、危険を冒してまで救援活動はしない、我々は我々の命を最優先に考えている、そういうことだから。

そう、エシユリンはあっち側の人間、私たちの仲間ではない。

だから……。

「ナギさまたちがいるってことは……、あのおいしい氷のお菓子！
リジエンが食べたい、食べたい、言ってた！」

「そうね、また食べられるといいわね……」

親子の会話が聞えてくる……。

「うん！ シユナンも大好きだって！ あのお菓子あるかなあ？」

「そうね、姫巫女さまにお願いしてみましようね……」

「やったあ！ 姫巫女さまとリジエンとシユナンと、みんなで食べる！」

「ええ、ええ、楽しみねえ……」

くっ……。

「早く来ないかなあ……、姫巫女さまとリジエンとシユナン……」
わかった。

「私が姫巫女さまとリジエンとシユナンを連れてきてあげる」
と、その子の顔を覗き込み優しく言っただげる。

「ほんとおっ？」

「本当！」

にっと笑って念を押す。

「やったあ、お姉ちゃん、ありがとう！」

子供は大喜び！

「よし、じゃあ……」

駆け足で前を歩く神崎に追いつく。

「危ないからはぐれるなよ、ナビー」

と、私をちらつと見て話す。

「あ、竜翔？ あのね、市場にも通訳が必要だと思うの……」

「うん？ いや、それより、あっちのほうが重要だって話しだろ？」

「そうだけど……、でも、やっぱり、もう一回雫に聞いてくる！」

と、振り返り、プラグマティッシュエ・ザンクツイオンに向かって走りだす。

「あ、ナビー、ひとりで行くな、危ないぞ！」

「大丈夫だから！ すぐそこだから、雫に聞いてくるから先に行つて！」

「お、おい、ナビー!？」

彼の制止を振り切り全速力で駆け抜ける。

よし、これで私がエシユリンを助けに行こうだなんて夢にも思わな
いはず。

「どいて、どいてー！」

と、人波とは逆方向に進む。

「この辺かな」

そして、広場の少し手前で森の中に飛び込む。

下草を飛び越え、広場を横目に森の中を走る。

さらに走ると、人の足で踏み固められだけの、あぜ道のような場所
に出る。

ここは、ナスク村の人たちの交易のための行き来によって出来た
道。

当然、こんな道でも、なんの整備もされてない森の中より何百倍も

走りやすい。

枝打ちもされ、わずかに星明かりが差し込み、足元を照らす。

「道なりに進んで下さい、敵兵はいませんから、安全ですよお！」
と、途中ですれ違うナスク村の人たちに声をかける。

「あ、エシユリン見ませんでしたか!？」

ついでに、そう尋ねる。

「ただ、皆一様に首を横に振る。」

「もつと奥か……」

私は手足に魔法を施し、高速であぜ道は走り抜ける。

「はあ、はあ、はあ」

広場を出て30分、さすがに疲れてきた……。

「はあ、はあ、はあ……」

身近な大木に手をあて呼吸を整える。

「さすがに来すぎだよね……、追い抜いちやったかな……」

と、うしろを振り返る。

もう、随分前からナスク村の人たちとはすれ違わなくなった。

「うーん……、どう考えて追い抜いたな……」

でも、なぜ……、エシユリンたちはいなかった……、それは間違いない……。

「うーん……」

道の奥を見る。

すぐく曲がりくねっている。

歩きやすいところを選んで道を作っているのだから、曲がりくねっていて当然。

湿地や岩場、沢などを避けて通っている……。

でも、すごい遠回りなんだよね。

「あれか、道なりじゃなくて、真っ直ぐ突っ切っていったのか?」

もし、敵兵に追われているのだとしたら、少しでも早く広場に着こうと真っ直ぐ突き進むと云う判断をしてもおかしくない……。

「よしー!」

星の位置を確認して、プラグマティツシエ・ザンクツイオンの方向

にまつすぐ突き進む。

森の中は意外に暗闇ではなかった。

ところどころ木の無いところが点在し、そこに明かりが差し込み、目印となってくれていた。

そのおかげで、地形がよく見る。

ぬかるむ湿地は至るところにある大岩、小岩を足場にして飛び越えていく。

倒木も多く、それらもあわせて足場にしていくと、ほとんど地面に降りることなく進んで行けた。

「どこだ……」

鳥が起つは伏なり……、つまり、敵の動きには必ず何らかの予兆があると言え……。

小動物の気配、風に揺らされる枝葉の音、それらすべてが敵の動きを知る情報源となる。

水がはねる音……。

「見つけた」

これは明らかに、足音、ぬかるんだ道を走る際に出る泥跳ねの音だ。

私はそれまでもよりも泥道を避け、倒木や岩場など足場にして足音を立てないようにやつらを追走する。

そして、追走開始から5分、やつらに追いつく。

そこは、暗い森の中にあらわれた光溢れる場所……。

少し開けた広場のような場所だった。

私はその場所には足を踏み入れず、遠巻きに中を覗き込む。

見える範囲に切り株などはなく、小さな白い花が咲き乱れる、小さな草原のようになっていた。

「も、もう走れないよ……」

「姫巫女さまあ……」

そんな子供たちの会話が聞えてくる。

「さっ、立って、もう少しだから……」

これはエシユリンの声だ。

じゃあ、これが、エシユリンとリジエンとシュナンの三人ね……。

遠巻きに彼女らを見ようとするけど、下草が視界を遮る。

「邪魔……」

と、草を手で掻き分けながら広場を迂回する。

まず、彼女らに駆け寄り前に、敵の有無を確認したい……。

というか、確実にいる、聞こえた足音は三つではなかった、他にもいくつかの足音があった。

「来たよ、姫巫女さま」

「早く立って、行くわよ」

「もう立てないよ、姫巫女さま……」

「いいから！」

「やだあ、足痛い……」

エシユリンらしき人影が小さき女の子のような人影を背負おうとする。

ザツザツ、という足音とともに、彼女らの背後に人影があらわれる。

数は……、八つ……。

マツトブラツクの鎧の男が8人……。

多いな……。

「い、行くわよ、さっ、シユナン、行って、リジエンもしっかり捕まってる」

「はい、姫巫女さま」

と、エシユリンたちは森の中に逃げ込もうとする。

「きゃあああああ!?!」

その悲鳴が響き渡る。

彼女らの前方に突如として別の一団があらわれたのだ。

もちろん、味方ではない、同じマツトブラツクの鎧の男たちだ。

数は……、六つ……。

先程のと合わせて14人……。

ちよつと、多すぎる……。

「た、助けて……」

「ひ、姫巫女さま……」

彼女ら恐怖に怯え、右往左往し、退路を探す。

でも、逃げ場はない、完全に包囲されてしまっている。

「ひ、ひどいことしないで……」

シユナンらしき人影が泣き崩れる。

「シユナン、諦めないで、立ってー!」

エシユリンが鼓舞する。

「で、でも……」

恐怖で腰が抜けている。

しようがないなあ……。

あの子と約束しちゃったからね、エシユリンたちを連れて帰るって……。

私は肩に担いでいたドラゴン・プレッシャーを大きく振りかぶって、

「とおりゃああああ!!」

と、云うかけ声とともに渾身の力でやつらに向かって投げつける。

第85話 キリング・フィールド

私の手から放たれたドラゴン・プレツシャーは空気を切れき鋭く高速で飛んでいく。

大剣の気配を感じた手前の敵兵たちが振り返る。

それに驚き、ある者は飛び退き、ある者はうしろに倒れるように尻餅をつき、その刃から身を守ろうとする。

エシユリンたちを包囲していた敵兵の陣形がくずれ、彼女らを視認できるようになった。

ドラゴン・プレツシャーはさらに飛び続け、エシユリンたちの頭上を超え、その奥の地面に突き刺さり、勢いよく土や草花を巻き上げながら、

「ひっ」

「ぎゃっ」

「なっ」

と、エシユリンたちが身をすくめ、固く目をつむる。

「ふふっ……」

と、私は首にかけていたネックレスを手に取り、くるくると回しながら、ゆっくりとやつらに歩み寄る。

マツトブラックの鎧の男たち、不死の軍隊の連中が無言で静かに私の行動を注視する。

「気味の悪い連中だ……」

さらに、ネックレスの回転速度を上げていく。

そして、やつらの数メートル手前で、思いつきりネックレスを上空に放り投げる。

バケツヘルムを被っているから確認出来ないけど、おそらく、無意識でネックレスの動きを目で追ったはず。

私はそのタイミングを見逃さず、姿勢を限界まで沈め、弾けるように地面を蹴り、エシユリンたちに向かって走り出す。

やはり、やつらは無反応、ネックレスに気を取られている。

不死の軍隊の連中の横を地面すれすれ、鼻が草花に触れる低さで駆

け抜ける。

「な、ナビー!？」

ここで初めて、エシュリンが私だと気付く。

「伏せろー!」

と、彼女に指示を出すと、すぐさまエシュリンは二人の頭を押さえ、しゃがむ姿勢を取ってくれる。

それを確認して上体を上げ、そのまま飛び上がり、上空を舞いエシュリンたちを飛び越えていく。

「このおおお!!」

と、その先の地面に突き刺さっているドラング・プレツシャーの柄をキャッチ、それを基点にして回転、さらにその先にいた敵兵に思いつきドロップキックを食らわす。

ゴガンツ、と云う音とともに、蹴られた敵兵が吹き飛ぶ。

そのままさらに回転、身体が手前側に来た瞬間に片手を放し、その手を伸ばす。

すると、その手の指にチェーンがひつかかる。

そう、先程投げたネックレスが落ちてきたのだ。

「よし」

ネックレスを手にしたことにより、ドラゴン・プレツシャーの重量が消え、その瞬間に大剣がいとも簡単に地面から抜ける。

抜けた勢いで手前側、エシュリンたちの隣まで飛び、そこに着地。

着地は三点着地、その勢いのままドラゴン・プレツシャーを振り上げ、そして、膝立ちになり、再度、大剣を振り下ろし斜めに地面に突き立てる。

「ふう……」

と、ドラゴン・プレツシャーの柄から手を放す。

「な、ナビー、ぷーん! ナビー、ぷーん!」

エシュリンが抱きついてくる。

「ナビー、ぷーん、ナビー、ぷーん……」

彼女の大粒の涙を流して泣きじゃくる。

「おお、よし、よし……」

と、彼女の亜麻色の髪を撫でてやる。

「おいで」

少し離れたところにいるリジエンとシユナンに手を広げてこっちに
くるように促す。

「こっち、こっち」

と、エシユリンとは反対側にくるように言う。

「はい、プーン……」

二人は言われた通りに四つん這いで私のそばまで来てしがみつく。

「うん、いい子だ」

と、三人を両手に抱え、交互にその顔を見やる。

「あ、あれ、どこかで会ったことあるよね？」

リジエンとシユナンの顔を見る。

年の頃は、妹のほうが小学校低学年くらい、姉のほうは、私と同じ、
小学校高学年くらい。

二人とも、黒い髪、黒い瞳、少し彫りの深い目鼻立ちの女の子たち
だ。

「あ、はい……、あの、以前に、氷のお菓子をいただきました……」

か細い声で姉のほうの話す。

「ああー！」

思い出した！

そうそう、お金がなくて、妹の分しか洋ナシのお菓子を買えなかつ
たんだよね。

で、そこで私が登場、姉のほうにもプレゼントしてあげたの。

うん、すごく喜んでた。

「そっか、そっか、あの時の子たちかあ」

と、二人の頭を交互に撫でてやる。

「えへへ……」

妹のほうが気持ちよさそうに目を細める。

「貴様は……、名は……？」

正面の敵、その一団の中央にいる奴からの問いかけだ。

「うん？」

中央の敵を見据える。

マツトブラツクの鎧にバケツヘルム……、他のやつとまったく同じ装備のやつだ。

「名を、聞いている……」

再度尋ねてきた。

「おまえが先に名乗れ、バーカ」

と、返してやる。

「それは失礼した……」

そう言うと、やつはバケツヘルムに手をかけ、それを取る。

ヘルムを脱ぐとバサつと長い髪が広がる。

色はシルバーというより、グレーって感じの色合い。

「私は帝国軍、東方辺境方面軍、第四特務部隊隊長、不死者マジョーライ」

その顔は美しく、白い肌、瞳は暗く冷たい印象、風になびくグレーの髪もどこか悲しげ。

ああ、こいつが不死者マジョーライか……、確かに死んでるみたいな顔してるね……。

「こちらは名乗った……、そちらの名は……?」

ちよつと考えてから口を開く。

「おまえに名乗る名などないわ!」

と、怒鳴りつけてやる。

「そうか、殺す前に聞いておきたかったが……、残念だ……、やれ!」

マジョーライが手を振り、部下たちに指示を出す。

やつの指示を受け、一人の大柄な兵士がのつそのつそと、こちらに歩み寄り、そして、その手にした戦斧を大きく振り上げる。

「ナビー、ぷーん!」

「きやつ」

「お姉ちゃん!」

と、三人が身をこわばらせて私にしがみつく。

私は両膝立ちから足を一步踏み出すようにして片膝立ちに変える。

「一人だけが近寄り、無造作に武器を振り上げる……、子供相手になめ

ている、見下している……、そう思わせたいんだよね……？」

おまえらは最初から私をなめちやいないよ。

ドラゴン・プレッシャーの柄をつかみ、一気に真上に引き上げる。その剣先が戦斧を振り上げた敵兵の鼻先をかすめる。

そう、この大剣でも届かない、つまり、間合いの外、一歩手前で戦斧を振り上げた。

私たちを殺す気なんてないんだよ、こいつは……。

本命は……。

振り上げられたドラゴン・プレッシャーは真上、頂点に達する。

しかし、そこでも止まらない、勢いはそのままでうしろに振り下ろされる。

見なくても手ごたえを感じる、おそらく後方から飛び込んできたやつらの鎧を肩口から切裂いた。

鎧が切裂かれる音とそいつが地面に叩き付けられる音と、さらに、ドラゴン・プレッシャーが地面に突き刺さる音が同時に響き渡る。

「やつぱりね……」

このタイミングだね、一流の戦士ならば……。

笑いが込み上げてくる。

「ば、ばけものっ」

と、正面の敵兵が足を一步踏み出し、振り上げた戦斧を振り下ろす。けど、そこはもう私の間合いなんだよ。

振り下ろす、その戦斧のさらにその上からドラゴン・プレッシャーを振り下ろす。

振り下ろされた大剣は戦斧ごと敵兵の身体を叩き斬り、そのままの勢いで地面に強烈に叩きつける。

轟音とともに、叩きつけられた敵兵を中心に衝撃波と砂煙が放射状に広がる。

ドラゴン・プレッシャーもまた、地面に斜めに突き刺さる。

私はその柄から手を放す。

常に持ったままだと、ネットワークスが熱くなっちゃうからね。

「な、なんだ、今のは……、夢でも見ているのか……」

と、マジョーライは驚愕の表情を浮かべる。

「くっ……、同時に行け、あの大剣だ、小回りはきかんだろ！」

まあ、いい判断だよね……。

だけど……。

敵の飛び込みと同時に大剣を右手で引き抜き、横に払う。

「ぐえっ」

と、大剣を脇腹に受けた敵兵が吹き飛ぶ。

ドラゴン・プレッシャーが半周し、今度は左手に持ち変えて返す刀で逆回転。

「うぐっ」

さつきと同じように脇腹にヒット、鎧がひしゃげ吹き飛ばされていく。

「今の、同時じゃなかったよね？」

そう、マジョーライは同時に行けと言った、でも、実際には時差があつて撃退することが出来た。

「人間はさ、隙がないと一瞬躊躇してしまうんだよね、逆に隙だらけだと思わず飛び出してしまふ」

さつきの二人がそれ、本人たちは同時に襲いかかったつもりだろうけど、片方は隙がなく躊躇し、もう片方は好機と思つて加速した、その結果が今の時差。

「くっ、くそっ……、行け、行け、全員でかかれ！」

と、マジョーライが大声で指示を出す。

「うおおおおおおおっ!!」

「うぐおおおおおおっ!!」

「ぐらああああああっ!!」

やつらが雄叫びを上げて襲いくる。

「何回やつても同じこと、これは破れない……」

飛び上がつて襲ってくるやつには、下から振り上げ、後ろに通し、半円を描くような軌道で振り回す、そして、返す刀で後ろから前へ振り下ろす。

低い姿勢で間合いを詰めてくるやつには、横から横、右から左に大

剣を回す、そして、左から右に返す。

「当然に斜めにも回す。」

ドラゴン・プレッシャーは常に私を中心に半円を描き続ける。

ちなみに、一振り、一振りごとに大剣を地面に突き立て柄から手を放している、ネックレスが超熱くなっているからね。

そのための片膝足立ちだけど、それ以上に、エシユリンたちが私の腰のあたりにしがみついているってバランスが取りやすかった。

「ぐおおおおおおおっ!!」

「ぐらあああああっ!!」

右から左、前から後ろ、と、大剣を振り回し、敵を叩き落としていく。

「どうした!?! なぜ、バラバラに飛び込む、同時に行け!!」

マジョーライはそう叫ぶけど、どうしても同時に飛び込めないんだよね。

わずかな目の動き、肩の動き、呼吸、フェイクとフェイントを織り交ぜて飛び込むタイミングを誘導していく。

全方位剣防御、キリング・フィールド。

おまえらには破れない。

おまえらは焚き火に飛び込む蚊も同じ。

第86話 フェイスオフ

「10人目……」

マツトブラツクの鎧の男が私のドラゴン・プレッシャーの一撃を受け盛大に吹き飛ぶ。

今ので、10人目だ。

私たちの周囲には物言わぬ骸と化した敵兵が10体散乱していることになる。

ドラゴン・プレッシャーを地面に斜めに突き刺し、手を放し、残り
の人数をかぞえる。

残りは……、あの不死者マジョーライを入れて4人……。

「どうした？」

私は、ネックレスのチェーンをつまみ上げて、ペンダント部分に
ふーふー息を吹きかけて、その温度を少しでも下げようとする。

「ふーふー、ふーふー」

ふーふーしながら、やつらを油断なく見つめる。

「ふーふー、ふーふー」

でも、なかなか飛び込んで来ない……。

「考えるなよ、蚊のくせに、思い切って飛び込んで来いよ……」

呆れたように言い、ネックレスを元の位置に戻し、そつと手の平で
覆う。

うーん……、超熱い……、困った……。

その手を放し、もう一度やつらを見やる。

「くっ、どうした、やれ、あの化け物を殺すんだ！」

と、マジョーライは言うけど、兵士たちはじりじり間合いと詰めた
り、距離を取ったりするばかりで、一向に襲いかかってくる気配はな
かった。

「だ、駄目です、行けば殺されます！」

「撤退します、態勢を立て直します！」

「こんな化け物と戦えません、失礼します！」

と、敵兵たちが方向転換をして一目散に逃げ出して行った。

「あ、逃げた……」

「ど、どこに行く、おまえたち、軍法会議ものだぞ!？」

マジョーライが血相を変えて叫ぶけど、誰ひとりとして言うこと聞く者はいなかった。

それにしても、あいつらつってよく逃げるよね、さっきのプラグマティッシュエ・ザンクツイオンの時もそうだし、兵士としての心構えがなっていないよ。

あ、あれか、たぶん、督戦隊がないから逃げたい放題なのか。

「まっ、所詮おまえらは、女、子供、非武装の民間人にだけ強い兵隊さんなんだよ……」

私はゆつくりと立ち上がる。

「本物の兵士と対峙した時、いとも簡単に職務を放棄し逃亡する……」

ふっ……、笑わせてくれる……。

専心職務の遂行にあたり、身をもって責務の完遂に務め、命をもって国家、国民の負託に応える……、それが出来ないやつは兵士じゃないんだよ。

「で、おまえも逃げるのか……?？」

ゆつくりとマジョーライのところに歩いていく。

もちろん、ドラゴン・プレッシャーは持っていない。

素手だ。

ネックレスが熱くなりすぎて、持ってきたくても持ってこれない、服の上からでもじんじん熱い。

「くっ……」

やつがあとずさる。

「逃げたければ、逃げてもいいよ」

ゆつくりとやつに向かって歩く。

「くっ……」

二歩、三歩と、やつがあとずさる。

それに合わせてやつを追う。

「くくく……」

うん？　なんか、マジョーライが笑い出したぞ？

「馬鹿め……、私を追うのに夢中になったか……、貴様の得物、あの大剣は遙か後方だぞ……?」

とか、言い出したんだけど……。

「ああ、そうね……」

と、振り返り、遠く離れたドラゴン・プレッシャーを見る。

その横にはちゃんと、エシユリンたち三人が身を寄せ合ってじっとしていた。

軽く手を振ってあげる。

すると、みんなも手を振り返してくれる。

ちよつと、笑顔になる。

「今更、取りに行っても遅いぞ!!」

と、大きな声がしたので前に向き直ると、やつが腰の剣を引き抜いていた。

「さあ! 勝負しろ、ばけもの!!」

マジョーライが剣を正面に構える。

「なんていうか……」

さつきまで逃げ腰だったくせに……、私がドラゴン・プレッシャーを持っていなければ、勝てるでも思ったのか、急に勇ましくなった……。

ひそかに笑う。

「いくぞ、ばけもの!!」

やつが大きく剣を振り上げる。

私はそれに合わせて、大きく足を一步踏み出す。

それも、相手の踏み足を先、お互いのかかかを激しく打ち付けるように。

「なにっ!?!」

懐に踏み込まれたのに動揺したのか、やつがそんな驚きの声を上げ、一瞬動きを止める。

「クローズ・クォーター・テイクダウン」

そこから腕を回すように、手の平、掌低でやつの額に強烈な一撃を食らわす。

すると、マジョーライの身体は腰を中心にして、後方にくるつと回転して顔面から地面に叩きつけられる。

「な、なにが……」

やつが顔を押しえながらつぶやく。

テコの原理だよ、かかとと額に力を加えて、支点である腰を中心に回転させてやった。

「残念だったね、私はあの大剣がなくても強いんだよ」

と、言い、やつの顔面を思いっきり蹴り上げてやる。

「ぐえっ」

やつは血を吹き出しながら数メートルほど飛んでいき、背中から地面に叩きつけられる。

「ぐえっ、あぐっ、あぐっ」

と、やつがもだえ苦しむ。

「不死者マジョーライ……、それがあんたの二つ名だったよね？ 本当かどうか、試してやるよ」

さらに、やつの顔面に回し蹴りを食らわす。

「おっ」

でも、腕でガードしやがった。

「その腕、邪魔だな……」

その手の甲掴み、内側にひねり、そのまま体重を乗せて、倒れこむようにして、肩と肘を砕いてやる。

「うあっか!？」

もう片方の手で砕かれたほうの手を押しさえる。

「こつちも……」

もう片方の手も同じように砕く。

「うあああっ!!」

両肩、両肘を砕かれたマジョーライは激しく地面をのたうちまわる。

「じゃあ、本当に死なないか、試してやるよ……」

ゆっくりやつに近づく。

「ひっ、く、くるな、くるなあ、ばけもの!!」

マジョーライは足をじたばたさせて逃げようとするけど、まったく進むことはなかった。

「やめ、やめ、やめて、ここ、殺さないで!!」

さらに這うように逃げようとする。

「なんだ、こいつ……」

と、私は彼の顔の先、鼻の先に、ドンツ、と足を踏みつける。

「ひ、ひいいい!」

大袈裟に驚く。

「うーん……」

あまりの情けない姿にちよつと興奮めしてしまった。

「た、助けて、やめて、来ないで!」

うーん……。

「殺さないから、少し落ち着け」

と、先回りして、彼の前に立ちはだかる。

「本当か、本当なのか、助けてくれるのか!」

しかし、なんだ、これ、本当に不死者マジョーライとか言われるよ
うなやつなのか……。

「ああ、取り引きしよつか、おまえ、他の部下を連れて退却しろ、そう
すれば見逃してやる……」

私は呆れたように、そう提案する。

まあ、最初からそういう取り引きをするつもりだったけどね、こい
つの部下がばらばらに秩序なく、略奪しながら退却したらめんどろ。

だから、そうならないよう、こいつには退却の指揮を執ってもらろ。

基本的に隊長、部隊長は殺さない、こういう使い道があるからね。

「わか、わかった、退却する、今すぐ退却する、部下たちを連れて退却
する!」

と、マジョーライが大きく何度も首を縦に振る。

「うん、もういい、行け」

「すまない、感謝する!」

マジョーライはそう言うのと、這うようにして森の中に消えていっ
た。

「なんか、釈然としない……」

やつが消えていった森の奥を見つめる。

裏がありそう、そう勘ぐってしまう……。

「一応、伏兵があるか注意するか……」

と、私は振り返り、エシユリンたちの元に歩いていく。

「ナビー、ぷーん！ ナビー、ぷーん！」

でも、私がそちらに行くよりも早く、三人がこちらに駆け出してくる。

「ナビー、ぷーん！ ナビー、ぷーん！」

そして、飛びついてくる。

「あははっ」

と、三人を受け止める。

「ナビー、ぷーん、怒らないで、ぷーん、黙っていなくなつて、ごめんなさい、ぷーん」

エシユリンが私に抱きついて泣きじやくる。

「大丈夫、大丈夫、怒つてないから、ほら、涙を拭いて」

と、彼女にハンカチを渡す。

「はい、ぷーん……」

私からハンカチを受け取り涙を拭く。

「あなたたちも大丈夫？ 怪我はない？」

と、リジエンとシユナンにも声をかける。

「はい、大丈夫です、おかげさまで……」

「はい、ありがとうございます……」

控えめに、小さな声で答える。

「よし、じゃあ、帰ろう！」

と、拳を突き上げて大きな声で宣言する。

「はい、ぷーん！」

「は、はい」

「はいー！」

みんなも返事をしてくれる。

こうして、私たちは、この小さな草原を出てラグナロク広場に向か

うことになった。

草原を出てすぐに複数の松明の明かりが目に入る。

「誰か、いませんかあ!!」

これは、現地の言葉ではなく、日本語だったので、すぐにラグナロクのみんなだっってわかった。

「なあんだ、やっぱり助けにきてくれたんじゃない!」

と、私は大喜び。

森の中に入ってまで救助活動はしないとか言ってたのにね。

「エシユリーン、エシユリーン!!」

「どこだあ、いるなら返事をしてくれ、エシユリーン!!」

声がだんだん近づいてくる。

「おーい! こつちだよお!」

と、私も大声で返す。

「お? 今、声がしたぞ?」

「どこだ、どこだ?」

「こつちだ、俺にも聞えたぞ」

みんなが私の声に気付く。

「よし、行こう!」

「はい、ぷーん!」

と、エシユリンたちに声をかけて先頭を走りだす。

「おーい! おーい! みんなあ! みんなってばあ!」

大きく手を振りながらみんなの元へ走っていく。

第87話 積雲紋もあやしく

七夕の惨事から明けて翌日。

その日は朝から慌しく、避難してきたナスク村の人たちの寝床や食事の準備に追われていた。

また、怪我人も多く、その治療が最優先で行われている。

その忙しさからか、事情聴取は後回しにされ、詳しいことはわかっていない。

それでも、わずかに情報は漏れ伝えられ、それを受けて、午後から班長会議が開催される運びとなった。

「帝国軍がナスク村を襲撃した、その理由だが……」

ここは、ラグナロク広場の中央にある大きな建物、割と普通なナビーフイユリナ記念会館。

中央に大きな楕円形の白いテーブル、そこに、議長の東園寺公彦を囲むように、各班の班長たちが着席している。

「知つての通り、ナスク村は帝国の保護領であり、みかじめ料、つまり税金を納めている植民地、飛び地ということになる……」

話しているのは、参謀班の班長、人見彰吾だ。

「そんな植民地がどうして襲われ、焼き討ちにあつたのか……」

テーブルの上には地図が広げられている。

「しかも、こんな、辺境よりも、さらに奥地の未開の地まできて……」

私たちはその地図を見ながら彼の話を聞く。

「メリットがないわ…、そうなると、私たちとの関係を疑うわね……」

女性班の班長、徳永美衣子が疑問を口にする。

「そうだ、徳永、帝国から見て、こんな奥地まで派兵するメリットがナスク村にはあつた……、つまり、我々……、いや、はつきり言おう、我々じゃない、これだ」

と、人見がポケットから何かを取り出し、ジャラジャラと音を立ててテーブルの上に放り投げる。

「はあ……、だよねえ……」

それを見て、徳永が大きな溜息をつく。

「アミュレット……、魔法のネックレスかあ……、まさか、こんなことになるとはねえ……」

生活班の班長、福井麻美の言う通り、人見がテーブルの上に放り投げたのは銀色の魔法のネックレスだった。

「わかった……、要するに、ナスク村が襲撃され、大勢の村人が殺されたのは、我々の所為だというのだな……?」

険しい表情で腕組みをしていた東園寺が口を開く。

「そういうことになる」

室内に重苦しい空気が漂う。

「じゃあ、次のターゲットは私たちってことになるよね? もう私たちが魔法のネックレスを作ってるって、ばれちゃってるのかな?」

「いや、おそらくはまだだ、知っていれば、ナスク村ではなく、直接ラグナロクを狙ったはずだからな」

「そっか、なら、情報が漏れないように、口止めしておかないと……」

「それは無理だろう、いずれ知れることとなる、今は知れた時の対処を考えるのが先だ」

と、福井と人見が話す。

「ちよつと待ってよ、それも大事かもしれないけど、今現在、このラグナロクにいるナスク村の人たちをどうするかを考えてよ、いつまで住まわせる気なの? 食料とかはどうするの?」

「彼らは160人いる、俺たち狩猟班だけでなく、全員で狩猟、採集しても到底間に合わない」

徳永と、狩猟班の班長、和泉春月も話しに加わる。

「出て行ってもらえないだろうか」

「出て行っただけで、怪我人もいるのよ、人見くん? なら、食料集めとか何か手伝ってもらおうとかはどう?」

「160人分をか? 無理に決まっているだろ、マルサスの罾やりカードの罾を知らんわけでもなからう……」

人見が銀縁メガネを中指で直しながら言う。

彼が言う、マルサスの罾やりカードの罾は、人口増加分を労働力に変換するときが発生する需給ギャップによる食料供給不足のことを

言う。

簡単に言えば、一人増えたら、その一人が仕事をしてもすぐには食料を生み出せない、一人増やすならば、事前に一人分の食料、食い扶持を確保しておかなければ不足してしまうって理論。

「それに、住まわせるとしたら、それは、移民ってことなるよね……、それには反対」

「どうしてよ、麻美、私たちでのせいであの人たちは村を追われたのよ、追い出すだなんて、かわいそうよ」

「移民よ？ 移民って言ったたら、問題ばかり起こす人たちのことよ？

移民は人の良心に浸け込み、ご先祖様が築き上げてきた富と繁栄を貪り、災いを吐き出す悪魔のような存在、って本で読んだことがあるんだから」

どこの本だ……、って、ツツコミを入れそうになった……。

「言葉は悪いが俺も福井と同意見だ、受け入れ準備が整っていないければお互い不幸になるだけで、何一つ良いことはない」

「俺も反対だ、160人分となると、相当森を切り開かないといけない、森林を無計画に伐採していたら、山菜や果実が採れなくなり、遠くまで採りに行かなければなくなる、森はラグナロクの生命線、大事にしたい」

と、東園寺と和泉が言う。

「だ、だからって、追い出すのは、ちょっと……」

徳永が言葉を詰まらす。

4対1でナスク村の人たちをここに住まわせるのは反対ってことだね。

で、どうやって追い出すかだけど、健康な人はいいとして、問題は怪我人だよね……。

「うーん……」

と、カップの水をちびちび飲みながら考えを巡らす。

「うーん……」

わからん。

「まとめろぞ」

と、東園寺が議論に終止符を打つ。

「ナスク村の方々には出て行ってもらおう。その際、状況に応じて猶予を設ける。健常者で尚且つ外部に親戚などの頼れる身内がいる場合は直ちに出て行ってもらおう。次に怪我人、直り次第出て行ってもらおう。最後に子供や女性、老人などで他に頼れる身寄り、親戚などがない場合だが……、これにはある程度の滞在期間を認めようと思う。もちろん、知り合いなど、頼れる者を探し、ここから出て行けるよう努力はしてもらおう、無理なら、その時あらためて考える。こんなものか……、異論はあるか？」

東園寺がそれぞれの顔を見て確認する。

「東園寺くんがそれでいいなら……」

徳永が視線を逸らして、ポツリと述べる。

「他に異論はないな、では、今は忙しい、一時解散する、夜にもう一度会議をやる、各自、それまでに情報収集をし、意見をまとめておいてくれ、以上だ、解散！」

と、解散を宣言する。

「お疲れ様でした」

「お疲れ様です」

「了解、お疲れ……」

みんなが手帳を手に席を立ち、割と普通なナビーフイユリナ記念会館をあとにしようとする。

「東園寺、話しがある、ちよつといいか？」

「なんだ、人見？ 今じゃないと駄目なのか？」

「ああ、急ぎだ」

「手短に頼む」

と、東園寺、人見、二人だけで内緒話しを始める。

本当はこういうの良くないんだけどね、話すなら会議中に、みんなのいるところでやりなよ……、と、内心思うけど、それには口を挟まずにその場をあとにする。

外に出ると真つ青な晴天が私を出迎える。

まばらな積雲と強めの日差し、草花の香りが鼻をくすぐり、虫たち

の鳴き声が耳を楽しませてくれる。

「なんか、夏っぽい！」

と、大きく背伸びをする。

一方、その夏っぽいさとは裏腹に中央広場では大勢の人たちがひしめき合い、がやがやとしていて騒がしかった。

その大勢の人たちの中をラグナロクのみんながせわしなく動き回る……。

「ホントに、これ、どうするんだろ……」

160人つて言ったか？

私はその人たちを横目に牧舎を目指して歩きだす。

「まっ、私には関係ない、私にはシウスたちの世話っていう、大事な仕事があるんだから」

と、意気揚々と歩く。

「ふんふん、ふん、カチューシャ元気にしてるかなあ」

もう上機嫌！

「びよびよ、びよびよ！」

と、ピップたちのモノマネをしながら、大きく手を振り行進するよ
うに歩く

ああ、楽しいなあ、幸せだなあ。

「びよびよ、びよびよ！」

「くるうー！」

「おっ！」

青い毛の子犬が走ってきたぞお？

「くるう、くるう！」

と、子犬がものすごい跳躍力で私の胸に飛び込んできた。

「くるう、くるう、くるう！」

そして、大喜びで私のぽっぺをなめてくる。

「わ、やめて、やめて、くすぐったいってば、クルビット！」

そう、これは私の愛犬クルビット。

「くるう、くるう！」

でも、全然言うことを聞かない……。

「それならー！」

と、彼を強引に引きはがし、そつと地面に降ろす。

「よーし、競争だあー！」

と、言い、全速力で牧舎に向かって走りだす。

「くるうー！」

クルビットも私のうしろを追い駆けてくる。

「あははっ」

と、両手を広げて、風を真正面に受けて走る。

ワンピースのスカートから入った風が身体を駆け上がって、それが、ふわつと胸元から出て、ふわつと前髪を持ち上げる。

「楽しいー！」

「くるうー！」

私たちは青空の下、太陽の光をまぶしく照り返す白い石畳の上を全速力で駆けていく。

第88話 ブリテイツシュ・グレナデイアーズ

強い陽射しの中、私とクルビットは全速力で駆け抜ける。

「気持ちいい！」

両手を思いっきり広げて、全身で太陽の光を浴びて、そして、空を見上げて髪を風になびかせる。

「まぶしい！」

手で日影を作って顔への直射日光を防ぐ。

「くるう！」

と、そんなことをしている間にクルビットに先を越される。

「あー！」

あいつめ、日に日に足が速くなっていく！

「くそお！」

私もギアを一段上げてクルビットを追走する。

やがて、牧舎とその先の牧柵が見えてくる。

「くるう！」

と、クルビットが1メートル以上もある牧柵の上を軽々と飛び越えていく。

「やるな、クルビット！」

私も牧柵に手をつき、そのまま飛び越える。

「とおー！」

ワンピーススカートの裾が風になびいてバサバサと音を立てる。

そして、着地！

「10点！」

ピシッと決める。

「えへん！」

鼻高々。

「わっば、ぷーん、わっば、ぷーん」

「めええ！ めええ！ めええ！」

と、余韻に浸っていると、なにやら楽しげな声が聞こえてくる……。見ると、エシユリンが仔ヤギのチャフをぶんぶん振り回していた。

「わっば、ぷーん、わっば、ぷーん」

「めええ！ めええ！ めええ！」

しかも、前足二本と後ろ足二本をそれぞれ両手で掴んで、ジャイアントスイングするみたいにくるくると。

「わっば、ぷーん、わっば、ぷーん」

「めええ！ めええ！ めええ！ めええ！」

うん、楽しそうに回しているね。

あれは、別に虐待とかではなく、チャフのためにやっている。

仔ヤギの彼らは草をうまく食べられなくて、よく食道に詰まらせてしまう。

なので、詰まった草が胃まで下りていくように、あのようにくるくる回してあげているというわけだ。

「わっば、ぷーん……」

と、ぐるぐるが終わったのか、優しく草の上を下ろしてあげる。

「めええ！」

すると、仔ヤギのチャフは元気よく立ち上がり、勢いよく草を食べ始める。

まっ、ほっといても、草の上でごろんごろんして自分でなんとかしちゃうんだけどね。

「わっば、ぷーん、わっば、ぷーん」

「めえ！ めえ！ めえ！」

おや、仔ヤギのシウスの声……、こっちでもやっているか……、誰だ……？

と、声のする方角を見る。

「わっば、ぷーん、わっば、ぷーん」

「めえ！ めえ！ めえ！」

シウスをぶんぶん振り回していたのは……。

「あの子は昨日の……」

そう、黒髪のあの子……。

「「わっば、ぷーん、わっば、ぷーん」」

その周りにも女の子が二人いて、一緒にかけ声をかける。

「うーん……」

昨日のリジエンとシュナン、そして、もう一人、自信ないけど、たぶん、あの子、ブリッジ・オブ・エンパイアでリジエンとシュナンのことを心配していたあの子だと思う……。

「あつー！」

と、みんなが私に気付く。

「ナビー、ぷーん！ ナビー、ぷーん！」

エシユリンが両手を大きく振る。

「あ、こんにちは……」

「こんにちは」

「こんにちは、です……」

と、黒髪の女の子三人がたない日本語で挨拶してくれる。

「あれ、日本語？」

エシユリンに歩み寄りながら尋ねる。

「そう、ぷーん！ エシユリンが教えた、ぷーん！」

エシユリンが自慢げに答える。

「へえ……」

と、彼女たちを見る。

「シュナンです」

「リジエンです」

「シエランです」

三人が自己紹介をして、大きくお辞儀をする。

シュナンとリジエンが姉妹のほうで、こっちの新しい子がシエランね。

年の頃はシュナンとリジエンの中間、小学校3年生って感じ。

「ご丁寧にどうも、ナビーです、よろしくね」

と、私も同じように自己紹介をして、大きくお辞儀をする。

「はい」

「よろしくです」

「です、はい」

と、みんなが笑顔になる。

「これから、もっと、言葉を教える、ぷーん、そうすれば、みんなの役に立つ、ぷーん！」

エシユリンは上機嫌に話す。

「うん？ 通訳をしてもらうってこと？」

「そう、ぷーん！ シュナンとリジエンは親がない、ぷーん、村長のところにお世話になっている、ぷーん！ だから、丁度いい、ぷーん！ シエランは、一緒に憶えたいって言うから、ついでに教えている、ぷーん！ 通訳は、これから、どんどん、必要になってくる、ぷーん！」

と、彼女は嬉しそうに話す。

まあ、確かにね、昨日は通訳がいなくて、すごく不便だった。

この子たちが通訳として働いてくれたら助ける。

「だから、三人をマスコット班に入れる、ぷーん!!」

両手を広げて、飛び上がって言う。

「マスコット班に？」

マスコット班は私の班、当然、班長は私、班長会議にもちゃんと出席しているし。

「いい、ぷーん？」

と、エシユリンが私の顔を覗き込んでくる……。

「うーん……」

「だめ、ぷーん？」

即答しない私に不安を覚えたのか、エシユリンが表情を曇らす。

「そうね……、私のマスコット班はエリート集団……、特技が通訳だけではちよつと心許ないわね……」

と、腕を組んで考える仕草をする。

「そんなあ……」

落胆したのか、エシユリンが現地の言葉でつぶやく。

「そんな顔しないで、エシユリン、まあ、いいわ、テストをしましょう、マスコット班にふさわしいかどうかのね」

と、人差し指を立ててニヤリと笑う。

「本当に!? やったあ！ みんなよかったね！ ナビー馬鹿だから、

テストもきつと簡単だよ！」

エシユリンが現地の言葉で三人に説明する……、う、うん……？
な、なんか、今、すんごい失礼なこと言わなかったか……？

「ま、まあ、いっつか……、じゃあ、ちよつと待ってて、テスト道具取ってくるから！」

と、言い、私は牧舎のほうに駆け出していく。

「はい、プーン！」

「いってらっしゃあい」

「はあい！」

と、みんなに見送られる。

扉が開け放たれたままの牧舎に入り、荷物が置いてある場所に急ぐ。

「どの辺に置いたかなあ……」

と、荷物の山をがさごそとかき分ける。

「あった、あった、これ、これ……」

目当ての物を探しあてる。

「びよ、びよ！」

「びよっぴい！」

「びよお！」

おや？

「びよ、びよ！」

「びよっぴい！」

「びよお！」

ピップ、スカーク、アルフレッドの三羽のひよこが私に気付いて騒ぎ出した。

私は荷物を手にひよこたちの元へと向かう。

「ごめんねえ……」

そして、鳥籠の前にしゃがんで、その隙間から指を差し入れて一羽ずつ頭をなでてやる。

「外に出してあげたいけど、まだ心配なんだよねえ……」

小さいから……。

「びよ、びよ……」

「びよっぴい……」

「びよお……」

ひよこたちが気持ち良さそうにしている。

「よし、じゃあ、またあとでね！」

と、立ち上がる。

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「びよおー！」

ひよこたちの元気の良い声に送られて牧舎をあとにする。

そして、駆け足でエシユリンたちの元へ戻る。

「おまたせー！」

「おかえり、ぷーん！」

みんなが出迎えてくれる。

「何する、ぷーん？」

と、エシユリンが首を傾げて私が持つ荷物を覗き込む。

「ふふふ……、これよ、これ……」

私が手にする物をみんなに見せる。

「笛……、それに棒、ぷーん？」

「そう！ ホイツスルとバトンよ！」

私がいっつも使っている黄色いホイツスルと白いバトン。

「ピーッー！」

と、ホイツスルをくわえて、ひと鳴らしする。

「マスコット班と言えども戦士なのよ、そう、戦士、歩兵……、歩兵と

言えば戦列歩兵、ライン・インフアントリー……、そして、戦列歩兵

と言えれば行進……」

「行進、ぷーん？」

「そう、行進よ！ さっ、みんな一列にならんで！」

バトンを天にかざして叫ぶ。

「はい、ぷーん！」

「はいー！」

「はあい！」

「はいっ！」

「くるう！」

「めえ！」

「めええ！」

「ぶるるう！」

「みーん！」

と、みんなが一行に……、ちよつとバラバラかな……、でも、一応並んでいるからいいか……。

「さあ！ みんな行くよ！ 大きく手を振って美しくよ、ピーツ！」

大きくホイッスルを鳴らして、先頭で行進を始める。

「ピッピッピッピッピッピッピ、ピッピピピピ、ピー」

ホイッスルで行進曲を演奏する。

「ピッピッピッピッピッピッピ、ピッピピピピ、ピー」

演奏のリズムに合わせてみんなが行進する。

「ピッピッピッピッピ、ピーピッピ、ピッポ、ピロピロピー」

柵に沿って、ぐるっと一周行進する。

「ピッピッピッピッピッピッピ、ピッピピピピ、ピー」

バトンを上下に振りながらリズムを取って行進する。

「ナビー、上手、ぶーん、これ、なんて曲、ぶーん？」

私のすぐうしろを行進するエシュリンが尋ねてくる。

「えっとね、これは、ブリティッシュ・グレナディアーズ行進曲って言うんだよ」

と、説明してあげる。

ナポレオン戦争とか、アメリカ南北戦争でよく使われていた曲だね。

「ぶりていつしゅ・ぐれなでいあーず、ぶーん！」

エシュリンが大喜びで復唱する。

「よし、みんな、もう一周行くよ！ ピーツ！」

「はい、ぶーん！」

「はいー！」

第89話　ながながしあぜみち

あれから一週間が過ぎた。

ナスク村の人たちには予定通り、身寄りがあり、尚且つ健康な人から順次出て行ってもらっている。

それでも、なかなか退去が進まない。

たぶん、ここ一週間で出て行ってもらえた人数は30人にも満たないと思う。

つまり、ここ、ラグナロクには、まだ130人以上の人たちが残っている計算になる。

それも、身寄りのない、老人や子供、女性が中心。

ここからは、持久戦になると思われる。

とりあえず彼らには、市場、プラグマティッシュ・ザンクツイオンで生活してもらっている。

なんとか、テント、屋根のある場所は全員分確保したとはいえ、依然として不便、不自由は感じていると思う。

でも、仕方ない……、福井とかが一緒に生活するのは怖いって言うから……。

あと、食料……、これは意外となくなっている。

村長さんたちが他の村の村長さんに援助を要請したり、私たちに交易相手を紹介してくれたりと、かなりの分の食料をそこから調達可能になっていた。

それでも、足りない分は森から調達するのだけれど、あんまり捕りすぎると和泉が怒るんだよね、森を大事にしろって……、あいつはエルフかつつうの……。

こんなものかなあ、ここ一週間であつたの……。

私は机に向かい、ペンを片手に外の景色をボーッと眺めながら近況を考える。

白いレースのカーテンが風に揺らされるたびに青い空が見え隠れする……。

「ああ……、いい風……」

日差しは直接入ってこないけど、窓からほんのり暖かさが届き、時折吹く風がその暖かさをかき消していく。

「こら、ナビー、まじめにやりなさい」

と、教室のうしろで私の監視をしていた徳永美衣子に叱られる。

「はあい……」

机に視線を戻す。

ここは、割と普通なナビーフィユリナ記念会館。

普段は班長会議の場として使用されているけど、空いた時間には、こうやって、私の授業を行う教室としても使用されていた。

「ナビー、集中してね、今まで習ったことをよく思い出すのよ」

前方には私の担任の先生である綾原雫も立っている。

「はあい……」

机の上の紙を見る……。

そう、今は授業ではなく、私の学力テスト中……。

「ええっと、次の問題は……」

なにになに……。

「ジャワ島にいた原人はジャワ原人、では、北京にいた原人はなに原人でしょうか？」

ぺ、北京……、原人……、かな……？

あ、いや、こんな簡単な問題あるわけない、きつと、ひっかけだ……。

でも、原人って、あとなにがあるんだ？ P○原人しか知らないぞ？

「お？ 待てよ……、ジャワ島でジャワ原人……、じゃあ、北京なら……、北京島原人……？ おお……、それだ……」

と、答案用紙到北京島原人と書き込む。

よし、よし……、次、次……。

「日本語で小船、スペイン語でバツテラ、イタリア語でバルケッタ、では、オージローはなんて言うでしょうか？」

……。

オージロー……？

だれ……？

ひどいな、これ……、見当もつかない……。
パス、次、次……。

「ロシア革命の立役者、ソビエト連邦建国の父、ウラジーミル・レーニン、本当はなんにん？」

本当はなんにん……？

本当はって、最初からひとりじゃないの……？

「うーん……」

あ、影武者か……、な、なら……。

「ふ、ふたり……、かな……？」

答案用紙にふたりと書き込む。

よし、次、次！

「なになに……、ニワトリはコケコツコ、では、犯人の前で転んでしまったお巡りさんはなんて言うのでしょうか？」

コケコツプ！

おお……、これは一発でわかった……。

答案用紙にコケコツプと書き込む。

と、いった感じで、私は次々と問題を解いていく。

「終わったあ、疲れたあー！」

と、思いつきり背伸びをする。

たっぷり50問くらいあった。

「終りね……、答え合わせは明日やります。では、また同じ時間に、お疲れ様でした」

「答案は私が預かっておくね」

と、綾原が終了を宣言し、徳永が答案用紙を回収する。

「綾原先生、徳永先生、ありがとうございますー！」

私は急いで筆記用具を片付けて教室をあとにする。

割と普通なナビーフイユリナ記念会館を出ると光が広がる。

今日も晴天。

雲ひとつない真っ青な空。

「急げえー！」

と、私は白い石畳の上を走っていく。

向かう先はもちろん、みんながいる牧舎。

私は強い日差しの中、両手を広げて気持ちよく全力疾走。

「お、ナビー、今日も元気がいいな！」

「相変わらずかわいいな、ナビー、転ぶなよ！」

と、屋根の上に登って作業をしている生活班の二人、佐々木智一と安達一輝が大きな声で叫ぶ。

「大丈夫だよ、二人も屋根から落ちないでね！」

私も大きな声で、大きく手を振り返して答える。

彼らが作業をしている建物を過ぎると、すぐに牧舎が見えてくる。

そして、すぐに到着。

「お、来たか、ナビー」

「準備は出来ているよ」

「くるう！」

と、牧舎の前に待機していた狩猟班のみんなと、クルビットが出迎えてくれる。

「おまたせ！」

今日はシウスたちの世話でここに来たわけではない。

「ぶるるう！」

「ウエルロット！」

私は白い仔馬、ウエルロットの頭を抱いて、優しく頬ずりをする。

「じゃあ、すぐに乗る？」

「紙もいっぱい入れておいたよ」

と、狩猟班の笹雪めぐみと雨宮ひらりが言う。

「おお……」

ウエルロットのうしろにはピンク色のちっちゃい馬車が連結されている。

高さ、幅、ともに1メートルくらい、長さは車輪も入れても2メートルくらい、桃の形をしていて、そのてっぺんにはこれまた可愛らしい、ちっちゃいランタンが取り付けられている馬車。

そう、これは、割と普通なナビーフィユリナ記念ピーチ号、私の専用の馬車となる。

「えへへ……」

ウエルロットの額に頬をすりすりしながら、うつとりと馬車を眺める。

今日はこれから、馬車に乗って、プラグマティッシュ・ザンクツイオンに視察に行く。

視察と言っても、別に何かを見たいわけではなく、単に、馬車の慣らし運転のために向く。

長い時間走らせないとサスペンションやその他の金具が錆びたり、木製の車輪が歪んだりするから、それを防ぐための定期的なメンテナンス走行となる。

「ちよつと、距離あるけど、我慢してね」

と、ひと撫でしてから顔を放し、馬車に向かう。

「どうぞ、ナビー」

夏目翼が笑顔で馬車の扉を開けてくれる。

「ありがとう！」

私は大喜びで狭い入り口から中に入っていく。

入り口の広さは、だいたい、高さ50センチ、横幅30センチくらいかなあ……。

もぞもぞ、もぞもぞ、と身体をねじ込むように中に入っていく。

馬車の中には細切れになった新聞紙が大量に詰め込まれており、それが外にこぼれないように慎重にかき分けて進む。

「ぶはあー」

と、窓から顔を出して、大きく息を吐き出す。

ついでに、頭についた新聞紙をぶるぶるしてふるい落とす。

「わあ！・かわいい！」

「天使よ、これが天使よー」

それを見た笹雪と雨宮が歓声を上げる。

「じゃあ、いこっか、ナビー」

御者役である和泉春月が言う。

「うん、出発進行！」

と、私は小窓から拳を突き上げる。

馬車はのろのろと走りだす。

「おお……、余裕の音だ、馬力が違う」

ウエルロットが馬車を引いているように見えて、実は和泉が引っぱってるだけなんだけどね。

まっ、そんなことはおかまいなしで……。

「それえ！」

と、細切れの新聞紙をうしろをついてくる狩猟班のみんなに投げつけてやる。

「それえ、それえ！」

「やめて、やめて、意外と貴重なんだから、それ！」

「紙ふぶき、綺麗……」

「ナビー、もつと、もつと！」

と、みんなが様々な反応を見せる。

「仕返しだ、ナビー！」

「うわっ！」

秋葉が細切れの新聞紙を拾って投げ返してきた！

「このお！」

と、私も反撃！

「甘いぜ、ナビー！」

私の攻撃をかわして、ぱらぱらと新聞紙を頭に振りかける。

「くっそお！」

こうなったら！

「お？ 逃げるのか、頭を引っ込めるのか？」

と、秋葉がからかうように言う。

「誰が逃げるか！」

と、私は小窓から身をよじりながら上半身を外に出していく。

「せ、せまい……」

小窓は本当に小さかった……。

「けどー！」

頑張つて、腰のあたりまで身体を外にだす。

「おお？」

「ナビーが？」

そして、身体を反転して、そのまま窓枠に座る。

「どうだ、これで手が届かないだろ！」

ちようど、あれ、箱乗りってやつ。

いやあ、箱乗り懐かしいなあ、昔よくやってたよ、ベンベで。

ちなみに私が乗ってたベンベは当時六本木カローラって呼ばれた、うん、バブル期の話しね。

「箱乗り気持ちいい」

長い金髪を風になびかせる。

「きゃあああ！ ナビーちゃんがムネヲ乗りしてるよ！」

「ムネヲ以外で初めて見た、ムネヲ乗り！」

うん？

「ムネヲ乗り？」

意味がわからずに聞き返す。

「そう、ムネヲ乗り！」

「北海道では、その乗り方のことをムネヲ乗りって言うんだよ」

「ムネヲだけに許された乗り方だからムネヲ乗り」

「ムネヲだけが合法！ それ以外の人がやったら逮捕！」

と、みんなが口々に説明してくれる。

「へえ……」

そういえば、みんな北海道の人だったね。

「ムネヲ、ムネヲ、ムネヲ！」

その前に、ムネヲってだれ……。

第90話 再会

カラン、コロン、と、小気味良い音を立てながら馬車は石畳の上を進む。

今はムネヲ乗りをやめて、ちゃんと馬車の中にいる。

私は小窓からちよこんと顔を出して、流れる景色を眺める。

「チュン、チュン」

小鳥のさえずりが聞える……。

見ると、道の隅に何羽かの茶色い小鳥がいて、それがチュンチュン言いながら何かをついばんでいた。

「スズメっぽいね……」

というか、完全にスズメだ……。

思い返して見れば、ここに来てから三ヶ月とちよつと、最初はこういった小鳥なんて全然見かけなかった。

でも、日を追うごとにその声を聞くようになり、やがて、その姿を見るようになり、今では普通に、目の前でエサをついばむようになっていた。

スズメは人とともに生きる……。

昔からそう言われている。

仕組みは簡単、人間がスズメの天敵であるヘビやトカゲを駆除するから、自然とスズメが天敵の少ない人間の集落に集まってくるってだけ。

脆弱な彼らは人間に守られながら生きている……。

でも、守られてばかりではない、その代償として、スズメたちは害虫を食べ、病気から農作物を守り、私たちを飢餓から救ってくれたりしている。

つまり、お互い助け合って生きているってこと。

昔から人類の友人って言えば、犬とか猫が定番だったけど、けっしてそれだけではない、スズメももちろんそうだけど、他にもたくさん、私たちが人類を助けてくれる友人たちがいた……。

そうやって、この厳しい大自然を生き抜いてきた。

「チュン、チュン」

そのことをこの小さなスズメたちが思い出させてくれる。

「たくさん巣を作って、子スズメたちの鳴き声で賑やかにするとい
ね……」

スズメたちを見て明るい未来に思いをはせる。

「こんぴらふねふね、おいてに帆をかけ、シユラシユシユシュー♪」

お？

笹雪が歌いだしたぞ？

「まわれれば、四国は、さんしゅう、なかのごおり、ぞうずさん、こんぴ
ら、だいこんげん、一度まわれれば、シユラシユシユシュー♪」

おお、雨宮まで歌いだした。

「シユラシユシユシュー♪」

みんなで歌う。

この歌、知っている。

みんながよく口ずさんでいる歌、たぶん、北海道の歌。

「こんぴらふねふね、おいてに帆をかけ、シユラシユシユシュー

♪」

私も身体を左右にゆらしながら一緒に歌う。

なんか、馬車のカラン、コロン、という音と合わさってすごく風情

がいい。

「鴨八百羽！ 小鴨が八百羽！ 入船八百艘！ 荷船が八百艘！

帆柱八百本！ 鰹が八百本！」

カラン、コロン……。

「あるよ、あるよ！ 朝来て、昼来て、晩に来て♪」

カラン、コロン……。

と、歌っているあいだに市場、プラグマティッシュエ・ザンクツイオ
ンに到着。

私たちは市場の真ん中を貫く白い石畳の道を進む。

道の両側にはずらりとテントが立ち並び、ナスク村から避難民たち
の姿を数多く目にするのが出来た。

「やっぱり、不便そうだなあ……」

彼らの生活ぶりを観察しながら、そうつぶやく。

それでも、近隣の村々からの援助も多く、また、交易、商売でここを訪れる者も少なくなく、金さえあれば、食料から生活費需品までなんでも揃えられる状況にはあった。

私たちは、その露天商がずらりと立ち並ぶ区画を目指す。

せっかく、馬車で行くのだから、食料でも買ってこよう、という話しになっていったからだ。

カラン、コロン、と、音を立てながら馬車は進む。

「ナビー様！」

「お姉ちゃん！」

子供たちが駆け寄ってきた。

「おお！ リジエン、シユナン！」

駆け寄ってきた子供たちはリジエンとシユナンの姉妹で、そのうしろにはシエランの姿も見える。

「ナビー様、ナビー様！」

「わああ、わああ！」

と、手を振りながら追いかけてくる。

「よーし！」

私は馬車の中に詰め込まれた細切れの新聞紙を一掴みし、

「それえ！」

と、上に投げて紙ふぶきにしてやる。

「わああ！ わああ！」

「かわいい馬車！」

「雪みたい！」

紙ふぶきが子供たちの上にゆっくりと降り注ぐ。

「それえ！ それえ！」

と、何度も紙ふぶきを降らせてやる。

「たのしいい！」

「もつとお！」

「あたしにも！」

紙ふぶきを投げるたびに、馬車のあとを追う子供たちが増えてい

く。

「ほらあ、ほらあ！」

リクエストに応えて、何度も紙ふぶきを降らせてやる。

「わあああああ！」

今や30人くらいの子供たちがいて、声が重なって何を言っているのか聞き取れなくなってきた。

「このお、このお！」

それでも頑張つて、両手を使って紙ふぶきを降らせ続ける。

「はあ、はあ、はあ」

疲れた。

「ナビー、着いたよ」

と、息を切らしていると馬車が止まり、御者役の和泉が少し笑いながら振り返り言う。

「おっ！」

着いたか！

私は反対側の扉にもぞもぞと這うようにして向かう。

「どうぞ、ナビー」

と、夏目が扉を開けてくれる。

「ありがとう！」

そして、そのまま転がり落ちるように外に出る。

「ウエルロットもありがとう！」

と、彼女の顔を抱いて頬ずりをしてねぎらう。

「ぶるるう！」

そして、ウエルロットの顔を放し、あらためて周りを見渡す。

「わあああああ！」

と、30人以上いる子供たちに囲まれる。

「綺麗！ 綺麗！」

「髪の毛金色、都会の人みたい！」

「目も青いよ！」

「姫巫女様の目だって緑だよ？」

と、私を見て感想を言い合う。

私のほうも子供たちの容姿を観察する。

みんな黒髪、黒い瞳、目鼻立ちがはつきりしている彫りの深い顔をしていて、亜麻色の髪、みろり色の瞳のエシユリンとは似ても似つかない顔立ちをしていた。

そういえば、エシユリンは別の村の出身だとか言っていたか……。

「みんな、ナギ様が困惑しているわよ、さっ、戻って、戻って」

そのエシユリンが登場して、みんなを解散させてくれる。

「うーん……」

と、私はエシユリンと子供たちを交互に見比べる。

「はい、ぷーん？」

彼女が不思議そうに私を見る。

しかし、違う村の出身といっても、ここまで人種が変わるものなのだろうか……？

と、首を傾げてしまう。

「ナビー、俺たちは買い物してくるから、適当にそのへんで遊んでて」

「あんまり遠くに行っちゃ駄目よ、ナビーちゃん」

秋葉と笹雪に言われる。

「はあいー」

と、手を挙げて返事をする。

「さてと……」

エシユリンのことは横に置いて……。

やることと言ったらひとつしかないよね。

「食べ歩きー」

露天商がずらりと立ち並ぶこの区画、その中には食べ物を出す屋台も多く含まれていた。

「はい、ぷーん！」

エシユリンも同意してくれる。

「よし、行こう！」

「はい、ぷーん！」

私たちは意気揚々と屋台に向かって歩きだす。

「まずは……」

おいしそうな匂いに誘われ、お店の前に行く。

「これ、なにい？」

と、興味津々に食べ物を覗き込む。

「これは、フアヤーミル、ぷーん」

「なにそれえ？」

「豆をすりつぶした物を揚げた物、ぷーん」

「へえ……、ひとつ、ちょうだい！」

と、私は首に下げたポーチからお金を取り出し、それをおじさんに渡してフアヤーミルを買う。

「うーん……」

まーるいコロツケって感じの食べ物。

「はむ……」

ひと口食べてみる。

「はむ、はむ……」

外はカリツと中はしっとりしていて、飲み込むとほのかな豆の香りが鼻から抜けていく。

「はむ、はむ……」

食感のコロツケだけど、これ豆かなあ、ちよつと、ほくほくのじやがいもって感じもする。

「でも、おいしかった！ 次、次！」

食べ終えて、次の屋台を目指す。

とりあえず、売っている料理は全部食べてみるつもり。

お金の心配はいらないからね。

魔法のネックレスでぼったくっているから、資金は潤沢にあった。ぼったくっているっていうのにも語弊があるか……、それだけの価値はあるものだと思うし。

あと、私たちが作ったインチキ貨幣のラグナもあるし、とにかくお金には困っていない。

「さてと……」

飲み物が飲みたくなり、コップが並んでいる店先に入る。

「これ、なにい？」

「これは、タビィヤ、プーン」

「なにそれえ？」

「甘いミルクにつぶつぶ果肉が入っている物、プーン」

「へえ……、ひとつ、ちょうだい！」

と、私は首に下げたポーチからお金を取り出し、それをおじさんに渡してタビィヤを買う。

「ごく……」

ひと口飲んでみる。

「ごく、ごく……」

ミルクというより、もうちよつと発酵させたヨーグルトに近い感じの味かな。

あと、つぶつぶ果肉じゃなく、ぶどうくらいの大きさの果実がごろごろ入っている。

でも、

「あまーい」

と、ほっぺに手をあてにやけてしまう。

「ごく、ごく、ごく、ごく……」

さらに、一気に飲み干してしまう。

おいしかった！

「ごちそうさまでした！ よし、次、次！」

コップを置いて、その屋台をあとにする。

「次はつと……」

食べ物の屋台を探す。

「あれ？」

なんか、向こうが騒然としているな。

なんだろうと思つて、私たちはそちらに向かう。

馬が何頭か見える……。

「代表者を出せえ！」

その馬に乗った男がそう叫んでいる……。

「俺さまは戦いに来たのではない、いいから、代表者を出せえ!!」
数は三人、騎馬に乗った男が三人だ。

そして、着ている鎧は……。

「帝国軍……」

フルプレートアーマー、フル武装の騎兵だ。

「どう、どう！ 殺されたいのか、貴様らあ!?!」

そして、あの大声で喚き散らしている赤マントの男は……。

「おおっ!?!」

そいつが私に気付いて、こちらにやってくる……。

「おお、会いたかったぞ、小娘!!」

そう、私はこいつを知っている……。

「この顔を忘れたとは言わさんぞお!?!」

年の頃は20前後、短く刈った金髪に日に焼けたちよつと角ばった

顔をした好青年って感じの男。

「シェイカー・グリウム……」

そう、あのナスク村で騎士団を率いていた男だ。

「なんで、ここに……」

やつがニヤリと笑う。

第91話 インシユアランス

「どう、どうどう……」

と、帝国軍、騎士長シエイカー・グリウムが馬をなだめるように、ぐるぐるとその場を旋回させる。

「それで、帝国軍の騎士長さまが私たちの何の用なの？」

戦いに来たのではない、そう言ってたような気もするけど……。

「騎士長……？ はーはっはっはあ、はーはっはっはあー！」

と、やつが豪快に笑い出した。

「な、なに……？」

私はちよつと眉をひそめる。

「小娘、騎士長とはいつの話をしているのかな、はーはっはっはあー！」

「う、うん？ ち、違うの……？」

「そうさ、出世したわい！ 今は晴れて、第四特務部隊の隊長さまよ、あのマヌケなマジョーライが下手を打ってな、その後釜ってやつよ、ラッキーと言えば、ラッキーだったな、はーはっはっはあー！」

「そ、そうなんだ……、おめでどう……」

なんか知らないけど、私はこいつに苦手意識を感じている……。

「小娘」

と、シエイカー・グリウムが表情を引き締める。

「貴様と話をしたいのは山々なんだが、今は任務が最優先だ……、首魁、代表者を呼んでもらえるかな？」

「だ、代表者……？」

「そうだ、首魁、首長、領袖、呼び名はなんでもいい、とにかく、この集団の頭を連れてこい」

えつと、それだと、東園寺になるのかなあ……。

いや、うちは誰が頭とかじゃなくて、基本的にみんなで話し合って決める合議制だしなあ……。

「あいにく、代表者は不在だ、代理として、俺が話を聞こう」

と、私の肩に手が置かれる。

その手の主を見上げると……。

「ハル……」

それは、和泉春月だった。

ちなみに、和泉の言葉はすぐにエシユリンが通訳してシエイカー・グリウムに伝えてある。

「どこの言葉だ、貴様だ……、ワ・パース語もしやべれんのか……、未開の野蛮人め……、まあ、いい、貴様が代理なのだな？ 女、こいつに伝えてやれ！ ラインヴァイス帝国は貴様らとの会談の場を設けることにした！ これを見る！」

と、シエイカー・グリウムが胸元から巻物を取り出し、それをバサツと広げて見せる。

「署名、捺印は辺境伯、ダイロス・シャムシエイド卿！ 主権は千騎長、アンバー・エルム！」

大声で叫び続ける。

「会談場所はアバーノ平原中央、そこに会談場所を設置する！ 詳しい位置は追って連絡する、日時は5日後正午とする、それまでに出頭せよ！」

そして、最後に巻物を和泉に投げつける。

「わかった、検討してみる……」

和泉がその巻物を拾う。

「検討……？ 馬鹿か、おまえは?! 俺は交渉に来たのではない、命令に来たのだ！ 貴様らに選ぶ権利などないわ、思い上がるな、下郎どもがあ!!」

顔を真っ赤にして怒鳴り散らす。

「決まったことだ、指定された日時に来てくれ、と言っている、ぷーん」
エシユリンが通訳して和泉に伝える。

「そうか……、だが、俺では決められない、善処はするが、期待しないでくれ、と伝えてくれ」

和泉の言葉に彼女が頷き、シエイカー・グリウムに向き直り、口を開く。

「失礼しました。なるべく、そちらのご要望通りにします。場所が決まり次第、連絡をお願いします。そう言っている」

平和状態から、デフコン4、警戒態勢に格上げされたばかり。

今ままでも戦闘はあつたけど、あれは、突発的な係争に過ぎず、継続的な危機とは言えない。

なので、デフコンは5のままですよ。

でも、今回は違う、帝国との戦いが継続して反復して行われる危険性が高まった、つまり、デフコン4、警戒態勢にあてはまる事態となつてしまったのだ。

ちなみに、日本ではデフコンによる判定は行われていない。

じゃあ、どうやって、国民が危険を察知すればいいのかって話しだけど……。

これは、意外と簡単、海上自衛隊の新造艦の命名をチャックすれば、おのずとデフコンがわかるような仕組みになっている。

ひりゅうとかそうりゅうとかきりしまとか、そんな名前だったら、デフコン5、平和状態。

いずもとかかがとかあかぎだったら、デフコン4、警戒態勢、危険が高まっているっていうメッセージ。

さらに進んで、むさしとかやまととかあきつしまだったらもうアウト、デフコン2、戦争前夜だと思つていい。

そんなことを考えながら、カップの水を覗き込む。

波紋が広がり、そのあとに私の顔が映り込む……、それを見てちよつと微笑む。

「会談の申し入れを受けるかどうかだが……」

ここは割と普通なナビーフイユリナ記念会館。

帝国からの会談の申し入れを受けて、急遽、班長会議が開催されることになった。

「当然、受けざるを得ないが……、自衛の措置も必要になってくる……」

東園寺が険しい表情で、テーブルの上の広げた巻物を見ながら言う。

「うん、殺されに行くようなものよ」

それに対して徳永が答える。

「身の安全が図られない限り、私は反対」

と、福井も徳永に追隨する。

「だが……、会談の申し入れか……、意外だったな……、有無を言わず攻めてくるものとはかり思っていたよ……」

人見が話す。

彼の顔を見る……、具合が悪いのか、すこぶる顔色が悪かった。

「やつらの狙いは魔法のネックレスだろう？ それをエサに交渉すればいい、隠し通せるものでもないのだし」

和泉の言う通り、隠し通せないなら、思い切って交渉の材料とするのもいいかもね。

「馬鹿を言うな、和泉……、俺たちにやつらの工場をやれとでも言うのか……」

人見がすぐにそれを否定する。

「それは交渉次第だろ、その会談、俺が行ってもいい、もし決裂しても俺ならなんとか切り抜けられる」

「大層な自信だな、和泉？ 如何なおまえでも、何十、何百もの兵士に囲まれたらどうしようもないだろう？」

と、人見がせせら笑う。

「いや、余裕だが？」

涼しい顔で返す。

まあ、でも、実際、和泉ならやりそうなんだよね……。

私はカップの水をちびちび飲みながら二人の顔を交互に見比べる。

「会談など必要ない、攻めてくるなら攻めてくればいい、俺が返り討ちにしてやる」

と、人見が和泉との視線を外し乱暴に言う。

なんか、くんくんらしくないなあ……、顔色も悪いし……。

「人見……」

東園寺が席を立ち、人見のところまで歩いていく。

「なんだ、東園寺……？」

「おまえ、やったのか……？」

「何をだ……」

「これをだ」

東園寺がテーブルの下に隠されていた人見の手を掴み、そのまま上に引つ張り上げる。

「ぐっ」

と、人見が苦痛に顔をゆがませる。

「きゃっ!？」

「ひ、人見くん!？」

掴み上げられた人見の手には厚く包帯が巻かれており、それでも、尚、赤い血が滲んでいるのが見て取れた。

「どういうことだ、人見、この手は……」

東園寺がジロリと人見を見下ろす。

「どうもこうもないだろ、東園寺……」

顔色の悪い顔で軽く笑う。

「許さんと言っただろう」

「今やらずしていつやると言うのだ？ この危機を救えるのはヴァーミリオンしかないだろう、それは、おまえもわかっているはずだ」

人見の言う、ヴァーミリオンとは、ヒンデンブルク広場の飛行船の中にある人型兵器のことだ。

その人型兵器は動力に魔力を使う。

でも、通常の魔力ではほとんど動かない、動かしてもせいぜい1秒か2秒程度。

そこで、裏技、術者の手にナイフを突き立てて激痛を与えると、なぜか魔力が増幅、爆発して、ヴァーミリオンが活動するだけの魔力が得られるようになるってわけ。

おそらく、数十分単位で動くと思われる。

人見のあの手はそれをやったんだろうね……。

痛かったろうなあ……。

「さすがに看過出来ない、謹慎だ、人見の班長としての身分を剥奪する。参謀班の指揮は、当分のあいだ綾原に執ってもらおう」

「ふざけるな、東園寺、こんなときに……」

「ふざけているのは、おまえのほうだろう、人見」

東園寺が人見の胸倉を掴み上げる。

「何度言えばわかる、おまえが流すべきは血ではない、汗を流せ、おまえが流した汗の分だけ、俺たちがこれから流すであろう血の量が減る、俺たちがこれから流すであろう大量の血は、おまえが、今、流さなかった汗の報いだ、そのことを肝に銘じろ、ブレーンとはそういうものだ」

その言葉には凄みがあった。

「くっ……」

人見が視線を逸らす。

「ロツジに戻って謹慎している、その怪我が治るまで班長には復帰させん」

東園寺が人見の胸倉から手を放す。

「くっ、わかった……、今回は俺の負けだ……」

と、人見がのろのろと立ち上がり、部屋から出て行く。

「なんとというか……、東園寺公彦、あなたがいてくれて本当によかったよ……」

誰にも聞えないようにつぶやき、カップに口をつける。

第92話 苦渋一字

みんなが部屋から出て行く人見彰吾のうしろ姿を無言で見送る。扉が閉まるまで誰も言葉を発さなかった。

「なんか、思い詰めてたね、人見くん……」

扉の外の足音が遠ざかり、聞えなくなつたところで福井が口を開く。

「うん、責任感の強い人だから……、謹慎というより、休暇が必要だつたよね、少しゆつくりしたほうがいいよ……」

と、徳永も同意する。

「参謀班の班長代理は雫だったよね、呼んでくる？」

徳永が東園寺に尋ねる。

「いや、次回からでいい、続きをやるぞ」

「はい」

「はあい」

と、みんなが返事をする。

「それにしても、この主催つてというのが会談の相手だよな？ 千騎長アンバー・エルム……、千騎長つて、どのくらいの役職の人？ 結構偉いのかな？」

と、和泉が巻物を翻訳した紙を見ながら疑問を口にする。

「うーん……、千騎長の騎つて何をあらわしているか不明だけど、仮に騎士、千が人数だとしたら……」

と、私が和泉の疑問に答えはじめる。

「さらに単一兵科だと仮定して、人数が千人以上なら、レジメンタル、つまり、連隊、その指揮官は大佐になる。で、千人以下ならバタリオン、つまり、大隊、その指揮官は中佐、ないし少佐。で、さらに仮定の話だけど、この千人の騎兵が単一兵科ではなく、随伴歩兵や弓兵、その他偵察も付随していた場合は人数が跳ね上がり、ブリゲイド、つまり、旅団クラスになる、この規模の指揮官は、少将、ないし准将になる……」

カップの水をちびちび飲みながら大雑把に説明してやる。

「へえ……、少将とか准将かあ……、かなり偉い人がくるんだね……」
和泉が感心したように言う。

「単一兵科だと思っから、佐官クラスだと思っよ」
それでも相当偉いのは確かだけどね。

「ナビィ、やけに詳しいのね、どこで憶えたの？」
と、徳永が聞いてくる。

「うん？」

うん？

あつ……。

「え、あ、うん……、ああ……、たぶん、大河とか悠生が言っつたの、憶えてた……」

やばい、苦しい言い訳をってしまった。

二人に確認されたらアウトだ……。

「南条くんと青山くんに？ そうなんだ……、でも、よく憶えてたね……、授業でもそれくらいの記憶力を発揮してくれると助かるんだけど……、今日のテストと云ったら……」

なぜか、溜息をつく。

でも、なんとか誤魔化せたみたい、セーフ……。

「無駄話はそこまでだ、続けるぞ」

東園寺が巻物に目を通しながら言う。

「ああ、すまん」

と、和泉が巻物を翻訳した紙をテーブルの中央に戻す。

「会談の申し入れを受ける。その際の戦略と、会談に赴く人選だが……」

議題を提起する。

「戦略かあ……、やっぱり、こういうのは、人見くんに行っってもらったほうがいいと思う……、彼、頭いいし……」

「いや、参謀班からは南条に来てもらおうと思っている」

福井に言葉に東園寺がすぐに返す。

「南条くんか……、頭いいよね、あの人も……」

福井も相槌を打つ。

「とりあえず、勝敗ラインを設定する。魔法のネックレスの存在が帝国に知れず、しかも、和解除し攻め込まれもしない、これが理想だが、到底実現不可能な状況だ」

彼の言葉にみんなが頷き、次の言葉を待つ。

「なら、勝敗ラインをもう少し下げる。魔法のネックレスを材料に交渉し、隷属、属国化を避け、条約締結を目指す、この際、対等、平等な条約でなくとも受け入れる」

「妥当なラインか……」

「幕末の日本が取った手？ 屈辱的な条約を締結して、相手との戦争を避けて時間を稼ぐ？」

「不平等条約解消に何十年かかっただと思ってるの？ その間、私たちは彼らに魔法のネックレスを献上するためだけの存在に成り下がってるの？ そもそも、彼らには魔法がない、それを与えるということは、私たちのアドバンテージを放棄するのと同じよ、魔法は私たちの最大の武器、それを放棄するなんて絶対に許されない」

徳永、福井から不満が噴出す。

「そうだ、福井、俺たちの活路はそこにあるんだ」

「活路……？」

福井が首を傾げる。

「だからこの魔法のネックレスだ、あくまでもネックレス、魔法そのものではない、魔法の存在は何が何でも隠し通す、魔法のネックレスを魔法ではなく、そうだな、特殊な鉱物、ここで取れる鉱物を加工して生産しているというようにする。そうすれば通常の貿易、交易として片付けることが出来る。ただの特産品、そう相手に思い込ませ、大軍を持って攻め込む価値もない、ただ、商取り引きをすればいい相手と結論付けさせる。それが我々の勝利条件となる」

「なるほど、そこで、最低限の武力か……、ちよつと脅迫してやればすぐに降伏すると思われれば交渉の余地などない、逆に、脅威的な戦力を有していると思われれば、魔法のネックレス以前に排除に乗り出さかもしれない……、そこで、最低限のそこそこの戦力が必要になつてくるというわけだな」

「その通りだ、和泉、あくまでも魔法のネックレスも、武力も、交渉材料のひとつに過ぎない、我々をどう高く売りつけるかだ」

それにしても、ホントこいつら、真面目に色々考えてよね……、すぐく政治っぽい……。

「木を隠すなら森ね、魔法は魔法のネックレスの中に隠す、うん、納得した」

「でも、やっぱり戦いになる可能性もあるのね、ちよつと不安……」

「それは交渉次第だ、徳永、極力戦争は避ける。で……、会談、交渉に赴く人選だが……」

と、東園寺が一同を見渡す。

「俺と南条……、あと和泉、おまえも一緒に来てくれ」

「了解した」

和泉が力強く頷く。

「この三人に、通訳のエシユリンを加えた四人で会談に臨む」

「うん、わかった、異論はないわ」

「頑張つて、この会談に私たちの命運がかかっているから」

福井と徳永が同意する。

班長全員満場一致だけど……。

「はい、はい！ はい、はい！」

と、私は元気良く手を挙げ、発言の機会を求めぬ。

「では、異論はないな、これでいくぞ……」

東園寺が私をちらつと見ただけで無視しやがった。

「はい、はい！ はい、はい！ はい、はい！ はい、はい！」

さらに飛び上がって両手を挙げてアピールする。

「わかった、わかった、落ち着け、ナビーフイユリナ……、で、なんの

用だ、手短かに頼むぞ……」

やつと指名される。

「えつとねえ、私が行くの、その会談に！」

「はあ？」

東園寺が眉をひそめる。

「ナビー、遊びじゃないのよ」

「また別の機会にしましょうね」

徳永と福井にたしなめられる。

まるで子供扱いだなあ……、ちよつと真面目にやるか……。

「みんな大事なことを忘れてるよ、エシユリンはマスコット班、私の部下だから、その部下を私の許可なく危険なところに行かせられないから」

キリつとした顔で言つてやる。

「ああ、そういえば、そうだったな……、なら、今、出向の要請をする、エシユリンを通訳として同伴させる、異論はないな、ナビーフイユリナ?」

「許可出来ない」

即答してやる。

「ナビーフイユリナ……、通訳が必要なのだ……」

東園寺が疲れたような口調で言う。

「通訳が必要だったら私が行くよ、公彦、それで文句ないでしょ?」
得意げに笑つてやる。

「却下だ、技能に疑義がある、正確に意味を伝えられる通訳が必要なのだ、おまえでは若干の不安が残る」

むかつ。

「エシユリンは素人なんだよ……、なんの素人かつて? それは日本語でもワ・パス語でもない、彼女は、信義、信条、思想、哲学、道徳、政治、経済、軍事、定義、公理、私たちの有するあらゆる常識がわかつてないのよ、私ならつたないワ・パス語でもその意味を理解し正確に彼らに伝えることができる。意味がわからなければ、いくら語学に堪能でも伝えられないのよ」

と、熱弁してやる。

でも、これは建前、本音はエシユリンを信用していないから、前の虚偽通訳を今でも引きずっている。

例えば虚偽通訳でなくとも、わずかなニュアンスの違いで係争に持つていくことだって可能、それをやられたら、私たちにとって大打撃となる。

「ここは誰がなんと言おうと私が行く。
私たちの未来がかかっているんだから。」

「うん、そうだね……」

「ナビーの言う通り……」

「ナビーってたまにすごいこと言うよね……」

と、東園寺以外の班長三人がそう言ってくれる。

「やはり危険だ、命の危険がある、ナビーフィユリナ、おまえはここに
残れ」

このクソガキ……。

私は頭に血が登り、席を立ち、東園寺のところへつかつか歩いてい
く。

うん？

これは、さっきの人見と東園寺のシチュエーションにそっくり。

おお……、じゃあ……。

「公彦……」

と、彼の胸倉を両手でつかみ上げて、思いつきり睨みつけてやる。

「なんだ、ナビーフィユリナ……？」

そして、その顔に近づけて言ってみよう、

「めえ……」

と。

おっと、それはシウスだ。

「ねえ、公彦、命の危険とか言っているけどね、あなたが死んだら、私
たちもおしまいなのよ、それだけ、あなたは私たちにとって重要な存
在、運命共同体なの、そして、それでも、あなたがこの会談に赴く、そ
れは、この会談に私たちの命運がかかっているから。あなたはいつも
リソース、リソース言っているけど、今がその最大リソースを割くべ
きとき、私、ハル、そして、あなた、この三人が私たちの最高戦力、考
えうる限りの最強布陣……、だから……」

一旦、言葉を切り、両手に力を込め、彼の目を思いつきり睨みつけ
て、

「いいから、つべこべ言わずに、黙って、私を連れて行け、クソガキ」

と、静かに、低い声で言い放つ。

「ナビーフィユリナ……」

こうして、私も帝国との会談に同行することになった。

第93話 リープトヘルム砦

そして、五日が過ぎ、会談の日の朝を迎える。

「ナビー、忘れ物ない？」

うつすらと霞む朝霧の中、夏目翼の声が広場に響く。

「大丈夫だよ、翼、昨日の夜もちゃんと確認したから」

辺りはまだ薄暗く、朝日は山々に隠れてラグナロク広場には届かない。

今は5時を少しまわったくらい。

このくらいに出発して、お昼前くらいに会談場所に到着予定になる。

「心配……、もう一回見せて？」

と、夏目が私の背負っている白クマのリュックサックを開けて中を覗き込む。

「もう……」

ちなみに、この白クマのリュックサックは、元からあったものではなく、最近になって生活班の女子のみんなが私のためにと夜遅くまで作業して作ってくれたもの。

ちようど、クマのぬいぐるみを背中に背負ったみたいになっていて、超かわいくて、今一番のお気に入りになっていた。

「ハンカチもあるし、ティッシュもあるし、タオルもあるし、お弁当もあるし、お水も大丈夫……、足りるかな……、ナビー、会場に行っても、出されたお水とか飲んじやだめよ、おなか壊すから……」

「はあい」

「ああ……、あと何か……、これで大丈夫かなあ……」

「大丈夫だつてば、翼あ……、もう閉めて、閉めてえ」

と、その場で足踏みする。

「はい、はい、わかりました、わかりましたよ」

夏目がしびしび白クマのリュックサックを閉める。

「それでは、忘れ物はないな……」

と、東園寺が振り返り、ひとりずつ目で確認する。

狩猟班の和泉春月、参謀班の南条大河、そして、私、マスコット班のナビーフイユリナ・ファラウエイがそれぞれ順番にうなづく。

この四人で会談場所、アバーノ平原に向かう。ちなみに会談場所は旧ナスク村の少し先、徒歩で一時間くらいのところ。

なので、トータルで40キロ程度の行程となる。

魔法の力で足腰が強化されている私たちなら、だいたい、六時間程度で走破出来ると思われる。

「いくぞ、出発！」

と、東園寺が宣言して先頭を歩きだす。

「おう！ 出発進行！」

私が拳を突き上げてそのあとに続く。

「では、行ってきます」

「土産楽しみにしておけよ！」

と、さらにそのうしろを和泉と南条が続く。

「いってらっしゃい！」

「頑張つて！」

「どうか、御武運を！」

早い時間の出発だったけど、それでも多くの人が見送りにきてくれた。

「ナビーのこと、よろしくお願いしますね！」

「気をつけてね！」

「きやああ、南条さあん、かつこいい！」

「お土産待ってるからね！」

と、みんなが大きな声援を送りながら手を振って見送ってくれる。

「うん、行ってくるねえ！」

私も振り返りながらみんなに手を振る。

そして、すぐにみんなの姿は見えなくなり、やがて声も聞こえなくなる……。

ルビコン川を越え、プラグマティッシュエ・ザンクツイオンを過ぎ、さらに、山を登り、地獄の火峠、ヘルファイア・パスを制覇、そこで少

し休憩して、そのまま山を下り始める。

山を降り、平坦な道を歩くこと二時間、太陽が真上に差し掛かる頃、私たちは目的の場所に到着する。

道に迷うことはなかった。

見晴らし良い平原で、尚且つ、会談場所と思われる建物が大きく、遠くからでも目立っていたからだ。

高い石壁に囲まれ、その中央には大きな石造りの砦がそびえ立つ。だが、堅牢という印象は受けない、すべてが真新しく、全体的に白っぽかったからだ。

これは新しいな、たぶん、ここ数日で建てられたものだ……。

「でも、違和感を覚えるな……、どうして、たかだか一会談のために、これほど大きな砦が必要になるんだ……、しかも、こんな短期間に……」

石壁、それはもう城壁と言ってもいいほど長大だった。

高さは5メートルほど、一辺の長さは50メートル以上もあるとても立派な造り。

中も砦だけではなく、それに付随する宿所や倉庫も完備されているのが遠目からでも見て取れた。

「ラグナロクの代表団だ、千騎長アンバー・エルルム殿にお目通りを願いたい」

と、東園寺が鈍色の鎧を着用した衛兵に話しかける。

それを私が通訳して彼らに伝える。

「おまえらが……?」

と、五人ほどいた衛兵が私たちをじろじろと見る。

「思っていたより若いな……」

「なんだ、子供もいるじゃないか」

「本当にこいつらか?」

「なんか、ものすげえやつらって聞いていたけど……」

ひそひそと話し合っている……。

「公彦、公彦……」

と、私は東園寺に肘打ちをする。

「疑われてるから、ほら、ほら、あれ、あれ、あれ出して」
そして、小声であれを催促する。

「ああ、そうだな……」

と、彼がリュックから荷物を取り出す。

「詰まらない物だが、アンバー・エルルム殿に渡してくれ」

菓子折りを差し出す。

「違うからー!」

今出してどうするんだ、直接渡せよ!

「あれ! 巻物!」

そう、シエイカー・グリウムに渡された巻物のことだ。

それで、私たちの本人確認が出来る。

「そつちか……」

と、東園寺が胸元から巻物を取り出し、衛兵たちに見せる。

「ほ、本物、か……?」

「伯爵様の署名、捺印もある、本物だ……」

「しかし、なんで、こんな子供が通訳を……?」

衛兵たちが顔を見合わせる。

「わ、わかりました、リープトヘルム砦へようこそ」

と、衛兵のひとりが私たちに向き直り言う。

「門を開けろお! お客人だあ!!」

さらに、別の衛兵が城壁の上に向かって大きな声で叫ぶ。

すると、大きな赤銅色の門がギーギーと音を立てて開いていく。

「お待ちしておりました、こちらへどうぞ」

と、衛兵が砦の中に手招きしてくれる。

「ありがとうございます、と、うちの代表がおっしゃっております」

私は頷き、先頭で中に入っていく。

「こちらです」

と、衛兵が先導してくれる。

私は彼のうしろに続きながら砦の中をつぶさに観察する。

コンコン、コンコン、と、ハンマーを叩く音が砦の至るところが聞
え、また、あきらかに兵士ではない、大量の建築作業員がいて、その

彼ら忙しく動き回り、砦の建築に取りかかっていた。

「随分と忙しそうですね？ それに、これは改装ではなく、新築ですね？ こんな辺境にこれほど巨大な砦を……、この会談のための建築ではないですよ？ 何か別の理由でもあるのですか？ と、うちの代表がおっしゃっております」

「はい？」

私が言うのと衛兵が東園寺をちらりと見る。

もちろん、東園寺は一言も言葉を発していない。

「ああ、そうですね……、詳しいことは聞いておりませんが、治安維持を目的にしているとか、なんとか……、別に怪しいところはございませんよ、お嬢さん」

と、衛兵が前に向き直り答えてくれる。

なるほどね……。

橋頭堡か……。

ここを侵略の足がかりにするつもりだ。

でも、なにを？

まさか、私たちを？

いや、それは考え辛い、そんなまどろっこしいことをしなくても、簡単に攻め落とせると考えているはずだし……。

じゃあ、なんだろうなあ……。

と、首をひねる。

「こちらです……」

と、砦の正面にさしかかる。

正面には幅の広い石の階段があった。

何段くらいあるだろうか……、20段くらいだろうか……、と、私は足元を確認しながら、段数を数えながら石の階段を登る。

ただ、砦と銘打ってはいるけど、防御をまったく考えてない造りに見える。

この階段もそう、ひらけた登りやすいものだし、何より、城壁、あれ、ただの壁だ、強度のない野面積で、さらに、弓兵が身を隠す鋸壁がない、角櫓もない、これでは防衛出来ない。

なんのつもりでこの砦を造ったんだろう……。
とういうか、そもそも、そんな知識がないのか……？

「うーん……」
と、首をひねる。

「その方々か……？」

上のほうから声がした。

「はっ、お連れしましたー！」

衛兵が直立不動で返答をする。

「では、こちらに……」

私は上を見上げて声の主を見る。

階段の上、大きな扉の前にいたのは……。それは、艶のない、マツトブラックの鎧を身に纏った男……。その顔は美しく、白い肌、瞳は暗く冷たい、風になびく長いグレーの髪もどこか悲しげ。

死んでいるみたいな顔の男……。

「マジョーライ」

その名を口にする。

「どこかでお会いしましたかな、お嬢さん？」

やつが私を見下ろしながら言った。

……。

その顔、確かにマジョーライだが、どこか違和感を覚える……。

私はあいつの肩を外し、肘を折ってやった、あれから二週間弱、そんな短期間で直るものではない。

それにあの顔もそう、私は思いつきりやつの顔を蹴り上げて歯を何本も折ってやったし、鼻も折れていただろう……。なのに綺麗さっぱり治っている……。

「おまえ、誰だ、マジョーライではないな……？」

「ふっ……。私はマジョーライ、不死者マジョーライだが？」

やつが嘲笑う。

ああ、なるほど、不死者か……。思い出した……。

大昔、ペルシャって国がやってた。

兵士が死んだら、姿かたちが似たよう者を補充して同じ部隊に配

属、そして、また同じ相手と戦わせる。

指揮官とかもそう。

敵からしたら生き返ったように見えて、恐怖だったらしい。確か、そいつらも、不死隊とかそんな名称を使っていたなあ……。

「で、おまえは何人目のマジョーライなんだ？ いや、そんなことより、前任はどうした、殺したのか？」

笑う。

「さあて……、なんのことやら……」

やつも笑う。

「さあ、主がお待ちかねです、お客人、こちらへ！」

と、マジョーライが扉を開け放つ。

第94話 ベルゲンデン

砦、建物の中は石造りのせい、外よりも幾分かひんやりとしていた。

カツ、カツ、カツ、と、前を歩くマジョーライの軍靴の音が石壁に反響して大きく響き渡る。

「こちらへ……」

そして、ひとつの部屋……、会談の場だろう、大広間に通される。総石造り、装飾の類は一切ない、グレー一色に統一された広く寒々とした殺風景な大広間……。

その大広間の中央には木製のテーブルが置かれ、その上にはナプキンと空のグラスが席の分だけ配置され、また、この広間には窓がなく、壁に取り付けられている燈台が周囲を照らし、テーブルの上のグラスをキラキラと輝かせていた。

「着席してお待ちください……」

マジョーライがうやうやしく礼をして退場する。

「うーん……」

と、私は真ん中、中央の席に座る。

「それじゃ、俺は……」

南条が私と十席くらい離れた端から二番目の席に座る。

「それじゃ、失礼するよ……」

と、和泉と東園寺が私の両側に座る。

「ふう……」

一息つき、白クマのリュックサックを足元に置き、中から水の入ったペットボトルを取り出し、その蓋を開けて、コクコク、と、二口くらい飲む。

他の三人も同じようにリュックを足元に置いて、中からメモ帳とか書類とか水とか色々取り出し、テーブルの上に並べていく。

特に南条がすごい、何十枚もの紙を何席分にも渡って並べていく。

「カタルかつつうの……」

内心つぶやく。

いや、声に出たかも……。

「遠路はるばる、よくぞお出でくださいました」

と、奥の扉から男が入ってきた。

年齢は70歳くらい、長髪、白髪、これまた丈の長い、法衣のよ
うな薄いブルーのローブを纏った痩せた老人。

あ、この人、偉い人だ、と、直感的に感じ取り、私たちは立ち上
り挨拶をしようとする。

「いや、いや、私は千騎長ではないので、どうか楽にしておいてくださ
い」

と、柔和な表情と手の仕草で私たちの動きを封じる。

「私は本国から派遣された国家上級書士、この会談を見届けさせてい
ただこうと思ひましてね」

彼はそう言い、私の正面の席に着く。

そして、私、東園寺、和泉の顔を見てにこやかに笑う。

なぜ、正面、首座に座る……、この人、絶対偉い人だ……。

「千騎長の準備が整わないようなので、私がお相手でもしよう、そう
思つてね……」

私の表情を読んだのか、聞いてもいないのに、やつが答える。

「どういたしましたかな、お嬢さん？」

優しく微笑む……。

絶対偉い人だよなあ、この人……、何かの探りを入れているのだろ
うか……。

うーん……。

思案を巡らす。

「ああ、自己紹介がまだでしたな？ あ、しましたかな？ いや、して
ませんね……」

と、白い長い顎ひげを撫でる。

この人、ボケてんのか……？

真意をはかりかねる。

「私は国家高級書士の……」

「さつきとちげえじゃねえか!？」

おっと、声に出しそうになった……。あぶない、あぶない……。

「え、ええ……。私は国家上級書士の……。サテリネアス・ザトー……」

ああ？

サトー？

日本人か、この人？

落ち着け、そんなわけないから……。

「あなた方のお名前は？」

サトーが笑顔を作り、私たちに自己紹介をうながしてくる。

サトーか……。その前に、なんか言ったな、サテリネアスとか……、

どういう意味だ……？

いまいち意味がわからない……。

「お嬢さんは……？」

屈託のない笑顔で聞いてくる。

うーん……。もしかして、サテリネアスって、なにかの略称なのか

な？ ミスターとかミスとか、または、レディースとかジェントルマ

ンとか……。

「よし」

胸に手をあて、

「私の名前は、サテリネアス・ナビー」

と、笑顔で自己紹介をする。

「えへ」

さらに顔を少しかたむける。

「お、おお……」

よし、決まった……。

「ほら、みんなも自己紹介、サテリネアス・トウエンジ、サテリネアス・

イズミ、サテリネアス・ナンジヨウ、って……」

と、小声で両脇の東園寺を肘うちしながら自己紹介をうながす。

「さ、サテリネアス・トウエンジだ……。よろしく頼む……」

「サテリネアス・イズミです」

「サテリネアス・ナンジヨウ！ イエー！」

と、南条は親指を立てる。

うん、ノリがいい、私は南条に向かって親指を立てる。

「サテ、サテ……、サテ……、な、なんと、奇遇な……」

「ええ、ホントに」

と、私は満面の笑みで頷く。

「それは、めでたい！ 良き日じゃ、あれを持ってまいれ、客人に振舞え！」

と、サトーがパンパンと手を叩く。

すると、奥の扉から執事風の、モーニングにも似た衣装の男が入ってくる。

片手に盆を持ち、その上にはビンが置かれている……。

そして、その執事風の男が私の隣に来て、

「ベルゲンデン・ゴトーでございます」

と、言い、グラスにピンク色の飲み物を注ぐ。

「ゴ、ゴトー？」

またしても、日本人の名前……、この人も日本人……、なわけないか……。

いや、その前に、ベルゲンデン？ もしかして、これって、名前？

と、なると、あのサトーの前に付いてたサテリネアスつても名前前だった可能性が高いな……。

ああ……、失敗したなあ……、変な人と思われてないかなあ……。

くそお……、通訳難しい……。

まあいい、次からちゃんとやればいい。

「ご丁寧にも、ナビードでございます」

と、ちゃんと頭を下げて挨拶する。

「ほら、ほら、みんなも、ちゃんと挨拶して、東園寺でございますって……」

肘うちをしてみんなに挨拶をうながす。

「と、東園寺でございます……」

「和泉でございます」

「南条でございます！ イエー！」

と、南条が親指を立てる。

うん、ノリがいい、私は南条に向かって親指を立てる。

「べ、ベルゲンデン・ゴトーでございます……」

執事風の男がみんなのグラスにピンク色の飲み物を注いでまわり、最後にサトーのグラスに注ぎ退出していく。

「では」

と、サトーがグラスを掲げる。

私たちもそれに習い、グラスを手に取り掲げる。

「ジャバドゥー！」

その言葉は知らないけど、どう見ても乾杯だと思う。

「乾杯！」

「乾杯」

と、みんなも続く。

サトーがグラスに口をつけたのを見て、私もひと口飲んでみる。

「おおっ!？」

なにこれ、おいしい！

あまーい、イチゴ牛乳だよ！

コクコクと二口、三口と飲み続ける。

「おいしいね！」

と、みんなに同意を求めるけど……。

「誰も飲んでない……、なぜ……」

みんなは乾杯したあとすぐにテーブルにグラスを戻していた。

「なぜって、毒が盛られているかもしれないだろ、迂闊だぞ、ナビー
フィユリナ」

「ああ、それはないよ、それがないことの証明のために、あのサトーの
グラスにも同じビンから同じものを注いだのだから」

少し笑って、またひと口飲む。

「ナビー、俺たちにとっては、毒になるかもしれないって意味もあるん
だよ」

と、和泉が東園寺をフォローするように言う。

「毒になる？」

「そう、慣れてないから、ちゃんと煮沸消毒されてない飲料水を飲むと、お腹を壊してしまうかもしれないってことだよ」

「ああ!? そういえば、翼が言ってた、持って行ったお水以外飲んじやだめだって、お腹壊すからって! どうしよう、飲んじやった!」
「たぶん、これは大丈夫だよ、しっかり加工されているみたいだし……」

と、和泉がワインのようにグラスの中でイチゴ牛乳をまわして、最後に匂いを嗅いで見せる。

「そ、そうだよね……、安心した……」

私も和泉の真似をしてグラスをまわし、そのままコクコクと飲む。

「いやあ、おいしい! サトーさん、これ、なんて言う飲み物なんですか?」

グラスを空にしたあとサトーに聞く。

「ベルゲンデン・ゴトーじゃよ、言わなかったかのお……」

「はあ?」

目が点になる。

なんか、間違ったかも……。

その時、バンツ、と云う大きな音とともに奥の扉が勢い良く開き、騎士風の男が大股で入ってくる。

「すまない、遅れた」

高いクラウンと幅広いブリムの黒い帽子、赤系統のレザーメイルと黒革の艶やかなクロークとブーツ。

容姿は……、細い目と、細い尖った顎、それにピンと張った口ひげが印象的な男。

「千騎長アンバー・エルルムだ」

通訳をしなくても、アンバー・エルルムという単語は聞き取れたのだろう、皆が一斉に立ち上がり、挨拶しようとする。

「ああ、儀礼はいい、交渉の準備をしてくれ」

と、先程のサトーと同じく、手で制止し、座るよううながす。

この対応で確信する、やはり、この砦は私たちとの会談のために造られたものではないと。

あまりにも扱いが軽すぎる、実際その通りでも、私たちのことを、その辺の村の代表団としか思っていない。

「マジョーライ、任せたぞ、卿の案件だ」

アンバー・エルルムのうしろに続く副官たちの中に新しいマジョーライがいた。

「はっ、千騎長」

そして、彼は、中央、サトーの隣に座り、アンバー・エルルムはテーブルの端、ちょうど、南条の向かいあたりに座る。

アンバー・エルルムの前には副官から出された書類があり、それを頬杖をつきながらぺらぺらとめくり、

「始めろ」

と、書類に目を通しながら、顔も上げずに指示を出す。

第95話 投影

「まず始めに、互いにそこがあり、不幸にも戦闘が行われ、貴重な人命が多数失われたことに、深くお悔やみ申し上げます」

と、マジョーライが頭を下げる。

「お悔やみ申し上げます」

アンバー・エルルムも書類に目を通しながら言う。

私はそれを通訳して東園寺たちに伝える。

それに対して東園寺はうなずき、口を開く。

「弔辞、痛み入ります。致し方ない偶発的な戦闘とはいえ、このような結果になり残念です。故人のご冥福をお祈りし、残されたご家族に心からのお悔やみを申し上げます」

と、頭を下げる。

私はそれを相手側に伝える。

それを聞き、マジョーライは満足げにうなずく。

「では、互いに和解も済んだところで……、本題に入りたいと思います……」

手元の書類をめくる。

「我々も戦が本望ではないと、ご理解いただけたところで……」

と、めくっていた書類を閉じ、そのままテーブルの上を滑らすように東園寺に投げつける。

「これは……？」

字の読めない東園寺が私に書類を渡す。

私はそれに目を通す。

「税金関係……、あと関税も……、それに、ああ、領事裁判権も……」

まあ、所得税と関税は予想していたけど、領事裁判権は予想外……、かなり片務的な内容、つまり、相手側がこちら側の誰かを殺しても罪には問われないけど、反対にこっち側が相手側の誰かを殺したら、犯人の引渡しをしなければならいって内容……。

その内容を細かくレクチャーしながら東園寺に伝える。

「サインと血判をお願いします……」

と、マジョーライが自分の書類にサインをし、ナイフを取り出し、自分の指を切り付け血判を押す。

東園寺はマジョーライの行動をじっと観察したあと、書類にサインし、同じようにナイフで自分の指を切り付けて血判を押す。

そして、それをテーブルの上を滑らすようにマジョーライに返す。「ふっ、さすが……、やはり、ただの野蛮人ではないようですね……、これは、不平等でも、不公平でも、なんでもない、我々の弱気の表れ、対等での取り引きをした場合、こちら側が不利益を被りかねない、それを苦慮した結果です。ご心配なさらないで下さい、そちら側に不利益のないよう配慮いたしますから」

と、サインと血判を確認しながら言う。

「で、我々が取り引きを行いたい物品はこちらです……」

マジョーライがうしろに控えていた副官から豪華な木箱を受け取り、それを私たちの前に差し出し、ゆっくりとその蓋を開けて見せる。中にはシルバーのアクセサリー、そう、魔法のネットワークが入っていた。

「こちらを大量に仕入れたい……」

東園寺の目を見て笑顔をつくる。

「百……、千……、万……、いくらでも買う……」

さらに凄惨に笑う。

「お売りしたいのは山々ですが、数に限りがございます……」

「でしようね……、おいくつ用意出来ますか？」

「そうですね……、貴重な物ですし、月に30、それが生産の限界になります」

東園寺の言葉にマジョーライたちが顔を見合わせる。

「今、生産とおっしゃいましたか？　つまり、自らで作っているか？」
当然、そうくるよね。

「ええ、生産です。鉱山で鉱石を発掘し、私どもが加工して、このパシフィカ・マニフィカスを生産しております」

と、東園寺の言葉を待たずに私が答える。

「パシフィカ・マニフィカス？」

「このアクセサリーの名称です」

パシファイカ・マニファイカス、魔法のネックレスとは言えないので、便宜上そう呼ぶことにした。

この名前は私がヒンデンブルク広場で発見した魔法書から取ったもの。

「やはり、そういうことですか……、つまり、その鉱石さえあれば、我々でも生産可能だということですね？」

「いえ、加工には特殊な技能が必要で、習得には数十年かかります。ですので、私ども以外には実質生産不可能、そう思っていたいただいて結構です」

ピシヤリと言つてのける。

「ほう……」

マジョーライが少し考え込む。

「嘘を言うなよ、小娘……」

隣のサトーが低い声で言う。

「そもそも、おまえ、通訳をしていないだろう、人を騙すもの大概にせえよ、この小悪魔が……、その証拠に、これを見ろ」

と、サトーがテーブルの上にゴトンと何かを投げつける。

「こ、これは……」

そう、それは魔法のネックレスだった…… それも、木箱に入ったネックレスとまったく同じデザインの物……。

「それは、偽者じゃ、いや、本物か……、違うな、両方本物じゃ、だが、片方は身につけると身体を軽くしてくれる、しかし、もう片方は身につけてもなんともならん……、不思議に思つてのお、調べてみたんじゃないが、その首飾り、なんと両方とも、東方の遊牧民が作ったものじゃった……、はて、どういうことじゃやて？」

サトーが目を剥いて、半笑いで私に問いかける。

しまった……、確認し忘れていた……、既存のネックレスに魔法をかけて作った物だったのか……。

ど、どうしよう……。

「バンツ!!」

その時、激しくテーブルを叩く音が室内に響き渡る。

「はい、それ、ダウト」

テーブルを叩き、その言葉を発したのは、端に座っていた南条大河だった。

「これを見る」

そして、その手にはひらひらと一枚の紙が持たれている。

そう、カルタのように、テーブルに並べられた紙を叩いて取ったのだ。

「ダウト？」

サトーが目を見開き南条に問いかける。

「嘘つきはテメーだろ、じじい、これを見ろよ」

なんと、南条が現地の言葉でそう言い放った。

「それは？」

「そのネックレスの設計図だよ、これは間違いなく、俺たちが作った一品物だ」

南条が持つ紙にはそのネックレスの絵が描かれていた。

「あんたが出した物が偽者なんだよ」

そして、バンツ、とテーブルを叩き、紙を元の位置に戻す。

「ほほほ……、そうじゃったのお……、これはわしがそれに似せて作らせた物じゃった、忘れておったわい、失敬、失敬……」

と、サトーが柔和な表情に戻る。

「大河……、言葉わかるの……？」

「うん、ああ、ちよつとな、単語だけ……、ナビー、あんな簡単な鎌かけに引つかかるなよ、揺さぶりなんて、交渉の常套手段だろ？」

と、片目をつむり、親指を立てる。

「う、うん……」

それにしても、なんだ、これ……、なにが起こったのか、わからなかった……。

でも、これで確定か、やつらは完全に怪しんでいる……。

「では、仕切り直して……」

マジョーライが書類をめくる。

「あくまでも、そのアクセサリー……、パシフィカ・マニフィカスは、特殊な鉱石を加工して作った物だと言い張るわけですね……」

メモを取りながら話す。

魔法のネックレスだと確信しているのなら、最初からこんなことはしないだろう、たぶん、なんらかの謎がある、その程度の認識だと思う……。

「ああ、それと、このパシフィカ・マニフィカス間での性能差が見受けられるようですが、これは、鉱石によるものですか？ それとも工程によるものですか？」

それは通訳して南条に答えてもらう。

「製作過程で何回研磨するか、何面にするか、何回反射させるかで性能が変わってくる、詳しいことは企業秘密だ、これ以上は勘弁してくれ」と、彼は答える。

「そうですか……、それで、このパシフィカ・マニフィカスは、一つ作るのに、何人で何時間かかるものなのでしょうか？」

それも南条。

「三人で一日一個」

と、短く答える。

「ふむ……、では、鉱石はどの程度採掘出来るのでしょうか？ 日に一個分とか？」

それには私が答える。

「ブロックケービングで採掘しているから大量に取れる」

「ブロックケービング？」

「ああ、すり鉢状に採掘していく方法、おまえらでは理解出来ないよ」これは、嘘だけど、もし、視察に訪れても、あの大きな虫がいたところを採掘場と偽ることが出来る、ちようと、ブロックケービングで掘ったように見えるから。

「では、鉱石があり、人員さえいれば、量産体制は可能だと……、ならば、例えばの話、この砦で製作をしていたかどうかは可能でしょうか？」

可能だけど、嫌だ……、それが通じる相手だろうか……。

何か言い訳を……、と、南条をチラツと見る。
すると、彼がうなずき、口を開く。

「無理だ、気候に問題がある、最低限の湿度がなければ、削り出す段階で割れてしまう」

「はい、それ、ダウト」

その言葉とともに、ドン、と云う、音が広間中に響き渡る。

「ひっ!？」

南条の悲鳴だ。

見ると、彼の手のすぐ横にはナイフが突き刺さっていた。

「人間、自分のついた嘘は、すぐに忘れちまうものなんだよな……」

そのナイフを手にした人物が言う。

南条の向かいに座っていた人物……、そう、千騎長のアンバー・エ
ルルムだった。

その彼がテーブルに片足を踏み出し、南条の手を近くにナイフを突
き立てたのだ。

「小僧、これが何かわかるか……?」

そして、ナイフをテーブルから引き抜くと、そこには一枚の紙が刺
さっていた。

「おまえがさつき見せた首飾りの設計図だ、わかるな?　これが削り
出したのか?　なにをだ?」

と、南条に設計図の書かれた紙を突き出す。

「な、なにを……」

南条がゴクリと唾を飲み込む。

「一回だけなら許す、こちららも嘘をついていたからな……、だが、次は
ないぞ、次は腕を飛ばす」

と、アンバー・エルルムがナイフから紙を取り、それを元の位置に
戻し、自身も席に着く。

「続ける」

と、よく響く、低い声で言う。

第96話 剣闘士

南条大河が気持ちを落ち着かせるように、目の前に並べられた用紙の配置を変える。

「すう……、はあ……、すう……、はあ……」

と、深呼吸を繰り返しながら、用紙を動かす。

しかし、その手はカタカタ、カタカタと小刻みに震え、激しく動揺しているのが誰の目にも明らかだった。

「人に、揺さぶりをかけて、動揺を誘うのが交渉の常套手段だろ、なんて言っただくせに、自分が引つかかってどうするのよ……」

そう、心の中でつぶやく。

でも、南条つて心が弱いところがあるんだよね。

彼は頭も良く、才能豊か、運動神経抜群、総合力では班長の人見彰吾をも上回る。

だけど、ここぞというときに弱い、心が乱れると途端に頭の回転が鈍くなり、失敗を繰り返す凡人に成り下がる。

「もう使えないな、あいつ……」

彼の横顔を見て、そう判断する。

「よくも大河を潰しやがったな……」

涼しい顔で書類に目を通していているアンバー・エルルムを睨みつける。

「それにしても埒が明かんのう……」

サトーがグラスのベルゲンデン・ゴトローを飲み干す。

「お互い本音で話そうか……」

ゴンツ、と、大きな音を立ててグラスを置く。

「その首飾り、なんらかの力、なんらかの超常の力が働いておる……、そう睨んでおるんじゃないが……、それがなんなのか、見当もつかん……、それを教えてもらえんかのう、小娘よ……」

と、言い、妖怪のようにニタアと笑う。

「あんた、何者？ 国家なんとかの人じゃないでしょ？」

やつの顔を正面に見据えて言う。

「ほほほ……、残念じゃったのう、わしは国家特級書士のサテリネアス・ザトーじやよ」

「だから、さつきと役職名違うから……、おい、アンバー・エルルム、今のはダウトだよなあ……？」

と、やつに視線を送る。

「いや、セーフだ、そのような役職はある」

私をちらつと見て答える。

「ちっ……」

「ふおっふおっふお……」

さらに、じじいが妖怪じみた笑い方をする。

「少し、昔話でもしようかのう……、いや、先にあれじゃな……、あれを持ってこい！」

と、サトーが大声を出す。

その直後に奥の扉が開き、鈍色の鎧を着た大男が広間に入ってくる。

手には巨大な棍棒が握られている。

「ふおっふおっふお……」

と、サトーがブルーの法衣から腕を出し、まっすぐ横に伸ばす。

「やれ！」

そう指示を飛ばす。

「な、なにを……」

広間に入ってきた大男が棍棒を両手に持ち、それを大きく振りかぶる。

そして、渾身の力でその腕に振り下ろす。

「なにっ!？」

「あっ！」

と、東園寺たちが驚きの声を上げる。

巨大な棍棒がサトーの細腕に叩きつける、その瞬間までやつはニヤけた表情で私の顔を見続けた。

ゴキンッ、と何か折れ、砕け散る音が響く。

折れたのは……、棍棒のほう……。

真つ二つに折れた棍棒は木片を散らしながら天井にぶち当たり、その後、石の床の上に落ち、乾いた音を立ててくるくと転がる。

「ふおーふおつふおつふおー！」

と、サトーがその腕を私に見せる。

その細腕はまったくの無傷、赤くすらなっていないかった……。

「じじい……」

なんのトリックだ……。

視線を床に落ちた棍棒に移す。

「手で折れてるな……」

シラカシにも似た色合いの棍棒を観察し、そこに何らかのトリックの痕跡がないか探す。

「手品ではないぞ……、疑り深いやつよのう、小娘……」

鈍色の鎧の大男が折れた棍棒を拾い、一礼して広間から退出していく。

「ふおつふおつふお、睨むな睨むな小娘……、今種明かしをしてやる……、いや、その前に昔話でもするかろう……」

私はサトーの顔をじつと睨みつけ、その真意を凶ろうとする。

「あれはもう、50年以上前になるかのう……、都では千年祭に浮かれていた頃じゃ、そうそう、先々代の皇帝が無類の剣闘士好きで、その時も闘技場では、毎日、何百、何千もの試合が行われ、昼夜問わず大勢の人間が殺し合っていた……」

やつがそこで言葉を切り、グラスを手にしてひと口飲む。

「そんな中、事件が起きた……、ある闘技会に現れた女剣闘士じゃ……、そやつは極めて美しい娘であったが……、おお、思い出した、この顔じゃ、おぬし、あの娘にどことなく面影が似ているのう」

と、私の顔を見て言う。

「冗談じゃ……、似ても似つかん顔じゃ、あの娘のほうが美しい……」
サトーがまたグラスに口をつける。

「そう、あの娘、最後まで名前がわからなんだ……、最後の戦いは凄まじかった……、歴戦の剣闘士50人以上を相手取り、勝利目前までこぎつけた……、じゃが、そこまで、娘は力尽き崩れ落ちた……、そ

して、娘の首に巨大な斧が振り下ろされた……。誰も娘の首が飛んだと思った、じゃが、飛んだのは斧のほうじゃった……。そうだ、さっきのこれと同じじゃ」

と、サトーが細腕を見せる。

「一瞬の静寂がコロシアムを覆う……。じゃが、奇跡はそこまで、静寂のあとには凄惨な殺人ショーが繰り広げられた、娘は大勢の剣闘士たちになぶり殺されてしまったのじゃ……。さすがにそこまでは防げなかったようだ……。それを見ていたわしは不思議に思うてのう、あの娘の首に振り下ろされた斧が折れたことに……。そこで、斧を調べさせた、じゃが、正常、ひびが入っているということとはなかった、なら、娘の身体に秘密があるのか？ いや、なかった……。それでは何か特殊な装備か？ そして、見つかった……。これじゃ……。」

サトーが法衣の胸元から何かを取り出す。

それは、なんの変哲もない銀色のネックレス……。だけど、特徴的なのはペンダント部分、形はひし形で、中央には妖しく光る赤い宝石が取り付けられている。

そう、それは……。

「小娘、貴様がその首からぶら下げておるものと同じじゃあ!!」

サトーが目を剥き、鬼の形相で叫ぶ。

私は無意識に胸元のネックレスを手で触る。

ネックレスはワンピースの中に入れてあり、外からは見えなかったはず……。透けて見えたか……。いや、それは考え辛い……。なら、この前の襲撃のときに目撃され報告された可能性がもつとも高い……。「同じ物がないかと搜索を始めた……。50年じゃ、50年探し続けた、世界中をだ!! じゃが……。ついぞ見つけ出すことは叶わなかった……。諦めかけた頃じゃ、ひよっこりあらわれおった……。それが、それじゃ……。」

と、テーブルの上の木箱に入った魔法のネックレスを指し示す。

「じゃが、どうも性能が物足りない、これとは格が違う……。」

サトーは手に乗せたネックレスを見る。

「どういふことじゃ……。」

そして、私の顔を見る。

私はやつが手にする魔法のネックレスを観察する。

私のとほぼ一緒、人見たちが作った物とは一線を画す妖しさと輝き、おそらく、ヒンデンブルクのオリジナル品。

あれは……、回収しておかなければ危険だ……。

「出所は……、都より遙か遠く離れた辺境の……、さらに、その奥に分け入った未開の地……」

言葉を切り、千騎長アンバー・エルルムを見る。

すると、彼が口を開く。

「ある村にて、超常の力を使う者があらわれたという情報が舞い込んだ……、それは、なんでも、剣から炎を出すというにわかには信じ難いものだった……」

ちっ、和泉のあれだ……。

「そうじゃ、炎を出す……、これと同等の力を有するのならば、それくらいのことでもおかしくはない……、じゃが、村人をいくら締め上げてそんな力はないと言う……、はて、ならば命懸けなら、その力を発揮するのはでないかと思ひ、兵どもに村を攻めさせた……、が、結果は何もなし……、じゃが、その後じゃ、そやつらがどこかに逃げて行きおつた、当然追撃させた、近隣の村々に言い触れまわられたら厄介じゃからのう……、そこで、出合ったのが、おぬしらというわけじゃ……」

ニタニタ笑いやがった……。

「おぬしらは強かった……、予想以上にな……、あれぞ、超常の力……、その力が欲しい、その秘密を知りたい……、どうじゃ、わしだけに教えてくれんかのう、小娘よ……」

身を乗り出して私の顔を覗き込む。

「まあ、確かに……、その首飾りは私が所持しているものと瓜二つだけど……」

と、胸元からネックレスを取り出し、サトーに見せる。

「おお……、やはり……」

やつが目を見開く。

「でも、これは私どもが作成した物ではなく、古代の技術で作られた一品物、そちらのも、そう……、私どものパシフィカ・マニフィカスはこれを模造したレプリカ、性能が格段に落ちるのは必然……、その性能にご不満があるのなら、残念ですが、この取り引き自体なかったことにいたしましょう、それでは……」

と、私は席を立つ。

「みんな、帰るよ」

さらに、東園寺たちにも日本語で言う。

「おう……」

「ナビー？」

「今片付ける……」

大人しく帰してくれるとは思わないけど……、これ以上交渉しても無理になるばかり、なんらかの譲歩を引き出したい。

「それ、ダウトじゃのう……」

「ええ、ダウトですね……」

サトーとアンバー・エルルムが言う。

「なに？」

彼らを見る。

「ある女性なんらかの祈り、なんらかの言葉を囁くと、指からクモの糸のような物が噴き出したという報告もある……」

アンバー・エルルムが書類をバサツと投げてよこす。

「先の炎もそう、そのクモの糸もそう、おぬしらは嘘をついておる……、何を隠しておる……、それを教えろ、小娘え!？」

「断る、じじい」

と、やつを見下ろし言っつてやる。

「ふおつふおつふお、そうくるかい……、なら、決闘じゃのう……、わしも無類の剣闘士好き、ちょうど決闘を見たいと思っつていたところじゃ、それも、命懸けのな」

「はあ?」

やつの顔をまじまじと見る。

「勝ったほうが正義、勝ったほうの意見を採用する!! どうじゃ、公平

じやろう!?!」

サトーがテーブルを強く叩き、勢いよく立ち上がる。

第97話 地下闘技場

大広間が無数の軍靴の音で溢れかえる。
複数ある扉から大勢の屈強な兵士たちが突入してきたのだ。

「なんだ、どうした、ナビーフィユリナ!？」

「ナビー、どうなった!？」

「ひい、なに、なに!？」

と、東園寺たちが周囲を見渡し叫ぶ。

「交渉決裂、決闘で決着つけるって……」

二重、三重と包囲していく兵士たちを見ながら冷静に答える。

「決闘だと……?？」

「ええ、あれよ、前のナスク村のときと同じ、こいつらって根つからの決闘好きみたい……、それで白黒つけたいんだって」

「なるほど、そういうことか……」

東園寺も納得したのか小さくうなずく。

「ついで……」

サトーがブルーの法衣をバサツとひるがえし、奥の扉へと歩いていく。

「……」

槍を持つ屈強な兵士たちにうながされて、私たちは大人しくサトーのあとに続く。

扉をくぐり、石畳の廊下を進む。

「まずいことになった、この決闘、魔法が使えないよ」

四人の先頭、サトーのすぐうしろを歩きながら口を開く。

当然、サトーを始め、帝国軍のやつらは私たちの言葉は理解出来ないの、聞かれてはまずいことでも、心おきなく話すことが出来た。

「魔法が使えない?？」

「うん、あいつら怪しんでいる、私たちの力が、あの魔法のネックレスによるものではなく、何か別の力によるものじゃないかってね、それを、この決闘でそれを確かめようとしている……、だから、それが何なのか悟らせないためにも魔法を禁止する必要がある」

「魔法無しで戦えつていいのかよ……」

南条が不安そうに言う。

「うん、でも、自信がないなら、仕方ない、負けて殺されたら意味がないからね……、その時は魔法を使いましょう……、どう、ハル、魔法無しでも勝てそう？ あなたの判断に任せるよ」

肩越しに彼を見る。

当然、ここは和泉春月に戦ってもらおう。

「ひとつ聞いてもいいかい、ナビィ？」

「うん？」

「魔法有りて勝ったとき、魔法無しで勝ったとき、それぞれどうなるか教えてくれ」

和泉の質問に少し考える。

「そうね……、魔法有りて勝った場合、今日のところは帰してもらえらるだろうけど、すぐに大軍を引き連れてラグナロクに攻めてくると思うよ。一方、魔法無しで勝った場合、私たちは彼ら、帝国と、正式に交易を開始でき、最低限の身の安全が保証されるようになる……、いわゆる、公彦が最初に言った勝利条件に近づくことになる」

「そうか……、なら、魔法無しでやろう……」

和泉が決意を持って言う。

「お願い、ハル、今はあなたに頼るしかない、魔法無しで勝つて。もし、勝てたら、相当な時間が稼げる、私たちが作るネックスなんて大した力が無いという証明になるんだから、彼らの興味は大幅に削がれる」

「ああ……、勝つき……、と、言っても……、完全に使わないのも無謀だ……、どの程度のエンチャントなら行ける？」

それは私にはわからない……。

「大河？」

と、南条に助けを求めらる。

「魔法の使用がばれないようにするのか……、どこで戦うのかで条件が変わる、屋外だったら、ほぼ制約はないが、屋内ならば、軽いエンチャントでも光って見えてアウトだ」

カツン、カツン、と、乾いた音を立てて階段を降りていく……。

「地下っぽいね……」

「わかった、屋内だな、エンチャントは俺にまかせてくれ、ぎりぎり見えないレベルのエンチャントを施す」

「ああ、頼む、南条」

と、和泉が軽くうなづく。

あれも教えておくか……、と、和泉に向かって口を開こうとする、けど、

「ふおっふおっふお、随分熱心に秘密の会議をしておるようじゃのう……」

と、前を歩くサトーに言われる。

「しかし、どこの言葉じゃ、それは？ 聞いたことがないぞ？」

「遙か東方の国の言葉よ……」

ぶっきらぼうに答える。

「ほう……、どの辺じゃ？ 海を越えるのか？ それとも砂漠か？」

「どうでいいでしょ……、それより、じじい、あんたこそ何者よ、すごく偉そうなんだけど？」

大体想像はつくけどね、あれ、あの巻物に署名、捺印がしてあった、あの辺境伯の、

「ダイロス・シヤムシエイドでしょ？」

と、やつの中に向けて言ってる。

「ふおっふおっふお、なめられたものよのう、わしがあんな下っ端と間違われるとは……、のう、エルムよ……、教えてやれ、わしが誰かを……」

「はっ、先帝サテリネアス・ラインヴァイス・サトー陛下であらせられます」

千騎長アンバー・エルムがそう答える。

「あ、そう……」

最悪だ……。

その前に、サトーなの？ サトーじゃなかったの？ なんか、混乱してきた……。

私は目頭を押さえる。

「きゅー」

おっと、思わず現地の言葉が出てしまった。

でも、救いなのは先帝というところか、隠居していて実権は握っていない……。

「()じゃ……」

正面の巨大な扉がギーという音を立ててゆっくり開く。

そこは薄暗い廊下よりもかなり明るく、まぶしくて一瞬目がくらむ。

まず目に入ったのは、サンドイエローの砂の地面、さらさらとした決めの細かい砂で、砂浜や砂漠などを彷彿とさせる砂質だった。

次に広さ、直径30メートル程度の円形状、グレーの石壁と天井、その石壁と天井にはずらりと松明が焚かれている。

「ふおっふおっふお、準備をせい」

と、サトーが先を歩き、観覧席だろうか、正面左にある、少し高くなつた椅子が並べられている場所に向かう。

「こちらへ」

ひとりの兵士が私たちを別の場所にうながす。

そこは闘技場のすぐ脇の扉もない小部屋。

中には武器類、鎧類がずらりと並べられている。

「お好きなのをお使いください」

兵士が武器や鎧を指し示す。

「出場者はどなたで？」

私は視線で和泉春月だと告げる。

「では、先に身体検査を……、公平を期すために、ここにある鎧、武器以外の持ち込みは禁止とさせていただきます。申し訳ありませんが、ナイフなどの短刀類、その他武器になるような物がないかチェックさせていただきます」

兵士が和泉の元へ向かう。

「ハル、身体検査するって、武器とか持ち込み禁止だつて」

そう告げると和泉は黙つてうなずき、兵士からの身体検査を受け入

れる。

「では……」

身体検査を受けながら、和泉は武器を外し、帯革を取り、武器になりそうなものはすべて脱ぎ、それを東園寺たちに渡していく。

「こちらもお取りください」

魔法のネックレス……、ではなく、和泉用に作られた魔法のブレスレットを外し、それを南条に預ける。

「以上で問題ありません。では、武装をしてください、どれをお使いになろうとも自由です」

と、兵士はすぼんと半そでシャツだけになった和泉に言う。

「どれにするか……」

和泉は鎧の物色から始める。

「和泉、なるべく白っぽいのにしてくれ、エンチャントの発光をごまかせるかもしれない」

「ああ、わかった……」

うなずき、和泉が選んだのは……。

「おお……」

白いレザーの鎧……、赤や金で縁取られた、とても豪華なレザーマイルだった。

「かつけえ……」

思わず南条もそうつぶやいてしまう。

「派手だな……」

同じでデザインのブーツを履きながら和泉が少し笑う。

ブーツの次はヘルム……、これも同じデザインのものを選ぶ。

それは、ヘルムというより、額を中心に守るサークレットに近いような形状をしていた。

「よし……」

最後にガントレットをはめる。

「おーけー」

と、南条が監視をしている兵士に悟られないように、何かアドバイスをするような素振りで和泉に近づく。

「アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、静寂パビロソレイの風盾」

会話をしているという体で防御、強化魔法を付与していく。

「焼け石に水か……、防御はやはり光る……、これが限界だ……、その代わり、強化は十分に施されたはずだ……」

「ああ、ありがとう……」

と、和泉が南条に礼を言い、今度は武器の物色を始める。

「これがいいか」

その中の一つの剣、片手、両手、両方いけるだろう、少し大振りのバスタード・ソードを選び、その鞘を抜きかざしてみせる。

「ハル……」

私は刀身にひびなどがなくかチェックしている和泉の元に歩み寄る。

「どうした、ナビー？」

視線は刀身に向けながら言う。

「戦闘的なアドバイスなんて、あなたには必要ないでしょうけど……」

そもそも、普通にやったら和泉のほうが強いしね。

その強い和泉がさらに強くなるのは嫌だけど……。

「ハル、心の中で呪文を唱えてみて？」

「うん？」

「いいから……、早く」

「あ、ああ……、唱えたよ……」

「じゃあ、今度は両手両足を意識しながらもう一回」

「ああ……」

「そして、三回目、同じ呪文を唱える、と、強く意識して、一文字目を口にするその瞬間にそれを飲み込んでみて」

「なっ？」

と、和泉が驚いたような声を上げる。

「それで手足が強化されたはず、それは厳密には魔法ではない、なので光もしないし、当然、魔力も放出しない」

彼にゴッドハンドを教える。

「ナビー、キミは、いったい……」

と、和泉が私の顔をまじまじと見つめる。

その顔を真っ直ぐ見返して、強く、大きくうなずく。

「時間です、入場してください!!」

兵士の声が響き渡る。

「よし、行こう、ハル!!」

その背中を強く平手打ちすると、パーンという大きな音が鳴り響く。

私も和泉と一緒にゴツドハンドをしていたからね。

少し微笑む。

「ああ、行こうか……」

和泉が闘技場に向かい歩きだす。

第98話 ロツイエの血の夜

さく、さく、と、歩きたびに、きめの細かい砂が音を立てる。

闘技場に入り、あらためて周囲を見渡す。

直径30メートル程の広さに、リングという意味だろう、その少し内側を私の肩くらいの高さの石垣で一周ぐるっと囲っている。

石垣は基本的にグレーだが、至るところに赤黒いものが付着していた……。

中にはまだ乾いていない、新しいものもある……。

「かなり使っているな……」

吐き捨てるように言う。

「お入り下さい……」

と、兵士が石垣の切れ目にある木製の扉を開き、和泉に中に入るようにうながす。

「じゃあ、行ってくるよ」

彼がみんなに手を振る。

「頑張って」

「頼むぞ、和泉」

「無理をするなよ、いざとなったら魔法を使え、あとは俺たちがなんとかするから」

最後の言葉は南条大河によるものだったが、その気持ちは私も東園寺も一緒だ。

「ああ……」

和泉はそう返事をして、闘技場の中を進んでいく。

「では、お連れの方々はこちらへ」

私たちはザトーたちがいる観覧席のほうへと誘導される。

「ほう、レーザーメイルをチョイスしたか、何を考えておる、賭けに出たか……?」

観覧席に着くなりザトーのそんな声が聞こえてくる。

「身軽な分、体力の温存は出来ませんが、その分一発でも受けければおしまいです」

重は200キロを超えているだろう。

さらに、分厚、鈍色のフルプレートアーマーを着用し、その姿はさながら山のようなだった。

手にはこれまた巨大な鉄槌、それを軽々と片手で持ち歩く。

「どうじゃ、小娘、強そうじゃろ?」

と、ザトーがこちらに身を乗り出して話しかけてくる。

「ロツイエの血の夜、ボルベン・サンパイオ、それがやつの名よ……、小娘はロツイエの血の夜は知っているかのう?」

「いいえ」

と、ザトーをちらりと見て答える。

「そうか、そうか、なら、教えてやろう、ロツイエというのは村の名じゃ、人口は、そうじゃのう、200人くらいじゃったかのう……、そのロツイエである夜、ひとりの殺人鬼があらわれた、そいつは巨大な山のような大男じゃった……、そして、その大男は手にした鉄槌で村人たちを次々と撲殺していった……、瞬く間に血の海、その村にも衛兵はいたが役に立たないほど、その男は強かつたんじゃ……、ひとりずつ確実に鉄槌で殺していった……、女、子供、老人みさかいなく……、やがて村は物言わぬ肉塊だらけになり……、動く者は、その大男だけになった……、そう、それをやったのが、あの男よ……、人は恐怖と畏敬の念を込めて、こう呼ぶ、ロツイエの血の夜、ボルベン・サンパイオ!! と……、まつ、村人を皆殺しにせよと命じたのはわしなんだけどな、きやつきやつきやつきやあ!!」

と、ザトーが肘掛を叩いて大笑いする。

なんていうか、こいつの話の話を聞いていると、具合が悪くなってくる……。

「一流の剣闘士にはこれくらいの伝説が必要じゃて! きやあきやつきやつきやあ!」

狂ったように大笑いするザトーを冷めた目で見つめる。

「こいつは盗賊だな……」

ひとつ溜息をつく。

昔、誰かが言っていた、盗賊には三種類いると……。

まずは、暴力によって盗む者。

次に、知略によって盗む者。

最後に、権力によって盗む者。

このザトーという男は三番目のタイプだ。

「い、和泉、大丈夫か、あんな化け物と……」

南条が対戦相手の巨体に圧倒され、そうつぶやく。

「和泉ならやってくれる、信じろ」

それに対して、東園寺が自分に言い聞かせるように答える。

「それにしても、勝てるのか、和泉は……」

私は闘技場の正面で向かい合う、二人に剣闘士を見つめる……。

遠目に見ても、二人の体格差が三倍以上あるのが見て取れる。

「では……、始めようかのう……」

ザトーがゆっくりと立ち上がり、手を挙げ、そして、

「開始！」

と、勢いよく、その手を振り下ろし、開始を宣言する。

すると、闘技場内に鐘の音が高らかに鳴り響く。

「ふおっふおっふお……、楽しみじゃのう……」

ザトーが豪華な玉座に腰を下ろす。

闘技場中央では二人の剣闘士が互いに武器を構え睨み合う。

互いにすり足で、円を描くように横に移動、サークリングし、少し

でも相手の横、もしくは背後を取ろうとする。

「どうした、サンパイオ、やけに慎重じゃのう……」

「それは、先日の闘技会にて、相手を一撃にて撲殺し、呆気ない幕切れ

に終り、陛下のご不興を買ったからでしょう、今回は楽しませる、そ

ういう腹づもりだと思われます」

「そうじゃったかのう……」

じりじり、じりじり、と、互いに距離を取りサークリングする時間

が続く……。

「つまらん……、つまらんぞお、サンパイオオオオ!!」

その時、ザトーの怒号が響く。

その声に、巨大な剣闘士、ボルベン・サンパイオがピクリと反応す

る。

そして、サンパイオがサークリングをやめ、腰を落として鉄槌を構える。

「ほほほ、やっとやる気になったかサンパイオよ……」

ザトーが細く笑う。

「うおおおおお!!」

と、サンパイオが和泉に向かって殺到し、そのままの勢いで巨大な鉄槌を振り上げる。

「どらああああ!!」

そして、鉄槌は凄まじい速度で振り下ろされる。

それに対して和泉は半歩だけ後退し、ギリギリの距離で鉄槌をやり過ぐす。

が、鉄槌が地面に叩きつけられると同時に、大量の砂が巻き上がり、それが放射状に和泉へと向かう。

和泉がそれを腕でガードし、砂が目に入らないようにする。

「があああああ!!」

和泉からは砂のカーテンで見えなかっただろうけど、横から見ている私たちには見えた、サンパイオがさらに一歩踏み込み、地面に振り下ろされた鉄槌を和泉に向かって振り上げるさまが。

「和泉!!」

南条が危機を知らせる。

下から振り上げられる鉄槌が砂のカーテンを割り、和泉へと向かう……。

見えていたのか、和泉はそれを上体を逸らしてかわし、さらに、そのままの勢いで、後方宙返り、途中で地面に片手をつき、身体を半回転ひねって後ろ向きになる。

和泉はそこじゃがみ、片膝立ちになり、手の甲で目のあたりをこする……。

「何をやっている、和泉、目に砂が入ったのか……?」

東園寺がうめく。

「どらああああ!!」

チャンスとばかりに、サンパイオを高速で間合いを詰め、その手にした巨大な鉄槌を振り上げる。

そして、彼の背後から振り下ろされる……。

「和泉、よけろおおお!!」

でも、その鉄槌は和泉にあたることはなかった。

その姿勢から上空に飛び上がったのだ。

ちようど、高飛びの選手がバーを飛び越えるような姿勢でサンパイオの上を飛び越えていく。

そして、真上からやや後方に来たとき、和泉は剣を振う。

上からサンパイオの肩口にバスタード・ソードを振り下ろす。

ガキンツ、という金属音が響き渡る。

刃は頑強な鎧に防がれる。

和泉はサンパイオの後方に片手と膝を着く姿勢で着地、砂煙が舞う。

おいしい……、今はメイルクラー、つまり、鎧と鎧の隙間に剣を差し込む攻撃をしていれば勝負は決まっていた。

和泉は砂煙の中、ゆっくりと立ち上がる。

その白いレザーのサークレットの合間から和泉の目が見える。

それは、いつもの柔和なものとは違う、鋭く切れるような眼差しだった。

「がらあああああ!!」

サンパイオが背後の和泉に向かって鉄槌を回転させるように横から払う。

キンツ、と、軽い音を立てて、和泉がバスタード・ソードで鉄槌を弾いてその軌道を変える。

「うお、うお、おお!!」

軌道を変えられたことにより、サンパイオが姿勢を崩し、鉄槌に振り回されるように、くるっ、と一回転してしまう。

「醜態だぞ、サンパイオ……」

ザトーが歯軋りする。

でも、今の一連の攻防で彼らもわかっただろう、和泉とは次元が違

うことに……。

あの動きが天才の天才たる所以……、魔法の有無に関わらず、彼は強者だ。

第99話 果てしなく

軽装、白いレザーメイルと大振りの片手剣、バスタード・ソードを装備した和泉春月。

重装、鈍色のプレートアーマーと黒い鉄槌を装備したボルベン・サンパイオ。

この両者の間には天と地ほどの実力差がある。
和泉春月のほうが遥かに強い。

「でも……」

わかっているか、和泉……。

窮鼠猫を噛む。

ザトーの口ぶりからすると、負ければサンパイオの命はない。
それは本人もわかっているはず。

そして、自分と和泉との実力差も。

ならば、もう、やつは正々堂々、正面から和泉に向かっていくことはないだろう。

とことん卑怯な手を使う。

大昔の将棋の名人がこんなことを言っていた、強者は泥沼の中で戦う、と……。

弱者は強者を泥沼の中に引きずり込み、乱戦に持ち込み、相手のミスや動揺を誘うことにより、勝機、活路を見出そうとするもの。

常に強者は泥沼の中に引きずり込まれ、その中でもがき苦しみながら戦う。

だからこそ、さっきの一撃、肩口に振り下ろすのではなく、メイルキラー、突きで仕留めるべきだった、あれで、実力差が相手にばれてしまった。

「長い戦いになるかもしれない……」

そんな予感がする。

「サンパイオ……、わしに恥をかかせおって……、サンパイオオオオオオオ!!?」

ザトーが口から泡を吹きながら喚き立て、手にしたグラスを思いつ

きり地面に叩きつける。

闘技場のサンパイオが遠目からでも萎縮したのがわかる……。頑なにこちらを見ないようにし、じりじりと前後左右に動き回る。かわいそうになあ、こういう指揮官の下だと、十分に力を発揮出来ないようなあ……。

「う、うおおおがあああああ!!」

サンパイオが和泉の正面で雄叫びを上げて鉄槌を振り上げる。前言撤回、この戦いはすぐに終わる。

ザトーがすべてをぶち壊した。

「うおおおつ!! うおおおつ!!」

サンパイオは鉄槌を振り上げながら、必死に自らを鼓舞する。

「うおおおつ!! うおおおつ!!」

悲壮感すら漂う……。

もし、彼が私の部下ならば、和泉にだって勝てるのに……。

「うおおおつがああああつ!!」

そして、その鉄槌が和泉に振り下ろされる。

和泉は静かに、高速で下からバスタード・ソードを払い上げる。

カキンツ、と、速度の割りに小さく、軽い音が響く。

和泉の剣は鉄槌にヒットと同時にそのヘッドの上を滑らせ、そのまま軌道をずらし、上から押さえつけるように、足元の地面に鉄槌を叩き付けらせる。

鉄槌が砂の地面にめり込む。

さらに、ドンツ、と、和泉がそのヘッドを足で踏みつけて、地面に固定する。

「ぐっ、あつ、ぐっ」

と、サンパイオが鉄槌を地面から引き抜こうとする。

「くっ、うっ、ぐうううあああ!」

腰を落として力を込める、その瞬間、和泉がサンパイオの顔面に回し蹴りを食らわす。

強烈な一撃により、身体が伸び上がり、そして、ヘルムが勢いよく飛んで行く。

飛ばされたヘルムは外周の石垣に当り乾いた音を立て、さらにそこを飛び越えて砂の上に落ちる。

「うつつ、あああつ」

ヘルムが取れ、サンパイオの顔が見えるようになった。

年の頃は20歳前後、短い金髪、角張った精悍な顔……、そう、どこことなく、あのシェイカー・グリウムを彷彿とさせる顔だった。

「くあああつ!!」

それでも、なお、サンパイオは地面にめり込んだ鉄槌を抜こうと力を込める。

でも、そこで終り、和泉の剣が下から高速でサンパイオの首を襲う。ヘルムを飛ばしたのはこのため、剥き出しの首を斬りつける。

「うつつ……」

首は飛ばない、けど、かなり深く入った、致命傷だろう……。

サンパイオは鉄槌から手を放し、両手で切られた首の傷口を押さええる。

「うつつ、うつつ、うつつ……」

よろよろ、よろよろ、と、よろめく。

その間、凄まじい量の血が流れ落ち、手の隙間から噴出す。

「うわあ……」

と、南条が顔を背ける。

「うつつ、うつつ……」

そして、膝をつき、和泉の顔を見て、

「ありがとう、助かった……」

と、現地の言葉で言い、そのまま地面に倒れ、動かなくなる。

砂の上に血溜まりが広がっていく……。

なんか、あと味の悪い戦いだった……、あとで和泉にサンパイオのエピソードや最後になんて言ったか教えてやろう……。

そんなことを考えながら席を立つ。

「帰るわ、胸くそ悪い……、マジョーライ、いつ条約の効力が発生するか教えて、それから、細かい内容を詰めるから、もう一度会談のセッティングを……」

「座れ、小娘……、座らんかい、小娘えい!!」

その怒声により、私の言葉は途中で遮られる。

「なんだと、くそじじい、やんのか?」

椅子に座るザトーを上から見下してやる。

「座れ、小娘、決闘はまだ終わつとらんわい」

「はあ?」

と、闘技場のほうを見る。

どう見ても、サンパイオは死んでいる……、というか、すでに、他の兵士たちが闘技場内に入り、サンパイオの死体の後片付けをしていた。

「おぬしらは4人おるじやろ……?」

「はあ?」

ザトーに向き直る。

「だから、こつちも4人じや、きやあつきやつきやつきやあ!!」

と、やつは肘掛を叩いて狂ったように笑う。

「なんだと……、くそじじい……」

「4対4の勝ち抜き戦じや……、じやが、そうじやのう、わしも鬼ではない、小娘、貴様は免除してやろう、戦えんじやろ……、3対3の勝ち抜き戦にサービスしてやる、さあ、座れ、小娘、次の対戦じや!」

「ちつ……」

私は爪を噛み、椅子に座る。

「なんと言っている、ナビーフイユリナ?」

東園寺が怪訝そうな表情で聞いてくる。

「勝ち抜き戦だつて、公彦、大河、あなたたちも加えた3対3の勝ち抜き戦だつて……」

「な、なんだつて!? そんなの一言も聞いてないぞ!」

と、大河は言うけど、それもそうよ、たぶん、今、この場で思いついたことだと思うから。

「雲行きが怪しくなってきた……、3対3つて今は言ってるけど、ハルが3人倒しても終わらない可能性が出てきた……、なんだかんだ理由をつけて、みんなが死ぬまで戦わせるつもりだと思……」

「なんだって……」

「詮索は後回しだ」

と、東園寺が立ち上がり、

「和泉！ あと二戦だ！ 俺と南条とおまえ、3対3の勝ち抜き戦になった、次もある、頼むぞ!!」

と、闘技場の真ん中で事情が飲み込めずに棒立ちしている和泉に大声で説明する。

その言葉を聞いた和泉が、わかった、という感じで手を挙げ軽くうなづく。

「理解してくれたようじゃのう……、ならば、次の対戦相手は……」

ザトーが上機嫌に顎ひげを撫でながら思案を巡らす。

「あの身のこなし、只者ではありませんなあ……、あの軽装、レザーメイルはその自信のあらわれ……、ならばこちらも、それ相応の業師をぶつける必要があるかと……」

「それはわしも考えておった……、よし……、皆殺しのジオルカを呼べえい!!」

それを聞き、兵士が一礼して奥に走っていく。

「ほほお、ここで皆殺しのジオルカを……、勝負に出ましたな、陛下……」

「そうじゃ、頭でつかちな技自慢の小僧に教えてやる！ 上には上がいるというこをなあ!! ちょこまかと動き回ろうとも、その上を行くスピードと技のキレ!! やつは気付くだろう、己の器の小ささに、そして、思い知るだろう、己の未熟さをなあ!!」

と、ザトーが血走った目で泡を吹きながら熱く語る。

それにしても、こいつら本当に剣闘士が好きなんだな……。

カツン、カツン、と、通路の奥から足音が聞えてくる。

そして、その姿をあらわす。

全身黒ずくめ、基本レザーメイルだが、一部光沢で金属も使用されている鎧だとわかる。

武器は剣、和泉のと似た形状の、片手、両手、両方いけそうなバスタード・ソード。

身長は低い……、175センチ程度の和泉と比べてもさらに低い、165センチくらいだろう。

横にも細い……、ただ、その歩く様は非常にしなやか、関節の柔らかさがそれだけでわかる。

ああ、これは強いな……、そう、直感的に感じる。

「どうじゃ、強そうには見えんじやろ？」

と、ザトーがこちらに身を乗り出して話しかけてくる。

「じゃが、それは小娘に見る目がないからじゃ！ ジョルカは強い、わしを知る剣闘士の中で五指に入るほどの実力を持つ。やつの異名、皆殺しのジョルカ、なぜ、そう呼ばれるようになったか、知っているか、小娘よ？」

「いいえ」

と、ザトーをちらりと見て答える。

「そうか、そうか、なら、教えてやろう、あれは、血のような、真っ赤な満月が出ている夜のことじゃった……、ある辺境の、小さな砦にひとりの剣士があらわれた……、その剣士はゆつくりと門に向かい、そして、無言で衛兵に斬りかかった……、その剣技はすさまじく、声を立てることなく衛兵は事切れた……、だが、やつはそれで満足しない、血を求めて砦内に潜入し、片っ端から斬り殺していったのじゃ、しかも、兵だけではなく、従者、給仕、商人、見境なくな……、やがて砦は物言わぬ死体だらけになり……、動く者は、その剣士だけになった……、そう、それをやったのは、あやつよ……、人は恐怖と畏敬の念を込めて、こう呼ぶ、皆殺しのジョルカ!! と……」

なんか、さつきも似たような話を聞いた気がするんだけど……。

「おお？ 小娘、言いたいことが顔に出ておるぞい？ そうじゃ、皆殺しにせよ、と、やつに命じたのはこのわしじゃ！ うつきやあつきやつきやつきやあああ!!」

ザトーが肘掛を叩いて狂ったように笑う。

「一流の剣闘士にはこれくらいの伝説が必要じゃて！ きやあきやつきやつきやあ！」

今更だけど、こいつに殺意と嫌悪感を覚える……。

第100話 皆殺しのジョルカ

和泉春月と皆殺しのジョルカ。

互いに軽装レザーメイルにオーソドックスな両刃の剣。

そして、細身で身軽、スピードの戦いになるのは、誰の目から見ても明らか。

「見ごたえのある熱い戦いになりそうじゃのう……、ならば、それに相応しい決戦場を用意しよう！」

ザトーが席から立ち上がり、手をかざす。

すると、闘技場の壁の上部、天井のすぐ下の石が一周ぐるっと奥に引き込み、人の高さくらいの隙間が出来上がる。

「正規の決闘と同じ舞台で戦わせるといわけですね、陛下？」

「そうじゃ、あやつらにはそれがよかろう……」

手はかざしたまま、壁の上部を見ながら言う。

やがて、その上部の隙間からガラガラ、ガラガラ、という音が聞えてくる。

そして、大勢の人間が姿をあらわす。

もちろん、人間だけではない、台車に乗せられた大きな鐘、大きな壺などもずらりと立ち並ぶ。

壁上部、一周すべてにそれが並ぶ。

「あーん」

口をあけて、壁の上を一周見渡す。

「ふおつふおつふお、驚いておるようじゃのう、小娘、じゃが、決闘とは悲劇であり、喜劇、演出が大事じゃて」

天井の高さは10メートルくらいあるから、かなり高い位置になる。

「鳴らせー」

と、ザトーのかけ声とともに無数の鐘が鳴り出す。

「うわ、うるせえ」

南条が反射的に耳を塞ぐ。

それほどに大きく響く音だった。

ガラン、ゴロン、ガラン、ゴロン、と、無数の鐘が鳴り続ける……、
そして、

「決闘、開始!!」

と、ザトーの腕が振り下ろされる。

鐘の音が徐々に小さくなっていき、それと同時にどこからか風が舞い込む……。

「花びら……う？」

闘技場の中に花びらが舞っている……、それも無数に……、白い花びらが視界を覆うほど無数に舞う。

それは幻想的な美しさだった……。

もちろん、この花びらと風はあの壁上部の隙間から来ている。

「ほほ、どうじゃ、この演出は？　ちなみにな、この草花の色にも意味はあつてな、白なら、このまま戦え、緑色なら、もつと落ち着いて戦え、そして、赤なら……、激しく殺し合え……、という意味になるのじゃ……、ああ、戦闘終了は黄色じゃ」

白色の花びらから少しずつ緑色の葉が混ざりはじめ、やがて、一面に緑色が広がる。

そして、葉は降り積もり、砂の地面が草原のような緑色に染まる。

これは落ち着いて戦えという意味だったか……。

すでに戦闘は開始されている。

二人の剣闘士が間合いを詰める。

鐘の音は完全には止んでいない、低圧的に小さな鐘の音がリズムミカルに鳴り続けている。

積もった草の上に、二人が動く軌跡がベージュ色に残る。

そして、距離が詰まり、互いの一撃目。

二人とも同時に突きを放つ。

わずかな手首のかえしだろう、互いの刀身が接触し、こすれあい火花を上げる。

その突きを和泉は身体をひねり横に流し、ジオルカは前にお辞儀をするようにしてかわす。

「おお……」

「なんと……」

ザトーとアンバー・エルムが感嘆の声を上げる。

互いにすぐに姿勢を整え追撃、二撃目も突きだ。

先程と同じように刀身同士がこすれあい火花を上げる。

今度は見切ったのか和泉は軽く顔をひねるだけでそれをやり過ごし、一方、ジオルカのほうは和泉の剣のしのぎを掌低で当て弾き、さらに姿勢を深く沈み込ませる。

そして、そこから身体を回転させて和泉の足を払いに行く。

でも、和泉は片足を上げてそれをかわし、さらに、その足を一步踏み込むように前に出す。

もうこの段階で和泉のバスタード・ソードは上段に構えられている。

ドンツ、という音ともに踏み込まれ、降り積もった草花を放射状に舞い上がり、同時に、超高速でバスタード・ソードが振り下ろされる。

これはかわせない、そう思った刹那、ジオルカの身体が高速に弾き飛ばされるように後方に飛び退いていく。

「おお……、これはすごい……」

「見ごたえがありますなあ……」

またもや感嘆の声を上げる。

でも、あれをかわすかあ……、と思ったら、かわしてなかった。

ジオルカのレーザーヘルムが真ん中から割れてずれていた。

ジオルカが割れたヘルムを無造作に脱ぎ、うしろに放り投げる。

「ああ？」

その顔があらわになる……。

長い銀髪が風になびき、白い艶やかな肌と鷹のような鋭い目、そして、血のような赤い唇……。

その姿はとても美しい……。

「女の子……」

だろうね、あのしなやかな動きは女性だよ。

うん、ある程度は予想してた。

和泉は予想外だったのか、二歩、三歩と彼女から遠ざかる。

ジオルカの白く美しい額から細く一本の血が伝う。
彼女が手の甲で拭い、それを見る。

そして、その手の甲の血を和泉を見ながら、赤い舌でチロリと舐め、
かすかに笑う。

奇抜な行動のように見えるけど、これはフェイク……。

明らかにその手首を意識した。

たぶん、そこに刺突用のナイフを隠しているのだろう……。

和泉……、気付いたか……、もし気付いていなければ、次の攻防で
やられるよ、おまえ……。

尚も手の甲に付いた血を舐めながら、無造作に、だらりと剣をぶら
下げ、ゆっくりと和泉の元に歩み寄っていく。

「ふっ……」

和泉も軽く笑い、構えを解き、同じように剣をだらりと下げてジヨ
ルカに向かい歩きだす。

互いの間合いに入る……、そこでも、二人は普通に歩み寄る……。
とつくに互いの剣が届く距離になる……。

そして、剣どころか、互いの拳が届く距離まで近づく、そこで動く。
まず、ジオルカがだらりと下げた剣を力任せに横から思い切り和泉
の首を払いにいく。

それを和泉が頭を下げかわし、かわすと同時に下から剣を払いあげ
る。

ジオルカはそれを踏み込むようにかわす。

すると、二人の頭、額同士がぶつかる。

額が合わされ、至近距離で目が合う……。

そこから、示し合わせたように、互いに上体を上げ、相手の顔目掛
けて剣を突く。

これも先程と同じ、刀身がこすれあい、速度も出ず、軌道もずれる、
これでは当たらない。

でも、先程と違う点がひとつだけある。

それは距離、互いに超至近距離、刀身が終り、互いのツバにぶつか
り、さらにそれを飛び越え拳、互いの手の甲同士が接触する。

一瞬動きが止まる。

でも、止まったのは一瞬だけ、すぐに互いの剣先が相手の顔面を狙う。

それを接触した手の甲で相手の剣先軌道を変え、かわす。

ガキン、ガキン、と、手の甲、ガントレット同士がぶつかる音が響く。

「あつ……」

戦いにばかり気を取られていたけど、空を舞う緑色の草がいつのまにか白い花びらに変わっていた……。

私は上を見上げる。

あの壁の上の隙間から大量の白い花びらが噴出している。

「赤い……」

そして、その中に赤い花びらが混ざるようになる……。

闘技場中央では、和泉とジョルカによる至近距離での打ち合いが続く。

ガキン、ガキン、と、もの凄い音を立ててガントレット同士がぶつかる。

その中で降りしきる花びらが徐々に赤く変わっていく……。

量も増えていく……。

闘技場が真っ赤に染まり、赤い花びらに覆いつくされる。

視界すら覆い、剣闘士たちの姿を隠し、ガントレット同士がぶつかる音だけが響く。

でも、時折強い風が吹き、花びらを蹴散らし、彼らの姿を私たちに見せてくれる。

「地面が真っ赤だ……」

そして、風が止むと、また彼らを隠す。

「確か、赤い花びらの意味は、激しく殺し合え、だったか……」

ガントレット同士がぶつかる頻度が増えていき、それに伴い、音も大きくなっていく。

そして、時折だった強い風の頻度も上がり、今や常時強い風が吹いている。

赤い花びらは纏まり、つむじを巻き、二人の剣闘士たちを私たちの前に出現させてくれる。

「ほほほ、凄まじい戦いじゃのう……」

「ええ、クラマックスも近こうございますなあ……」

ザトーとアンバー・エルルムが身を乗り出して観戦している。

「ぐっ!？」

突然、和泉の動きが鈍る。

その表情が歪む。

それ以前にガントレット同士がぶつかる音が変わっている。

さつきまではガキン、ガキンだったのが、今はパコン、パコンという間抜けな音に変わってきていた。

「和泉……」

東園寺が心配そうにうめく。

そう、この音の変化は、和泉のガントレット、手の甲の部分が割れ、砕けたから……。

直接手の甲にぶつかることにより痛みが発生し、彼の動きを鈍くしている。

それでも、ぶつけ合い、相手の剣先の軌道を変え続ける。

「もういい、魔法を使え、和泉……」

南条は拳を握り締めて、そうつぶやく。

「仕方ない……」

私もそれには同意する。

この不利な状況に加え、あのジョルカは刺突用のナイフも隠し持っている。

たぶん、このままだと和泉は負ける……、彼はナイフ類の持ち込みは禁止だと思っているかもしれないけど、控え室の壁にはちやんとナイフ類もあった。

だから、ジョルカが刺突用のナイフを隠し持っていたとしても、ならおかしな話しではない。

そつと席を立つ。

「なんじゃ、小娘……」

ザトーがそれを見てたずねてくる。

「ハル!!」

でも、ザトーを無視して大声で和泉の名前を呼ぶ。

もちろん、魔法を使えと言うつもり。

でも、

「なに……っ？」

和泉は手を挙げて私を制止させる。

魔法を使わないつもりか……？

第101話 善因悪果

いったい、何百回、互いのガントレットをぶつけあったら……。その激しい接触により、和泉春月ガントレットは破壊され、手の甲が剥き出しになっていた。

幸い、出血は見られないが、それでも、手の甲が赤く腫れ上がったのが遠目でもわかるようになってきた。

「ピンチじゃのう、ピンチじゃのう」

「さて、これからどうすることやら……」

ザトーとアンバー・エルルムが目を輝かせて観戦している。

クズが……、と、忌々しくやつらを見て、すぐに視線を闘技場に戻す。

和泉が剣を持つ手ではない左手を少し前に出す。

おそらく、スイッチ、剣を左手に持ち替える。

でも、それは至極困難な作業、持ち手を替えるということは、当然、身体の向きも踏み込み足も逆、右構えから左構えにしなければならぬ、それを入れ替える瞬間に大きな隙が生じる。

相手も和泉がスイッチを狙っていることはわかっているだろう、そこを狙うのは必然。

和泉がさらに、左手を前に出し、そして、剣の柄頭に触れる……。

この瞬間に局面が動く。

ジオルカは和泉にスイッチなどやらせない。

さらに踏み込み、強烈な突きで和泉の顔面を狙う。

それを和泉は首をひねり僅差でかわすが、わずかにサークレットをかすめ、それが後方高くに飛ばされる。

ジオルカは間髪入れずにすぐにもう一撃行く。

さすがにこの至近距離では相手の持ち手にガントレットをぶつけ、その軌道を変えてやらなければ、回避するのは難しい。

でも、和泉はスイッチ中……。

「あつ……」

和泉の剣、どこいった……？

彼の持つ剣が消えた。

そして、その剣がなくなつた拳で思いつきりジョルカの剣を持つ手を殴る。

すると、彼女の手は衝撃に耐え切れず剣を放し、そのまま剣は地面に叩きつけられる。

互いに無手になった、そう思つた瞬間、下からの剣撃がジョルカを襲う。

そう、和泉は右手の剣を放して、下に落としたのだ、それを左手でキャッチ……、放した右手で相手の剣を叩き落しながらそれをやってのけた……。

「化け物か……」

ザトーのつぶやきか耳に入る。

和泉の剣がジョルカの首を襲う。

でも、そこは互いに至近距離、彼女に一瞬の躊躇もなかった。

前に飛び出し和泉の首に抱き着く。

体格の劣るジョルカはその行動は一見悪手に見えるけど、彼女にはそこから秘策がある……。

抱き着き、和泉の頭のうしろで交差した二本の腕の手首からキラリと光るナイフが飛び出す。

そう、刺突用のナイフだ。

そのナイフが手の平で直角に曲がり、それを逆手に握る。

そして、和泉の首に力を込めてナイフを突き立てる……。

「おお、決まった」

ザトーが身を乗り出す。

「ジョルカの勝ちじゃ」

「和泉の勝ちだ」

奇しくも、ザトーと私、相反する言葉を同時に口にする。

ザトーはジョルカの勝利を確信したようだけど、それはひとつ見落としがあるから……。

この近距離で危機に陥ったら、何も考えずに反射的に相手に抱き着く、組み付くことなんて誰にでもわかること、あの和泉が予想してな

かったなんてことは絶対がない。

予想していたのなら、準備をしていないわけがない、必ず罫を仕掛けておく。

「かつ!？」

ジオルカが悲鳴を上げる。

そして、ナイフを持つ手の力がなくなり、だらりと垂れ下がる。

「な、なんじゃ?」

ザトーにはわからなかったようだけど、仕組みは簡単、最初に下から振り上げた剣がちょうどよく、ジオルカの後頭部に位置に来ていただけ。

そして、彼女が組み付いた瞬間にその後頭部目掛けて柄頭を打ち付けた。

それ以前に剣の持ち替え、スイッチする前に、柄頭を軽く触っていたけど、あれは、たぶん、スイッチじゃなくて柄頭の材質と固さを確かめたんだと思う。

この一連の攻防を見越してね……。

和泉は崩れ落ちるジオルカの首のうしろ、襟首を掴み、そのまま柔道の払腰のような技で豪快に地面に叩きつける。

赤い花びらと砂煙が衝撃波とともに周囲に広がる……。

「なんてことじゃ……」

「信じられません……」

ザトーとアンバー・エルルムが腰を浮かせて身を乗り出す。

「ふっ……」

と、和泉が一息つき、額を手の甲で拭く。

少し赤いものが滲んでいる、額同士が接触した時に切れたか……。

「はは……、強いな……、名前を聞かせてもらえるかな、私を倒した相手の……」

と、倒れたままのジオルカは言うけど、和泉は見下ろすばかりでも言わない。

それも当然、和泉には彼女の言葉はわからない。

「教えてもらえないか……、敗者には興味がないということか……、手厳

しいな……、さあ、殺せ、最後の相手があんたでよかったよ……」

と、ジオルカが目を閉じる。

「俺は不正をした……」

和泉が静かに話し出す。

その声を聞いて、ジオルカが薄く目を開ける。

「俺は魔法を使って散々強化していた……、逆におまえは、自分の身ひとつで戦い抜いた……、尊敬に値するよ、魔法無しでここまで俺を追い詰めたのだから、もし、俺が魔法無しで戦っていたら、そこに倒れていたのは俺のほうだっただろうよ……」

もちろん、この言葉もジオルカには伝わらない。

でも、

「何を言っているかわからないけど、敬意は伝わったよ、ありがとう……」

彼女が少し笑って、また目を閉じる。

和泉がジオルカに近づき、その横に立つ。

止めを刺す、誰もがそう思っただろうけど、和泉がしゃがみ、そのままジオルカを抱き上げる。

「な……」

と、ジオルカが驚き、目を開ける。

「次、もし、もう一戦やる機会があったら、次こそはお互い不正なしで、正々堂々戦おう」

そのまま、お姫様抱っこをして、闘技場の端まで行き、そこにいた兵士たちにジオルカを託す。

「助けてくれるのか……、お優しい限りで……、でも、あんたは誤解している……、ここでの敗者の扱いを……、殺してくれたほうが、ずっと楽なのにね……」

その言葉は和泉には届かない……。

和泉は軽く笑い、身をひるがえす。

「まさか、皆殺しジオルカが負けるとは……」

「ええ、百戦無敗の最強の剣闘士が……」

ザトーが椅子に深く座り直し呆然とつぶやく。

「もうやめる？ 誰が来たって同じことよ、ハルが勝つから、時間の無駄」

それを見て、そう提案する。

「言いよるわい、小娘が……」

ギロリと私を見る。

「じゃが……、手駒が……」

と、ザトーが視線を正面に向けて考え込む。

「あれを……、使こうて、見よう、かのう……」

「あ、あれを!？」

アンバー・エルムが驚愕の声を上げて立ち上がる。

「そうじゃ、ガルディック・バビロンを使う」

ザトーがニヤリと笑う。

「お、おやめください、陛下、やつが制御不能になれば、我々の命もございませぬ!」

「かまわん! この小娘に一泡吹かせるまではあとにはひけん!」

ザトーが立ち上がり、手を挙げる。

すると、新たな剣闘士ではなく、大勢の兵士たちが闘技場内に殺到してくる。

「な、なんだ、何が始まるんだ!？」

と、南条が不安げに周囲を見渡す。

大勢の兵士たちは闘技場の石垣のすぐ外側にぐるっと一周整列する。

数は……、100人くらいはいるだろうか……。

「ふおっふおっふお、安心せい、小娘、貴様らを殺すために呼んだのではない、むしろ、逆じゃ、貴様らを守るために呼んだのじゃ……、あのガルディック・バビロンからなあ!! さあ、呼べえい、真の化け物を、あのニワカ化け物に教えてやれえい!! 真の化け物の強さと恐ろしさをよおお!!」

ザトーが和泉を指差し叫ぶ。

「な、なんなの、そのガルディック・バビロンって……」

と、どうか……、目の前の兵士の背中、カタカタ、カタカタ、つて

小刻みに震えてるんだけど……。

「絶対、やばいのがくる……」

不吉な予感がする。

ガラガラ、ジャラジャラ、と、通路の奥からそんな音が聞えてくる……。

その音から鉄球に繋がれた囚人を想像する。

犯罪者、殺人鬼か……、ならばこの厳戒態勢も理解出来る……。

でも、その、ガラガラ、ジャラジャラ、という音が大きくなっている……。

それは囚人が鉄球を引きずるなんてものじゃない、もっと大質量の物が近づいてくる音だ。

やがて、姿を表わす……。

それは10人ほどの兵士が鎖を引く姿……。

ガラガラ、ジャラジャラ、と大きな音を立てながら何かを引いている……。

「お、檻……?」

そして、ついに本体が見えてくる……。

「な、なんだ、あれは……?」

「な、なにが入ってるんだ……?」

東園寺と南条が目を凝らして鉄製の檻の中を見る。

その檻は巨大……、縦横3メートルくらいはあるだろう……。

その中には……。

「う、う、おお……」

南条が口元を押さえて立ち上がり、そのまま数歩前に歩いて砂の上に手をつき嘔吐する。

「お、おえ、おえ、おげえ……」

苦しそうに嘔吐を繰り返す……。

そう、彼は見てしまった……、檻の中の物体を……。

「ふざけているのか……、なんだ、あれは、相手は人間じゃないのか……」

東園寺がうめく。

「いぼいぼいぼ……、いぼいぼいぼ……」

檻の中の物体の鳴き声だ……。

その物体は複眼に触覚、ぶよぶよとした茶色の身体と、所々を覆う黒い外骨格、そして、数十の多関節の手足を持つ生き物……、そう、どう見ても虫だ……、それも超巨大な、体長3メートルはあろうかという巨大な虫だった……。

「ふおっふおっふお、あれがガルディック・バビロンじゃよ……」

ザトーが嬉しそうに話す。

第102話 ガルディック・バビロン

ラグナロク広場から東へ約5キロの地点にある、水の枯れた旧河川敷。

そこには通常では考えられないほどの巨大な虫が生息していた。その虫の大きさは全長1メートル前後……、セミの羽を取って、そのまま大きくしたような姿をしていた……。

また、知能もそれなりに高く、通常の虫の記憶方式リードオンリーメモリーではなく、魚類以降の生物が持つ記憶方式ランダムアクセスメモリーを獲得しているのは明らかだった……。

それは私たちの知っている虫の生態とは根本から違う……。そして、今、私たちの目の前にあらわれた檻の中に入れられた巨大な虫、ガルディック・バビロンはその時の虫と比べてどうであろうか……。

体長は比べ物にならないほど、ガルディック・バビロンのほうが大きく、全長は3メートルほど。

姿形は、どこことなく似ているけど、ひとつ決定的に違うところがある。

それは上半身……。

羽のないぶよぶよとしたセミのような茶色の下半身に、つやつやとした深緑色のカマキリにも似た形状の上半身を持っていた。

恐ろしく醜悪……。

でも、やはり、一番気になるのは、知能、記憶方式……、それによって戦い方がガラツと変わる……。

「う、う、うう……」

「大河、大丈夫……?」

苦しんでいる南条に近づき、その背中を優しくさする。

「ああ、ごめん、おえ……」

また砂の上に吐き出す。

無理もない……、あれを見てしまったのだから……。

南条の背中をさすりながら、ガルディック・バビロンを見る。

別に南条はガルディック・バビロンを見て吐いたわけじゃない、やつ腕とか足の関節でうごめいている無数の黒い虫を見たから吐いたのだ。

この距離でもわさわさとうごめいて見えるということはそれほど小さくない、おそらく、5センチから10センチ程度の大きさはあると思われる……。

その虫が数百、いや、数千匹単位で密集してうごめいているのだ……、南条の吐きたくなる気持ちもよくわかる……。

「ふぎけるな、あんな化け物と和泉を戦わせようと言うのか!？」

東園寺が激昂して立ち上がる。

「むう? なんと言っておるのじゃ、小娘……?」

言葉の通じないザトーが私に通訳を求めてくる。

「代表は、人間以外の者との対戦があるだなんて聞いていない、この戦いは許可出来ない、と、言っている」

少し考えてから通訳する。

「ほほ……、代表? こやつがおぬしらの代表じゃったのか? てつきり小娘が代表じゃと思っておったぞ、ふおーつふおつふおふおー」

「ですな、陛下……」

と、ザトーとアンバー・エルルムが笑う。

「まあ、いい、質問に答えてやるか……」

と、少し真面目な顔をすする。

「最初からわしは人間同士の決闘じゃとは言つとらんで……、貴様らの勘違いじゃ……、わしは剣闘士同士の戦いと言ったのじゃ、あのガルディック・バビロンも立派な剣闘士じゃ、のう、エルルムよ?」

「御意……、彼は帝国屈指の剣闘士でございます……」

二人がニヤリと笑う。

「この、くそじじい……」

仕方ないので、そのまま東園寺に通訳する。

「そんな馬鹿なことがあるか……」

彼は拳を握り締めて、闘技場のほうに向き直り、

「和泉、こいつらは、何がどうあつても、おまえを殺す気だ! もうい

い、終りだ、魔法を使え、エゼルキアス 双炎爆裂を使え、おまえの強さをこいつらに見せ付けてやれ!!」

と、大声で叫ぶ。

それに対して和泉は肯定も否定もせず、ただ、軽く手を挙げ、笑って見せるだけだった。

「使わない気だね、魔法……」

私は南条の背中をさすりながら言う。

「あいつ、何を考えている……」

東園寺の言う通り、あれはゴッドハンドや南条の強化魔法程度じゃどうにもならない、強力な魔法無くしてまともに戦えない。

巨大な虫が入った檻はまだ開かず、それとは別に給仕たちが手押し車を押して闘技場内に入ってくる。

手押し車には草……、いや、木の葉だろう、てかてかとした照葉樹の葉が積まれていた。

それを石垣の内側に敷いていく。

南条が落ち着いてきたので、彼を元の椅子に座らせ、私も自分の席に戻る。

「やつが嫌う臭いじゃ……、あれにはおいそれとは近づかん……」

ザトーがお節介にもあの葉っぱの意味を説明してくれる。

「葉を敷き詰めるのを眺めてばかりじゃ退屈じゃろうて、何か話をしてやろう……、小娘はガルディック・バビロンとは何か知っておるか……?」

……?」

またか……。

「いいえ……」

と、ちらりとやつを見て答える。

「見ての通り虫じゃが……、やつらはただの虫ではない……、その巨体という意味ではないぞ……、知能じゃ、やつらは非常に賢い……、あ
る時、人間の町を襲い、追込み漁をやりおった……、逃げる人間ども
を半包围しながら、足の速いやつ、遅いやつ、すべて計算して、袋小
路に追込んだのじゃ……、そして、全員ひとり残らずむさぼり食った
……、文字通り、皆殺しじゃ、女、子供、老人、見境なくな……、そ

の食いつぷりは凄まじかった……」

給仕たちが照葉樹の葉を撒いていく。

特に、私たちの周囲には厚く敷き詰められ、そのツーンとした香りが辺りを漂う。

「やつらがどこから来たのかはわからん……、一説には北方の砂漠から来たと言われているが定かではない……、なら、あれはどうやって捕らえたかという……、卵じゃ、大昔から都の地下深くにて慎重に繁殖させておる……、そして、戦争や闘技会で使用する……、その戦闘力は凄まじく、幾度となく我が帝国に勝利をもたらしてきた……、そして、いつしか、人々は恐怖と畏敬の念を込めて、こう呼ぶようになった、地獄の門、ガルディック・バビロン、とな……」

ザトーが不気味に笑う。

「おお、その顔は！ そうじゃ、そんな嚴重に管理されたガルディック・バビロンの群れがどうして人の町を襲ったのかというとな、それはわしが命じたからじゃ、やつらを町に放せとな！ うーきやあつきやつきやつきやああああ!!」

ザトーが肘掛を叩いて狂ったように笑う。

「……」

こいつには言葉もない。

「どれ、終わったようじゃの……」

照葉樹の葉を撒いていた給仕たちが闘技場から出て行く。

「では……」

と、ザトーが立ち上がり手を挙げて指示を出す。

それを見て、兵士たちが嚴重に巻かれた鎖をほどいていく。

やがて、鎖がすべて取れ、次に大きな錠前を外す……。

そして、両開きの扉を二人の兵士が開け、それを合図に回りの兵士たちが一斉に、全速力で闘技場の外へと逃げていく。

「ふおっふおっふおっふお」

ザトーが愉快そうに笑う。

檻は開け放たれた。

ずりゆり、ずりゆり、と、不快な音を立て、ガルディック・バビロ

ンが檻の中から出てくる……。
やつが檻から出た瞬間、嫌な臭いがしたような気がして顔をそむける。

「ふおっふおっふおっふお、どうした、小娘、怖いのか、豪胆なやつじやと思っておったが、なかなかどうして、小娘らしい可愛げのある反応もするようじやのう」

私を見て笑う。

「くっ……」

視線を正面に戻す。

しかし、なんなんだ……。あの醜悪な姿は……。

カサカサと動く無数の足が、ずりゆり、ずりゆり、と、ぶよぶよとした茶色い胴体を引きずる。

そして、そのあとにはこれまた茶色い液体が砂の上に付着する……。よく見ると、その茶色い液体の中に動く黒い点々が……。ちっちゃい虫がいっぱいいる……。

「うわあ……」

思わず声が出る……。

ちよっと待ってよ、これ、南条じゃなくても吐くよ……。

その醜悪な巨大な虫がゆっくりと和泉の元へ歩いていく。

でも、彼は涼しいか顔で微動だにしない、正面に巨大な虫を見据える。

そして、和泉との距離が５メートルほどになった時、ガルディック・バビロンの動きが止まる。

初めて和泉の存在を察知したのか、顔や触覚を細かく動かして確認しようとしている。

そして、その巨大な顔、ハエにも似た縦横１メートル以上もある大きな顔が正面を向き、その不気味な複眼が和泉を捉える。

そして、さらに……。その口がヌメヌメと開き……。黄色いネバネバとした体液が糸をひき何本も垂れ下がり……。

それを……。

「ぶヴえヴえヴえええええ」

と、大量に和泉に向かって吐きつける。

「おええええええつ」

南条も吐いた。

虫から吐き出された体液を和泉は後方に飛んでかわすけど、わずかな飛沫がズボン、レザーゲートルに付着する。

和泉は鎧に付いた黄色い体液を見て不快な表情を浮かべる。

「終わった、決まりじゃ、あれは、やつにとってのセンサー、あの液体が付いたやつはどこにいようと捕捉される……、地獄の底だろうとな……」

「ええ、もう逃げられません……」

「お、お、おええええ……」

ザトーとアンバー・エルルムは解説する……、南条は吐き続ける……。

「もう、やめて、頼む、もう、お願い……、おえつ、おえつ……」

と、南条は吐きながら涙をこぼす……。

第103話 花の色あせつつ

どうする、和泉、勝算はあるのか……。
ない……。

そう思わざるを得ない。

基本的な体格がそう、和泉と全長3メートルを超える巨大な虫、ガルディック・バビロン、両者の体重差は数十倍にも達するだろう。

それに、あれほどの巨体、和泉が手にするバスタード・ソードでいくら斬り付けたところでダメージにはならないだろう。

私は再度、席から立ち上がり、砂の上で嘔吐を繰り返す南条の元へ歩み寄る。

「大丈夫、大河……？」

と、しゃがんでその背中をさする。

「ああ、ちよつと、落ち着いてきた、もう、大丈夫……」
彼は笑顔を覗かせる。

「ううん、大河、あなたはそのまま、ここで吐いてて」

「え、なんで……？」

「ハルは必ず、魔法を使う、それも強烈なやつをね……、その時、大河、あなたはなんとかしてそれを覆い隠して、ここで吐いているふりをし
てね……」

彼の背中をさすりながら言う。

「あ、ああ、わかった、そういうことなら……」

私はネックレスを取り、くるくると回す、すると、松明の明かりを反射してキラキラと光る。

その反射を見て、和泉がこちらをちらつと見る。

私は彼に向かって大きくうなずく。

南条もうしろには見えないように、和泉に向かって小さく親指を立てる。

「ハル……」

気付いただろうか……。

私はネックレスを元に戻してその場を立つ。

「よろしくね、大河」

「ああ……、お、おう、おえええええつ」

と、南条は嘔吐するふりをしてくれる。
それを確認して席に戻る。

「あの男、大丈夫か？」

席に戻ると、ザトーが南条をアゴで指し示す。

「あんな化け物を見せられたら、誰だって吐きたくなるわよ……」

「それもそうじゃの、ふおっふおっふお」

と、白いアゴ髭を撫でる。

視線を闘技場の中央、和泉とガルディック・バビロンに戻す。

おそらく、そんなに長くは戦えない。

初撃、若しくは二撃目が勝負、時間が経てば経つほどこちらが不利、それは和泉もわかっていているらしく、後方に下がるのではなく、一步前へ、足を踏み出すような形で剣を構える。

和泉の構えに呼応するかのように、ガルディック・バビロンの上半身の無数の腕がわさわさとうごめく。

そして、飛び出す、和泉目掛けて腕が伸びるように飛び出した。

その攻撃が意外だったのか、和泉は大きく横に飛び退くようにかわす。

でも、踏ん張ったときに、砂に足を滑らす。

そこを見逃さず、ガルディック・バビロンの伸びた腕が追撃し、和泉の肩辺りをかすめる。

和泉の白いレザーメイルが引き裂かれ、そこから血が噴出す。

「ぐっ」

と、反射的に肩を押さえる。

でも、ガルディック・バビロンはその隙すら見逃さない、無数の腕が先程と同じように飛び出し、和泉を襲う。

パシユ、バチンツ、と、その腕は刺すだけではない、ムチのようになって、激しく叩きつけてくる。

和泉は防戦……、というか、勘、というか、運だけで致命傷を避け
ている……、いや……。

「ふおっふおっふお、しばらく振りの獲物を前にして、遊んでおるようじゃのう、やつは……」

「ええ、はしゃいでいますね、陛下」

そう、わざと外している、その証拠に、通常の攻撃の命中率は低いのに、退路を断つ場合にのみ、やたらと高速で正確な攻撃を繰り返してくる。

これは、もう、無理だ、人間にどうこう出来る相手ではない……。

和泉が私を見、そして、そのあとに南条を見る。

ついに、やるか……。

風が舞う……。

おそらく、これは南条の魔法だ。

「なんじゃ、風など、誰も指示しとらんぞ、すぐに止めさせろ、砂が舞う！」

と、上の隙間から風が出ていていると思ったのだろう、ザトーが大声でそう部下に指示を出す。

和泉は砂が闘技場全体を覆うのを待ったため、ガルディック・バビロンから距離を取ろうとする。

でも、それを許さない、逃げれば、逃げるほど、ガルディック・バビロンからの攻撃は苛烈になる。

白いレーザーメイルが徐々に血で赤く染まっていく……。

やつは直接、和泉の身体に爪を突き立てない、わずかにかすらせて、大きな裂傷を作って、出血を誘う。

駄目だな、早くしろ、南条……。

「なんじゃ、この風はあ?！」

ザトーは目を凝らして身を乗り出す。

やっと、視界が悪くなってきた。

赤や白の花びらが舞う。

「エンベラドラス、殉教者の軍勢……」

和泉が耐え切れず、魔法の詠唱に入る。

その時、

「ぶヴえヴえヴえええええ」

と、ガルディック・バビロンが和泉に向かってあの黄色い液体を吐きだした。

でも、数メートルの距離がある、かわすのは容易なはず……。

「おヴえヴえヴえええええ」

口が飛び出した、びよーん、って……。

いや、口というより、歯茎全体というのか、それが勢いよく、和泉に向かって高速で伸びていく。

「ぐあっ!？」

びちやびちやと、汚らわしい黄色い液体を撒き散らしながら、和泉の肩に噛み付く。

よく見ると、本体の大きな口の中に今飛び出した小さい口のようなものが無数にあって、それがうねうねとうごめいていた……。

「お、お、おう、えええ……」

南条も吐いた。

それと同時に吹いていた風が弱まる。

「た、大河!？」

私は叫び立ち上がる。

「うああああああ!!」

和泉が悲鳴を上げる。

ガルディック・バビロンから伸びた口が和泉の肩に噛み付き、それがぐるぐる回転しながらえぐっていく。

「うがああああああ!!」

激しく血が飛び散る。

「大河、魔法!! いや、もう間に合わない、詠唱を続けろ、ハル!!」

もう魔法はばれてもいい、一刻の猶予もない、和泉が死ぬ。

「ぐあ、ぐああ、死の絶望が……、汝を燃え上がらせる……」

必死の詠唱を続ける。

「ハサヴィユヒト!!」

東園寺がそう叫び立ち上がる。

「ま、魔法……?」

「星霧、星影、死色の空、メンファイティティス!!」

さらに、そう叫びながらザトーに詰め寄る。

「な、なんとayingっておるのじゃ、小娘……?」

困ったような顔で私に通訳を求めてくる。

ああ、そういう作戦か、クレームを入れているふりをして魔法を唱えるという……。

「森羅万象、創造の光よ、その身を焼き尽くせ!!」

そして、怒鳴り散らすようにザトーに向かって呪文を唱え続け、魔法は完成する。

「天元金鎖リムロスの円方灼炎!!」

和泉に向かって腕を横に払う。

その瞬間、ボワツ、という風とともに、砂煙が大きく舞い上がり、同時に私たちの視界を奪う。

「な、なんじゃ、何が起こった!?!」

「へ、陛下!?!」

ザトーとアンバー・エルルムが砂埃から目を守るために両腕で顔を防ぐ。

「炎を纏え、双炎爆裂」

そして、和泉の魔法も完成……。

強烈な砂煙の中でも何かが赤く光るのがわかる……。

それとともに、何かを斬る音、砕く音、さらには潰す音が響き渡る。

「な、なんだ、見えん、見えんぞ、何がどうなっておる!?!」

ザトーが喚き立てる。

やがて、その戦闘らしき音も聞えなくなっていく……。

やったか……?」

徐々に晴れていく砂煙の中を、身を乗り出して覗き込もうとする。

ゆっくりと砂煙が晴れていく……。

「あつ……」

和泉が片膝をつき、えぐられた肩を手で押さえている。

そして、折れた剣が彼の目の前に落ちていて、さらに、その前方には……。

「やったあ! すごいええぜ、和泉!!」

と、南条が歓声を上げる。

そう、和泉の前には細切れになったガルディック・バビロンの残骸が散乱していた。

そして、闘技場には緑や黄色の体液が至るところに付着し、その戦いが壮絶だったことを物語る。

「やったぜ、和泉!!」

「無事か、和泉!?!」

急に元気になった南条が飛び上がって喜び、和泉の元に駆け出して行き、そのあとを東園寺も続く。

「ハル……、よかったあ……」

と、私は椅子に深く座る。

まあ、和泉ならやってくれるよ、あのくらい、うん、私は信じてた。

「信じられん……」

お?。信じられない人もいるみたい。

「はい、陛下……、こんなこと、聞いたこともありません……」

「そうじゃ、初めてのことじゃ、人間がガルディック・バビロンを倒したのはなあ……、この千年間でえええ!?!」

ザトーが血走った目で叫ぶ。

「どういうことじゃ、小娘ええ!?! ええ!?! 超常か、やはり超常の力を持っていたのか、えええ、言わんか、小娘があああ、ああ!?! あと、あれは、あの風はなんじゃ、あれも、超常の力かあ、ええい、教えんかい、小娘がああああ!?!」

と、ザトーが私の両肩を掴み、激しく前後に揺さぶりながら、泡を吹きながら大絶叫する。

第104話 インデンスピット

「人間ごときが、ガルディック・バビロンに勝てるわけがなからう！何か秘密があるに違いない、なんじゃ、首飾りでもない、装備は全部こつち持ちじゃ、なら、やはり、超常の力か、そうじゃろう、言え、言わんかい、小娘がああああ!？」

両肩を掴まれてがつくん、がつくんされ続ける……。

「い、いたい、いたい……」

「それとも、何か、何か隠し持っていたのか、それを出さんかい!? 小娘どももお、わしを謀るのも大概にせいよおおお!! わしを誰だと思っておる、ラインヴァイスの先帝だぞおおお!？」

がくんがくん、がくんがくん……。

い、いたい、いたい……。

「いてええええつつつてんだろ、くそじじいがああああ!!」

と、ザトーの顔面を思いつきりぶん殴ってやった。

でも、メキツ、という、まるで鉄板でも殴ったかのような感触が拳に伝わる。

「つつ……」

ゴッドハンドで拳を強化していなければ砕けていた……。

「あて、あてて……」

ザトーが少し顔を曲げて、数歩よろめく。

「陛下！ 貴様、陛下に何を!？」

と、アンバー・エルルムが血相を変えて立ち上がり、剣の柄を握る。

「よ、よよ、よい、小娘の拳など、きかぬわ……」

ザトーがよろめきながら、アンバー・エルルムを制止させる。

「いたい……」

それにしても、なんて固い顔なの……、鋼鉄でも出来ているみたいだった……。

私は右手の拳をさする。

「に、しても……、強烈じゃったのう……、これがなければ死んでおつたかもしれないぞ……」

と、胸元からあのネックレスを取り出す。

そう、ヒンデンブルクのオリジナルのネックレス、私と同じデザインのやつ。

「はつきり言って棍棒で殴られるよりも強烈じゃった……」

ザトーが殴られた箇所、こめかみの辺りをしきりにさする。

「やはり、超常の力か……」

と、こめかみをさするのを止め、腕をだらんと下げて私のほうに歩み寄る。

「あの小僧と同じか……、どんな力だ……、どれ、もう一度見せてくれんか……」

ザトーが不気味に笑いながら、私の頬に手を伸ばす。

その手をパチンツ、と横に払ってやる。

「超常って、なんのことよ……」

少し距離を取りながら言う。

「とぼけるなよ、小娘、あの小僧や貴様がやったことだ……、それを見せえい!!」

尚も私を追い、その肩を掴もうとする。

「しつこいなあ……、じゃあ、見せてやるよ、でも、これは超常でもなんでもない……、ただの技術だから……」

と、私はザトーのうしろに立つ、アンバー・エルムの元へ歩いていく。

「な、なにをつ?」

警戒する彼の襟元を上かガシツと鷲掴みにし、少し手前に引っ張る。

「む?」

すると、彼が半歩前に踏み出す形で踏ん張ろうとする。

そのタイミングで今度は逆にうしろに押してやる。

「おう?」

と、アンバー・エルムは手を上げてバランスを取ろうとする。

彼のその手の甲を掴み内側にひねり、さらに胸元を下に引きずりながら、軸足を思いつき払ってやる。

「うあっ!？」

すると、アンバー・エルルムの身体がびっくりするくらい、ぴよんと上に飛び跳ねる。

それは、まるで、自分で上に跳んだみたい……。――

私はそこから、さらに掴んだ手の甲を返し、彼の身体を反転させ、そのまま背中から地面に落とす。

「くあっ……」

アンバー・エルルムが苦痛に顔を歪ませる。

「お、おお……、なんじゃ、超常の力か……」

ザトーが目を見開く。

「これは超常の力でもなんでもない、ただの技術……、アンバー・エルルム、おまえも一流の戦士、今何をされたかわかっただろうか？ おまえの口から主に説明してやれ」

と、倒れているアンバー・エルルムに説明を求める。

「あ、ああ……、これには超常の力は働いておりません……」

彼は立ち上がりながら言う。

「ど、どういうことじゃ、小娘がエルルムに触れたと思ったら、上に吹き飛びおったぞ……、あれは見間違いではない……」

「そ、それは、私が自ら跳んだからです……、すべての動きを先読みされ、そう跳ばされるように誘導されたからです……、流れるような一連の動作により、私は上に跳ぶ以外の選択肢はなかった……、驚異的な技です……、ですが、そこには、陛下が言われるような、超常の力はございません、いや、そんなものが入る余地すらない、純然たる技術の塊、私はそれを垣間見ました……」

と、アンバー・エルルムが説明してくれる。

「うん」

私は大きく頷く。

さすが戦士、よく見ている。

「な、なんじゃと……、本当か……?」

「本当よ……、私たちは、剣の民族、ガキでもこのくらいのは出来るのよ、そして、ハルは私たちの中でも最強の戦士、私より遥かに強

い、あなたたちが言うガルディック・バビロンなんか敵じゃないのよ」と、今だに納得していないザトーに向かって言い放つ。

「ぐぬぬ……」

やつが私を睨む。

私は涼しい顔でやつを見返す。

「剣の民族……、本当なのか……、そんなものがこの世に……」

ザトーが真偽を確かめるように私を睨み続ける。

まあ、もちろん、剣の民族なんて私が今、適当に考えたウソなんだけどね。

「わかった……、とりあえずは信じることにしよう……」

根負けしてザトーが折れる。

「賢明ね……」

よし！

と、振り返りながら小さくガッツポーズをする。

「ハルー!!」

そして、そのまま小さくガッツポーズをしながら、功労者である和泉春月の元へ走っていく。

「よろしいので、陛下……?」

「かわまん……、50年待ったのだ、少しくらい泳がせておいてもよい、そのための砦じゃ……、50年前のように殺してしまつては元も子もない……」

「御意……」

と、そんな話し声が聞えてくるけど、気にせず和泉の元に走っていく。

「うわぁ……」

石垣とか砂の上に虫の身体の一部や体液が付着している……。

私はそれを見ないように一目散に走り抜ける。

「ハルー!!」

到着。

「やばい、傷が深い……」

「魔法を使うか……」

「いや、俺では無理だ、この傷では……、綾原とか海老名じゃないと……」

と、南条と東園寺が話している。

「ハル、大丈夫……？」

私は二人の間から和泉を覗き込む。

「あ、ああ……」

と、苦しそうに答える。

その姿は痛々しく、真つ白なレザーメイルは血に染まり、特に左肩が酷く、深くえぐられ、大量出血していた……。

「とりあえず、応急処置だけでも」

「ナビーフイユリナ、囲え……」

「あ、うん……」

と、和泉を周りから見えないようにする。

「アスタナ、美しくしき、流れのほとりで、慈雨にその身を任せ、ミインテールレット癒しの精霊糸」

そして、南条が小さく魔法を唱え、そつと、和泉の左肩に手を添える。

「いや、やめろ、みんなの頑張りを無駄にしたくない……」

と、和泉が魔法を止めさる。

「出血だけでもなんとかしないと命にかかわるぞ、和泉……」

「大丈夫だ、南条」

それでも固辞し続ける。

「手当てをいたしましょう、これほどの勇者を失うのは惜しい」

と、マジョーライが部下を引き連れてやってくる。

「すまない、よろしく頼む」

その提案に東園寺が答え、私が通訳する。

「それでは……」

と、和泉は兵士たちに両脇から抱えられ、別室へと消えていく。

「治療のあいだ、皆様はこちらへ」

マジョーライにこつちにくるようにと手招きされる。

私たちはそれに従う。

「それでは、条約の効力は1ヶ月後より発生ということでは……」
別室に通されるなり、マジョーライにそう言われる。

「1ヶ月後ですね……」

東園寺が頷く。

「細かな取り決めも必要ですね……、わかりました、今度はこちらから、そちらにお伺いいたします、その折はよろしくお願いします」

「かたじけない……」

「また、帝国との交易、取り引きを1ヶ月を待たずして始められても結構です、その際はこちらを掲げておいてください」

と、マジョーライから豪華な三角形のタペストリーのような旗を渡される。

「かたじけない……」

「それと……、代表の方には身分を授けます、こちらを……」

これまた豪華な金色の短い杖を東園寺に渡す。

「名誉騎士の証です、こちらをお持ちになれば、帝国内、どこでも、騎士長クラスの待遇が受けられるようになります」

「かたじけない……」

「こんなところですかね……、では、治療が終わるまでお待ちください……」

と、マジョーライとその部下が丁重に礼をして部屋をあとにする。

「ふう、やっと終わったあ……」

南条がソファアの上に崩れ落ちる。

「疲れたねえ……」

と、私もその横に腰掛ける。

「油断するなよ、二人とも、和泉もどうなっているかわからん……」

「はあい」

「ういーっす」

と、気を引き締めるけど、最後まで何事もなく進み、私たちは砦の前に呼び出される。

「ハルー!!」

門の前には包帯ぐるぐる巻きの和泉がいた。

「大丈夫か、和泉」

「ああ、心配かけたな、東園寺、みんなも……」
笑顔を覗かせる。

「その怪我では歩くのも大変でしょう……、こちらをお使いください、お貸しします……」

マジョーライが馬を引いてくる。

「かたじけない、必ずお返しします」

馬には和泉が着用していた白いレザーメイルも積まれていた。

「あ、気に入ったから、いただいてきちゃった」

と、和泉が照れたように笑う。

「では……」

兵士たちに手伝われて和泉が馬に乗る。

その手綱を東園寺に渡す。

「またお会いしましょう」

マジョーライがにこやかに言う。

「ええ、本日はありがとうございました……、では、行くぞ！」

東園寺がそう言葉を返し馬の手綱を引く。

「おおー」

と、私は白クマのリユックサックを背負い直し、拳を突き上げて叫ぶ。

こうして私たちは帝国との会談を無事に終え、ラグナロクへの帰路につくことになった。

第105話 立夏の朝風

帝国との会談から明けて翌日。

昨日はラグナロクへの到着が深夜になり、尚且つ、和泉の怪我の治療でバタバタしていたのでみんなに報告どころではなかった。

なので、日が明けて今日、朝早くから班長会議を行うことになった。

ここは、割と普通なナビーフイユリナ記念会館。

白い楕円形のテーブルを各班長たちで囲む。

班長と言ってもその中の二人は代理だ。

まずは、参謀班、ここの班長は人見彰吾だが、今は謹慎中で、その代理は綾原雫に就いてもらっている。

次に狩猟班、ここの班長は和泉春月、だけど、彼は昨日の闘技会でかなりの重症を負い、今は自分のロツジで安静にしている。

なので、班長業務は出来ないのです、その代理は夏目翼にしてもらっている。

で……、既存の班長は……、女性班の徳永美衣子、生活班の福井麻美……、そして、マスコット班の私、ナビーフイユリナ・アラウエイ……、うん、見事に東園寺以外女だ……。

やつの顔を見る……。

「……」

腕組みして目を閉じている……。

うーん……、険しい表情をしているけど、にやけるのを我慢しているようにも見える……。

まさかな……。

「みんなに報告する前に話をまとめよう」

と、徳永が口火をきる。

このあと全体会議があるので、その内容をまとめる必要があった。

「その前に、なにこの領事裁判権って？」

福井が簡単にまとめた要旨を見て口を開く。

「これじゃ、やりたい放題じゃない、こっちは罪に問われるけど、あつちが罪に問われない……、いったい、どこの江戸幕府よ……、東園寺

くんは井伊直弼だったの？ もう……、言い直してきてよ……」

井伊直弼……、言い直してきて……。

それが言いたかったのか、福井の顔はちよつと笑っていた。

「まあ、まあ、麻美……、今はこれが精一杯よ、これからどうするか考えましょ？」

と、真に受けた徳永が福井をなだめようとする。

「あ、これ、所得税じゃないわ、収入税よ」

「なにそれ、ぷーん？」

班長以外にも、私の隣にはエシユリンが出席していて、その隣の綾原雫と組んで、条約の翻訳作業を会議と同時平行で行っていた。

「あ、それ、私も興味ある、どう違うの？」

徳永が興味を示す。

「うん、えつとね、どう説明すればいいんだろう……」

と、綾原がちよつと考える素振りをする。

「簡単よ」

と、私は手元のコップを取る。

「例えばこのコップを1万円で麻美に売る……、はい」

と、福井にコップを渡す。

「はい、これで、1万円、これが収入」

1万円に見立てた紙をひらひらとみんなに見せる。

「うん？」

「ええ？」

みんなが首を傾げる。

「でもさ、コップを作るのって大変だよ、材料費に千円、人権費に千円、輸送費に千円……、と、かかるわけだ、その経費を収入の1万円から差し引くと、7千円になる……、これが所得……、わかった？」

「うーん？」

「ええ……？」

みんなが首を傾げる。

「よくわからないけど、ナビーすごい」

と、夏目は褒めてくれる。

「ぜ、税金とか関税って難しいよね……、そういうのは、雫……、お願い……」

徳永が、まいった、って感じで言う。

「とにかく、ナビーの説明にもあった通り、同じ税率でも所得税より収入税のほうが取られる額は大きくなるから、その分、価格に上乗せしないといけない、売れる売れないは別としてね」

「でも、これって自己申告だよな？ 適当でもばれないんじゃないの？」

徳永が要旨を見ながら言う。

「いや、そこは正確に行く」

初めて東園寺が口を開く。

「信用問題だ、徳永。多少誤魔化しても、必ず、どこかから漏れる……、不正が明るみに出れば、帝国はここラグナロクに税関や取締りの機関を置かせろと言ってくるかもしれない、そうなったら厄介だ、そうならないように、極力、誠実に対応する」

まっ、それがいいよね。

「うん、そうだね、考えが甘かった、ごめん」

と、徳永が謝る。

「そうになると、取引所は二つ必要になるよね？ 帝国とそれ以外がごっちゃになっていると、帳簿付けるの大変になるから」

と、福井が問題を提起する。

「そうだな、市場がもうひとつ必要になる……、幸い、帝国との取引引き開始まで1ヶ月の猶予がある、それまでにプラグマティッシュ・ザンクツイオンの隣にもうひとつ同規模のものを作る」

「それもそうだけど、ナスク村の人たちはどうするの？ あのまま市場に住まわせるの？」

「それも考える必要があるな……」

問題は山済み。

最近の班長会議は長くなる傾向にある。

「どうすればいいんだろ……」

途方に暮れる。

「ラグナロク広場とヒンデンブルク広場には入られたくない、もつと言うと、飛行機と飛行船には触れられたくない、あの二つは私たちが日本に帰るための大事な手がかりなんだから」

福井が強い口調で言う。

「ならば……、さらにもうひとつ広場を作るしかないな……」

東園寺の言葉にいったい誰が作るんだ、という空気が流れる。

「もちろん、ナスク村の人たちにも手伝ってもらおう。その際、生活圏はルビコン川を基準に考える。つまり、川より北が我々、南が彼ら、というようにな」

「ええ？ 彼らを住まわせるの？ 好き勝手に？ 和泉くん怒るよ、森を勝手に切るなって」

夏目が異論を唱える。

「そ、そうだったな……」

東園寺が口ごもる。

もうだめだあ……、ぐだぐだだあ……。

「あ、通貨の取引レートどうする？ ここに金、ゴールドの含有量についての記述があるけど」

綾原がまた別の話題を振る。

「いままで通りではいけないのか？」

「うん、金の含有量が帝国と同じでなければ交換出来ないって、つまり、金本位制の帝国と魔法本位制の私たちでは、そもそもそのレートに乖離があるってこと」

「わからん……、簡単に説明してくれ……」

東園寺が目頭を押さえる。

「同じくらいの量の金を使わなければ交換出来ない、つまり、このままじゃ使えないってこと」

「しょうがないので、私が説明してあげる。」

「なら、帝国との取り引きにはラグナは使用しない、いいな？」

「了解……」

と、綾原がメモを取る。

「あ、和泉くんから木の伐採について言伝預かっていました。ええと

るだけだからね。

なので、私はシウスたちのお世話をする！

「くるうー！」

いつも通り、牧舎に近づくと、私の接近に感じた子犬のクルビツトが駆け寄ってくる。

「クルビツトー！」

「くるうー！　くるうー！」

おおはしやぎの彼と一緒に牧舎を目指して走る。

「おお？」

牧柵の外で中のシウスたちを見守る人影が二つあるぞ……。

ひとつは、包帯ぐるぐる巻きの、さらさらヘアアの爽やかな男……、

そう、勇者和泉春月だ。

そして、もうひとつは、銀縁メガネで切れ長の目と賢そうな顔立ち、左手には包帯がぐるぐる巻かれている男……、そう、大魔道人見彰吾だ。

その二人が並んで牧柵の中のシウスたちを見ていた。

「何してるの、二人とも！」

と、そのあいだに割って入る。

「くるうー！」

クルビツトも入ってくる。

彼が私のワンピーススカートの中に入りそうだったので、しゃがんでそれを止めさせる。

「このお、このお！」

「くるう、くるう！」

そして、思いつき撫で回してやる。

「ハルは寝てなくても大丈夫なの？　まだ痛むでしょ？」

クルビツトを撫でながら尋ねる。

綾原たちの魔法で治療してもらったとは言え、それでも完治には程遠かっただろう。

「ああ、大丈夫、痛みは引いたよ」

「そう、彰吾は……？」

「俺は元から大したことない、大袈裟なだけだ……」

と、包帯が巻かれた左手を見せてくれる。

「そう……」

クルビツトを撫でながら二人の顔を交互に見上げる。

「まあ、とにかくだ、和泉、俺はおまえに対抗意識があった、おまえに勝とうとして攻撃的になっていった。俺が最初に言っていたのにな、俺たちは全員対等だと……、競争が始まり、どっちが上だ、とか言い出したら、必ず争いが生まれる……、それはわかっていたはずなんだが……、なかなかうまくいかないな……」

人見が視線を落として言う。

「いや、俺にも問題があった、天狗になっていたよ、それがおまえの勘に触ったのだろう……、その傲慢さの代償がこれさ」

と、厚く包帯が巻かれた腕を見せながら自嘲ぎみに笑う。

「おお……？ おお……？」

と、二人の顔を交互に見る。

もしかして、仲直りしようとしてた？

「それにしても、おまえが怪我をして帰ってくるとはな、完全に予想外だったよ……」

人見がかすかに笑う。

「俺の実力なんてこんなものさ……、ブレーンがいれば話は別だがな」

和泉も軽く笑う。

「ふふん」

私もちよつとだけ笑う。

和泉と人見、争うことなく仲良くやっていってほしいね。

あと、東園寺も。

誰が一番ということもなく、三人が並び立ってやっているうちは大丈夫、私たちの未来は明るい。

二人の視線の先、明るい日差しの中、元気に草をはむシウスたちを見ながらそう思う。

第106話 花知るばかり

あの帝国との会談から一週間。

まだ多少の忙しさは残るものの、普段通りの生活を取り戻しつつあった。

私は真つ青な大空を見上げる。

「良い天気」

口元をほころばせる。

「きやつ」

と、突風に麦わら帽子が飛ばされないように手で押さえる。

「よーし」

草原の中を歩く。

「くるう、くるう！」

「待っててねえ、クルビット……」

私を急かすように、じやれてくる子犬のクルビットをなだめながら進む。

「ふう……」

優しい風が吹く草原の真ん中には、骨組みだけになった飛行船が見える。

そう、ここはヒンデンブルク広場。

直径200メートルくらいの穏やかな草原……。

遠くには仔ヤギのシウスやチャフ、仔馬のウエルロット、仔鹿のカチューシャ、そして、その傍らには和泉春月やエシユリン、さらにはナスク村の子供たち、シユナントリジエンの姉妹、それとシエランの姿も見える。

今日はみんなでヒンデンブルク広場に放牧に来ていた。

そうそう、和泉の怪我はほぼ治り、いつでも班長に復帰出来るまでに回復していた。

あと、人見だけど、彼もまだ班長には復帰していない、怪我は治ったけど、まだ謹慎しているという自己申告があったからだ。

彼なりに反省中らしい。

私としては早く班長に復帰してほしいんだけどね、彼がいないと、班長会議がまとまらない。

「くるう、くるう！」

「待って、待って、もう少し離れてから」

この辺かなあ、と、周囲を見渡す。

みんなから少し離れたところに、ぽつんとしゃがんでいる夏目翼の姿がある……。そして、その近くには大きな鳥籠……。

しゃがんでいる夏目の前にはひよこが三羽……。そう、今日はピツプたちひよこも連れてきていた。

いつも鳥籠の中で仲間はずれだったからね、みんなと一緒にいいよね。

遠目からでも、ピツプたちが羽をぱたぱたとさせて、とてもはしゃいでいるのが見てとれた。

「うん、嬉しそう、よかった」

「くるう、くるう！」

こつちもおおはしやぎ。

「よし、じゃあ……」

と、私は手にした黄色のフリスビーを構える。

「そおれえ、取ってこおい！」

そして、大空に向かって思いつきり投げる。

「くるう！」

と、クルビットが全速力でフリスビーを追いかける。

解き放たれたフリスビーが晴天の青空の中を飛翔する。

「ああ、なんて良い日なんだろ……」

思わず、そんなつぶやきが漏れてしまう。

「こんな日が、いつまでも続くといいな……」

心底そう思う。

「くるう！」

と、クルビットがフリスビーをジャンピングキャッチ。

「おお……」

今、2メートルくらい飛んだよね……。

「くるう、くるう」

と、彼が上機嫌で帰ってくる。

「よし、よし、おまえはきつとすごい大物になるぞ……」

戻ってきたクルビットの顔を両手で撫でてやる。

そして、その啜えたフリスビーを受け取り、

「そおれえー！」

と、再度、大空に投げる。

「くるうー！」

それをクルビットが大喜びで追いかける。

そして、またジャンピングキャッチ！

「ナイスー！ クルビットー！」

私は歓声を上げる。

そんなことを何度か繰り返しているうちに……、

「うーん……」

骨組みだけになった飛行船の近くまで来ていた。

「よし、シャペルにも会って来ようー！」

「くるうー！」

シャペルは飛行船のダンスホールにいるロボット、たぶん、お手伝いロボットだと思う。

その彼は誰もいなくなったダンスホールで今も働いている……。

まあ、お花の世話をしてるだけなんだけどね。

「シャペルに会ってくるねえー！」

と、シウスたちの面倒を見ている和泉たちに大声でそのことを告げる。

「おうー！ 中には誰もいないから、格納庫とか変な部屋に入るなよー！」

和泉がそう返事を返してくれる。

「わかったあー！」

と、大きく手を振り返す。

「じゃあ、いこ、クルビットー！」

「くるうー！」

私たちは入り口から中に入る。

入り口はスロープ状になっていて、かなりの急勾配、45度くらいはある。

それを下まで張られたロープを手すり代わりにして慎重に降りていく。

「クルビット、滑らないようにね……」

「くるう」

でも、それも長いことではない、10メートルも下れば、平坦な通路に出ることが出来る。

「よう」

と、ロープを放して、手についた砂埃をパンパンと払う。

そして、あらためて通路の中を見渡す。

そこは完全な暗闇ではなく、壁や天井に塗られた蛍光塗料のおかげで最低限の明かりは確保されている。

辺りはうっすらと青い……。

手触りの良い、木製の手すりを伝い、目的の場所を目指す。

今思ったけど、これ、蛍光塗料じゃないね、魔法だ、それにより壁とかが光っているんだ。

そして、これは照明のためだけじゃない、設備の保護にも使われている。

すべすべ、ぴかぴかの手すりに指を這わせる……。

うん、まるで新品だ。

と、そんなことを考えている間に目的地に到着。

「シャペルー、遊びにきたよー!」

「くるう!」

両手を広げてダンスホールに駆け込む。

ダンスホールはお世辞にも綺麗とは言えない。

屋根が一部破損してわずかに空が見え、そこから砂や泥、雨水などが中に入ってきていたからだ。

でも、そのおかげだろう、草花の種もダンスホールまで入り込み、そこで芽吹き、小さな花を咲かせることが出来たのは……。

「ピポポッポ」

ギーギー言いながらブラウンのロボットが近づいてくる。

「シャペルー！」

「くるう！」

と、ロボットの胸に飛び込む。

「ピポポッポ、ピポポッポ」

シャペルも頭をくるくる回して喜んでいる。

そして、カメラのレンズのような赤い目が私を捉える。

「ピポ……」

彼が窮屈そうに腕を伸ばす……。

「うん？」

と、シャペルから身体を離す。

「ピポ……」

そして、なにやら私に渡そうとする。

「あら……」

その手にあったのは、小さな白い花……。

そう、ここで育ったお花だ。

「ありがとう」

それを受け取る……。

それは、小さな、小さな、鈴のような形をしたお花……。

こんなに弱々しくても、このほとんど光の届かない場所で育った逞

しい子なんだよ、強い子なんだよ。

しみりする。

そのまま、その場にぺたんと女の子座りして、お花を眺める。

「いいね……」

大事に育てたんだなあ、と思う。

「ピポポッポ」

そして、シャペルも私のすぐ横に座る。

「くるう……」

もちろん、クルビットも。

「よしー！」

と、そのまま寝転がって、シャペルの膝を枕代わりにする。

「クルビットもおいで」

そして、クルビットを私のお腹の横に座らせて腕で抱く。

「くるう……」

伏せをするような感じで大人しくしてくれる。

「ふん、ふん♪」

と、シャペルに膝枕をしてもらいながら、指でお花を回して、それを眺める。

薄暗い場所だけど、真ん中に一筋の光が差し込み、それがまぶしいくらい明るくて、そして、その光の中に私の持つと同じようなお花が十数輪ほど咲いている……。

シャペルはずっと一人で、ここで何十年もあの花たちの世話をしてきた……。

寂しくなかっただろうか……。

「何かお話ししようか？」

下からシャペルを見上げながら言う。

「ピポ……」

と、シャペルも同意してくれる。

「そっか……、そうだなあ、じゃ……」

ちよつと考える。

「よし、じゃあ……、私ね、ちよつと前まで、ドジっ子プレイを心がけてたんだよね、だって、そのほうが少女らしいでしょ？ だから、わざと転んでみたり、食べ物をぽろぽろこぼしてみたりしてんだよね……、でもさあ、それをやればやるほど、みんなが私のことを子供扱い、というか、赤ちやん扱いするようになったんだよね……、でちゆかあ、とか言つて……、なんか、それが癩に障つてさ……、だから、もうそれはやめようと思ったの……」

お花をくるくる回しながら話し続ける。

「でも、やめるにしても、ドジっ子プレイに代わる何かほしい……、そこで、思いついたのが……、ツンデレ！ すごいでしょ？ 私、天才！」

と、足をバタバタさせる。

「そして、作戦スタート！ まず手始めに近くにいた佐野に言ってやったのよ、ば、馬鹿、勘違いしないでよね、あなたの顔を不細工なのは私のせいじゃないんだからねっ！ って、でも、あいつ、それ、ツンデレじゃない、ただの悪口、とか言いやがったんだよ！ 何が違うのかわからないけどこれも練習だと思って、さらに、その隣にいた秋葉にも言ってやったんだよ、ば、馬鹿、勘違いしないでよね、これはちよつと多く取りすぎただけなんだからねっ！ って、私の嫌いな食べ物全部、秋葉の皿に移してやったんだよ、そしたら、あいつ、ポツリと、嫌いなだけなんだろう、って言うの！ バレてたの！」

私はクルビットを抱きしめたり、足をバタバタさせながら夢中で話し続ける。

「よし、最後はハルだ、あ、と思って、やつに言ってやったんだよ、ね、ば、馬鹿、勘違いしないでよね、ハルは優しく、かっこいいだけなんだからねっ！ って、そしたらみんなが、デレデレじゃねえか！ って、ツツコミ入れやがるんだよ、ね、そして大笑い！ もう！ って！」

そんな感じでシャペルに向かって話し続ける。

「だから、言ってやったのよ！ それは私の耳だ！ ってね、そしたら、もう大爆笑！ みんなで笑い転げたの！」

30分くらい話してたかな……。

「ねえ、シャペル……？」

そして、一通り話しが終わったあと、彼を見上げる。

「気になっていたんだけど、あなたのその胸に刻まれた線……、何かの暗号文だよ……？」

そう、シャペルのボディ、胸の部分に短い縦線がズラツと横に並んでいる。

それは、まるで、横に長いバーコードのようだった。

第107話 ピュアフサージ

「ピポ……」

錆びたバケツみたいな顔にカメラのレンズみたいな目が二つ。
その顔が私の顔を上から覗き込む。

「シャペル？」

彼の胸に向かって腕を伸ばす。

でも、そこまで届くわけもなく、私の手は空を掴む。

「ピポ……」

察したのだろう、シャペルが少し前かがみなる。

すると、その胸に描かれたバーコードのような模様がよく見えるようになる。

「おお、そのまま、そのまま……」

と、さらに腕を伸ばすと、かすかに、シャペルのその胸に指先が届くようになる。

そして、そのバーコードのようなものを指でなぞる。

パラパラ、と、砂埃が落ちる。

「2パターンだね……、太い線と細い線で構成されている……」

そのバーコード、パターンを指でなぞりながら言う。

「ピポ……」

「くるう……」

「よし、よし……」

姿勢を変えようとして、身をよじるクルビットの足、太ももの辺りをポンポンと軽く叩いてやる。

「これは……、2進法、バイナリーだね、シャペル？」

そして、話を続ける。

「太い線が1、細い線が0……」

「ピポ……」

ギーギーと音を立てて、さらに私が触りやすいように、前かがみになつてくれる。

「ありがと、シャペル……」

今度は指先ではなく、手の平を彼に胸にあてる。

「文章構成は、二一つ……、右と左で別れている……」

ひとしきり、彼の胸をなでたあと、手の平を閉じて、人差し指だけ出して、その胸を叩く格好にする。

「モールス信号、でしよ、シャペル？」

そして、彼の顔を見て微笑む。

「じゃあ、左から……」

と、彼の胸を指で叩いてモールス信号を再現する。

「ツートントン、トンツ、トントンツ、ツートントン……」

指で叩きながら、そのリズムを口ずさむ。

「ピポ……」

「正解だね、で、これなあに？」

当然ながら、私の知らない、配列……。

「ピポポ……」

彼も教えてはくれない……。

「ツートントン、トンツ、トントンツ、ツートントン……、4桁の数字だね、これ？」

なんだろうなあ、暗号解読みたいで楽しくなってきた。

「4桁の数字かあ……、SFの映画やドラマだと、未知の生命体と交信するときには素数を使うよね？　じゃあ、これは、2、3、5、7？」

「ピポ……」

違うか……。

だよね、素数なんて馬鹿にしすぎ、もつと高度なものを使うよ、きつと……。

でも、4桁か……。

円周率、3. 141592653……。

ネイピア数、2. 718281828……。

どこかを切り取る……。

どこだ……、4桁で超重要で、その意味が一発でわかる配列は……。

821828……。

ネイピア数のこの並び、よく目にするよね？　円周率にしてもそ

う、この並びがよく出る、色んな数学の問題でもそう……。

なぜ……？

それは、

「完全数だから」

自身と1を除く約数の合計が自身の数字になるものを完全数という。

そして、4桁の完全数は、

「8128」

のみ。

自信を持ってシャペルの顔を見上げる。

「正解でしょ？」

「ピポ……」

そして、なぜ、ここに完全数なんて書いてあるのかという……。

それは、もちろん、未知の誰かに向けたメッセージだから。

おそらく、これは製造時に書かれたものじゃない、手書きのようにも見えるから……。

誰かが、最後にシャペルの胸にこれを書き込んだ、そう考えると合点がいく。

そして、素数なんて馬鹿でもわかるものではなく、完全数なんて使っているのは、最低限の知能を有する誰かに読んでほしかったから。

そう、これは私に向けて発せられたメッセージなんだ。

しかも、数十年前からの……。

「そうだったら、ロマンがあるよね」

クスリと笑う。

「よし、じゃあ、最後の解読いこっかー！」

今度は右の文字列を指でなぞる。

「ふむふむ……」

指を立てて、シャペルの胸を叩き、モールス信号を再現する。

「トントン、ツートン、トントー、トントン、ツーツーツー、ツートン
トン、ツーツー」

同時にそれを口ずさむ。

「7文字！」

なんだろうねえ……。

左の8128を手引書として解読して……。

それを、音声言語に変換するとお……。

「ピュアフサージ」

さらに、ここから、意味の通じる言葉に置換してやると……、

「ヘヴンリー・ヴァルキリア」

と、なる、はず……。

「自信はないけどね、えへへ」

少し笑う。

「ピポポッポ！ ピポポッポ！」

と、シャペルが首を伸ばしたり、顔を回転させたりして騒ぎだす。

「ど、どうしたの、シャペル!?!」

私はびっくりして上半身を起こす。

ウィーン、という音が響き出す。

「ウィーン!?!」

な、なにっ!?!

シャペルの胸の辺りからガシヤン、ガシヤンという音もし出した。

そして、胸部、鉄板のつなぎ目が光出す、中の光が漏れているんだと思う。

「ど、ど、どうしたの、シャペル……、シャペル!?!」

なんか、変形しそうな勢い……、そして、熱を感じる、凄く熱い、火傷しそうなくらい熱い……、特に私の胸のあたりが……。

胸のあたりが……、

「胸の、胸の……、あっ、あっ……」

胸の辺りをまさぐる……。

「いつぎやあああああああ!?!」

あまりの熱さに飛び上がって絶叫した。

「くるうー！」

クルビットもびっくりして傍に置いていたfrisbeeをくわえて

逃げていく。

でも、それよりも、

「あああ、あつ、あつ、あつぎやあああああつ!!」

そう、あの魔法のネックレスが超熱くなっていた。

焼けるほどに!

「ひいい、ひいいい、いつひいい!!」

急いでネックレスを取り、そして、

「とりやああああ!!」

思いつきりどつかに投げ捨てる。

「はあ、はあ、はあ……」

びつくりした、死ぬかと思った……。

と、胸を撫でおろし、その火傷しているだろう胸をさする。

「だ、大丈夫かな、赤くなってないかな……」

と、ワンピースの胸元をつまんで、中を覗き込む……。

「あ、痕にならないよね……、ふーふー、ふーふー」

ふーふーして冷やす。

「うん、大丈夫、なんともない……」

不思議なことに火傷どころか赤くすらなっただけはなかった。

「ウイーン……」

ネックレスを投げた途端シャベルが大人しくなる。

「ウイーン……」

やがて、音はしなくなる。

「な、なんだったの……?」

眉間に皺を寄せる。

「まあ、いいわ……」

投げたネックレスを拾いに行く。

「クルビット、もう、大丈夫だから、戻っておいでえ」

と、言いながら、ネックレスを拾いに行く。

「クルビットー」

そして、ネックレスを拾い……、ペンダント部分を指でちよんちよんとして、その温度を確かめる。

「クルビットー、おいでえ……」

あつあつだね……。

「クルビットってばあ……」

ネックレスは首にはしないので、そのまま手にぶら下げくると回転させて、その熱を冷やそうとする。

「クルビット？」

あたりを見渡す。

ダンスホールに彼の姿はなかった……。

「くるう……」

いや、あつた、声がした。

「どこ、クルビット？」

キョロキョロと辺りを見渡す。

「くるう、くるう……」

うん？ 上から声がするぞお……。

と、上を見上げると、そこには瓦礫の山、剥き出しの鉄骨の上で震えてしゃがんでいるクルビットの姿があつた。

「な、なぜ、そこに……」

呆れ気味に苦笑いしてしまった。

「降りてらっしやあい」

「くるう……」

降りてこない、足がすくんで動けないみたい……。

「うーん……」

幾本も重なりあつた鉄骨はバランスが悪そうに見え、私が直接登つていったら崩れそうな感じがした。

高さも相当あり、5メートルはあるだろう……、それが崩れ落ちたら大怪我では済まされない。

「うーん……」

困った。

「クルビット、飛び降りておいでえ、絶対受け止めるからあと、両手を広げる。」

「くるう……」

飛び降りない。

怖くて駄目みたい……。

「うーん……」

本格的に困った。

安全に登れる箇所、または何か足場になるようなものはないだろうか……。

と、周囲を探すけど、そんなものはどこにもなかった……。

「ピポロポツポ、ピポロポツポ」

「うん？」

「ピポロポツポ、ピポロポツポ」

シャペルが自分の胸に手を当て、私とクルビットを交互に見ながら、しきりにそんなことを言っている……。

「な、なんだろう……」

「ピポロポツポ、ピポロポツポ」

シャペルが手を当てている場所は、あのバーコードみたいな模様がある辺り……。

「ピポロポツポ、ピポロポツポ」

私の右手、左手を見て、最後に手にぶら下がっているネックレスのペンダント部分を見る……。

「さっきの、もう一回やれってこと……？」

「ピポロポツポ」

シャペルが胸から手を下ろし、私に向き直る。

「わ、わかった……」

と、私はネックレスを持つ手を水平にして、なるべく、そのペンダント部分を身体から遠ざけようとする。

そして、シャペルの胸、コード部分に手を添える。

「よし……」

深呼吸をして、覚悟を決め、

「ピュアフサージ……、ヘヴンリー・ヴァルキリア」

と、その言葉を発する。

ウィーン、という機械音とともに、シャペルの身体が輝き出す……。

そして、彼が、その長い両腕を広げると、ふわっと、真っ白な翼が私の視界いっぱい広がる。

反射的に胸に添えた手をひっこめようとする。

「ピポー！」

離すなど叱られる……。

「で、でも、なんなの、その翼……、まさか、飛ぶつもりなの……、ここで……?」

あ、アホか……、翼があつたつて、飛べるわけないでしょ、滑走路とか、揚力とかはどうするの、風もないし……、と、常識的なことを考えてしまう、けど……。

「浮いたー！」

ふわりと、びつくりするくらい、自然に浮いた！

「うわ、うわ、うわ……」

身体がどんどん上昇してく！

「ど、どうなってるの……」

シャペルの大きな、真っ白な翼が何らかの風を受けはためいている。

よくわからないけど、これは魔法ね、その翼、伊達でしょ？ だって、シャペルの身体に触れている私の身体も一緒に浮いているのだから。

「くるう……」

すぐに、クルビットがいる鉄骨の高さまで到着する。

「さっ、クルビット、おいで」

と、片手を伸ばす。

「くるうー！」

彼は、足元のフリスビーをくわえて、私の腕に飛び込んでくる。

しっかりと、片腕でクルビットを抱きかかえる。

「いいよ、シャペル、下におろして」

「ピポ……」

ゆつくりと下降し、一切の衝撃もありません、地面に着地する……。

「何らかの方法で衝撃を吸収しているな……」

足元を見てそうつぶやく。

「くるう……」

強く抱きしめすぎたのか、彼が苦しそうな声を上げる。

「ああ、ごめんね、クルビット……」

と、地面におろしてあげる。

「くるう！」

すぐに元気を取り戻して、私の周囲を駆け回る。

「もうあんな高いところに登っちゃだめだよ！」

「くるう！」

「シャペルもありがとね、助かったよ」

シャペルにもお礼を言う。

「ピポ！」

意味が通じたのか、顔を上げ下げして喜びを表現する。

「くるう！」

今度はシャペルの周りを走る。

「ピポ！」

シャペルも頭をくるくる回転させる。

「ふふっ……」

微笑ましい。

それにしても、シャペルにこんな力が隠されていたなんて……。

いや、このネックレスの力か？

どっちにしても、あの飛行能力は有用……。

「ピュアフサージ、ヘヴンリー・ヴァルキリア」

そつと、胸に刻む。

第108話 その色としも

あのヒンデンプルクの事件から一週間。

そして、帝国との交易開始まであと二週間に迫ったある日のこと。
今日も快晴、空は真っ青。

そうそう、交易の開始に伴い、細かな取り決めが必要とのことで、明日、帝国の交渉役として、あの新しいほうのマジョーライがこちらに訪問することが決まったらしい。

いや、新しいほうかどうかはわからない、古いほうが顔に包帯ぐるぐる巻いてやってきたら、それはそれで笑える。

笑えないか……。

そのような理由で、今、急ピッチで会談場所の建設が行われている。場所はもちろん、市場、プラグマティッシュ・ザンクツイオン。

帝国の人間にラグナロク広場の大破した旅客機を見せるわけにはいかないからね。

ガラガラ、ジャラジャ、と、音を立てて馬車は砂利道を進む。

「ウエルロット、大丈夫、疲れてない？」

と、小窓からちよこんと顔を出して、馬車を引いてくれているウエルロットに声をかける。

「ぶるるう」

そう、今は割と普通なナビーフイユリナ記念ピーチ号の中だ。

これから、プラグマティッシュ・ザンクツイオンや新市場などの視察に向かう途上にある。

もちろん、それは口実で、馬車のメンテナンス走行と、食料の買出しが主目的で、視察はついででしかない。

「大丈夫だよ、これでも力持ちだから、もう少しスピードを出してもいいくらい」

と、御者役である和泉春月が笑顔で答える。

「ならいいんだけど……」

ラグナロク広場からルビコン川に向かう道は砂利道で、途中まではなだらかな上り坂、そして、川に近づくると下り坂に変わる。

その下り坂は結構な勾配で1%程度の傾斜があると思われる。ちなみに1%の傾斜とは、100メートル進んだら、その1%、1メートル高さが変わる坂道のことを言う。

そう考えると、結構な下り坂だということがわかるはず。

ガラガラ、ジャラジャ、と、坂道に入り、自然とその速度が上がっていく。

「ハル、やっぱり、速度落として、ウエルロットだとジャックナイフしちゃうと思うから」

「わかった、どう、どう……」

と、和泉が馬車の速度を落とす。

「ジャックナイフ？ なにそれ？」

馬車のうしろを歩いている秋葉蒼が質問を投げかけてくる。

「馬と荷車が真ん中でくの字に折れ曲がる現象のことだよ。坂道などで前の馬より後ろの荷車のほうが速くなっちゃうと起こる。で、くの字に折れ曲がる瞬間、馬には強烈な横Gがかかる、たぶん、ウエルロットの足はそれには耐えられない、折れると思う」

「へえ……、そんなのあるんだあ……」

と、秋葉は感心したように言う。

馬車の走る音がジャラジャラからガラガラに変わる。

ルビコン川に近づき、道が砂利道から石畳の道に変わったのだ。

ガラガラ、ガラガラと、木製の車輪が小気味いい音を立てる。

そして、ルビコン川に到着、その川に架かるブリッジ・オブ・エンパイアを渡る……、そのときに涼しげな風が私たちの前を横切る……。

そつと目を閉じ、風に前髪を遊ばせる……。

「いい風……」

思わずほころぶ。

「わああああー！」

「ナビー様ー！」

「みんなナビー様来たよー！」

「紙ふぶき、紙ふぶきー！」

そして、橋を渡りきったあたりで、ナスク村の子たちが駆け寄ってきて歓声を上げる。

ちなみに、ここでの彼らの集落も前と同じナスク村と呼ぶことになった。

なので、この子たちは、ナスク村の子供たち、ということになる。

「よーしー！」

いつも通り、馬車の中にある、細切れの新聞紙を一掴みし、

「そおれえー！」

と、後ろを走る子供たちの上に投げる。

すると、風に舞い上がり、綺麗な紙ふぶきとなる。

「わああああー！」

「きれいー！」

「すごおいー！」

子供たちが歓声を上げる。

「それ、それえー！」

と、私は細切れの新聞紙を投げ続ける。

「わああああー！」

「もつとおー！」

「雪みたいー！」

子供たちは大喜び。

そんなことをしている間に馬車は、ギーギー、という音を立てて止まる。

「着いたよ、ナビー」

「どうぞ」

と、夏目翼が馬車のドアを開けてくれる。

「ありがとうー！」

私は転がり落ちるように、狭いドアから外に出る。

「わあああ、ナビー様だあー！」

「ナビー様、ナビー様ー！」

子供たちが駆け寄ってくる。

「こら、こら、そんなにはしゃがないの！ そこ、走りまわらない、転

んじやうから！」

と、子供たちを注意する。

「もう、立派なお姉ちゃんだね」

笹雪めぐみが私をからかうように言う。

「もう、めぐみつたらあ」

と、私は少し頬を膨らませる。

「ああ、疲れた、これから買出しかあ……」

笹雪の後ろにいた雨宮ひらりが愚痴をこぼす。

ちなみに、さらにその後ろには佐野獺人の姿も見える。

そう、今日も狩猟班のみんなと来ている。

「立派になって来たねえ、ここも……」

雨宮が少し背伸びをしたあとにしみじみと話す。

「そうだねえ……」

笹雪が雨宮と同じ方向を見ながら返す。

私も彼女らが見ているほうを見る。

ここ、プラグマティッシュエ・ザンクツイオンも随分と大きくなった。

形は初期の円形状とは違い、三角形に近い形をしている。

それは、最初の市場の南側、ルビコン川とは反対側に太い道路を通

し、その両側に同じような円形状の広場を二つ設置したからだ。

大きさは、一辺が100メートル以上はあるだろうか、かなり広大

な広場に成長していた。

「そういえば、唯が言っていたけど、私たちがここに来てから、今日で

ちようど4ヶ月になるらしいよ？」

笹雪が言う唯とは参謀班の海老名唯のことだ。

参謀班にはカレンダー、曜日や祝祭日の管理もしてもらっている。

「へえ、まだ4ヶ月なんだあ……、もう、何年も、ここにいる感じがす

るよ……」

雨宮がそれに対して感想を述べる。

「そうなの！ たったの4ヶ月なのよ！ それなのに私たちの発展具

合と言ったら！ 4ヶ月でここまでくるとはね！ 自分たちでも

びつくりだよ！」

年もばらばらな子供たちが20人程はいるだろうか……、おそらく、この年代の子供たち、男女問わず、ほぼ全員がいるものと思われる。

「ここが子供たちの遊び場かあ……」

と、子供たちを見る。

「えい、やあー!」

「とお、りやあー!」

「せい、やあー!」

子供たちが木の枝から加工したと思われる木刀を一生懸命振っている。

「みんなあ、ナビー様、連れてきたよお!」

「連れてきたよお!」

私の手を引いていた女の子たち大きな声で言う。

「え、ナビー様?」

「ホントだ! ナビー様だあ!」

「わあああああ!」

と、子供たちが素振りを止め、歓声を上げて駆け寄ってくる。

「来てくれたんだ、すごおい!」

「本物だあ!」

「わあああああ!」

あつという間に取り囲まれる……。

「ナビー様、見てて、見てて、強くなったんだよ!」

と、小さな女の子が木刀を振り回す。

「うわ、やめて、やめて!」

「あたる、あたる!」

「きやあああ!」

周りの子供たちが逃げ惑う。

「こら、コイン」

と、年長の少女に頭をコツンとされる。

「てへ」

コインと呼ばれた子が舌を出して笑う。

「もう、コインたらあ！」

「ナビー様の前だからって、はりきらないの！」

「ごめんなさいい！」

と、みんなでじゃれあっている……。

「で、これは、なんなの、みんなでお稽古していたの……？」

そして、それを私に見せてどうするの……。

「えっとね」

「うんつとね」

「それはね」

子供たちが大人しくなり、互いに顔を見合わせる。

「あたしたちねえ」

「あれになるの」

「ナビー様の、あれ」

「なんだっけ、あれ？」

と、子供たちがひそひそと話し合う……。

「親衛隊」

「私たちはナビー様の、女神様の親衛隊だよ」

うしろの、少し離れたところいた二人組みの男女が言う。

年の頃は、12、3歳、この集団の中では最年長の部類だと思う。

その二人の手には他の子たちとは違う、ちゃんとした木刀が握られている。

「そう、親衛隊！」

「思い出した、親衛隊だよ！」

「フェインとタジンすごい！」

「女神様の！」

子供たちが盛り上がる。

「親衛隊？ 私？ なにそれ……？」
首を傾げる。

第109話 竜騎兵团

「さっ、ナビー様、こちら、こちら！」

と、子供たちに手を引かれて、木製の椅子の前に連れて行かれる。

「ここで、私たちの訓練の成果を見ててください！」

「うん、ありがと……」

しようがないので、その椅子に腰掛ける。

「おお……」

前後にぶらん、ぶらんする揺り椅子、ロッキングチェアみたいになっている……。

「ぶらん、ぶらん……」

ぶらん、ぶらんする。

「よし、じゃあ、みんな始めるよ！」

「気合入れていくぞー！」

と、あの最年長の、12、3歳くらいの二人組みの男女、確か、フェインとタジンと呼ばれていた子たちが、大きな声を出す。

「「おお！」」

「「頑張ろう！」」

そして、それに呼応して20人以上いる子たちが私の前に整列する。

横に5人、それが5列って感じかな。

「いくよ！ 1、2！ 1、2！ 1、2！」

「「1、2！ 1、2！ 1、2！」」

あの年長のフェインとかいう少女のかけ声で子供たちが一斉に素振り始める。

「「1、2！ 1、2！ 1、2！」」

一生懸命木刀を振っている……。

「ぶらん、ぶらん……」

私はその間、揺り椅子を前後に揺らしながら、さらに、足を交互にぶらん、ぶらんさせながら、子供たちの素振りを見守る。

「「1、2！ 1、2！ 1、2！」」

でも、なんだろうなあ、これ、剣道の素振りに近いか？ 一歩前に踏み込んで木刀を振り、終わったら一歩後ろに戻り、そして、また、一歩踏み出して木刀を振る、その繰り返し……。

「1、2！ 1、2！ 1、2！」

うん、ダイナミックで躍動感のある素振りだね。

「ぶらん、ぶらん……」

ぶらん、ぶらんしながら、それを見る。

「やめえい！」

フェインのかけ声で素振りが終わる。

「疲れたあ！」

「ふう……」

「いっぱい振ったね！」

「すごく、よかった！」

子供たちが口々に感想を言い合う。

「それで、どうでした？ 俺たちの實力は？」

と、最年長者のもう一人の男の子、タジンが目を輝かせて聞いてくる。

日に焼けた精悍な感じの子、大粒の汗を滴らせている。

「うん、いいよ、すごく強そうだったよ」

ぶらん、ぶらんしながら適当に褒めてあげる。

私は褒めて伸ばすタイプの指導者になったからね、鬼軍曹だったのは昔の話。

「ホントに、やったあ！」

「頑張った甲斐があったね、みんな！」

「うん、嬉しい！」

大盛り上がり。

「じゃあ、俺たちをナビー様の親衛隊にしてくれますか!？」

タジンが目を輝かせて聞いてくる。

「うん、いいよ、みんなは私の親衛隊だよ、ぶらん、ぶらん……」

ぶらん、ぶらんしながら言っただけ。

まあ、どうせ、子供のこっこ遊びだろうし、そのうち飽きるよ。

「やったあ！俺たち今日からナビー様の親衛隊だぜ！」
「うれしい！」

「すごい！本当になれると思わなかった！」
「頑張ったもんね！」

と、またまた大盛り上がり。

「じゃあさ、じゃあさ、ナビー様に決めてもらおうよ！」

「そうだ、親衛隊の名前！」

「まだ決まっていなかったんだ！」

と、子供たちが私の周りに集まってくる。

「ナビー様に親衛隊の名前を決めていただけなのです」

子供たちの代表で年長者のフェインが発言する。

「名前？　ぶらん、ぶらん……」

ぶらん、ぶらんしながら聞き返す。

「そうです……、候補が三つあって、どれにするかで揉めていたのです……」

「ふーん、どれとどれ？」

「まず一つ目が、決死隊……」

吹きそうになった。

「次に、斬り込み隊……」

う、うーん……。

「最後に、駆逐戦隊……、どれがよろしいでしょうか……？」

えっと、親衛隊でいいんじゃないのかな……、だって、決死隊とか
斬り込み隊、駆逐戦隊って別の役割を持つ部隊だよ、親衛隊のやること
じゃないよ……。

「俺は斬り込み隊がいい！そして、斬り込み隊長になるんだ！」

「ええ、決死隊だよ、絶対！」

「斬り込み隊とか決死隊ってダサイよ、時代は駆逐戦隊よ！」

と、揉めだし、最後には、

「「斬り込み隊！」」

「「決死隊！」」

「「駆逐戦隊！」」

と、大合唱が始まる。

「「斬り込み隊！」」

「「決死隊！」」

「「駆逐戦隊！」」

止まらない……。

「このお！」

「いてえ！」

男の子同士の喧嘩も始まる……。

「もう、やめなさい！」

「離れろ、離れろ！」

と、最年長の二人組み、フェインとタジンが喧嘩の仲裁をする。

「だから、ここはナビー様に決めてもらうの！」

「ナビー様、斬り込み隊、決死隊、駆逐戦隊、このうちどれが親衛隊の名前として相応しいでしょうか？」

さらに二人がそう言う。

「うーん……、そうね……」

私はぶらん、ぶらんするのをやめて少し考える。

「全部却下」

そして、そう言い放つ。

「ええ!？」

「そんなあ、なんで、なんで？」

「どうしてですか、みんなで一生懸命考えたのに!？」

「ナビー様、私たちのことがお嫌いですか？」

と、フェインとタジンだけではなく、他の子たちも詰め寄ってくる。

「それはね、みんな……」

私はそっと目を閉じる。

「斬り込み隊、決死隊、駆逐戦隊、それぞれとってもいい名前なの、どれかひとつを選ぶなんて私には出来ない……、それに、例えばどれかひとつを選んだとしても、やっぱり他がよかったって言う子も出てくる……、そしたらまた喧嘩になるよね、そうなるくらいなら最初から選ばないほうがいい……」

そうさとするように、ゆっくり優しく話す。

「じゃ、じゃあ、どうすれば……」

「もう他の名前なんて……」

みんなが顔を見合わせる。

「名前無しで、親衛隊のまま……?」

「やだよ、そんなの……」

「かっこ悪いよ……」

そして、小さな子たちが泣きそうになる。

「うん、だからね、私が名前を決めてあげるの」

目を開け、ぶらん、ぶらんを再開する。

「ナビー様が!」

「どんな、どんな!?!」

興味津々に聞いてくる。

さらに大きくぶらん、ぶらんして、

「どう!」

と、ブランコの要領で前に飛んで、ピタツと着地する。

「それはね……」

子供たちの真ん中で、一周ぐるっとみんなを見渡し、

「フアーイースト・ドラゴンニック・コア」

と、軽く笑顔を作り言い放つ。

「ふあー?」

「ふあーえい?」

「ふええーい?」

現地の言葉ではなく、そのままの言葉で言ったからうまく発音出来ないみたい。

「フアーイースト・ドラゴンニック・コア」

もう一度ゆっくり言っただけ。

「ふあーいーすと?」

「どらごんにつく?」

「こーあ?」

と、なんとか復唱する。

「どんな意味？」

なんて説明したらいいか……。

ファアーイーストは当然、極東、大昔、日本はファアーイーストって呼ばれていたよね。

で、この辺りも帝国から見たら東の果て、極東にあたる。

それを訳すと……。

「東の果ての竜騎兵团、って意味になるんだよ、えへ」

と、現地の言葉で意識してあげる。

「かつこいいい！ 竜騎兵团！」

「ファアーイースト・ドラゴンニック・コア！」

「すごく素敵な響き！」

「なんか、都会って感じがする！」

子供たちは大盛り上がり。

気に入ったみたい。

「よーし！ 俺たちは今日から、ファアーイースト・ドラゴンニック・

コアだ！」

「「おお!!」」

よかった、よかった……、と、私は揺り椅子のところに戻り、そして腰掛けて、再度ぶらん、ぶらんを始める。

「よーし！ 鍛錬だ！ 整列！」

「「おお!!」」

また素振りをするみたい。

「「1、2！ 1、2！ 1、2！」」

「「えい、やあ！ えい、やあ！ えい、やあ！」」

と、みんなで素振りを始める。

私はそれをぶらん、ぶらんしながら誇らしく眺める。

「「1、2！ 1、2！ 1、2！」」

「「えい、やあ！ えい、やあ！ えい、やあ！」」

ああ……、風通しも良くて、いい場所だなあ……、ぶらん、ぶらん……。

これからもたまにここに来よつと……。

風だろうか、奥の、森の中の草むらから、ガサゴソ、という音が聞えてくる。

いや、風ではないなあ……。

なんだろう、と、思いそちらに視線を送る。

下草、下枝が生い茂ってよく見えない……。

「きゃああああ!!」

と、その近くにいた子供が悲鳴を上げる。

「ここはどこだあ!!」

「おめえらは誰だあ!？」

「おい、こらあ!!」

森の中から男たちが飛び出してきた。

「きゃああああ!!」

「助けてえ!!」

その男たちを見て子供たちが逃げ惑う。

その姿は……、まるで落ち武者……。

ボロボロの鎧姿、至るところに血の滲んだ包帯を巻き、顔や身体は泥だらけ……。

数は5人ほど。

「さ、山賊だあ!!」

子供たちが、そう叫ぶ。

第110話 やがて帰り来む

森から飛び出してきた男は5人。

全員、ボロボロの格好だけど、ひと目でそれが鎧だとわかる。つまり、こいつらは、なんらかの武装集団だということ……。

「さ、山賊！」

その子供の言う通り、山賊の可能性がもつとも高い。

「た、助けてえ！」

「逃げろ！」

その山賊風の男たちを見て、子供たちが蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

「ちよつと、待てえい、こらあ!?!」

「聞きたいことがあるんだ！」

その男たちが子供たちを追いかけまわす。

「きやああああ！」

「怖い、怖い、怖い！」

子供たちが悲鳴を上げて逃げ惑う。

「た、助けて！」

「お、大人の人呼んでくる！」

と、一部の子たちが広場から駆け出しいく。

「だから、待てと言っているのがわからんのか、ガキどもがあ!?!」

「話を聞け、ぶち殺すぞ!?!」

男たちが広場から出ようとしている子供たちを阻止しようと、その背後から猛追する。

「ひひひひひひ!?!」

「やあああああ！」

子供たちが泣き叫ぶ。

「やめろ、山賊！」

その男たちの前に立ちはだかつたのは、

「タジン！」

そう、あの最年長の少年だ。

「おまえたちは行け、ここは俺にまかせろ」

手には立派な木刀がしつかりと握られている。

「なんだ、てめえはあ!？」

「そこをどけ、小僧!！」

「ぶっころすぞお!？」

と、山賊風の男たちがタジンを恫喝する。

「落ち着け、子供相手に熱くなるな、まずはここが目的の場所かどうか確かめるのが先だ」

男たちの中で一番年配と思われる男がそう話す。

「しかし……」

「でやああああ!!」

会話の途中でタジンが木刀を打ち込む。

その木刀は先頭の男の顔面を捉える。

「うがああああああ!？」

顔面を打たれた男が両手で顔を覆い、激しく痛がる。

「てめえ!？」

「ぶっころしてやる!!」

男たちが剣を抜こうとする。

「やめろ、穏便に済ませろ、俺たちは略奪に来たのではない」

と、また年配の男が仲間をさとす。

「くっそお」

剣の柄にかけた手を放す。

「ですが……」

と、顔面を打たれた男が言い、

「やろおおおう!!」

そう叫び、タジンの顔を思いっきり殴りつけた。

「きやあああ!」

「タジン!」

タジンは吹き飛ばされて地面の上に大の字に倒れる。

「素手ならいいんすよねえ? こいつにきっちり教育してやりますわ」

と、男が倒れているタジンの元に歩み寄る。

「ほどほどにな……」

年配の男もそれを容認する。

「タジン！」

最年長のもう一人の子、フェインがタジンに駆け寄ろうとする。

「くるな！」

タジンはそれを手で制する。

そして、ふらつく足取りで立ち上がろうし、手の甲で鼻や口元の血を拭う。

「くっ、まだだ……」

木刀を杖代わりにして、やっとの思いで立ち上がる……。

「た、タジン……」

フェインも両手を固く握り締めてその雄姿を見守る。

「お、俺は、ファーイースト・ドラゴニック・コアの団長だ……、山賊なんかには負けやしねえ……」

ふるふる、ふるふる、と、足が震えている。

「しようがないなあ……」

私はぶらん、ぶらんを止めて立ち上がる。

「なんだ、その目は、気に入られねえんだよ、クソガキがあ!!」

再度、男がタジンを殴ろうと、その拳を振り上げる。

「うっ!?!」

でも、その動きは止まる。

私が男の背後から、その振り上げた拳の手の甲の上に私の手を重ねたから。

「なっ!?!」

男は振り返り、私を確認しようとした瞬間、その手の甲を握り、内側にひねる。

「きっ!?!」

男は苦痛に顔を歪ませる。

そして、そのまま、軽く奥に押す。

「あっ!?!」

と、バランスを取ろうと瞬間に今度は逆、手前に思いっきり引つ張ってやる。

私は闘牛士が牛をいなすように半身になり、さらにそこから、足を出して、相手の足をひっかけてやる。

「あぎやああ!？」

すると、男はズザーと顔面から地面に勢いよくダイブする。

「子供に手を上げるのはやめてもらえるかなあ?」

ダイブしたそいつを見下ろしながら言ってる。

「こ、こいつ!？」

「な、なにをした!？」

と、他の男たちが柄に手をかけ叫ぶ。

「ああ、やめておけよ、剣を抜いたら殺す、マジで」

一応、子供相手に武器は使わないで手加減してくれたから、私のほうも忠告してあげる。

でも、剣を抜いたらそこまで、全力で殺しに行く。

「ぐぬぬぬ……」

男たちが剣を抜く姿勢のまま私を睨みつける。

「そ、そこまで、そこまでえ!」

「お待ちください、ナギ様、誤解です!」

と、広場にナスク村の大人たちが乱入してくる。

うしろには子供たちもいるから、その彼らが呼んできたのだろう。

「ヴェロン!」

ナスク村の村長を見て、あの年配の山賊風の男が叫ぶ。

「ドレン!」

と、村長も返す。

「知り合いだったの……?」

私は村長のほうに歩きながら尋ねる。

「はい、ドレンは、西の、ノディロス村の村長です……、その彼がどうしてここに、それにこの格好は……」

と、村長が話す。

「ここにヴェロンがいるということは、ここなのだな、ここに間違いな

「はい、逃げ出すのが精一杯だったと言っている、ぷーん」と、通訳のエシユリンがうなづく。

今は、救護活動も一段落して、何があつたのかの事情聴取をしているところだ。

出席者は班長の6人と、通訳のエシユリン、それとナスク村の村長ヴェロン、そして、今日訪れた他の村の人々の代表、ノデイロス村の村長ドレンとメティス村の副村長エスタレンの計10人がここに集まっている。

「うちの村に来たのは悪魔のような男だった……、鋭利な細長い剣を二本持ち、無言で村人を斬り殺し始めた……、恐ろしい……、本当に恐ろしい男だった……」

「ああ、うちも同じだ、黒ずくめの男で、武器は違う、長斧だった、そいつが凄まじい速度で村人たちの頭を叩き割って行った……」

ドレスとエスタレンが身震いしながら話す。

うん、あいつの仕業だ。

サテリネアス・ラインヴァイス・ザトー。

帝国の先帝様だ。

あれをやらせたのはわしじゃ！ とか言って高笑いしている姿が目に見えかねた……。

「やったのは誰かわかっている……」

「ああ、帝国軍の連中だ、村の周りを帝国軍の兵士がうろちよろしているのを見たやつも大勢いるし、生き残りをどこかに連れて行ったって話もある」

「許せない、帝国軍……、他の村も襲われたそうだ……」

「ああ、テルベア村もクシュー村もやられた、他の村もどうなっているか……」

ドレンが苦笑に満ちた表情で話す。

「ちよつと待って、どうして、帝国軍が彼らの村を襲うの？ 一応、領地民とか、そういうのじゃなかったの？ 納税とかしていたみたいだし」

と、女性班の班長、徳永美衣子が疑問を呈する。

「遊びだよ、徳永、見た限り、あいつらは遊びで殺人を楽しんでいる……」

それに対して、狩猟班の班長、和泉春月が静かに答える。

「そうそう、和泉は決闘での傷も癒えて班長に復帰していた。」

一方、人見彰吾のほうは今だに謹慎中……、東園寺は復帰しろと言っているけど、本人は固辞している。

最近は何やら、ヒンデンブルクの飛行船に入り浸っているし、このまま班長を辞めるつもりなのかもしれない……。

「遊びで人殺しをするの……、そんなのって……」

「なんとかならないのかしら……、人道的な問題もあるけど、それ以上に難民が押し寄せてきたら大変、対応のしようがない……、今日の十数人だけでもどれほど大変だったことか……」

と、参謀班の班長代理、綾原雫が溜息混じりに話す。

「戦おう……、その準備は出来ている……」

ドレンがポツリと話す。

「ノデイロス村、メティス村、テルベア村、クシユー村、各村の生き残りの戦士たちがぞくぞくと集結しています」

エスタレンも追随する。

「俺たちは、ここに、援軍の要請に来た、敵がどこにいるかもわかってる、あの帝国の前線基地、リープトヘルム砦だ」

「一緒に戦ってくださいー！」

「共にー！」

「このままでは、皆殺しにされるのを待っただけだ！」

「家族が捕虜として捕らえられているかもしれない、それに賭けたいのですー！」

と、ドレンとエスタレンの二人が強い口調で言い、勢いよく立ち上がる。

「やっぱりな……、そういう流れになるよね……」

私はエシユリンの通訳を聞きながら、カップの水に口つける。

第111話 叛旗

戦争ね……。

心情的には賛成だよ。

あの、ラインヴァイス帝国の先帝、サテリネアス・ラインヴァイス・ザトーは始末しておいたほうがいい、あの凶悪さはいずれ大きな災いとなる。

それに、あいつが持つ首飾り、あのヒンデンブルクのネックレスも危険、破壊するなり回収するなりしたい。

でも、だからと言って、いきなり戦争とはならないよね……。

交易の準備もしているし……。

「死んでいった家族や仲間たちのためにも、どうかお力をお貸しくださいー！」

「いずれ、ここも攻め込まれますぞ!」

彼らは必死に私たちの説得を試みる。

そうだね、ザトーは信用ならないね……、と、カップの水をひと口飲む。

でも……。

「心中、察するに余りある……」

と、東園寺が重い口を開く。

「だが、あなた方に手を貸すことはできない、帝国と戦火を交えるつもりは毛頭ない」

きっぱりと否定する。

「帝国は我々にとつての貿易相手国、最低限の礼節を持って接するつもり、戦うべき相手ではない、申し訳ないがこの話は聞かなかつたということで、我々も他言はいたしません、それと、すぐには申しませんが、怪我の具合が良くなり次第、速やかにラグナロクからの退去をお願いします……」

と、交渉は終りとばかりに東園寺が席を立つ。

そうだろうね、その判断で間違いないよ。

「そ、そんな、話が違うぞ!」

「この方々は帝国を圧倒する力を持ち、必ずや我々に勝利をもたらす、神のような存在ではなかったのか!？」

エシユリンから通訳を聞き、それでも尚食い下がる。

「帝国と戦いましょう、ここで戦わなければ何もかもお終いです!」

「我々もこの一戦にすべてを懸けます、帝国のやつらに目にももの見せてやります!」

と、大きな声で喚き立てる。

東園寺は立ったまま、彼らの言葉を黙って聞いている。

「だ、だから、このままでは、いずれ皆殺しにされる、まだ砦は出来たばかり、兵も少ない、今しかないのです……、帝国を叩くなら今なのです!」

東園寺に向かって言葉を送りつける。

「ほう……、帝国と戦う……? 帝国を叩く……? それは聞き捨てならないな……」

それは、東園寺の口から発せられたものではなく、また、言葉も日本語ではなく、現地のものであった。

そして、その声は、室内からではなく、扉の外から聞えた。

「どらああああ!!」

と、誰かが豪快に扉を蹴り破って入ってきた。

「ひっ」

と、私はびっくりして身をすくめる。

「よお、小娘、貴様等も、話は聞かせてもらったぞ」

室内に入ってきたのは……、プレートアーマーに赤いクロークを身に纏う、短く刈った金髪に日に焼けたちよつと角ばった顔をした好青年って感じの男……。

この男は帝国軍の将校、

「シエイカー・グリウム」

私がそう言うと、やつはにやりと笑う。

「なんで、帝国軍がここにいるんだ!」

「な、なに、なんなの、この人、誰なの!」

「おまえは、あの時の!」

みんなが一斉に叫び、立ち上がる。

見ると、シエイカー・グリウムはひとりではなかった、その後ろにも帝国軍らしき人影が二つあり、さらにその後ろには見慣れた人影が……。

「山本、おまえか、おまえが帝国軍を引き入れたのか!？」

東園寺の言う通り、その人影は生活班の山本新一だった。

「え? え? 帝国軍? いや、知らないけど、どつかの村の人だとばかり、言葉もわからないし、とりあえず、ここに連れてくればなんかわかるかなって……」

と、山本は必死に言い訳をする。

「ちっ、話を聞かれた、生かして返すな」

「ああ、東園寺、仕方ない、俺が殺る」

と、和泉が剣の柄に手をかける。

「待て、待て、物騒なやつらだな、野蛮人どもめ、俺たちは同盟相手ではなかったのか?」

と、シエイカー・グリウムは剣を抜こうとしている東園寺たちを手で制する。

「なんと言っているんだ、エシユリン!？」

「戦う意思はない、仲間だ、と言っている、ぷーん」

東園寺の質問にエシユリンが答える。

「なに、仲間、本当か!？」

「隙を作って逃げ出すつもりなんじゃないのか!？」

「おい、小娘、落ち着けと言ってやれ、話にならん……」

東園寺たちの狼狽ぶりを見て、シエイカー・グリウムが呆れたような口調で言う。

でも、普通、焦るでしょ、帝国と穏便にやり過ごせると思った矢先なんだから……。

「あんだ、何しに来たの……?」

真意を測りかねて、そう尋ねる。

「その前に、そいつらを落ち着かせろ、話している途中に斬りかかられたらかなわん」

彼を見つめる……。

「わかったわ……、公彦、ハル、座って、とりあえずは戦いに来たのではないみたい、何か話があるみたい」

と、東園寺たちに伝える。

「大丈夫か、逃げないか？」

尚も和泉が疑うけど、

「逃げるつもりなら、最初から入って来ないから……」

と、言っただけ。

「座って、みんなも……」

壁を背にして固まっている徳永たちにも言う。

「そちら様も座って……、新一、椅子とお茶を出して差し上げて」

「あ、ああ……、なんか、ごめん、俺のせいで……」

と、山本が謝りながらも私の指示に従って、壁に立てかけてある椅子を出して並べてくれる。

「すまん……」

シエイカー・グリウムをはじめとする帝国の人間、三人が椅子に腰掛ける。

「それにしても、帝国に叛旗を翻す相談をしていたとはな、正直驚いたぞ……」

彼が出されたお茶に口をつけて、

「まっず、なんだ、これ……」

と、言い、顔をしかめる……。

「それで、私たちをどうするつもり、シエイカー・グリウムさん？」

私もお茶に口をつけて尋ねる。

うん、まずい、玉露だね、よくわかんないけど……。

「そう、身構えるな、我々も貴様等と思いをひとつにしている……」

「はあ？ 思いをひとつに？」

「そうだ、先帝はやりすぎた、我々の、帝国軍の反感を買った……」

真っ直ぐに私の目を見て話す。

「殺そう、暗殺しよう、先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトーを、我々も手を貸そう、どうだ、小娘、貴様等も、やるだろ？」

と、私やみんなを見る。

「な、なんの、提案なんだ、いったい……」

「やめてよ、罠だよ、絶対……、私たちの忠誠心とかそういうのを試しているんだよ、たぶん……」

「ああ、俺もそう思う、罠だ……、戦闘になったら魔法を使わざるを得ない、それを狙っているんだよ、あのじいさんは……」

みんなが顔を見合わせ、口々に言い合う。

「意見が割れているようだな……」

と、シエイカー・グリウムの隣の席の男が言葉を発する。

「おそらく、暗殺成功時の自らの処遇、立場の心配をしているのだろう……」

そして、その男が深々と被ったフードに手をかけ、それを後ろに下ろす。

「心配をするな、私が貴様等の後ろ盾になってやろう……」

綺麗に整えられた黒髪とあご髭、傲慢そうな顔立ちの貴族然とした男だった。

「誰……?」

目を細めてやつを見やる。

「帝国辺境伯、ダイロス・シヤムシエイド閣下であらせられる」

と、シエイカー・グリウムが大きな声で誇らしげに言う。

「きゅー、厄介な……」

私は目頭を押さえる。

「貴様等も知つての通り、あの老人は狂っている……」

ダイロス・シヤムシエイドが話し出す。

「調査は終わっている、あのリープトヘルム砦では、昼夜を問わず、死の宴が行われている、それも、この辺りの村々の人々を使ってな……、潜入した者の話では、拷問に近い、惨たらしい殺され方をされるらしい……」

「じゃあ、俺たちの家族も殺されたって言うのか!」

ドレンが叫び、立ち上がり。

「たぶん……、まだ殺されてなくとも、いずれは殺される、生きてあ

の砦を出ることはない……」

「そ、そんなあ……」

と、力なく、椅子に崩れ落ちる。

「気の毒だが、それで終りではない、まだまだ続く、殺した分だけ、近隣の村々から補充する……、際限なくな……、あの老人はそこまでやるよ……、もちろん、貴様等も……」

と、私たちを見る。

「つまり、それが嫌なら戦えと……?」

溜息混じりに聞き返す。

「そうだ、このままだと、貴様等は全員死ぬ……、確実にな……」

ダイロス・シヤムシェイドがそう断言する。

「それで、私たちがザトーを暗殺して、あなたたちにはどんなメリットがあるの?」

それを聞いておかなければならない。

「ない……、が、これは武人としての矜持である。やつは罪無き者を殺しすぎた、その治世において、100万は下るまい……、そして、その権力の座を降りて尚、殺し続けている……、見過ごすわけには行かない……」

そこで言葉を切り、立ち上がる。

「やつの命を奪う、それが命を奪われた者への手向けだ、やつに天寿を全うされては、我々人類全体の汚点となる、やつは人の手によって殺されなくてはならないのだ」

静かだけど、強く、決意を込めた口調で言う。

第112話 烈火爽来

ダイロス・シヤムシェイドの言葉に室内は静まりかえる。

「もちろん、ただで殺してくれとは言わん、成功の暁には、最大限の謝意によって報いよう、貴様等が結ばされたであろう、不平等条約を解消し、対等で公平な取引が出来るよう、再度条約を結び直す、手を貸してくれた他の村々も同じだ、これからは自由に取引を行ってもらって結構だ、関税も取り払う、帝国が何か言っても問題ない、なしろ貴様等の後ろ盾はこの私になるのだからな」

と、みんなを見渡しながら話す。

「おお……、なんと……」

「そんな、夢のような……、我々100年の悲願が……」

ドレンとエスタレンが言葉を漏らす。

「やる気になったようだな、貴様等……、で、兵力はいくらある？」

と、シェイカー・グリウムがにやりと笑い、ドレンたちに問いかける。

「えっと、それは……」

「200……、いや、300は出せます！」

ドレンがエスタレンと顔を見合わせたあとに答える。

「足らんなあ、少ない、レポートヘルム砦には1000からの兵士がいるし、さらに、手練の剣闘士もうじゃうじゃいやる……」

「1000、我々からも1000の軍勢を出そう、それでなんとかしてくれ、指揮はグリウム、卿が執ってくれ」

「はっ」

と、シェイカー・グリウムとダイロス・シヤムシェイドが話す。

「おお、ありがとうございます、伯爵様……」

「こ、これで、勝てるかもしれない……」

ドレンとエスタレンが感動して涙を滲ませる。

「ちよつと待ってよ、なんか知らないけど、なんで、戦うことになったの？ やだよ、そんなの、反対だからね」

徳永がエシユリンからの通訳を聞き、異議を唱える。

「ああ、戦うとは一言もいっていない、もし、戦うとしたら、魔法をフルで使わなければ危ない、使えば、帝国に魔法の存在がばれる、そうならば、和泉の頑張りも水の泡だ……、ああ、この会話は通訳しなくていいぞ、エシユリン、こっちの話だ」

と、東園寺が通訳しようとするエシユリンを止める。

「はい、ぷーん」

エシユリンは通訳をやめ、椅子に座り直し、カップを手に取り、それに口をつける。

「でもさ……、チャンスなんじゃないの、これって……？」

福井が口を開く。

「不平等条約解消に、関税撤廃、しかも、軍事的に辺境伯の後ろ盾付き……、こないいいことって他にあるの？」

みんなが福井の顔を見る。

そして、沈黙が続く、みんな迷っているのだ……。

そう、これは大きなエサだ……。

しかも、露骨に釣り針が見えているエサだ……、ダイロス・シヤムシエイドはなんだかんだ理由を付けているけど、これは高い確率でただの権力闘争だ、それに巻き込まれる危険性がある……。

「俺の頑張りなんて、どうでもいい……、ナビー、キミが言っていたよね、あのザトーという男の人となりを？」

と、和泉が話す。

彼には闘技会中のザトーとの会話の内容は全部話してある。

「俺も、伯爵様の意見と同じだよ、あの男は生かしておいてはならない、殺すべきだと思う……」

和泉が手をかけたサンパイオやその後処刑されたであろうジョルカに思いを馳せているんだと思う。

「戦いたいのか、和泉……？」

東園寺が再度聞き直す。

「ああ、東園寺」

と、強くうなずく。

「それに、捕虜も大勢捕らえられているんでしょ？ その中にナスク

村の人たちもいるかもしれない、その人たちを救出できれば、プラグマティツシエ・ザンクツイオンの身寄りがない人の退去も大分進むと思う」

と、綾原がもう一つ利点を言う。

「いいことづくめね……、戦争で誰も死ななければね……」

徳永が少し怒った口調で言う。

「反対か、徳永は……？」

「いいえ、誰も死なないなら賛成よ、死ぬなら反対」

東園寺の質問に彼女が答える。

「なら、少数精鋭、腕の確かな者だけを連れていく……、そうだな、人見にも来てもらおうか……」

東園寺が綾原をちらりと見て言う。

彼女は無言で軽くうなづく。

なんか、戦う流れになっっているけど……、こいつら大丈夫なのか？
ダイロス・シヤムシエイドは私たちを利用する気満々だけど……。
それよりも、誰か怪我しないか心配だなあ……、私も行きたいなあ……。

ついでにザトーのネットワークレスも回収しておきたいなあ……。

なんか、着いて行く理由はないかなあ……。

と、思案を巡らす。

「数の上では同数だが……、こちらが城攻めだ、やはり三倍の兵力はほしい……」

「夜襲をかけてみてはどうでしょうか？」

「こちらはシエイカー・グリウムたちの会話だ。

「おお、いいアイデアだ」

「さらに、闇夜に紛れて砦に忍び込んで門の鍵を開けるといえるのは？」

すでに戦闘の話し合いが始まっているもよう。

「どうやってだ、見張りがうじゃうじゃいるだろう、何しろ、先帝陛下が滞在しているのだから、それこそ、空でも飛ばんと不可能だ」

「そ、そうですね……、空でも飛ばないと無理ですよね……」

空でも飛ばないと無理……。

空を飛ぶ……。

シャペル……。

そう、ヒンデブルク広場の飛行船の中にいるロボット。

「あいつ、空、飛べるんだよなあ、飛べちゃうんだよなあ……」

よし、決めた。

「はい、はい！ はい、はい！」

私は元気よく手を挙げる。

「でも、腕が確かなのって、誰と誰になるの？」

「俺と和泉、それと佐野と人見、秋葉も使える……」

と、東園寺たちが私を無視して話し続ける。

「はい、はい！ はい、はい！」

必死に発言の機会を求める。

「空が飛べたらなあ、いいよな、鳥は、空が飛べて……」

「いいっすね、鳥……」

シエイカー・グリウムたちも私を無視して作戦会議を続けている。

くっ、ちつくしよう……。

「はい、はい！ はい、はい！ はい、はい！ はあいつてばああああ!!」

もう、飛び上がって自己主張してやる！

「なんだ、どうしたんだ、この小娘は……」

「わかった、わかった、なんだ、ナビーフイユリナ……」

やっと、みんなが私に注目してくれる。

「えっとねえ……、飛べるの、私、お空、えへへ……」

と、二ヶ国語で両方に言っただけ。

「どう反応したらいいんだろうな……」

シエイカー・グリウムが頭をかく。

「飛べるだど……？ それを詳しく聞かせてくれ」

東園寺はシエイカー・グリウムと違って、半信半疑ながらも真面目な表情で話を聞いてくれる。

「そう、飛べるの、あの子、ヒンデブルクの飛行船の中にいるロボット、シャペルがね！ それでみんなを運んでもらえばいいよ、そして、シエイカー・グリウムたちが話してた作戦を実行するのは、彼らが夜襲

をかけて、その隙に私たちが上空から砦内に潜入して門の鍵を開けて、仲間を中に引き入れて制圧するの、これで被害は最小限に抑えられるはずだよ！」

そして、私は運転手のふりをしてついて行って、こっそり出撃、ザトーを始末して、あのネックレスを回収するの。

「ほ、本当か……?」

「うん、たぶん、数人くらいだったら、乗せて飛べると思うよ！」

と、笑顔で答える。

「空からの奇襲か、俺たちの少数精鋭作戦と合致する……」

「ああ、俺たちはあくまでも陽動、倒される危険性は低くなる……」

と、和泉と東園寺が話す。

「それが本当だとしたら、画期的だな、空から砦に潜入する……、やつらも予想だにしていまい……、必ずや成功することだろう……」

今度は、辺境伯ダイロス・シヤムシエイドが感心したように言う。

「さすがだな、貴様等なら何かやるだろうとは思っていたが、まさか、空を飛ぶとはな……、期待以上だ……」

シエイカー・グリウムもそれに追隨する。

「それでは……」

と、ダイロス・シヤムシエイドが立ち上がる。

「作戦開始は明後日、深夜とする！」

彼がそう宣言する。

「あ、あさって、そんなに、すぐ……?」

私は聞き返す。

「そうだ、早いほうがよい、時間が経てば、それだけ被害も増える、ちようど、明後日にリープトヘルム砦からの使者が来るのであろう?」

そう、条約の細かな取り決めを詰めるためにマジョーライたちがここにやってくる。

「ならば、都合がよい、そいつらが訪問している時を狙う、やつらもまさか交渉中に砦が攻められるとは思うまい」

「交渉団を捕らえてしまえ、なんなら殺しても構わん、それが開戦の合図だ」

シエイカー・グリウムがにやりと笑う。

「こんな早く兵隊を用意出来るということは、前もって準備していたの？ 私たちの返答を待たずに？」

その手はずのよさに疑問を口にする。

「そうだ、明後日やることは決定していた、先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトーは必ず殺す、貴様等がこの話に乗ろうと乗るまいとな……、成功率を少しでも上げたいがために、貴様等にも話を振った、どうだ、悪い話ではないだろう？ 見返りは十分過ぎるほどあるはずだ」

なるほどね……。

みんなの顔を見る……。

それぞれが無言でうなづく。

こうして、私たちは、先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトー暗殺作戦に参加することになった。

第113話 闇夜に

そして、決行の日。

太陽は空高く登り、私たちの真上に輝く。

「きた、きた……」

馬が四頭、こちら、プラグマティツシエ・ザンクツイオンに歩いてくる。

先頭の馬に騎乗するのは、白い肌、長いグレーの髪の毛の整った顔立ちをした男、不死者マジョーライ。

そう、私たちにはリープトヘルム砦に向かう前にやることがある。

「ようこそいらっしやいましたあ」

「いらっしやいましたあ」

と、みんなで小さな帝国の国旗を振りながらにこやかに出迎える。

「お出迎え、感謝する……」

と、私たちの前に着くなり即座に馬を降り、礼を言う。

「いいところですね」

「ええ、緑豊かで……」

「いやあ、空気がうまい」

うしろの副官たちも馬を降りながら口々に感想を言い合う。

「馬はどちらへ？」

副官の一人が言う。

それをエシユリンが通訳して伝える。

「うひひ、こちらで……」

と、巨体の佐野獏人がにこやかな表情で彼らに近づいていく。

「ああ、どうも、よろしく、お願い……」

副官のその言葉は途中で止まる。

「ごえっ!？」

そう、次の瞬間、彼は宙に舞っていた。

佐野の強烈な右フックを受けて、軽く十数メートルは吹っ飛んでいった。

「なっ!？」

と、隣の副官が声を上げるけど、そこまで、返す刀の左フックで、ま
たもや宙を舞い、十数メートル先の石畳の上に頭から落ちる。

「貴様等あ、裏切ったなあ!？」

と、最後の副官が剣を抜くけど、その瞬間に上から打ち下ろしのス
トレート、それをまともに受け、強烈に地面に叩き付けられて動かな
くなる。

「ぶしゅー、ぶしゅー……」

佐野の口の端、両側から煙が出る……。

つくづく化け物だな……、こいつは……、と、内心呆れてしまう。

「どういうつもりだ、貴様等……？ まさか、帝国と戦争をするつもり
ではあるまいな……？」

マジョーライが動かなくなった副官たちを見ながら静かな口調で
話す。

「残念ながら、そのまさかだ……」

東園寺も静かな口調で返す。

「愚か、愚か過ぎる……、これほどのマヌケがこの世に存在すると思わ
なかった、見誤ったわ……、帝国の底力を、帝国の恐ろしさを知らん
とわ……」

マジョーライは目を伏せ、軽く溜息をつく。

「それで、ラインヴァイス帝国の正使である私をどうするつもりなの
だ？ 殺すのか？」

目を伏せたまま質問する。

「いや、貴様は生かしておく、何かの取引に使えるかもしれん」

東園寺のこの言葉はただの脅迫、佐野が殴り倒した副官は生きてい
る、事前に手加減しろと言っているからね。

そして、捕らえた彼らは、辺境伯ダイロス・シヤムシエイドに引き
渡す手はずになっている。

「大人しく、武装解除をしてもらおうか……」

東園寺が剣を渡せという意味で手を差し出す。

「ふっ、逃げようとしても無駄のようだな……」

と、マジョーライが周囲を見渡したあとに言い、腰の剣を帯革ごと

外す。

「さあ、受け取れ」

そして、その剣を東園寺に渡そうとする瞬間、そのまま空高く放り投げる。

周囲を守っていた佐野や秋葉、管理班の面々が放り投げられて剣を目で追ってしまふ。

マジョーライはそれを確認して、身体を沈め、低い姿勢でみんなの横を走り抜けようとする……。けど……。ここには私もいるんだよ……。

そんなものは想定済み、私もよくやるからね。

私はやつに向かい、大きく二歩、三歩と飛び、間合いを合わせて、そして、

「たあー！」

と、低い姿勢で駆け抜けるマジョーライの顔面を思いつき蹴り上げる。

「あがつ!？」

やつは血しぶきを上げて空を舞い、仰向けで背中から石畳の上に叩きつけられる。

「うほ、うほ、ごほ、ごほ、げほ、げほ！」

マジョーライは石畳の上を転がり回って痛がる。

「信じられん、いったい、なにが……」

ひとしきり痛がったあと、大量に出血する鼻や口元を押さえながら私を見上げる。

「手加減してやった、次、逃げようとしたら、今度こそ殺すからね」

そう言い、やつを見下ろす。

「ふふ、ふふ……。おまえか……。前任も言っていたが、ホント、強いな、呆れるほどにな……」

と、口元を押さええて笑う。

「捕らえろ！　また逃げ出すかもしれん！」

「うつす！」

「おう、公彦さん！」

意味は通じているはず。

「嫌だったら、無理しなくていいからね……」

「ピポロポ……」

じつと私の顔を見る。

「よし、行こう！」

シャペルの手を両手で掴んで引っ張る。

「こっちだよー！」

「ピポロポ！」

ギー、ギー、と、錆びついた音を立てながら私のあとに続く。

「ありがとう、シャペル」

大人しく着いて来てくれるシャペルに、軽く振り返りお礼を言う。

「ピポロップ！」

「あはっ」

どういたしまして、だって。

勾配のきついスロープを抜けて外に出る。

外は暗く、また月も出ていない。

さらさら、さらさら、と、草花が風に揺らされる葉音が聞える。

遠くの山々は日が沈んだばかりとあって微かに白ずみ、その山頂の形を浮かび上がらせていた。

時間は19時ちょうど。

作戦開始まであと1時間。

「これが、シャペルかあ……」

「私、初めて見たよ」

「あら、かわいい、ナビーちゃんがロボットの手を引いてきたよ」

と、見送りに来てくれたみんなが口々に言ってくる。

「いまさら疑うのもなんだけど、本当に飛べるのか、それ……？」

と、出撃メンバーの一人である秋葉蒼が口を開く。

「その点に関しては俺が保障する、十分な魔力を観測できている」

人見彰吾がそうフォローしてくれる。

彼も出撃メンバーの一人。

「じゃあ、どうする？ もう行く？ ああ、佐野、その辺に降ろしてく

れ」

和泉と佐野も出撃メンバー。

「うい」

と、佐野が抱えていた大きな荷物を地面に降ろす。

ドスン、と、地面が揺れる……。

それは非常に大きく、重い物……、長さ3メートル、横幅2メートルくらいはあるだろうか……。

そう、これはゴンドラ、みんなをこれに乗せて、上からシャベルで吊る。

「怖えな……」

と、秋葉がゴンドラの強度を確かめる。

確かに怖いだろうね、昨日、今日で急いで作ったものだから、当然、テストもなんにもしていない。

「では、準備を始めろ」

と、最後の出撃メンバーである東園寺公彦がみんなに指示を出す。

「おう」

「へーい」

みんなが準備に取り掛かる。

まず、太いロープでゴンドラとシャベルを連結する。

私は白クマのリュックサックから革の手袋を取り出し、それを両手にはめる。

そして、魔法のネットクレスを外し、チェーンを革の手袋の上からぐるぐる巻きにして、最後にペンダント部分を手の平で握る。

たぶん、これで熱くなっても大丈夫だと思う。

本当は私もなにか鎧を着用したかったけど、私に合うサイズの鎧なんてここにはなかった。

なので、私はいつもの白いワンピース姿で参加することにした。

「では、乗り込め！」

と、準備が終わったのか、東園寺がそう指示を出す。

佐野、和泉、人見、秋葉の順番に乗り込み、それを確認してから、東園寺が最後にゴンドラに乗り込む。

「では、ナビーフイユリナ、やってくれ」

彼がゴンドラの中から言う。

私は軽くうなずき、シャペルの傍に行く。

そして、彼の胸の辺り、あのバーコードのような模様が描かれた辺りに手を当て、そつと、呪文を唱える……、

「ピュアフサージ、ヘヴンリー・ヴァルキリア」
と。

シャペルの身体の中が光り、鉄板のつなぎ目からその光り漏れ輝く。

「ピポロポツ、ピポロポツ！」

と、頭を回転させたり、くるくる回して見せたりする。

そして、その長い両腕を水平に広げる。

その広げた腕から、ぱさー、と、白い翼が伸び、ふわりと舞う。

「わああああ」

「すごいーいー！」

と、見送りのみんなから歓声が上がる。

「よし」

私はシャペルの首にジャンプして飛びつき、そこから身体を横向きにして、勢いをつけて、逆上がりの要領でくるつと一回転して、そのまま、肩車のような格好で座る。

私はゴンドラには乗らない、だって、運転手だからね。

「しゃがんで、シャペル」

「ピポロポ！」

シャペルがしゃがむ。

私は地面に突き刺さっているドラゴン・プレツシャーを引き抜き、そのまま肩に担ぐ。

「よし、じゃあ、いこっか！」

「ピポロポ！」

シャペルはゆっくりと上昇していく。

それに吊られたゴンドラもまた、闇夜に舞い上がる。

「じゃあ、行ってくるねえ！」

見送りのみんなに手を振る。

「ご武運を!!」

「生きて帰って来いよ、絶対だぞ!!」

「また怪我して戻ってきたら許さないからね!!」

「ああ、ナビー、危ないことしちや駄目だからね!!」

と、みんなが大きく手を振りながら言ってくれる。

下のゴンドラでも東園寺たちが手を振り返している。

「ありがと、みんな、行ってくるね……」

そして、私たちは出撃する。

第114話 乱殺

ゴンドラを吊るしたシャペルは闇夜を飛ぶ。

音はしない。

静かに飛翔する。

私はシャペルの背中に乗り、全身で風を受ける。

長い金髪が風になびく。

でも、それほど強い風ではない、ゴンドラを繋ぐロープの強度に自信がないので、極力低速で移動しているからだ。

リープトヘルム砦まで約40キロ、1時間近く飛行してその手前の集合場所付近に到着した。

私たちは周囲を見渡す。

下は暗く、目印が何一つない……。

私や、ゴンドラのみんなが必死に目を凝らして友軍を探す。

あくまでも私たちは補助、戦争の主役は砦を正面から攻める彼らなのだ。

私たちは敵が友軍と戦っている隙を付いて、上空から砦内に潜入して、そして、門を開けて、砦内に味方を引き入れるのが主な役割。

なので、彼ら、友軍が戦端を開き、激しく戦ってくれないことには何もできない。

「シャペル、もっとゆっくり……」

「ピポポ」

この辺にいますと思われる……。

だって、もう数キロ先にはリープトヘルム砦の明かりが見えるのだから。

「いた、いた、あれだ」

速度が落ち、風の音が止んだおかげでゴンドラ内でなされている会話が聞き取れるようになる。

わずかな星明りの下、うごめくように動く集団が目に入る。

「あれか……」

近づくと、ドドドド、という、大量の馬のひずめの音も聞えてくる。

数は、近隣の村々からの参加者を含め、およそ1400人、かなりの大軍団になっていた。

「こうして見ると、すげえ数だな……」

と、秋葉が感嘆の言葉を漏らす。

地上で、パンツ、という音がして、小さな閃光が走る。

ゴンドラからも同じような音がして小さく光る。

お互い合図をしたのだろう。

「ナビーフイユリナ、位置は確認した、少し上昇して距離を取ってくれ！」

「はあい！ シェペル、上昇！」

「ピポポ！」

東園寺の指示に従い、シャペルの高度を上げる。

上空50メートル程度。

友軍の最後尾に付け、同じ速度であとを追う。

やがて、攻撃目標であるリープトヘルム砦の1キロ手前まで来たところまで全軍停止する。

数分間の沈黙……。

そして、先頭の騎馬、おそらく、シェイカー・グリウムであろう人物が全軍に対して大きく手を挙げる。

すると……、

「うわっ」

「くっ」

光りが爆発した。

その光りを避けようと、みんなが顔を背けたり、手をかざしたりする。

「な、なによ……」

友軍全体が光っている……。

ほぼ全員がこうこうと燃える松明を手にしていた。

暗闇に慣れすぎて、その明かりに目が眩んだのだ……。

「突撃!!」

そして、あの先頭の、シェイカー・グリウムらしき男が砦に向かっ

て手を振り下ろす。

「わあああああ!!」

「おおおおお!!」

と、それを合図に、約1400人に兵士たちがリプトルヘルム砦に突撃していく。

「始まったか、これでよかったのだろうか……」

「ふっ、後悔か？ らしくないな、東園寺」

「後悔くらいするさ、いや、いつもしつぱなしだ、いつもその決断に自信がない……」

「今、それを言うか？ 随分弱気だな」

ゴンドラの東園寺と人見の会話が聞こえてくる。

「確かに、今、言うべきことではないな……、ナビーフイユリナ！ 砦の真上に移動してくれ、機を見て降下する！」

と、東園寺が大きな声で言う。

「はあい！ シャペル、あっちー！」

私はリプトルヘルムの方角を指し示す。

「ピポポ！」

すぐに、シャペルが反応して砦の方角に飛んでくれる。

「わあああああ!!」

「おおおおお!!」

地上では弓矢や投槍での撃ち合いが始まっている。

当然だけど、敵は砦の外に出ようとはしない。

反対に友軍は防御壁の上から煮えた油などを落とされることを予想して、無理には近づかない。

そのような理由から両陣営ともに距離を取り合つての撃ち合いとなっていた。

しかも、かなりの距離があり、激しく撃ち合っているように見えて、実は双方ともに被害は少ない。

「撃て、撃て、撃ちまくれ！」

「絶対に近づけるな！」

「そんなのいいから、おまえ等も撃て！」

「全員呼べ、いいか、全員だ！」

防御壁の上から必死に応戦しようとしている敵兵の叫びだ。

彼らの言動から突撃破碎射撃をしているようにも見える。

突撃破碎射撃とは、城や要塞、砦などが敵に攻められ、占領されそうになったときに、上官の命令やそれまでの任務を全部放棄して、ただ目の前の敵と死ぬ気で戦い、これを撃退する……、という軍隊の最終手段のことを言う。

つまり、指揮系統が崩壊しているということの意味する……。

「素人か、こいつら……」

緒戦でそれをする意味がわからない。

でも、敵が混乱しているのは好都合、私たちの作戦がやりやすくなる。

「さらに混乱させてやれ」

東園寺も私と同じことを考えているのか、冷静にそう指示する。

「やるか、防衛陣行くぞ、アンシヤル・アシユル・アレクト、七層光輝の鉄槌、赤き聖衣を纏いし深淵の主、エア、エンリタ、エシルス、舞い降りろ、死の女神、フォーレル・ザ・アルテミス光輝の流星陣」

人見の魔法により、私たちの身体が一瞬赤く光る。

「ぶしゅー、ぶしゅー、今度は手加減しないでいいんすよね、東園寺さん？」

佐野が不気味な口調で話す。

「ああ、好きなだけ暴れる、俺が許す」

「うひ、了解、じゃあ、リミッター外しますわあ……、おうらああああああ!!」

と、大きなかけ声とともに佐野がゴンドラから飛び降りる。

「きゃっー」

佐野が手すりを蹴って飛び降りたせいで、ゴンドラが激しく揺れる。

「うおおおおおお!!」

佐野が着地、ドンツ、という轟音が響き渡り、砕けた石畳の破片が周囲に飛び散り、同時に砂煙も舞い、佐野の姿が見えなくなる。

「あいつすげえな、おい……」

秋葉が下を見ながら苦笑いする。

「な、なんだ、なにがあつた!？」

「わかんない、何かが爆発した!？」

「投石機、カタパルトか、聞いてないぞ、そんなのあるなんて!？」

敵兵は佐野が空から降つてきたのを理解できずにその周辺を右往左往する。

「うおおおおおお!!」

雄叫びとともに、砂煙をぶち破りやつがその姿をあらわす。

敵兵に肉薄し、武器は使わず、その拳を振り上げて、そして打ち抜く。

鉄製のヘルムが激しくひしゃげ、中から大量の血を噴き出しながら空を飛ぶ。

「な、なんだあ!？」

「なにかいるぞ!？」

「ひい、化け物、化け物お!!」

一瞬で恐慌状態になる。

「うがああああああ!!」

今度は拳ではなく、背中に担いだ巨大な鉄槌を引き抜き、それを振り回す。

「うわああああああ!!」

運悪く近くにいた敵兵数人が頭や脇腹を殴打され絶命する。

「ひい、ひいひい」

「あう、あう……」

運良く助かった敵兵は腰を抜かし、その場にへたり込む。

「おらああああああ!!」

佐野はめちやくちやに巨大な鉄槌を振り回し続け、敵を葬り続ける。

「佐野と戦わなければならぬ敵兵に同情するよ……」

それほどやつは圧倒的に強かつた。

強大な鈍い光を発する黒い鉄槌……。

あの気の毒な剣闘士、和泉に倒されたボルベン・サンパイオ、その彼が持っていた武器とタイプは同じだけど、その大きさが違う、ヘッドの大きさがサンパイオのそれより二周りほど大きい、さらに柄の部分も太く長い、2メートルくらいある。

そして、その鉄槌を振り回す様が両者では決定的に違うところがある……。

それはパワー。

サンパイオは鉄槌を振り回す度に、そのヘッドの重量に振り回されるように一歩か二歩くらいよろけてしまっていたけど、佐野は違う、その巨大な鉄槌をまるで小枝でも振るようになんげと振り回し、よろけることもなく、軸も安定、ピタリと止まる、さらに間髪入れずに次撃に移行することも可能。

「ひ、ひいい!!」

「助けて、助けてえええ!!」

「援軍の、援軍の要請を!!」

敵兵が逃げ惑う。

「おうらああああああ!!」

「おげああ!」

「がえええ!」

それを背後から鉄槌で叩き潰す。

瞬く間に死体の山が出来上がる……。

「獲物がいなくなる、俺たちも行くか、ハル?」

秋葉が軽くストレッツチしながら言う。

「ああ、行こう、蒼」

和泉もそう答える。

「お先! ヒヤッホー!」

秋葉がゴンドラから飛び降り、頭からダイブしていく。

「それじゃ、俺も……、ナビー、助かったよ、ありがとう!」

と、言い、秋葉と同じように和泉もゴンドラからダイブしていく。

「頼もしいというか、なんとというか、血気盛んなやつらだ、狩猟班の連中は……」

人見が彼らを見送りながら言う。

「俺たちも行こう、和泉たちが戦場をかき回している隙に正門のカギを開ける、見取図は頭に入っているな？」

「当然……、和泉たち三人は常時モニターしておく、必要とあらばいつでも連絡が取れる」

と、人見が人差し指でメガネを直す。

「よし、わかった、では、出撃する！ ナビーフィユリナ！ おまえはこのままラグナロクに帰還しろ、我々は作戦が終了し次第、ナスク村の方々とともに徒歩にて帰還する！ 送迎、ご苦労だった!!」

「はあい」

私が東園寺の言葉に返事をして軽く手を振る。

「それじゃ、ナビー、行ってくるよ」

人見は優しく微笑みながら言ってくる。

「はあい、いってらっしゃあい」

と、同じように手を振る。

東園寺と人見がゴンドラから下にダイブしていく。

私は下を覗き込んで彼らが砦内に着地したのを確認する。

「やてと……」

顔を上げる。

私が大人しくラグナロクに帰るわけないよね……。

第115話 飛翔

上空で彼ら、5人の戦いを見守り、下に降りるタイミングを見計らう。

「シャペル、もっと高度を上げて、旋回して、みんなに見つからないようにね」

「ピポポ」

少し高度を上げる。

100メートルくらいの高さだろうか、砦全体が視界に入るようになる。

砦の中央、中庭付近では相変わらず佐野獺人が暴れている。

そして、その佐野の近くには和泉春月の姿も見える。

基本、佐野が敵と戦い、和泉はサポート、漏れた敵を叩く、そういう役割だろうか、二人が連携して敵に対処しているのが上からでも見て取れた。

「秋葉はどこ行った？」

見当たらない。

三人で協力して戦ったほうがいいと思うけど……。

「いた」

彼がいる場所は塔の上、それも、この砦内でもっと高い見張り台の上にあった。

その高所から十字二本弦の弓で敵を狙う。

「彼は生粋のスナイパーね……」

敵が下から攻めてきたら逃げ場のない高所……、普通の兵士ならば避ける。

でも、彼は迷わず高所を取りに行った。

それはスナイパーの本能……、戦場でもっとも高い場所から放たれる一撃は強烈、戦況すら左右する。

風を鋭く切れく矢は敵を貫く。

「強いな……」

秋葉の戦いぶりを見て、そうつぶやく。

私の評価では和泉、佐野、東園寺、人見、の順で並び、そこから少し差をあげられて秋葉という感じになっている。

別に秋葉が弱いというわけではない、その証拠に秋葉の次は参謀班の南条か管理班の鷹丸になると思うけど、その二人と比べて圧倒的に、大差をつけて秋葉のほうが強い。

上位四人の影に隠れて目立たないだけで、彼もまた天才の一人なのだ……。

「どこだ、どこから撃ってくるんだ!？」

「あつちだ、あの上から!!」

当然、敵はそのスナイパーの存在に気付き、排除に乗り出す。

「見張り台の上か、どうやって登ったんだ!？」

「カギだ、誰か、カギを持ってこい!!」

カギがかかっている入れないみたいで、兵士たちが扉を蹴りつけて破壊しようとしている。

「くそっ、開かねえ!!」

「カギはまだか!!」

でも、鉄の扉はそう簡単には破壊できない。

そうこうしているうちに、秋葉がいる見張り台の下には数十人の敵兵で埋め尽くされる。

「しょうがないなあ……」

あいつら全員が扉を開けて登って行ったら対処のしようがない。

私は立ち上がり、シャペルの背中に立つ。

「それじゃ、いつてくるね、シャペル」

「ピポポ」

「シャペルは飛行船に帰っていいよ、ごめんね、無理させて」

「ピポポ」

「そう」

無理してないよ、だって。

「よし」

砦に背を向けて立つ。

そして、両手を広げて、ドラゴン・プレッシャーを水平にかざす。

そのままうしろに倒れて行き、完全に仰向けになった状態で、軽くポーン、と、シャペルを蹴って宙に飛ぶ。

ふわり、と、感じる浮遊感……。

闇夜の空が見える……。

薄曇りなのか、星々の明かりは弱い……。

「ピポポ」

ふふ、いってらっしゃい、だって。

「いってくるね」

その瞬間、ドーン、と、急激に落下していく。

シャペルの姿が見る見る小さくなっていく。

そこから角度を付け、頭を真下にする。

さらに落下速度が上がる。

風切り音とワンピースが風にはためく音が重なる。

「あつたぞお、カギだああ!!」

真下からそんな声が聞こえてくる。

若い兵士が嬉しそうにカギの束を掴んで見張り台のほうに走って行く姿が見える。

「おお、あつたかあ!」

「よーし、これで、上に登れる!」

「目にももの見せてやる!」

「ぶっ殺してやる!」

と、敵兵たちが大盛り上がり。

「よーし、開けろ!」

「早くしろ!」

「ちよつと待って、待って、あれ、どれだ……?」

若い兵士が束の中から見張り台のカギを探す。

「なんだ、なんだ、どうした?」

「早く、早く!」

「逃げられるだろ!」

「いや、だから、どれがここのカギだか……」

ひとつずつカギ穴に差し込んで確かめる。

「なにやってんだあ！」

「いい俺がやる、邪魔だ、どけろ！」

と、中年の兵士が若い兵士からカギの束を奪い取る。

ちようどよく、私がそこに落下していく。

「くそお、どれだ、どれだあ!?!」

と、背中を丸めてカギを探す。

私は身体を反転させ、足からその中年の兵士の上、丸めた背中の上に着地する。

ドゴーン、と、すごい音がした。

「ひっ!?!」

「あぎやつ!?!」

「うへ!?!」

と、周囲の敵兵どもが驚き、尻餅をつく。

「よお、楽しそうだな、何かの祭りか? 私も混ぜろよ」

下敷きになり、うつ伏せに倒れている中年の兵士の背中から降りながら言う。

「なんだ、なにが起きた……?」

「さっきと同じだ、また空から人が……」

「ば、化け物か……」

「そ、そんな、空から女の子が……」

敵兵どもが口々に言う。

私は大剣、ドラゴン・プレッシャーを石畳に突き立て、その柄から手を放す。

「熱くなってるかな……」

と、革の手袋の中にあるネックレスを見る。

厚手の手袋なので、その熱は感じない……。

「大丈夫か……」

と、再度ネックレスを握り締める。

「ぶ、武器から手を放したぞ、降参か……?」

「いや、相手は化け物、どんな手を使うかわからんぞ」

敵兵どもの武器を構え、じりじりと私を包囲していく。

ちょうど、私のうしろには見張り台の入り口、鉄製の扉があり、それを背にする格好になっている。

ちらりと、うしろを見て、距離を確認する。

「1メートルくらいか……」

私は扉の前、1メートルほどのところに立つ。

「まあ、いいや、かかってこいよ」

と、敵兵どもを見て、軽く笑ってやる。

数は……、30人くらいいるだろうか……。

警戒して中々かかってこない。

「よいしょつと……」

白クマのリユックサックを背負い直す。

「く、くそお！」

と、勇敢な若い兵士が剣を振り上げる。

「ひとりかよ……」

私はドラゴン・プレッシャーの柄を握り、そのまま真横になぎ払う。

「げべつ!」

と、まともに大剣を脇腹に受け、プレートアーマーはひしやげ、そのまま数メートル飛んで、べちゃりと石壁に叩き付けられる。

横に払ったドラゴン・プレッシャーを石畳に突き刺し手を放す。

「なんて、鋭い太刀筋なんだ……」

「見えなかったぞ……」

「あんな大剣を軽々と……」

ひゆん、ひゆん、と、見張り台の上から音がする。

矢の音ではないな、石か、スリングショットをやっているな、秋葉

……。

「なあんだ、気に入ってるんじゃないか」

上を見上げて、ちよつと笑ってしまう。

「味方が次々と狙撃されている……」

「くそお……、上のやつをなんとかしないとジリ貧だぞ……」

「一斉にだ、一斉にかかれ！ あの大剣では小回りも利くまい！」

前にも聞いた台詞だな……。

そうそう、前任のマジョーライが言っていた言葉だ。

「いくぞおお!!」

「「おおおお!!」」

と、最前列の10人くらいが一斉にかかってくる。

「でも……」

わずかな動き、フェイクとフェイント、防御と無防備、それを個別に10人の兵士、全員に食らわす。

それぞれの足並みが乱れる、前に出るやつ、速度を緩めるやつ、姿勢を下げるやつ、身体を上げて飛ぼうとするやつ、ばらばらの動きになっっていく。

そして……。

横一線。

ドラゴン・プレッシャーを真横に一発払う。

すると、10人すべてに時間差で、まるで大剣の刃に吸い込まれるように次々とヒットしていく。

「げあ?」

「おげあ!」

「おごう」

と、悲鳴と鎧がひしやげる音が轟き、10人の兵士が同時に宙を舞い、そのまま石壁に叩き付けられる。

「ドラゴン・プレッシャー・キリング・フィールド……」

それがこの技の名よ……。

「ひ、ひいいい……」

「う、うそだろ……」

石壁に付着した大量の血と、その下の10人の無残な死体を見て敵兵共が後ずさる。

「ひ、ひいいい、逃げろ、化け物だ!」

「人間の勝てる相手じゃない!」

「殺されるぞ!」

「俺たちはこんな化け物と戦うためにここに来たんじゃない!」

戦意喪失、敵兵どもが我先にと逃げ出していく。

中には手にした武器を放り出して逃げる者までいた。
「こんなものか……」
逃げる敵兵は追わずにその場で静観する。

第116話 セイレイ

辺りは静かになり、見張り台の周囲から人の気配が消える。遙か上空、見張り台の上からは秋葉蒼によるスリングショットによる風切り音が時折響く。

よく考えて見ると……、下から敵兵が殺到しても、秋葉なら見張り台から飛び降りて逃げることも可能だよね……。

と、見張り台を見上げる。

「うん、無駄なことをした……」

ここはもういい、本来の作戦に戻る。

私の目的は先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトーの暗殺唯一つ。

やつを倒してヒンデンブルクのネックレスを回収すること。

とりあえず……。

「たあー」

と、ドラゴン・プレッシャーを振り、見張り台の扉を叩き斬る。

鉄製の扉は真つ二つになり、周囲の石壁とともに奥に倒れて砂煙を上げる。

「下に降りる階段は……、ある……」

当然だよな、建物内からも行けるはずだよ。

でなければ不便。

私は見張り台の中に入り、秋葉のいる上層ではなく、その反対の下層へと向かい階段を駆け下りていく。

壁にかけてあるランプの灯りが私の影を作り、それをゆらゆらと揺らす。

やがて、下に降りる階段はなくなり、広い通路に出る。

ぴちやり、ぴちやり、と、水の滴る音が聞えてくる。

「地下か……」

石畳の床も濡れている。

「うーん……」

人の気配もなく、無警戒に天井や壁などを観察しながら歩く。

なんだろうなあ、ここ……、ランプの他には天井や壁など吊り下げられた錆び付いた鎖が幾本も見える。

「禍々しい拷問器具みたい……」

それが私の感想。

「うう、うう……」

「あ、ああ、ああ……」

なんか、小さくてよく聞き取れないけど、各部屋からうめき声みたいなのがするんだけど……。

ゾツとする。

「うん、ここ違う、ザトーはいない、ここは牢屋とか拷問部屋とか、そんな類のところだよ」

と、私は探索を止め、振り返り、そのまま元来た通路を戻ろうとする。

でも、せつかく来たんだから……。

「たあー」

と、扉の一つをドラゴン・プレッシャーで叩き斬る。

一応、牢屋か拷問部屋か、それとも別の何かなのか、それを確かめてからにしよう。

「誰かいる？」

一声かけてから中に入る。

中にはランプなどの照明器具は一切ない。

開け放たれた入り口から明かりが差し込むのみ。

床は石畳ではない、もちろん木でもない……、素材は鉄……、格子状になっている鉄の床、グレーチングになっている……。

そのグレーチング、鉄格子の下からは水の流れるような音も聞えてくる……。

「なんだ、ここ……」

私は目を凝らして鉄格子の下を見ようとする。

でも、真っ暗で何も見えない……。

「うーん……」

諦めて顔を上げる。

そして、正面を見る。

「おや……」

そこには鎖に繋がれ壁にもたれ掛かるように座る人の姿があった。座るといふより、半分寝ているような状態、たぶん、鎖が短くてそれ以上横になれないんだと思う。

それよりも、その人物に見覚えがあった。

「おまえ……」

ぼさぼさの長い銀髪、ぼろぼろのベージュ色の服、でも、肌は透きとおるように白い……、とても美しい女性だということがそれだけでわかる。

「笑わせんなよ」

クスリと笑ってしまう。

私の声を聞き、その女性がうつすらと目を開ける。

鋭く、切れ長の目が私を視界に捉える。

「おまえ、皆殺しのジョルカだろ？ なにやってんだ、こんなところで？」

そう、それは、あの和泉春月と熱戦を繰り広げた剣闘士、皆殺しのジョルカだった。

「あ……」

私を視認して、わずかにうめく。

「ああ……」

今度は身をよじり、繋がれた鎖がじやらじやらと音を立てる。

「ああ、水か……」

と、私は背負いつていた白クマのリュックサックを下ろし、中から水の入ったペットボトルを取り出す。

「飲めるか？」

そして、蓋を開けて彼女の口元に運ぶ。

「あ、あ、あ……」

と、ジョルカに水を飲ませる。

「あんまり一気に飲むなよ、口の中を湿らす程度にな……」
少しずつ飲ませる。

「こんなものか……」

ペットボトルに蓋をして白クマのリュックサックに片付ける。

「ありがとう……、生き返った……」

ジヨルカが小さくお礼を言う。

「それで、おまえほどの優秀な剣闘士がこんなところで何やってるの？ まさか、懲罰？」

白クマのリュックサックを背負いながら尋ねる。

「ここが懲罰房に見えるのか……、そんな生易しいところではないよ、ここは……、死ぬまでここに繋がれ、死んだら下に流される、そんな場所さ……」

鉄格子の下の水の流れる音を聞く。

「ふーん……、もったいないね……、おまえほどの剣闘士が……、よいしょと……」

白クマのリュックサックを背負い直す。

「いや、ただの廃棄だ……、もう戦うつもりなどない、疲れた……、今まで100人以上と戦った……、もう嫌だ……、私は、もう、誰も戦いたくない、無意味な戦闘なんて、もう、したくない……」

ジヨルカがうなだれる。

「ふーん……」

彼女を見下ろす。

「水をくれたついでに、もうひとつ我俣を言っていていいかな……？」

「うん？ なあに？」

「その大剣が欲しい、その大剣を私の首に突き立ててもらえないかな……？」

殺せつてことか……。

「頼む……」

消え入りそうな声でお願いをする。

かわいいそうだな……。

私は壁に立てかけて置いたドラゴン・プレッシャーを手に取り構える。

「ありがとう……」

それをちらりと見たジオルカがお礼を言う。

そして、ドラゴン・プレツシャーを振り下ろし、ジャリン、ジャリン、と、ジオルカを繋ぐ鎖を切つてやる。

すると、支えを失った彼女はその場に崩れ落ちる。

「く……」

ジオルカは手で支え、なんとか起き上がろうとする。

「逃げろと言うのか……、お優しい限りで……、あの男と同じだな、殺してくれたほうが何倍も楽なのに……、私は剣闘士以外の生き方を知らない……、その剣闘士を止めた今、同時に生きる意味も失った……、同情は無意味よ……」

鉄格子は滑りやすく、支えた手が滑り、額から鉄格子の上に倒れる。

「く……」

それでも、もう一度手で支え身体を起こそうとする。

「生きる意味ね……」

ドラゴン・プレツシャーを彼女の首元に当て、そこから少し手首を返し、剣の腹を頬に当て、そのまま顔を私のほうに向かせる。

彼女が真つ直ぐ私を見上げる。

鷹のような鋭い目、でも、綺麗な澄んだブルーの瞳をしている……、救いを求める目だな、私にはそう感じた。

「おまえに生きる意味をくれてやる……、これからは私のためだけに生きろ、何も考えるな、私のためだけに戦え、死ぬときも、私のためだけに死ね、おまえが生きる戦場も、死に場所も、そのすべてを私にくれてやる」

彼女の目からポロリと涙が零れ落ちる。

おまえが求めているものはそれだろ？ おまえが望むものをくれてやる。

「御意……、仰せのままに……」

そう言い、目を閉じるとさらにポロポロと涙が零れ落ちる。

こんなものか……。

ドラゴン・プレツシャーを引き、そのまま肩に担ぐ。

彼女は目を閉じ、両手を胸の前で固く握り、静かに涙を流す。

「それにしても……」

と、涙を流す彼女を見る。

これって、もしかして、和泉がやるべき仕事だったんじゃないのかな……。

もし、私より先に和泉がここに来ていたら、すごい感動的な再会になっていたよね……。

たぶん、色々ドラマが始まったよ……、命を懸けて戦った仲間だから、和泉なんて再戦を誓っていたし……。

ああ、やばい、とつちやったかも……、和泉に恨まれる……。

と、ドラゴン・プレツシャーの峰を肩の上でポンポンしながら考える。

「主よ、御名は……」

思索していると彼女が私の名前を聞いてくる。

「ナビーフイユリナ・ファラウエイ、その名を胸に刻め」

すつと、目を細めて言ってる。

「御意……」

彼女が力強くうなづく。

「ジョルカ……」

「はい、ファラウエイ様……」

「皆殺しのジョルカ……、縁起が悪いな……、名を変えよう」

「はい……、なんといたしましょう……」

「うーん」

ちよつと考える。

「セイレイ」

銀色の髪が精霊みたいに綺麗だから。

「今日から、セイレイ、と、名乗れ」

「御意……」

彼女に名を授ける。

第117話 超常

カチャ、カチャ、と、音を立て、セイレイが壁にかけてあったカギを使い、自分にかけてられた手錠を外す。

その彼女を無言で見守る。

迷いや不安が消え、気力が回復したのか、先程と比べて足取りもしつかりし、普通に動けるようになっていた。

ガチャリ、と、外した手錠を鉄格子の上に落とす。

手錠がされていた手首を触り骨折などはないか確かめる。

そして、小さくうなずく。

大丈夫みたい。

「じゃあ、どこかで着替えるか……、ボロボロの服もそうだし、そのボサボサの髪や汚れた顔もなんとかしたいでしょ？」

独房を出ながら、セイレイにそう提案する。

「どこかない？ 詳しいでしょ？」

さらに肩越しに尋ねる。

「どこと、申されましても……、剣闘の控え室ならば、一通り揃っているかと……」

「よし、そこに行こう！ で、どっち？」

「はい、ファラウェイ様、こちらです」

と、セイレイが私を追い抜き、先頭を歩き出す。

「案内よろしく」

そのあとに続く。

寒々とした石造りの通路を歩く。

敵兵とは出会わない……。

ぴちやり、ぴちやり、と、水の滴り落ちる音が響く……。

遠くからは、戦闘の声だろうか、悲鳴や怒号がかすかに届く。

そして、何度か階段を昇り降りしていると目的の場所に到着する。

「では、こちらへ……」

セイレイの先導で控え室に入っていく。

この前のように、闘技場側からではなく、おそらく裏口だろう、そ

こから中に入る。

控え室は広く、ずらりと武器や鎧が立ち並ぶ。

「じゃあ、さっそく着替えて、急いでね、時間がないから」

「はい、フアラウエイ様」

彼女がボロボロの服を脱ぎ捨て、棚からタオルを取り、それを洗面台の水で濡らし、汚れた顔や身体を拭いていく。

その間、私は置いてある武器類を見て回る。

「バスタードソード、ロングソード、クレイモア……」

名称、呼び名は違うだろうけど、私の記憶にある武器の形状と照らし合わせて、それに近い名前を口ずさんでいく。

「ジャベリン、パイク、トライデント、バルディッシュ、ハルバード……」

どこの世界でも、その戦闘の要素を考えると同じような形状の武器が作られる……。

「ガストラフェデス、クレインクインクロスボウ……」

見たことのない、用途が想像出来ない武器などひとつ足りともない。

「フルプレートアーマー、キュイラツサーアーマー、チエーンメイル……」

鎧も同じ、デザインは違えど、その用途は容易に想像がつく。

「まだかな……」

と、セイレイがほうに視線を移す。

彼女は綺麗に髪を整え、今は白い、清潔そうなシャツに袖を通しているとこだった。

「やっぱり綺麗な子だね……」

長い銀髪が艶やかに光る。

そして、シャツやズボン類の内着を着たあと、黒いレザーメイルを手に取り、それを装備していく。

紐が多く、着用するのに時間がかかる……。

「「わあああああ!!」」

そのとき、外から大勢の兵士たちの叫び声が聞えてくる。

「「おおおおおおお!!」」

それは建物が揺れるくらい大きな雄叫びだった。
天井から埃が落ちてくる……。

「ああ、そっか、公彦たちがやったのか……」

そう、おそらく、正門も開放に成功した。

これは友軍が雪崩を打って砦内に突入してくる音だ。

「急がないと」

友軍より早く、先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトーを見つけてなければならぬ。

「セイレイ、まだ?」

「ただいま……」

彼女が急いで鎧を着込む。

「そうそう、ザトーの居場知ってる?」

「いえ、詳しくは……、奥の居住区だとは思いますが、伺ったことはないので……」

セイレイがそう答える。

「そっか……」

まあ、一番奥にいるだろうね、ああいうやつは常に暗殺の心配をしているだろうから。

「整いました」

と、セイレイが鞘に収められたバスタードソードを帯革に差し込みながら言う。

黒一色のレザーメイルに銀色の鞘、ヘルムは被らず、綺麗な銀髪を軽く結び、背中におろす。

「うん、綺麗な上に強そうだ」

彼女の立ち姿に満足してうなずく。

「「わあああああ!!」」

「「おおおおお!!」」

カタカタ、カタカタ、と、装備類が置いてある棚が揺れる……。

それだけで、激しい戦闘が繰り広げられているのがわかる。

「セイレイ、とりあえず、その居住区とやらに案内して」

まず、そこから搜索を始めよう。

「はい、ファラウエイ様、こちらです」

と、セイレイが入ってきた扉とは逆の方角に向かう。

そこは大きな出入り口……。

そう、ここは剣闘士の入場口だ。

暗い通路の先に明かりが見える……。

カツカツ、と、早歩きで進み、光の先に出る。

石畳の通路から砂の地面に変わる。

すぐに明るさに目が慣れる。

目に入るのは、サンドイエローの砂の地面と広大な闘技場。

直径30メートルほどの円形状、その石壁にはずらり松明が並び、闘技場全体を明るく照らす。

砂の上を歩くと、キュツキュ、と、新雪のような音が出る……。

キュツキュ、キュツキュ、と、砂に言わせながら進み、闘技場の中

央付近までくる。

「ふおつふおつふお、誰かと思いきや、いつぞやの小娘ではないかあ……、賊というのは貴様らだったのかあ……」

静まり返る闘技場内にその声が響き渡る。

声の方角を見る。

そこは豪華な観覧席、そして、その中央には大きな金色の椅子……、それに深く腰掛けるは、

「先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトー」

まさか、こんなに早く出会えるとは……。

「何しに来おった、わしの部屋に……」

「ここが、おまえの部屋かよ」

思わず笑ってしまった。

「いい趣味してんな、闘技場が自室だなんてな……、自室にひきこもつて、毎日、毎日、殺し合いの観戦かあ、いいご身分だなあ……?」

私は方向転換し、やつに向かい歩きます。

「おお? 小娘のうしろに控えておるのは、皆殺しのジオルカではないか、おぬし、寝返ったのか?」

ザトーがセイレイの存在に気付き言う。

「はい、先帝陛下……、今はジョルカではなく、セイレイと名乗っております……、ファラウエイ様よりこの名を賜りました……」

セイレイが恭しく答える。

「ふおつふおつふお、わしがおまえに与えた名、ジョルカは気に入らなんだか、そうか、そうか」

「私のセイレイにジョルカなんて気色悪い名前付けたのおまえかよ」

「強そうじゃろ？ 一流の剣闘士の名に相応しかろうて」

殺してやる……。

はやる気持ちを抑えて、ゆっくりとやつに向かい歩く。

「ほほう……、まさか、わしとやる気なのか……、小娘の分際で、このわしと……？」

ザトーがギロリと私を見る。

「お相手願えるかなあ、じじい……」

その目を真っ直ぐに捉えてニヤリと笑って見せる。

「ファラウエイ様……」

うしろのセイレイが口を開く。

「お気を付けて、先帝はお強い……、私を知る限り最強の剣闘士、その不思議な力、超常の力の前には誰も太刀打ち出来ません……」

「知っている」

あのヒンデンブルクのネックレスだろう？

それを回収しに来た。

「小娘、その肩に担いでいる、ごっついのも、それが貴様の得物か？」

ザトーが顎で私のドラゴン・プレツシャーを指し示す。

「そうだけど？」

やつに向かい、ゆっくり歩きながら答える。

「やはり、貴様もまた超常の力の使い手か……、どっこらしよつと……」

と、言い、やつはその豪華な椅子から立ち上がる。

手には黄金の鞘に収まった剣が握られている。

「やるか、小娘……」

そして、その剣を前に出し、鞘から剣を引き抜く。

「ああ、じじい、どこからでもいい、かかってこいよ……」
やつに殺意を向ける。

「なめおつて、小娘が……、わしを誰だと思っておる、身のほどを知れ、小娘がああああああ!!? ぶつ殺すぞ、あああああああ!!?」

ザトーが目を剥き、泡を噴きながら叫ぶ。

「なめてんのは、てめえだろうがあ、クソじじい!!? だけえ声出せばびびると思っくんじやねえぞ、このやろうおお!!?」

と、怒鳴り返してやる。

「くそがあああああ!!」

と、ザトーが抜いた鞘を乱暴に放り投げる。

「うおおおおおお!!」

やつが雄叫びを上げ、そして、

「ドース! イース! アース! ボース! ベース! ダース!

ビース! ニース!」

と、何かを唱えた。

「ドーーーーーッ!!」

その声とともに地面を蹴る、それも凄まじい速度で。

蹴り足から砂煙が巻き起こり、やつの身体が宙を舞う。

「な、に……?」

私は空を見上げる。

天井近く、上空10メートル以上の場所を飛んで行く。

やつのブルーの法衣が風にはためく……。

「魔法か……?」

さらにザトーは私を飛び越え、

「どらあああああ!!」

と、闘技場の真ん中に着地する。

「やるぞ、小娘、最強の剣闘士の實力、とくと見せてやるぞおお!!」

鬼の形相で叫ぶ。

間違いない魔法だ……。

しかも、やつの剣、赤く光っている……、あれも、ヒンデンブルク

の魔法の剣だ……。

第118話 ザトー

先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトーが魔法を使った。それは私たちと同種の魔法なのか、それとも違うのか……。

いや、おそらくは同種のものだろう。

それは、やつが持つ、魔法のネックレス及び赤く光る剣、その二つがヒンデブルクの魔法具であることからわかる。

それらが同種なのに、魔法だけが別種などということは考え辛い。砂をキュツ、と、踏み込み、振り返り、闘技場の中央にいるザトーに向き直る。

「ふおっふおっふお、これを見ても驚かんようじゃのう？ 小娘にとつては普通のことじゃったかのう？」

ザトーが首にかけている魔法のネックレスの元の所有者、50年前にいたという女剣闘士、そいつが魔法を使っている、それをやつが見様見真似でやっている、という可能性が一番高いか……。

私はザトーに向かいながら、足元の砂を見ながら思案を巡らす。

「ふおっふおっふお、それとも、驚きすぎて、声も出ないのかのう？ どっちなのじゃ、小娘？」

そもそも、なぜ、その女剣闘士が魔法を使っていたのか？

そいつはヒンデブルクの生き残りだったんじゃないのか？

なら、ザトーが唱えた呪文が、ヒンデブルクの言葉の正式な発音になるんじゃないのか？

「どうした、小娘……、何か話せ、寂しいではないか……」

疑問は尽きない……、どうする、ザトーを殺さないで、情報を引き出すか？

「うーん……」

と、額に手を当てて目を閉じる。

ザトーが唱えた呪文……、なんて言った……？ ドース、イース、

モース、チース？ そんな感じだったけど、はっきり憶えていない……。

「わあああああ!!」

「「おおおおおおお!!」」

と、上から聞える怒号が大きくなり、時折天井から埃が降ってくる。「ふおっふおっふお、随分元気が良いようじゃのう、小娘をぶち殺したあと、皆殺しにしてやるわい」

ザトーが天井を見上げながら楽しそうに話す。

でも、こいつは生かしておく気にはならないなあ……。

辺境伯ダイロス・シャムシエイドがザトーはその治世において100万の人間を虐殺したとか言ってたけど、為政者なんてそんなもの、よくあることだから……。

私が気に入らないのは、あのかわいそうな剣闘士、ボルベン・サンパイオについてのみ。

私はね、部下を大事にしない上官が死ぬほど嫌いなものよ、上官というのは、部下がその実力を十分に発揮出来るように力を尽くすもの。それが出来ない上官に生きる資格はない。

「ザトー、おまえに生きる資格はねえんだよ……」

こいつは殺す。

顔を上げ、力強く足を踏み出す。

一歩、一歩、歩きたびに砂煙が上がる。

「ほほう……、それが小娘、貴様の本気か……、ただ、歩くその姿に背筋が凍りついたぞ……」

やつが目を見開き私を見る。

互いの距離は5メートルにまで詰まった。

「ドース！ イース！ アース！ ボース！ ベース！ ダース！

ビース！ ニース！」

やつが再度呪文を唱えた。

「ドーーーーーッーン!!」

ザトーが5メートルの距離をコンマ数秒で詰めてきた。

その蹴り足で砂煙が舞う前にやつは私の目の前に迫る。

「小娘ええええ!!」

と、やつは剣ではなく、その反対の腕を伸ばし、手の平を大きく広げて、私の顔を鷲づかみにしようとする。

このタイミングでサトーの後方で勢いよく砂煙が舞うのが視界に入る。

「うじゃらああああ!!」

やつの手が私の顔面に迫る。

私はそれを身体を横向きにしてかわす。

ザトーが私の目の前を通過していく……、やつが横目で私の顔を見る……。

私はそこから、さらに4分の1回転して、最初の段階から完全にうしろ向きになる動きをする。

同時に、肩に担いでいたドラゴン・プレッシャーも一緒に回転して、ちようどよく、通過していくザトーの後頭部にゴツン、と、ヒットする。

「あぢやああああああ!!」

後頭部を殴られ、さらに加速の付いたザトーは止まれず、砂の上を万歳しながらダイブしていく。

そして、盛大に砂煙を上げ、石垣に激突する。

「あ、ごめんな、今のはわざとじゃないんだ、事故なんだ、あはっ」
笑ってしまう。

「あが、あが、あが……」

ザトーは石垣に激突した額ではなく、ドラゴン・プレッシャーに殴られた後頭部をしきりにさすっている。

「あで、いで、おで……、こつこつこつ……」

やつが石垣に手をかけ、それを支えにふらふらと立ち上がろうとする。

「こつこつこつ……」

「なんだよ、こつこつこつこつこつて、ちゃんとしやべれよ、じじい」
さらに嘲笑してやる。

「ぐお、ぐお、小娘……、このわしに対して、なんたる無礼……、許さん……、断じて許さん……、うおおおおおお!!」

と、ザトーが腰を深く落とし、雄叫びを上げる。

「ドース！ イース！ アース！ ボース！ ベース！ ダース！

ピース！ ニース！」

そして、呪文を唱える。

「またかよ……」

呆れて笑ってやる。

「ドーーーーー！！」

そして、やつが地を蹴る。

砂煙が上がるよりも早く、私に肉薄する。

「ひよんひよん、ひよんひよんって虫かよ、てめえは……」

ここではじめて肩に担いだドラゴン・プレッシャーを振るう。

横一線。

それはやつに向けたものではない。

剣筋は水平ではなく、下段、地面に向けたもの。

ドラゴン・プレッシャーは真横に砂の地面を切れく。

「これが置き撃ちだ、じい、サンド・カーテン・オープン」

大剣に切り払われた衝撃により、地面から砂のカーテンが舞い上がる。

「ぐおっ!？」

ザトーが砂のカーテンに勢いよく飛び込んでくる。

「ぐおお、ぐおお!？」

やつがなんか言っているけど、ここからが勝負。

互いに砂のカーテンに遮られて、その姿を見ることが出来なくなつた。

条件は五分、純粋な読み合いに移行する……。

私は姿勢を低く、ドラゴン・プレッシャーを構える。

「心の強さが試される」

後方に引くのは論外、三流のやることだ。

左右どちらかに迂回し、相手のサイド、またはバックを取ろうとするのは二流。

一流ならば上に飛び、相手の頭上を取ろうとするはず。

和泉もそうするだろう……、ザトーも一流ならばそうする……。

でもね、そこから、さらに上があるのよ、超一流ならば……。

「0地点突破」

私は地面を蹴り、まっすぐ砂のカーテンの中に飛び込んでいく。
この砂のカーテンの向こうからおまえがやってきたら褒めてやるよ……。

私は腕で目をガードしながら突入する。

サンドイエロー一色、そこには誰もいない……。

そうだろうよ、おまえは今、私の頭上を飛んでいる頃だろうよ。

そして、砂のカーテンを突破。

即座に振り返る。

そこから再度、間髪入れずに地面を蹴り、もと来た場所に向かって飛ぶ。

「うおお？ いない、小娘はどこじゃあああ!?!」

砂のカーテンが晴れ、空から降ってきたザトーの姿が見えた。

「くそおおお!?!」

やつが赤く光る剣を振り回しながら周囲を見渡し、最後に後方を確認する。

「小娘ええええ!?!」

自分に向かう私を発見して、驚愕の声を上げる。

「うおおおおお、ドース！ イース！ アース！ ボース！ ベース！」

「遅い」

ドラゴン・プレッシャーを振り下ろす。

肩口からザトーを切裂く、でも、手ごたえは浅い、やつがうしろに転倒するように回避したからだ。

「ダース！ ビース！ ニース！ ドーーーーー！！」

呪文が完成し、激しく地面を蹴る。

「甘い」

おまえは最初の0地点突破で私との読み合いに負けてんだよ。

持ち手を入れ替え、さらに一步踏み込み、左の手の平で柄頭を押さえ、そのままドラゴン・プレッシャーをもう一回転させる。

「うぎゃあああ!?!」

後方上空に飛んで逃げようとしたザトーを叩き落とす。

「ハエだな、おまえは」

二発入れたけど、ヒンデンブルクのネックレスのおかげだろう、致命には至っていない。

「じゃあな、ザトー」

両手に持ち替え、三発目を食らわす。

ドンツ、と、踏み足が砂煙を舞い上がらせ、ドラゴン・プレツシャーがザトー肩口から切裂く。

「あああああああ!!」

勢い余って、ザトーがくるくると回転しながら飛んで行く。

「硬てえ……」

たぶん、あれでも死んでない……。

改めてヒンデンブルクのネックレスの高性能さに驚かされる。

「ぐんぐん」

仰向けに横たわるザトーが大量吐血する。

生きてはいるけど、あれではもう戦えないだろう……。

私はドラゴン・プレツシャーを肩に担いでやつに向かい歩きだす。

「ぐんぐん……」

吐血しながらも必死に起き上がろうとする。

「げふ、げふ……、ひゅー、ひゅー……」

でも、起き上がれない、そのまま大の字に倒れて天井を見上げる。

第119話 古い木の水掻き

ザトーのブルーの法衣が血で真っ赤に染まる。

「ひゅー、ひゅー」

と、口から空気の漏れる音がする。

「苦しいか、ザトー、とどめが欲しいか？」

やつを見下ろし言う。

「何を言っておるか、小娘……、ひゅー、ひゅー、勝負はついた、早く、手当てをせんかい……、ひゅー、ひゅー」

「はあ？」

ザトーに言葉に一瞬思考停止してしまう。

「はあ、じゃないだろ、いだい、いだい……、ひゅー、ひゅー、死ぬ、死んじゃう、早く、傷の手当てを、医者を呼ばんかい……、ひゅー、ひゅー」

何を言っているんだ、こいつは……、出血のせいで頭がおかしくなったか……？

「ひゅー、ひゅー、ごほっ、ごほっ、ごぼあー！」

と、また大量に吐血する。

「まあ、いいわ、死ぬ、そのままじゃ苦しいでしょ？」

私はそう言い、ドラゴン・プレッシャーを振り上げる。

「やめろ、やめろ、ひゅー、ひゅー、わしは先帝だぞ、ラインヴァイス帝国、第98代皇帝ぞ、高貴なる者ぞ、小娘とは格が違うのじゃ……、ひゅー、ひゅー」

と、ザトーがじたばた這うようにして逃げていく。

「ひゅー、ひゅー、許さん、許さん、貴様のような、下賤な輩がわしを殺そうなどと……、認めん、認めんぞお……、ひゅー、ひゅー、ごほっ、ごぼあー！」

吐血しながら砂の中でもがく。

「くそお、誰かおらんのかあ、おらんのかあ、ひゅー、ひゅー、この小娘を殺せえ、誰かあ……、ひゅー、ひゅー」

ザトーがどこかに向かって手を伸ばす。

その手がふるぶると震えている。

「ぐおお、ぐおお……」

今にも息絶えそうだね。

私は振り上げたドラゴン・プレッシャーを下ろし、地面に突き刺す。

「おおお、おおお……」

伸ばした手だけではなく、全身が小刻みに震えてきた。

「終りか……」

私は顔を伏せ、振り返り、セイレイの元へ帰ろうとする……。

「エルム！ エルム！ そこにおるのだろう!?!」

「うん?」

再度振り返り、ザトーを見る。

すると、闘技場の壁、天井付近からガラガラという音が響き、石壁の一部が奥に引き込む。

そして、そこにいるのは、千騎長アンバー・エルム。

「エルム！ 勅命じゃ、やつらに目に物見せてやれ！ 皆殺しじゃ、全員殺せ、ひとりたりともこの砦から出してはならん！ 地獄の門を開けえい、悪魔を解き放てえええ!!」

「御意……」

アンバー・エルムが一礼し、奥に消えて行く。

「あいつ……」

私はやつを追おうと、登れる場所はないか探す。

でも、見当たらない……。

「油断したな、小娘ええ、うおわああああ!!」

周囲を見渡していると、そんなザトーの絶叫が聞えてくる。

「ドース！ イース！ アース！ ボース！ ベース！ ダース！

ビース！ ニース！」

やつが半身を起こし、口から血を巻き散らしながら呪文を唱える。

「うるせえ、じじい!!」

と、渾身の力でザトーに向かってドラゴン・プレッシャーを投げつけてやる。

「おっ……」

大剣はやつの胸、心臓の辺りを貫く。

「おうふ……」

ザトーが胸に刺さったドラゴン・プレッシャーを両手で掴むけど、そこまで……、目を見開いたまま絶命し、そのまま仰向けに倒れる。

「心臓三秒、肝臓十秒、腎臓三十秒、それが撃ち抜かれて死ぬまでの時間だ、ちゃんと憶えておけよ」

やつの胸を踏み付け、ドラゴン・プレッシャーを引き抜く。

「ザトーが最後に下した命令、気になるな……、地獄の門とか言っていたか……、どこかで聞いたような……」

と、アンバー・エルムが消えた壁の隙間を見上げる。

「フアラウエイ様、お見事でした……」

セイレイが私のうしろでひざまずく。

「あなた様は私が知る限り最強の剣闘士でございます……」

「褒めても何も出ないわよ、セイレイ」

と、私はドラゴン・プレッシャーに刃こぼれがないか確認してから地面に突き立てる。

アンバー・エルムのあとを追いたいけど、もう遅い、やつがどこに行ったのかわからない。

「それよりも」

と、ザトーの遺体、その胸元を開く。

そして、その首にかけてあるネックレスを取る。

それを明かりにかざす。

ペンダントの部分はひし形、その中央には怪しく光る宝石がはめ込んである。

私と同じ……。

「これ、どうするか……」

確か、人見が言っていたな……、同じような効力を持つネックレスを二つ同時に装備すると共鳴して身体に悪影響を及ぼす、と……。

これは私が持っているもの……。

じゃあ、人見たち管理班に渡す？

それは駄目、万が一、人見経由で和泉の手に渡ったら大変、これ以

上あいつに強くなられたら困る。

今でもやつのほうが単純な戦闘能力では上だけど、そこをなんとか私の知識や経験で再逆転しているって感じなんだから……。

「うーん……」

処分に困るなあ……。

「フアラウエイ様？」

セイレイが悩む私の顔を覗き込んでくる。

「うーん……」

その綺麗な顔を見返す。

「あげる」

魔法のネックレスをセイレイに差し出す。

「はい？」

と、彼女は両手でネックレスを受け取る。

「私のお揃いだから、肌身離さず付けておいてね」

手にぐるぐる巻きにしている私の魔法のネックレスをセイレイに見せてやる。

「は、はい」

と、嬉しそうに、強く返事をしてくれる。

「よしー！」

私は立ち上がり、ドラゴン・プレッシャーを地面から引き抜こうとする。

「おっ？」

地面に転がっている物に目が止まり、その手が止まる。

刀身が赤く光っている剣……。

それはザトーが所持していた魔法の剣……。

私は大剣から手を放し、落ちているその魔法の剣を拾いに行く。

「これも処分しておかないと……」

そして、拾い上げて、

「これもセイレイにあげる、大事に使ってね」

と、その魔法の剣をセイレイに差し出す。

「はい、ありがとうございます……」

「あ、そつちに鞘が落ちていると思うから、それも拾っておいて」
最初にザトーがいた観覧席の辺りを指差す。

「はい、ファラウエイ様」

セイレイが黄金の鞘を拾いに行く。

「わああああああ!!」

「おおおおおお!!」

地上が騒がしいな……。

まだ勝敗は決していないみたい。

「セイレイ、準備出来た？ 友軍の応援に行くよ」

「はい、ファラウエイ様、ただいま……」

彼女は魔法の剣を黄金の鞘に収め、それを腰の帯革に差し込んでいる途中だった。

「整いました」

微調整してお終い。

「よし、行こう、あ、そうだ、セイレイ、私がザトーを殺したことはみんなには内緒にしておいてね、イメージ悪くなるから」

「はい、ファラウエイ様」

と、私たちは闘技場をあとにする。

カツカツ、カツカツ、と、石造りの階段を登る……。

あいつら、怪我してないだろうか……、ちよつと、心配……。

と、道中、東園寺たちを気にかける。

「わああああああ!!」

「おおおおおお!!」

その怒声や金属同士が激しく接触する音が大きくなる。

「地上だ、行くよ、セイレイ」

「はい、ファラウエイ様」

と、私は金属製の扉を渾身の力で蹴り破る。

扉は勢いよく飛んで行き、

「えっ!？」

と、敵か味方かわからない、どこかの兵士の頭にヒットする。

うん、たぶん、敵……。

「わああああああ!!」

「おおおおおお!!」

「どらああああ!!」

岩内では、敵味方入り乱れての激しい戦闘が繰り広げられていた。また、その石畳の上には足の踏み場もないほどの、おびただしい数の死体が横たわる。

「危険だな」

ブービートラップはないだろうが、おそらく、この中の半分以上の兵士は生きている、つまりは、死んだ振りだ……。

「ちよつと、この中を歩いて行く気にはならないな……、うーん……」
と、私たち二人は建物の入り口の前で途方に暮れる。

「ナビー!？」

途方に暮れていると、上から人が降ってきた。

「やっぱり、キミかナビー!？」

それは銀縁メガネの頭の良さそうやつ。

「彰吾!」

そう、参謀班の人見彰吾だ。

「何かの間違いじゃないのかと思っていたが、まさか、本当にキミだったとは、確認に来てよかった……」

呆れた口調で言う。

「うん? 私がここにいて知ってたの?」

疑問を口にする。

「ああ、それ」

と、人見が私の持つドラゴン・プレッシャーを指差す。

「うん?」

首を傾げる。

「名前だ、ドラゴン・プレッシャーの名で紐付けしてある、そいつはどこにあるとも、俺の魔法探知に引っかかる」

ああ!?

そういえば、そんなことやってた!

くつ、つまり、私の行動は全部筒抜けだったというわけね……。

「それで、そちらの人は？」

と、人見が視線でセイレイを指し示す。

「仲間、セイレイっていうの、牢屋に入れられていたから、助けた、そしてら、仲間になってくれたの、えへ」

と、笑顔をつくる。

「そ、それは、よかったな……」

彼は頬を赤らめて視線を逸らす。

「それで、戦況はどうなってるの？ 順調？」

と、真面目な顔に戻し尋ねる。

「ああ、順調だ、このまま進めば我が軍の勝利で終わる……」

「そう……、公彦とかは？ 怪我とかしてないよね？」

「それも大丈夫だ、基本的に俺たちは戦闘に参加していない、今も秋葉の籠る見張り台の下に集合して戦況を見守っていたところだ、キミもそこに行こう」

なるほどね、大体事情は飲み込めた……。

「うぎやああああああ!!」

そのとき、怒号とは違う、ひととき大きな悲鳴のような絶叫が砦内に響き渡る。

「おおがううああああ!!」

そして、悲鳴のあとには、バリバリバリ、という、骨を砕くような音が聞える。

「な、なんだ……？」

人見がそちらのほうを見る。

「うわああああああ!!」

「なんだこれはああああ!!」

悲鳴がした場所の近くの兵士に黄色い、ネバネバした液体が大量にかけられる。

「あ、あれは……」

「うっぎやああああ!!」

「た、た、たす、たす、あっぎやああああ!!」

液体をかけられた兵士が何かに捕らえられ、バリボリと捕食される

……。

「あ、ああ……」

地獄の門を開けえい、悪魔を解き放てえええ!! ザトーのその言葉
が脳裏をよぎる。

思い出した……、地獄の門……。

第120話 地獄の門

人々は恐怖と畏敬の念を込めて、こう呼ぶようになった、地獄の門、ガルディック・バビロン、と……。

これは先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトーの言葉だ。そう、やつは確かに言っていた、地獄の門と……。

千騎長アンバー・エルルムに命じていたのはこれのことだったのか……。

「うわああああああ!!」

「いつぎやああああ!!」

阿鼻叫喚、人々は逃げ惑い、悲痛な叫び声を上げる。

その巨大な、醜悪な姿が遠目からでもわかる……。

ぶよぶよとした羽のないセミのような茶色の下半身と、深緑色のカマキリのような上半身、そして、ハエのような複眼の巨大な顔……。

その口が大きく開き、ネバネバとした黄色液体が何本も垂れ下がりに、そして、口の中から歯茎全体が飛び出し、身近にいた兵士の首に噛み付く。

「あう、あう、あがああああ!!」

そして、そのまま元の、本体の口の中に引きずり込まれ頭からバリバリと食われる。

「地獄の門、ガルディック・バビロン」

その光景に心底ぞつとする……。

「な、なんだ、それは、ナビー……?」

人見が声を絞り出す。

「虫よ……、それも、超巨大な虫……、この前の会談で、ハルに大怪我を負わせた相手、それと同種のやつ……」

一匹だけじゃなく、他にも飼っていたのか……。

「なんだって……あれが、虫、なのか……」

人見が目を凝らしてやつを見る。

「うわああああああ!!」

「逃げろ、逃げろおおお!!」

「ひっひいひいひい!?!」

「く、くるな、くるなああああ!!」

敵味方関係なく、兵士たちが我先にと逃げ出していく。

「ここを開けろおおお! 開けろって、言って、んだよ……?」
扉を叩く兵士の頭にネバネバとした黄色の液体が何本も垂れ下がる。

「な、な、なああああああ!! あっぎやあああああ!!」

上からあの菌莖が伸びてきて、兵士の顔面を食いちぎる……。

「う、上にもいるぞおおお!?!」

「いや、こつちにもいるぞ!?!」

「待て、そこにも!?!」

ガルディック・バビロンは一匹じゃなかった。

あの建物の上にも、外壁の上にも、砦の中にも……。

「えええ、ええええ!?!」

「こつちに、あつちにも!!」

「どうなつてんだ、これは!?!」

カサカサと壁を歩く巨大な虫の影が目に入る……。

数匹なんてものじゃない……、うじゃうじゃと数百匹はいる……。

「包囲されてるぞおおお!?!」

誰かが叫んだ。

そう、私たちはガルディック・バビロンに完全に包囲されていた。

「はははは、帝国の勇者たちよ、援軍を連れてきたぞ、我々の勝利だ、さあ、敵を駆逐せよ、帝国に菌向かう者は皆殺しだ!!」

その台詞とともに、高い塔の上に現れたのは、細い目と尖った顎、それにピンと張った口ひげの男、千騎長アンバー・エルムその人だった。

「これは勅命である! 先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトーの命だ! 賊はひとりたりとも逃がしてならん、皆殺しにせよ!!」

黒革のクロークが風にはためく。

「ふははは、ふはははは!!」

そして、空に向かって高笑いをする。

「ふは、ふあ?」

その高笑いは途中で止まる……。

やつの胸をあの伸びる歯茎が貫いたからだ。

「ふあ? ふへ?」

何が起きたのか理解出来ないようだった。

でも、私には見えていた、やつのいる塔に、ガルディック・バビロンの群れが登っていくのを。

「おご、おご、おご……」

伸びる歯茎が回転しながら、ドリルのようにやつの身体をえぐる。

それも、ひとつではなく、無数の歯茎が……。

「あげげ、げげ、げげ……」

やつの身体が血に染まり、肉を食い散らかされていく。

「ひいいい、千騎長が食われている……」

「だ、誰か、助けて、あんな死に方、嫌だよ……」

その凄惨な食われ方を見て、敵味方関係なく戦意を喪失していく。

「もう駄目、駄目……」

「ああ、ああ、神様あ……」

その場にへたり込む者まで出始める。

「人見!」

「ここにいたのか、なにをやっていた!」

上から人が降ってきた。

「それにナビーじゃないか、どうしたんだ!」

それは東園寺たち4人だった。

「公彦! ハル! 蒼! 猯人!」

と、みんなの名前を叫ぶ。

「うひひ」

佐野の野郎が嬉しそうに笑ってやがる!

「このお! 無事だったかあ!」

と、両手を広げて抱き着いてやる!

「うひひ」

うん、嬉しそうだ!

「みんなも無事だった？ 怪我はしてない？」

みんなと合流出来てほつとして、そう尋ねる。

「平気さ、な、ハル？」

「ああ、問題ない……」

「それより、ナビーフイユリナ、なんでおまえはここにいるんだ？」

最後の東園寺の台詞だ。

「うん？ えっと、お、落ちちゃった、の、かなあ……？」

動揺して苦しい言い訳をしてしまう。

「落ちただあ……？」

彼が疑いの眼差しを私に向ける。

「あ、キミは……」

と、和泉が私のうしろにいるセイレイの存在に気付く。

「この前はどうも……」

セイレイが少し棘ある話し方と言う。

けど、和泉にはその言葉はわからない。

「ジョルカさん、だっけ……？」

「ううん、ジョルカはウソの名前、本当の名前はセイレイっていうの、

私たちの仲間になった、えへん、すごいでしょ」

腰に手をあてて自慢げに言ってる。

「セイレイさん……？ 仲間に……？」

「ああ、なんでも、牢屋に捕らえられていたところをナビーフイユリナに助けられてもらったらしい」

と、人見が補足してくれる。

「えへん」

さらに鼻高々。

「まあ、いい、詳しい話はあとだ、人見、このピンチを打開出来る秘策はあるか、あいつら化け物は人間がどうこう出来る代物ではない、このままでは全滅するぞ」

東園寺がガルディック・バビロンの群れを見ながら言う。

「ある、と、言えば、ある……、取っておきの秘策がな……、だが、それには時間がかかる……」

「どれくらいだ？」

「10分、その時間を稼げれば、俺がすべての虫どもを焼き払ってやるよ」

「そうか……、10分だな、それでいけるんだな……？」

「ああ……」

と、人見が人差し指でメガネを直す。

「みんな、聞いての通りだ、10分だ、耐えるぞ」

「「おお!!」」

と、東園寺の号令に、みんなが武器を振り上げて応える。

「おおお！」

私もドラゴン・プレッシャーを天にかざして叫ぶ。

「セイレイは危ないから下がって、みんな馬鹿みたいに強いから大丈夫だよ！」

と、現地の言葉で彼女に伝える。

「は、はい、ファラウェイ様……」

セイレイは二、三步後退する。

「リータ、フテリ、メルイル……」

人見が聞いたことのない呪文を唱え始める。

「蒼、無闇に撃つなよ、ヘイトがこっちに向いたら厄介だ」

「ああ、ギリギリまで引き付ける」

こっちは和泉と秋葉の会話だ。

「うわああああああ!!」

「助けてくれ、誰か、誰かああ!!」

「あつぎやああああ!!」

ガルディック・バビロンは逃げ惑う兵士を追い駆けてバリバリと捕食するばかりで、こちらには興味を示さない。

「こないな……」

「ああ、ついてる」

「もしかして、魔法か？ 防衛陣に警戒して近づいて来ないのか？」

と、みんなが話し合う。

「ああああああ!!」

「助けてください、ナギ様方あああ!!」

「いたい、いたい、いたい!!」

敵味方問わず虐殺されていく、その中には当然、ナスク村の人たちも含まれる……。

「どうする、東園寺、助けに行くか?」

「いや、動くな、人見を守れ、魔法詠唱中だ、人見の邪魔になるようなことはするな」

「くっ」

東園寺が和泉の提案を即座に却下する。

「リータ、フテリ、メルイル……」

人見が目を閉じ、静かに魔法を唱え続ける。

なんだろうな、この呪文、同じフレーズばかり繰り返している……。

「いやあああああ!!」

「おぎやあああああ!!」

「ぎやあああああ!!」

人々の悲鳴が絶え間なく砦内に響き渡る。

悲鳴とともに聞えるバリボリという骨を砕く音も私の精神を消耗させる……。

「駄目だ、東園寺、助けに行く」

「やめろ、和泉、ここの死守に専念しろ、これは命令だ」

「しかし!」

二人が口論する。

人見の魔法が完成するまでの10分間……、守ったほうがいいのか、それとも攻めたほうがいいのか……、これは、分水嶺、運命の分かれ道になりそうね……。

「立て、逃げるな、帝国騎士たちよ、その誇りを忘れたか!!」

そのとき、砦の中庭、その中央に赤いマントがひるがえる。

「俺は帝国上級騎士、シャイカー・グリウム!!」

そして、その剣を振りかざし、広場の兵士たちを見渡す。

「今は敵味方と争っている場合ではない、人間全員、ここにいる全員であの化け物どもと戦うぞ! 全員協力しろ! 人間同士で争うこと

は俺が許さん!!」
よく通る声でシャイカー・グリウムがそう宣言する。

第121話 反撃

生き残るための協力。

それを、あのシェイカー・グリウムが提案する。

「戦える者は剣を取り立ち向かえ、その際、ひとりでは行くな、周りの人間と協力しろ！ 帝国軍だろうと、民兵だろうと関係なくな!!」

「「おおおおー」」

賛同した者は少ないけど、それでも、組織だつての応戦が始まろうとしている。

「戦えない者は負傷者の救助だ、倒れている者を救え！ これはさつきと同じように人間なら全員だ、帝国軍だろうとなんだだろうと関係ない！ ひとりでも多くの人命を救え!!」

「「おおおおー」」

これには先程よりも多くの賛同が得られる。

救命のための停戦……、古来より数多く行われてきたことだ……。

「ふざけるな、反乱軍風情があ?! こいつらは逆賊ぞ、話を聞くことなどない、そもそも、こいつらが攻めて来なければ、こんなことにはならなかった、すべての元凶はこいつらだ、帝国騎士団よ、逆賊共を殲滅せよ、ひとりたりとも逃がしてはならん、それが先帝陛下のご命令だ!!」

と、今度は、帝国軍の指揮官が叫ぶ。

「ど、どつちの指示に従えば……」

「とりあえず、怪我人の救助を……」

「いや、反乱軍の討伐が先帝陛下のご命令では……?」

兵士たちが迷いだす。

「きつさまああああ!!」

と、シェイカー・グリウムがツカツカとその指揮官の元に歩いていく。

「貴様こそなんだあ!」

指揮官が剣を抜こうとする。

「どらああああああ!!」

シエイカー・グリウムがその指揮官を一撃の下に斬り捨てる。

「我々は誇り高い帝国騎士団だあ！ 貴様らはどこまでそれに泥を塗るつもりだあ!? 遊びふぎけでなんの落ち度もない弱き者たちを虐殺し、そのささやかな幸せまでも奪う、そんなくそつたれな先帝の命令を聞きおつて……、恥ずかし過ぎて、顔から火が出るわあああ！ 帝国騎士の誇りはどうしたああ!? 貴様らが立ち向かうべきは、武器を持たない民ではなからう、あの化け物共だろうがあああ!」

と、ガルディック・バビロンを指差す。

「我々は誇り高い帝国騎士……」

「長らく忘れていました……」

「どうか、ご命令を、上級騎士……」

「我々に死ねとご命じ下さい……」

次々と帝国兵たちがシエイカー・グリウムに向かい、ひざまずいていく。

「死ぬな、生き抜け、そして、帝国のために、民のために働け」

「ははあ!!」

と、兵士たちが大きな声で返事をする。

「では、行くぞ、倒すぞ、化け物!!」

「おおおお!!」

そのかけ声で全員が抜刀する。

良い指揮官に率いられた軍隊は士気が高いね……。

昔から、有能な指揮官に率いられた弱兵と無能な指揮官に率いられた強兵ではどちらが強いか？ という論争があるけど、私は前者、有能な指揮官に率いられた弱兵のほうが圧倒的に強いと思っている。

「指揮官が兵士の強さを決める」

私の持論だ。

「おおおお!!」

兵士たちがガルディック・バビロンの群れに突撃していく。

「単独で行くな、あいつらは強い、チームで動け、サポートを忘れるな、人間同士で協力しろ!!」

シエイカー・グリウムの指揮の下、兵士たちが組織的な戦闘を繰り

広げる。

「あぎやあああああ!!」

「うがあああああ!!」

それでも、ひとり、またひとりとガルディック・バビロンの餌食になつていく……。

見ていると、やつら虫の反応速度が桁違いで、攻撃と防御の逆転現象が起きている。

例えるなら、虫が先によけ、兵士があとから攻撃の動作を始めるといった感じだ。

それは虫が予測して動いているからそうなるわけではなく、私たちの認知、それよりも速く行動しているから、結果的にそう見えてしまうだけ、実際は見てから行動している。

「倒せない、あれは普通の人間では倒せない……」

そう思ってしまう……。

「怯むなあ!! 声を出せ、雄叫びを上げろおお!! 俺たちは帝国騎士だ、何者も恐れたりはしない!!」

シェイカー・グリウムが必死に兵士たちを鼓舞する。

「東園寺、戦おう、俺たちも加勢しよう、そうすれば勝てるかもしれない」

「待て、それは許可出来ない、人見、あとのくらいだ?」

「リータ、フテリ、メルイル……」

集中しているのか、その言葉は人見の耳には届かない。

「くっ……」

東園寺が顔をしかめる。

その彼の隣からひゅん、ひゅん、という音が聞えてくる。

「これなら文句ないだろう?」

秋葉が矢を放つ。

「きゅぴろぴろー」

「うごろぷろー」

その矢は的確にガルディック・バビロンの目などの急所を貫く。

「やめろ、秋葉、こちらの存在に気付かれる!」

「いぴろー」

「こぴろー」

もう遅い、複数のガルディック・バビロンが頭を風車のようぐるぐる回して私たちを確認しようとしている。

「く、くそっ……」

「公彦、打って出るよ」

私はドラゴン・プレッシャーを構える。

「駄目だ、許さん、ナビーファイユリナ、防御を固める」

尚もそう言い放つ。

「公彦……、あなたの判断はいつも正しい……、私たちはいつもその判断に助けられてきた……、だから、その判断も、たぶん正しいんだと思うよ……」

優しく諭すように言つてあげる。

「でもね、それでもね、やらなければならぬ時がある、孫子曰く、勝つべからざる者は守なり。勝つべき者は攻なり……。勝てる見込みが少しでもあつたら迷わず攻めろつて意味、今がその時なのよ」

ゆつくりと一步目を踏み出す。

「ハル、蒼、猿人、私のあとに続け」

そして、二歩目。

「ナビー……」

「お、おい……」

「ナビー、かっけえええ、俺はナビーについていく！ みんなは知らないだろうけど、ナビーつて実は超強いんだぞ！」

なぜか、佐野だけが大きく盛り上がり。

ちよつと笑ってしまった。

よし。

「ゆくぞ」

私は建物の陰から、先頭を切つて飛び出していく。

「うおおおお!!」

「ナビー!!」

「マジかよ!?!」

そのあとを三人が続く。

「いびろー」

「こぴろー」

巨大な虫が顔を風車のようにぐるぐる回して私を見ようとしている。

「複眼の弊害だよなあ、害虫、見えないんだよなあ、正面から真っ直ぐ向かってくる相手はなあ」

複眼は前後左右に揺らすことによつて、その像を捉える。

止まっている相手は見えにくく、また動いていても、正面、真っ直ぐだと、止まっているように見えて捉えづらい。

「いびろー」

「じゃあな、害虫ー」

私が見えていない、ガルディック・バビロンをドラゴン・プレツシャーで一刀両断する。

「まず、一匹ー」

「こぴろー」

隣の虫が私を認識した、でも、

「おせえんだよー」

やつが気付いた時には大剣は横に払われ、その胴体を真っ二つにしていた。

「二匹目！ 次！」

一度足を止めて周囲を確認する。

「動きを止めているやつ、人間を食っているやつから狙え、仲間が命を懸けて、その動きを止めてくれるのだ、それを無駄にするな!!」

指示を出すシャイカー・グリウムの背後から一匹のガルディック・バビロンが迫る。

私は少し外に膨らむ形で彼の元へ走っていく。

位置の調整。

これで、シャイカー・グリウムへ向かう虫と私、この二つがちやうど直角になった。

シャイカー・グリウムに向かう私から見て、虫は直角、横から向かつ

てくるような感じになっている。

速度も虫と合わせる……。

「コリジョンコース現象」

このコースに入ると、私は風景と同化し、相手の視界から消える。

もう、あの害虫共とまともに戦う気なんてねえんだよ……。

反応速度では勝てない……。

なら、人間が数千年かけて獲得した知識、スキルで戦うしかない。

「とぴろー」

見えねえだろ、害虫。

「5人、10人でチームを組め、誘い役、盾役、攻撃役を決めろ、協力して戦え！」

と、彼は虫が背後から迫っていることに気付かず指示を出し続ける。

「こぴろー」

「たあー」

シエイカー・グリウムの襲いかかる虫、そして、その虫に斬りかかる私、その二つの声が重なる。

「む?」

そこで初めて彼がその存在に気付く。

気付いた時にはガルディック・バビロンは真つ二つ、地面でぴくぴくと痙攣している。

「よお、シエイカー・グリウムさん、元気だったかい?」

「こ、小娘!?!」

彼が私の顔をまじまじと見る。

「油断するなよ、隊長さん」

「お、おう」

と、シエイカー・グリウムが思い出したかのように剣を構える。

お互い背中合わせで剣を構える。

「いい、演説だったよ、隊長さん、あんた、将来良い将軍様になるよ、私が保証する」

背中 of 彼に話しかける。

「はははは、随分素直じゃないか、惚れ直したか、小娘？ いいぞ、俺様の嫁にしてやる、一生安泰だぞ？」

と、笑いながら言う。

「お断りだ、バーカ」

と、言い返してやる。

「それで、何か策はあるのか？ それを言いに来たのだろうか？ 我々はどうすればいい？」

今度は真面目な口調で言う。

「さすが話が早い、あんた、ホント良い將軍様になるよ」

正面を見据えて少し笑う。

第122話 フレイジング

「あの虫共を一掃出来る秘策がある」

私は周囲を警戒しながら、そう話を切り出す。

「なに、本当か？」

「ええ、本当よ……」

「どんなだ？」

「虫共を全部焼き払う秘策よ……」

詳しくは聞いてないけど……、たぶん、火をつけるんだと思う……。

「焼き払う？ 砦に火でもつける気か？」

知らないけど、たぶん、そんな感じだと思う……。

「うん、そんな感じ、だからね、協力してほしいの、あなたたちが全滅して、すべての虫共が私たちに向かって来たら、この秘策は終り、私たちも全滅する」

いくら私たちでもあいつら全部を相手に出来ない、数百匹以上いるのだから。

「なら、どうすればいい？ 戦わないで、逃げ回り、時間を稼げばいいのか？」

「それだと秘策が実行されたとき、あなたたちは虫共と一緒に焼き殺されてしまう、それでは意味がない、あなたたちも助けない、なので、まず、虫共の包囲網でもっとも薄いところを突破する……」

「ああ、なるほどな、おまえの考えが読めた、分断するのだな、敵味方で、防衛ラインを構築して膠着状態を作り出す、それならば時間も稼げて一石二鳥だ」

感心する……。

「ええ、その通りよ、あなたにそれが出来る？」

「俺様を誰だと思っている小娘、俺様は帝国上級騎士のシェイカー・グリウム様だぞ、そんなことは造作もない」

「それは頼もしい」

私は口元をほころばせる。

「腕に覚えのあるものはいるかあああ!？」

と、シエイカー・グリウムが剣を振り上げて叫ぶ。

「これより、突撃を慣行する！ 腕に覚えのある帝国騎士は我に続けえええ!!」

そして、ひとりでもっともガルディック・バビロンが集中している方向に走り出す。

「そっちかよ」

思わず吹き出してしまふ。

でも、いいアイデアかもね……。

燃える展開、士気が上がる。

「上級騎士様が突撃なされたぞおお!!」

「上級騎士様をひとりで死なせるなあああ!!」

「遅れを取るなあああああ!!」

「全員突撃しろおおおお!!」

ひとり、またひとりと駆け出し、シエイカー・グリウムのあとを追う、さらには追い抜き、そして、

「うおおおおおお!!」

「わああああああ!!」

と、大きなうねりとなっていく。

「どらあああああ、一番槍だああああ!!」

「くらえ化け物がああああ!!」

「死ねやああああああ!!」

槍を水平に構えた一団が先頭を切ってガルディック・バビロンの群れに突撃していく。

いわゆる、ランスチャージだ。

「こぴろー」

「いびろー」

「とぴろー」

これには虫共も反応出来ない、横一列、数十人によるランスチャージは強烈で、ガルディック・バビロンが次々とその槍の餌食になっていく。

しかし、そこは巨大な虫の群れ、数十人によるランスチャージを受

け止め、その前進を止める。

でも、

「突撃いいいいいい!!」

「うおおおおお!!」

「だらああああ!!」

そこで終わらない。

後方から殺到する兵士たちが、虫共に止められた槍兵の背中に足をかけ、その上を飛び越えて、ガルディック・バビロンの群れを上空から急襲する。

「うおおおおお!!」

「どらああああ!!」

次々とその背中を飛び越えていく。

そして、剣を突き刺し、虫共の身体から黄色い液体を噴出させる。

「ぎゃああああああ!!」

「いっぎゃああああ!!」

当然、虫共も反撃してくる。

「負けるな、帝国騎士よ!!」

「押せ、押せ、押せええええ!!」

「怯むな、接近して突け、突きまくれえええ!!」

仲間が無残に食われようとも怯まない、気迫で前進し続ける。

「これはいける……」

そう確信して、和泉たちの位置を確認する。

彼らは虫共が私に近づかないように、その周辺で戦ってくれていた。

「ありがとう」

と、小さくお礼を言う。

「ハル、蒼、猿人、一旦、戻るぞ、公彦たちと合流して、あいつらのあとに続く、取り残されたら終りだ!!」

そして、彼らに向かって大きな声で叫ぶ。

「「おおお!!」」

私は先頭を切って走り、東園寺たちの元に向かう。

「公彦、どう!? 彰吾の魔法は行けそう!?」

到着早々、開口一番にそのことを尋ねる。

「ナビーフイユリナ、わからん、この通りだ」

「リータ、フテリ、メルイル……」

人見は先程と同じように、目を閉じ、そんな呪文を唱えている。

「彰吾は10分と言っていたか……、あとどのくらいだ……、5分は経ったか……」

ちよつとうつむき加減で考える。

「とりあえず、みんな、突撃しているシェイカー・グリウム隊のあとに続くよ、ここに取り残されたら終りだから、彰吾も、いい!?」

「リータ、フテリ、メルイル……」

と、聞いても人見は無反応……。

「なにやってんだ、こいつは!? これ、魔法じゃなくて、なんかの病気なんじゃないの!?!」

「「えええっ!?!」」

みんなが大袈裟に驚く。

「もういい、猿人! 彰吾を担いで!」

「うい」

と、佐野が人見を肩に担ぐ。

「リータ、フテリ、メルイル……」

担がれてもうわごとのように呪文を唱え続けている……。

「うひ、気持ち悪い」

佐野にも笑われてるよ……。

「よし! じゃあ、行くよ! みんな付いてきて、セイレイもね、はぐれちゃ駄目だよ!」

「おうさ!」

「行こう」

「はい、ファラウェイ様」

と、みんなが返事をしてくれる。

私たちは全速力で、突撃しているシェイカー・グリウム隊を追う。

「大丈夫かあ、怪我人はいるかあ!?!」

「た、助けて、くれ……」

「こつちも頼む……」

「気をしつかり持て、今助けに行くからない!!」

途中、大勢の怪我人やそれを救助している人たちとすれ違う。

「ナビー、どうする、俺たちも救助に加わるか?」

と、和泉が私に並び聞いてくる。

「血路を開く、どの道、あそこを突破しなければ全滅する、助けたところで意味がない……」

「わかった、全力で行こう……、エンベラドラス、殉教者の軍勢、死の絶望が汝を燃え上がらせる……」

和泉が魔法の詠唱に入る。

「蒼、撃て!」

「おうさ! アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、
バビロン^{レイ}の風盾」

走りながら、魔力を込めた矢を放つ。

矢は放物線を描き、ガルディック・バビロンに吸い込まれる。

「わああああああ!!」

そのとき、前方の人の壁が割れる……。

「ぎゃあああああ!!」

「ひいひいひいひい!!」

悲鳴が轟く。

虫共に逆に突破された。

割れた人壁の向こうから数匹のガルディック・バビロンが飛び出してくる。

「うしろ、うしろおおお!!」

「ぎゃあああ、助けてええ!!」

そして、その虫共が方向転換して、後方から兵士たちに襲いかかる。

「あいつらをなんとかするよ!」

「おお!」

私は走る速度を上げる。

「たああ!」

そして、兵士たちを襲うガルディック・バビロンの背後からドラゴン・プレッシャーを振り下ろす。

「とぴろー」

虫は黄色い液体を噴出しながら倒れる。

「よしー！」

「ナビーー！」

と、横からガルディック・バビロンの歯茎が伸びてくる。

「ひっ!?!」

口を開けながら、黄色い液体を撒き散らしながらこっちに伸びてくる。

「レージス、光を閉ざした虚無の剣、弾けて砕け、剣気破弾!」ダイバロマ

気合とともに、東園寺がその歯茎に向かって剣を振り下ろす。

「公彦ー！」

歯茎がべちゃりと地面に落ち、うねうねと動き回る。

「いびろー」

東園寺がブーツで踏みつけてとどめを刺す。

「炎を纏え、エゼルキアス双炎爆裂」

和泉の剣から炎が噴出し、それを振り下ろすとガルディック・バビロンは真つ二つになり、その両方から炎が上がり、バチバチと焼ける。必死に応戦するけど、数が多い、味方の割れた人壁の隙間から次々と虫共が這い出してくる。

「あそこを塞がないと、どうしようもない!」

私たちはそこに向かって突入していく。

「たああああ!」

ドラゴン・プレッシャーを振う。

「ナビーファイユリナー!」

東園寺が私の背中を守ってくれる。

「とぴろー」

「いびろー」

でも、数が多い!

「ドース! イース! アース! ボース! ベース! ダース!

ピース！ ニース！」

この呪文は確かザトーの、でも、その声はセイレイのもの。

「なに……？」

私は振り返る。

「はあああああああ!!」

疾風が駆け抜け、私の長い金髪が風に舞う。

振り返ったその時には彼女はもういない、私の横を通過したあとだった。

「ええ!？」

と、再度振り返り、正面を向く。

ドンツ、という音が響き、ガルディック・バビロンが後方に他の虫共を巻き込みながら勢いよく飛んでいく。

「セイレイ！」

そう、彼女が身体ごと突っ込んで、その剣を突き刺したのだ。

「ファラウエイ様……」

と、セイレイは乱れた銀髪を耳にかけ、軽く微笑んでみせる。

「セイレイ……」

ザトーの魔法を真似してやってみたのか……、それで、出来てしまったのか……、いきなり……。

「突破したぞおお!!」

そのとき、最前線からそんな叫び声が聞こえてくる。

「やったか！」

と、私は歓声を上げる。

第123話 ブリザード

虫共の、ガルディック・バビロンの包囲を破った。

それは私たち人類の虫共に対しての初めての勝利を意味する。

「うおおおおお!!」

「わああああ!!」

否が応にも士気は上がる。

「見事だ、栄光ある帝国騎士団よ!」

シェイカー・グリウムが剣をかざして叫ぶ。

「おおおおお!!」

兵士たちが歓呼によってそれに応える。

「騎士団、反転! 虫共を挟撃するぞ!」

「おおおおお!!」

包囲を突破した兵士たちが反転してガルディック・バビロンの背後を突く、先程とは逆の展開になった。

「いぴろー」

「こぴろー」

挟撃された虫共は総崩れになる。

「行ける、行けるぞ!」

「虫共はそんなに強くないぞ?!」

「何を言っている、俺たちが強いんだ!」

盛り上がりは最高潮に達する。

「私たちも突破するよ!」

「おお!」

みんなが私のあとに続く。

「たああ!」

乱戦の中、少しずつ進んで行き、ついに私たちも虫共の包囲を突破した。

「よし! 追撃!」

突破したら、反転攻勢!

包囲を突破しようとしている味方の援護に入る。

「うおおおおお!!」

「わあああああ!!」

激戦が繰り広げられる。

横列の防衛ラインを作り、敵の侵入を防ぎつつ、逃げ込んでくる味方、特に負傷者を優先して迎え入れる。

少しずつ、乱戦ではなく、敵味方で別れ、互いに向かい合う形になっていく。

大勢の槍兵が水平に槍を構え、虫共の侵入を阻む。

「これから、どうする、正門を攻略して退路を確保するか!？」

シエイカー・グリウムが私たちのところへやってくる。

彼の言う通り、私たちは高い石壁を背にしている逃げ場がない。

だから、逃げ場、退路の確保は急務に思われるけど……。

「ぎゃあああああ!!」

「いや、いや、いやああ!!」

独断で正門のほうへ向かった一団から悲鳴だ。

当然だよ、あいつら、ガルディック・バビロンには知性があるんだから。

退路を放っておくわけがない。

「いっぎゃああああ!!」

「いた、いた、いた!!」

正門の近くには黄色、いや、黄土色の液体が大量に散布されていて、多くの兵士たちがその中でもがいていた。

「で、できない……」

「助けて、助けて!!」

「いたい、いたい、溶ける、皮が剥がれる!!」

ものすごい粘着性のある液体で一度捕らえた兵士は逃がさない、さらに、消化液も兼ねているのか、兵士たちの肌が溶けてめくれていく。めっちゃり、めっちゃり、と嫌な音を立てながら虫共が兵士たちに群がり貪り食う。

「くっ……」

「うっ……」

その凄惨な光景に多く者が視線を逸らす。

「無理だな……」

シエイカー・グリウムが視線を逸らさずに言う。

「ええ……」

私もその光景を直視しながら答える。

退路はない……。

おそらく、他の出入り口も同じような状況になっていることだろう。

「いやだ、いやだ、あんな死に方はいやだあ！」

「誰だよ、この任務が辺境の過ごしやすいところでのバカンスなんて言ってたのは、地獄じゃねえか！」

「田舎の美少女たちが俺たちを出迎えてくれるんじゃないのかよ！？」

「もうやだあ、俺帰る！」

士気は下がり、持ち場を放棄して逃げ出す者が出始める。

「貴様らあ、逃げるな、持ち場を離れるなあ!!」

「こら、そこ、陣形を崩すな、槍を構えて虫共を牽制しろ!!」

と、急遽任命された小隊長たちが叫びながら陣形を維持しようと奔走するけど、その効果はほとんど見られない。

「いつぎやああああ!!」

「ぎやああああああ!!」

槍を隙間なく並べた密集陣形、そこから出た者は容赦なくガルディック・バビロンの餌食となる。

「こつちからくる！」

「あつちからも！」

「押すな、押すな！」

やつらの包囲網を崩したと思っていたけど、それは全くの事実誤認、逆に私たちが壁の前に追い詰められていた。

さらに、少しずつ距離を詰められ、自然と密集していき、満員電車のようなすし詰め状態になる。

「な、なんだ、これ、戦う隙間もなくなってきたぞ」

「う、動けない、どうしたらいいんだ……」

秋葉たちが人混みの中でもがく。

心底ぞつとする、あの虫共の狙いはこれだったの？

私たちは一箇所に集められて、ぎゅうぎゅう詰めになされて、動くことすら出来なくなった。

「いびろー」

「こびろー」

「ずびゆる、ずびゆる」

人混みで姿は見えないけど、その虫共の鳴き声に底知れない恐怖を覚える。

「やだ、やだ……」

「戦えない、もつと奥に」

「頼む、通してくれ」

「怖い、怖い」

兵士たちが少しでも虫共から遠ざかろうと中央に集まってくる。

「おまえらはブリザードを前にしたペンギンかよ……」

人混みに翻弄されて悪態をつく。

「武器をしまえ、刺さるー!」

「おまえこそ、しまえないなら、手を挙げろ!」

「押すな、押すな、誰か転んだぞ?!」

中央付近ではそんな怒号が飛び交い、

「助けて、助けてええええ!!」

「虫が、虫が来たああああ!!」

「食われる、引っ張られる、誰かああああ!!」

最前線では絶え間なく悲痛な叫び声上がる。

「駄目だ、このままじゃ戦えない、どうする、東園寺?」

「人見がまだだ、とにかく、人混みにもまれてはぐれるな、一塊になつていろ」

と、和泉と東園寺が話し合う。

「スペースを確保しろ、佐野」

「うい」

佐野が人混みを押しよせ、私たちが一緒にいることの出来る最低限のスペースを確保してくれる。

「それで、彰吾はまだなの？」

と、私は人見のほうに視線を送る。

彼は最初10分くらいと言っていたけど、すでに20分以上は経っている。

「リータ、フテリ、メルイル……」

……。

「これ、絶対、魔法じゃないでしょ……、聞いたことないから……、みんなの……」

半ば呆れて、そうつぶやいてしまう。

「いつぎやああああ!!」

「ぎやああああああ!!」

「あつぎやああああ!!」

前線では悲鳴が大きくなり、その数も増えていく。

虫共の攻勢がはじまった。

くそ、人見はアテにならない。

「公彦、移動しよう、ここを出る、私たちでもう一度再突破する」

「完全に包囲されている、勝算はるのか、ナビーフイユリナ？」

「ある。やつらの知性を逆手に取る、やつらは必ず、包囲に一箇所だけ穴を開けておくはず、そこに獲物を誘い込み一網打尽にするためにね……、でも、そこが一番手薄なのもまた事実、仕留めるためにそんなことをするのは、言い換えればなめてるのよ、そこを突く、正面からぶち破ってやる」

決意を込めて言う。

「わかった……、やろう、俺はナビーの意見に賛成だよ、このままだと戦わずして負ける」

「ここにいるよりはいいわな、俺もやるぜ、ナビー」

と、和泉と秋葉が賛同してくれる。

「公彦は？」

「ちっ、その手しかないか……、いいだろう、やろう……」

「ありがと、公彦……、獏人、彰吾を担いで、セイレイもついてきて」「うい」

「はい、フアラウエイ様」

二人が従ってくれる。

佐野が人見を担ごうとする。

でも、人見が佐野の手を払い除ける。

「人見さん？」

「佐野、もう大丈夫だ、すまなかったな」

と、人見が佐野に笑いかける。

「ナビー、俺もキミの作戦には賛成しないでもないが、それを決行するのは俺の魔法を見たあとにしてもらえないかな？」

私に向き直り言う。

「彰吾の魔法……？」

「いや、キミの言うとおり、正確には魔法じゃないな……」

人差し指でメガネを直しながらニヤリと笑う。

「魔法じゃない……、じゃあ、今までなにしてたの……？」

困惑する。

「こういうことさ」

人見が右手を天にかざす。

「正確な座標がわからず、道に迷ってしまったが、なんとか、ここまで辿り着くことが出来た……、それも、みんなが時間を稼いでくれたおかげ……」

さらに、真暗な空を見上げる。

「来い、キネティック・エネルギー・アレイ・ヴァーミリオン」

そして、その手を振り下ろす。

それと同時に暗闇の空に複数の光点が出現する。

それがこちらに向かって猛スピードで向かってくるのがわかる……。

「ひっ」

と、私は反射的に頭を庇う。

それが轟音を轟かせて私たちの頭上を通過していったのだ。

そして、ドーン、ドーン、ドーン、と爆弾のような炸裂音を響かせて、私たちとガルディック・バビロンの群れの間に着弾する。

高々と砂煙が舞い、視界を遮る。

兵士たちも、虫共も、何が起きたのかわからず押し黙り、周辺には静寂が訪れる。

ギギギギ、ギギギギ……。

砂煙の中からそんな機械音が聞えてくる。

ガガガガ、ガガガガ……。

砂煙が少しずつ晴れていき、そのシルエットが見えるようになっていく。

それは人型……。

でも、大きさが尋常じゃない、余裕で3メートルを超えている……。それが10体ほど……。

「あれは……ヒンデンプルクの……」

「ああ、ヴァーミリオンだ」

それはヒンデンプルクの飛行船の中に眠っていた人型兵器だった。

第124話 火の海

風が吹く。

それとともに砂煙も晴れ、ヴァーミリオンがその姿をあらわす。数は10。

ギギギギ、ギギギギ、と、金属のこすれる音を轟かせながらゆつくりと立ち上がる。

その姿は重厚にして巨大、全長は3メートルを優に超える。ベージュ色のボディに長くしなやかな手足。

上半身と下半身を繋ぐ腰のパーツは銀色のボールベアリング。

ガード類も多数装備し、それだけでこのヴァーミリオンが戦闘用だということがかうかがい知れる。

頭部はシャペルと同じ、バケツを逆さにしたようなデザイン。だけど、ひとつだけ違うところがある。

それは単眼、シャペルの目は二つだけ、ヴァーミリオンの目は真ん中にひとつだけ、単眼仕様になっていた。

カメラのレンズのような形状の赤い目……、その目がガルディック・バビロンを捕捉する。

「やれ、ヴァーミリオン、やつらを焼き払え」

人見彰吾の命令が下される。

ギギギギ……。

その赤い目で照準を合わせる……。

「ひっ!」

ピキーンツ、という鼓膜を貫くような高い音が響き、私は反射的に耳を塞ぐ。

その直後、ヴァーミリオンの赤い目から同じ色の赤いレーザー光線がガルディック・バビロン目掛けて伸びていく。

そして、そのレーザー光線が虫の身体に触れた瞬間爆発する。

「ころびー」

「ひろびー」

ガルディック・バビロンが爆発四散する。

10体のヴァーミリンの赤い目から次々とレーザー光線が発射され、そのたびに虫共が爆発していく。

ピキーンツ。

「ひっー!」

私はそのレーザー光線の発射音、ピキーンツ、という鼓膜を貫く高音を聞いたたびにビクツとなり身をこわばらせてしまう。

「なんなの、この音……、ひっー!」

耳を塞いでいるので、その後の爆発音はあまり聞えない。

ピキーンツ。

「ひっー!」

鼓膜というか、耳の奥をアイスピックで刺されたような感じ。

ピキーンツ。

「ひっー!」

でも、そのピキーンツ、という音が徐々に小さくなっていく……。

私はおそろおそろ耳から手を離し、前方のヴァーミリンを見る。

10体のヴァーミリンが虫共を焼き払いながら、火の海を悠々と歩き、前進していく……。

その姿にぞっとする……。

レーザー光線による攻撃の苛烈さに、虫共は近づくことさえ叶わずに焼き殺されていく……。

それは、まるで……。

「はははは! どうした虫けら共、文字通り虫けらのように殺さるだけか!? 歯ごたえがないやつらだな、もう少し頑張れよ!!」

人見が興奮気味に高笑いする。

「すげえ……、さすが人見さんだあ……!」

「あんなに強かったのか、あのロボット……!」

「ああ、圧倒的だな、過小評価していたようだな……!」

「すごい攻撃力だ……!」

その光景を見て、みんなが口々に感想を述べる。

「超常の力って、ホントにあったんだ……!」

「なんでも、辺境の奥地には神の力を持つ一族がいるとか……!」

「俺も聞いたことがある、辺境には凄まじい力を持つ、剣の民族が存在するらしい……」

「それが、全部、ここ、東方辺境方面の話だとしても言うのか……」
兵士たちの話し声も聞えてくる……。

もちろん、凄いピンチで死も覚悟していたから、そのことについて人見に文句を言うつもりはないけど……、あんなの出したら、魔法とかそういうの全部ばれちゃうじゃない……、それを隠すためにみんな頑張ってきたのに……。

そう愚痴りたくもなる。

「まあ、いいや、とりあえず、ここを切り抜けて、生きて帰ることが先決、魔法のことはあとで言い訳を考えておけばいいよ」

気持ちを切り替える。

砦内の至るところで火の手が上がり、それとともに風が出てくる。

上昇気流により、長い金髪がバサバサと風にはためく。

私はそつと手で髪を押さえ、ヴァーミリオンが進軍する先を見据える。

砦が炎により真っ赤に染まっている……。

「帝国騎士の諸君！　これが神の軍勢の力、天滅あまほろほすの力だ!!」

シャイカー・グリウムが大声で叫ぶ。

「今こそ復讐の時、虫共に思い知らせてやれ！　人類の強大さをな！

さあ、追撃の時だ、帝国騎士団よ、進軍せよ！　我々には神の軍勢がついている、虫共など恐るるに足らず!!」

「「おおおおお!!」」

その号令に兵士たちが剣を空高く突き上げ叫ぶ。

「いびろー」

「こびろー」

「死ね、むしころー！」

「仲間の敵だ！」

形勢は逆転、人間側の反撃が始まった。

「ころびー……」

「ひろびー……」

知能が裏目に出たのだろう。

虫共は明らかに、形勢が不利なのを悟り、弱気になり始めていた。どれほど強かろうと、戦う気のないやつは弱い、次々と人間たちに追い詰められていく。

「出入り口を封鎖しろ、一匹足りとも逃げすな、近隣の村々に被害が出るからな！」

「「おおおおお!!」」

ヴァーミリオンが先行し、そのレーザー光線でガルディック・バビロンを焼き払う。

そして、兵士たちはそのうしろに続き、レーザー光線から逃れた虫共に止めを刺していく。

「大丈夫か、しつかりしろ！」

「今助けに行くからな、気をしつかり持て！」

さらには怪我人の救助にもあたる。

「大勢は決したな、小娘？」

シェイカー・グリウムが私たちのところへやってきて言う。

「ええ」

仲間の攻勢を見ながら返事をする。

「それにしても、あんな秘密兵器を隠し持っていたとはな、なぜ、それを先に言わん、危うく全滅するところだったぞ？」

と、言い、ニヤリと笑う。

「ふっ……、私たちも出たくはなかったわよ、それだけ虫共が強かったってこと、出さざるを得なかったの」

つられて笑い、そう言い返す。

「おお、いかん、いかん、建物にまで燃え広がっているではないか……」
彼がそう言い、

「地下に大勢の剣闘士や捕虜たちが捕らえられている、焼け死ぬぞ、救助に向かうぞ!!」

と、声を張り上げて前線に走っていく。

「先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトーを討ち取ったぞおおお!!」

「地下闘技場で討ち取りましたああああ!!」

「おお、よくやった、貴様らには褒美をくれてやるぞ、二階級特進だ!!」
「はっ!!」

「ありがとうございます!!」

そんな景気の良い会話も聞えてくる。

「あらかた片付いたな……」

人見が人差し指でメガネを直しながら言う。

「うん……」

彼の言う通り、まとまった虫の集団はなくなり、散発的に見張り台の上や建物の陰に隠れているものだけになっていた。

「あれでは、ヴァーミリオンも役には立たんか……」

大勢の兵士たちが走り回り、残党処理や怪我人の救助にあたっており、ヴァーミリオンも迂闊に、そのレーザー光線を発射出来なくなってきた。

「うん、みんなに当っちゃうよね……」

その光景を見ながら返事をする。

「よし、撤収だ、魔力も惜しい」

と、彼は手を空にかざし、

「キネティック・エネルギー・アレイ・ヴァーミリオン」

そう、言葉を発すると、10体のヴァーミリオンがVLS垂直発射式ミサイルのように、爆音を轟かせ空高く飛んでいく。

「あーん」

口を開けて、空を見上げる。

まぶしい光点が尾を引きながら、花火のように、放物線を描き空の彼方へ消えていく。

方角はラグナロク、おそらく、ヒンデンブルクの飛行船に帰艦するものと思われる。

やがて、その光点も見えなくなる……。

あれは強力だけど、あんまり使えないんだよね……。

ヴァーミリオンの動力は人見彰吾の苦痛……。

彼がナイフを手に突き立てて、ぐりぐりえぐって、その痛みを魔力

に変換してヴァーミリオンの動力としている……。

その行為を何度もやらせるわけにはいかない……、というのが東園寺や各班長たちの意見。

「それでは、捕らえられていた者たちの解放に行つてきます！」

「行つてきます！」

と、ノデイロス村の村長ドレンとメテイス村の副村長エスタレンが言う。

そのうしろには数は少ないけど、ナスク村の人たちもいる。

「俺たちも行こう」

「ああ、そうだな、東園寺」

「そうだ、思い出した！」

ザトーの暗殺以外にも私たちには目的があつた。

それは、ナスク村の人たちの救出。

ラグナロクの新ナスク村には身寄りのない老人や子供たちが大勢いて、その人たちの生活物資、とりわけ食料、水に苦慮していた。

なので、その家族を救出し、身寄りのない人たちを引き取ってもらい、ラグナロクから出て行つてもらおうという算段になっていた。

「いくぞー！」

「「「おおおー！」」」

東園寺のかけ声のもと、私たちは最後の作業に取りかかる。

第125話 クロスフォー

私たち、セイレイを含めた7人は各村の村長や村民たちと一緒に捕虜の救出に向かう。

カツカツと石畳の階段を叩く軍靴の音が壁に反響する。

「暗いから気を付けろよ、ナビー」

うしろから秋葉に注意される。

「うん」

等間隔に松明が設置はされているが、それでも階段や通路は薄暗く、また、足元も非常に見え辛かった。

「おーい！ 誰かいないかあ!？」

「助けに来たぞお！」

「いるなら返事をしろお！」

と、村長や村民たちが大声を出しながら各部屋の扉を開けて中に誰かいないか確認する。

「誰もいない」

「ここじゃないのか？」

「じゃあ、どこに？」

「地下でなんかやつてるって話じゃなかったか？」

と、ひとしきり、各部屋を見て回ったあとに話す。

「くそお！ みんなはどこだあ!？」

「落ち着け、どこかに奥に行ける通路がないか探せ」

「「おお！」」

と、村民たちが散っていく。

ぴちゃん、ぴちゃん、と水滴が落ちる音がやけに大きく聞こえる。

「ねえ、セイレイ、あなたが捕らえられていた場所ってどこだっけ？」

あなた以外にも大勢の人が捕らえられていたよね？」

「あそこは剣闘士専用の独房です、ファラウェイ様が期待されているような方々の投獄は考えられません……」

私の質問にセイレイがそう答える。

「そっか……」

人道的に剣闘士たちも助けたほうがいいよな……。

いずれ、火の手が回り、このリープトヘルム砦は焼け落ちる。焼死は苦しいからね、助けられるのなら助けたほうがいい。

「投獄されてる剣闘士たちも助けよう」

私は東園寺に提案する。

「剣闘士……？」

彼は怪訝そうな表情を見せる。

「通路があつたぞお！」

「ここから下に行けるぞお！」

その時、そんな大声が通路に響く。

「おお、あつたか！」

「やはり、もつと下の階に捕らえられているのか！」

と、大勢の村民たちが大声のしたほうに駆けていく。

「話はあとだ、ナビーフイユリナ、俺たちも行くぞ」

「あ、う、うん……」

と、私たちもそのあとを追う。

下へと続く階段はそれなりの広さはあるけど、それまでの通路や階段と違い、壁に松明が設置されておらず、暗闇に包まれていた。

「よし、火を持ってきたぞ！」

と、村民の一人が木の棒に火を点けただけの物を持ってくる。

「いくぞ！」

そして、その人を先頭に階段を駆け下っていく。

階段はまっすぐではなく、曲がりくねり、非常に見通しの悪い造りになっていた。

また、天井も高く、その天井付近には排水溝らしき横穴も多数確認できた。

「嫌な感じ……、人ひとりくらい這って通れそう……」

その横穴を見ながらつぶやく。

それにしても、長い……。

何メートル駆け下つただろう……、5階分……、いや、もつとだろ
うか……、底が見えない……。

「暗い！ ちょっと待ってくれ！」

「何も見えん、先頭止まれ！」

「それかもう一つ松明を持ってきてくれ！」

私たちの、さらにうしろの村民たちからそんな声上がる。

そう、持ってきた松明は先頭の一つだけ、集団の中央付近にいます。思われる私たちでさえ、その明かりをかううじて視認できる程度になっただけ。

うしろを振り返ると、そこはもう暗闇……。

ぞつとする……。

そして……、

「あつぎやあああああ!!」

という絶叫と共に、松明の明かりは消え、周囲が暗闇に包まれる。

「な、何があった!?!」

「暗い、暗い!」

「あ、明かり、明かりをくれえ!!」

一気にパニックになる。

「ぎやあああああ!!」

「おげあああああ!!」

「た、助けて、助けてええええ!!」

そして、先頭のほうからは悲鳴や怒号が飛び交う。

「逃げろ、逃げろお!!」

「全員、退避、退避いい!!」

「どけろ、どけろおお!!」

下から大勢の村民たちが駆け上がってくる。

「ナビーフイユリナ、壁に寄れ、他も人波に飲まれるなよ」

「うい」

「おう」

私は東園寺に手を引かれ壁際に連れて行かれる。

「怖い、怖い、怖い!」

「誰か、助けてえ!」

「なんか、いる、なんか、いるううう!」

と、そんな叫び声を上げて我先にと階段を駆け上がっていく村民たちをやり過ごす。

やがて、村民たちはいなくなり、私たちが先頭で取り残される。

「あれえ……、誰かと思ったら、皆殺しのジオルカじゃないの、どうしたの、おまえ？」

階段の下、暗闇の奥からそんな声が聞こえてきた。

「なんか、無様に負けて、先帝陛下からご不興を買ったとか聞いたけど」

「その負け犬がなんでこんなところにいるんだよ？」

「上、騒がしいけど、なに、叛乱か何か？」

「もしかして、おまえの仕業？ 皆殺しのジオルカさん？ 裏切っちゃった？」

一人ではなく、複数の声が聞こえてくる。

会話の内容からすると、セイレイと同じ、剣闘士の連中だろうか……。

「無視すんなよ、皆殺しのジオルカさんよお、一緒に大勢の罪のない村人たちを殺した仲じゃないかあ……」

「あ、おまえが強いのは、武器を持たない女子供にだけだったな、ぎやはははは！」

返事をしないセイレイに嘲笑を浴びせかける。

「なんと言っているんだ、ナビーフイユリナ？」

現地の言葉がわからない東園寺が尋ねてくる。

「真意はわからない……、でも、敵意のある言葉だよ、あれ……」
と、だけ答える。

「そうか……」

カチャリ、と、東園寺が剣の柄を握り、鯉口をきる音が響く。

「おお？ やるのか、やつちやうのかあ？」

「俺たちと？ おまえらが？」

「逃げるよ、つまんねえから、ぎやははははは！」

やつらが嘲笑う。

「そっちは……、ひー、ふー、みー……、7人か！」

「奇遇だな、こつちと同じじゃねえか！」

「団体戦やろうぜ、ぎやははははは！」

カチャリ、カチャリ、と、暗闇の奥からもそんな音が聞えてくる。
おそらく、武器に手をかけた。

「みんな、やるみたいだよ……」

私は和泉たちにそう告げる。

「ああ、殺気でわかる……」

「いつでもいいぜ……」

と、みんなも武器を構える。

「それにしても真っ暗だな、なにも見えん……」

人見がポツリと言う。

「そうね……」

私はそう言い、ドラゴン・プレッシャーを石畳の階段に向かって
マッチの要領で横に払う。

すると、バチバチバチ、という音を立てて火花が散る。

「お？」

「う？」

「なんだ？」

火花に照らされ、やつら、剣闘士たちの姿が一瞬だけ見えた。

「全員、揃いも揃って黒装束かよ……」

やつらの姿を確認してクスリと笑う。

「それじゃ、ぶっ倒すよ」

私はドラゴン・プレッシャーを振り上げ、やつら、剣闘士の一団に
向かって斬り込む。

「来たぞ、ぶっ殺せえ！」

「団体戦だ、シフト行くぞお！」

「シールドバッシュ！」

それに呼応して、剣闘士たちも慌しく動く。

でも……、

「もう遅いんだよ」

私の振り上げたドラゴン・プレッシャーがガリガリと音を立て

て天井を削り、火花を散せる。

「また、火花か？」

「い、いや、待て……」

「えっ……？」

やつらが位置を気取られるのを嫌い、動きを止める。

「じゃあな」

その隙を突いて、そのまま大剣を振り下ろす。

「ぎやああああああ！」

「なんだあああああ！」

「て、天井があああ！」

ドラゴン・プレツシャーの剣圧によって天井は引き裂かれ、崩れ、巨

大な石がやつらの頭上に降り注ぐ。

「あ、頭があ、頭があ！」

「どうなってんだ、どうして、天井が崩れるんだあ!？」

「足が挟まった、誰か助けてくれ！」

暗闇で見えないけど、やつらの悲鳴で大体察しがつく。

「けほ、けほ……」

と、舞った埃を手で払う。

「くそがああああああ！」

「ふぎけんじゃねえぞおお！」

天井から落石を免れた剣闘士たちが私に向かってくる。

「シロス、権力によらず、暴力によらず、その身を押し、シュトラゼ追い風」

「ぐあああああ！」

人見の魔法によって強風が吹き、やつらが吹き飛ばされる。

「レージス、光を閉ざした虚無の剣、弾けて砕け、デイバロマ剣気破弾」

そして、残りの一人も東園寺の魔法剣によって斬り倒される。

さらに、ヒュン、ヒュン、という風を斬る音も聞える。

「くあ、なにが!？」

「矢か、どこから!？」

「ぐあー！」

暗闇の奥から悲鳴だけが聞えてくる。

「ナビーの火花のおかげで、おまえらの位置は確認済みなんだよ……」
そう、それは秋葉蒼の十字弓だった。

「ハル、獺人、気付いてるよね?」
うしろにいる和泉と佐野に聞く。

「ああ……」

「うい」

二人が返事をしてくれる。

「なら、いい……」

と、言い、ドラゴン・プレッシャーをゆつくり真上に振りかざす。
その過程で剣先は床や壁をこすり、バチバチと火花を散らし、辺りを照らす。

「おらああああああ!!」

火花が辺りを照らした瞬間、壁目掛けて佐野の鉄槌が炸裂する。

凄まじい轟音を上げて、石の壁が粉々に砕け散る。

「くそお、なんでばれた!?!」

「や、やられた!」

「こつちもだ!」

崩れた石壁の中から声が聞こえてくる。

そう、あの細い排水溝、その中にも何人が隠れていた。

「おらああああああ!!」

さらに、佐野が何度も石壁に向かって鉄槌を叩き付け続ける。

「ぐあああああ!」

「ぎゃああああ!」

その度に壁の中から悲鳴がする。

「7対7とか言っておきながら、やっぱり、他にもいるんじゃない」

と、少し笑いながら言っただけ。

「くそがああああ!」

「死ねやああああ!」

たまりかねて中から出てきた……。

「エンベラドラス、殉教者の軍勢、死の絶望が汝を燃え上がらせる、炎を纏え、^{エゼルキアス}双炎爆裂」

飛び出してきた剣闘士たちは和泉春月の魔法剣によって斬り倒される。

「ぶっ……」

と、セイレイが吹き出した。

「うん？ どうしたの、セイレイ？」

ドラゴン・プレツシャーを肩に担いで彼女を見る。

「いえ、失礼しました……、本当に、皆様方が神の如くお強いので思わず笑ってしまいました……、信じていただけないかもしれませんが、彼らは超一流の、それこそ、帝国を代表するような剣闘士たちだったのですよ……、それを、これほど短時間で圧倒するとは……、あはははっ……、すみません……、くく……、本当に……」

と、彼女が笑いを噛み殺しながら話す。

「へえ……、そんなに強かったんだ、あいつら……」

セイレイにつられてクスリと笑う。

第126話 反証可能性

「降参しろ」

階段をゆつくりと下りながら、現地の言葉で話す。

「一応、おまえらも団体戦とか言ってたから、これは剣闘士の試合ということでいいよ、降参するならそれで終りにする……」

そこで一度言葉を切り、ドラゴン・プレツシヤーを横に払うように一回転させ、床や壁、天井を剣先で削り、火花を散らせる。

火花の明かりでやつらの姿を確認し、

「でも、しないとと言うのなら、試合はここまで、次からは戦争、全力で殺しにいく……」

低い声で言い放つ。

静寂、カツ、カツ、カツ、という私の足音だけが壁に反響し、辺りに響く。

「わ、わかった、降参する、試合は終わりだ、逆らう気はない、助けてくれ、参った……」

沈黙のあと、一人の剣闘士からそう返答があった。

「賢明ね……」

階段を下りるのをやめて言う。

そして、振り返り、階段の上を見る。

ゆらゆらと複数の明かりが見える……。

その明かりに照らされ、東園寺たちの姿も見えるようになる。

「敵はどこだあ!?!」

「大丈夫ですかあ!?!」

逃げ出していた村民たちだろう、東園寺たちのうしろから大勢の人間の声と階段を駆け下りる足音が聞えてくる。

「こいつらが敵かあ!?!」

「仲間の敵だ、ぶっ殺してやる!」

と、駆けつけた村民たちが口々に叫び、剣を抜く。

「ああ、公彦、とめて、この人たち降参したから」
階段を上りながら言う。

私たち7人は東園寺の指示で、さらに遠くまで避難する。

暗闇の荒野ではポツリ、ポツリ、と、まるでかがり火のように、木や草むらが燃え上がっている。

「相当遠くまで火の粉が飛んで行ってるな……」

その光景を眺めながらつぶやく。

「虫は!? 虫はどうしたあ、一匹たりとも逃がすなよ、皆殺しにしろ!!」

「はい! 人っ子一人通しません!」

と、大勢の兵士たちが巨大な虫、ガルディック・バビロンの駆除に走り回り、防衛線を築き、リープトヘルム砦を隙間なく包囲する。

「いびろー」

「こびろー」

「この野郎!!」

「逃がさねえぞ!!」

炎の中から飛び出してくる傷ついたガルディック・バビロンに止めを刺していく。

「ころびー……」

「ひろびー……」

その数も徐々に減っていき、虫共の声も聞こえなくなる……。

「でも、これで終わりかあ……、疲れたあ……」

「ああ……」

みんながその場に座り込み、燃え上がる砦をぼんやりと眺める。

「よいしょ……」

と、私は白クマのリュックサックを降ろして中から水の入ったペットボトルを取り出す。

「みんな、適当に飲んで」

それを秋葉たちに投げる。

「サンキュ」

「ありがと」

みんながペットボトルの水を回し飲みする。

私は自分用のペットボトルを取りキャップを開けて一口飲む。

「ふう……」

と、一息つき、燃え上がるリープトヘルム砦を眺める。

「あ、セイレイも飲んで」

私は手にしたペットボトルを彼女に渡す。

「ありがとうございます」

と、彼女はペットボトルの水を飲む。

「それにしても、何かやり残したことはないだろうか……」

ザトーを殺して魔法のネットワークスは回収した……、それは、今のセイレイが首にかけている。

「はい？」

私の視線を感じて、彼女が首を傾げる。

「ううん、なんでもない」

また視線をリープトヘルム砦に戻す。

「それから……、捕虜たちの救出……」

私たちから少し離れたところに大勢の村民たちがいて、その近くに座り込む捕虜たちの姿が見える。

たぶん、捕らえられていた人はすべて救出できたと思う。

あとは砦の破壊……。

燃え上がる砦を見る。

あの勢いならば、すぐに燃え尽きるだろう……。

とりあえず、私たちの目的はその三つだけ……、それ以外にも、あの虫、ガルディック・バビロンの駆除もしないといけない……。

そして、なにより大事なことが残っている……。

「な、何をする?!」

「俺たちは仲間じゃなかったのか!？」

帝国軍、辺境伯の兵士たちが、リープトヘルム砦の守備隊の兵士たちに武器を向ける。

そう、それは口封じ。

私たちがリープトヘルム砦を攻め、先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトーを暗殺したことを帝国本土に知られないようにする……。

「貴様は千騎長アンバー・エルルムの副官だなあ!？」

シエイカー・グリウムが守備隊の一人に大股で近づいていく。

「な、何を!？」

その守備隊の一人が怯み、一步、二歩と後退する。

「すまん、これも帝国のためだ……」

小さく言い、

「どらあああああ!!」

と、一刀のもとにその守備隊の一人を斬り捨てる。

「斬れ、斬れえ! こいつらは叛乱の首謀者千騎長アンバー・エルルムに付き従った逆賊共だ、先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトー陛下をたぶらかし、終いには暗殺までしかした帝国に弓引く大罪人共だあ!!」

「し、知らない、何の話をしているんだ!？」

「うぎやあああああ!」

「やめろ、やめろおおお!」

「俺たちは仲間だあ!」

と、守備隊の者たちが次々と斬り殺されていく。

「ぎやあああああ!」

「ひひひひひひひひひひ!」

私はそつと視線を落とす。

仕方ないこととはいえ、なんか、胸糞悪いなあ……。

「あぎやあああああ!」

「うげあああああ!」

鳴り止まない悲鳴……。

生き残りの守備隊は500人以上いる……、そのすべてを殺害するつもりだろうか……、それとも千騎長アンバー・エルルムの部下だけを……。

その光景を見る。

「ぎやあああああ!」

「ひひひひひひひひひひ!」

「あぎやあああああ!」

「うげあああああああ！」

全員殺す気だ……。

「敵とはいえ辛いな、見てられない……」

「いや、敵じゃないだろ、みんな協力して虫共を駆除した仲間だろ……」

秋葉と和泉の会話だ。

「やめろ、やめろおおお！」

「俺は敵じゃない、やめろよおおお！」

守備隊の兵士が逃げ惑い、後ろから斬り殺されていく……。

「くっ……」

和泉たちが視線を逸らす。

「ぎゃあああああああ！」

「あぎゃあああああああ！」

……。

私は無言で立ち上がり、そして、ドラゴン・プレッシャーの柄に手をかけ、それを引き抜き、

「とりやあああああああ！」

と、虐殺の現場の中央に渾身の力で投げつけてやる。

「なっ!?!」

「ひっ!?!」

大剣は轟音とともに地面に突き刺さり、盛大に砂煙を上げる。

辺りは静まり返り、両軍の兵士が私を見る。

「気分悪いからさ、その辺でやめてもらえないかな?」

ゆつくりと、ドラゴン・プレッシャーの元に歩きながら言う。

「それに、この人たち何も知らないよ、千騎長アンバー・エルルムに騙されてただけなんだから……、そうだよね?」

と、守備隊の兵士たちに問いかける。

「そうだ、何も知らない、誤解なんだ！」

「助けて、助けて、全部、千騎長がやったことなんだ！」

「俺たちは何もやっていない！」

「もうやめてくれ、家に帰る！」

と、泣き叫び、我先にと私たちのうしろに逃げていく。

「だ、そうよっ。」

辺境伯の兵隊、その真ん中にいる赤いマントの男、シェイカー・グリウムに軽く笑いかける。

第127話 謀を伐つ

シャイカー・グリウムが私を睨みつける。

「信用できるか……、やつらの口を封じなければ、次やられるのは我々のほうだ……、そこをどけろ、小娘」

と、彼が凄む。

「降伏している相手は殺すな、もう敗残兵ですらないのだから、適当に捕らえて個別に尋問し、問題がなければ解放してやればいいだろう」
ハーグ陸戦条約やジュネーヴ条約に慣れ親しんだ身としては、彼らのやり方には嫌悪感を抱いてしまう。

「俺たちもナビーと同意見だ……」

と、和泉たちも来てくれて、私のうしろに立つ。

「みんな……」

頼もしくみんなを見上げる。

「生温い！ それでは我々の身が危険に晒される！ 貴様等もだ！」
シャイカー・グリウムが大声で言い、大股でこっちに歩いてくる。

「うーん……」

聞く耳持たずか……。

ひゅーん。

「そこをどけろ、小娘！」

彼が近づいてくる。

「うーん……」

ひゅーん。

「ひゅーん？」

なんか、空からそんな音が聞えてくる。

「あーん」

と、真つ暗な空を見上げる。

ひゅーん。

「あーん？」

私につられてシャイカー・グリウムも空を見上げる。

ひゅーん。

何かが高速で落ちてきた。

それも、シエイカー・グリウムの真上に。

「おわああああ!?!」

慌ててシエイカー・グリウムがその場を離れようとする。

でも、間に合わずに上空からの落下物の衝撃に巻き込まれてしま
う。

「な、なに……?」

激しく舞った砂埃から目を守りながら、その落下物に視線を向け
る。

「ピポロツポ」

びぽろっぽ?

それは、ライトブラウンのロボット、

「シャペル?」

だった。

「なんで?」

ヒンデンブルク広場の飛行船に帰ったんじゃないの?

困惑する。

「ピポロツポ」

と、シャペルは私の姿を確認して、嬉しそうにその頭を上下させる。

「シャペル」

でも、どこかおかしい……、動きが鈍く、その場から立ち上がれな
いようだった。

白い翼も格納されていて見ることはできない……。

「どうしたの、シャペル?」

心配になって彼に歩み寄る。

「ピポロツポ……」

元気がない……。

「ピポロツポ……」

必死に顔を上げ、私に何かを訴えかける。

「うーん……」

「ピポロツポ……」

元気がない……、つまり、エネルギー切れか……？

「ああつ!？」

そうだった、シャペルが飛べるのは、この魔法のネックレスのおかげだった。

私は、革の手袋の上からぐるぐる巻きにして握っていたネックレスを見る。

「そっかあ……、そういうことか……」

エネルギー切れが心配で、ラグナロクまで飛んで帰れるか不安だったんだね、だから、上で旋回して私の帰りを待っていたんだね……。

「ごめんね、シャペル……」

と、彼のバケツみたいな顔の頬に手を当てる。

「ピポ……」

力なく返事をする。

「よし！　じゃあ、エネルギーを充填しよう！」

と、ネックレスを持つ手を振り上げる。

「おごごご……」

その時、どこかからか、そんな声が聞こえてきた。

「あーん?」

声の主を探す。

きよろきよろ探すけれども見当たらない。

「どこだあ?」

と、私はシエペルの背中に乗って遠くを見渡す。

「いない……」

「おごごご……」

おお?　近くから聞えてくるぞお?

と、シャペルの背中で四つん這いになって、その下を覗き込む。

「いた!」

赤いマントの短い金髪の男、シエイカー・グリウムがシャペルの下敷きになっていた。

「おい、シエイカー・グリウムさん、平気か、怪我してないか?」

「おごごご……」

返事がない、どうやら意識を失っているようだ。

「仕方ない、助けてやるか……」

私はシャペルの背中に手を当て、

「ピュアフサージ、ヘヴンリー・ヴァルキリア」

と、小さく呪文を唱える。

「ピポポツポ、ピポポツポ」

すると、ウィーン、という駆動音とともに、シエペルのボディの繋ぎ目から光が漏れ、ギギギ、と各部を軋ませながらゆつくりと立ち上がる。

「よつと」

私は背中から転げ落ちないように肩のほうに移動する。

「ピポロツポ」

完全に立ち上がり、砂煙が風に流されていく。

「おお、結構高い……」

シャペルの肩に立ち、彼の頭に掴まりながら周囲の景色を見る。

「た、隊長!?!」

「大丈夫ですか、指揮官!?!」

と、副官たちがシェイカー・グリウムを心配して駆け寄ってくる。

「だ、だめだ、完全にのびてる!」

「す、すぐに、治療をしないと!」

「衛生兵! 衛生兵!」

衛生兵たちがタンカを持ってやってくる。

「隊長! 気を確かに!」

「というか、指揮官、指示を!」

「俺たちはこれからどうすればいいんですか!?!」

と、副官たちが、タンカの乗せられて運ばれていくシェイカー・グリウムに付き添い、声をかけ続ける。

「ええい、テントだ、テントを設置しろ!」

「はやくしろ! 隊長は重症だ!」

「どけい! どけい!」

やがて、遠ざかり、その姿も見えなくなる。

「行っちゃった……」

「ピポ……」

私はシェペルの肩の上から彼らを見送る。

「指揮官がいなくなったけど、これからどうすればいいんだ……？」

「副官たちも、みんないなかったけど……」

「千騎長アンバー・エルムに付き従った逆賊共を討伐するんじゃないかなかったのか……？」

シエイカー・グリウムの部下たちが途方に暮れている。

おお……、これはチャンス……。

「シャペル、そっち」

「ピポ……」

私はシャペルに指示を出し、シエイカー・グリウムの部隊、それと守備隊、その両軍が向かい合う中央あたりに向かわせる。

ガチャン、ガチャン、と、金属音を轟かせながら進む。

「おお……」

「あれは、神の力を持つ兵士……」

「虫共を倒した剣の一族……」

「神の雷の……」

人見のヴァーミリオンと勘違いしたのか兵士たちが恐れおののく。

そして、両軍の中央に着き、それぞれの兵士たちを見て、

「シエイカー・グリウムより指揮を引き継ぐ、全員、私の命令に従え」と、兵士たちを見下ろし言ってる。

静寂、両軍の兵士たちが私を呆然と見上げる。

少し強めの風が吹き、長い金髪と白いワンピースが風にはためく。

そっと、風でなびく髪を手で押さえ、視線を落とす。

「神よ……」

そして、ひとり、またひとりと私の前にひざまずいていく。

「うん……」

その光景に満足してうなづく。

「戦闘は終了だ、その守備隊もまた我々の仲間、あの虫、ガルディック・バビロンを共に倒した戦友だ、争うことは許さん」

静かに話す。

「「ははあ……」」

彼らが深く頭を垂れる。

「それと、この命令は遡及されない、例え、のちに指揮権がシエイカー・グリウムに移ったとしても覆すことはできない、おまえらは仲間だ、戦友だ、もし、先程と同じように守備隊に対して討伐命令が下ったとしても従うな、守ってやれ」

シエイカー・グリウムの部下たちに言う。

「「ははあ……」」

「そして、おまえたちは……」

ガチャン、ガチャン、と、シャペルを振り返らせ、今度は守備隊の兵士たちに語りかける。

「わかつているだろうが、仲間が不利になるようなことは言うなよ、戦友を売ることは許さん、もちろん、この場だけの話ではない、未来永劫だ、誓えるか？」

一応、先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトー暗殺に関して釘を刺しておく。

「「誓います……」」

と、守備隊の面々が言ってくれる。

「うん」

それを聞いて大きくうなずく。

「よし！ それでは撤収の準備をしろ！ 負傷者優先！ 護送船団方

式でいくぞー！」

そう叫び、拳を突き上げる。

「「おお！」」

と、両軍だけではなく、各村の戦士たち、さらには救出した捕虜たちまで拳を突き上げて叫び、私の命令に従い動きだす。

「こんなものか……」

ガチャン、ガチャンと音を立てて東園寺たちの元へ向かう。

「とおー！」

そして、シャペルの肩から飛び降りて、三点着地。

「みんなも撤収の準備をしてね、よいしょつと……」

私は放置したままの白クマのリュックサックを手に取り、それを背負い、次に地面に突き刺さったドラゴン・プレツシャーを引き抜き肩に担ぐ。

「よし、準備万端」

みんなを見て少し笑う。

「帰るよー！」

「「おうー！」」

こうして、リフトヘルム砦攻防戦は私たちの大勝利に終り、帝国軍と私たち、二手に分れて帰路に着くことになったのであった。

第128話 胸に木の葉が沈む

明けて翌日。

朝早くから、ここ、割と普通なナビーフイユリナ記念会館では班長会議が行われていた。

「救出できた村の人たちは合計184名……」

参謀班の班長代理、綾原雫が名簿を見ながら言う。

今は昨日のリープトヘルム砦攻めで発生した問題について話し合われている。

ちなみに戦争の勝利報告は昨日帰ってすぐに済ませてある。

「その内訳は……、ノデイロス村が88名、メティス村が37名、テルベア村が30名、クシユー村が29名……、そして、肝心のナスク村は……0名……」

彼女が溜息混じりに言う。

そう、目的の一つである捕らえられているナスク村の人たちの救出はならなかった。

「そして、この184名は、各村が壊滅して行く場所がないと……、しかも、家族たちもどこかに逃げているだろうから、招き入れたいと……」

綾原が頭を抱える。

プラグマティッシュエ・ザンクツイオンに身を寄せている身寄りのないナスク村の人たちを引き取って欲しくて行ったリープトヘルム砦攻めが、逆に大勢の難民たちを受け入れる形になってしまった。「もとからいるナスク村の人たちと合わせて300名以上になってしまったけど……、これからどうすればいいの……?」

綾原が腕組みをして目を閉じている東園寺を見て尋ねる。

「出て行ってもらう、という方向性に変わりはない」

「だから、どうやって? 彼らには食料もない、怪我人もいる、働けない老人や子供たちもいる、そんな彼らに出て行ってくれと頼むの?」

それとも無理矢理追い出すの? そんなことが人道的に許されると思えるの?」

と、綾原が東園寺の言葉に反論する。

「村を作るってのはどうだろう?」

狩猟班の班長、和泉春月が東園寺に代わって発言する。

「このカルデラの外、そうだな、旧ナスク村の辺り、そこで、農業や畜産をやってもらい、その収穫物を俺たちが高値で買う、それなら、経済的にも自立してやっていけるはずだ」

「そして、その収穫物を高値で買えるだけの外貨を私たちが帝国との交易で稼ぐ、と……?」

和泉の話を生括班の班長、福井麻美が引き継ぐ。

「そうだ、福井、それなら経済が回る」

自信を持って和泉が言う。

「時間はかかるけど、それが一番良い方法かもしれないね……」

綾原もそれに同意する。

「なら、和泉の案でいくか……、各村の村長には俺から提案しておく」

「よろしく頼む、東園寺」

会議が長引くかと思っただけど、あっさりと話がまとまる。

「ちよつと待って、みんな、大事なことを忘れてるよ」

まとまらなかった。

「ナスク村の人はひとりもいなかったんでしょ? そのリープトヘルム砦に?」

と、女性班の班長、徳永美衣子が質問する。

「ああ、どこかに連れ去られたあとだった……」

その質問に東園寺が答える。

「そう、処刑されたんじゃないやなくて、どこかに移動しただけなんだよね?」

もし、居場所がわかったら、助けに行くの? 今回と同じように、そ

れを聞いておきたかった」

「戦争は極力避ける、もし、居場所がわかったら、辺境伯を通して交渉し、金で解決する」

「よかった、安心した、もう戦いは嫌だよ、昨日も誰か死ななかつた、すごいのははらしたんだから……」

と、徳永が少し涙ぐむ。

その声を聞いて安心する。

カラン、コロン、カラン、コロン、と、馬車は進み、ルビコン川に架かる橋、ブリッジ・オブ・エンパイアを渡り、プラグマティツシエ・ザンクツイオンの入り口に差し掛かる。

「馬車来た！ 馬車来た！」

「わああ！ ナビー様が来たよ！」

「ほんとだあ！ ナビー様だあ！」

と、私の馬車を確認するなり、大勢の子供たちが駆け寄ってくる。

「よーし」

馬車の中に頭を引っ込める。

いつもなら、細切れの新聞紙を投げてやるところだけど……、ここでは新聞紙などの紙が案外貴重なので、そんなにはばら撒けない……。

そこで……。

「それえ！」

と、馬車の中に敷き詰めてあつた乾燥させたイネ科の草、ワラを一掴みし、馬車のうしろを追い駆けてくる子供たちの頭上に投げてやる。

「わああああ！」

ワラは風に吹かれ空を舞い、ゆつくりと子供たちの頭上に降り注ぐ。

「すごおい！」

子供たちが空に手を伸ばし、風に舞うワラを掴もうとする。

「楽しい！」

飛び跳ねてワラを追い駆ける。

「それえ！ それえ！」

気を良くした私は何度も馬車の中からワラを掴み、子供たちの頭上に投げつけてやる。

「ああ！ それ私のお！」

「早い者勝ち！」

子供たちも大喜び。

「どう、どう……」

と、御者役である和泉春月が馬車を止める。

どうやら、目的地に着いたようだ。

「お姫様、どうぞ」

と、夏目翼がにこやかな笑顔と仰々しい仕草で馬車の扉を開けてくれる。

うん、最近彼女がよくやるお姫様ごっこだ……、たぶん……。

「ありがとう！」

と、私はふかふかのワラを掻き分けて、外に転げ出る。

「じゃあ、仕事に入るか、俺とハルと佐野は市場の見回り？」

「ああ、治安維持だ、他所から来ている者も多い、喧嘩とか何か問題を起こしている奴は遠慮なく叩き出していいからな、獺人」

「うい、和泉さん」

と、狩猟班の男子たちが話している。

「こっちは買出しね……、麻美たち何て言ってたっけ？」

「生肉は避けて、加工肉だけ、特に鶏肉は避けてって、カンピロバクター菌が心配だから、だって……」

「注文多いね……」

と、こっちは女子、雨宮が夏目の手にするメモの書きを覗き込みながらつぶやく。

「ナビー様、ナビー様、お時間ありませんか？」

子供たちが私の袖をちよん、ちよん、と引いて言ってくる。

「あのね、あのね、ナビー様にお見せしたいものがあるの」

「見せたいもの？」

首を傾げる。

「いいよ、ナビーちゃんは遊んでて、こっちはこっちでやっつくからさ」

と、笹雪がメモ書きとにらめっこしながら言う。

「うん、じゃあ、いこっか！」

「わあい！」

「ほんと？ 嬉しい！」

「行くうー！ っつちだよー！」

子供たちに袖を引っ張られ、背中を押され、急かされるように連れて行かれる。

そして、連れて行かれた先は、ナスク村の人たちの居住区、簡素な家々が立ち並ぶ一角、さらに、そこから奥に入った小さな広場。

そう、そこは子供たちの遊び場。

「1、2！ 1、2！ 1、2！」

「えい、やあ！ えい、やあ！ えい、やあ！」

子供たちのかけ声が聞えてくる。

今日も練習やってるのかあ……。

そういえば、この子供たちは私の親衛隊になったんだっけ……。

名前はなんだっけ……。

「ファアーイースト・ドラニニック・コア、気合を入れろー！」

年長者のタジンが私の姿を確認して、気合を入れ直す。

そうそう、思い出した、ファアーイースト・ドラニニック・コア、かつ

こ良く言えば、東の果ての竜騎兵团だ。

第129話 決起

「1、2！ 1、2！ 1、2！」

「えい、やあ！ えい、やあ！ えい、やあ！」

20人以上はいるだろうか、その子供たちの素振りが続く。

「さっ、ナビー様」

「こっち、こっち」

素振りをしている子供たちを横目に、私はぶらん、ぶらんする揺り椅子、ロッキングチェアの前に連れていかれる。

「おお……」

ぶらん、ぶらんだ……。

私は大喜びで揺り椅子、ロッキングチェアに腰掛け、ぶらん、ぶらんする。

「1、2！ 1、2！ 1、2！」

「えい、やあ！ えい、やあ！ えい、やあ！」

その間も子供たちの素振りをする掛け声が広場に響く。

「お飲み物は何にいたしましょうか？」

「いたしましょうかあ？」

少女たちがぶらん、ぶらんする私の顔を覗き込みながら尋ねてくる。

「うーん？ 何があるの？ ぶらん、ぶらん」

ぶらん、ぶらんしながら聞き返す。

「えつとね、タビーヤとねえ……、エレンナツツとねえ……」

タビーヤはあまーいヨーグルトドリンクにつぶつぶ果肉が入っている飲み物で、エレンナツツはバナナジュースに少し塩をいれたような、スポーツドリンクに似た味わいの飲み物。

「あとはあ……、ベルゲンデン・ゴトー！」

と、ひとりの少女が嬉しそうに飛び上がって言う。

「ベルゲンデン・ゴトー!?!」

私は驚いて、ぶらん、ぶらんするのを止めて聞き返す。

「そう、ベルゲンデン・ゴトー！」

ベルゲンデン・ゴトーは、簡単に言えば、濃い目のイチゴ牛乳で、前にリープトヘルム砦であのザトーに出された飲み物だ。

すごくおいしかった、また飲みたくて、夢に出るほどだった……。

「じゃあ、ベルゲンデン・ゴトーで！」

と、大喜びで注文する。

「はあい！」

「ただいまあ！」

少女たちも大喜びで駆け出していく。

「1、2！ 1、2！ 1、2！」

「2！えい、やあ！ えい、やあ！ えい、やあ！」

それにしても真面目だなあ、あの子たち……。

と、ベルゲンデン・ゴトーを待ちつつ、ぶらん、ぶらんしながら、子供たちの稽古を見守る。

「気合を入れろ！」

「腰だ、腰を入れろ！」

「そこ、たるんでいるぞ！」

うーん？ ぶらん、ぶらん。

なんか、子供たちに混ざって大人たちの姿も見えるぞお？ ぶらん、ぶらん。

10人以上はいるかな？ ぶらん、ぶらん。

「はい、先生！」

「ご教示、ありがとうございます！」

とか、子供たちが言ってるんだけど……。

大人たちに教えてもらっているのかな？

「身体をまっすぐ、押手と引手を意識して……」

「はい、先生！」

と、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「顎を引いて、手首が下がっている……」

「はい、先生！」

女性の声、その人が子供たちの素振りを見て回る。

長い銀髪、白い艶やかな肌、整った目鼻立ちの美しい女性……。

「セイレイ……」

そう、彼女は和泉春月と戦った剣闘士、その敗戦により独房に入れられていたのだけど、昨日の戦争のどさくさにまぎれて私が救出した。

「フアラウエイ様……」

彼女が私を見て軽く微笑む。

「さあ、声を出して！」

すぐに視線を戻して子供たちの指導をする。

「はい、先生！」

「1、2！ 1、2！ 1、2！」

「1、2！ 1、2！ 1、2！」

なるほどね、連れ帰ったのはいいけど、ラグナロクに連れていくわけにはいかずに、適当にナスク村の村長に預けていたけど、さっそく自分の仕事を見つけたみたいね。

それに、彼女は一流の剣闘士、いい剣術指南役になるかもね……。

「おまえらも負けんじやねえぞ！」

「気合入れていけえ！」

と、セイレイ以外の大人の人も声を張り上げる。

「それにしても……、誰だあ、見たことないなあ……、ぶらん、ぶらん……」

ぶらん、ぶらんしながら、指導している大人、戦士風の男たちを見る。

基本的に難民であるナスク村の住民の中には若い男はいない。

戦える男はみんな帝国軍と戦い、殺されるか捕虜になったかどつちかだったらしいから。

なので、ここにいるのは全員女子供と老人ということになる。

「よーし！ やめえい！」

「休憩だ、少し休め！」

号令をかけて子供たちに休憩をさせる。

「挨拶がまだでしたね？」

と、タオルで汗を拭きながら指導していた大人たちがこちらに向

かってくる。

数は……、セイレイを入れて14人……。多いな……。

一時的にプラグマティッシュエ・ザンクツイオンに身を寄せている他の村の人だろうとは思うけど……。

「女神よ……」

その中の一人、先頭のやつが跪きやがった。

「誰だ？」

ぶらん、ぶらんしながら、やつを見下ろしながら言ってる。

「金暗色のシュタージでございます……」

その男は金髪……、いや、それより暗い、蜂蜜色のような髪をしていた。

精悍な顔をし、その肢体もよく鍛え込んでいることが服の上からでもうかがい知れた。

「ツアーツェクの地獄グアルディオーラです」

「紅き月のテイターノでございます……」

と、次々と私の前に跪き、自らの名を名乗っていく。

「何なの、こいつら？　ぶらん、ぶらん……」

ぶらん、ぶらんしながら、そいつらを見下ろす。

「ファラウエイ様、先日、あなた様がお倒しになった剣闘士たちですよ……」

と、セイレイが耳打ちしてくれる。

「ああ……、昨日のやつらか……」

そう、捕虜を救出に向かう時に襲ってきた連中。

でも、あっさり返り討ちにした。

「で、どうして、ここににいるの？　現地の村人と捕虜以外は立ち入り禁止って言ったよね？」

帝国の人間は誰一人として、ここへの立ち入りは許可していない。

「ええ……、帝国軍は立ち入り禁止……、確かにそういう御触れでございました……」

先頭、中央の金暗色のシュタージが口を開く。

「立ち入り禁止は帝国軍だけ……、我々剣闘士は帝国軍ではございませんので」

と、彼が顔を上げにこりと笑う。

「そちらの皆殺しのジオルカ……、いや、失礼、今はセイレイか……、そのセイレイも我々と同じ剣闘士、彼女がここにいるのなら、我々もまたここにいる権利がございますというもの」

盲点だったか……、帝国軍と村人、そのふたつの区分でしか見ていなく、彼ら剣闘士のことはすっかり失念していた。

「それに我々は貴女様に心酔しきつていのです……、昨日の戦い、お見事でした……、感服いたしました……」

「聞くところによると、なんでも、ここはナビー様の親衛隊の訓練場というではありませんか？ 丁度いい、我々が彼らに手ほどきをし、ナビー様の親衛隊として恥ずかしくないよう鍛え上げてごらんにいれますよ」

「なんなら、我々がナビー様の親衛隊に加わってもいいくらいだ」
「おお、それはいい」

「我々ならばナビー様の親衛隊として申し分ない」

と、剣闘士たちが口々に言う。

「駄目だ！ ナビー様の親衛隊、ファイースト・ドラニック・コーアの団長はこの俺だ！」

「そうよ、副団長はこの私よ！」

と、タジンとフェインが異論を唱える。

「何が団長だ、ガキの遊びじゃねえんだぞ!？」

「もう少しまともに戦えるようになってから吠えな、ボウヤ」

剣闘士たちも言い返す。

「なに!？」

と、タジンが歯軋りをする。

「落ち着いてタジン、ここはナビー様に決めてもらいましょ？ だって、ナビー様の親衛隊なんだから」

今にも剣闘士たちに襲い掛かろうとしているタジンをフェインがなだめる。

「ナビー様、私たちがファイースト・ドラクニック・コアの団長と副団長ですよ？ この人は違いますよね？ そうですよ？」

フエインが不安そうな顔で尋ねてくる。

うーん、困った……。

私ひとりでは決められない、班長会議で議論しないことには始まらない。

ぶらん、ぶらんしながら思索する。

「ナビー様……？」

フエインが泣きそうな顔になる。

ちらりと彼女の顔を見る。

「そうね、この剣闘士たちがここにいようといまいとタジンが団長、フエインが副団長、それは変わらないよ、安心して」

と、少し笑って落ち着かせるように言っただけ。

「やったあ！ 俺が団長だ！」

「嬉しい！」

二人が飛び上がって喜ぶ。

「くそお！ で、でも、俺たちも、ナビー様の親衛隊に入れてもらえるんですよ？」

「行くところなんてないっすよ、俺たち！」

「うーん、それは、どうなるかわからないあ……、他のみんなに聞いてみないとなあ……」

剣闘士たちの質問に答える。

「ナビー様あああ！」

「さまああああ！」

その時、遠くから少女たちの声が聞こえてくる。

「ベゲンデン・ゴトー持ってきたよお！」

「持ってきたよお！」

と、少女たち両手で大事そうにカップを持ち、こちらに全速力で走ってくる姿が見えた。

「ナビー様あああ！」

「さまああああ！」

満面の笑みで走ってくる……。

でも、

「あ?」

「え?」

と、先頭の少女が小石につまずき、さらにうしろの子も前の子の背中に顔をぶつける。

「きゃあああああ!」

「きゃあああああ!」

二人の身体が宙に舞い、持っていたカップも放してしまう。

「どらあああああ!」

「おりやあああああ!」

「はあああああああ!」

その瞬間、跪いていた剣闘士たちが即座に動く。

「とお!」

「はっ!」

「ほい!」

飛ぶついた剣闘士たちが地面すれすれで二人の少女を受け止め、さらにもうひとりが飲み物の入ったカップをキャッチする。

「おお、なんて身のこなし……」

私は感心して言う。

「大丈夫かい、立てるかい、お嬢ちゃん?」

「ありがとう……」

と、少女たちを地面に立たせる。

「どうぞ、女神……」

そして、金暗色のシュタージがベルゲンデン・ゴトーの入ったカップを私に手渡してくれる。

「うん、ありがとう」

それを手に取り口を付け、ひと口飲んでみる。

「あまーい……」

そして、おいしい!

「うん、いちご牛乳だ、この味大好き……」

うっとりとかップの中のピンク色の液体を見る。

「どうです？ 俺たちも役に立つでしょ？ ここに置いてもらったらもっと働きますよ？」

「死ぬ気でやります」

少女たちを救った二人、ツアーツェクの地獄グアルデイオーラと紅き月のテイターノが言う。

「うーん、そうね、使えそうね……」

ベルゲンデン・ゴトーを飲みながら彼らを見る。

全員屈強な戦士、それは申し分ない……、あとは治安の問題だけ……。

「セイレイ」

「はい、ファラウエイ様……」

横に控えていたセイレイに声をかける。

「こいつらの面倒を見てやって、もし何かやらかすようだったら追いつ出すなり、殺すなりしていいから」

聞かれないように、彼女の耳元でそう囁く。

「はい、ファラウエイ様」

ザトーの剣とネックレスを持つセイレイなら遅れを取ることもないだろう。

「それと、子供たちへの稽古のことだけど、あんまり厳しくしないでね、半分遊びなんだから」

「はい、ファラウエイ様」

「じゃあ、まかせたよ」

と、耳元から顔を離し、ロッキングチェアから勢いよく立ち上がる。

「それじゃ、あなたたちは今日より私の親衛隊ね、よく励むように」

班長会議にかけなくてはいけないけど、たぶん大丈夫でしょう。

「はっ！」

「身に余る光栄！」

「全身全霊をかけて頑張ります！」

と、剣闘士たちが大きな声で返事をする。

こうして、私の親衛隊の人員が大幅に増強されることになったので

あつた。

第130話 ワンイシュー

あれから五日が過ぎた。

辺境伯ダイロス・シャムシェイドの工作がうまくいっているのか、帝国からのリアクションは今のところ何も無い。

また、一時的に身を寄せていた他の村の人たちの立ち退きも始まり、すし詰め状態だったプラグマティツシェ・ザンクツイオンの住環境も少しずつ改善していった。

そうそう、彼ら、剣闘士たちは、ちゃんと班長会議にかけて、セイレイ共々子供たちの剣術指南役として、その滞在を了承してもらっていた。

「こんなところかな、最近の出来事は……」

と、机に向かい、ペンを片手に外の景色をボーッと眺めながら近況を考える。

白いレースのカーテンが風に揺らされるたびに青い空が見え隠れする……。

「ああ……、いい風……」

日差しは直接入ってこないけど、窓からほんのり暖かさが届き、時折吹く風がその暖かさをかき消していく。

「こら、ナビー、集中しなさい」

と、教室のうしろで私の監視をしていた徳永美衣子に叱られる。

「はあい……」

机に視線を戻す。

ここは、割と普通なナビーフイユリナ記念会館。

普段は班長会議の場として使用されている広間だけど、空いた時間には、こうやって、私の授業を行う教室としても使用されている。

「ナビー、集中してね、今まで習ったことをよく思い出すのよ、前回みたいな失敗はしないでね」

前方には私の担任の先生である綾原雫も立っている。

「はあい……」

机の上の紙を見る……。

そう、今は授業ではなく、私の何回目かの学力テスト中……。

「ええっと、次の問題は……」

なになに……。

「長野県の県庁所在地は長野市、山形県の県庁所在地は山形市、では、岡山県の県庁所在地は何市でしょうか？」

ああ？

長野県は長野市……、山形県は山形市、じゃあ、岡山県は岡山市じゃないの？

私は答案用紙に岡山市と書き込もうとする……、けど、途中でやめる。

「これ、ひっかけだ……」

岡山に岡山市なんてないよ、確かあるのは倉敷市だよ……。

「あぶない、あぶない……」

と、答案用紙にひらがなでくらしき市と書き込む。

「うん、かわいい字……」

自分の字に満足する。

「さて、次、次……」

次はなにかなあ……。

「うさぎの耳が付いているのはうさぎ、猫の耳が付いているのは猫、では、ロバの耳が付いている人は誰でしょうか？」

ああ？

ロバの耳が付いているのはロバでしょうか？

私は答案用紙にロバと書き込もうとする……、けど、何かひっかかる……。

もう一度問題を見る……。

「ロバの耳が付いている人は誰でしょうか……」

人!?

「人!？」

びっくりして声に出してしまう。

「こら、ナビー、静かにしなさい」

徳永に叱られる。

「はあい……」

それにしても、人って、どういう意味……？

うーん、わからない……、難しい、パス、パス……。

よし、気を取り直して次！

なになに……。

「大きくなると名前が変わる出世魚というものがあります。例えば、ワカサが大きくなるとブリ、セイゴが大きくなるとスズキというように。そこで、問題です、みにくいアヒルの子が大きくなると何になるでしょうか？」

魚じゃねえのかよ……。

でも、これはわかる。

毎晩寝るときに夏目に絵本を読んでもらっているから。

その中のひとつにこれがあった。

「美しい白鳥……つと」

そう答案用意に書き込む。

ちなみに、その絵本はすべて手作りで、女子たちが夜な夜な集まって作ってくれている。

「あっ」

思い出した。

さっきの問題、ロボの耳が付いている人は誰でしょうか？ という

やつ、あれも絵本からの出題だ。

そして、答えは王様。

戻って、答えを書き込む。

「おお……」

答案用紙を見返す。

「気持ちいい」

たっぷり50問くらいあったけど、たぶん、全問正解だと思う。

「終わったようね……、答え合わせは明日やります。では、明日も同じ時間に、お疲れ様でした」

「答案は私が預かっておくね」

と、綾原が終了を宣言し、徳永が答案用紙を回収する。

「綾原先生、徳永先生、ありがとうございます！」

私は急いで筆記用具を片付けて教室をあとにする。

割と普通なナビーフイユリナ記念会館を出ると光が広がる。

今日も晴天。

雲ひとつない真つ青な空。

「それ、急げえ！」

と、私は白い石畳の上を走っていく。

向かう先はもちろん、みんながいる牧舎。

私は強い日差しの中、両手を広げて気持ちよく全力疾走。

ワンピーススカートの裾から風が入り、身体を駆け上がり、ふわつと襟元から出てきて、前髪をなびかせる。

「気持ちいい、たあ！」

と、上機嫌で走り抜ける。

「おお！ ナビー、今日も走ってるな！」

「転ぶなよお！」

屋根の上で作業していた生活班の山本新一と安達一輝が私に気付いて大きな声で言う。

「新一！ 一輝！ 大丈夫だよ！」

と、走りながら大きく手を振る。

「まぶしい！」

ちょうど、太陽が彼らの頭上に来ていて、その光が直接目に入ってしまう。

「危ない、危ない！」

「右、右！」

目がくらんで、よろけて、道を外れて草むらに飛び込みそうになる。

「だ、大丈夫だってば！」

と、私は急いで軌道修正をして、彼らのいる建物を横切っていく。

「またねえ！」

「おう！」

「またな！」

お互い手を振る。

「よーしー！」

そして、加速！

全速力！

でも、牧舎に近づくにつれ、違和感を覚えるようになる。

「いつもと違う……」

そう、いつもなら、私の存在に気付いて、子犬のクルビットが真っ先に走ってくるはずだ……。

なのに、その気配がない……。

「クルビット……」

違和感と共に不安まで覚えるようになる。

何かあったのかもれない……。

「クルビットー！」

彼の名前を叫び走る。

「くるう！　くるう！」

牧舎に近づくくとクルビットの声が聞えてくる。

それも楽しそうに遊んでいる声だ。

「なあんだ、平気なんじゃない……、はあ、はあ……」

と、走る速度を緩め、徒歩に切り替え、弾む呼吸を整える。

「くるう！　くるう！」

しかし、本当に楽しそうな声だなあ……。

と、私は牧柵の中を覗き込む。

「くるう！　くるう！」

青い毛の子犬クルビットが誰かの周りを嬉しそうに駆け回っている……。

「ど、どうしたの？　これ……っ？」

と、その人が困惑したような声を出す。

「すごい、ナビーにしか懐かないのに」

「クルビット、嬉しそう！」

「気に入ったみたい」

そう話すのは、エシユリンとシユナンとリジエンの姉妹、私のマスコット班で通訳をやってもらっている子たちだ。

「くるう！　くるう！」

そして、クルビットが周囲を駆け回っている相手は、銀色の髪的女性、透明感のある白い肌、整った顔立ちの……、

「セイレイ」

だった。

「ナビー！」

「ナビー様！」

「お姉ちゃん！」

「アラウエイ様」

と、みんなが気付いて私の名前を呼ぶ。

「よいしょっと……」

私は牧柵の横木をくぐって中に入る。

「くるう！　くるう！」

クルビットは初めて私の存在に気付いたのか、今更ながら駆け寄ってくる。

「よし、よし……」

しゃがんでクルビットの頭とか顔を撫で回してやる。

「くるう……、くるう……」

うん、気持ち良さそうにしてる。

「それで、セイレイ、ここで何してるの？」

クルビットを撫でながら、彼女の顔を見上げる。

彼女にはファアーイースト・ドラニニツク・コアの子供たちの稽古とか、あの剣闘士たちの監視をお願いしていたはずんだけどね。

「ナビー、怒らないでほしい、ぷーん、エシユリンが無理に連れてきた、ぷーん」

私が怒っていると思ったのか、エシユリンが申し訳無さそうに日本語で話す。

「ぷーん、エシユリンがねえ……」

「めえー！」

「めええー！」

「ぶるるうー！」

「みーん！」

クルビットを撫でていると、自分たちも撫でてって感じでシウスたちも寄ってくる。

「あははは、はい、はい」

と、みんなを撫でてやる。

「通訳が不足していて、もうひとりほしいと思っていて、セイレイさんも、それほど忙しくなさそうだったから、思い切って頼んでみた、ぷーん」

なるほどね……、確かに通訳は不足している。

さらに、交易が活発になっていけば、ますます不足していくだろうし……。

それに、シュナンとリジエンの姉妹も日本語の勉強を始めたばかり、エシユリンからしてみれば、二人に教えるのも、三人に教えるのも一緒だということだろうか……。

うーん……。

「それで、セイレイ、通訳と子供たちの稽古、それに剣闘士たちの監視、それらすべての仕事をこなせるの？」

「はい、問題ないかと、剣闘士たちも分別のある大人、それほど無茶はしないと思います。それに、私が厳しく監視するよりも、彼らのリーダー、金暗色のシユタージを信用して、ある程度彼に任せただろうが円滑にことが進むような気もいたします」

「なるほどねえ……」

と、仔鹿のカチューシャを撫でながら話を聞く。

「ナビー？ セイレイさんをマスコット班に入れてもいい、ぷーん？」

エシユリンが私の顔を覗き込んでくる。

「まっ、二人の言い分はわかった」

撫でるのやめて立ち上がり、お尻に付いた枯れ草を払う。

「でも、だからといって、能力のない者をマスコット班に入れるわけにはいかない。テストをしましょう、マスコット班の一員に相応しいかどうかのね」

と、目をつむり、人差し指を立てて言い放つ。

「本当に!? やったあ! セイレイさん、よかったね! ナビー馬鹿だから、テストもきつと簡単だよ!」

エシユリンが現地の言葉で彼女に説明する……、う、うん……? あ、あれ……? な、なんか、今、すごく失礼なことを言わなかったか……?

「ま、まあ、いつか……、じゃあ、ちよつと待ってて、テスト道具取ってくるから!」

と、言い、私は牧舎のほうに駆け出していく。

「はい、ぷーん!」

「いつてらっしやあい」

「はあい!」

「いつてらっしやいませ、フアラウエイ様」

と、みんなに見送られる。

第131話 マーチ

扉が開け放たれたままの牧舎に入り、荷物の置いてある場所に急ぐ。

「うーんと、確かこの辺に置いたよねえ……」

と、荷物の山をがさごそとかき分ける。

「あった、あった、これ、これ……」

目当ての物を探しあてる。

「えへへ……」

もちろん、それは黄色のホイッスル。

さらに、白いバトン。

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「びよおー！」

おや？

「びよ、びよー！」

「びよっぴいー！」

「びよおー！」

ピップ、スカーク、アルフレッドの三羽のひよこが私に気付いて騒ぎ出した。

私はホイッスルのストラップを首にかけ、バトンを手に取り彼らの元へ向かう。

「おまたせ……」

そして、鳥籠の前にしゃがんで、その隙間から指を差し入れて一羽ずつ頭を撫でてやる。

「随分大きくなっただけど……、他のみんなも大きくなって、外に出すのは危ないんだよね……」

特にウエルロットの成長が著しくて、相対的な体格差は広がったと思う。

「びよ、びよ……」

「びよっぴい……」

「ぴよお……」

ひよこたちが気持ち良さそうにしている。

「ごめんね……、危なくないように、もうひとつ柵を作るように班長会議にかけてるところだから、あと少しだけ我慢してね……」

「ぴよ、ぴよ」

「ぴよっぴい」

「ぴよお」

わかってくれたみたい。

「よし、じゃあ、またあとでね！」

と、立ち上がる。

「ぴよ、ぴよー！」

「ぴよっぴいー！」

「ぴよおー！」

ひよこたちの元気の良い声に送られて牧舎をあとにする。

そして、駆け足でエシユリンたちの元へ戻る。

「おまたせー！」

「おかえり、ぷーん！」

「おまえりなさいー！」

「おかえり、お姉ちゃん！」

「おかえりなさいませ、フアラウエイ様」

みんなが出迎えてくれる。

「ナビー、何する、ぷーん？　もしかして、また行進、ぷーん？」

と、エシユリンが私の持つバトンと、首にかけてあるホイッスルを

見て尋ねてくる。

「よくわかったわね、エシユリン、その通りよ」

私は目をつむり、腰に手を当てて、自信たっぷりそう答える。

「こ、行進がテストですか、フアラウエイ様……？」

セイレイが困惑したような口調で話す。

「行進の重要性がわかってないようね、セイレイ……、私たちは集団なのよ、ひとつの生き物、戦場ではなによりそれが大事……、一糸乱れず行進、一糸乱れず陣形を組み、そして、一糸乱れず攻撃をする……、

それが戦場に於いてもつとも強い」

自信満々に言う。

「はあ、そうですか……」

納得してくれたみたい。

「よし、じゃあ……、ピーーーーーッーッー！」

と、黄色いホイッスルを口にくわえて大きく鳴らす。

「整列！ 私のうしろについてきて！ 大きく手を振って、美しくよー！」

「はい、ぷーん！」

「はい！」

「はあい！」

「はいっ！」

「くるう！」

「めええ！」

「めええ！」

「ぶるるう！」

「みーん！」

「はい、です……」

みんなが返事をしてくれる。

「いくよ！ マーチ！ ピツピ、ピピピ、ピツピ、ピー、ピツピ、ピピ
ピ、ピツピ、ピー、」

と、最初は単調なリズムを刻みながら行進を始める。

「ピツピ、ピピピ、ピツピ、ピー、ピツピ、ピピピ、ピツピ、ピー、ピツ
ピ、ピピピ、ピツピ、ピー」

白いバトンを上下に振りながら行進する。

「うん、ちよつとバラバラだけど、みんなついてきてるな……」
ピツピしながら後方を確認する。

「よーし！ じゃあ、ブリティッシュ・グレナディアーズ行進曲 いく
よー！」

と、大きな声で叫ぶ。

そして、ホイッスルをくわえて、

「ピッピッピッピッピッピッピッピッピッ、ピッピッピッピッ、ピー、ピッピッピッ
ピーピッピッピッ、ピッピッピッピッ、ピー、ピッピッピッピッ、ピーピッピッ
ピッピッ、ピロピロピー」

と、高らかに演奏する。

「ブリティッシュ！ それ大好き！」

「私も！」

「お姉ちゃん、大好き！」

「くるう！」

「めえ！」

「めええ！」

「ぶるるう！」

「みーん！」

すると、みんなが歓声を上げる。

「ピッピッピッピッピッピッピッ、ピッピッピッ、ピー、ピッピッピッ
ピーピッピッピッ、ピッピッピッピッ、ピー、ピッピッピッピッ、ピーピッ
ピッ、ピッポ、ピロピロピー」

もう大喜びでブリティッシュ・グレナディアーズ行進曲を演奏して
行進する。

なんて、楽しいんだろう、あつという間に一周目が終わった。

「もう一周いくよ、ピーーーーーッ！」

「はい、ぶーん！」

「はい！」

「はあい！」

「はいっ！」

「くるう！」

「めえ！」

「めええ！」

「ぶるるう！」

「みーん！」

「はい」

ああ、青空がきれい、わた雲がふわふわ浮いてる。

「ピッピッピッピーピッピッピ、ピッピピピピ、ピー、ピッピッピッ
ピーピッピッピ、ピッピピピピ、ピー、ピピピーピピッピ、ピーピッ
ピ、ピッポ、ピロピロピー」

その空を見上げながら気持ちよく行進する。

「くるうー！」

うーん？ 前から声がするぞお？

と、視線を下ろしてみると、クルビットが私の前をしっぽふりふりしながら歩いてやがった……。

「ぶるるうー！」

さらに、ウエルツトまで私の隣を歩いている。

「ダメー！ みんなは私のうしろー！ ピー……ッーッー！」

と、思いつきりホイッスルを鳴らして、行進する速度を上げて先頭に立つ。

「ピッピッピッピーピッピッピ、ピッピピピピ、ピー、ピッピッピッ
ピーピッピッピ、ピッピピピピ、ピー、ピピピーピピッピ、ピーピッ
ピ、ピッポ、ピロピロピー」

そして、また気持ちよくブリティッシュ・グレナディアーズ行進曲を演奏しながら行進する。

「くるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

「ぶるるうー！」

「みーん！」

「ああ？！」

でも、すぐにみんなが私を追い抜いていく。

「くっそおー！ ピー……ッーッー！」

と、さらに歩く速度を上げる。

「くるうー！」

「めえー！」

「めええー！」

「ぶるるうー！」

「みーん！」

それに合わせるように、みんなも速度を上げる。

「むー！」

駆け足になる。

「くるう！」

「めええ！」

「めえええ！」

「ぶるるう！」

「みーん！」

みんなも駆け足になる。

「こうなったらー！」

全速力で走り出す。

「くるう！」

「めええ！」

「めえええ！」

「ぶるるう！」

「みーん！」

みんなも全速力で走り出す。

「もう、競争だあ！」

「速い、ぶーん！」

「待ってえ！」

「お姉ちゃーん！」

「ピッピッピッピーピッピッピ、ピッピピピピ、ピー、ピッピッピッ
ピーピッピッピ、ピッピピピピ、ピー、ピピピーピピッピ、ピーピピッ
ピ、ピッポ、ピロピロピー」

ついでに、走りながらブリテイッシュ・グレナディアーズ行進曲も
演奏する。

「くるう！」

「めええ！」

「めえええ！」

「ぶるるう！」

「みーん！」

ピツピロやっっているうちに、またもや抜かされる。

「くう……、ヒョーロ、ヒョツヒヨヒヨ……」

くわえたホイッスルから変は音が出だす。

「はあ、ひー、はあ、ひー、フツツヒヨツヒヨ、ヒヨヒヨツヒヨ、ロー、はあ、ひー、はあ、ひー……」

と、それでも、一生懸命ブリテイッシュ・グレナディアーズ行進曲を演奏しようとする。

「くるう！」

「めえー！」

「めええー！」

「ぶるるう！」

「みーん！」

駄目だ、みんなが元気すぎて抜けない……。

「こうさあん！」

五周目くらいで私は根を上げて、その場に大の字に寝転がる。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

呼吸を整える。

「もう走れない、ぷーん」

「ひー、ひー、ひー」

「お姉ちゃん……」

エシユリンたちも同じ、息を切らして私の隣に座ったり寝転んだりする。

「くるう」

「めえ」

「めええ」

「ぶるるう」

「みーん」

クルビットやシウスたちが勝ち誇った顔で私の元にやってきた。

「このお！」

と、クルビットを抱きしめてやる。

「くるう！」

「めえ！」

「めええ！」

「ぶるるう！」

「みーん！」

すると、他のみんなも私のお腹の上に乗ったり、スカートの中に頭を突っ込んだり、腕とか肩を鼻先でつついでじゃれてくる。

「あーん、やめて、やめて」

くすぐったくて身悶えする。

「くるう！」

「めえ！」

「めええ！」

「ぶるるう！」

「みーん！」

でも、やめてくれない。

「もう！ とう！」

腕を真つ直ぐ伸ばして、足をピンとして、ぐるぐる回転しながら彼らから逃げていく。

「くるう！」

「めえ！」

「めええ！」

「ぶるるう！」

「みーん！」

やっぱり追い駆けてくる！

「さらに、加速！」

ぐるぐるし続ける。

「こう、ぷーん？」

「待ってえ」

「お姉ちゃーん」

と、エシユリンやシユナンとリジエンの姉妹も私の真似をしてぐるぐる回りながらついてくる。

「あははは、なんか楽しくなってきた！ そおれえ！」
と、私たちは草の上をぐるぐるし続ける。

「あっ……………」

「コツンとおでこをぶつける。

「フアラウエイ様……………」

それは座っているセイレイのふとももだった。

「ちようどいいい！ 休憩ー！」

と、私はそのままセイレイの膝の上に頭を乗せる。

みんなが同じように私の傍に寄り添う。

「ふふ……………」

と、それぞれみんなを軽く撫でてやる。

「ああ、空が綺麗……………」

真つ青な空を見上げる。

セイレイがそつと私の額に手を添える。

冷たくて気持ちいい……………」

彼女を見上げる。

目が合うと、彼女がかすかに微笑む。

私もかすかに微笑み、そして、目を閉じて、風を感じ、草花の香りを胸いっぱい吸い込む。

「ああ、なんて良い日なんだろ……………」

心底そう思う。

眠たくなってきちゃった……………」

お昼寝しよ……………」

「ナビー、ぷーん、セイレイさんは合格、ぷーん？」

「うーん？ 最初から合格だよ……………」

まどろみながら答える。

「やったあ！ 合格だって、セイレイさん！」

「はい、ありがとうございます」

そんな会話を聞きながら眠りにつく。

第132話 小雪の夕風

カリカリ、カリカリ、と、木を削る音が室内に響く。

「うーん……、うーん……」

もちろん、私もナイフ片手に木を削っている。

「ナビー、力入れすぎないでね、指切っちゃうから」

「はあい」

と、夏目翼に返事をする。

「うーん……、難しい……」

なんの木を削っているかというのと、小さな木の棒の面に現地の文字を彫っているのだ。

これをハンコ状にして活字にする。

そう、活版印刷だ。

この世界には印刷がない。

ハンコ、印章はあつても、無数のハンコを並べて文章にするという発想がない。

なので、綺麗に印刷された文字は物珍しく、それで作られた本は高値で売れる……、そういう計画だ。

「ふっ、ふっ！」

と、して木屑を払う。

「うーん……」

出来栄えを見る。

「おっけ、完璧！ 一個できた！」

完成した活字を箱に入れて、別の箱から彫られていない木の棒を取り出す。

その面に裏に炭を塗った紙を置き、書いてある文字をなぞって下書きを施す。

そして、その下書きに沿って削り上げて活字にする。

その繰り返しだ。

カリカリ、カリカリ、と、みんな木を削って活字を作っていく。

ちなみに今は夜。

夕食もシャワーも済ませて、あとは寝るだけにしてある。

場所も私が寝泊りしている狩猟班女子のロッジの向かい側、生活班、参謀班の女子たちが共同で使用しているロッジ。

ここのロッジは広く、女子のみんなが集まって作業するにはもってこいの場所で、この本を作る前にも度々夜に集まって様々な作業をこなしていた。

「うーん、うーん……、カリカリ、カリカリ……」

そして、なんの本を作るのかという……。

「絵本ねえ……、そんなものの印刷して著作権とか大丈夫なの？」

と、隣で作業していた笹雪めぐみと背伸びとあくびをしながら言う。

そう、彼女の言う通り、私たちは今、絵本の製作をしている。

「エレノアの蜂は古代ギリシアの悲喜劇叙事詩が元になっているから、そもそも著作権なんて存在しないわよ、めぐみ」

と、答えたのは綾原雫。

彼女は活字ではなく、絵、木の板に絵を彫る、版画の制作にあたりている。

「へえ、そうなんだ、古代ギリシアねえ……、ふっ」

と、笹雪には活字に付いた木屑を息で吹き飛ばす。

「それに著作権なんてあったとしても、この世界では通用しないよ、法律が及ばないのだから」

「いや、そこは守らなきゃ、例えば法律が及ばなくさもさ」

「意外と真面目なのね、めぐみも」

綾原が笹雪を見てくすりと笑う。

「まあね……、それにしても、どうして最初の本を絵本にしようと思ったの？ 他にもっと簡単そうなのいくらでもあると思うけど」

笹雪に作業を再開して質問する。

「ナビーのために手作りで絵本を作っていたから、そのノウハウがあったというのが一番だけど……、そもそもどうしてナビーに絵本を読んでも聞かせたかたかというのと、そこに書かれていることは私たち人類にとっての教訓だから、一番大事な道徳だから。過去一万年間、

私たち人類は様々な失敗を繰り返してきた、その失敗を後世に伝えたい、過ちを繰り返さないように……、それも、まず子供たちに伝えたい……、そういう想いで絵本は出来ているのよ。だから、絵本は私たち人類の共有財産、例えば世界が違ってても、この世界の人たちにも、私たちの先人たちの想いを伝えたい、だから、一番最初の出版物は絵本にしたのよ」

と、綾原は版面を彫りながら話してくれる。

「ふうん……」

笹雪も活字を掘りながら相槌を打つ。

「ナビー、ぱーす、が足りない、ぷーん」

エシユリンが私の完成した活字を入れておく箱を覗き込みながら言う。

ちなみに私は、ぱーす、という活字を彫る係をしている。

で、エシユリンは木枠に活字を入れて文章を作る係をしている。

「急いで、ぷーん、次が入れられない、ぷーん」

「わ、わかった、わかった……、カリカリ、カリカリ……」

エシユリンに急かされて活字を彫り続ける。

「それじゃあ、今日はこのくらいにしましょう」

と、しばらく無心に彫っていると、女性班の班長徳永美衣子立ち上がり、手を叩きながらそう言う。

「終わりかあ……」

「疲れたあー！」

「たっぷり二時間は作業したね」

みんなが背伸びをしたり足を伸ばしたりする。

「うーん！」

私も思いつきり背伸びをする。

「9時か……」

そして、ちらりと時計を見る。

まだ寝るには早い……。

「今日も一日頑張ったからご褒美の時間ね」

と、徳永がぱちりとウインクして言う。

「やったあ！」

「おやつの時間きたあ！」

「待ってました！」

「私の唯一の楽しみ！」

その言葉に反応してみんなが盛り上がる。

そう、夜な夜な女子が集まって作業しているのにはこんな理由もあつたのだ……。

男子には内緒でみんなで甘い物を食べるという……。

「今日は私たちの当番ね」

「じゃあ、準備するね」

「いこ、みいちゃん」

徳永たち数人が奥の部屋に入っていく。

「今日はなんだろう、楽しみ」

「昨日はアップルパイだったよね？ あれ、おいしかった！」

「不思議な味だったけど、紅茶もおしかったよね」

と、みんなが楽しそうに話す。

「あ、そだ、ナビーちゃん？」

笹雪に話しかけられる。

「うん？」

と、彼女のほうを見る。

「これ」

彼女ががさごそとバッグからなにやら取り出す。

「カチューシャ、作っておいた、好きなんでしょ？ 仔鹿の名前にする

くらいなんだから」

その手に握られていたのはカチューシャ、弧の形をしたヘアバンド。

いや……、仔鹿のカチューシャのカチューシャはヘアバンドじゃなくて、自走砲のほうだから、立派な兵器だから……。

「ほら、ナビーちゃん、付けてみて、きつと似合うからさ」

と、笹雪がにじり寄ってくる。

彼女が手にするカチューシャって普通のヘアバンドじゃない、なん

か、耳がついてる……。たぶん、猫耳。

「い、いや……」

それを見て私は逃げようとするけど、

「どこいくの、ナビィ？」

と、雨宮ひらりに捕まえられる。

「ナイス、ひらり！」

すぐに笹雪がやってきて、私の頭にカチューシャを被せる。

「翼も、ナビィちゃんの髪、セットしてあげて」

「うん」

と、三人かがりでカチューシャを装着させられてしまった……。

「なにになに？」

「きやあ、かわいい！」

「ナビィが猫ちゃんになっちゃった！」

他の女子たちも集まってくる。

「ほら、ナビィちゃん、にやーんって言うってみて！」

「にや、にやーん……」

「もつとかわいく！」

「にやーん！」

「手も猫っぽく！」

「にやーん！」

手の甲でほっぺをかく仕草をする。

「いやあ、かわいい！」

「なんて、かわいい生き物なの！」

「お家に持ち帰りたい！」

女子たちが歓声を上げる。

おお？ みんなが喜んでるか？

よーし、それなら！

「にやーん、にやーん」

と、四つん這いでにやーにやー言いながら歩き回る。

「やだあ、かわいい！」

「ちよつと反則！」

「鼻血出そう！」

さらに大盛り上がり。

よーし！

「にゃん、にゃん……」

と、みんなに擦り寄ってやる。

「もうだめ、かわいすぎて死にそう」

「こっちもこっちも！」

「にゃん、にゃん……」

隣の子にも擦り寄る。

「あら、かわいい……」

「にゃあ、にゃん！」

そんな感じにみんなに擦り寄る。

「みんなあ、おまたせえ！」

猫の真似をしてみんなに擦り寄っていると、奥の部屋から徳永たちがお菓子や飲み物を持って帰ってくる。

「おお！」

私は大喜びで立ち上がり、頭のカチューシャを取り、適当にその辺に投げ捨てる。

「ああ！ あたしのカチューシャが！ 一生懸命作ったのに！」

と、笹雪が慌てて拾いにいく。

「今日はなに、美衣子!？」

私は目を輝かせて徳永に駆け寄る。

「ケーキよ」

彼女が笑顔で答えてくれる。

「おお……」

彼女の持つ白いラウンドケーキを覗き込む。

「むむ……」

しかし、なにか様子が変わる……。

「あーん？」

ケーキになにか書いてある……。

「フィユたん……、お誕生日……、おめでとう……?？」

そう書いてある……。

「うーん？」

と、首を傾げて徳永を見上げる。

「ほら、前のナビーのお誕生会でケーキを作ってあげられなかったのが心残りだったのよ。だから、生クリームが手に入ったら、真っ先にナビーに作ってあげようと思ってたの」

彼女が照れたような笑顔で言う。

「ご家族からは、フィユたん、って呼ばれてたんでしょ？ 私たちではご家族の代わりにはなれないかもしれないけど、それでも、今日だけは、フィユたん、って呼ぶのを許してね」

と、お茶のセットを持つ鹿島美咲が補足する。

くっ……、あれか、私のタオルに刺繍してあった、フィユたん、の
ことか……。

「じゃあ、座って、座って、ナビーは真ん中ね！」

「う、うん……」

と、私は席の真ん中へ連れて行かれる。

「ローソク点けて、っと……」

私の前に置かれたケーキにローソクを立てていく。

その数は11本……、それに火を点ける……。

そして、ランタンの明かりもひとつを残して消され、ほぼローソクの明かりだけになる。

「よし、じゃあ、記念撮影もしよう」

と、徳永が一眼レフカメラを手にする。

「フィルム、まだあったんだ？」

「うん、まだもう少しある。こういう日のために取っておいたからね」

「さすが、班長」

徳永と笹雪が話す。

「よし、じゃあ、撮るよ」

彼女がカメラを構える。

「笑って、ナビー」

「えへへ……」

フィユたん、っていう単語に動揺した心を落ち着かせて、無理矢理笑顔を作る。

「はい、チーズ」

カシヤ。

シャッター音がする。

「よし、じゃあ、ローソク消しちゃって」

「ふう、ふう、ふう……」

と、ローソクの火を吹き消す。

「「お誕生日おめでとう！」」

火が消されると同時に女子たちから誕生日を祝われる。

もう二ヶ月以上前の話だけどね、それも私のじゃなくて、武地京哉の誕生日……。

でも、なんか、すごい嬉しい。

「みんな、ありがとう！」

と、嬉しくて機嫌が直った。

「それじゃ、切り分けちゃいましょうね」

「わあい！ 一番大きくね！」

「はい、はい……」

私はケーキがカットされていくのを身を乗り出して覗き込む。

「みんなの分もあるから、心配しないでね……、まっ、男子の分はないけど……」

「じゃあ、男子には内緒だね！」

「いつも通りね」

と、楽しいな会話も聞えてくる。

「はい、ナビー」

カットされたケーキが乗った小皿を渡される。

「ありがとう、美衣子！ もう食べていい、食べていい!?!」

「まだよ、みんなに行き渡ってから」

「はあい……」

と、私はケーキをテーブルの上に置いて、そわそわと周囲を見渡す。
「はい、どうぞ」

「ありがとう」

徳永たちがケーキやお茶をみんなに手渡していく。

「みんなに行ったわね？」

と、確認したあと、

「それでは、いただきますしよう」

「いただきます」

「いただきます！」

私も大きな声で言ったあとケーキをひと口食べる。

「あまーい……」

ほっぺが落ちそう……、そして、

「おいしい！」

もう上機嫌！

「うん、うまく出来てる」

「ちゃんとした、ケーキになってる」

「すごい、本物のケーキだあ……」

「ああ、幸せえ……」

みんなも感想を言い合う。

「えへへ……」

おいしいケーキを食べながら楽しげな会話に耳を傾ける。

ああ、なんて、いい日なんだろう……。

こうして、私の二ヶ月遅れのお誕生会は夜遅くまで続くのであった。

第133話 時知らず

「いらつしやいませ」

「ありがとうございます」

帝国との交易も始まり、市場、プラグマティツシエ・ザンクツイオンは大勢の商人たちで賑わっていた。

「お疲れ様でした」

「またのお越しをお待ちしております」

もちろん、私たちも商売をしている。

「ひとつ、800帝国タウになります」

「じゃあ、ひとつ貰うよ、食べながら帰る」

「ありがとうございます」

と、エシユリンが800帝国タウを受け取り、串に刺さった冷凍洋ナシを渡す。

「おお、冷たい、本当に凍っている！」

大きな荷物を背負った小太りの商人が冷凍洋ナシを頬張る。

そう、私たちが販売しているのは、冷凍果物各種、それを串に刺して売っている。

ちなみに、販売はすべて帝国タウというラインヴァイス帝国の貨幣を使用し、私たちの通貨であるラグナは使ってはいない。

レートの言えば、1ラグナ、3帝国タウ、になるけど、ここで問題が発生する。

それは、ゴールドの含有量。

1対3のレートでは貨幣の価値的に釣り合いが取れなくなり、いずれ破綻してしまう。

詳しいことは綾原に聞かないとわからないけど、帝国タウベックではラグナは安定せず、いずれは暴落するか物価がインフレするかのどっちかになってしまいうらしい。

なので、基本的に帝国タウのみで取引を行い、魔法のネックレスにだけラグナを使う方針にした。

魔法のネックレスはラグナでしか売らない。

ラグナはそれほど出回らない、それで、需要と供給のバランスを取る作戦だ。

「ミックスはひとつ1200帝国タウになります」

「じゃあ、それひとつ」

「ありがとうございます」

販売は順調、次々と売れていく。

場所がいいからね。

ここは、プラグマティッシュエ・ザンクツイオンの出入り口、ここに出入りするすべて商人たちが店の前を通過する。

「四つですね、2400帝国タウになります」

「はいよ」

「ありがとうございます」

ここで、狩猟班の女子とマスコット班の人間が合同で冷凍果物を販売している。

「二つくれ」

「はい、ありがとうございます」

売っても売っても行列はなくならない、次々と人がやってくる。

「ひらり！ 洋ナシが少なくなってるよ！」

店の裏で冷凍果物を作っている雨宮ひらりに大きな声で催促する。

「はい、はい、今作ってますよ……」

と、返事が返ってくる。

「翼、いいよ、そっち持ってて」

「うん、こつちはおーけーね」

同時にそんな会話も聞えてくる。

「持ってきたよ、ナビー」

と、夏目翼がやってきて、冷凍洋ナシを店先に並べてくれる。

「ありがとうございます、翼」

私がそれに串を刺していき、

「はい、お待ちせしました」

と、エシユリンが販売する。

その作業を数時間続けると、

「完売！」

「やったあ！」

「売れたねえ」

「ぼろもうけだったね」

「うん！」

みんなで労う。

「じゃあ、後片付けして、今日は終りにしましょう」

「はあい！」

と、夏目に言葉にみんなが返事をする。

それぞれが後片付けを始める。

すると、

「いやあ、今日は良い契約が出来ました。喜ばしい限りです」

「今日はありがとうございます、と、言ってる、ぷーん」

向こうから数頭の馬を引く一団がやってくる。

「いえ、いえ、こちらこそ、これほど高値で契約していただけたとは思ってもみませんでした」

「今日はありがとうございます、と、言っています」

その数頭の馬を引くのは貴族然とした紳士とその従者らしき人たち。

そして、その隣にいるのは、生活班の班長、福井麻美と他数人、それと、マスコット班のシユナンもいる。

そういえば、福井が通訳として一人貸してとか言っていたね。

「それでは、子爵様、道中お気をつけて、遠路はるばるありがとうございます、ありがとうございました」

福井たちが深々とお辞儀をする。

「今日は本当にありがとうございます、と、言っています」

それをシユナンが通訳する。

「いえ、いえ、こちらこそ、ありがとうございます、では、契約に従って、来月、またこちらにお邪魔します」

「今日は本当にありがとうございます、と、言っている、ぷーん」
シユナンが通訳する。

「それでは！」

と、貴族然とした紳士と従者が馬に乗り、そのまま帰路につく。

「ありがとうございます！」

それに対して、福井たちが笑顔でお見送りする。

やがて、その一団が見えなくなる……。

「よっしやあ！」

「すげえ契約が取れたぜ！」

「これで大金持ちだね！」

「俺たちすげえ！」

客が見えなくなると、福井をはじめとした生活班の面々が飛び上がって喜び歓声を上げる。

よく見ると、管理班の久保田洋平と神埼竜翔の姿もある。

「どうしたの？」

「なに、なに？」

「なにが売れたの？」

その声につられて、私たちは作業の手を止めてそちらに向かう。

「売れたっていうか、契約が取れた」

管理班の久保田洋平が嬉しそうに話す。

「だから、なにが？」

と、私は彼の顔を見上げる。

「ふふ……、あれさ……」

久保田がうしろをクイクイと親指で指す。

「うーん？」

彼のうしろを目を凝らして見る……。

「ああ!？」

私の馬車、割と普通なナビーフイユリナ記念ピーチ号がある！

「どうして、私の馬車がこんなところにあるの!？」

「ふつ、よく見ろよ、あれは、割と普通なナビーフイユリナ記念ピーチ号じゃないよ……」

久保田が得意げな顔で腕組みしながら言う。

「ええ……?？」

どう見ても、私の割と普通のナビーフイユリナ記念ピーチ号に見えるけど……。

「あれは新作さ、よく見てみるよ、馬車のとっぺんをさ……」

「てっぺん……？　なんか果物みたいなのが付いてる……？」

「そうさ！　チェリーさ！　あれは、俺たちの新作、イタバーネ・チェリー号さ！」

と、元気良く、自慢げに大きな声で言う。

確かに違うね、サイズも少し大きいかな。

「へえ……、それが売れたんだ……？」

「そうさ、麻美さんに頼んで交渉してもらったのさ！」

「そうなんだ、で、いくらで売れたの、あれ？」

と、尋ねる。

「麻美さん」

久保田が福井に答えを求める。

「えつとねえ……」

福井が契約書らしき書類をぺらぺらとめくり、

「1台、240万帝国タウで、合計48台、1億1520万帝国タウで売れたの」

彼女がニコツと微笑み言う。

……。

「「ええええええ!!」」

沈黙のあとに、全員が驚く。

「そして、手付金として、1割、1152万帝国タウはいただいているわ、納車は来月、そのときにすべての代金をいただく契約になっているわ」

福井が契約内容を説明してくれる。

「それにしても凄くない？　1億？　48台？　桁違いだね……」

笹雪が感心したように話す。

「うん、すごいでしょ、そのお金があれば、念願の白レンガがいっぱい買える。それで、道を作りましょう、真っ白な綺麗な道を……、ああ、駆け回る、子供たちの無邪気な声が聞えてきそうだわ……」

うつつりと夢を語る。

「その馬車って、もうできてるの？ それとも、これから作るの？」
夢を打ち消すように兩宮が質問する。

「これからよ、管理班と生活班の合同で作る予定」

「48台も……？ あれを……？」

馬車を見ながら聞き返す。

「ううん、48台は努力目標よ、できた分だけでいいって、でも、できるだけ多く作るつもり、なにせ、1台240万帝国タウになるんだから」

なにその曖昧な契約……。

「契約書見せて」

と、私は手を差し出す。

「うん？」

「いいから」

と、半ば強引に契約書を奪い取る。

そして、それに目を通す。

「うーん……」

契約書をぺらぺらめくる。

契約書は現地の言葉で書かれていて、それに、福井の字だろう、日本語訳が要所要所に書き込まれている。

で、その日本語訳がおかしい……。

全くのデタラメではないけど、微妙に意味が違うし、なにより、かなりの部分が端折られている……。

「うーん……」

通訳であるシュナンの顔を見る。

「はい？」

と、不思議そうな顔で私を見返す。

彼女はナスク村の姉妹の姉のほうで、マスコット班で日本語の勉強を始めてまだ一ヶ月ほどしか経っていない……。

嫌な予感がする……。

第134話 三面等価の原則

最初にページに戻り契約内容を読み返す。

「どうしたの、ナビー？」

「なにか問題あるの？」

と、福井たちが聞いてくる。

「うん、ちよつと……」

ない、ない……。

どれだけページをめくっても、さきほど福井が言った完成した分だけの納品、なんて記述はどこにもなく、来月半ばまでに全48台の納車、ということしか書かれていない……。

もう一度シユナンを見る。

「はいつ？」

黒髪の可愛い女の子だ……。

たぶん、うまく通訳できなかったんだ……。

マスコツト班の班長として失敗した。

その商談に付いていけばよかった……。

「麻美、ごめん、通訳間違ってた。これ、目標48台の努力義務じゃない、全48台きっちり納車しないと駄目な契約だよ」

「ええ!？」

福井が驚く。

「む、無理だよ、48台なんて、1日何台作れるの、久保田くん？」

「えつ!?! いや、他の仕事もあるし、1日1台どころか、3日に1台とかのペースじゃないと無理だよ」

「それじゃ、15台くらいしか作れないじゃん、どうするの!?!」

「いや、どうするって言われても……」

「あーん……、じゃあ、キャンセルするしかないね……、私、追いかけてくる!！」

と、福井が走って追いかけてやうとする。

「ちよつと待って、麻美」

契約書の最後のページを開く。

「シユナンの通訳が拙かったから、こうなったのかと思ったけど、違うね……。ごめんね、シユナン、疑って、あなたはしつかりと、その役目を果たしたわ……」

最後のページに目を通しながら話す。

「はい？」

シユナンが首を傾げる。

「どういうこと、ナビー？」

福井も聞いてくる。

「詐欺、若しくはハメられた」

最後のページ、そこには一切日本語訳が書き込まれていない。

つまり、その説明は行われていないということの意味する。

他のページはかなり書き込まれているからね、意味は微妙に違くとも、シユナンが一生懸命、その意味を伝えようとしていたのがよくわかる。

そして、その日本語訳が一切行われていない最後のページ、そこにこの契約書でもっとも重要なことが書かれている。

それは、

「契約不履行、それに伴う損害賠償、違約金について……」

と、いう見出し。

「そ、損害賠償？」

「違約金？ そんなの聞いてないよ！」

そう、聞いてないよね、言うわけないよ、ハメられたんだから、シユナンの通訳が拙いを見抜いてうまく誘導されたんだよ……。

「で、契約不履行、納品できなかった場合は……。代金と同額を違約金として申し受けます。だってさ……」

「ええ!? そ、そんな、同額って、1億帝国タウを払えってこと!？」

「なんだ、それ、そんなお金ないよ！」

あるわけないよね、それは相手方もわかっている……。

「支払いは、帝国タウ、或いはラグナのどちらかだって」

そう、彼らの狙いは私たちの通貨、ラグナの大量奪取。

「よかった……。ラグナならいくらでも刷れるよね……」

福井が胸を撫で下ろす。

「よくはないよ……」

ラグナで取引している商品は魔法のネックレスのみ、彼らの狙いはそれ……。

「1億帝国タウ相当のラグナだと……、魔法のネックレス、ちょうど200本分だね……」

適当暗算で本数を出す。

「魔法のネックレス、200本……、それだけ作るのに何ヶ月かかるのよ……」

福井の顔が青ざめる。

「くっそお！ あいつら騙しやがって！ ひっ捕らえてやる、いくぞ、ザキ！」

「おう、クボ！」

と、久保田と神埼が、剣の柄に手をかけ、あの貴族然とした商人を追いかけようとする。

「待つて二人とも、追わなくていい」

二人を止める。

「なんでだ、ナビー!？」

「やつらは馬だ、早く追わないと逃げられちゃう！」

軽く溜息をつく。

「詐欺っぽくても、契約は契約よ、破棄するためには、ここに書かれています通り、キャンセル料、違約金を支払わなくてはならない……」

契約書をぺらぺら振りながら言う。

「だから、やつらをとっ捕まえて契約破棄するんだよ！」

「そうだ、嫌とは言わせない、ぶん殴ってやる！」

二人が激昂気味に叫ぶ。

「暴力でなんとかしようと言うの？ ならず者じゃないんだから

……、信用が地に落ちるわ……、これは、戦争、彼らは経済戦争を仕掛けてきたのよ……、経済でやられたら、経済でやり返すしかない

……、それがルール、馬車を48台作るしかない……」

「くそっ！」

「なら、適当に作ってやろうぜ、あいつらが仕掛けてきたんだから、文句は言わせないぜ！」

私はまた軽く溜息をつく。

「そんなものは、彼らも想定済みよ……」

契約書を開き、その文章をみんなに見せる。

「瑕疵担保責任……、つまり、不良品は返品可能、さらに、罰則付き、不良品1台につき、その同額、240万帝国タウ、若しくは同額のラグナを違約金として支払う、そういう取り決めになっている……」

「ま、マジかあ……」

「契約でがんじがらめになっている……」

久保田と神崎が落胆する。

「じゃあ、どうやっても、お金を支払うしかないの？ みんなになんて言おう……」

と、福井が泣きそうな顔で言う。

「うーん……、ただ、活路を見出すとしたら……」

「何か良い方法あるの、ナビー？」

「この瑕疵担保責任、幸いにも1台の不良品はその1台分として換算して違約金を支払う、つまり全体ではない。なので、出来るだけの台数の馬車を作って、残りは適当に作って違約金を支払う、それで契約を全うすることができるわ。そして、損益分岐点は半分、24台になる、24台以上作れば、売上げで違約金をペイできる」

「おお……」

「24台だったら、頑張ればなんとかなるかも……」

「まっ、ただ働きだけどね……」

と、私は契約書を福井に返す。

「麻美、契約するときには気を付けてね、高額な物は班長会議にかけるとかしたほうがいいかも」

「うん、ごめんね……、みんなが喜ぶと思って……」

彼女が暗い顔をする。

「うーん……」

落ち込んでるなあ……、ちよつと言い過ぎたかなあ……。

「それなら、48台、きつちり作ってやればいいんじゃないですか？」
その言葉は、日本語ではなく、現地の言葉で発せられたものだ。
「うーん？」

と、私は声がした方角に視線を向ける。

そこには体格の良い、鍛え上げられた身体を持つ男たちが立っていた。
「おまえたち……」

そう、それはここに身を寄せている剣闘士たちだった。

「話は聞かせてもらいました」

その中の真ん中の、蜂蜜色の髪をした男が言う。

確か、こいつはシユタージとかいう、剣闘士たちのリーダーだ。

よく見ると、彼らの近くには銀髪の剣闘士セイレイと、シユナンの妹リジエンの二人もいる。

ああ、そうか……。セイレイは日本語の勉強中、リジエンの通訳を聞いて勉強していたのか、それを、他の剣闘士たちも聞いていたと……。

「作ってやりましょうよ、そんな馬車48台くらい」

「そうっすよ、俺たち、剣闘士ですけど、暇な時は大工もしてたんすから」

と、シユタージの両脇の剣闘士、ガルデイオーラとテイターノが言う。

「それに、俺らだけじゃない、他のナスク村の連中も暇を持て余しています。そいつらにも仕事を与えてやってはくれませんか？」

シユタージがにやりと笑う。

「ナビー、なんて言っているの？」

現地の言葉のわからない福井が尋ねてくる。

「彼らが馬車作りを手伝いたいんだって、大工の経験もあるし、あと、ナスク村の人たちにも手伝ってもらったらって、暇そうにしてるか
らって」

と、彼女に通訳しあげる。

「ええ、本当に、いいのみんな!？」

福井の表情が明るくなる。

「もちろんっすよ」

「やります、やりますー！」

通訳しなくても、福井の言葉の意味がわかったらしく、彼らも笑顔で応じる。

「やったあー！」

福井もその意味がわかったのか飛び上がって喜ぶ。

「これで、白レンガをいっぱい買えて、綺麗な道路を作れるわ！でも、一応、班長会議にかけてみんなと相談しないとね、他の仕事との兼ね合いとか、シフトとかあるしね、よし、それじゃ、ナビー、みんな、ラグナロクに帰りましょうー！」

と、完全に元気を取り戻した福井が先頭をきつてラグナロクに向かい歩きだす。

「「おうー！」」

「「はあいー！」」

そのあとを管理班や生活班の連中が続く。

第135話 ロジステイクス

福井麻美はすぐにでも班長会議を開きたいようだったけど、他の班長は仕事や用事があり、時間が合わずになかなか開催することはできなかった。

結局、各班の班長が割と普通なナビーフイユリナ記念会館に集まったのは、夕食のあと、時計の針が7時を回った頃だった。

「話はわかった……」

議長である東園寺公彦が昼間に行われた馬車の契約、その契約書に目を通しながら言う。

ちなみに彼が今見ている契約書は私とエシユリンで再度翻訳した正確なものになっている。

「人数はどのくらい必要だ？ 俺からナスク村の方々に言っておく」

「できるだけ多く、手の空いている者は全員手伝ってほしい」

「わかった……、そう伝えておく……、こっちの人員は？」

「あの剣闘士の人たちもいるし、設計とか作業手順とか熟知している久保田さんと神埼くんだけ貸してくればそれでいいよ、みんなも他の仕事があるでしょうし」

「そうか……」

東園寺と福井の会話が続く。

「それにしても、すごい金額と、すごい台数だな……、なんだ、これ……」

契約書を目にした和泉春月が呆れたような口調でつぶやく。

「単純に騙された……、実現不可能な契約を結ばされて、大金を奪われようとしている……」

それに対して私が答える。

「なるほどね……、できないだろうと思つての破格の値段設定なんだね……」

そう、1台240万帝国タウなんて法外だよ、あの馬車にそんな価値なんてない、せいぜい、その数分の1程度の価値。

「だからこそ、チャンスなのよ、48台きっちり作ることができれば、

とてつもないお金が私たちの手に転がり込んでくる」

福井が目を輝かせて言う。

「ああ、これが経済戦争ってやつなのか、48台作れるか、作れないかの勝負……、すべてを得るか、それとも破産するか……」

「ギャンブルじゃないんだから……」

和泉の言葉に綾原雫が溜息混じりに言う。

「こうなってしまったら作るしかない、我々にはこれだけの違約金を支払うだけの金も、200本もの魔法のネットワークを作るだけのリソースもない。ナスク村の方々や、その剣闘士たちだけにまかせておけない、我々も極力製作に参加する。そんなところか……」

東園寺が話をまとめる。

「ありがとう、東園寺くん」

「ああ、東園寺、大金を勝ち取ろうぜ」

なぜか、和泉が乗り気だ。

「でもさ、もし、馬車を作れたらさ、ものすごいお金が手に入るよね、1億帝国タウ、白レンガをいっぱい買おうと思っていたけど、それだけだと余るよね？ あとなに買おう？」

夢に見るように福井が話す。

「そうだなあ……」

「なにかあるかしら……」

みんなが考える。

「なに、なに？ なんでもいいよ、お金いっぱいあるから！」

「うーん……」

でも、なにも出てこない。

「あ……」

そのとき、なにかを思い出したかのように、綾原が小さな声を上げる。

「雫、欲しい物あるの？ なに、なに？」

「欲しい物というか……、参謀班のメンバーからの提案」

「人見くんとか？」

「ううん、うちの青山悠生から、どうせ、却下されるだろうと思ったか

ら後回しにしていたのだけれど、お金に余裕があるのなら提案してみようかしら……」

と、綾原がノートを開く。

「みんなも聞いて、うちの青山からの提案」

彼女が話し出す。

「ナスク村の人々に仕事をさせる工場をプラグマティッシュ・ザンクツイオンの近くに作りたい。農業と違って、工場なら大規模に木を伐採する必要はないからね、これなら和泉くんの要望にも叶う」

「工場？」

「工場でなにをする？」

「被服でも作らせるの？」

みんなが首を傾げる。

「ううん、お酒……、アルコール飲料を作るの」

「「さ、酒!」」

予想外過ぎて、みんなが驚く。

「そんなに驚かなくても……、青山が言うには、この世界にはエールという種類のお酒しかないらしい、そこで、そのお酒を工場で蒸留してスピリッツというお酒に加工して販売するのはどうだろうか、っていう提案よ」

ああ、なるほど、アルコール度数を上げて売るのは……。

詳しくはないけど、仕組みは温泉卵と同じ、60℃とかの温度で熱するとアルコールは蒸発せずに、水分だけ飛ばすことができ、アルコール度数をどんどん上げていけるようになるってやつ。

「酒か……」

「スピリッツって、ウォッカとかテキーラとかそういうのだよね……」

「アルコール中毒量産しそう……」

「なんか、罪悪感ある……」

みんなは否定的。

「だよね……、一応、虫除けにもなるって言ってたけど、私も反対と言えば反対……、それに、青山が提案しているのはこれだけじゃないのよ、もっとやばい物も作りたいらしい……」

綾原がノートを見ながら少し笑う。

「な、なに……う？」

「や、やばい物……う？」

固唾を飲む。

「それはね……」

綾原が顔を上げて、みんなを見渡し、

「カンナビス・サティバエル」

と、静かに言う。

「かな？」

「さていば？」

「なにそれ？」

みんなが聞き返す。

「麻薬よ、大麻の総称、カンナビス・サティバエル」

私が説明してあげる。

「『麻薬!?!』」

みんながスピリッツのとき以上に大きな声で驚く。

「うん、それらしき植物を発見したって、青山が……」

「うわあ……」

「い、いや、麻薬って……」

「酒の次は麻薬……、どこのマフィアよ、あいつ……」

青山の提案にみんながドン引きする。

「えっと、一応、彼の擁護をしておくけど、彼曰く、医療用だって、鎮

痛剤として使用するんだって」

なるほどね、大麻の鎮痛効果は絶大だよね……。

「で、でも、依存するよね……、絶対……」

「うん、危ないよ……、怖い……」

それでもみんなの同意は得られない。

「だが、アイデアとしては良い、今はまだ時期尚早だが、いずれ必要になるかもしれない、青山にはそう伝えておいてくれ」

東園寺が話をまとめる。

「了解」

綾原が小さく返事をする。

「いやあ、びつくりしたあ……」

「まさか、青山くんがそんなことを考えていたなんて、意外……」
みんながひそひそと話し合う。

「今日はこのくらいか……」

と、東園寺が会議は終りとばかりにノートを閉じる。

「そうね……、とりあえず、馬車の件はそれぞれの班に持ち帰って相談
してみましょう、みんなも予定があるでしょうから……」

「おう」

「うん」

「ごめんね、みんな」

と、徳永の言葉にみんながうなずく。

その時、コン、コン、と、ドアを叩く音がする。

「誰だ？」

みんなが筆記用具などの後片付けの手を止めてドアのほうを見る。
キー、という音を立ててドアが開く。

「あ、東園寺、ちよつといいかな？ 大事な話があるんだ……」

と、室内に入ってきたのは、生活班の佐々木智一だった。

「佐々木？」

生活班の班長である福井が怪訝そうな顔をする。

「あ、いや……」

と、佐々木も福井を見てバツが悪そうな顔をする。

「どうした、佐々木？ 運営に関するのなら、会議の前に班長の福井
に言え。それとも、なにか個人的に言いたいこともあるのか？」

東園寺が佐々木をちらりと見て言う。

「いや、個人的なことではなくて……、報告というか、ああ……、耳に
入れておきたいというか……、その……」

どうも歯切れが悪い。

「だから、なんだ？」

東園寺が佐々木を改めて見る、

「いや、人払いしてもらえるかな？ あ、東園寺だけじゃなくて、和泉

にも聞いてもらいたい」

女性には聞かれたくないのだろう、福井たちの退出を求める。

「あ、じゃあ、私たち戻るね、まだ仕事あるから」

「そうね、絵本作って、おやつ食べなきゃ」

と、徳永たちが席を立とうとする。

そう、今日も生活、参謀班女子のロッジで絵本作りが行われており、私たちも班長会議が終わり次第合流する運びとなっていた。

「出ていかなくていい、この班長会議に男女の別はない。佐々木もここに来たということは、我々にとって重要なことなのだろう、班長全員でその話を聞く」

「そ、そう………？」

「う、うん………」

徳永たちが席に座り直す。

「さあ、佐々木、話せ、なんだ？」

東園寺がギロリと佐々木を見て発言を促す。

「い、いや、そ、そんな………」

佐々木がたじろぐ。

「なんだ？ 重要なことだろうか？」

「いや、言っつていいのかな………」

と、福井や徳永たちを見る。

徳永はその視線を感じて、居心地が悪そうにカップに残った水を飲む。それを見て、他のみんなも残った水を飲み干そうとカップを手に取り口元に運ぶ。

私も同じ、カップを手に取る。

「なんだ、早くしろ」

「ああ……、その……、山本のことなんだけど………」

佐々木と同じ、生活班の山本新一。

「山本？」

私はカップの水を口に含む。

「ああ……、ナスク村の村長さんの話だと……、どうやら、山本は、そ

の、性病をもらってしまったらしいんだ……」
「ふびっ」

水を吹き出した。

第136話 天照る月

「あわ、あわ……」

私は慌てて、吹き出してしまった水をハンカチで拭き取る。

「くっ……」

「うう……」

横を見ると、綾原たちも同じようにハンカチでテーブルを拭いたり、口元を拭いたりしていた。

それは笑うよね……、性病って……。

彼女たちを横目に口の周りをハンカチで拭く。

「な、なに……？ すまん、佐々木……、理解できなかった、もう一度言ってもらえないか？」

東園寺が再度発言を要求する。

「だ、だから、山本が、その、性病をもらったらしいんだ……、なんか、膿が出るとか、そうゆうやつ……」

佐々木に発言に場が凍りつく。

「う、膿……？ ど、どこから……？」

福井が声を絞り出す。

「え、い、いや、先っぽから？」

もう駄目だろこれ……。

「じよじよ、じよ、状況はわかった……」

珍しく東園寺が動揺しているようだった。

「そそ、それで、どうして、そんなことになったんだ……？」

震える声でそう続ける。

「ああ、いや、ちよっと、二、三週間前からプラグマティッシュエ・ザンクツイオンのナスク村に通っているようだったんだ、夜抜け出して……」

「そ、それで？」

「ああ、うん……、まあ、俺たちもおかしいと思って、山本に聞いてみたんだよ、なにしに行つてんだって、そしたら、あいつは、未亡人の悩みを聞いてやっていると言うんだよ……、うそつけてな、おまえ、

現地の言葉わかんないだろうって、総ツツコミ……、で、さらに問い詰めたら、まあ、そんな関係になっっているとか白状したんだよ……、で、俺たちも、もうそんなことはやめろ、性病になったらどうするんだって、止めたんだよ」

「なるほど……、だが、手遅れだったというわけか……」

東園寺が溜息をつく。

「いや、その時はまだ性病にはかかってなかったんだ」

「はあ？」

「それから毎日、毎日、ロτζジを抜け出して通ったんだよ、ナスク村に……、俺たちも、これはヤバイと思って、力づくで止めようとしたんだよ、そしたら、あいつ大暴れで激怒してこう言ったんだよ……」

佐々木がそこで言葉を切る。

「な、なんてだ……？」

東園寺が急かす。

「性病が怖くて現地妻とやれるか！　って……」
くそっ……。

私を笑わせにきてる……。

「あの時、山本、かつこよかったな……、男だった……、そこまで言うなら、と思つて、俺たちも行かせたんだよ、そしたら、案の定、性病に……」

沈黙……。

笑つていいのか、真面目に答えればいいのか、みんなわからないよ
うだった。

「なんなんだ、あの馬鹿は……、こんな忙しい時に、死ねばいいのに……」

福井がポツリと言う。

「ふう……、それで、病状は？　悪いのか？」

東園寺が目頭を押さえる。

「悪い、と言えば悪い……、先っぽから膿以外にも高熱を出している。でも、ナスク村の村長さんによれば、命に別状はないらしい、安静にして、薬を服用して、栄養のあるものを食べていれば、二、三週間で

治るだろうって」

「わかった……、絶対安静だな……、病気が治るまで山本を隔離しておけ、またナスク村に行くことのないよう、生活班男子で責任を持って監視しておくように」

そういえば、前に山本がシェイカー・グリウムたちをここに連れてきたことがあったな……、あれは彼がナスク村に行っていたからだったのか……。

「了解、すまん、東園寺、みんなも……」

と、佐々木が退出しようとする。

「あ、他のみんなには内緒で頼む、山本の名誉のために」
思い出したかのように、足を止めて言う。

「あの馬鹿に名誉とかないから……、言いふらしてやる」

福井が即答する。

「だな……」

「うん……」

「残念だけど……」

「罰だよね……」

みんなもそれに同意する。

「そ、そんなあ……」

と、佐々木が悲しそうな表情を見せる。

「冗談だから、そんなこと言えるわけないし」

その表情を見て、福井がフォローする。

「よ、よかった……、それじゃ、俺は部屋に戻るよ」

と、佐々木がドアノブに手を伸ばす。

「あっ」

でも、彼がドアノブに触れる前にゆっくりとドアが開く。

誰か室内に入ってきた。

その人物は銀縁のメガネの頭の良さそうなやつ、そう、参謀班の元班長、人見彰吾だった。

「なんだ、まだ会議中だったのか……」

と、彼が室内を見渡し言う。

大量の書類を抱きかかえるように持ち、それをテーブルの上にどさりど置き。

「どうする、東園寺？ 日を改めるか？」

「いや、問題ない、今終わったところだ、準備を始めてくれ」

「そうか……」

と、人見がテーブルの上に置いた書類を広げ始める。

「うん？ なに？」

「まだ会議続けるの？」

福井と徳永が尋ねる。

「会議は終了だ。これから人見の研究成果を聞くことになっていた……、そうだな、いずれは班長会議で話し合わなければならぬ内容だな……、ちょうどいい、全員残って人見のプレゼンを聞こうか」

「研究？」

「プレゼン？」

「お茶、入れ直しますね……」

と、このことを知っていたのか、綾原が落ち着いた口調で言い、席を立つ。

「どうした、佐々木？ おまえもついでに聞いて行け、どうせ、暇なんだろう？」

人見がドアの前に立ったままの佐々木に声をかける。

「あ、ああ……」

と、佐々木は空いて席に座る。

やがて、テーブルの上に大きな地図が広げられる。

それは、見慣れない、かなり広域な、縮尺の小さな地図に見えた。

「うーん……」

たぶん、数千キロの範囲はあると思う……。

「どうぞ」

綾原が私の前にお茶の入ったカップを置いてくれる。

「ありがと……」

地図を見ながらカップを手に取り、それにひと口つける。

「まずっ」

と、カップを見て顔をしかめる。

綾原が全員分のお茶を配り終わり、自分の席に着く。

「それでは、人見、始めてくれ」

それを見て東園寺が指示を出す。

人見が軽くうなずく。

彼が大きな地図の前に立ち、それを見下ろす。

「ここが、ラグナロク、我々の居る場所だ……」

と、地図の真ん中辺りを銀色の指示棒で指す。

その指された場所を見る。

ラグナロク、カルデラが小さい、米粒ほどの大きさだ。

「いったい、どんな縮尺なんだろう、いや、それより、こんな広域な地図、どうやって手に入れたんだ？ おそらく、現地の人間、帝国のやつらでもこんな地図は作れないと思う。」

「そして……」

ツー、と、指示棒を右に動かしていき、地図の端で止める。

「ここが東京だ」

と、静かに言う。

東京？

彼の言葉が理解できなかった。

「はい？」

「東京？」

「なんの話し？」

みんなも同じ、その意味が理解できない。

「ふつ、厳密に言えば、ここに東京があるわけではない、この場所の地球に東京があるという意味だ」

軽く笑い、銀縁メガネを人差し指で直す。

「よ、余計意味わかんないから……」

「混乱してきた……」

みんなが困惑して言う。

「その前に話しておかなければならないことがあるな……。先日、旧ナスク村に赴いたおり、地面からの太陽の角度を測定した。さらに、

同時刻にラグナロクでも測定、その差を用いてこの惑星の大きさを割り出した……。結果は、直径、12742キロ……。そうだ、地球と全く同じ大きさだ」

まだ意味がわからず、彼の話を黙って聞く。

「星の動き、惑星の動き、この星の公転、自転、地軸の傾き、マツデンジュリアン振動……。その他もろもろ、そのすべてが地球と同じ……。ならば、ここは地球そのものと言えるのではないだろうか？ ただの平行世界、いや、別次元と表現したほうがいいのか……」

ああ、理解した……。こいつ、日本に帰る方法探していて、そして、なんらかの道筋を見つけたんだ……。

それを東園寺に報告しようとしていたんだ……。

私は目を細めて、人見彰吾の顔を見る。

すると、彼は私の視線を感じて、少し顔を上げ軽く微笑む。

でも、すぐに視線を地図に戻す。

「そして、この惑星と地球が次元を挟んでぴったり重なっていると仮定すると、ここが東京ということになる……」

地図の端を指示棒でトントンと叩く。

「どうして、そこが東京だとわかったの？ ここラグナロクが地球で言えばどこかなのかわからなければ、東京の位置を割り出せない、ここはどこなの、地球で言えば？」

思わず不機嫌そうに言ってしまう。

「誰かがその質問をするだろうとは思っていたが、まさかキミがするとはね、ナビー」

私を見て微笑む。

そして、口を開き、

「ここは、奈良の山奥だ……」

と、私の目を見て言う。

正解。

そこが私たちの旅客機が墜落した場所。

第137話 藍

奈良の山奥……。

どうしてそれがわかったの？

私はハイジャック犯の武地京哉だから、コックピットで最後まで、リーダーやナビゲーション・ビーコン、さらには慣性航法装置で墜落直前まで旅客機の位置を確認していたから、墜落した場所の大よその見当はつく。

でも、ただの乗客である人見彰吾にそれを知る術はない。

「ここは、奈良、なの……？？」

困惑した表情で福井が言う。

「そうだ、ここは奈良県南部の山奥だ。もつとも、別次元ののだがな……」

奈良県南部……、なぜ、そこまで特定できる……。

「そもそも、どうして、次元を挟んで惑星同士がぴったり重なっていると思っただの？」

福井が続けて質問する。

「それはさっきも説明した通り、恒星や惑星、太陽の動き、暦でわかる。

ここは宇宙の中で、ぴったり地球と重なるポイントだ」

「じゃあ、ここから東へ進むと東京に着いちやうの？」

「ああ、この惑星のその場所には東京はないだろうがな……、俺の考えが正しければ、東京は無くともそこになにかあるはずだ……」

と、人見が地図の端、東京の位置を銀色の指示棒でトントンと叩く。

「人見、話が見えん、順序立てて説明してくれ」

東園寺が口を開く。

「まず、そこが東京で、ここが奈良だという根拠を示してくれ」

私が一番知りたいことを彼が質問してくれる。

「簡単なことさ、ヒンデンブルクの飛行船、その飛行経路を見ればわかる。それによると、あの飛行船は東京を飛び立ち、台湾に向かっていった。もちろん、別次元の別の惑星の話だがな……。で、飛行船はその途中、奈良の山奥で墜落している。つまり、この場所だ」

東京から台湾に向かっていた……。

私たちの旅客機も同じだな、台湾に向かっていた……。

私はカップのお茶を覗き込みながら考え込む。

「我々の飛行機は北海道から南下、そして、ヒンデンブルクの飛行船は東進……、その二つが衝突するポイントが奈良県南部になる……。」

「衝突？」

「ああ、俺の考えではなんらかの原因で我々の飛行機とヒンデンブルクの飛行船が次元を越えて空中衝突した。その衝撃でその二機はこの惑星に飛ばされた……、時間すら超越してな……。」

荒唐無稽だな。

そもそも、私たちの旅客機は南下していない、大阪に向かって北上していた。

それに、墜落の原因は衝突ではなく、ミサイルによる撃墜だ。

ちよつと安心した、かなり適当で、想像の域を脱していない。

答えまでは程遠い……。

私はお茶をひと口飲む。

「まずっ」

と、顔をしかめ、カップのお茶を覗き込む……。

「うーん……」

みろり色のお茶を見る。

「エメラルド・トライアングル……」

ふと、そんな言葉を思い出した。

東京から台湾……、台湾からグアム……、グアムから東京……、三点を繋いだ巨大な三角形、その線上をエメラルド・トライアングルという……。

戦闘機乗りなら誰も知っている……、バミューダ・トライアングルと並ぶ魔の海域、魔の空域……、古来より航空機や船舶が行方不明になるとして有名だ……。

「ぶっ……、オカルト……」

クスリと笑い、残ったお茶を飲み干す。

「まずっ」

と、カップをテーブルに戻す。

「我々の飛行機とヒンデンブルクの飛行船が空中衝突したという根拠は？」

東園寺も半信半疑なのだろう、疑いの目を人見に向ける。

「飛行船の後方上部が激しく破損し、また墜落したにも関わらず、胴体下部は無傷、我々の飛行機と状況が酷似している。さらに、墜落した場所もほぼ同じ、1キロ程度しか離れていない」

「それだけでは根拠に乏しい」

「そうだな……、なら、これを見てくれ……」

と、人見が別の紙を広げる。

「これは？」

「我々の飛行機のイラストだ」

そこに描かれているのは旅客機。

後方天井部分の破損状況が克明に描かれている。

「そして、これが、ヒンデンブルクの飛行船のイラストだ」

もう一枚の紙を広げる。

こつちも旅客機と同じ、後方天井部分の破損状況が描かれている。

「この二枚を合わせて見ると……」

人見が二枚の紙を重ねて、ランタンの明かりに照らし透かして見せる。

「あっ……」

「ぴったり……」

そう、パズルのピースのように、互いの破損した箇所がぴったりとハマる。

「衝突……、いや、正確に言うのなら重なった。そして、重なった部分が消失……、重ならなかった部分はこの世界に飛ばされる……」

「なるほど……」

東園寺は感心したように言うけど、私は有り得ないと思っただけ。う。

イラストだからいくらでも工作できるよ、あとでちゃんと確認しておいたほうがいい。

「ちよつと待つて、消失？　じゃあ、他の乗客や先生や乗務員さんたちは消えてしまったっていうわけ？」

「そういうことになるな」

徳永の質問に人見が即答する。

「そ、そんな……、消失……」

と、徳永が息を飲む。

「とりあえず、現在判明しているのはここまでだ。我々の飛行機とヒンデンブルクの飛行船がここに墜落したのは偶然ではないと言いたかった」

「そして、我々が地球に生還する糸口もそこにあると言うのだな？」

「そうだ、東園寺、もう一度、空中で衝突させれば、或いは……」

その言葉にみんなが沈黙する。

重なった部分が消失するとか聞いたあとでは返答に窮する。

「それは現実的ではないな……、根本的なこと、つまり、どうして別次元の二つの乗り物が空中で衝突したのか？　さらに、どういう理屈、どういう物理現象でここに飛ばされたのか？　それらを解き明かさない限り、もう一度空中衝突をさせようなどということには同意できない、危険だ」

東園寺がみんなが考えている、不安に思っているだろうことを代弁する。

「もちろん、この俺とて、すぐに実行しようとは思わないさ……、空中衝突させ、重なりによる消失を免れても、二元の世界、地球に帰還できる保証はどこにもない、もしかすると、今度はどこかの惑星ではなく、宇宙空間に放り出されるかもしれない……」

「そうだ、人見、危険な賭けはしない、それがここのルールだ」

東園寺が静かに言う。

「でも、ちゃんと調べて、ちゃんと実験すれば地球に、日本に帰れるかもしれないってことだね？　すごい進展だね」

と、徳永が目を輝かせて言うけど、私はそんな樂觀はしない。

たぶん、人見の考察は間違っている。

そんな単純な事象じゃないよ、これは……。

と、私は旅客機と飛行船のイラストを重ねてランタンの明かりにかざして透かし見る。

うーん……。

気持ちいいくらいぴったり……。

「そこで、提案なんだが……」

と、人見が銀縁メガネを人差し指で直しながら口を開く。

「なんだ？」

「東京に行きたい」

「東京？」

「そうだ、東京だ、この世界の東京の位置に行きたい。日本の首都、そして、ヒンデンブルクの飛行船が出航した都市……、ならば、この世界のそこにもなにかあるかもしれない……、いや、俺の考えが正しければ、必ず、そこになにかあるはずだ」

「距離は……」

東園寺が地図を見る。

「片道400キロ、往復で800キロだ」

「遠いな……、何日かかる……?」

「二週間の行程だ」

と、人見が答える。

「却下よ、私たちは馬車作りで忙しいんだから……、そんなのに人員を割いてほしくない」

福井が即座に否定する。

「そうだな、福井、二週間もラグナロクを空けるといふのは現実的ではないな……、ならば、ヴァーミリオンをもう一度使う、あれならば数時間で飛んで行ける」

と、人見が手の平をみんなに見せる。

「人見……」

「人見くん……」

その手には痛々しいナイフによる傷跡があった。

もう一度ナイフをその手に突き立てて、ヴァーミリオンに魔力を注入するという意味だろう。

「それも却下だ、人見、自傷行為は禁止だ、何回言えばわかる……」
東園寺が溜息をつき、お茶をひと口飲む。

「そう言うと思ったよ……」

と、人見が手を下ろす。

「ならば……、最後の手段で……」

彼が私の顔を見て、

「ナビー、キミのお友達のロボット、シャペルと言ったか？ あれをも
う一度貸してもらえないかな？」

と、言い、軽く微笑みかける。

ああ、最初からシャペルが狙いだったのか……。

「却下」

でも、その手には乗らず即座に却下してやる。

「な、なぜ？」

意外だったのか、表情を曇らせる。

なんていうか、日頃の言動からもわかるように、人見彰吾は日本に
帰りたくないはずなんだよね。

それが、急に帰り方がわかった、とか、その方法を確かめたい、と
か、もう違和感しかないから。

絶対、よからぬことを企てるよ、この男は。

「シャペルはそんなに飛べない、たぶん、200キロくらいしか飛べな
い」

と、適当に言う。

でも、これには根拠はないわけではない、この前のリープトヘルム
砦までの片道が50キロ、そして、上空で2時間くらい旋回……、そ
れで墜落した。

そこから推測すると、航続距離は約200キロ程度となる。

「それだけ飛べれば十分だよ、ナビー」

人見が笑い優しい口調で言う。

「うん？ だって、東京まで片道400キロでしょ？ シャペルは2
00キロしか飛べないから」

と、私は首を傾げる。

「ふつ、誰も東京まで行くなんて言っていないよ」

「はあ？」

いや、言ったらろ。

「シャペルに連れて行ってほしい場所は、ここから北東に60キロ、我々の飛行機とヒンデンブルクの飛行船が空中衝突した場所だ」

今度は不敵な笑みを浮かべる。

第138話 希えれば

衝突した場所か……。

薄暗い通路を歩きながら昨日のことを考える。

おそらく、東京から台湾を繋いだ線と北海道から奈良に向かう線が交差する地点のことを言っているのだらうとは思うけど……。

「それは、彰吾の勘違い」

仮に彼の言うように、私たちの旅客機とヒンデンブルクの飛行船が空中衝突したとしてもその場所ではない。

「たぶん……、もうちよつと西……、ここから北に6、70キロくらいの地点だと思う……」

「ピポロポ？」

「ううん、なんでもない、ただの独り言だよ、シャペル」

と、私の少しうしろを歩く、ロボットのシャペルに返事をする。

「ピポロポ！」

シャペルは嬉しそうに頭を回転させたり、首を伸ばしたり縮めたりする。

「ふふ……」

と、その姿を見て軽く笑う。

話を戻して……。

私は薄暗い通路の正面を見て再度考え込む。

つまり、人見が指定した場所になにもない可能性が高い。

「せつかく行くのに空振りつてのものなあ……」

うーん……、みんながっかりするよねえ……。

馬車作りとか色々忙しい中で行くのに……。

「ピポロポ？」

「ううん、また独り言……」

シャペルを操縦するのは私……。

しようがない、ちゃんとした、本当の衝突したポイントに連れて行ってやるか。

多少なりとも、彼の仮説、空中衝突説に興味もあるし、もし、本当

ならなんらかの手を打っておきたい。

私がハイジャック犯だつて発覚しないようにね。

あと、みんなが日本に帰れないように。

「転ばないように気をつけてね」

「ピポポ」

私たちはスロープを登り地上に出る。

外は明るく、太陽の光が弾ける。

風は気持ちよく、ひんやりとした風が頬を撫でる。

時間は10時過ぎ、当然朝食は済ませてある。

「みんなあー！」

と、地上で待つ東園寺たちに大きく手を振る。

「おう！」

「待ってたぞ、ナビー！」

「こつちも今着いたところだ！」

みんなも手を振って出迎えてくれる。

「じゃあ、獺人、そこに下ろしてくれ」

「うい、和泉さん」

と、佐野が肩に担いでいた大きなゴンドラを地面に下ろす。

「すげえな……、どんだけ力持ちなんだよ、佐野……」

その光景を近くて見ていた生活班の佐々木智一が感心したように話す。

「うい」

と、佐野がダブル・バイセツプポーズ、両腕を上げて力こぶを見せるポーズをする。

「おお、すげえ……」

さらに佐々木が驚嘆する。

「うい」

それに気をよくしたのか、今度はモスト・マスキュラーポーズ、いわゆるマッチョポーズをする。

「佐々木、遊んでないで、おまえも手伝え」

と、ゴンドラにロープを取り付けている東園寺に怒られる。

「じゃあ、俺は戻るっす」

佐野がそう言葉をかけ踵を返し歩きだす。

「猿人、忙しいところ悪かったな、助かったよ、ありがとう」

「うい」

それに対して和泉がお礼を言い、佐野が軽く返事を返す。

「荷物の搬入も始めるぞ」

「おう、やってくれ」

と、出発の準備が進められる。

「忘れ物ないかなあ……」

私は背負っていた白くまのリュックサックを下ろして中身を確認する。

「お弁当とお飲み物は大丈夫……、ハンカチ、ティッシュも大丈夫……、タオルも、大丈夫……」

と、チェックしていく。

夏目が用意してくれたものだから、忘れ物なんてないんだけどね。

それと、戦いに行くわけではないので、ドラゴン・プレッシャーは置いていく。

「よし、接続完了」

「ごつちも搬入おーけーだ」

みんなの準備も終わったのか、そんな声が聞えてきた。

「よいしょっと」

それを聞いて、私は白くまのリュックサックを背負う。

「よし、全員乗り込め」

「おう」

「ああ」

と、みんながゴンドラに乗り込んでいく。

ちなみに、今日、ゴンドラに乗って衝突現場の調査に行くのは、東園寺、和泉、人見、佐々木、私の5人だ。

で、場違いな佐々木がなぜ含まれているのかという……、私にもよくわからない、昨日の会議にたまたま同席していて、それで、くんくんが「佐々木も来い、これもなにか縁だ」とか言ったの発端。

「よし、ナビーフイユリナ、いいぞ、出してくれ！」

と、東園寺が大きな声で言う。

「はあいー！」

私も大きな声で返事をする。

シャペルの傍らに行き、革の手袋の上から魔法のネックレスをぐるぐる巻きにした手を彼の胸に添える。

「ピュアフサージ、ヘヴンリー・ヴァルキリア」

そして、呪文を唱える。

その瞬間、シャペルの身体の中が光り、鉄板のつなぎ目からその光り漏れ輝く。

「ピポロポツ、ピポロポツ！」

と、頭を回転させたり、くるくる回して見せたりする。

そして、その長い両腕を水平に広げる。

その広げた腕から、ぱさー、と、白い翼が伸び、ふわりと舞う。

「ありがとう、シャペル……」

ちゃんと飛べる形態になったのを確認してから、彼の首に飛び付き、そのまま身体を横向きにして逆上がりの要領でぐるぐるっと回転してシャペルの肩の上に乗る、そこに肩車のように座る。

「準備はいい？ 飛ぶよー！」

「「おおー！」」

ゆっくりとが浮かび上がり……、

「リフトオーフー！」

と、私のかげ声と共に大空に舞い上がる。

「すげえ……」

初めて乗った佐々木がゴンドラのパルピット、手すりに捕まってキョロキョロと周囲を見渡す。

「ナビー、あの山に向かってまっすぐだ！」

と、人見が行き先を指定してくれる。

「はあいー！」

そう返事はするけど……。

「おととと、風に流された……」

とか、適当なことを言っただけの方角に飛んでいく。

「そつちじゃない、ナビィ、舵取り頑張ってくれ！」

「はい！」

一生懸命方角を戻そうと頑張っているふりをして別の方角に飛んでいく。

さらに高度を上げ、山々を飛び越える。

山を越えると、草木もまばらなごつごつとした岩山が点在するだけの荒野が見えてくる。

「もう少し緑が広がっていると思っただけ……」

「ああ、山を越えてすぐにこうなっているとはな……」

「ほとんど砂漠じゃないか……」

下のゴンドラからはそんな会話も聞えてくる。

私は視線を上げて遠くを見る。

雲ひとつない晴天の下、どこまでも不毛なサンドイエローの荒野が

続く。

「水平視程は30キロといったところか……」

地平の先が砂煙でかすむ。

「彰吾！ 砂嵐が見えるから、迂回するね！」

と、下にいる人見に大きな声で言う。

「ああ！ わかった！」

返事が返ってくる。

「じゃあ、シャペル、あつち」

と、彼の頭を両手で掴んで、その顔を進行方向に向かせる。

「ピポロポ」

すぐに反応して、そちらの方角に飛んで行ってくれる。

「今度はあつち！」

「ピポロポ」

と、何度も方向を変えながら飛んで行く。

1時間くらい飛んだらどうか、まばらな草木や岩山が消え、完全な砂漠が視界いっぱい広がる。

無数の砂丘が連なる景色、それがどこまでも続く。

陽射しも一段と強くなり、私の白い肌をじりじりと焼く。

「あつー」

手傘を作って真つ青な空ときらつく太陽を見上げる。

「ナビー！ かなり西に来すぎている、ここからは真東に向かってくれ！」

と、ゴンドラの人見が地図とコンパスを手に私を見上げて大きな声で言う。

「わかったあー！」

彼の指示通りに真東に方向転換する。

この指示を見越して目的地よりも、相当西に向かって飛んでいた。

たぶん、このまま真東に向かえば、本当の衝突現場に到着するはずだ。

30分くらい飛ぶと、地平の先がキラキラと輝きだす。

「なんだ？」

「光っているな」

「蜃気楼じゃないか？」

下からそんな会話も聞えてくる。

「ナビー、あそこかもしれない、あそこに向かってくれ！」

と、人見から指示が出る。

「はあい！」

キラキラ輝く場所に向かって飛ぶ。

しめしめ、人見は気付いていない。

あの場所は当初の目的地、ラグナロクから北東に60キロの地点ではなく、私が考える空中衝突の地点、ラグナロクから北に70キロの地点だ。

輝きは少しずつ大きくなる。

「緑もあるな……」

「なんだ、湖か……？」

みんなが目を凝らして輝く先を見る。

背の高い木々がまばらに生い茂り、地面には色とりどりの、色鮮やかな花々が咲き乱れる。

そして、その木々、草花の中に大きな湖が姿をあらわす。
湖面がキラキラと太陽の光を反射する。

水鳥だろうか、優雅に泳ぐその姿を確認することができる。

「オアシスってやつか……？」

と、佐々木が言う。

そう、そこは砂漠の中にあらわれたオアシス。

「みんな、あそこに降りるよ！」

私はそう宣言する。

「ああ、わかった」

「調べて行こう」

と、東園寺と人見が同意してくれる。

「シヤペル、ランディング！」

「ピポロポ！」

私たちはあのオアシスに向かって降下していく。

第139話 ランウェイインサイト

緑に囲まれた湖……。

旋回しながら、降りられる場所を探す。

「大きいな……」

湖は大きく、直径は優に1キロは超えているだろう。

その湖の中央には小さな島も見える。

「まぶしい……」

水が澄んでいるせいか、湖面の反射も盛大で目が眩みそうになる……。

「うーん……」

それでも、手傘を作つて降りられる場所を探す。

「シャペル、あそこー!」

そこはすぐに見つかる。

木々や草花に覆われた湖岸で一箇所だけ砂浜になっている場所があった。

「ピポロポ!」

シャペルがそこに向かって降下していく。

着陸直前にその降下速度を緩めると砂浜の砂がふわりと舞う。

「おお?」

と、みんながバランスを取る。

そして、そつと着陸、音もなくゴンドラが地上に降ろされる。

その横にシャペルも降りる。

「ピポロポ」

着陸と同時に翼を格納する。

「ありがとう、シャペル! とお!」

と、私は彼の肩を蹴つて砂浜に飛び降りる。

「おお……、砂浜だ……」

砂浜の砂が歩くたびにキュッキュ、と、音を鳴らす。

「おもしろーい!」

白くまのリュックサックを置いて、キュッキュ、キュッキュ、音の

する砂浜を駆け回る。

「あははは」

と、両腕を思いっきり広げてくるくと回転し、まぶしい太陽を見上げる。

「楽しいー！」

そして、今度は小さな波が寄せては返す波打ち際まで歩いて行く。

「おお……、ラムサール条約やワシントン条約が守られてそんな綺麗な水……」

透きとおる、湖の水を覗き込む。

「おお……」

ちっちゃなお魚もいる。

「よーし」

と、サンダルを脱いで、革の手袋を外し、それをゴンドラのほうに放り投げ、魔法のネックレスを首につける。

そして、ワンピースの裾をつまんでつま先で水面をちよんとしてみる。

すると、綺麗な波紋が湖面に広がっていく。

「おお……」

ちよん、ちよん、と、何度も繰り返して、無数の波紋を作っていく。

「波紋と波紋が重なる……」

不思議な模様……。

私はちよん、ちよん、と、しながらその波紋をしばらく眺める。

「いい場所だな、水も豊富だ」

「ああ、最初からここに墜落してくればよかったのにな……」

ゴンドラとシャペルを結ぶロープを外したり、荷物の積み下ろしをしている東園寺たちの会話が聞えてくる。

「今からでも遅くないんじゃないの、ここに引越す?」

「それは駄目だ、佐々木、俺たちの飛行機とヒンデンプルクの飛行船を誰かに渡すわけにはいかない」

そう、人見の言う通り、ラグナロクの放棄は日本への帰還を諦めるのと同義。

「そうか……、いい場所なんだけどな……」

と、佐々木は湖を見ながら言う。

「それなら、ここに別荘を作るとかは？」

「ラグナロクから何キロあると思っっているんだ……、50キロ以上はあるぞ……」

「使い道としては保険、ラグナロクの陥落を見越してここに砦を築いておくってことくらいしかないか……」

みんなの会話が続く。

「よーし」

そんな会話を聞いていても面白くないので、

「たあー！」

と、少し助走をつけて湖の中にジャンプする。

バシャーン、と、盛大に水しぶきが飛ぶ。

「きゃー！」

顔にかかった！

でも、そんなことは気にしない！

私はワンピースの裾をつまんで水の中をバシャバシャと走り回る。

「きゃっきゃー！」

楽しい！

「まーてー！」

さらに、メダカみたいな小さな魚を追いかける。

「えいー！」

そして、捕まえようと水の中に手をつっこむ。

「逃げられたあー！」

もう一回！

「えいー！」

今度は両手で水をすくうように小魚を捕まえようとする。

水が手の隙間から零れ落ちて、それが太陽の光を反射してキラキラと輝く。

「くそおー！」

でも、そこに小魚はいない……。

「もう一回！」

と、また両手で水をすくう。

「ははは、ナビーはかわいいなあ……」

「平和だね……」

と、いつの間にも人見と和泉が波打ち際まで来ていて、私のことを微笑ましそうな表情で見守っていた。

「くっ……」

子供を見るような目で私を見やがって……。

「ゆるせん！」

パシヤパシヤと彼らに近づいて、

「真水をかけろー！」

と、両手で水をすくって二人にかけてやる。

「うわ!？」

「つめた！」

人見と和泉が大袈裟なりアクションで逃げ惑う。

「真水をかけろー！ 真水をかけろー！」

それが面白くて、何度も二人に水をかけてやる。

「やめ、やめ！」

「うわ、やられた！」

二人は奥には行かずに、波打ち際を逃げ惑う。

「あははは、おもしろーい！」

何度も水をかけてやる。

「和泉、やるぞー！」

「おう！」

お？ 二人が靴を脱ぎだしぞ？

「にげろー！」

と、私は反撃を予想して、パシヤパシヤと逃げていく。

「待て、ナビー！」

「甘いぜ！」

二人が水の中に入ってきた！

「こうなったら！」

と、私は方向転換して、砂浜に上がって、さらに、ゴンドラのほうに向かって一目散に逃げる。

そして、作業をしている東園寺のうしろに回って姿を隠す。

「ずるいぞ、ナビー！」

「ああ、逃げられた……」

二人が落胆する。

「ふふふ……」

と、東園寺の背中から少し顔を出して彼らを見る。

「遊んでないで、おまえも手伝え、ナビーフィユリナ……」

東園寺が作業の手を止めて私を見る。

叱られた……、でも、

「えい！」

そのシャツをめくって、湖の水で冷え冷えになった手を直接背中に押し当ててやる。

「ひっ!?!」

と、びくつとなった。

「あつたかーい」

私の手はあつたかなくなった。

もう片方の手も……。

「ひっ!?!」

またびくつとなった。

「ほら、ほらあー！」

と、お腹のほうにも手を回してぺたぺたとしてやる。

「や、やめろー！」

東園寺が私の手を掴もうとするけど、そうはさせない、器用にその手をかいくぐってぺたぺたしてやる。

「ひっ、ひいーいー！」

さらに、背中私を捕まえようと身体を回転させるけど、私もそれに合わせて回転して彼の背中に張りつき続ける。

「どうだ、まいったかあ!?!」

「まいった、まいった、降参だ」

勝った！

「ふふふ……」

と、勝ち誇った顔で東園寺を解放してやる。

「ナビーがいると、ホント場が和むなあ……」

今度は佐々木が微笑ましそうな表情で言う。

また子供扱いしやがって！

「ゆるせん！」

と、冷え冷えの両手を構えて、佐々木ににじり寄る。

「え？ なに、今度は俺……？」

不穏な空気を感じて彼が後ずさる。

「こら、遊びはそこまでだ、ナビーフィユリナ」

と、東園寺が私の頭をポンポンと軽く叩く。

「もうこんな時間か……」

彼が太陽を見上げながら言う。

私も太陽を見上げる。

太陽はちょうど真上、強い陽射しが皆さんと降り注ぐ。

「調査を始める前に昼食を済ませておくか……」

「おお！ お昼！ お弁当！」

私は駆け足で白くまのリュックサックを置いた場所に向かう。

「えへへ」

それを大事に胸に抱えてみんなのところに戻る。

「ナビー、こっちだよー」

と、和泉が木陰にレジャーシートを敷きながら声をかけてくれる。

「こんなものも持ってきたんだ！」

それは黄色いシートで、ひよこの絵がいっぱい描かれているものだった。

「わあ」

かわいい！

「飛行機の遺留品、借りてきた」

と、シートが風に飛ばされないよう、四隅に石を置きながら説明してくれる。

「へえ」

私は白くまのリュックサックを置き、四つん這いになってひよこのイラストを覗き込む。

「これピップみたい」

「そうだね」

「こっちはスカークみたい」

「うん、うん」

「アルフレッドはどこかなあ……」

と、四つん這いでアルフレッドに似ているひよこのイラストを探
す。

「これかな？」

和泉が指をさす。

「どれどれ？」

四つん這いでそちらに向かう。

「これこれ」

「おお、アルフレッドだあ……」

まじまじとそのひよこのイラストを覗き込む。

「よし、食うぞ」

と、東園寺たちが来た。

「はあいー！」

今度は膝立ちでちよこちよこ歩いて白くまのリュックサックの元
に向かう。

「えへへ、お弁当……」

白くまのリュックサックを開けてピンクの包み布に入ったお弁当
箱を取り出す。

顔を上げて辺りを見渡す。

すでにみんながシートの中真ん中辺りに陣取り弁当箱を開けようと
しているところだった。

私も膝立ちでちよこちよこ歩いてみんなの輪の中に加わる。

「シャペルもおいでえ」

ついでに、ゴンドラの近くに立ったままのシャペルも呼ぶ。

「ピポロポ」

ギーギー音を立てて歩いてきて、レジャーシートの少し手前で立ち止まり、そこにしゃがむ。

「なぜ、そんな手前に……」

と、思ったけど、そこは大きな木陰になっていて、太陽の光を完全にシャットアウトしている場所だった。

「なるほどね……、じゃあ、食べようー」

私は弁当箱を開ける。

「おお……、三色そぼろ弁当だ……」

これは夏目が早起きして作ってくれたもの。

「いただきますー」

と、三色そぼろ弁当に箸をつける。

「いただきます」

みんなもそれに続く。

「おいしい」

綺麗な景色を見ながらみんなで弁当をいただく。

第140話 割りと普通な

日差しは強く焼け付くよう。

その強い日差しを青々とした木々が遮り、熱せられた空気は湖面を駆け抜けてきたひんやりとした涼風がかき消してくれる。

大きな湖……。

三色そぼろ弁当を食べながら大きな湖を眺める。

直径は1キロ以上……。

形は上空から見た限り円形状……。

そして、湖の中央には小島がある。

小さな……。

どのくらいだろうか……。

数十メートルくらいか？

緑に覆われた小島……。

まーるい、半球体……、まるで人工物のような……、グレーのコンクリートのような突起物、柱も見える……。

「うーん……」

予想通り、空中衝突に関連する何らの手がかりだろうか。

「東園寺、この場所にも名前を付けておいたほうがいいんじゃないのか？」

和泉がお弁当を食べながら話を振る。

「そうだな……、何がいいだろうか……」

東園寺もお弁当を食べながら、遠くの小島を見ながら答える。

「いつも通り、割と普通なナビーフイユリナ記念オアシスとかいいんじゃないか？」

と、人見が答える。

「また始まった……、私をネタにした名前……、馬鹿にしやがって……。」

「賛成、いい名前だと思うよ」

佐々木まで賛同する。

「それじゃ、決定だな、この場所は、割と普通なナビーフイユリナ……」

「はんたい、はんたい！」

東園寺の言葉を遮って大きな声で言う。

「なんだ、ナビーフイユリナ……、反対するなら何か代案を出せ……」
とか、彼が言う……。

「だ、代案？」

「そうだ、反対なら、何か他の名前を出せ」

「う……、きゅ、急に言われも……」

と、考え込む。

「うーん……」

何かいい名前……。

「ないなら、割と普通なナビーフイユリナ記念オアシスでいくぞ……」

あ！

「ここはオアシス！ つまり、ユートピア、理想郷！ そこから取つて、シャングリラにしよう！ そうしよう！」

なんとかアイデアを捻り出す。

「おお……」

「ラグナロクに続いてシャングリラ……」

「東園寺が好きそうなネーミングだ……」

「いいな……、シャングリラ……」

予想外に好評。

「よし、それではこのオアシスの名称をシャングリラとする」

と、東園寺がそう言ってくれる。

「賛成、異議なし！」

「いいね、シャングリラ」

「ナビーのネーミングセンスには脱帽だよ」

「えへん」

褒められて鼻高々。

「ここはシャングリラ……」

改めて綺麗な湖を見る。

うん、いいね。

自然と笑みがこぼれる。

やがて、昼食も終り、私たちは後片付けを始める。

「よいしょっと」

空の弁当箱を白くまのリュックサックに片付け、それをシャベルが座っている横に置く。

「見張っててね」

「ピポポ」

と、私に言葉にそう返事してくれる。

「それでは探索を始めるか」

東園寺も後片付けを終えそう話す。

「どうする、東園寺？ 先にあの島を調べるか？ それとも湖の外周におかしなものがないか調べるか？」

と、人見が言う。

「そうだな……、まず、湖の外周からやるか、もしかすると、人が住んでいるかもしれんからな」

「ああ、わかった……」

「じゃあ、やるか、二手に分かれて調べよう、俺と人見は右から、和泉と佐々木は左から行ってくれ」

「おう」

「了解」

と、役割分担も済み、それぞれが探索に出掛ける。

「あれ、私は？」

「ナビーフイユリナ、おまえはここで荷物の見張りでもしていてくれ、どうせ、この大きさだ、すぐ終わる」

「はあい」

返事をして、シャベルの隣に座り、

「いってらっしゃあい」

と、声をける。

みんなが手を振って応えてくれる。

その背中を見送る。

見えなくなると、今度は周囲の砂浜を見る。

その砂を手ですくい、風に流す。

さらさらとキメの細かい砂漠の砂だ……。

木陰になる場所にはか細い草花がまばらに生えている……。

「うーん……」

さらに、ぼんやりと、湖の中央にある半球体の小島を眺める。

「どう見ても、人工物だよね、あれ」

「ピポポ」

その言葉にシャペルも同意してくれる。

生い茂る草木の間から光が漏れる。

おそらく、なんらかの金属が太陽の光を反射しているものと思われる。

「よし」

私は立ち上がり、お尻に付いた砂や枯れ草を払う。

そして、波打ち際まで歩いていく。

小さな波が寄せては返し、寄せては返す……。

相変わらず、小さな魚が泳いでいる姿を見ることが出来る。

さらに、その先、無数のさざなみが太陽の光をキラキラと反射させる。

「うーん……、距離は500メートルくらいかあ……」

と、ちよつと背伸びをして、両手で手傘を作って小島を見る。

「距離が500メートルだとすると……、あの小島の大きさは直径50メートルくらいかあ……」

もちろん、湖面の下、水の中に沈んでいる部分はもっと大きいかもしれない。

「早くみんな戻ってこないかあ……、あの小島に行ってみたい……」
と、思っている……。

「なんか来た……」

ゆらゆらと湖面に浮かぶのは……。

「バルケッタ……」

そう、小船。

それが、こちらに向かって、ゆっくりとやってくる。

「バルケッタ……」

そう、テストに出た問題だ……。スペイン語で小船はバッテリー、イタリア語で小船はバルケッタ……。では、おーじろーは？ という問題……。

この問題をよく思い出すけど。今だにその答えがわからない……。
「そもそも、おーじろーってなんなの……。？」

謎だ……。

と、そんなことを考えている間に小船は近づいてきて、砂浜に乗り上げる。

「おお……」

私は小船に駆け寄り、その中を覗き込む。

「おお……」

全長3メートルくらいの小船……。

かなり新しく綺麗、しかも、ちゃんとオールまでついてる。

「おお……」

私は船に乗り込む。

砂浜に乗り上げてしまっているので揺れない。

「いいね……」

デッキ部分は乾いていて、水漏れはない。

「漕ぎ手座も綺麗」

私はそこに座って色々触って強度を確かめる。

「おお、ちゃんとしてる……」

さらに、漕ぎ手座に横になる。

「お空、真つ青……」

横になりながら大空を見上げる。

「ああ……、気持ちいい……」

早くみんな帰ってこないかな、この船であの小島に行けるのに……。

「眠くなってきた……」

三色そばろ弁当をお腹いっぱい食べたせいか、睡魔に襲われる。

「寝て待つてよう……」

と、まぶたを閉じる……。

すぐに眠りに落ちる。

ああ……、気持ちいい……、ぶらん、ぶらん、揺れるのも気持ちいい……、あの子供たちの訓練場にある揺り椅子、ロッキングチェアみたいな感じ……。

「ぶらん、ぶらん……」

ああ、船もいいなあ……。

海賊船の船長になりたいなあ……。

「よーそろー……、ぶらん、ぶらん……」

どのくらい寝ていただろうか……、5分くらいな気もするし、1時間くらい寝ていた気もする……。

「ぶらん、ぶらん……」

ちやぶん……。

下ろしてした手、その指先に水が触れる。

「冷たい……」

と、反射的に手を上げる。

「うーん……?」

目を開けて、そして、船底、デッキ部分を見る……。

水面がキラキラと太陽の光を反射させる……。

「ええっ!?!」

と、びっくりして上体を起こす。

デッキ、船の中が水浸し!

ちやぶん、ちやぶんしてる!

「ど、どうして!?!」

と、私は漕ぎ手座の上に立ち周囲を見渡す。

「流されてるー!」

そこは湖の中、砂浜から100メートル以上流された沖合いだった。

「ど、どうして……」

しかも、船底に穴が空いていたのか、沈没しかかっている。

「ナビー!?!」

「なんで、そこにいるんだ!?!」

「どうしたんだ、その船は!？」

と、砂浜のみんなが私に気付いて大きな声で叫ぶ。

「みんなあ! 助けてえ! 船が沈んじゃう!」

両手を大きく振ってみんなに助けを求め。

「待ってろ、ナビー!」

「いまいくぞ!」

と、みんながバシャバシャと湖の中に入り、そのまま飛び込むように水泳に切り替える。

「は、早く!」

船の中にどんどん水が入ってくる。

それと共に、視界がどんどん下がっていき、湖面が近づいてくる。

「し、沈む!」

第141話 雨水の神渡し

船は少しずつ沈んでいく。

船内も浸水し、水位は上がり、私の立つ漕ぎ手座にまで水が迫る。

「ああ！ 私のお気に入りのピンクのリボン付きの白いサンダルが濡れちゃう！」

と、その場でぴちやぴちやと足踏みしながら逃げ場を探す。

「よしー！」

そして、漕ぎ手座から欄干に飛び移る。

これで少しは時間を稼げるはず。

「おーい！ みんなあー！ 早く来てえー！」

と、揺れる欄干の上でバランスを取りながら必死にみんなに助けを求める。

でも、まだ遠い、数十メートルくらいある。

「ああ、駄目、水が迫ってくるー！」

あと数センチのところまで水面が近づき、わずかな波が私のつま先を濡らす。

「きゅーー！」

と、サンダルが水に濡れるのを覚悟して身をこわばらせる。

ゴン。

その時、そんな音が船底から聞えてきた。

「きゅーー？」

あれ？

止まった？

おそる、おろる水面を見る。

「沈没が止まった……」

そう、水位の上昇は完全に止まっていた。

しかも、先程までゆらゆらと揺れていた船も、ぴたり止まり揺れは収まっていた。

「うーん？」

困惑するけど……、なぜ沈没が止まったかの理由はすぐにわかる。

「水が澄んでいて、湖底がはっきりと見える……」
浅い……。

そう、湖底がすぐ近くに見える。
「船が底についたのか……」

メダカのような小魚が気持ち良さそうに湖底を泳ぐ。

「おお……」
と、しゃがんで湖底の小魚を覗き込む。

「ナビー！」
「無事か!？」

みんなが泳いでくるけど……。

「あ……」
「え……?」

と、みんなが浅いことに気づき、足を付き立ち上がる。

「あ、浅い……」

そう、水深は1メートルもないだろう。

「ナビーフィユリナ……、心配させるな……」

東園寺がばしゃばしゃと私のところに歩いてくる。

「ほら」

そして、背中を向けて、乗れというような姿勢をとる。

おんぶかあ……。

と、思ったけど、

「たあー」

と、勢いよく彼の背中に飛び乗り、さらに駆け上がり、そのまま東園寺の頭を掴んで肩車の姿勢にとる。

「よし」

東園寺ロボだ。

かかどでトントントンすると前進、操舵は行きたいところに顔を向ける。
止まるときは頭をうしろに引っ張る。

これが東園寺ロボの操縦方法だ。

「やはり誰かいるな……」

人見が小船を見ながらつぶやく。

「やはり……？」

私は聞き返す。

「ああ……、あの森の向こうに馬が止めてあった。それと馬車も……」

「馬？ 人はいなかったの？」

「いない、馬と馬車だけだ。家屋などもなく、人が住んでいる気配はない」

「オアシスに水の補給に来ただけか……」

と、私は少し考え込む。

「俺たちもそう思ってた馬の持ち主を探したがどこにもいない……」

大きいといっても、直径一キロくらいのオアシス、人がいたらすぐにわかる。

「そして、この船……、それなりに新しい……」

人見が沈没した船を見る。

彼の言うとおり、船内、漕ぎ手座やオールなどもちゃんと手入れされていて綺麗なものだった。

「この船の持ち主とあの森向こうの馬の持ち主は同一と見るのが自然だろうな……」

東園寺が静かに言う。

「ああ、そして、オアシスに水分の補給に来ただけなら、こんな船はいらない、使わない……」

さらに、船を何に使うかというのと、もちろん、湖の中央にある、あの小島に渡るため……。

なんのために……。

「船は沈没し、疑惑が浮上する……」

みんながあの小島に視線を移す。

「あそこに何かあるな……」

美しい曲線を見せる半円球の小島……。

よし。

「東園寺ロボ！ あの小島に向かうのよ、調べよう！」

と、小島を指差し、かかとでトントンと彼の胸あたりを叩き、拍車

をかける。

「行ってみるか……」

東園寺ロボが小島に向かって歩きだす。

「ああ……」

「行こうか」

と、和泉たちもそのあとに続く。

「それにしても、浅いな……、遠浅っていうのか……」

和泉が腰くらいの高さの水をかきわけながら言う。

「ああ、意外だな、もつと深いのかと思っていた……、それに水も温い……」

それに対して、人見が答える。

そして、すぐに、半円球の小島に到着する。

「あーん」

私は小島を見上げる。

高さは30メートルくらいあるかなあ……。

それが草花に覆われている。

「見ろ、人工物だ」

人見がその草花をむしりとり、外壁をあらわにさせる。

「石、レンガか……?」

東園寺の言葉通り、小島の外壁は赤茶色のレンガで覆われていた。

彼が壁に手を当てて確かめる。

「遺跡か何かか……、どこかに入り口はないのか……?」

私たちはどこかに入り口はないかと、その小島の外周を歩きだす。

「ぎゃあ!」

最後方からそんな叫び声が出た。

「た、たすけてえ!」

見ると、最後尾を歩いていたはずの佐々木がばしやばしやと溺れていた。

「智!?!」

「佐々木!」

みんなが彼に駆け寄る。

「うわ!？」

突然、水深が深くなっている。

まるで、崖のように……。

「底が見えない……」

ぞつとする。

「大丈夫か、佐々木!？」

和泉が佐々木に向かって手を伸ばす。

「和泉」

その身体を人見が支える。

「す、すまん、和泉、びつくりして溺れてしまった」

と、佐々木が和泉の手を掴んで、浅瀬のほうに戻ってくる。

「な、なんだんだ、これ……」

そして、一息ついて水面を覗き込む。

「道になっているな……」

そう、私たちが歩いてきた浅瀬は道だ。

幅10メートルくらいの道……。

それ以外は底が見えないくらい深い。

「なるほどな、こんな浅瀬に船は必要ないだろうと思っていたが、そういう理由か」

東園寺が湖の底を見ながら言う。

つまり、あの小船の持ち主はこの浅瀬の道の存在を知らない。

小島に渡るには船が必要だと思ったこと。

さらに言えば、ここで漁をしているとも考えられない、だって、道具類が一切なかったのだから。

そこから推察すると、あの小船の持ち主は私たちと同じ、よそから来た調査団、または、遺跡荒らし、墓荒らし、その類の可能性が高い。

「なるほどな……」

と、東園寺が足で水底を払って砂を巻き上がらせる。

すると、その砂で水が濁ってどこが浅瀬で、どこが崖かわからなくなる。

「動くなよ、佐々木、また落ちるからな」

人見が忠告する。

「ああ……」

やがて、巻き上がった砂は沈み、また水底が見えるようになる。

「浅瀬の道はあの座礁した小船までまっすぐ続いている。憶えておいてね、何かに使えるかもしれないから」

東園寺の意図を汲んで説明してあげる。

「どうする、東園寺？ 盗掘団がいるかもしれないぞ、一旦引くか？」

人見が尋ねる。

「と、盗掘団……、危ない連中か……？」

東園寺の代わりに佐々木が言う。

「まだわからんが、その可能性がもつとも高い」

人見が人差し指でメガネを直しながら答える。

「そ、そんなあ……」

「ここから登れそうだな」

と、そんな会話をしているうちに、和泉が登れそうな場所を発見する。

「どこだ、和泉？」

「ここだ」

そこは、何本も太い蔦が上から垂れ下がっている場所。

「強度も問題ない」

和泉が何度も蔦を引っ張ってその強度を確かめる。

「とりあえず進むか」

「そうだな、行ってみよう」

「じゃあ、登るぞ」

と、和泉を先頭に蔦を登り始める。

「ま、マジかよ、だつて、盗掘団がいるかもしれないんだろ？ せめて、

ナビーは安全な場所に避難させおいたほうがいいんじゃないのか？

なんなら、俺がナビーについてやっていてもいい、お、おい、ちよつと待ってくれ」

と、佐々木が大急ぎで蔦を登ってくる。

30メートル、そのくらいは登っただろう。

「たかーい」

頂上に到着。

私は東園寺の肩車の上から両手を広げて風を受ける。乾いた風が額に当たり、前髪をふわって持ち上がる。

「ここから入れそうか？」

頂上の真ん中に丸い穴がある。

直径1メートルくらいの穴。

「やはり、先客がいるな……」

そして、その穴には太いロープが垂れ下げられている。

「行くか、東園寺？」

和泉がロープを掴み、それを見せるように東園寺を見上げる。

「危険だ、東園寺、古代遺跡なんて、映画みたいに罠があるかもしれない、それに盗掘団もいるんだ、尚更引き返したほうがいい」

と、佐々木は再度撤退を要求する。

「公彦」

「東園寺」

みんなが彼の決断を待つ。

「明日死ぬと思つて生きなさい、永遠に生きると思つて学びなさい……。マハマト・ガンジー……。俺の座右の銘だ、このまま進むぞ」

東園寺がそう言い、穴の前に立つ。

「なんだ急に……」

人見が軽く笑う。

「なら、俺も。同じ病を持つものは互いに憐れみ合うし、同じ悩みを持つものは互いに助け合う。伍子胥。これが俺の座右の銘だ」

「伍子胥か……、それなら俺は……、猟犬は用が済めば、煮て食われる。范蠡……」

と、和泉が言い、にやりと笑う。

なんか、いきなり、座右の銘とか、偉人からの引用大会になつてるんだけど……。

「じゃ、じゃあ、私も……」

と、東園寺の頭をぽんぽん叩きながらネタを考える。

「えーつと……、馬鹿は死ななきや直らない。ホセ・オルテガ……」
しーんとなる……。

みんながなんとも言えない顔で私を見る。

「あ、ミス、やり直し、えーつとねえ……、口紅をつけて綺麗に着飾っても豚は豚だ。バラク・オバマ」

また、しーんとなる。

あ、あれ、間違った？ 豚は焼いてから食べ、だっただけ？

「あー、じゃあ、強者は何をしても許される。イヴァン四世」
……。

くっ……。

みんなの視線が痛い……。

「まあ、いいだろう……、次、佐々木……」

「ほっ……」

東園寺の言葉にほつと胸を撫で下ろす。

「えっ？ 俺も……？」

佐々木が考える。

「えー……」

そして、口を開く。

「なんかやだなー、こわいなー、変なの連れてきちゃったかなー。稲川

○淳二」

くっ……。

「ぶっ」

「う……」

みんなが笑いを堪える。

「さすがだな、佐々木……」

東園寺も笑いを堪えながら言う。

「緊張もほぐれたな、では、行くぞ」

「「おお!!」」

私たちは小島の中に突入していく。

第142話 タンクデサント

誰かが設置したであろうロープを伝って島の中に降りていく。

「深いな……」

私は東園寺の頭をしつかり両手で掴んで周囲を見渡す。

ちなみに私はまだ東園寺に肩車をしてもらっている。

そう、彼は私の東園寺ロボなのだから、それも当然のこと。

改めて周囲を見渡す。

そこは幅1メートル程度の縦穴……、いや、わずかに傾斜があるだろうか、少し斜めになっている。

壁はみろり色、びつしりと苔類に覆われており、それが剥がれやすく、足を滑らせやすい。

また、上からの光が差し込み、狭い縦穴の中でもそれほど暗いという印象はなかった。

少しずつ傾斜がゆるくなり、やがて完全に水平になる。

「狭いな……、どこまで続くんだ……」

「明かりが見える、行ってみよう」

「なんかやだなー、こわいなー」

と、後ろの和泉たちの会話も聞える。

「ナビーフユリナ、降りろ、ここからは這っていく」

水平になっても幅は変わらない、高さ1メートル程度の横穴になっただけ、立ち上がることもできない。

「やだ」

と、私は肩車をやめ、今度はお馬さんのように東園寺の背中に座りその頭を両手でがっしりと掴む。

「いけ、いけえ」

そして、進行方向を指し示し拍車をかける。

「頭に気をつけろよ……」

「ぎりぎり大丈夫」

と、頭すれすれの天井を見ながら答える。

「あーん……」

さらに、みろり色の苔を指で削ってみる。

「……」

赤茶けたレンガが姿をあらわす。

予想外……。

てつきり、ヒンデンブルクの飛行船と類似の物、または、別の世界の飛翔体がここに落ちていると思つたのに……。

これじゃ、何の変哲もない、ただの古代遺跡だよ……。

ここは私たちの旅客機とヒンデンブルクの飛行船が衝突した場所だと思つたけど、違うかもしれない。

人見の空中衝突説が間違っている可能性が出てきたな……。

ヒンデンブルクの飛行船は100年前に墜落しているし、時間を飛び越えたつてのもの眉唾……。

「うーん……」

考え込んでしまう。

「見ろ、出口だ」

東園寺の声だ。

その声に顔を上げ、前方を見る。

「おお……」

光が見える。

そして、その光は弾ける。

私は目を細め、その明るさに目が慣れるのを待つ。

鼻をくすぐる草花の香り……。

そこはみろり豊かな森林になっていた。

木々は南国を思わせる葉の大きな広葉樹で、艶やかな果実を実らせている。

また、草花もシダ植物が中心で、初めて見るものばかりだった。

「な、なんか、温室みたいだな……」

そう、私の感想も佐々木と同じ。

気温も高く、天井自体が半透明になっているせいか、その強い日差しを直接肌を感じるができる。

「何らかの遺跡だとは思うが……、中は荒れ放題だな……、ナビーフイ

ユリナ、いい加減降りろ……」

と、四つん這いのままで私を背中に乗せている東園寺が不機嫌そうに言う。

「しようがないなあ……」

私は渋々彼の背中から降りる。

「よいしょつと……」

そして、地面に立つ。

足元はしつかりとじていて、ぬかるみはない。

さらに、南国風の草木の割には湿度も低く、苔やカビなども皆無、昆虫類の姿も見えない。

私はサンダルの裏に付いた乾いた土を見て土質をチェックする。

「乾いているけど……、黒土ね……」

外のサンドイエローの砂とは違い、黒色の腐葉土になっている。

それは、大昔からここに草木が自生していたことの証明。

私はかかどで黒土を掘ってみる。

「結構厚い……」

この厚さになるまでに数百年は要したと思う。

つまり、この遺跡が造られてから少なくとも数百年は経つということ。

「ますますわからなくなってきたぞお……」

背の高い木の幹に手を添えて上を見上げる。

いくつかの木が天井を突き破っており、そこから真っ青な空が顔を覗かせる。

「それじゃ、探索に行くか」

「その前に、先客と出くわした場合どうする?」

先を行こうとする人見に和泉が質問する。

「専守防衛なんて柄ではない、遭遇したら敵とみなし即攻撃する。それでいいな、東園寺?」

「ああ、それで問題ない、躊躇するな、躊躇した時間の分だけ命の危険に晒されると思え」

「おーけー」

サーチ&デストロイね。

私たちは森の中に分け入っていく。

雨水だろうか、それとも湖の水が流れ込んでいるのだろうか、小さな水溜りや、細い小川が点在する。

「ナビー、足元に気をつけて」

「はい」

それを崩れ落ちた剥き出しになった赤茶けたレンガ積みを足場にして飛び越えていく。

また、遺跡の中は階層になっており、伸びた蔦を頼りに下へと降りる。

おそらく、元は仕切りなどで区切られていたのだろうけど、長年の風雨、植物などの浸食、または、経年劣化により崩れ落ちて開けたドーム状になってしまったのだろう。

耳を澄ませば、かすかな水の流れる音とともに、動物の鳴き声も聞えてくる。

それと、遠くから鳥の鳴き声も聞えてくるけど、こちらはドーム内なのか、それとも外なのかの判別はつかない。

「チツチツチー……」

と、無意識に鳥の鳴き声の真似をしてしまう。

「あうあー、あうあー……」

さらに、近くから聞える小動物の真似もしてみる。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

姿の見えない小動物たちからの返事があった。

「あうあー……?」

私は立ち止まって聞き返す。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

意外と凄く近くにいるかも、その辺の草むらの中とか。

案の定、カサカサ、カサカサ、と、近くの草むらからそんな音が聞

えてくる。

「あうあー、あうあー」

「な、何の鳴き声なんだ……?」

佐々木が警戒しながら草むらを見る。

かわいい鳴き声に聞えるけど、たぶんね、トカゲとか凶暴なやつだ
と思うよ。

「よし、智一、かわいい小動物だと思うから、見てきて」

と、佐々木を安心させるように言い、指示を出す。

「え? お、俺?」

「はやく、はやく、逃げちゃう!」

彼を急かす。

「お、おう……」

と、おそる、おそる草むらに向かう。

「あうあー、あうあー」

カサカサ、カサカサ……。

「あうあー、あうかー」

ガサゴソ、ガサゴソ……。

「危ないやつじゃないよな……」

と、佐々木が草をかきわける。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

すると、草むらから何か出てきた。

しかも複数。

「う、うわ?!」

佐々木は驚き、うしろに尻餅をつく。

「ひっ!?!」

と、襲いかかられると思ったのか、彼は両腕で顔を庇おうとする。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

でも、その動物は佐々木に襲いかかることはなかった。
動きが非常に遅いのだ。

「な、なに、これ……」

私はその動物をまじまじと見る。

白と薄茶色の毛並み……、短い手足とまん丸な身体……、そして、まん丸な黒いつぶらな瞳……。

体長は30センチくらい……。

それがゆつくりよちよち歩く……。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

耳の短いうさぎ……、いや、モルモットに近いだろうか……。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

数も多く10匹以上いる。

それうちの数匹が私の足元までくる。

「あうあー、あうあー」

なんだろ、これ……。

と、私はしゃがんでその小動物を見る。

「あうあー、あうあー」

かわいい……。

手を伸ばして、その頭を撫でて見る……。

「あうあー……」

すると、その小動物は目を細めて気持ち良さそうにする。

「おお……」

ふかふかすべすべで凄い手触りの良い毛並み……。

「気持ちいい……」

と、その小動物を撫でまわす。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

他の子たちも寄ってくる。

「撫でてほしいのかなあ?」

と、他の子たちも撫でてあげる。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

みんなも同じように目を細めて気持ち良さそうにする。

かわいい、なんだこれえ……。

「あうあー、あうあー」

私もあうあー言いながら小動物たちを撫でまわして、さらに、そのうちの1匹を抱きかかえて頬ずりをしてあげる。

「あうあー……、気持ちいい……、なんて気持ちいい毛並みの……」

それに、よく見るとキラキラしてシルクみたいだし、なんだか、香りもいい……。

うつとりする……。

「そ、そんなにいいの?」

「どれどれ?」

和泉たちが小動物に手を伸ばす、けど、

「シャアアアアアア!」

「キイイイイイイイ!」

「アギヤアアアア!」

と、もの凄い形相で牙を剥いて威嚇する。

「ひいひい!!」

「ええっ!」

彼らは驚いて、急いで手を引っこめる。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

と、小動物たちが和泉たちから距離を取るように私の足元に集まり身を寄せ合う。

「よし、よし……、怖かったんだね、大丈夫だよ、怖くないよー、あーあー」

集まってきた子たちを撫でてやる。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

うん、気持ち良さそうにしてる。

「な、なんで……」

「ナビーにばかり……」

「人間に限らず、動物でもなんでも、みんなナビーが大好きなんだよ……」

と、みんなが私と小動物を見ながら話す。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

これ欲しい。

ラグナロクに持って帰ろうかなあ。

第143話 インシデント

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

耳の短いうさぎのような姿形をした小動物……。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

私の手に頭、額をこすりつけてくる。

「よし、よし……、あうあー」

撫でて欲しいのだろう、私のその要望に答えて小動物たちの頭を撫でてやる。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

でも、なんだろうな、これ……、怯えているような感じもする……。しゃがんでいる私のワンピーススカートの中に頭を入れたりして身を隠そうとしているようにも見える。

「うーん……」

小動物たちを見る。

白と薄茶色の毛並み、短い手足とまん丸な身体、そして、まん丸な黒いつぶらな瞳。

なんて可愛いんだろう……。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

鳴き声まで可愛い。

「あうあー……」

と、また近くの草むらからカサコソと音がする。

「あうあー……」

よちよちと小動物が出てくる。

「うん？」

なんか、ちよつとふらふらとして……、

「ああつ!？」

背中に矢が刺さっているよ！

「どうしたの!？」

と、私は大慌てでその子に駆け寄る。

「あうあー……、あうあー……」

痛そうに、苦しそうに私の目を見る。

「だ、誰にやられたの、こんな酷いこと……」

かわいそうで、ちよつと涙目になって、その子を抱きかかえる。

「しよ、彰吾、なんとかならない、魔法で？ この子を助けて」

人見に助けを求めろ。

「どれ、見せてみる」

「うん」

と、矢の刺さった背中を彼に見せる。

「あうあー」

人見が矢に触れと、痛いのかビクツと反応する。

「ごめん、ごめん、痛かったか……、和泉、手伝ってくれ、矢を抜く、

止血を頼む」

「わかった」

和泉が近くに来て、

「美しくしき、流れのほとりで、慈雨にその身を任せ、ミインテールレット癒しの精霊糸」

と、呪文を唱える。

すると、彼の指先から、蜘蛛の糸のような白い繊維質の糸が無数に

噴き出す。

それを器用に人差し指と親指にわた飴のように巻いていく。

「準備おーけーだ」

と、和泉が矢の突き刺さった根元、傷口のところを人差し指と親指

で挟む。

「痛いかもしれないが、我慢してくれよ……」

人見が矢を掴み、力を込める。

私は小動物が動かないように少し抱く力を強くする。

「あうあー……」

力無く鳴く。

「あうあー……」

「我慢してくれよ……、ジルアス、カルキアス、サムトリアス、告げ鳴く鹿よ、風かけたるひさかたの白雪よ……」

人見も呪文を唱えはじめる。

「デイウスグラム、インフェルベウム、ラミルダード、その身を引き裂く至れり永遠、狂騒と静寂の、クラス・オ・ダール累世永遠……」

矢と小動物の身体が青く、うつすらと光り出す。

「彰吾？」

心配になつて彼に尋ねる。

「大丈夫だ、止血と幻術による麻酔だ……、もう少し……」

そして、矢が引き抜かれる。

「よし、成功だ」

人見が抜いた矢を草むらに放り投げる。

「よかった……、大丈夫……？」

「あうあー？」

と、元気が戻つたのか、小動物が身じろぎする。

「血も止まったかな？ 思ったより傷は浅そうだ」

和泉が傷口から指を離して出血具合を見る。

「あうあー！」

と、私の腕から逃げようとする。

「じゃ、じゃあ、もう、大丈夫かな……？」

私はしゃがんで、その子を解放する。

「あうあー！」

と、その子が他の子たちのところに合流する。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

みんなで仲良くしてる。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

しばらく見守っていると、またみんなが私の周りに集まってくる。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

そして、撫でて欲しそうに頭とかを押し付けてくる。

「よし、よし」

しようがないので、その手触りの良い毛並みを撫でてやる。

「こつちもー、こつちもー」

と、順番にみんなを撫でてやる。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

うん、気持ち良さそうにしてる。

「よかった、よかった」

自然と笑顔になる。

「かわいいなあ……」

「怪我した子がどれかわからなくなっちゃったね」

「回復してるだろ」

と、和泉たちも上から覗き込んでくる。

「でも、この子たち、なんて種類の動物なんだろう？」

私は小動物たちを撫で回しながら質問する。

「うさぎ？」

「カピバラ？」

「ふさふさ？」

わからないみたい。

「うーん……、なんだろうなあ……、うさぎ……、でもないようなあ……」

撫でながら考える。

「なんだろうね？ 見たことない動物だから、ここ、割りと普通なナビーフィユリナ記念オアシス特有の動物かもしれないね」

と、和泉が私の顔を覗き込み、笑顔でそう答える。

うん？

この名前って、割と普通なナビーフィユリナ記念オアシスだったっけ？ なんか、別の名前を付けたような気もするけど……。

と、小動物を撫でながら考える。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

でも、ホントかわいい……。

「よし、よし……」

手触りも最高……、この毛皮のコートとかマフラーとか手袋があったら絶対買うよ。

うん、全財産出してもいい。

「こつちから声がしたぞお!!」

「どこだあ!?!」

「待ってる、今行く、逃がすな!!」

と、そんな大声と共に、複数の足音がこちらに向かってくる。

「誰かいるのか!?!」

「人の声がしたぞ!?!」

これは日本語ではなく、現地の言葉だ。

それが近づいてくる。

東園寺たちは無言で、冷静に声のする方向に視線を送る。

それは当然なこと、私たち以外に誰かいることなど予想済み、別に慌てることではない。

そして、草をかきわけ奴等が姿をあらわす。

「なんだ、おまえら……?」

「横取りか……?」

「どこで、この場所を……」

私たちの姿を見て奴等が驚く。

私たちはじつと奴等を観察する。

髭を生やした壮年の男性が6人ほど……。

服装は……、ブラウンの、戦闘用のレザーメイルとは違う、よくなめした艶やかな皮革の服。

腰には剣を帯び、背中には槍、そして、手には弓……。

剣とは逆の胴にはじやらじらとした鎖……、その鎖に繋がれ、吊るされているのは……、

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

私のうしろに隠れ、怯えているこの子たちと同じ小動物……。

それが一人、数匹ずつ吊るしている。

それは適切な表現ではないのかもしれないけど、私の脳裏の浮かんだのは、

「密猟」

という単語だった。

「お、おまえら、同業者か……?」

「誰から、この場所を……?」

奴等が問いかけてくる。

でも、私は何も答えない、その腰に吊るした小動物たちを見て、即座に敵だと認定した。

「いや、ハンターではないか……」

「まだ若い……、子供、それに少女までいる……」

「遊んでいて、迷子にでもなったか……」

「こんなところにか?」

「他に仲間がいるんじゃないのか?」

と、奴等が話し合う。

「どうする? ここは俺たちの狩場、場所を知られたからには生かしてはおけない」

「殺すのか?」

「しかし、行方不明になったとあったは探しにくるかもしれないぞ」
「なあに、そいつらも始末すればいいだけのこと、ここは俺たちの縄張りだ」

殺意を私たちに向ける。

「ナビーフイユリナ、聞かなくても大よそ見当はつくが、一応、聞いておく、あいつらはなんとやっているんだ？」

東園寺が聞いてくる。

「私たちを殺す算段をしている」

短く答える。

「だろうな……」

和泉は腰に帯びた剣の柄に手を伸ばす。

「ほう……、小僧共、俺たちとやり合おうと言うのか……？」

「俺たちは強えぞ……」

「大人しくしていたら命だけは助けてやろうと思ったが……」

「うそ、うそ、最初から殺すつもりだよ」

「大人は怖いねえ……」

6人の密猟者たちがいやらしく笑い、弓をその辺に放り投げ、腰の剣に手をかける。

「小僧共おおおお!!」

「うおおおおおお!!」

「ぶっ殺してやる!!」

そして、一斉に剣を引き抜く。

「人見……」

東園寺がゆつくりと剣を引き抜きながら、人見に魔法を要求する。

「やれやれ……、アンシャル・アシユル・アレクト、七層光輝の鉄槌、赤き聖衣を纏いし深淵の主……」

人見による魔法の詠唱が始まる。

「佐々木は下がっている、俺と人見と東園寺でやる」

「あ、ああ、すまない」

と、佐々木は私の隣まで下がってくる。

「エア、エンリタ、エシルス、舞い降りろ、死の女神、フオーレル・ザ・アルテミス光輝の流星陣」

詠唱は終り、防衛陣が発動し、東園寺たちの身体が輝きだす。
「うおおおおお!!」
そして、戦闘は開始される。

第144話 フェイルセーフ

相手は6人。

こちらは、東園寺、和泉、人見の3人。
人数的に不利でも、こちらには魔法がある。

さらに、魔法は身体的な運動能力だけではなく、武器にまで及び、飛躍的に攻撃力や防御力を向上させる。

東園寺たちがゆくつりと密猟者に向かい歩み行く。

それは、魔法による優位性からくる余裕。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

「大丈夫だよ、心配いらないからね、守ってあげるからね」
と、不安そうにしている子たちを撫でてあげる。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

大丈夫、私たちのほうが圧倒的に強い。

「ガキども……」

「ぶっ殺すぞ……」

密猟者たちが警戒し、わずかに後ずさる。

やつらの一人が手にした剣を下段に構える……。

すると、その刀身が草の陰に入り、刀身を覆った草の葉がうつすらと光を放つ。

「光った……?」

気のせいかと思いい目を凝らす。

「どらあああああ!!」

でも、すぐにその剣を振り上げたため、天井からの光にかき消され見えなくなる。

「うらあああああ!!」

剣を振り上げたまま威嚇する。

「彰吾……、あの剣、何かおかしい、気をつけて」

と、私のすぐ目の前にいた人見彰吾に一声かける。

「おかしい?」

彼は少し振り返り聞き返す。

「あ、ううん、気のせいかも……」

勘違いか……、あの剣に魔法がかけられているのだとしたら人見が気付かないはずがない……。

彼は微弱な魔力でも感知する。

「どらあああああ!!」

「舐めんじゃねえぞ、小僧共おお!!」

意を決したのか、密猟者たちが雄叫びを上げて襲ってくる。

そして、先頭の、まだ剣を抜いていない和泉春月目掛けて剣を振り落とす。

「ハルー!」

和泉はそこからわずかに身体を前に倒し、剣の柄に手をかける。

「うっ?」

その瞬間、密猟者がうめく。

そう、彼は戸惑った。

和泉が剣の柄に手をかけた、その瞬間には剣は鞘から引き抜かれていたからだ。

「な、こ?」

密猟者の動きが止まる。

それは魔法のように見えるけど、仕組みは簡単、剣の柄を持つ手は動かさず、鞘を持つ手をうしろに、剣の湾曲に沿って音もなく引き抜いただけだ。

でも、正面にいる相手は何が起こったのかわからなかっただろう。

戸惑い、動きの止まった隙を見逃さず、和泉は一步踏み込む。

そこでも音もなく……。

砂煙も舞わない踏み込み……。

「天才だな……」

そう思わざるを得ない。

足を三点で接地させている。

通常、つま先、または踵から接地するけど、彼は違う。

まず、足の指と土踏まずの間の部分で接地し、次にかかとを降ろす、最後につま先を接地させ力を込める。

この方法ならば、音もなく高速で踏み抜くことができる。

「くあ?」

振り抜いた剣もまた高速。

脇腹から入り肩に抜ける。

「うがあ!」

鋭い、ビュ、という空気を切る音のあとに血が噴き出す。

天才……、天賦の才というのだろうか……、彼は誰に教わることなく、自然とあれをやったのける……。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

「よし、よし、大丈夫だよ」

と、不安がっている子たちの頭を撫でてあげる。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

安心したのか気持ち良さそうに目を閉じる。

「レージス、光を閉ざした虚無の剣、弾けて砕け、ディバロ剣気破弾!」

戦闘は続いている。

「ぐおっ!」

東園寺の魔法を込めた強力な一撃により、敵が持つ剣が真っ二つに折れる。

「く、くそっ!」

と、折られた剣を投げ捨て背中に担いだ槍を引き抜こうとする。

それを東園寺は黙って見守る。

手加減しているな……、彼の實力ならば初撃でその頭を叩き割ることもできただろう……。

「シロス、権力によらず、暴力によらず、その身を押し、シュトラッセ追い風」
「こちらは人見の魔法だ。」

「な、なんだ、この風は!?!」

強風を受けて密猟者たちが顔をガードする。

「急に風が吹いてきたぞ、こいつらの仕業か!?!」

「くそつ、なんなんだ、こいつらは!?!」

強風により舞った砂埃から目を守るように私たちから顔をそむける。

やはり、手加減しているな……、和泉たちが突っ立ったまま攻撃しようとしないう、おそらく、逃げ出すのを待っているんだと思う。

「うーん……」

さつきはサーチ&デストロイ、敵をみかけたら即攻撃する、とか言っていたくせに……。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

あいつらは密猟者、ここで逃がしたら、また後日ここに忍び込んでこの子たちを殺しにくるかもしれない……。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

みんなを撫でてやる。

「それに……」

そう簡単に逃げるとも思えない……。

「くそつ、逃げるぞ!?!」

「一時退却だ!?!」

と、思ったら、反転して逃げる姿勢をとる。

「ふう……」

それを見て、東園寺たちが息を吐出し、剣を下ろす。

「逃げるわけねえだろおお!!」

東園寺たちが油断した隙を見逃さない、密猟者の一人が反転してこ

ちらに向かってくる。

「な、ナビー!？」

私のほうに走ってくる。

密猟者はこれを狙っていたのか、少し横に逃げており、東園寺たちとは距離があった。

「お嬢ちゃん、人質になってもらえるかなあ!？」

と、醜悪な顔で笑い、私に向かって手を伸ばしてくる。

「まあ、そうなるよね……」

クスリと笑う。

そうだ、和泉、さつきいいもの見させてもらったらお返ししてやるよ。

しゃがんだままの体勢で、わずかに、一瞬だけ肩をピクリと動かす。

「うっ」

無意識に、密猟者がそれに反応する。

格闘技、またはなんらかの戦闘術を幼少の頃より修めている者はこれに反応してしまう。

打ってきたら一歩下がる、それが身体に染み付いてしまっている……。

ブレーキがかかる。

私はそのまま飛び、相手との間合いを詰め、

「たああああー!」

と、スマッシュ、下から上へ、アツパーぎみに腕を振り上げる。

これも見えない、斜め下からくる攻撃は非常に見えづらい。

拳は握ってはいない平手。

そして、狙うのは顔ではない。

「おげっ!？」

首だ。

親指と人差し指の間で喉を突く。

「ぐえ、おげ、げほ、げほ、げほ!」

と、密猟者が激しく咳き込む。

「うげ、げほ、げほ、げほ!」

さらに苦しいのか、喉を押さえて地面を転がりまわる。
どう、和泉？ 面白いでしょ？

たぶん、今のはあなたにも当るよ……。
知っていないければ、避けようがない。

鬼神はこんな手も使ってくる、憶えておくように。

和泉を見て軽く笑う。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

みんながよちよち私のほうに歩いてくる……。

「ああ！ 駄目、駄目、危ないからこっち来ちゃ駄目！」

と、急いでみんなのところに戻る。

「よし、よし」

そして、しゃがんで撫でてやる。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

かわいいなあ。

「大丈夫かあ!？」

「げほ、げほ、げほ！」

と、倒れている仲間に駆け寄る密猟者たち。

「い、痛むのか!？」

「い、いてえ、し、死ぬ……」

さらに、和泉に斬られた奴に肩を貸し立たせようとする。

「く、くそお、なんだなんだ、こいつらはあ!？」

「ひけ、ひけえ、お頭たちと合流だあ！」

と、今度こそ密猟者たちが逃げていく。

「奴等の会話の内容からすると、他にも仲間がいそうね……」

と、私は立ち上がり、奴等のひとりが残っていた剣を拾いにいく。

そして、それを手に取り、空に掲げて、その色合いを確かめる。

綺麗な刀身と、細かな細工が施されたガード。

「うーん……」

重そうな見た目とは裏腹にそれほどの重量は感じない……。

「うーん……」

何より、刀身がうつすらと光っているように見える……。

「これ、魔法の剣だよ」

と、人見のほうに視線を送る。

「魔法の剣？」

困惑したような表情を見せる。

「ほら」

と、彼に魔法の剣を差し出す。

「光っている……？ 微弱だが魔力も感じるか……？」

刀身を指で触りながら首を傾げる。

「ヒンデンプルクの魔法の剣か？」

「デザイン的にも同じような感じがするな」

と、東園寺たちも寄ってきてきて刀身を覗き込む。

「ヒンデンプルクの飛行船から持ち出された物かもしれない」

そう、あの先帝サテリネアス・ラインヴァイス・ザトーが持っていた魔法の剣と同じ。

魔法の剣と同じ。

魔法の剣はとても貴重、魔法のネックレスは作れても、魔法の剣は

作れない。

厳密に言えば、魔法のネックレスのような効果を持つ魔法の剣は作

れても、ヒンデンプルクの魔法の剣のような切れ味が増す剣は作れな

いってこと。

「奴等を追うか……」

「ああ、他にも持っているかもしれない、回収しよう」

「うん、そうしたほうがいい」

と、私たちは密猟者たちが逃げていった先を見る。

第145話 絶えねば絶えね

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

十数匹の耳の短いうさぎのような小動物たちが私の足元に集まってくる。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

そして、私の足に頭とか額をこすりつけてくる。

「よし、よし……」

しゃがんで、その頭を撫でてやる。

奴等、あの密猟者たちを追いかけたいけど、この子たちもついてきそうだなあ……。

「ナビーフイユリナ、おまえはここで待っている」

と、そのことを察した東園寺がそう提案する。

「おい、おい、本当に追うのかよ？ 危ないからもう帰ろうぜ、調査も十分なはずだ。あいつらやる気だよ」

一方、佐々木智一は撤退を要求する。

「うーん」

いいこと思いついた。

私は立ち上がり、手にした逆手に持ち替えて、

「たあー！」

と、槍投げのように投げる。

「ひっ!?!」

それは、ヒュツ、と風を切り佐々木の足元に突き刺さる。

「ここに残るは、智一、あなたよ、その剣でこの子たちを守ってあげて、重要な任務だからね」

「お、おうっ……」

と、彼は剣を引き抜き、みんなと剣を交互に見る。

「よし、じゃあ、奴等を追おう」

私は歩き出しみんなの先頭に立つ。

「ちよ、ちよつと待てよ、ナビー!」

佐々木が私のあとを追ってこようとする。

「あ、智一、踏まないでね?」

振り返り、小動物たちを指差す。

「あ、お、おう」

と、足元を見る。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

小動物たちがよちよちと私のところに寄ってこようとする。

「駄目、来させないで!」

と、手で制止する。

「そ、そうだ、いっっちゃ駄目だ」

佐々木も手を伸ばして小動物たちを止めようとするけど、

「シャアアアアアア!」

「キイイイイイイ!」

「アギアアアアア!」

と、もの凄い形相で牙を剥いて噛み付こうとする。

「ひ、ひい!」

佐々木は驚き、尻餅を付く。

「フーーーー!」

「フーーーー!」

「フーーーー!」

毛を逆立たせて威嚇する。

「な、なんで……、ナビーにはあんなに懐いでいたのに……」

佐々木が戸惑っている。

「ふふ……、まあ、この機会に仲良くなっておいてね! じゃあ、いく

よ、みんな!」

と、この隙に走り出す。

「おう！」

「いくか！」

「待て、ナビーフイユリナ、俺の前に出るな！」

和泉たちも私のあとを追ってくる。

「アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、静寂パビロンレイの風盾」

人見が強化魔法を使用し、その走力を上げる。

「とおー！」

私は負けじと速度を上げ倒れた木や柱を軽快に飛び越えていく。
散乱するレンガは踏まないように避けて走り抜ける。

雨水だろうか、崩れた建物の屋根から水が滝のように流れ落ち、その水が小さな川を形成している。

おそらく、こういった水が草木を育んでいるのだろう。

もちろん、あの子たちも。

「あうあー……う？」

大きなシダ植物の茂みの奥からそんな声が聞えてきた。

「おや？」

と、私は立ち止まる。

そして、しゃがんで茂みの奥を覗き込む。

「あうあー……う？」

黒いつぶらな瞳と目があった……。

「あうあー！」

しようがないので挨拶をしてあげる。

「あうあー……う？」

すると、茂みの中からよちよち這い出してくる。

白と茶の毛色の耳の短いうさぎのような小動物。

「あうあ、あうあ」

と、軽く、手の甲で触れるか触れないかのようなタッチで頬の辺りを撫でてやる。

「あうあー……！」

目を細めて気持ち良さそうにする。

「あうあー、あうあー！」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

奥のほうにも何匹か見える。

「もしかして、この小動物って、かなりの数が生息しているのかな？」

「あうあー……」

「よし、集まってこないうちに先を急ごう！」

と、私は立ち上がり、密猟者たちが逃げていった方向に再度走り出す。

遺跡は朽ち果て、建物は崩れ落ち、柱は倒れ……、その残骸を覆い隠すように草木が生い茂る……。

「たあー！」

でも、その残骸が多重構造、すり鉢状になっている遺跡の下に降りる足場になってくれていた。

「とおー！」

下に下にと降りていく。

また、上を見渡すと、細い滝が何本も流れ落ちる光景を見ることができた。

「風光明媚なところだね……」

それが感想。

内部は外から見るよりも広く、かなり雄大な景色に見える。

そうね……、広さは大体……、直径100メートル以上はあるかな……、それがすり鉢状になっているので、さらに広く感じる……。

「あの子たちが生きるのに、十分な広さかもしれないね……」
下に降りながらそんな感想を抱く。

だからこそ、そつとしておいてあげたい……。

あの密猟者たちは必ず始末する……。

でも、どうやって始末しよう。

和泉たち止めるよなあ……。

「うーん……」

と、思索する。

すると、前方に高い壁があらわれる。

高いといっても3、4メートルくらい。

「珍しい、崩れ落ちてない……」

横幅は……、左右ともに数十メートル以上はある……。

迂回するにしても時間がかかるな。

「壁か？」

「行き止まりだな」

「どうする？ どっちからいく？」

と、すでにうしろでは迂回する算段をしている。

「はーん」

これはチャンス。

東園寺たちを引き離せるかも。

壁まではわずかに坂になっている。

「ナビィ、止まれ、少し休憩しよう」

と、話す人見の言葉を無視して全速力で坂を駆け下りていく。

そして、壁が迫る……。

やばい、思ったより高かった、5メートルくらいあるかも……、でも、もう止まらない。

「とおおおりやああああー！」

と、気合を入れて地面を蹴る。

「二歩目！」

レンガ積み目の壁は至る所にひびが入っており、それが足場になってくれる。

「二歩目！」

勢いよく、空高く舞い上がる。

三歩目は……、届かない……。

壁から身体が離れていく。

「こんのおおおー！」

精一杯身体を伸ばし、手を伸ばし、そして、レンガとレンガの隙間に指をかける。

その反動で身体は再度壁に揺り戻される。

「たああああー！」

そして、三步目を蹴り、身体を思いっきり伸ばし両手で壁のへりを掴む。

そのままの勢いで上体を引き上げ、いわゆる蹴上がりの要領で、壁の上によじ登る。

「ふう……」

と、壁の上に立ち、額の汗を手の甲で拭う。

「ふふふ……」

そして、得意げな顔で振り返り、みんながいる地上を見下ろす。

「おお……、高い……」

やっぱり5メートルくらいあるかも……。

我ながら随分飛んだと感心してしまう。

「ナビーフイユリナ？」

「いったい、何が起こった……?」

「どうやって、そこに……、ナビー……?」

みんなが啞然とした表情で壁の上に立つ私を見上げる。

「へへん」

と、腰に手を当て鼻高々ポーズをとる。

「どうだ、和泉? これはおまえでも無理だろう?」

エルードからの蹴上がりは見よう見まねでは無理、相当練習しないとできないよ。

「ふふん」

「なんか、今日はやけに和泉に対抗意識を燃やしているな……」

「ロープか何かないと登れないな……」

と、下では壁を登ろうと右往左往している。

「ナビー、大丈夫かあ、降りられるかあ!」

人見が大声で聞いてくる。

「こっち側だと低いから飛び降りられるよお!」

と、適当に答えてやる。

みんなのいるほうでも、足に静寂パビロンレイの風盾とかの強化魔法を施せば平

気だと思っけどね。

「わかった!」そこで待機している、ナビーフイユリナ、迂回してくる

！」

と、みんなが迂回しようとして壁に沿って走っていく。

「はやくねえ！」

私はみんなのうしろ姿に手を振る。

「さてと……」

と、周囲を見渡す。

「おい、追ってきてるのか、声がしたぞ!？」

「逃げろ、逃げろ、化け物どもがくるぞ！」

「頑張れ、走れ、もう少しだ！」

東園寺たちと壁を挟んで反対側から声がする。

「うーん？」

人影が六つ。

怪我をしているのか、そのうちの二人が肩を貸してもらっている。

「はあ、はあ、息が切れる」

「いてえ、いてえ！」

狩用のブラウンの革の服を着た一団が走ってくる……。

「おやあ？」

あの密猟者たちだ。

やがてその密猟者たちが私の立つ壁の近くまでやってくる。

「よお、おまえら、しばらくぶりだなあ、元気だったかい？」

と、真下に来たあたりで声をかけてやる。

「な、なにっ!？」

「ひっ、なんで、そんなところに!？」

「ば、ばけもの！」

壁の上に立つ私を見て大袈裟に驚く。

「アポトレス、水晶の波紋、水晶の砂紋、風を纏え、パピロンレイ静寂の風盾」

小さく呪文を唱え、壁から飛び降りて奴等の前に立つ。

「どうした、おまえら、そんなに急いで、ちよっと遊んでいけよ」

奴等を見て軽く笑う。

第146話 隘なるものあり

壁の向こうは草木も少なく開けている。

また、幾本もの細い小川が遺跡の中央に向かって伸び、その川岸には芝生のような背の低い草が茂っている。

それ以外には草もなく、さらさらとした海岸にあるような砂で覆われる。

「おまえら、どこに行くつもりだったんだ？」

奴等、密猟者たちにそう尋ねる一方、さらさらとした砂をかかどで掘り、その下を確かめる。

すると、すぐに固い床があらわれる。

石畳……、またはレンガの類か……。

おそらく、この辺り一帯がそうなのだろう、風と共に飛来した細かな砂が長い時間をかけて数センチ降り積もった、そんなところだろう。

これでは木も生えないか……。

でも、小さいながらも川があるってことは、そっちは石畳がはがれているのかな？ 水深が数センチってこともないだろうし……。

「お、おまえこそ、何しに来たんだ、ぶつ殺されてえのか？」

掘った砂を戻して、ならしていると、密猟者のひとりからそんなことを言われる。

「ぶつ殺すとかって、穏やかじゃないなあ……、何か嫌なことでもあったのか？ 言ってみろよ、聞いてやるぞ？ みんな仲間なんだからさあ、心を開けよ」

と、笑って言ってる。

「くっそ、舐めやがって……」

「なんなんだ、このガキ……」

「ぶつ殺してやる」

先頭の奴が剣の柄に手をかける。

「何回同じことを言うんだよ、やってみろよ」

少し顔を伏せ、先頭の奴に向かって歩きだす。

「ほんとにやるぞお!？」

力を込め、剣を引き抜こうとする……、そのタイミングで地面のさらさらとした砂を奴の顔面目掛けて蹴り上げてやる。「うわっ!？」

反射的に柄から手を離し、顔や目を庇おうとする。

その瞬間を見逃さない、私は一気に間合いを詰め、そして、手を伸ばし、奴の腰に差ししてある剣を引き抜く。

「くああ!？」

奴が驚き、うしろに大きく飛び退く。

「ふーん……」

飛び退いた奴には目もくれず、奪った剣の刀身を注意深く観察する。

「刃こぼれは一切ない……、よく手入れされているように見える……」

そして、うつすらと光っている……。

これも、ヒンデンブルクの魔法の剣だ。

「なあ、おまえら、この剣、どこで手に入れた？」

剣をかざしながら、視線だけを密猟者たちに送る。

「ば、ばけものだ……」

「い、遺跡のガーディアンか……、俺たちが、この遺跡の財宝に手をかけたから怒っているのか……」

「いや、テロベアうさぎを狩ったからか？」

奴等がそんな話をしている。

「テロベアうさぎ?？」

もしかして、奴等が腰にぶら下げている「あうあー、あうあー」鳴く耳の短いうさぎのような小動物のこと？

「いつのことだ」

と、腰にぶら下げている小動物の死骸を私に見せる……。

「ひどいことを……」

そつと視線をそらす……。

「そして、おまえの足元にいるのもテロベアうさぎだと、付け加える……。」

「うん？」

びつくりして足元を見る。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

私の足元には、白と茶の毛並みの小動物、テロベアうさぎが数匹身を寄せ合っていた。

「ああっ!? なんでえ!？」

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

撫でてほしそうに、つぶらな黒い瞳で私を見上げる。

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

「あうあー、あうあー」

さらに別のテロベアうさぎもよちよちと私のほうに寄ってくる。

「なんか、いっぱい来た!」

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

テロベアうさぎたちが私の足に頭とか額をこすり付けてくる。

「ああ……、よし、よし……」

と、しゃがんで順番にその頭を撫でてやる。

「あうあー!」

「あうあー!」

「あうあー!」

他の子も自分も撫でてえって感じで寄ってくる。

「わかった、わかった、順番にね」

順番に撫でてあげる。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

気持ち良さそうにしてる。

「い、今のうちに逃げるぞ!」

「いてえ、いてえ、早く怪我の治療を」

「もう少し待ってる!」

と、密猟者たちが壁沿ではなく、まっすぐ、遺跡の中央に向かって走りだす。

「あ!」

逃げてった!

「だ、大丈夫か、こっちは!」

「道沿い以外は立ち入るなって言われてなかったか!」

「仕方ないだろ、あのばけものがあるんだから!」

と、言いながら、草もまばらな砂漠のような場所を駆けていく。

「ま、待て!」

立ち上がろうとする。

「あうあー!」

「あうあー!」

「あうあー!」

けど、小動物、テロベアうさぎたちが私のワンピーススカートの裾を噛んだり、サンダルの上に乗ったりして妨害してくる。

「あうあー!」

「あうあー!」

「あうあー!」

さらには私の前に回りこんで進めないようにしてくる。

「な、なに!」

戸惑う。

「あうあー!」

「あうあー!」

「あうあー!」

なんだろう、密猟者たちが入っていった砂場に行かせないようにしているようにも見える……。

「あうあー!」

「あうあー!」

「あうあー!」

「凄い必死に私の服を引っ張っている……。」

「うーん……。」

密猟者たちが走り去る、そのうしろ姿を見送る。

しょうがない、東園寺たちを待って、それから追うか……。

「あうあ、あうあ……。」

と、うさぎたちを撫でてやる。

「な、なんだ、深いぞ!」

「埋まる、埋まる!」

「助けてくれ、沈んでいく!」

「っ、つかまれ!」

次第に密猟者たちの走る速度が鈍り、やがては止まってしまう。

「何してるんだ、あいつら?」

うさぎたちを撫でながら奴等を見る。

「す、砂が、砂が崩れる!」

「ひっ、なんだ、これ!」

「砂が、川のように流れる!」

奴等がどンドン沈んでいき、腰の辺りまで砂に埋もれる。

「流砂……?」

「違うか……?」

流砂は液状化現象とかと同じで水分が必要、いわゆるダイラタン

シー現象と呼ばれるものだ。

明らかにそれではない、乾いている……。

「じゃあ、なに……?」

少し坂になっていて、中央に向かって砂がどンドン崩れていくな

……。

「ぎゃあああああー!」

悲鳴が轟き、血しぶきが飛ぶ。

「あっぎゃあああー!」

悲鳴が続く。

「な、なに……う？」

目を凝らしてその光景を見る。

なんか……、黒いのが密猟者たちの身体にひつついているんだけど……。

それも、いっぱい……。

大きさは……、三十センチくらいの……、黒い……、足のいっぱい
ついた……、ムカデのような……。

「ひっいいいああああ！」

「ぎゃああああああ！」

「く、食われる！」

その黒い、無数のムカデのような虫が密猟者たちの顔とか身体に喰
らいつく。

その光景を見て身を震わせる。

「き、気持ち悪い……」

な、なにあれ、いっぱいいる……。

たぶん、数百とかそんなレベルじゃない、万単位でいるかも……。

うじゃうじゃ、うじゃうじゃと……。

「ひ、ひええ……」

思わず、声が出てしまう。

「助けてくれえ！」

「痛い、痛い！」

「動けない、どうなってるんだ！ うわあああ！」

と、密猟者たちが脆く崩れやすい砂の中でもがき、ムカデのような
黒い虫の群れにその身体を食いちぎられていく。

「あああ——！」

「あああ——！」

「あああ——！」

と、うさぎたちが私の服を口でひっぱり、後方に避難するように促
す。

「もしかして、この子たち、このことを知っていて、それで、私を引き

止めようとしてくれていたの？」

「あうあー！」

「あうあー！」

「あうあー！」

必死に服の裾を引っ張る。

「わかった、わかった……」

と、数歩うしろに下がり、その砂場から距離を取る。

「おごごお……」

「たす、たす……」

「う……」

やがて、奴等の悲鳴も聞えなくなり、ただ、肉を食いちぎる音、骨を噛み砕く音が辺りに響くだけになる。

「ひっ!？」

そして、獲物にありつけなかった他の虫が私とうさぎたちに気が付きこちら向かってくる。

「フーーーーー！」

「フーーーーー！」

「フーーーーー！」

うさぎたちが毛を逆立たせて虫共を威嚇する。

「ころぴー、ころぴー」

どこかで聞いた虫の鳴き声……。

「ころぴー」

「いぴろー」

「ほろぽー」

と、虫共が砂場から這い上がってくる……。

「ひいひい……」

口をカチカチさせ、その歯と歯の間から黄色い唾液が何本か垂れてくる……。

私はその醜悪な姿に怖気づき、さらに数歩後ずさる。

「あっ」

でも、すぐに背後の壁に行く手を阻まれる。

「ころぴー……」

一匹の虫が私の足元に迫る。

「ひいひい……」

む、虫い……。

身の毛がよだつ……。

「シャアアアアアアア！」

その瞬間、その虫は横から攫われていく。

「シャアアアアアアア！」

そう、それはテロベアうさぎだった。

テロベアうさぎが前足で虫を掴み、ムシヤムシヤと頭から丸かじりして食べている……。

「シャアアアアアアア！」

「キイイイイイイイ！」

「アギヤアアアアア！」

他のうさぎたちも同じように脆く崩れやすい砂場から上がった虫を捕まえ頭からムシヤムシヤと食べていく。

「ころぴー……」

それを見て、他の虫共が砂場に退散していく。

「あうあー！」

「あうあー！」

「あうあー！」

でも、うさぎたちは砂場に入った虫は追わない、その手前でうろちよろする。

おそらく、砂場に入ったら勝てないのだろう、その証拠に砂場に入った虫共の動きは速い。

やがて、虫共の姿は砂の下に消え静寂が戻る。

そこに残るのは、私の立つ地面と同じような砂場だけ……。

「あ……」

その違いがわからない……。

どこが虫共のいる砂場かわからなくなった。

第147話 慈雨飛泉

かすかな風が吹き、さらさらと細かな砂を舞い上がらせる。

さらさら、さらさら、と、それまでであった足跡などの痕跡をかき消していく。

石畳に薄く砂が乗っただけの場所と虫共が潜む、深い砂場との境界がわからなくなる。

「うーん……」

と、足で砂を払って石畳の床を露出させる……。

「うーん……」

それを慎重に繰り返し、先に進んでみる。

石畳から足を踏み外し、虫共がいる砂場に落ちたら命はない……。慎重に、慎重に歩を進める。

「ふう……」

と、30メートルほど進んで一呼吸つき、額の汗を手の甲で拭う。

「どのくらい来たかなあ……」

背後を振り返る。

さらさら、さらさら、と、かすかな風が砂を舞い上がらせ、その砂が私が足で払って作った道の上に降り積もり、石畳を見えなくする。

「……」

道が消えてる……。

「ど、どうしよう……」

いや、このまま進むしかないか。

密猟者がまだまだいるみたいだし、そいつらをなんとかしないといけない。

私はまた前を向いて足で砂を払って石畳の道を露出させていく。

「あうあー」

「あうあー」

「あうあー」

と、私の後方からそんな鳴き声が聞えてくる。

「うん？」

再度、振り返る。

「あうあー」

「あうあー」

「あうあー」

よちよち、よろよろとふらつきながらテロベアうさぎたちが私のあとを追ってきていた。

「ああ……、きちや駄目だよ、どこに密猟者たちがいるかわからないんだから……」

と、私はしやがんで、彼らの頭を撫でる。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

すると、うさぎたちは気持ち良さそうに目を細める。

「ふふっ……」

と、彼らを見て口元をほころばせる。

「あうあー！」

「あうあー！」

「あうあー！」

あ、いっばい来た。

「順番にね……」

うさぎたちの頭を順番に撫でてあげる。

「あうあー！」

「あうあー！」

「あうあー！」

まだまだいっばいくる！

「うん？」

でも、よく見ると、色んなルートでやってくるなあ……。

「あうあー……」

「あうあー……」

「あうあー……」

足元のうさぎを撫でながらそのルートを確認する。

「無秩序ではない……」

ちやんと、虫共がいる底無しの砂場ではなく、薄く砂に覆われた石畳の道を選んで歩いていっているように見える。

「うーん……」

「あうあー?」

近くにいたうさぎの顔を見つめる。

「もしかして、あなたたちって道が見えるの?」

「あうあー?」

「よし!」

と、その子を抱きかかえ上げる。

「大丈夫だよ、何もしないよ、大人しくしててねえ……」

「あうあー?」

うさぎはきよとんした眼差しで私を見上げる。

「よし、よし」

そして、そのまま歩きだし、適当に辺りを散策する。

「あうあー!」

その時、胸に抱いたうさぎが大きな声を出す。

「お?」

「あうあー!」

うん、やつぱりだ。

この子たち、ちやんと道を覚えているんだ。

「こつちが虫共のいる砂場ね……、じゃあ、あつちは?」

と、私は方向転換して、別の方向に歩いていく。

「あうあー!」

すぐに反応がある。

「うーん……、駄目か……」

また別の方向に歩く。

「あうあー!」

また大きな声を出す。

「うーん……」

案外、石畳の道は細いのかも知れない……。

「あ、そうだ」

一応、本当にあっているか確かめる。

と、私は、うさぎが鳴いた場所に足を踏み入れようとする。

「あうあー！」

うさぎは止めようとする。

「大丈夫だよお、ちよつと確かめるだけだからねえ……」

と、慎重に足を踏み入れる。

「うーん……」

足を左右に振って、砂を払う。

「うーん……」

さらに、足を砂の中に差し入れる。

「ふ、深い……」

明らかに石畳がある場所とは違う、深く、底が知れない……。

この深さ、ぞつとするな……。

「あうあー！ あうあー！」

うさぎが腕の中で暴れる。

「うん？」

と、私は砂の中から足を引き上げようとする。

その途中、砂がもこもこと盛り上がり、その下で何かがうごめく。

「ひっ!？」

急いで足を引っ込める。

「あうあー！ あうあー！」

周囲に砂を撒き散らし、黒々した巨大な虫が地中から飛び出してくる。

「ひいひいー！」

私は驚いて後ろに転倒するように尻餅を付いてしまう。

それが功を奏したのか、虫は私の足を素通りして、ガチンツ、という音を響かせて空を噛む。

「あうあー！」

「あうあー！」

「あうあー！」

それを見た、他のうさぎたちがこちらに駆け寄ってくる。すると、虫共はすぐさま退散、辺りに静寂が戻る。

「び、びっくりしたあ……」

と、尻餅をついたまま一息つく。

「あうあー……」

腕の中のうさぎが身じろぎする。

「あ、ごめんね、痛かった?」

身体を強張らせたせいかわ腕に力が入りすぎていたみたい。

「あうあー……」

大人しくなる。

「それにしても……」

と、私は立ち上がり、少し先にある砂丘に目を向ける。

砂丘といっても、高さは2、3メートルくらいしかない。

「ただの砂丘かと思ったけど、違うね……」

風に吹かれて、その砂が飛ばされ、ところどころグレーやブラウンのレンガがあらわになっていた。

「何らかの遺跡だね」

私はそちらのほうに歩いていく。

「大丈夫?」

腕の中のうさぎに安全かと尋ねる。

「あうあー……」

小さく、大丈夫だよ、という感じで鳴く。

「そっか、ありがと……」

そう返事を返す。

「おい、止まれ」

声がした。

「うん?」

野太い男の声、現地の言葉。

砂丘、砂に覆われた遺跡の向こう側から聞えた。

「だから、止まれって言ってんだろ」

考えるべくもなく、その声の主は密猟者の誰かだろう。

私はその警告を無視して歩き続ける。

「どうした、セスト？」

もう一人、別の声が出た。

「いや、女の子……、こっちにやってくる……」

「女の子？ そういえばアストカートたちはどうした？ 騒ぎ声が聞

えたようだが？」

「わからん、誰もいない」

「まさか、道から落ちて食われてってことはないよな？」

「そんなマヌケな話あるかよ……」

密猟者たち、二人の会話が続く。

その会話の内容から、どうやら彼らは私とさっきの密猟者たちとの

いざこざを知らないようだった。

つまり、騒ぎを聞きつけて駆けつけたところ……。

私は視線を落とし、彼らに向かって歩を進める。

「だから、止まれって！」

大きな声を出す。

「そんな大きな声出さないでよ、ちよつと迷子になっただけなんだか

ら……」

子供のふりをして近づいていく。

「迷子？ こんなところでか？」

「うん、はぐれちゃった……」

油断しているところを殺る……。

「旅の、者か……？」

「まさか……」

二人が怪訝そうな声で言う。

砂丘を回り込む。

すると、密猟者たち、二人の姿が見えるようになる。

ブラウンの、よくなめした艶やかな皮革の服。

腰には剣を帯び、背中には槍と弓。

剣とは逆の胴にはじゃらじゃらとした鎖、その鎖に繋がれ、吊るさ
れているのはうさぎたちの死骸。

さらには、皮を剥いだのだろう、血の付いた毛皮も何枚かぶら下げている。

ひどいことを……。

「あうあー……」

それを見た私の腕の中にいるうさぎが怯えたように小さく鳴く。

「大丈夫だよ、怖くないからね」

と、小声で言っただけ。

「女の子……、本当に迷子か……?」

密猟者が困惑したような表情で言う。

「そうよ、道を教えてほしいの」

笑顔で答える。

「うそを言うなよ……、じゃあ、その持っている剣はなんなんだよ……?」

「あっ」

そう言われて自分の右手を見る。

その手には密猟者から奪った剣、ヒンデンブルクの魔法の剣が握られていた。

「軽すぎて持っていること忘れてた」

私は軽く笑い、魔法の剣を振り回す。

「なんで、おまえがそれを持っているんだよ、それはアストカートの剣だぞ!」

「アストカートや他の奴らはどうした!」

密猟者たち叫び、剣の柄に手をかける。

「もう遅い」

距離は十分に詰めた。

私は剣を振り回しつつ、順手から逆手に持ち替え、そのまま投げやりの要領で奴らに向かって投げつける。

「うっ!」

「えっ!」

私の行動は意外だったのだろう、その動きが止まる。

私の投げた剣は左に逸れ、砂を巻き上げて地面に突き刺さる。

「なっ!?!」

「どういう……う?」

奴ら二人が地面に突き刺さった剣を凝視する。相手が刃物を持っていると、それで攻撃をしてくると思い込んで目が離せなくなっちゃうんだよね。

その隙に私はもう動いている……。

一歩、二歩目……、そして、飛ぶ。

「セスト、前!」

「なにつ!?!」

視線を前に戻す。

奴が私を視界に捉えたときにはもう目の前。

スライスバツク。

いわゆる下方に沈み込む前方宙返り。

右足を前に出し、そのまま奴の脳天目掛けてかかとを振り下ろす。

「うっ!?!」

反射的に腕を出して頭を庇おうとする。

これも想定済み。

狙いはそこじゃねえんだよ。

頭を庇った腕に当る直前に足をコンパクトに畳んでスルーする。

直後にガツンとかかとに衝撃が伝わる。

「あぐっ!?!」

かかとは奴の鎖骨にヒット、粉々に粉碎する。

そして、次。

シヤンデル。

いわゆる上方に浮き上がる後方宙返り。

奴の鎖骨を足場とした後方宙返りだ。

足はコンパクトに畳んだまま、それを後方宙返り中に伸ばし、奴の顎を強烈に蹴り上げる。

「ぐおっ!」

顎を蹴られた奴もまた宙を舞い、私と同じように後方宙返り、一回転して地面に叩きつけられる。

「まず一人」

と、私は着地し、手を伸ばす。

そこにあるのは、剣の柄。

そう、私がさつき投げた剣だ。

計算してこの場に着地した。

剣を引き抜き立ち上がる。

第148話 自然は真空を嫌う

「あうあー……」

私の腕の中にいるテロベアうさぎが小さく鳴く。

「びつくりした？ ごめんね。でも、もうちよつとだけ我慢してね、もうひとりもやつつけちゃうから」

「あうあー……」

と、私を見上げ、目を見て返事をしてくれる。

「かわいい……」

つぶらな黒い瞳がかわいい。

「せ、セスト!?!」

もうひとりの密猟者がセスト、私が倒した男の元へと走り寄り、その顔を覗き込む。

「だ、大丈夫か、生きているか!?! セスト!?!」

と、彼はセストを揺り動かし抱き起こそうとするが返事もなく、力なく腕が垂れ下がる。

「セスト!?!」

何度も揺り動かす。

「仲間の心配をしている場合じゃないでしょ……、次はあんたの番なんだから……」

ゆつくりと、やつに向かい歩いていく。

「くっ!?!」

驚いたように目を見開き、勢いよく立ち上がり、腰の帯びた剣に手をかける。

「くそ、化け物め!」

そして、鞘から剣を引き抜く。

「く、くそ!」

両手で剣を構える。

剣先が震えている……。

「ふっ……」

思わず笑ってしまう。

「なにがおかしい!?!」

じりじりと後退りしながら叫ぶ。

「構えがなってないんだよ、素人が……」

やつに向かいながら話す。

「握りはへその辺り、剣先を開いて相手の喉元に向ける……、こんな感じだよ……」

剣先をやつの喉元に向ける。

「くっ、くっ!?!」

剣先どころか全身で震えてやがる……。

「どうしたよ、かかってこいよ、私はお仲間の仇なんじゃなかったの?」

間合いを詰めながら挑発してやる。

「くっ、くっ!?!」

斬りかかってこないけど、十分に間合いを詰めることが出来た。

「じゃあ、こないなら、こっちからいくよ」

そう言い、大きく一步踏み出す。

そして、剣を振り上げようとする。

「うおおおお!?!」

やつがその動作に反応して同じように剣を振り上げる。

これで終り。

剣を振り上げる動作をキャンセルして、手首をかえして横に構え、そのままから空きの胴体を横から払う。

いわゆる面抜き胴だ。

「いあっ!?!」

レザーメイルごと斬り裂く。

「くあっ!?!」

やつが身をよじりながら後方に退避しようとする。

浅かったか?

剣を片手で持ち、尚且つもう片方の手にはうさぎを抱いているから仕方ないか……。

「あうあー……」

腕の中のテロベアうさぎがまた小さな鳴き声を上げる。

「大丈夫だよお……」

と、軽く声をかけて上げる。

「ぐおおおー！」

やつが一步後退する。

それにあわせて私も一步前進する。

「くそおおっ！」

振り上げていた剣を私の眉間目掛けて振り下ろしてきた。

「でも」

ガギンツ、という金属音が響き、やつの剣は空高く舞い上げられる。いわゆる巻き上げだ。

「ひっ!？」

と、やつが後方に倒れ、尻餅をつく。

剣はくるくると回転しながらやつの遙か後方の地面に突き刺さる。

地面に突き刺さった剣が小刻みに振動し、びよーん、という不快な音を立てている。

「ひっ、ひっ、ひああ……」

やつが手首を押さええてうずくまる。

「折れたか……」

よく見ると、脇腹からも大量出血していた。

「まっ、こんなものか……」

やつを見下ろし構えを解く。

「なんなんだ、なんなんだ、少女の姿をした化け物……、うつくあ」

私はトドメを刺そうと剣を逆手に持ち替える。

「化け物って心外だなあ……、これはれっきとしたスキルだよ、魔法と超常とかそんなんじゃない……」

笑いを含んだ声で言ってる。

「おまえらにとって、私の動きは全部初見殺しなんだよ。人類が何千年にも渡って磨き続けてきたスキル……、人の本能、人の反射、人の考え、その裏をつくための動き……、すべて逆をつかれる……、初見ではどうやったって対処できないんだよ……、そういうことだ、相手

が悪かったな、じゃあな……」
やつの首に剣を振り下ろす。

「そこまでだ」

声が出た。

その瞬間、風斬り音。

弓矢だ。

私は反射的に剣を振り下ろすのを止め、うしろに大きく飛び退く。
私の髪をかすめ、目の前を矢が通過する。

「誰だ？」

矢を射られた方向に視線を向かわす。

そこは砂丘の陰。

そこにいるのは、浅黒い肌の男。

長い黒髪を無造作に束ね、服装は他の密猟者たちと同じ、ブラウンのレーザーアーマーに剣と槍、手には弓矢、腰にはじゃらじゃらと何本も鎖を下げ、同様にテロベアうさぎたちの死骸もぶら下げている。

「はーん……、こいつらの仲間だなあ……」

目を細めてやつを見やる。

「シャイドさん！」

うずくまっている密猟者とその男を見て叫ぶ。

「ちよつと待つてろよ、今こいつにトドメを刺すところなんだから……」

と、またうずくまっている男の元に向かおうとする。

「動くなよ」

シャイドと呼ばれた男が弓矢を構える。

「当るかよ……」

やつとの距離は20メートルほどはある。

こんな距離では当たらない。

私は構わず歩を進める。

ヒュ、と、風斬り音が響く。

シャイドが矢を射った。

「だから、こんなの当るかよ」

と、私は無造作に剣を横に払い、飛来する矢を叩き落す。

矢は真つ二つになり、砂の上にぽとりと落ちる……。

それを一瞬、目で追ってしまった。

サクツ、そんな感触……。

胸に、そんな感触……。

痛みはない。

矢を二本射ったのか……？

どうやって、同時ではなく、わずかに時差があった……。

「あんた、さつき、偉そうに言っていたな……、初見殺しがどうか？

なら、これも初見殺しになるのか？ 初めてではなかなか避けられ

ない……」

シャイドがにやりと笑う。

「てめえ……」

私は視線を落とし、射られた胸を見る。

「あうあー……」

矢は私に胸に突き刺さってはいなかった。

「あうあー……」

矢は私の腕の中にいるテロベアうさぎの背中に突き刺さっていた。

「なんてことを……」

「あうあー……」

苦しそうに身じろぎする。

「ははは……、外してやった、わざとテロベアうさぎに当ててやった。

感謝しろよ、俺はあんたのように卑怯者ではないからな、初見殺しは

しない、最初に手の内を見せてやる。次は本当に当てるからな、覚悟

しろ」

と、シャイドが再度弓を構える。

「ちっ」

私は射られる前に大きく後方に飛び退く。

「おら、もっと下がれよ」

シャイドが矢を射る。

「くっ」

私の足元に矢が突き刺さり、それを避けるように、さらに大きく後方に飛び退く。

「おら、おら、もつとだー!」

次々と矢を放ってくる。

その度に後退を余儀なくされる。

でも、やつがの弓と矢を注意深く観察するけど、さつきみたいに二本の矢を立て続け射ってくることはなかった。

20メートルは下がらされただろうか……。

「このくらいでいいか」

と、シャイドがうずくまっている仲間の元に駆け寄り、その背中に手を置く。

「立てるか?」

「すいません、シャイドさん、いや、お頭……」

「セストはどうだ?」

「駄目つす、死んでいます」

「そうか……、下に降りるぞ、歩けるな?」

「はい、お頭」

と、やつらが砂丘に向かってよろよろと歩きだす。

「おい、どこに行くんだよ……」

私はやつらを追おうと足を一步踏み出す。

「あうあー……」

腕の中のうさぎが苦しそうに小さくうめく。

「おっと、運よく道の上に降りたようだが、その先に進むのは止めておいたほうがいいぜ?」

シャイドが振り返り言う。

「なに?」

と、私は二歩目を踏み出そうとする。

「あうあー……」

うさぎがまた鳴く。

足が砂に触れ、そして、沈んでいく……。

「うっ?」

足首まで砂に埋まり……。その周囲の砂がもごもごとうごめく……。

「ひっ!？」

大慌てで足を引っ込める。

その瞬間、砂の中から黒いムカデのような虫が飛び出す。

「あうあー……」

「ひいひいー」

と、私は尻餅をつく。

直後、虫の大顎が空を噛み、ガチンツ、という音が響く。

「あうあー……」

砂の上に出た虫がうさぎの鳴き声に反応して急いで砂の中に退散していく。

「び、びつくりたあ……」

「ははは、じゃあな、嬢ちゃん、大人しく砂場で遊んでろよ」

シャイドたちが砂丘の中に消えていった。

「あの野郎……」

私は立ち上がり、道はないかと周囲を見渡す。

でも、辺り一面砂の海、道らしいものは見つけられなかった。

「あうあー……」

いや、それよりも、この子、私の腕の中にいる矢を射られたテロベアうさぎの治療が先。

「あうあー……」

で、でも、どうやって……。

「あうあー……」

苦しそう。

どうしてこんな酷いことするのよ、私たちがいったい何をしたらって言うの……。

「あうあー……、あうあー……」

「ああ、どうしよう……」

ちよっと動揺してしまふ。

「えっと、えっと」

と、その場で足踏みする。

「ナビー、どうした!？」

「そこで何をやってるんだ!？」

「ナビーフィユリナ!」

と、足踏みしていると、そんな声が聞えてきた。

声の方向を見ると……、

「みんなあー!」

そう、東園寺たちの姿がそこにはあった。

第149話 カウンターズナイプ

砂煙を上げながら東園寺、和泉、人見の三人がこちらに走ってくる。
「みんなあ！ この子が密猟者に撃たれたの！ 助けて！」

と、私は矢の刺さったテロビアうさぎを示しながらみんなに助けを
求める。

「なにつ、襲われたのか!？」

「キミは大丈夫だったのか、ナビー!？」

「やつらはどこに行った!？」

みんなが周囲を警戒しながら走ってくる。

「私は大丈夫！ あいつら逃げてった！ それよりもこの子、彰吾、お
願い助けて！」

と、私は人見の回復魔法を期待して彼の名前を叫ぶ。

「わかった、すぐに行くー！」

人見がスピードを上げ先頭に立ち、一目散に駆けてくる。

そして、

「うっ!？」

その言葉とともにスピードは落ちる。

「な、に……?？」

二歩、三歩と足を出すけど、そこで足が止まる。

「な、なんだ……?？」

脆く崩れやすい砂に埋まっていく……。

「流砂か!？」

そのすぐうしろを走っていた和泉が沈む足をとっさに引き抜き、後
方に大きくジャンプして難を逃れる。

「な、なんだ、これは!？」

しかし、人見はもう遅い、すでに膝まで砂に埋まっており、歩くこ
とはもちろん、足を引き抜くことさえ不可能になっていた。

「ああ!？ すっかり忘れてた！ 虫がいる砂場だ！ 彰吾、早く逃げ
て！」

「む、虫い!？」

でも、時既に遅し、人見の周りに虫が動き回る軌跡、砂の盛り上がりが無数に出来上がる。

「彰吾!？」

虫共が飛びかかってくる。

「うおおおおお!!」

その瞬間、東園寺が大きく一步踏み出し、人見の腕を掴み、強引に彼を砂の中が引きずり出し、その勢いのまま渾身の力で後方にぶん投げる。

「うぎゃあああああ!？」

人見は宙を舞い、

「ぶべっ」

と、頭から地面に落ちる。

「いて……」

手をつき身体を起こそうとする……、が、顔をぺたぺた触り……、

「ない……」

メガネをしていなかった。

「メガネ、メガネ……」

と、四つん這いでメガネを探し始める。

「メガネ、メガネ……」

砂の中を一生懸命探す。

「なんだ、こいつらは!？」

和泉が飛び出してきた虫共に応戦し、何匹かの虫を斬り殺す。

「東園寺!？」

片足が埋まって動けない東園寺に遅いかかる虫を斬る。

「すまん、和泉」

と、勢いをつけて足を引き抜く。

「回避だ、きりがない」

「ああ、和泉」

二人は安全なところまで避難する。

「メガネ、メガネ……」

人見は相変わらず、四つん這いでメガネを探している……。

「人見、ここだ……」

と、東園寺が人見のメガネを拾い、彼に渡してあげる。

「あ、ああ……、ありがとう……」

急いでメガネを受け取りかける。

「ころぽー」

「いぴろー」

「ほろぽー」

虫共が追うのを諦め、砂の中に帰っていく。

「でかい虫だな……、あのガルディック・バビロンほどではないが、1メートル近くはあったか……?」

和泉が斬った虫の死骸も他の虫共が回収しており、辺りには何も残っていないかった。

「しかも、凶暴、襲いかかってきた……」

人見が人差し指でメガネを直しながら砂場を見る。

「ああ、あそこに入るは危険だ……」

東園寺もそれに同意する。

「あうあ……、あうあー……」

私の腕の中にいるテロベアうさぎが苦しそうに身じろぎする。

「ああ、どうしよう……」

みんながこつちにこれない……。

距離は……、30メートルくらいある……、どこが道で、どこが虫共のいる砂場かわからない……。

「さて、どうしたものか……」

和泉が歩きながら砂場を観察する。

そして、足元の石を拾い、それを砂場に投げ入れる。

「ころぽー……」

すると、それに反応した虫が飛び出し、その石をくわえてすぐさま砂の中にもぐる。

「ほう……」

和泉が目を細める。

「ナビー、すぐに行くから、そこで待ってて」

私を見て優しく笑う。

「ハル……っ？」

意図がわからず、眉間にしわを寄せて彼を見る。

「いいから、黙って見てて……」

と、和泉がその辺に落ちている石を拾い始める。

「このくらいでいいか……」

10個以上は拾っただろうか……。

「じゃあ、行くよ」

和泉が砂場に振り返る。

「何をやる気なの……っ？」

彼が砂場に向かって走り出した。

しかも、全力疾走。

「ええっ!？」

もしかして、走り抜ける気なの!？」

和泉が砂場に入る直前に手にした石の一つ砂場に投げ入れる。

すると、それに群がるように、虫共が飛び出してくる。

「石を囷にして駆け抜けようというの!？」

そんな無茶な!

忍者じゃないんだから、絶対途中で足を取られるよ!

と、思ったら……、和泉が助走をつけて思いつきり空を飛んだ……。

空中でまた石を投げる。

「ころびー!」

そして、虫の上に足をつき、また飛ぶ。

「ころびー!」

また虫を足場にして飛ぶ。

「ころびー!」

石を投げ入れ、虫が飛び出してきたところを足場にする。

そうやって、こっちに向かってくる。

「な、なんて、デタラメな……」

私は呆れたようにポカーンと口を開けたまま彼が走ってくるのを見つめる。

「おまたせ、ナビー……、心配かけたね……」

そして、無事に渡りきり、私の肩を抱いて優しく言う。

「ハル……」

彼の顔を見上げる。

「うん」

と、和泉は軽くうなずき微笑む。

「あうあー……」

ほっとする間もなく、腕の中のうさぎがか細く鳴く。

「あ、でも、ハルじゃ駄目、彰吾じゃないとこの子の治療は出来ない……、どうしよう……」

私はうさぎを見ながら泣きそうな顔で話す。

「大丈夫、ちよつと待って……」

と、和泉が私の肩を離してなにやら作業を始める。

「ハル……？」

彼は腰に付けていたロープを手に取り、その先に石を巻き付けている……。

さらに、ロープを何本も繋げ長くする……。

「よし」

作業が終わったのか立ち上がる。

「ナビー、危ないからちよつと下がって」

「うん……」

彼の指示通り、数歩後退する。

和泉が先に石を付けた長いロープをくるくると回し始める。

「東園寺！」

そして、それを砂場の対岸にいる東園寺目掛けて投げる。

「あーん……」

ロープは取り付けられた石とともに空高く舞い、放物線を描き、東園寺目掛けて飛んでいく。

東園寺は石ではなくロープを掴む。

すると、石は東園寺の手を基点として回転し、その手にくるくると巻き付いていく。

「和泉、いいぞ」

巻き付いたところでロープを引き、ピーンと張る。

「よし」

和泉は腰の剣を抜き、その柄にロープを巻き付け結ぶ。

それを地面に突き刺し、さらに足の裏で踏み付け錨、ガードの部分まで砂の中に突き入れる。

「東園寺、いいぞー」

「おう」

東園寺が力強く両手で引っ張りロープが張られる。

和泉は剣が抜けないように足に力を込め体重を乗せる。

「もしかして、そのロープで渡ってこようと言うの……?」

「うん、そうだよ、ナビー……、よし、人見、渡ってこい、これなら虫共に襲われない!」

和泉が大きな声で対岸の人見に向かって叫ぶ。

「え、うそ、マジでか……?」

でも、人見は予想外だったのか、尻込みする。

「行け、人見、この方法しかない」

「あ、ああ……、わ、わかった……」

東園寺の言葉に渋々了承する。

おそろおそろ張られたロープによじ登る。

「くっ、くっ……」

そして、ロープの上に立ち上がる。

「うっ、うっ、はっ、ふっ……」

と、腕を回しながらバランスを取る。

「はっ、はっ、ひっ!? ふう……」

震える足でバランスを取る……。

「早く行け、人見……、結構きつい……」

その腕でロープを固定している東園寺が早く行くように催促する。

「あ、ああ……、す、すまん……、よっ、よっ……」

よろよろと歩きだす。

ゆっくり、ゆっくり、進む……。

「ふう……」

やっと真ん中くらいまで来ただろうか……。

「人見……、まずい……」

額に汗を浮かべた東園寺が言う。

「なに……?」

人見が振り返る。

「う、腕が限界だ……」

「えっ!？」

ロープの張りが緩み、その反動で人見がバランスを大きく崩す。

「う、うそ?! 落ちる、落ちる!」

人見がバランスを取ろうと腕をぐるぐる回す。

「人見、走れ! 早く! 落ちたら終わりだ、虫共の餌食になるぞ!」

和泉が叫ぶ。

「うそだろおおお!」

その言葉に従い人見は走り出す。

「うおおおおおお!」

必死の形相でロープの上を走ってくる。

「うおおおおおお!」

そして、最後は飛び込むように、ズザアア、と、私たちのところにやってくる。

「はあ、はあ、はあ……」

うずくまって呼吸を整える。

「やれば出来るじゃないか……、人見……」

と、対岸の東園寺がロープを緩め、額の汗を手の甲で拭う。

「じ、自分でも、驚いている……」

人見は手をつき、身体を起こそうとする……、けど、その動作は途中で止まり、顔をぺたぺたと触り出す……。

「メガネ……」

メガネをかけてなかった……。

「メガネ、メガネ……」

そのまま、四つん這いで砂の中を探し出す。

「メガネ、メガネ……」
砂の中を一生懸命探す……。。

第150話 勝兵は先ず

「ほら、ここだ、人見……」

と、和泉が四つん這いでメガネを探し続ける人見に近づき、拾ったメガネを渡してあげる。

「あ、ああ、すまん、和泉……」

人見はそれを受け取り、急いでかけて、ぱちぱちとまばたきしながら周囲を見渡す。

「大丈夫だ、壊れてない……」

と、安堵したように言い立ち上がる。

「そんなことより、この子！ この子の治療をして、彰吾！」

私は急いで彼の元に駆け寄り、腕の中のテロベアうさぎを見せる。

「どれ……」

うさぎを覗き込む。

「うーむ……」

人見はうさぎの背中に突き刺さった矢を軽く触る。

「あうあー……」

うさぎは痛かったのか、軽く身じろぎする。

「怪我、ひどい……？」

心配になつて怪我の具合を尋ねる。

「いや……、和泉、この子を少し押さえていてくれ」

「ああ……」

と、和泉がうさぎの身体を両手で押さえる。

「彰吾？」

「大丈夫」

と、言い、一気に矢を引き抜く。

「あうあー……」

矢が抜けた瞬間、小さく鳴く。

「彰吾？」

「大丈夫、傷は浅い、というか、ほぼ無傷、皮にちよつと刺さっていただけで、血もほんの少ししか出てないよ」

「そうなの?」

「うん……、必要ないとは思うけど、念の為に止血と消毒しておくか……、アスタナ、美しくしき、流れのほとりで、慈雨にその身を任せ、ミイソテールレット癒しの精霊糸」

そう、彼が呪文を唱えると、その指先からふわふわとした糸が噴出す。

それを丁寧に、わた飴みたいに指に巻いて、そのままうさぎの背中、傷口に添えて、もむように押さえる。

「あうあー……、あうあー……」

「大丈夫、大丈夫……」

と、優しく言いながら傷口を指先でもむ。

「これ、密猟者たちが撃つたの、ナビー?」

和泉がうさぎから抜いた矢を見ながら尋ねてくる。

「うん、そうだよ、それがどうしたの、ハル?」

「いや、これ……」

和泉が矢先ではなく、ノック、矢を弦に番える部分である矢筈を触りながら言う。

「うん?」

なんか、矢筈がびよん、びよん、とさせている……。

「弾力がある……、というか、柔らかい……、これじゃまともに飛ばないよ……」

何度もびよん、びよん、させながら言う……。

「ああ……」

そういうことか……。

騙された。

やつ、シャイドは一本の弓から二本の矢を時間差で放った……。

そう思っていたけど、違った。

実際には二本同時に矢を放っていたのだ。

一本は通常の矢、二本目は矢筈が柔らかい速度の出にくい矢。

その速度差を利用して、二本の矢を時間差で飛ばした。

おそらく、矢羽にも細工がしてあり、それで別々の場所に飛ばすこ

とが出来たのだろう。

そんな理屈。

だから、この子の背中に刺さった矢には威力もなく、傷も浅くて済んだ……。

そして、テロベアうさぎを狙ったのも、私に撃つたら威力が低いのに疑問を抱かれるから、ばれないように、あえてこの子を狙った。決して、やつの言う、卑怯なこととはせず、手の内を見せて、正々堂々戦かおうという動機からではない。

「あの野郎……」

あの詐欺野郎……。

ふつふつと怒りが込み上げてくる……。

「よし、これで大丈夫だよ、ナビー」

と、治療が終わったのか、人見が傷口から指を離す。

「おお！ ありがとう、彰吾！」

「あうあー」

私とうさぎでお礼を言う。

「どういたしました」

人見は軽くうさぎの頭をなでる。

「あうあー」

おお、気持ち良さそうにしている……、人見になついたのかな？

「で、これから、どうする、ナビー？」

和泉が聞いてくる。

「当然、密猟者たちを追う」

私はやつらが消えた砂丘に視線を向ける。

「あっちか……」

と、二人も私の視線の先を見る。

「公彦！ あなたは、そのロープを張り直して、帰りの準備をしておいて！」

テロベアうさぎを使えば道はわかるけど、今はその時間さえもったいない、その間にやつらが遠くに逃げるかもしれない。

「ああ、わかった！ 和泉、人見！ ナビーフイユリナを頼むぞ！」

と、東園寺が快諾してくれる。

「和泉」

人見が背負っていた密猟者たちが持っていた剣を鞘ごと彼に投げる。

「すまん」

と、それを受け取る。

彼の元々の剣はロープを固定する為に地面に突き刺してある。

なので、新しい剣が必要だったみたい。

「よし、行こう」

と、剣を腰に差し直して言う。

「じゃ、行くよ」

私は砂丘に向かって、先頭で歩きだす。

「ナビィはそのままでもいいの？」

和泉が私の出で立ち、片腕にはテロベアうさぎを抱き、そして、もう片方の手には敵から奪った抜き身の魔法剣が握られているのを見て言う。

「もちろん」

と、意に介さず先を急ぐ。

「あうあー」

「よしよし……」

その鳴き声に返事を返す。

「あうあー！」

「うん？」

と、足を止める。

「こっちは虫いるの？　じゃあ、そっち？」

「あうあー……」

このような感じで私はテロベアうさぎの誘導に従って砂丘を目指す。

「どこから降りたのかなあ……」

そして、その周辺を散策する。

「あった」

下へ降りる階段はすぐに見つかった。

それは、石造りの階段。

「ハル、彰吾、降りるよ……」

「ああ……」

「慎重にな、ナビー……」

私は階段を降りだす。

石段は広く、また砂に埋もれてはいなかった。

「ちゃんと整備してあるな……」

それとも、頻繁に出入りしているから砂が少ないのか……。

私は石の感触を確かめながら、慎重に階段を下っていく。

何段下っただろう……、たぶん、30段くらい……、そのくらい下っ

たところで、視界が開ける。

ドーム状の広場が視界いっぱい広がる。

「ふーん……」

上よりは狭いけど、それでも結構な広さに見えた。

カツカツと階段を降りながら観察する。

天井の高さは、20メートルくらい。

上よりも、緑は少なく、木なども生えていなかった。

代わりに遺跡、石の建物や石の柱、なんらかの建築物が多数あり、そ

れが崩れ、柱は倒れ、至るところに散乱し、私たちの視界を遮る。

「進むのに厄介だな……」

人見が幾重にも重なり倒れた石の柱を手で触りながらつぶやく。

「だな……」

和泉も追隨する。

「うーん……」

私は斜めに倒れた石の柱の上に登っていき、周辺を見渡す。

見渡す限り瓦礫の山……、水の枯れた水路のようなものである

……。

「とにかく進むもう」

と、私は石の柱から飛び降りて先を急ぐ。

「おう」

二人も私のあとに続く。

そして、水が流れていない水路のところまでくる。

幅は10メートルくらい。

私は立ち止まって下を見下ろす……。

深さも10メートル以上はあるかな……。

「降りて渡るか……？」

和泉も私の背中越しに下を見る。

「降りるのは簡単でも、登るのは難しそう……」

「あれ、橋じゃないか？」

と、人見が別の方角を指し示す。

それは橋というより石の柱、それが倒れて向こう岸までの架け橋となっていてくれた。

「密猟者たちも、あれを渡って行き来してたんだね」

私は石の柱の橋に向かって駆けだす。

「渡るよ」

「大丈夫か、ナビー？」

「崩れないか？」

「大丈夫、大丈夫」

と、二人の不安をよそに橋を渡りだす。

距離は10メートルくらい、すぐに渡りきる。

「ほら、大丈夫だった！ 二人も早く！」

振り返り、大きく剣を振り二人も早く渡ってくるようにと急かす。

「お、おう……」

「すぐいく」

二人も石の柱の橋に登り渡ってこようとする。

「こ、怖いな……、綱渡りは苦手なんだよ……」

「人見、早くしてくれ……」

及び腰の人見につかえて後ろの和泉が進めない。

「お、押すなよ……」

と、ゆっくり、すり足で進む。

「彰吾、早く！」

私は彼を急かす。

「お、おう……、す、すぐに……」

でも、速度は上がらない、たった10メートルの距離が長く感じる……。

「今だ！ やれ！」

人見と和泉が橋の真ん中あたりまで来たとき、そんな大声が響き渡る。

その直後、轟音、上から大量の砂が滝のように流れ落ちてきた。

「なんだあ!？」

「うおおお!？」

砂の滝は和泉たちの頭上に降り注ぐ。

「うわあああ!？」

そして、砂は水のように流れ、二人を橋の上からさらい、水のない水路に流していく。

「ハル！ 彰吾!？」

私は流されていく二人を追おうとする、けど、

「仲間の心配をしている場合じゃないだろ、嬢ちゃん」

私の前に立ちはだかる人影。

「シャイドだったか?？」

浅黒い肌の、長い黒髪を無造作に束ねた男……、そう、密猟者たちの頭目だ。

「ひとりか……?？」

やつはひとりで、腕組みをしながら私の前に立ちはだかっている。

「いや、まあ、そうだな……、まさか嬢ちゃんが先頭きつて渡ってくるとは思わなかったからな、てつきり、取り巻き共を先に行かせて様子を見るものとは……、だから、あつちが本体だ。砂で流して、埋もれてもがいている嬢ちゃんを仕留める、そういう作戦、俺以外全員あつちだ。俺は先に渡ってきた雑魚共を始末するだけ、そんな手はずだったのさ」

なるほど……。

水路を流れる大量の砂を見る……。

それでも、和泉と人見が密猟者たちに遅れを取るとは思えないけど……。

「そういうことだ、嬢ちゃん、予定は変わっちゃったが、まあ、やるか？ ああ、勘違いするなよ、嬢ちゃんが怖くて罨を張ったわけじゃないからな、楽に仕留めたかったからだ、俺に勝てるなんて思うなよ？」
シャイドがそう言い、背負っていた弓を構え、矢じりを私に向ける。
「あばよ、嬢ちゃん」

そして、矢を放つ。

矢が風を切り、高速で飛んでくる。

私はその矢を手にした剣で横に払い叩き落とす。

今度は叩き落とした矢を目で追わない……、その代わりに首を軽くひねる。

すると、二本目の矢が私の顔の横を通過していく。

「ひゅう……、やっぱりばれていたか……、さすがだな、化け物の嬢ちゃん……」

シャイドが弓を投げ捨て、腰に差している剣を引き抜く。

「こっちのほうが得意なんでね……」

やつが口の端で笑う。

「笑える……」

私も口の端で笑い、そのままやつに向かって歩きだす。

「おい、おい、それで戦うのかい？ テロベアうさぎを抱えたままで？」

本当に笑える……。

「ハンデだ、三下……、いいから、かかってこいよ……」

第151話 かほりすぎて

「後悔するぞ……」

密猟者の頭目、浅黒い肌の男、シャイドが薄ら笑いを浮かべながら、ゆっくりと近づいてくる。

「するか、馬鹿……」

私も速度を合わせて、ゆっくりとやつのほうに向かい歩く。

風が吹く……。

そして、砂煙が舞う……。

私は砂煙から腕の中のテロベアうさぎを守るために、少し身をよじり、肩と腕でガードして砂を防ぐ。

「あうあー……」

「あうあ、あうあ」

うさぎのお礼に返事をする。

「そんなことをしている場合かあ!？」

と、シャイドが地を蹴り、一気に間合いを詰めてくる。

「わかりやすいやつだ、隙を見せると、すぐ襲いかかってくる……」

そう、静かにつぶやく。

「どらああああああー!」

シャイドが肉薄する。

剣は振り上げてはいない、胸元に内側にひねるように構え向かってくる。

突きだろうね……。

私はそれに合わせるように、足を一步踏み出す。

「はあー!」

そして、やつは真っ直ぐに私の目を見ながら、剣を突き出そうとする。

「ばればれなんだよ……」

笑ってしまう。

私は一步前に出した足を手前に戻す。

すると、その直後に私の足があった場所にやつの剣が突き刺さる。

やつが下段、私の足目掛けて剣を突き入れたのだ。

「なにい!？」

一生懸命、私の顔を見て、悟らせないようにしてたんだろうけど、肩の動き、踏み足の動き、その他筋肉の動き、そのすべてが、下に打ちますよお、足を狙いますよお、って、雄弁に語っているんだよ。

「たあー！」

と、私は引いた足を再度前に出し、足の外側で、地面に突き刺さった剣の腹を思いつき蹴り飛ばしてやる。

「くう!？」

シャイドの手から剣は弾かれ、大きく飛んでいく。

「ちいいー！」

間髪入れずに、やつが弾かれた剣を取りに行こうと、そちらに向かってダツシユする。

「躊躇のない、いい判断だ」

私もやつの後ろを全速力で追う。

カラン、コロン……、カラ、カラ、カラ……、と、剣は石畳の上に落ち、くるくると回転する。

「くっそおー！」

シャイドが大きく、飛び込むように手を伸ばし、石畳の上に落ちている剣の柄を握ろうとする。

そのすぐうしろには私がいる。

「くああああー！」

そして、その剣の柄を掴み、片膝立ちのまま、剣を横に払いながら振り返えろうとする。

シャイド、おまえ、わかっているんだろうな……? ここは読み合いだぞ、純然たる心理戦、心の強さが試される……。

「はああああー！」

やつの剣が後方、私が居た場所の空を切る。

当然、私はそんなところにはいない。

長い金髪がふわりと舞う。

「なっ……」

シャイドが空を見上げる。

上空の私と目が合う……。

そう、私はやつの頭上を飛び越えている。
頭上を通過し、やつの視界から消える。

「くっ……」

すぐさまやつは剣を構え直し、私への斬撃を繰り出そうと、さつきと同じ、横に剣を払うように半回転しようとする。

でも、もう遅い。

私はダイブの姿勢から手にした剣を石畳に突き立てる。

魔法の剣は切れ味鋭く、石畳の隙間に深く突き刺さり、しっかりとした手ごたえを感じさせてくれる。

私は柄を強く握り、力を込めて身体を引き寄せ加速する。

そして、その勢いのまま、剣を軸に回転、シャイドを正面に捕らる。

「たああああー！」

と、やつの顔面目掛けて思いつきり回し蹴りを繰り出す。

「うおおおおー！」

シャイドも振り返りながら剣を横に払う。

だけど、それがちょうどカウンターのようになる。

「たああああー！」

ぐしやり、そんな音をたてながら、私の回し蹴りはシャイドの側頭部にヒット。

「ひあつかあー！」

そんな悲鳴を上げながらやつは吹っ飛ぶ。

「うっつかあー！」

そして、ズサアア、と、石畳の上を転がる。

「い、い、いった……」

それでも、シャイドは起き上がろうとし、耳を押さえ、そして、押さえた手の平を見る。

その手の平は真紅に染まっていた。

そう、ポタポタ、ポタポタ、と、耳から血が流れ落ちていた。

「いて、いて、いて……」

と、痛がりながら何度も耳に手を当てる……。

「くそ、くそ、くそ……」

何度も耳に手を当て、血に塗れた手を袖などで拭う。

「なんだ、こいつ……」

異変に気付く。

私は油断なく立ち上がり、石畳に突き刺さった剣の柄に手をかける。

「身体が光っているな……」

そう、やつの身体が薄つすらと光っていた。

「魔法……」

そのように見える……。

「いて、いて、いてえ……、頭が折れた、折れた……、くあ、くあ……」

やつの身体の光が強くなっていく……。

それが蒸気、いや、オーラのように立ち昇っていく。

「て、てめえ……」

耳を押さえながら、鬼の形相で私を睨みつける。

「何をする気だ……」

少し警戒する。

「いてえ、いてえぞ……」

オーラは強くなり、かなりの光量になっていた。

「なんだ、何かやる気か……」

私は石畳に突き刺さった剣の柄に力を込める。

そして、剣を手前に引き倒す。

そのまま剣先を上跳到ね上げるように勢い良く石畳を弾く。

弾かれた瞬間、石畳は細かな石に砕かれ、それがシャイド目掛けて高速で飛んでいく。

「うああああああー！」

ヒュン、ヒュン、という音をたて、無数の小石がやつを襲う。

「目があ!？」

当然、小石は顔面も襲い、目などを傷つける。

「ぐああー!　ぐああー!」

両手で顔面を覆いながら石畳の上を転げ回る。

「いてえ、いてえー！」

転げまわる間もオーラは増え続ける。

それが湯気のように上空に舞い上がり……。

舞い上がり……。

それを追い、上空を見上げる……。

「なんだ、あれは……？」

天井から何かがぶら下がっている……。

赤い宝石のような……。

それに、シャイドから立ち昇ったオーラが吸い込まれていく。

「どういふこと……！」

困惑する。

宝石の大きさはどのくらいだろう、たぶん、3メートル以上はある。

赤い宝石は綺麗にカットされ、ひし形の、シルバーのフレームの納

められている……。

「あつ」

私は胸元のネックレスを取り出す。

そう、ヒンデンブルクの魔法のネックレスだ。

それを空にかざす。

「ひし形の石座に赤い宝石……、まったく一緒だ……！」

大きさ以外、デザインも宝石のカットもまったく同じ。

「やっぱり、ここって、ヒンデンブルクの遺跡だったの……？」

人見の言うとおりで、ここで、私たちの旅客機と彼らの飛行船が衝突

したのか……。

「そんな馬鹿なこと……！」

即座に否定する。

「いや、でも、私が最初に発見してよかった……！」

和泉たちに見つかる前にあれを破壊するか隠すかしよう。

何かまずいもののように思える。

「うつか、うつか、ちくしょうー！」

今だにシャイドが石畳の上を転げまわって痛がっている。

「ちっ、うるさいな……」

私はやつに興味を失い、止めを刺そうと無造作に近づいていく。

「いてえ、よくも、こんなひでえことを！」

接近する私に気づき、シャイドは懐から片刃のダガーを取り出し、おもむろに突き出してくる。

私はそれを剣で横に払う。

ダガーはくるくると回転しながら飛んでいく。

「くっ！」

シャイドが石畳に手をつく。

「うがあー！」

やつがまたどこかから武器を取り出さないように、その手に剣を突き立てる。

「いった、いった、か、かつ！」

シャイドが痛がる……。

「うん？」

「くあ、くっあ、くっあー！」

やつが痛がるたびに身体から発するオーラの光が強くなるな。

「くあ、くっあ、くっあー！」

そのオーラが立ち昇り、天井からぶら下がっている赤い宝石に吸い込まれていく。

「うーん？」

シャイドの手に突き立ててある剣をぐりぐりしてやる。

「ひああー！ ひああああー！」

悲鳴を上げる。

すると、さらに、強い光に包まれ、その光が上空に昇っていく。

「ああ……」

理解した。

これ、あれだ、人見がやったあれ、手の平にナイフを突き立てて、あのロボットに魔力を注入したあれ。

「なるほどねえ……」

さらに、シャイドの手をぐりぐりしてやる。

「いつぎやあああああ！」

悲鳴とともに、やつの身体は輝き、その光が上空の宝石に吸い込まれていく。

「なんか、面白い……」

ちよつと笑ってしまう。

苦痛を与えると身体が光るのはわかったけど、いったい、どういう仕組みなんだろう、こいつらって魔法使えないよな？ こいつらの仲間が虫に食われたりしても、別に光らなかつたし……。

「うーん……」

まあ、あの赤い宝石の力だね、当然……。

苦痛を魔力に変換して吸い取っている……、そう考えると合点がいく。

「よし、破壊しよう」

あれは危険だ。

第152話 繚乱怒涛

天井より吊るされた赤い宝石。

一見すると照明器具のようにも見える。
でも、違う。

私の持つ、ヒンデンブルクの魔法のネックレスと同じデザインの、なんらかの魔法を施された魔法具だと推察される……。

「い、いて、いて、きゅー、きゅー」

その証拠にこのシャイドの身体から発する光を吸い上げ続けている。

おそらく、苦痛を魔力に変換しているものと思われる……。

「きゅー、きゅー、ふらむ、きゅつきゅ」

シャイドが手の甲に突き刺された剣をもう片方の手で押さえ、少しでもその痛みを和らげようとする。

「きゅー、きゅー、ふらむ、きゅつきゅ」

ちなみに、このきゅー、きゅー、ふらむ、きゅつきゅ、とは、現地
の言葉で、「超痛い、死にそう」ってニュアンスになる。

「きゅー、きゅー、ふらむ、きゅつきゅ」

……。

肩を震わせて痛がっている……。

「きゅー、きゅー、ふらむ、きゅつきゅ」

涙も零している……。

「あうあー、あうあー……」

私の腕の中のテロベアうさぎもつられたように悲しげに鳴く。

「ああ、大丈夫だよ、大丈夫だよ、よし、よし……」

と、声をかけ、ぽんぽんと軽く叩く。

「きゅー、きゅー、ふらむ、きゅつきゅ」

まだ言っている……。

なんか、かわいそうになってきた……。

「しようがないなあ……」

と、私はシャイドの剣を突き立てられたほうの手の手首辺りを足で

踏む。

「きゅーきゅー！」

激しく痛がる。

「我慢しろ」

そのまま、力を込めて剣を引き抜いてやる。

「きゅーきゅー！」

シャイドが手を押さえ、急いで懐から布切れを取り出して止血を始める。

「きゅー、きゅー、ふらむ、きゅつきゅ……」

目に涙をいっぱい溜めながら手の治療をしている……。

「きゅー、きゅー……、きゅー、きゅー……」

……。

「そ、そんなことより……」

あのヒンデンプルクの魔法の宝石……。

どうやって破壊する？

天井の高さは20メートルほど……、そして、そこから吊るされている宝石の大きさは3メートルほど。

「うーん……」

吊っているチェーンを狙うか？

と、私は自分の剣を再度石畳に突き刺し、代わりに落ちているシャイドの剣を拾い上げる。

「よし」

そして、それを逆手に持ち替えて……。

「とおoryああああー！」

と、槍投げの投擲みたいに、あの赤い宝石を吊るしているチェーン目掛けて思いつきり投げつける。

投げ放たれた剣は風を切りながら飛んでいき、狙い通りにチェーンにヒットする。

「うん？」

しかし、剣はガキンという金属音とともに弾かれ、大きく跳ね返り、私の頭上と飛び越え、遙か後方にぼとりと落ちる。

「固いな……」

振り返り、弾かれた剣を見る。

刀身は折れ、中ほどから先がなくなっていた。

「あれはもう使えないな……」

私は正面を向き、石畳に刺した自分の剣の柄に手をかける。

「しようがない、これを使うか……」

と、剣を引き抜く。

おそらく、なんらかの魔法でのコーティングがなされていると思われる……。

私は剣を逆手に持ち、狙いを定める。

シャイドの苦痛が和らぎ立ち昇る光は薄れたとはいえ、まだ完全に消えたわけではない。

薄つすらとした光が、煙のように渦を巻き、中央の赤い宝石の中へと吸い込まれていく……。

「たぶん、あの宝石は魔法でコーティングされていない」

少なくとも、魔力を吸収するあいだは魔法を解除しているはずだ。

「ど真ん中にぶち込んでやる」

私は、一歩、二歩、三歩と助走をつけ、

「うおおりやあああああああー！」

と、渾身の力で、赤い宝石のど真ん中目掛けて剣を投げる。

「どうだあ!？」

剣は鋭い風切り音を上げ、まっすぐに飛翔し、そして、赤い宝石のど真ん中に突き刺さる。

「よしー！」

と、それを見た私は拳を突き上げて歓声を上げる。

突き刺さった剣の勢いは衰えず、赤い宝石を押し、そのまま振り子のように突き上げ、天井に激しく打ち付ける。

天井は砕け、ぱらぱらと石片が崩れ落ちる。

「おお……?」

そして、天井を打ち付け、弾かれた赤い宝石は振り子の要領で今度は前方に振れる。

ゴガンツ、という天井を打ち付ける音が響き、さつきと同じように天井の石がばらばらと砕け落ちる。

「うーん……う？」

そして、また、振り子のように、後方の天井を打ち付ける……。

「あーん……う？」

次に、また前方……。

そのようにして、何度も前後の天井を打ち付け続ける……。

「ええ……う？」

ガゴンツ、ガゴンツ、と、何度天井を打ち付けただろうか……、ついに天井が崩落しだした……。

「ひいひい!？」

大きな石のブロックごと天井が崩れ落ちてきた!

「きゅー、きゅー?」

手の治療をしていたシャイドもその轟音に気付いて天井を見上げる。

巨大な石とともに、大量の砂も一緒に落ちてくる。

「ひいひいひい!」

まるで、砂が大滝のように流れ落ちてくる!

赤い宝石も一緒に落ち、その上に石のブロックや大量の砂が覆いかぶさり、その姿はすぐに見えなくなる。

そして、流れる砂は濁流となり、津波のように私たちに襲いかかってきた。

「くっ!」

流れる砂が私の足をさらう。

「とう!」

と、私は足がさらわれる瞬間に飛び、砂の上を流れる石のブロックの上に飛び乗る。

「これじゃ、駄目だ!」

私はさらに、足場を求めて、別のブロックに飛び移る。

「きゅー、きゅー! たすけてえ!」

シャイドが流れる砂の中で、まるで水の中で溺れるように顔と腕だ

け出して助けを求めていた。

「あいつ……」

何度目かのジャンプで比較的大きな石のブロックの上に辿りつく。

「きゅー、きゅー！ きゅー、きゅー！」

必死に助けを求めている……。

「きゅー！ きゅー！」

……。

「しようがないなあ……」

巨大な石のブロックの上とはいえ、流れる砂の上、大きく揺れてバランスを取るだけでも一苦労……。

「きゅー！ きゅー！」

「ちよつと、待ってろ」

私は何かロープのようなものがないか探す……、けど、それらしい物を見つけることはできなかった……。

「きゅー！ きゅつぷー！」

何度も砂の中に頭まで埋もれて、そのたび、必死にもがくように顔を砂の上に出す。

「きゅつぷー！ きゅつぷー！」

駄目だ、助けられない、剣2本もあの赤い宝石を破壊するの使って手元にはない、当然、ロープなどの道具もない。

「きゅつぷー！ きゅつぷー！」

シャイドが必死にもがく。

助けを求める、その手……、白い包帯が巻かれ、赤く血が滲んでい
るのも、すごく痛々しい……。

「ロープがないのなら、こっちから行けばいいじゃん」

私は石のブロックの上をシャイドがいるほうとは逆のほうに歩いていく。

「ブロックが流れる、その進行方向を変える……」

足元の固そうな石をかかどでトントンとする。

「アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、静寂の風盾！」

呪文を唱え、足に魔法をまとわせる、そして、足を前に振り上げて、

「たあー！」

と、思いつきり石の床にかかるとを叩きつける。

すると、石にひびが入り、ガラガラと音を立てて石片が崩れ落ちる。

「よしー！」

四角い石のブロックの前方、左前の角が取れたようになった。

砂が正面ではなく、斜めに当るようになり、抵抗が少なくなる。

そして、依然として右前は正面から砂を受け、相対的に抵抗は増す。

「スリッパアングル」

自動車のステアリングを切るのと一緒、進行方向と重心のずれによって、抵抗の多い側に巻き込むように曲がっていく。

「おお……！」

予想通り、私の乗る石のブロックは、右に、右にと、少しずつ方向を変える。

「きゅっぷー！ きゅっぷー！」

そして、砂の中で溺れているシャイドのほうへ近づいていく。

「シャイド！ 掴まれ！」

と、彼に声をかける。

「きゅっぷー！」

シャイドが精一杯腕を伸ばし、石のブロックを掴もうとする。

「もう少しー！」

私も手を伸ばし、シャイドの手を掴もうとする。

「あうあー！」

腕の中のテロベアうさぎが鳴く。

「うんっ？」

うさぎを見る。

「ほぽろー！」

その瞬間、砂の中から黒い物体が飛び出してきた。

「なっ!？」

「いびろー！」

それはムカデのような黒い虫、体長50センチはあろうかという大きな虫だった。

「ひいひい！」

と、私は反射的にムカデに回し蹴りを食らわす。

「ころぴー！」

虫は黒い外骨格を撒き散らしながら砂の上にぽとりと落ちる。

「ま、魔法で、足を強化してて、よかった……」

安堵する。

「嬢ちゃん！」

と、私の顔の横をダガーが通過していく。

「ぼろぴー！」

私のすぐに後ろで黒いムカデの顔にダガーが突き刺さる。

そして、虫は石の上に落ちるけど、そのままうねうねもがいて砂の中に逃げ込む。

「よかった、間に合ったか……」

ダガーを投げて私を助けてくれたのは、石のブロックに這い上がる
ことができたシャイドその人だった。

「おお、登れたのか……」

少し笑顔を作る。

「ありがとよ、嬢ちゃん」

やつも笑顔をつくる。

でも、笑顔も束の間、虫共が次々と襲いかかってくる。

「たあ！」

私は魔法をまとわせた蹴りで応戦。

「はっ！」

シャイドもダガーで戦う。

「とお！」

「はあ！」

私たちは必死に応戦する。

さらに、問題はそれだけではなく、

「早い！ 早い！」

「まわる、まわるう！」

右に抵抗をつけたままの石のブロックは回転しつづけ、時間とともに

に、その回転の速度が増していった。

「つか、つか、つかまれ！」

「ひいひい、目がまわるう！」

今や、もの凄い速度で回転している。

だけど、そのおかげか、虫共の襲撃が止む。

「た、たすけてえ！」

「ひいひいひい！」

私たち二人の乗った石のブロックは激しく回転しながら、下流へ、下流へと流されていく。

そして、前方に見えるのは……。

「な、ナビーか!？」

「な、なんで、そんなところに!？」

「お頭!？」

「シャイドさん!？」

そう、それは和泉や人見、それと密猟者たちだった。

第153話 リムセラ

「は、ハル！ 彰吾！」

二人を視認して、その名前を叫ぶ。

「ひいieeeええええええええええ！」

「たすけてええええ！」

でも、激しい回転ですぐに見失う。

「ナビー!?」

「あ、危ない！」

「お頭！」

みんなも心配して叫ぶ。

「うぎやあああああ！」

「うわあああああ！」

さらに、石のブロックは流れる砂の上をバウンドする。

「ぶつかるぞお！」

「そっちは壁だぞお！」

彼らがそう叫んだ瞬間、激しい衝撃と、石と石とがぶつかるような轟音が響き渡る。

「あっ……」

そして、その直後の浮遊感……。

「ああ……」

飛んでる……。

石のブロックが何かとぶつかって放り出された。

「ああ、天井が綺麗……」

白いつるつるとした大理石みたいなブロック……。

そういえば、福井が言っていたね、白い、つるつるとしたレンガが欲しいって、それで道を作りたいって……、あんな感じのレンガのこなのかな……。

そう、そう、その資金は馬車を売った金で賄うって……、その馬車は今みんなで一生懸命汗を流して作っているはず……。

ああ、私も馬車作りしたかったなあ……、本当なら、今日はこんな

ところに来ないで、みんなと一緒にわいわい談笑しながら楽しく馬車を作っているはずだったのに……。

「麻美……」

彼女の名前を呼ぶ。

「あ……」

走馬灯……、スローモーション……、こういうのって、何現象って言うんだっけ……。

命の危機が迫ったときに時間がゆっくり進んでいるように感じる現象。

「タキサイキア現象……」

だったか……。

「あうあー」

腕の中のテロベアうさぎが小さく鳴いた気がした。

この子は助けないと。

そう思い、私は両腕でしっかりとうさぎを抱いて地面に叩きつけられないように備える。

そして、身体を強張らせて、目をぎゅつとつむって、地面に叩きつけられる瞬間を待つ。

待つけど……。

「あれ……?」

と、目を開けて見ると、

「ハル」

そう、目の前には和泉の顔があった。

「危なかったね、ナビー」

と、彼が笑顔を作る。

そう、和泉がお姫様抱っこで私を助けてくれていたのだ。

「大丈夫、立てる?」

そっと、地面に降ろしてくれる。

「大丈夫、ありがと、ハル……」

と、私は地面に立つ。

そして、改めて周囲を見渡す。

すぐ目の前では、相変わらず轟音を上げて砂が流れていて、砂煙や小石が激しく舞っていた。

私はそれからうさぎを守るように肩と腕でガードしてあげる。

でも、砂が流れているのは狭い範囲だけ、幅は数メートル程度、その両側には砂は来ない。

さらに、両側には大量の瓦礫、石材や石柱などが山積みになっていて少し高台になっていた。

「二回目か、やつらの罠か……?」

「どうだろうな、天井が落ちている」

と、人見と和泉が流れる砂と、その砂が流れ落ちてくる天井を見ながら話す。

「砂の流入が止まらない……、このままだと砂に埋もれてしまうかもしれない」

「ああ、一旦上に避難しよう、階段が砂に埋もれてないか心配だ……」

「ぎやあああああ!」

「うわあああああ!」

でも、二人の会話は、そんな悲鳴にかき消される。

「む、虫!」

「た、たすけて!」

見ると、密猟者たちが、あの黒い大きなムカデのような虫共に襲われていた。

「す、砂の中から飛び出してくるう!」

そう、流れる砂の中から突然飛び出してきた、密猟者たちの腕や足、首に喰らいつく。

「シロス、権力によらず、暴力によらず、その身を押し、シュトラゼ追い風」

「エンベラドラス、殉教者の軍勢、死の絶望が汝を燃え上がらせる、炎を纏え、エゼルキアス双炎爆裂」

人見と和泉は魔法で応戦、虫共を次々と撃退しながら、流れる砂の川から距離をとるために、少しずつ後退していく。

でも、密猟者たちは劣勢。

「もう、負けた、降参だ、だから、助けて、お願いだ!」

「なんでもします、なんでもしますから!」

「おいてかないでくれえ!」

と、密猟者たちが私たちに助けてを求めてくる。

「うわあああ、いてえ!」

「喰いつかれたあ!」

悲痛な叫び声が響く……。

まあ、でも、あいつらには死んでもらったほうがいいんだよね……。

「あうあー……」

「おお、よし、よし……」

と、テロベアうさぎの頭を撫でる。

この子たちを殺して密猟していたんだから。

それに、あの苦痛を魔力に変換して吸い取る赤い宝石のことや他にもこのヒンデンブルクの遺跡の謎を知っているかもしれないしね。

密猟者というのは自分の狩場を他の同業者には決して教えないもの。

独占したいからね。

だから、あいつらが全員死んだら、ここは誰にも知られない安全な場所となる。

「どうする、人見、助けるか?」

「ナビーもいるし、危険だ、このまま警戒しつつ、退避していったほうがいい」

「そうか……、だが、気の毒だな……」

「仕方ないだろ、和泉、敵にシンパシーを感じるのも大概にしろ」

「そうだな、すまん……」

と、二人が虫共と戦いながら会話する。

しめしめ、いい展開……、このままやつらを見捨てて退散しよう。

幸いにして、天井が崩れたおかげであの赤い宝石は砂の中、そう簡単には掘り出せなくなっただろうし……。

「くそつ、頑張れ、立てるか!」

「無理っす、お頭、足をやられました!」

「こつちも助けてくれ!」

シャイドがお頭らしく、仲間を励ましつつ、先頭をきつて戦っている。

「くそつ、もってかれた！ その剣を貸せ！」

と、シャイドが仲間の剣を奪い取り、すぐさま近くに虫に一撃を加える。

「き、きりがない！」

「お頭！」

「うぎやあああ！」

「痛い、痛い！」

虫の数は多い、しかも、知能があるのか、攻撃に緩急をつけ、密猟者たちを半包围し、壁際に追い込んでいく。

リープトヘルム砦の巨大な虫、ガルディック・バビロンと同じだな、やつらは非常に賢い……。

「よし、好都合だ、虫共がやつらに気を取られている隙に後退しよう」と、人見の指示で私たちは後退を続ける。

「うぎやああああ！」

「ぐあああああ！」

「おぐああああ！」

密猟者たちの悲鳴が続く……。

「いてええええ！」

うん？

やつらの身体がうつすらと光っているな……。

「痛い、助けてえ！」

それが煙のように渦巻き、そして、一点に向かって吸い込まれていく……。

そう、あの赤い宝石が埋まっているであろう場所に向かって吸い込まれる。

やばい……。

こんなに離れているのに吸い込むのか……。

私は人見たちをチラッと見る。

「気を付けろ、和泉、こっちにもくる！」

「わかった！ はっ！」

人見たちは散発的に襲いかかってくる虫共の相手に夢中で、密猟者たちの身体から立ち昇る光には気付いていない。

「がああああああ！」

「腕があ、腕があ！」

悲鳴を上げるたびに身体から発する光が強くなる。

駄目だ、まずい、このままだと人見たちにばれる。

「あの人たちを助けよう！」

私はそう言い、虫共に襲われている密猟者たちに向かって走りだす。

「な、ナビー!?」

「無茶だ、危ない！」

人見たちが私のあとを追ってくる。

「たあ！」

と、手前にいた虫に飛び蹴りを喰らわしてやる。

「ころびー！」

虫は盛大にふっ飛ぶ。

「嬢ちゃん！」

シャイドが驚いたように叫ぶ。

「しつかりしろ、シャイド、仲間たちを守れ！ 彰吾、ハル、援護して

！ たあ！」

戦いながらみんなを鼓舞する。

「人見、やるしかないぞ、前衛をやる！」

「ああ、わかってる、サポートはまかせろ！」

と、二人も応戦してくれる。

「お、俺たちを助けてくれるのか……?」

「さっきまで殺しあってたのに……」

「ほ、本当なのか……?」

密猟者たちが傷口を押さえながら呆然とつぶやく。

「当たり前でしょ！ 私たちは仲間なんだから！ さあ、心を開いて一緒に戦いましょう！ たあ！」

と、近くの虫に回し蹴りを喰らわす。

「おお……、なんて、お優しいんだ……」

「ああ、女神さま……、本当にいるんだ……」

「ありがとう、ありがとう……」

「た、戦おう！」

「「おおお！」」

と、密猟者たちが奮い立つ。

そして、その雄叫びとともに、彼らの身体から出ていた光はなくなる。

おそらく、アドレナリンなどの脳内物質の影響だろう、痛みがシャットダウンされたものと思われる。

「怪我人を行かせろ！ あの階段の場所はわかるな!? 戦えるものはしんがりをやれ！ たあ！」

「「おおお！」」

私の指示に従い、組織だって戦えるようになる。

「たあ！」

「はあ！」

「うらあ！」

と、私たちは必死に戦いながら、上に登る階段を指す。

「もう少しだ、頑張れ！」

「階段だ！」

「怪我人に手を貸してやれ！」

「おう、こつちはまかせろ！」

みんなが協力して撤退戦を行う。

「出口だ！」

「助かった！」

「やったあ！」

階段を登りきり、広い上層に出る。

「レージス、光を閉ざした虚無の剣、弾けて砕け、剣気破弾！」

私のすぐうしろの虫が弾け飛ぶ。

「公彦！」

そう、上層で待機していた東園寺が助けてくれたのだ。
そして、さらに、

「シャアアアアアア！」

「キイイイイイイ！」

「アギアアアアア！」

と、大群のテロベアうさぎが階段を登ってきた虫共に襲いかかり、捕まえ、引き裂き、頭からかぶりついてむしやむしやと食べだす。

「ころぴー……」

「いろぴー……」

「ひろぴー……」

それを見た虫共が下に逃げ帰っていく。

「た、助かったあ……」

「死ぬかと思った……」

「こわ、こわ、怖かったよお……」

密猟者たちが安心したのかその場にへたり込む。

「ナビー、無茶をするな……、だけど、キミなら、こうするだろうとも思っていたよ……」

と、和泉が私の頭の上にぽんと手を置く。

「ひやっとしたぞ、気持ちにはわかるが、自分のことも大事にしてくれ」
人見も呆れ顔で追隨する。

「で、どうなっているんだ、これは？」

と、東園寺がへたり込んでいる密猟者たちを見ながら話す。

「まあ、成り行きで……」

「俺にも何がなんだか……」

人見たちが口ごもる。

私は構わず、密猟者たちのところへ歩いて行く。

「おまえたち、今日のところは見逃す。だが、次はないぞ」
と、話しかける。

「ここは神聖な場所、私たちが祈りを捧げる場所、そして、この子、テロベアうさぎは神の使い」

こいつらがさつき私のことを女神とか言っていたのを思いだして

適当に言う。

「ここへの立ち入りを禁ずる。二度と立ち入ってはならない。もし立ち入ったのなら、次はない、次はその命で償ってもらおう、いいな？」

「わ、わかった、二度と立ち入らない」

「もう、悪いことはしない、真面目に働く」

「故郷に帰って、店を開くのが夢なんです」

「生まれてくる子供に名前を付けてやります」

彼らも了承してくれる。

「よし」

と、それを聞いて笑顔をつくる。

「じゃあ、武器を全部置いて行って、ここで拾ったものなんですよ？」

そう、彼らが持っているヒンデンプルクの魔法の武器は回収しておかなくてはならない。

「これで全部です」

密猟者たちに武器を集めさせる。

「公彦、ロープかなんかで結んで、ひとまとめにして運んで。ラグナロクに持って帰るよ」

「ああ……」

と、東園寺が武器をひとまとめにして肩に担ぐ。

「帰ろうー」

そして、拳を突き上げて帰還を宣言する。

「「おおおー」」

と、みんなが応えてくれる。

「あああー……」

途中の草むらのそばにずっと腕に抱いていたテロベアうさぎを降ろす。

「助けてくれて、ありがとね」

四つん這いになって、さらに頭を下げて、うさぎの額に自分の額を合わせる。

「あああー……」

「さあ、おゆき」

笑顔で彼を送り出す。

「あうあー……」

何度も振り返りながら、仲間たちの元へ帰っていく。

「うん」

私は満足して立ち上がる。

これで全部かな。

「ナビー、みんなあー！」

入り口で待っていた佐々木が大きく手を振る。

「智ー！」

彼のところに走っていく。

「みんなも早くー！」

振り返り、うしろを歩くみんなに手を振る。

こうして、私たちの冒険は終わり、大量のおみやげとともにラグナロクへの帰路に着くのであった。

第154話 花に風

割と普通なナビーフイユリナ記念オアシスでの一件から数日が過ぎた。

人見彰吾の言う、私たちの旅客機とヒンデンブルクの飛行船があの場所で空中衝突したという推論、それを裏付ける確証は得られなかった……、ということになった。

帰還後すぐに行われた班長会議でも否定的な意見が多く、また、苦痛を魔力に変換して吸い取る赤い宝石のことも言及されていない。

うまく、テロベアうさぎや大きなムカデと絡めて話を逸らせたと思う。

もちろん、ヒンデンブルクの何らかの遺跡だろうということまでは隠し通せなかったけど、それでも、それほど重要視はされなかった。なので、暇を見て再調査し、ヒンデンブルクの魔法の武器を回収する、という程度の話で班長会議は終了した。

まっ、私、個人としては、あの赤い宝石が魔力を吸い取って、それを何に使うか興味はあるんだけどね。

「うーん……、88、89、90……、魔法兵器……、人見のヴァーミリオンが撃つたみたいなレーザー……、その凄いでつかいバージョンを撃てるのか……、91、92、93……」

それだったら、夢が広がるね……。

あと、テロベアうさぎを密猟してるやつがないか見回りもしないといけないね……。

「94、95、96……」

今は早朝、うっすらと東の空が白みがかってきたところ。

「97、98、99……」

ここは、私たち狩猟班の女子が寝泊りするロッジの裏。

「100……、と……」

日課の筋力トレーニング中。

びっくりするくらいの細腕だからね、少しでも筋肉を付けておきたい。

「もう、ちょっと出来るかな……、101、102、103……」
今は腕立て伏せ中。

しかも、普通の腕立て伏せではない、足を地面に付けない、腕の力だけで身体を支えて行うプランシエという特殊な腕立て伏せをやっている。

「198、199、200、つと……、ふう……」

と、私は足を地面につけて、立ち上がり、ぱんぱん、と手の平に付いた枯れ草を払う。

「全然、余裕」

肩をこきこきと回してやる。

「じゃあ、次は、ベンチプレスでもやるか」

と、私はベンチに仰向けに寝転がり、バーに手をかける。

「今日は肩幅と同じくらいにするか……」

このバーベルはみんなに作ってもらったもの、木の棒の両側に石のおもりを付けたやつ。

50キロくらいはあると思う。

「はあっ！」

と、息を吐き出しバーベルを持ち上げラックアウトする。

「1、2、3……」

バーベルを上げ下げする。

「98、99、100……」

勢い余って100レップもしてしまった……。

バーベルをラックに戻して上半身を起こす。

「うーん……」

と、また肩をこきこき回す。

「よし、じゃあ、最後にドラゴン・フラッグだ！」

もう一度寝転がる。

そして、頭の後ろのベンチを両手で掴む。

それから両足を上げ、次に腰を上げ、最後に背中を上げる。

そう、ベンチに肩しか触れていない、そこから下は斜め45度に上げている。

「1、2、3……」

と、今度は秒数を数える。

「998、999、1000……、ふう……」

身体を下ろす。

そして、上半身を起こし、さらに、勢いよくベンチから立ち上がる。

「うん、全然効かない！」

超余裕。

「これ、あれだ、無意識のうちの魔法使っちゃってるよ」

もう、全然辛くない。

筋肉を全く使っていない。

腕を曲げて力こぶを作る……、けど、まったく盛り上がりがない、当

然、パンプアップもしていない……。

「くっ……、なんという細腕なの……」

私は腕だけではなく、自分の身体をきよろきよろと観察する。

そして、

「アブドミナル・アンド・サイ」

と、両腕を頭の後ろに組み、片足を前に出し、腹筋と足の筋肉を強

調するポーズをとる。

「肩にちっちゃいジープ乗せてんのかあい！」

これはボディビルのポーズをしたときの掛け声だ。

「ラットスプレット」

今度は両手を腰に手を当て少し肘を前に出すポーズとる。

背中中の筋肉を強調するポーズだ。

「肩にちっちゃいジープ乗せてんのかあい！」

と、掛け声も忘れない。

ちなみに、ちっちゃいジープとは、アメリカのラングラージープと

かクライスラージープのことではない。

日本のスズキジムニーのことだ。

ジムニーはジープミニの略で、直訳するとちっちゃいジープにな

る。

「サイドチェスト」

じやがいもに突き刺し、口元まで運んでいく。

「あーん」

それを、下からはむはむと食べていく。

「あーん」

黒パンはバターを付けていただく。

「あーん」

ついでに目玉焼きも乗せる。

「ちゅー、ちゅー」

スープはスプーンにすくってちゅーちゅーする。

「ほら、ナビー、お口のまわりについてるよ」

と、夏目がナプキンで口のまわりを拭いてくれる。

「ありがと、翼、ちゅー、ちゅー」

お礼を言いつつ、すぐにスープをすすする作業に戻る。

「暦、季節的に考えれば、もう秋に入っけてもいい頃だ」

「雨が降らない、地形性降雨は観測出来るけど、前線性降雨は皆無」

ちゅーちゅーしていると、そんな会話が聞えてくる。

「西側の山、その山を駆け登り雲となり、そこで雨を降らし、ルビコン

川に流れ込む」

「西側からの風ってことは、偏西風？」

「偏西風が湿潤な風ってことは考えられないから、ハドレー循環じゃないの？」

「ハドレー循環だったら東寄りの風だ」

「じゃあ、フェレル循環？ 緯度的におかしくない？」

「この季節なら普通にサブハイだろ？」

「サブハイは南風だ」

「そんな小難しい話をするのは、もちろん、人見たち参謀班の連中を

おいて他にはいない。

「あいつら、またよからぬことを企んでいるなあ……、ちゅー、ちゅー

……」

「……」

ちゅーちゅーしながら聞き耳を立てる。

「一つ忘れてる、対流性降雨の可能性もある」

「まさか？ それじゃ辻褃が合わない、それなら、ここでも、夕立があつてもいいはずだ」

と、南条大河と青山悠生が話す。

「山を越えるだけの力がないということも考えられる……」

「それだけの上昇気流を生むには、それなりの水源……、海のようなものが必要だと思うけど？」

南条の言葉に海老名唯が口を挟む。

「南西方面に海がある……」

南条がぼつりと言う。

「距離は？」

「南条の仮説が正しければ、100キロは超えない、それ以内だ」

「こんな感じかな？」

人見彰吾の言葉を聞き、綾原雫が地図におこす。

「そうだな、途中の地形に500メートルを超える山や丘はない、豊かな森林が広がっているはずだ」

「こうね？」

綾原が地図を書き足す。

「西側の山は他より高いけど、それでも、山頂ら辺に木が生えてるな、森林限界ってどのくらいになるんだ？」

「2000メートル以上だと思うよ？」

「高いな、1000メートルくらいだと思ってた」

「北海道でも1500メートルはあるよ」

「それよりも、北側だな、どうしてそっちに砂漠があるんだ？ しかもあんな広大な？」

最後の言葉は青山によるもの。

「先日、割と普通なナビーフイユリナ記念オアシスに行った折に感じたことだが……」

それに対して人見が口を開く。

「砂漠という割には日差しが弱く、また、気温も低いように感じた」

「意外ね、砂漠なの？」

「そうだ、そして、喉が痛くなるほどの乾燥、また、ひんやりとした北

風も吹いていた……」

参謀班の面々が神妙な面持ちで人見を見つめる。

「高緯度の砂漠化、さっきの南条の仮説の通り、南西方面に海があるとしたら、海隔度は小さい、すべての状況があの場合での砂漠化を否定するが……、一点だけ、砂漠化する可能性が残されている、それは、砂漠の北側に海があり、そして、その海には……」

「寒流ね？」

「そうか、寒流だ！」

「それだったら、砂漠化する！」

「その考えが抜け落ちていたわ！」

ガタガタツ、と、参謀班の面々が興奮気味に立ち上がる。

「その仮定が正しければ、海までの距離も割り出せる……、つまり、150キロから200キロ程度になる」

「おお……」

「計算が合う……」

人見の言葉に参謀班の面々が得心する。

「なら、東西に伸びる海岸線は相当長いものになる。長くなければ、この付近まで寒流が流れ込み、冷たい風が吹き、また、風向きも東寄りになるはずだから」

綾原は補足する。

「寒流の影響を受けなくなる海岸線の長さはどのくらいになる？」
「最低500キロ……」

人見が静かに答える。

「つまり、こんな感じのマップになる……」

綾原が地図におこしてみんなに見せる。

「おお……」

「凄い、予想通り……」

「マジか、こんなことって……」

参謀班の面々が息を飲む。

そういえば、こいつら、やたらと縮尺の小さな地図を持っていたよな、現地人でも持ってないような……。

もしかして、こうやって、気候とか風向きから地形を割り出しているの？

「な、なんて、やつらなんだ……」

小さくつぶやく。

「東に400キロ……、その地点は確実に陸地だな……」

「人見の言う通り、そこに東京があり、そして、そこに何かがある……」

「手がかりがあるかもしれない……」

ああ、そういうことか……。

こいつら、なんだかんだ言っつて、日本に帰る手段を模索しているんだ。

まっ、何をしても妨害するけどね。

と、私は残りのスープを飲み干し席を立つ。

第155話 ライドオン

薄暗い狭い道をひとり歩く。

「ふふん」

鼻歌を口ずさむ。

背中には竹で編んだ大きな籠を背負い、手にはさつき拾った小枝が握られている。

「ふふん」

と、口ずさみながら、手にした小枝で道にはみ出した雑草を払い除ける。

「ふふん」

「くるうー」

ひとりじやなかった子犬のクルビツトもいた。

ふわふわとした毛並みの子犬。

色は青、水色とまではいかないくらいの薄めの青。

その彼がご機嫌に尻尾をふりふりしながら私の隣を歩いている。

「ふふ……」

その姿を見て口元をほころばせる。

「ふふん」

そして、また鼻歌を口ずさんで道の先を見る。

ここはラグナロクからだいぶ南のほうに来たところ。

ルビコン川を越えて、市場であるプラグマティッシュエ・ザンクツイ

オンや新ナスク村を越えて、さらに、南のほうに進んだところ。

1キロくらいは来ただろうか。

この細く暗い道は、幹線道路であるラグナロクからヘルファイア・パスへと伸びる広い道とは違う、少し東側に枝分かれした小道になっている。

あつちはいわゆる国道、カルテラと外界とを繋ぐ、行商人たちが行き来する道。

こつちはここの住人しか使わない生活道路。

「くるうー」

道の先に光を確認してクルビットが元気よく走りだす。

「ああ!? ずるい、クルビット!」

と、私も彼のあとを追って駆けだす。

「くるう!」

「まてえ、クルビット!」

頭の麦わら帽子を飛ばされないように手で押さえながら走る。

そして、暗い道は終わり、光溢れる広場に出る。

「着いた!」

青い空が見える。

「くるう!」

広場といっても、完全に木が伐採されているわけではない。

等間隔に針葉樹が生えている。

その針葉樹たちは綺麗に枝打ちされ、さらに、その幹の皮が剥がされ、削られ、そこに瓶がくくりつけられている。

「溜まったかなあ……」

この瓶は数日前に私が設置したもの。

中には……。

「おお……」

樹液が溜まっている。

そう、松脂だ。

「よし、よし……」

と、私は背負っていた籠を下ろし、中からヘラを取り出す。

そして、そのヘラを使って松脂を集めて、木にくくりつけられている瓶の中に入れていく。

「おっけ」

松脂を集め終わったら瓶を木から取り外し蓋をして籠の中に入れる。

次にナイフを取り出し、木を削っていく。

一部松脂が固まり樹液の分泌が止まっているから、再度ナイフで削って樹液を出すようにしてやる。

がりがりと削る。

樹液の流れを考えて溝を作っていく。

「よし」

削り終わったら籠の中から新しい瓶を取り出して、さつきと同じように木にくくりつけてセットする。

「ふう……、一本終わりつと」

こんな感じの作業。

多分、木は50本くらいある。

でも、全部は交換しない。

「松脂の溜まり具合を見ながら交換する。」

松脂は貴重。

その用途は多岐に渡る。

弓の弦や剣の柄に塗る滑り止めにも有用だし、虫除けにもなる。

そして、なにより、照明用として使える。

特に室内用。

室内で薪なんて燃やしてられない。

そんなことしたらすすだらけになってしまう。

交易でローソクのようなものを購入してみたけど、匂いが酷かった、あんなの使ってられない、服に匂いが付いてしまう。

多分、動物の油を使っていると思われる。

なので、室内での照明はこの松脂しかないという結論に至った。

松脂自体匂いはあるけど、それほど不快というわけでもない。

植物だからね。

「くるう、くるうー！」

「よし、よし、ひとりですんでね……」

と、はしゃぐクルビットを横目に作業を続ける。

そう、そう、松脂の用途でひとつ忘れてはいけないのは、そのワックスとして効果。

木材を保護し綺麗な艶を出す。

私たちはあの詐欺貴族野郎に騙され大量の馬車を作ることになっていた。

その製作には大量の松脂を必要とする。

「ふう……」

額の汗を拭う。

ぎっと、1時間は作業した。

「20本くらいやったかなあ……」

と、籠の中の瓶を数える。

「うん、このくらいでいいや」

ここだけじゃなくて、色々な場所でやっており、みんなで手分けして採取しているから、私ひとりだけが頑張る必要はない。

「うんしよつと……」

と、籠を背負う。

「クルビット、帰るよー」

そして、子犬のクルビットを呼ぶ。

「くるうー」

でも、来ない……。

「くるうー」

逆に私を呼んでいるような感じで、森の奥と私の顔を交互に見ている。

「どうしたの、クルビット……」

と、彼の元に歩いていく。

「くるうー」

クルビットが森の奥を見ている……。

「どうしたの……、鹿か何かでもいたの……?」

と、私も暗い森の奥を目を凝らして覗き込む。

「うーん……?」

かーん、かーん、かーん、という音が聞えてくるなあ……。

いや、最初から気付いていたけど、キツツキかなんかの仕業だと思
い込んでいた……。

こっちの世界にキツツキがいるかなんてわからないのに……。

かーん、かーん、かーん、と、リズムを刻む。

「なんだあ……?」

気になる、確かめよう。

「クルビット、行くよ」

「くるう！」

と、私とクルビットは森の中に分け入っていく。

「こっちなあ……」

「くるう！」

音のするほうに向かう。

「あっちなあ……」

「くるう！」

1キロほど進むと、森の奥にうつすらとした光が見えてくる。

森を抜ける。

光が溢れる。

「まぶしい……」

と、麦わら帽子を手で押さえながら空を見上げる。

そこは、ひらけた草原。

「そっちに倒すぞ！」

「枝は全部落としておけよ、あとで面倒だから！」

「いらねえものは全部剥いでおけ！」

そして、木を切り倒して、丸太を作る人々……。

「太さは揃えておけよ！」

「乾燥が終わってねえのはこっちだ！」

「そっちに積み上げておけ！」

テキパキと作業している。

数は10人くらい。

「あんたら……」

見覚えのあるやつらだ。

私は広場を見渡しながら、彼らのところに歩いていく。

100メートルはないだろうけど、それでも、相当な広さ、相当な本数の木を伐採したことがうかがい知れる。

「あっ!? チビの女神さまー！」

真ん中で指示を出しているやつが私の顔を見るなりそう言い放ちやがった。

「いらしてたんですか、チビの女神さま!？」

誰がチビの女神さまだ……、一応、143センチあるから……。

というか、誰だっけ、こいつ……?？」

その顔は精悍、刀傷が何本もあり、首は太く、身体もよく鍛え上げられている。

「あんたは……」

あれだ。

「ヴァーゾっす、紅魔の騎獣ヴァーゾっす」

自己紹介してニカツと笑う。

そう、リープトヘルム砦から連れ帰った剣闘士のひとりだ。

それにしても、紅魔ね……、確かに赤っぽい髪の色をしているか……。

彼の顔をちらりと見る。

「で、ヴァーゾ、これは何の騒ぎなの?？」

と、改めて広場を見渡す。

広場には大量の丸太が至るところに山積みされていて、その丸太の加工を他の剣闘士たちがしていた。

「あ、いや、その、馬車作りに必要な木の伐採を……、それと、家作ったり、焚き木用の木とかちよつとだけ……」

ヴァーゾがばつが悪そうに頭をかきながらぼそりと言う。

「誰の指示で?？」

木の伐採は和泉の指示で行われており、その木の種類、成育状況、場所を見ながら慎重に切る木を選定していた。

なので、こんな無秩序に一箇所を切り尽くす指示を彼が出すとは考えづらい。

「えーつと……」

「誰?？」

「しゅ、シユタージさんが……」

シユタージか……。

金暗色のシユタージ、彼ら剣闘士たちのリーダー的存在だ。

「で、その彼は?？」

と、シュタージの姿を探す。

「いや、来てないっす」

「じゃあ、村にいるの?」

「はい、村で馬車作ってるはずっす、俺たちはチビの女神さまたちに見つからないように森の奥に行つて木を伐採してこいって」

なるほど……。

馬車の材料か……。

和泉がうるさくて木の伐採が進んでないのも事実なんだよね。

「あの、チビの女神さま……?」

どうしたものかと思案していると、ヴァーゾがおそるおそる言ってくる。

「黙つてこんなことをしたのをお怒りで……?」

「ううん、別に」

「よかった……」

と、ヴァーゾが胸を撫で下ろす。

「あと、ハルには私から言つておくよ、もつと近場で木の伐採をしないかって。みんなもこんな奥地まで来て作業するの大変でしょ?」

2キロ以上は奥に入ってきているし、運搬も大変だと思う。

「ほ、ホントっすか、やったぞ、みんな!」

「「おお!」」

と、他の剣闘士たちも大喜び。

「こんなものか、じゃあ、帰るか……、クルビット、帰るよ!」

「くるう!」

私が呼ぶと子犬のクルビットが駆け寄ってくる。

「あ、チビの女神さま、乗って行きませんか?」

「俺たちも帰るっす」

「村までお送りします」

と、剣闘士たちが言ってくる。

「うーん?」

見ると、そこには数本の丸太が積み上げられていた。

それをロープで結び、前後を台車に乗せて車のようになっている。

「おお！ 車だ！」

長さは10メートルくらいあるけど車だ！

私は大喜びで丸太の車に飛び乗る。

「クルビットもおいで！」

丸太にまたがり、両手を広げてクルビットを呼ぶ。

「くるう！」

と、私の胸の中に飛び込む。

「よし、じゃあ、ライドオン！」

村の方角を指し示し大きな声で言う。

「らいどん？」

「なんすか、らいどんって……？？」

剣闘士たちが首を傾げる。

「らいどんじゃなくて、ライドオンよ」

レッツゴーより、もっと砕けた感じの表現。

軍隊だと、こっちのほうをよく使う。

「私たちの国の言葉で出発進行って意味よ」

人差し指を立てて自慢げに説明してあげる。

「チビの女神さまの国の言葉っすか！」

「かっこいい、ライドオン！」

「らいどん！」

「ライドオン！」

「俺たちのかけ声にしようぜ！」

「いいね、ライドオン！」

と、大盛り上がり。

「よし、じゃあ、ライドオン！」

今度こそ、出発進行！

「「ライドオン！」」

みんなのかけ声とともに、丸太の車がゆっくりと動きだす。

第156話 アンダーバレルグレネード

ガラガラ、ガラガラ、と、小気味の良い音を響かせながら、私と子犬のクルビットを乗せた丸太の車は進む。

ここは市場プラグマティッシュエ・ザンクツイオンをへと続く主街道、良く整備された広い石畳の道が続く。

また、道の両脇には色とりどりのアラベスク模様の三角旗、いわゆるフラッグガーランドが掲げられており、それが都会的な華やかな雰囲気演出してくれていた。

もちろん、それらの飾りつけはすべて、新ナスク村の人たちによるものだ。

「いいね……、ここに来る商人たちも、ちゃんとした文明があるって安心するよね……」

風にそよぐ色とりどりのフラッグガーランドを見ながらつぶやく。

すれ違う、小太りの商人風の男が帽子を取り、私に向かって軽く会釈をする。

「ご機嫌よう」

と、私も笑顔で会釈を返す。

「チビの女神さま、もうすぐつすよ」

私のすぐそばで丸太を押す紅魔の騎獣ヴァーゾが言う。

彼の言葉通り、道の先に広場が見えてくる。

市場プラグマティッシュエ・ザンクツイオンだ。

広大な市場。

大勢の人たちが行き来し、様々な商品を取引している。

500人くらいはいるだろうか……。

新ナスク村の人口は300人程度、その村の人口より遥かに多い人数が市場に集まっていることになる。

「活気があっていいんだけどね……」

綾原は治安、和泉は動植物の乱獲、徳永は疫病……、等々、みんな様々な心配をしている……。

商売に勤しむ彼らを横目に丸太の車は市場の真ん中を進む。

「ナビー、ぷーん！」

と、道沿いの露店から私を呼ぶ声がした。

「ナビー、ぷーん！」

その露店からウェーブかかった亜麻色の髪の少女が駆け寄ってくる。

「ナビー、大繁盛、ぷーん！」

と、嬉しそうな表情で言う。

大きなエメラルドグリーン瞳……、白い民族衣装のようなチュニックとスカート。

カラフルなビーズのネックレスやブレスレット類を身にまとった少女、そう、エシユリンだ。

「うん、なにが？」

「これ、ぷーん！」

と、エシユリンが手にした物を私に見せてくれる。

「それは……」

本だった。

タイトルはエレノアの蜂……、そう、私たちが夜な夜な集まって一生懸命作った絵本だ。

「もうすぐ完売、ぷーん！」

「へえ……」

確かに、絵本が売っている露店には行列ができていた。

本の制作も終わり、印刷から販売までは、エシユリンたち新ナスク村の人たちに任せていた。

「今日も終わったら、村のみんなと印刷する、ぷーん！」

彼女が嬉しそうに、楽しそうに話す。

「姫巫女さま、在庫はどこでしょうか!？」

「包み方はこれでよろしいでしょうか!？」

と、露店からエシユリンを呼ぶ声がする。

「おまえたちー！ ちょっと待ってて！ ナビー、戻る、ぷーん！」

エシユリンが私に手を振りながら露店に戻っていく。

「うん、頑張って」

と、笑顔で手を振り返し、彼女を見送る。
でも、本が売れてよかった。

少しでも雇用を増やして、自分たちで働いて食べていけるようにしたかったからね。

たぶん、二冊目、三冊目の絵本の製作は彼女たちに任せることになるだろう……。

まっ、シナリオだけは綾原に頼むしかないんだけどね。

「チビの女神さま、発車しますね」

「あ、ごめん、行って」

ガラガラと音を立てて丸太の車が動きだす。

「ナビー様あー！」

「みんなあ、ナビー様がいたよおー！」

でも、すぐに私を見つけた子供たちが駆け寄ってくる。

「止めますね……」

ヴァアゾが手を上げて丸太を押すのを止めさせる。

「ナビー様あー！」

「ナビー様だあー！」

「クルビットもいるー！」

10人以上の人だからができる。

子供たちが私を見上げる。

「おやあ……、お稽古かなあ?」

と、子供たちの格好、手にした木刀を見ながら尋ねる。

「そう！ お稽古！」

「お母さんたちのお手伝いが終わったからお稽古に行くの！」

「他の子たちもみんな行ってるよ！」

「私たちは東の果ての竜騎兵团だから！」

と、口々に言う。

「ナビー様も一緒に行こうよおー！」

「行こうよおー！」

子供たちが私の服を引っ張る。

「わかった、わかった、いくから、いくから」

と、私は引つ張られるがままに、丸太の車から降りる。

「クルビット」

そして、抱いていた子犬のクルビットを地面に解放する。

「ヴァーゾ、私はここまででいい、行っていいよ」

「へい、チビの女神さま……、いくぞ、おめえらー！」

「「おお！」」

「「ライドオーン！」」

再度、ガラガラと音を立てて丸太の車が動きだす。

「じゃあ、いこいこー！」

「ナビー様、こつちだよお！」

「こつちだよお！」

子供たちに連れていかれる。

「ナビー様、ベルゲンデン・ゴトー好きだったよね？」

「じゃ、持ってこよう！」

「こよう！」

と、別の子たちが走っていく。

ちなみに、ベルゲンデン・ゴトーとはいちご牛乳のことだ。

「「1、2！ 1、2！ 1、2！」」

子供たちの稽古場である村外れの広場に近づくにつれ、そんな掛け声が聞えてくるようになる。

「「えい、やあ！ えい、やあ！ えい、やあ！」」

広場では、その掛け声通り、子供たちが元気よく木刀を振っていた。

「みんなあー！」

「ナビー様連れてきたよお！」

と、一緒に広場に來た子供たちが素振りをするみんなのところへ走っていく。

「ええ、ほんととお？」

「あ、ほんとにナビー様だあ！」

子供たちが素振りを止め、一斉に私を見る。

「こら、途中で止めるな！ 続ける！」

「チビの女神さまがいらしたんだ、気合を入れろよ！」

と、近くで素振りを見ていた大人たちから叱責が飛ぶ。

「あいつらは……」

私はその大人たちを見ながら、いつものロッキングチェアのある場所まで歩く。

「剣術の基本は、きちんと構えて剣を振ることだ。剣を止めるのは死んだときだけだと心がける！」

「「はい、先生！」」

子供たちを指導していたのは、蜂蜜色の髪をした剣闘士、金暗色のシユタージだった。

「剣を振り上げ、全体重を乗せて振り下ろせ、振り下ろしたら突きだ！

相手に反撃のチャンスを与えるな！ とにかく剣を振れ、絶対に手を止めるな！ それが全ての基本だ！」

「「はい、先生！」」

こっちは、誰だったか……、そうそう、ツアーツェクの地獄グアル
デイオーラだ。

「戦闘中は距離感に気をつけろ！ 相手の武器、自分の武器の長さを意識しろ！ 相手の武器から遠い場所を攻撃するクセをつけるんだ、相手が武器を振り上げていたら下段から、武器を下げていたら突きだ！」

「「はい、先生！」」

そして、あっちは紅き月のティターノだったか……。

あの三人は剣闘士の中でも実力者、いつも偉そうにしている連中だ。

そして、

「どうぞ、ファラウエイ様……」

と、私のロッキングチェアを引いてくれるのは……。

「セイレイ……」

長く艶やかな銀髪と美しく整った顔立ちの最強の剣闘士セイレイだった。

「ありがと、ぶらん、ぶらん」

お気に入りのロッキングチェアに腰掛けぶらんぶらんする。

「随分本格的ね、セイレイ？」

と、彼女に視線を向けながら尋ねる。

「はい、フアラウエイ様、子供たちも大変真面目で、シユタージたちも教え甲斐があるのだと思います」

「そうなんだ……、ぶらん、ぶらん……」

ぶらんぶらんしながら子供たちの稽古を見守る。

「弦を引いて、狙いを定めて、弦を放す。リズムが大事だ、息を吸いながら弦を引き、一呼吸置いてから弦を放す。弦を指の腹で滑らすように放すんだ」

弓の練習までやっている。

「素人は胸当てを忘れるなよ、場合によっちゃあ、肋骨をおっちまうかもしれないからな。胸当てを外してやるのは一人前になってからだ」
丁寧に取り足取り教えている。

「戦闘訓練なんてのは穴の空いた樽に水を入れる作業と一緒にだ！ 毎日水を入れなければすぐに空になる！ 今日やらなければ昨日の分が無駄になる！ とにかく反復だ、毎日やれ！」

「「はい、先生！」」

「OJTに沿って教えているようね……」

彼らの教え方を見ながら言う。

「おーじえーていー？」

セイレイが聞き返す。

「オブ・ジョイ・トイの略よ……、武器の種類にあった戦闘訓練のこと。1にやってみせる。2に説明する。3にやらせてみる。4に改善点を指摘する。そして、1に戻ってまたそれを繰り返す。そうやって身に染み込ませていく、それがOJT」
「なるほど……、それをオブ・ジョイ・トイというのですね、勉強になります……」

セイレイが感心したように言う。

「ナビー様あー！ お持ちしましたあー！」

「しましたあー！」

と、子供たちが駆け寄ってくる。

「おおー！」

手には私の大好物であるベルゲンデン・ゴトーが入ったカップが握られている。

「どうぞ、ナビー様……」

と、カップを差し出す。

「ありがとう」

笑顔で受け取り、そして、カップに口をつける。

「おいしい？」

と、私の顔を覗き込む子供たち……。

「甘くておいしい……」

ほっぺに手を当てて言う。

「ほんとに？ よかったあ！」

「よかったあ！」

と、子供たちは大喜び。

「じゃあ、お稽古行こー！」

「行こー！」

みんなのところに走っていく。

「うん、おいしい……」

その後姿を見送りながらもうひと口飲む。

「話の続き」

「はい、ファラウェイ様……」

「OJTももちろん大事だけど、それ以上に大事なのは師範としての力量。無理矢理やらせるのは三流、言って聞かせるのは二流……、一流の師範というのはね、生徒に自主性を芽生えさせ、やる気に火をつける者のことを言うのよ、そのことを忘れないで」

「はい、胸に刻みます……」

セイレイが静かにうなづく。

「うん」

視線を彼女から正面に戻す。

「強固な鎧はそれだけで重量があり、動きが鈍重になる。しかも、その防御力は絶対ではなく、隙間だらけだ。そして、守れるのは自分だけ」

こっちは、あの二人、子供たちの中で最年長の男女、タジンとフェインだ。

「だが、盾ならば、自分だけではなく、味方も守ることができる。また、防御だけではなく、相手の攻撃を受け流し、そのまま殴りつけることだってできる。攻防一体の究極の武器、それが盾だ」

その二人が身体に見合わない大きな盾を持ち講義を受けていた。

「よし、盾を構えろ！」

「おお！」

「はい！」

と、二人が並んで大きな盾を構える。

「どらああああー！」

シユタージらが二人の盾目掛けてタツクルする。

「ぐあー！」

「ひっ！」

と、二人は吹っ飛ばされる。

「バランスを意識しろ、絶対に倒れるな、倒れたらおしまいだ、倒れた瞬間におまえらも仲間も全員殺されるものと思え！ 死んでも倒れるな、盾を構えろ、おまえらが仲間を守るんだよ！」

「はい、先生！」

「は、はい！」

二人が立ち上がり、再度大きな盾を構える。

「もう一回いくぞー！」

「おお！」

「お願いします！」

よく頑張ってるね、感心する……。

「あ、そうだ、こんな戦闘訓練だけじゃつまらないでしょ？」

隣に立つセイレイに話しかける。

「はっ！」

「演習やろう、模擬戦。一对一の戦闘訓練もいいけど、戦争では多対多の戦術訓練のほうが重要だから」

フォーメーションとか、戦列を組んでの連携とか。

「も、模擬戦ですか……」

「うん、今日には言わないけど、そのうちやろうー！」
と、私はロッキングチェアから勢いよく立ち上がる。

第157話 日日に疎し

そして、数日が過ぎ、演習、模擬戦の日を迎える。

「楽しみだねえ」

「うん、楽しみ！」

「日頃の成果を見せるときが来たね！」

「来たね！」

と、遠足気分なのか、子供たちが期待に胸を膨らませている。

ここは、市場であるプラグマティッシュ・ザンクツイオンより、南に2キロほど来たところにある広場。

そう、馬車の材料を得る為に、剣闘士たちが勝手に森を切り開いて出来た場所だ。

直径100メートルくらいの円形状の広場。

積み上げられた丸太が至るところに点在し、丁度いい障害物になるだろうと思い、ここを演習場所とした。

「みんな、並んでえ」

「「はあいー！」」

と、子供たちを整列させる。

数は……、25人ほど……。

「これで全員？」

「えーっと、シエランとリジエンとシユナンがお仕事忙しいからって来てない、あと、姫巫女さまもいない」

その4人は通訳の4人だね。

彼女たちがいないと、商談が成立しない、来れないのかもしれないか……。

一応、2時間くらいの予定だから、来れるなら来てとは言っていたんだけどね。

「本当にいいんですか、チビの女神さま？ 手加減なしで、本気でやっちゃいますよ？ 俺ら団体戦も得意なんで」

そう話すのは、剣闘士たちのリーダー、金暗色のシユタージだった。

「いや、手加減しろよ」

彼の言葉に思わず吹き出してしまふ。

剣闘士のほうは、シユタージを始め全員揃っている。

数は14人、もちろんセイレイもいる。

「ええ？ 手加減するんすかあ？」

「せつかく気合入れてきたのに」

「なまってるんすよ、身体が」

「暴れたい気分す」

剣闘士たちがニヤニヤ笑いながら言う。

そういえば、以前セイレイがこいつらは帝国最強クラスの剣闘士たちとか言っていたな……。

なるほど、力を持て余しているのか。

「そう言うな、いずれおまえらが命を懸けて戦う、最高に熱い本物の戦場を私が用意してやる。それまで我慢しろ」

と、近くにいたツアーツエクの地獄グアルディオラの胸を軽く小突いて言う。

「おお……」

「マジっすか……」

「最高っす……」

やつらが舌なめずりする。

「野獣共め……」

つられて私もニヤリと笑う。

「じゃあ、ルール説明するよ」

剣闘士たちと子供たち、その双方を見渡しながら説明を始める。

「おまえらと子供たちは互角の実力とする」

「互角？」

「どういう意味？」

みんなが眉間に皺を寄せたり首を傾げたりする。

「サバイバルゲームと同じ、攻撃を受けたら即終了、そいつは死亡扱いになる。その場に倒れてて」

「はい？」

「どういうこと？」

また首を傾げる。

「えつとね……、ちよつと貸してね」

と、近くの子供が持っていた木刀を借りる。

「えいー」

そして、その木刀で軽く肩を叩く。

「うん？」

「はい、これでコインは死んだ」

「死んだの？」

「そう、死んだふりして」

「うわあ、やられたあ！」

と、コインはその場に倒れる。

「よし、ひとり倒した！ 今度はこつち！ たあ！」

と、剣闘士のひとりに木刀を振るう。

「はい、死んだ！」

「うわあ、やられたあ！」

同じように死んだふりをする。

「こういうこと。これはあくまでも模擬戦、実戦ではないからね。集団戦での動きを覚える練習だから、本気で斬り合わないように。いいね、わかった？」

と、みんなを見渡す。

「ええ、まあ……、つまりは戦術の確認ですね？」

「そう、戦争に於いての自分の役割を意識して動く。どこで戦闘が起こっているか、どこが手薄か、どこが突破されそうか、それを見極めながら戦うのよ」

と、噛み砕いて説明する。

勝つべからざる者は守なり、勝つべき者は攻なり、守るは即ち足らざればなり、攻むるは即ち余りあればなり、とか、いきなり言っても理解できないだろうし、順を追って教えていくことにする。

「そういうことっすね、わかりました」

「俺たちとあいつらは互角、そして、一回でも斬られたらおしまい」「了解、試しに一回やってみましょう」

合点がいった剣闘士たちが口々に言う。

剣闘士たちが理解していればいい、理解していない子供が本気で殴ったとしても痛くも痒くもないだろうし。

「よし、じゃあ、両軍、分かれて」

と、中央に積まれた丸太を挟んで両軍に距離を取らせる。

「あ、セイレイは私といて、ジャツジとか子供たちが怪我しないか見てて」

「はい、フアラウエイ様」

一応、武器は木刀と木の槍、それと弓矢だけど、それぞれ穂先、矢じりを外し、その代わりに柔らかい布を巻いて、怪我をしないような工夫がしてある。

「みんな、日頃の鍛錬の成果を見せてやるのよ、先生たちをやっつけましょう！」

「「おおお！」」

「俺とフェインが盾になる。みんなはそのうしろから攻撃してくれ！」

「「おおお！」」

子供たちが円陣を組んで大きな声で作戦会議をしている。

「いつでもいいすつよ」

「待ちくたびれたつす」

「はっはっは、元気がいいなあ」

一方、剣闘士たちは余裕の表情、ストレッチなどをしながら開始の合図を待つ。

「よし、じゃあ、いい？」

と、一歩前に進み出て両軍に確認する。

「いいつす」

「大丈夫です」

双方のリーダーであるシュタージとタジンが答える。

「じゃあ、はじめ！」

と、挙げた手を振り下ろす。

「おっし、いくぞー！」

「『おおおお！』」

まずは、剣闘士たちが中央の丸太を飛び越え子供たちの一団に殺到する。

「きたよお！」

「守って！」

「みんな、固まって！」

と、子供たちが密集陣形を取る。

「おお？」

「守りを固めるのか？」

「迂闊に飛び込むなよ、斬られたら死亡だからな」

「わかってるって」

剣闘士たちが子供たちの手前で歩を緩める。

「来い！」

「絶対守る！」

大きな盾を構えたタジンとフェインが先頭で子供たちを守る。

「だがな、攻撃する気のねえやつは怖かねえんだよ！」

「守ってるだけじゃあ勝てねえんだよ！」

と、剣闘士たちがタジンとフェインの盾目掛けてタツクルをぶちかます。

「ぐっ！」

「負けない！」

「みんな押さえて！」

「上から槍で突いて！」

うしろの子供たちがタジンとフェインの背中を押さえ、さらに、その上から槍で突いて攻撃しようとする。

「お？ 反撃してきやがったぞ!？」

「こつちも守れ！」

「盾だ、盾！」

剣闘士たちも盾を持ち出し、上の槍をそれで防ごうとする。

「押せ、押せ！」

「押し込まれないで！」

そして、両軍、最前衛で盾をぶつけ合う押し合いへと発展していく。

「「おおおお！」」

「「わあああ！」」

大きな声を上げて押し合う。

剣闘士は13人、それに対する子供たちは25人……、数の差こそあれ、そこは大人と子供、力の差は歴然、少しずつ子供たちが押し込まれていく。

「くそお！ もっと力を出せえ！」

「「わあああ！」」

でも、意外にも子供たちが押し返す。

「やるな、もっと押し込め！」

「「おおおお！」」

また剣闘士たちが押し込む。

「頑張れ！」

「「わあああ！」」

それを子供たちが再度押し返す。

両軍が交互に押し合う時間が続く。

「セイレイ、わかる？ こういうのを三角持ち合いというのよ」

隣で戦況を見守っているセイレイに話しかける。

「三角持ち合い？」

「そう、三角持ち合い……」

私はその辺に落ちている木の枝を拾う。

そして、足元の砂をならす。

「縦軸を場所、横軸を時間で表す……」

そこに、木の枝でグラフを書いてやる。

「剣闘士たちが押し込み、ここで止まる……、そして、子供たちがここまで押し返す……、さらに、また剣闘士たちが押し込み、ここで止まる、そこから、子供たちが押し返す……」

と、折れ線グラフを書き込んでいく。

「わかるよね？」

「はい、少しずつ振れ幅が小さくなっていつています……」

「そう、少しずつ収束して三角形を描いていく。これは、互いに戦線を維持しようとしたときにできる特殊は波形、互いに警戒、互いに様子見、様々な理由でまだ決戦のときではないと考えたときに、双方が戦線を持ち合うことからこういう形になる」

グラフがいつぱいになったので、砂を足でならして消す。

そして、再度書きはじめる。

「そして、この三角形が完成したらどうなると思う？」

グラフを書きながら横目でセイレイに問う。

「止まる……、膠着する……」

「そう、そんなことは誰にでもわかる……、だから、この三角形が完成することは……、その前に動く……」

「「おおおお！」」

剣闘士たちがそれまで以上の力で押し込む。

「負けるな、頑張れ！」

「「わああああ！」」

子供たちがそれを食い止め押し返す。

「あつ……」

セイレイが私の書くグラフの変化に気付き小さく声を上げる。

「三尊。三角持ち合いは必ず破られる……、破られる前兆として現われのがこの三尊と呼ばれる波形……」

グラフを書きながら説明し、そして、

「次でブレイク、戦線は破られる」

と、線を跳ね上げる。

「「うおおおお！」」

私の言葉とともに剣闘士たちが雄叫びを上げて激しく押し上げる。

「うああああ！」

「きやああああ、駄目え！」

「押しされる！」

子供たちが維持していた戦線は脆くも崩壊する。

「人はみんな別々なことを考えているものだけ……、でもね、多くの場合、同じものを見たら同じことを考えてしまうのもまた人間なんだ

よ。好機を見たら、みんなが攻めたくなるし、劣勢を見たら、みんなが逃げたくなる。そして、その集団心理はグラフにすれば簡単に読み解くことができる。それを見れば次の行動なんてすぐにわかってしまう」

足で砂を払いグラフを消す。

「駄目だあ！」

「逃げろお！」

「助けてえ！」

子供たちが敗走を始める。

「ははは、どうした、さっきまでの威勢は?！」

「背中がガラ空きだぜ！」

「はい、死んだ！」

剣闘士たちが逃げる子供たちのうしろから襲いかかる。

「やられたあ！」

「死んじやった！」

「助けて、怖いよお！」

次々と討ち取られていく。

第158話 ダブルタツプ

「悔しい……」

「怖かったよお……」

「全然戦えなかった……」

と、負けた子供たちが意気消沈して戻ってくる。

「惜しかったなあ!」

「ははは、大人の強さがわかったか!」

「次は頑張れよ!」

こっちは勝者である剣闘士たち、意気揚々と帰ってくる。

「で、どうします、第二戦は? このままだと実力差がありすぎて面白くないんで、俺たちと子供たち混成にして二つに分けます?」

と、金暗色のシユタージが提案する。

「いや、いい、このままで。ただし、私が子供たちのほうに入る」

手を挙げて制し、そう言い返す。

「チビの女神さまが?」

「それでも無理でしょう、話にならない」

「セイレイもそっちに入るならチャンスはあるか?」

セイレイに視線が向く。

「そういたしましたでしょうか、ファラウエイ様?」

「大丈夫、私ひとりで十分、セイレイはこれまで通り、ジャツジと監視役をされていて」

「はい、ファラウエイ様……」

そして、そのまま、子供たちの輪の中に加わる。

「わあ、ナビー様だ!」

「これで勝てる!」

「負けるはずないよね!」

「やったあ!」

熱烈歓迎を受ける。

「マジっすか、本気っすか?」

「どうなっても知りませんよ」

「泣かないでくださいよ」

とか、やつらがニヤニヤしながら言っている。

「ふっ……」

逆に泣かしてやるから。

「よし、作戦会議やろーか！」

と、両手を広げて元気よく言う。

「はあいー！」

子供たちを連れて、中央に積まれた丸太の向こう側に行く。

「そんなのやっただって意味ないんすよ」

「時間のムダムダ……」

「早くしてくださいよお」

剣闘士たちは反対側、丸太の向こう側に歩いていく。

「ナビー様、どうするの？」

「先生たち、超強いよ？」

子供たちは勝てるかどうか懐疑的。

「大丈夫、大丈夫……」

と、私はしゃがんで、ところどころに生えている草を引っ張ってみる。

うん、よく根が張っている……。

「ナビー様？」

「なにしてるの？」

子供たちが首を傾げる。

「あのね、みんな……」

作戦会議を始める。

そして、10分後……。

「だからね、こうこう、こうするの……」

「こう？」

「違う、違う、ここを、こう……」

難しい戦術は無理だろうと思って、せいぜいに三つくらいの動きを覚えておけばできる戦術にしたんだけど……。

「ええ……、わからないよ、こっちっ」

「いや、この人はこっちに、その人はあっちに……」

全然理解してくれない……。

「まだっすか、チビの女神さま?」

「待ちくたびれたっす」

「つーか、そんな長々作戦会議やってたら、なんか奇策を講じてくるんじゃないかって勘ぐられちゃいますよ?」

「ちげえねえ、バレバレだな!」

「ははは、そいつぁ、傑作だ!」

剣闘士たちがげらげら笑う。

「とりあえず、大体の人はわかったよね? だったら、わからない人はわかる人の真似をすればいいと思うよ」

「そうそう、俺ら年長者の真似をしていればいいぞ、おまえらは」

と、フェンイとタジンが話をまとめてくれる。

「よし、じゃあ、やろう」

これ以上やつらを待たせるのもなんだし。

「お? もう作戦会議はいいんすか?」

「やっとすか」

私の言葉を聞いた剣闘士たちが口々に言う。

「セイレイ、開始の合図して」

両軍位置に付く。

そして、

「はじめ!」

と、セイレイの手が振り下ろされる。

「いくぞおお!」

「おおおお!」

剣闘士たちが雄叫びを上げる。

でも、

「わあああああ!」

と、やつらが雄叫びを上げている間に、子供たちは丸太を次々と飛び越えて剣闘士たちの元へ殺到する。

「おっ!」

「今度は先制攻撃か？」

「考えたなあ！」

剣闘士たちが子供たちを迎え撃つ。

「うおおおおお！」

「いやああああ！」

タジンとフェインが大きな盾を構えて突進していく。

私はそのすぐうしろで二人のサポートをする。

「アポトレス、水晶の波紋、火晶の砂紋、風を纏え、静寂バビロンレイの風盾」

こつそり呪文を唱えて、二人の背中に手を添える。

「よし」

二人の身体がうつつすらと光る。

「来たぞ！」

「盾構え！」

「うおおおおお！」

「いやああああ！」

剣闘士たちの構えた盾に正面からぶち当たる。

盾と盾、金属と金属がぶつかる音が響き、さらに、盾同士がこすれ

る音がそれに続く。

「うお？ さつきより強烈だぞ!？」

「後衛！ 肩で押して来い、遠慮すんな、すげえ力だぞ！」

「二おおお！」

やつらが押し込まれまいと、姿勢を低くしてスクラムを組む。

「負けるなあ！」

「二わあああああ！」

子供たちも負けてない、一進一退の攻防が続く。

「あれれ、さつきより少くないか？」

「ああ、人数が減っている」

と、剣闘士たちが子供たちの数を見て話し合う。

「もしかして、部隊を二つに分けたのか？」

「まさかあ、戦力の分散は素人のすることだぜ、ふはは」

「戦力の逐次投入は悪手だってママに教わらなかったのかなあ？」

「ははは、あー見えて、チビの女神さまもまだまだ子供なんだなあ」
「ホント、かわいいなあ、うはははっ」

やつらが笑いながら話している。

「わあああああ！」

そのとき、後ろの丸太の山の陰から子供たちが走り出てくる。

「お？ やっぱり出てきたな？」

「来た来た、側面を狙う気だな？」

「かわいいなあ」

それに対して剣闘士たちが側面の防御を固める。

「わあああああ！」

子供たちが側面にタツクルをぶちかます。

「タジン、フェイン、頑張つて、もう少し押して」

と、二人の背中に手を添えながら指示を出す。

「うおおおおお！」

「いやああああ！」

私の言葉に応えて二人が全力で押しまくる。

「おっ、おっ、おっ？」

「勝負に出たか？」

「でもなあ、側面はもう壊滅状態なんだよ」

やつらの言うとおり、側面の子供たちが転倒したり、逃げ出したりして、うまく攻撃を継続できていないようだった。

「くお、押せ、押せえ！」

「わあああああ！」

タジンのかけ声の下、子供たちが一生懸命押そうとする。

「側面は終わりだあ！」

「正面に戦力を集中しろ！」

「押して、押して、押しまくれえ！」

「おおおおお！」

剣闘士たちに勢いが付き、逆に押し込まれていく。

「だめえ！」

「押し返せない！」

「に、逃げよう！」

「うん、逃げよう！」

そして、一気に戦線は崩壊する。

「こわいよお！」

「助けてええ！」

第一戦と同じ、子供たちが一心不乱に逃げ始める。

「こ、こないでえ！」

「誰かあ！」

「うわあん！」

次々と丸太を乗り越え逃げていく。

当然、私もそのうしろに続き丸太を乗り越える。

「ははは、早く逃げないと斬り殺されちゃうぜえ」

「逃げろ、逃げろ！」

「ホント、かわいいなあ、うはははっ」

やつらが嬉々として追ってくる。

「はははは！」

「うへへへ！」

「きやきやきや！」

丸太を飛び越え、子供たちの背後に迫る。

「まず一人め！」

そして、手にした木刀を振り上げる、が、

「へ!？」

その直後、姿勢を崩して転倒する。

「うわっ」

「なっ!？」

後続も同じように転倒していく。

「やったあ！」

「成功だよ！」

「うまくいった！」

それを見た子供たちが大喜び。

「な、なに……?？」

「なにかあるぞう？」

「なんだ、これ？」

剣闘士たちが見ているのは、草。

そう、草と草を結んで足を引っ掛けて転倒させるトラップだ。

「よし！ 弓兵！」

「「はあい！」」

と、さらに、草むらに潜んでいた別の子供たちが立ち上がる。

「狙いを定めて、1、2、3！」

「練習通りに1、2、3！」

子供たちが剣闘士たちに矢の雨を降らせる。

「なあにい!？」

「どこから!？」

「まだいたのか!？」

そう、このために待機させていた伏兵だ。

最初に側面を突いた別働隊はこの伏兵を悟らせないための、あれで全部だと思わせるための陽動。

「ふふっ、これが釣り野伏せよ」

と、笑って言っただる。

「つりのぶせえ!？」

「うわ、やられた！」

「こっちもだ！」

と、数人の剣闘士が矢を受け、死亡扱いとなる。

「攻撃に移るよ！」

「おまえらはこっちだ！」

敗走していた子供たちが森の手前で左右二手に分れる。

「走れえ！」

「「わああああ！」」

二手に分れた子供たちが大きく回り込み、剣闘士たちの側面を左右同時に突く。

「続けえ！」

「いやああああ！」

右側はタジン左側がフェイン、その二人が大きな盾を構えて突進し
激突する。

「わあああああ！」

子供たちもそれに続く。

「くそっ！」

「守れ！」

「盾だ、盾で防げ！」

「ぐあー！」

「死んだやつはどけろ、邪魔だ！」

「いや、死んでるから動けねえんだよ！」

死亡扱いの連中が邪魔で身動きが取れなくなる。

「いい様ね、ちよつと貸して」

と、私は近くにいた子供が持っていた長槍を借りる。

「おまえら、前に武器の使い方を教えていたよな、この子たちに……、
武器の長さがどうか、相手の武器から遠い場所を狙えとか……、つ
まりは、こういうことか？」

と、私は槍を振り上げて地面を蹴る。

「たああああ！」

そして、横になぎ払うように思いつき振り抜く、

狙う場所はやつらが盾や木刀で守る頭や胴体ではなく、下段、足だ。

スパーン、と、気持ちのいい音が響き渡る。

「うっおっおっお！」

「ひひひひひ！」

「いつぎやあああああ！」

すねなどを激しく殴打され悲鳴を上げる。

「いってえええ！」

「え、な、なんで、す、寸止めじゃなかったのかよ!？」

「や、約束が違う！」

やつらが抗議する。

「はあ？　いつ、そんなこと言ったよ？　知らねえなあ」

と、笑いながら言い、再度槍を振り上げる。

「たああああ！」

そして、やつらの足目掛けて槍を振り抜く。

バチーン、と、いい音を響かせる。

「いってええええ！ マジでいてええ！」

「ひ、ひでえ！」

「助けて、ホントに痛い、足が折れたかもしれない！」

「やめて、チビの女神さま！」

泣き言を言い始める。

「あはははっ、そおれ、もう一発、たああああ！」

さらに槍を振り抜く。

「いっひいいいい！」

「死んでる、死んでる！ 俺たちもう死んでる！」

「やめ、やめ、やめ！」

「降参です、降参です！」

遂にやつらが地面に崩れ落ち負けを認める。

「ということは、あたしたちの勝ち？」

「そうだ、俺たちが先生たちを倒したんだ！」

「すごい！」

「がんばったもんね！」

「やったあ！」

子供たちが喜びを爆発させる。

「お、俺たちが、負けた……」

「く、くっそお……」

「プライドがズタズタだ……」

「なんでだ、なんでなんだ……」

一方、剣闘士たちは拳を地面に叩き付けて悔しがる。

「も、もう一戦！」

「お願いします、チビの女神さま、リベンジさせてください！」

「このままじゃ終われないっすー！」

さらに、そんなことを言い出す。

「しょうがないなあ……」

再戦を受ける。

「よしー！」

「今度こそー！」

「負けてたまるかー！」

「配置につけー！」

と、彼らは意気込むけど、次戦も私たちの大勝利で終わったことは言うまでもない。

第159話 鏡心明智

しとしとと雨が降る。

「いつ以来だろう……」

窓の外のどんよりとした雲を見上げる。

いつも晴れ渡るラグナロクに於いて雨は非常に珍しい。

これまでに二、三回くらいしか経験がない。

曇ることすら稀だった。

私たちのロッジには雨どいもなく、ぽたり、ぽたり、と、水がしたり落ち、その下に小さな水溜りを作る。

「それより、早くやっちゃおう」

と、私は取り込んだばかりの洗濯物を仕分けして畳み始める。

「フィユたん、フィユたん、と……」

私のタオルには全部、フィユたん、と、刺繍がしてある。

それは、お節介な生活班の連中がしてくれたもの。

「ご両親にそう呼ばれてたんでしょ？ とか言ってやってくれた。

「これもフィユたん、あれもフィユたん……」

と、バスタオルやフェイスタオル、下着類を畳んでいく。

「あーあ……、雨だねえ……」

「そうだねえ……」

窓のそばで外を眺めている笹雪めぐみと雨宮ひらりの会話が聞えてくる。

「今日は仕事休みかなあ……」

「そうかもねえ……」

洗濯物を畳みながら彼女らのうしろ姿を見る。

「あれ？ 今の、水野と小野寺、二人、手繋いでなかった？」

笹雪が外を歩く女性班の水野若菜と小野寺風子を見ながら言う。

「そう？ そうは見えなかったけど」

雨宮が否定する。

「そっか……、手繋いでなかったか……、あー、駄目、みんな百合に見えきた……」

「百合しかない世界か……、裏切りのない優しい世界になりそうね……」

ちよつとしんみりする。

「あつ？ 神崎と久保田、今のは絶対手繋いでたでしょ？」

笹雪が外を歩く管理班の神崎竜翔と久保田洋平を見ながら言う。

「んー？ いや、繋いでないよ」

またもや雨宮が否定する。

「はずれか……、あー、駄目、みんなBLに見えてきた……」

「BLしかない世界か……、争いのない平和な世界になりそうね……」

なんの話をしてるんだ、こいつらは……。

「よしー！」

と、畳んだ物を抱えて部屋の隅に行く。

ここには私の私物が置いてある。

「よいしょつと……」

そして、一番大きな荷物、赤いアタッシュケースを引っ張り出して、パチンパチンとロックを外してフタ開ける。

このアタッシュケースはタンス代わり、旅客機の荷物の中から適当に選んで私用にもらってきたものだ。

丁寧にタオルや下着類を仕舞ってフタを閉じて、パチンパチンしてまた同じ場所に戻す。

「終わってしまった……」

窓の外を見る。

まだしとしと雨が降っている……。

うーん……、やることがない……。

どうしようかなあ……、牧舎のほうに行ってみようかなあ……、

「あ……」

赤いアタッシュケースの横にある物に目が留まる。

「これで遊んでみようかな……」

それを手に取ってみる。

「おお……、精巧に出来てる……」

それは小さな家、縦横高さ、それぞれ50センチくらいの模型の家だ。

「なんだっけ、これ……、そうそう、シルベスタファミリーだ」
いわゆるドールハウスセットというやつ。

これも旅客機の荷物の中にあつた。

たぶん、誰かのお土産。

部屋の中央に置いて、その前にぺたりと座る。

そして、ドールハウスセットを真ん中からパカって開けると……、

「おお……」

中が全部見えるようになる。

家具と階段とか、さらに暖炉とかまで精巧に作つてある……。

「これが、パステル猫のお父さん、こつちが、パステル猫のお母さん、そして、これが、パステル猫の女の子、私つと」

と、かわいらしい猫の顔をした小さなお人形を取り出し家の前に並べる。

そして、てくてく歩かせてみる。

「えへへ……」

かわいい……。

あ、家の中に車も詰め込んである、取り出さなきや……。

それは赤いオープンカー。

ボンネットのところにはベンツっぽいエンブレムが付いている……。

「これ、赤坂サニーじゃん！」

もう大喜び。

うん、昔乗つてた、バブルの頃の話ね、190Eとかそんなやつ。

あと六本木カローラにも乗つてたよ、ベンベつてやつ。

「じゃあ、今日はみんなでドライブにでも行こうか？」

と、パステル猫のお父さんをしてくてく歩かせながら言う。

「それならお弁当も持っていきましょうね」

「ドライブ、お弁当、やったあ！」

パステル猫のお母さんと女の子を左右に揺らしながら言う。

お？ 家の中にもう一体お人形があるぞお？

私はそれを取り出す。

たぶん、パステル猫の男の子……、でも、色が青く先の三体の白とは異なる……。

「こ、これは……、かく、かく、かく……、い、いや、これは隣の家の、そう、兵藤くんだ、そうに違いない……」

女の子を男の子のところまでてくてく歩かせて……、

「兵藤くん、一緒にドライブに行きませんか？」

と、彼を誘う。

「ああ？」

兵藤くんが嫌そうに答る。

「兵藤くん？」

顔を近づけると……、男の子は突然、手をどんと突き出してきた。いわゆる壁ドンだ。

「ひっ！」

女の子は悲鳴を上げる。

「あたってる！ あたってる！ 顔にあたってるから！」

そう、男の子の壁ドンは女の子の顎を綺麗に打ち抜いていたのだ。

「あててんだよ」

しかし、男の子は冷静にそう返す。

「そ、そっか、あててんのか……、なら、しょうがない……」

女の子は頬の辺りをさする。

「兵藤くん、ドライブに行きませんか？」

「ああ、いいよ」

男の子はぶつきらぼうに言う。

「お父さん！ 兵藤くんも！」

と、二人をてくてく走らせて赤坂サニーにほうに向かわせる。

「わかった！ 早く乗れ！」

「はあい！」

みんなを車に乗せる。

「いくぞ！」

「おおー！」

車を動かしはじめる。

「おらおらー！」

お父さんの運転は荒い、普段は優しいのにハンドルを握ると性格が変わってしまう。

「ぷっぷー！ どかんかいボケ！ 轢き殺すぞタコ！ ぷっぷー！」

クラクションを鳴らしながら赤坂サニーは進む。

「よく見ておけよ、これが名古屋走りだ！」

と、じぐざぐに車を走らせる。

ちなみに、名古屋走りとは右折レーンや左折レーンを使って前の車を抜くことを言う。

「おらおらー！ ぷっぷー！ ぷっぷー！ どかんかいボケ！ 轢き殺すぞタコ！ ぷっぷー！ ぷっぷー！」

すると、車がパコンと家の壁に接触する。

「あ……、ぶつけちゃった、板金7万円コースだね……」

「パパのお給料があ……」

「ぶつけたものはしょうがない、ここでランチにしようか！」

「はあい！」

と、みんなを車から降ろす。

「今日のお昼はなあに、お母さん？」

「ふわふわパンケーキよ、みんなで作りましょうね」

と、車のトランクからフライパンとか皿とかを取り出す。

「焼きましょう」

「はあい！」

女の子にフライパンを持たせて調理をさせる。

「焼けたかなあ？」

と、言い、フライパンにパンケーキを乗せる。

「できた！」

お皿に移して、その上にホイップクリームとイチゴを乗せ、横にフォークとナイフを置く。

それを全員分繰り返してできあがり！

「できたよお」

と、みんなの前にお皿を並べる。

「おいしそうー!」

「うまそうだなー!」

「料理上手だな、将来いいお嫁さんになるよ」

みんなが私を褒めてくれる。

「えへへ」

ちよつと照れてしまう。

「では、いただきます!」

「いただきます!」

と、みんなを少しずつ動かしていただきますを言わせる。

「どう?」

最後に女の子を動かしておいしいかどうか尋ねる。

「う……」

「うーん……」

「あー……」

みんなの反応はいまいち……。

「ナビー、砂糖と塩、間違っただろ?」

兵藤くんが言う。

「ええ!」

と、女の子にパンケーキを食べさせる。

「しよ、しよっぱい……」

そう、砂糖と塩を間違えていたのだ。

「ナビー、味見はしたの?」

お母さんに問いただされる。

「し、してない……」

「料理がへたなのが問題じゃないのよ、自分で作った料理を味見もしないで人に出すのが問題なの、料理がへたのは全然いいのよ、むしろかわいいくらい、でもね、それと味見をしないのは別、塩と砂糖を間違えて気付かないで出すようなのは人間的、人格的、道徳的に問題がある。最低でも自分が食べられるものを出さなければいけないのよ」

長々と説教されるナビーなのであった。

「ああ？ うるせえよ、いいから食え」

でも、ナビーは反抗期、お母さんの口の中に無理矢理パンケーキをねじ込む。

「うぐ、うぐ！」

「どうだ、まいったか!？」

ぐりぐり詰め込む。

「まいった、まいった！」

お母さんがタツプする。

「次から言葉遣いには気をつけるんだな」

と、お母さんを解放する。

「ふふふ……」

超楽しい。

そのとき、部屋の中に光が差し込む。

「おお？」

顔を上げ、窓の外に視線を向ける。

「ナビーちゃん、晴れてきたよ」

「雨も上がったね」

笹雪と雨宮が言う。

「おお！ ホントに!？」

と、私は大喜びで立ち上がり、窓際まで走っていく。

「ホントだあ……」

雨は上がり、雲と雲の間から日の光が差し込む。

幾本もの光の筋、薄明光線が地上に降り注ぐ。

「綺麗だね、こういうのなんて言うんだっけ……?」

「ゴッドレイだったかな……」

「レンプラント光線とも言うね……」

「日本語では薄明光線だよ」

小さな窓から狩猟班の女子三人、笹雪、雨宮、夏目とともに日が差し始めた空を見上げる。

第160話 ルクアーノとレイリー

白いレースのカーテンが風に揺らされ、そのたびに青い空が見え隠れする……。

「いい風……」

日差しは直接入ってこないけど、窓からほんのり暖かさが届き、時折吹く風がその暖かさをかき消し、そのあとには微かな植物たちの香りを残していく……。

「いい匂い……」

また、大きくカーテンが揺れる。

風が室内に入ってきた。

入り込んだ風は室内を遊びまわり、さらにはいたずらまでしている。

「あっ」

風に持っていられないように、机の上の紙を手で押さえる。

「いたずらつこめ」

と、見えない風に対して叱ってやる。

風は大人しくなる。

「ふふっ」

反省したみたい。

「ナビー、集中ね」

教室のうしろで私の監視をしていた徳永美衣子に注意される。

「はあい」

机に視線を戻す。

ここは、割と普通なナビーフイユリナ記念会館。

普段は班長会議の場として使用されているけど、空いた時間には、こうやって、私の授業を行う教室としても使用されていた。

「授業の内容を思い出して、ナビー、あなたなら出来るわ」

前方には私の担任の先生である綾原雫も立っている。

「はあい……」

机の上の紙を見る……。

そう、今は授業ではなく、私の学力テスト中……。

「ええっと、次の問題は……」

なにになに……。

「インターネットなどでよく見られる、WWW、という記号は何を表しているでしょうか？」

笑いでしょう？

嘲笑ってやつ、草いっぱい、草まみれ、大草原、ってやつ。

私は答案用紙に、笑い、と、書き込む。

「よし、次！」

なにになに……。

「お外の気温は－6度、お家の中は＋6度。では、お外とお家の温度差は何度になるでしょうか？」

10度でしょ。

簡単すぎて笑ってしまった。

私は答案用紙に10度と書き込む。

「よし、次！」

なにになに……。

「次の漢字はなんて読むでしょうか？ 鑑識」

漢字の問題か……。

なんだっけ、これ、見たことあるな……。

「に……、に……」

にしこり？

そうだよ、にしこりだよ。

私は答案用紙ににしこりと書き込む。

「いいね、調子出てきた！」

よし、次！

なにになに……。

「ある日の朝食時、年老いた夫婦が朝ごはんを食べていました。静かな食事風景……、しかし、その静寂は突然破られる……。夫人が立ち上がり、自分の椅子を持ち上げ目の前の夫に向かって渾身の力で殴りつけたのだ。さて、ここで問題です。どうして夫人は夫を椅子で殴り

つけたのでしょうか？」

……。

も、もう一度あの人に会いたかったから……？

って、これ、サイコパステストじゃないか！

な、なぜ、こんな問題を……。

ちらりと前に立つ綾原の顔を見る。

私の視線に気付いて彼女がこちらを見る。

私はすぐに視線をそらす。

冷や汗が出る……。

もしかして、疑ってる？ 私がハイジャック犯なんじゃないかって

……。

いや、疑われるようなことは何もしてないよ、たぶん……。

詮索はあとだ。

とりあえず、この問題を処理する。

一番駄目な答えは、テーブルが重たかったから、だ。

それ以外で、私らしい、ナビーらしい答えはなんだ……。

「あつ、そうか！」

「こら、ナビー、静かにやりなさい」

と、うしろの徳永に怒られる。

「はあい……」

再度、問題用紙を見る。

これ、あれだ、お砂糖とお塩を間違えたから、が、答えだ。

サイコパステストは考えすぎ、たぶん、この前の、私が遊んでたドー

ルハウスセットの内容を見て作った問題だ。

笹雪か雨宮か、それか夏目が綾原に話したんだと思う。

そうに違いない。

なあんだ、安心した。

疑われてない。

私は答案用紙にお砂糖とお塩を間違えたから、と、書き込む。

「ふふん」

上機嫌。

すべての欄が埋まった答案用紙を眺める。

全問正解間違いないし！

「終わったようね……、答え合わせは明日やります。では、明日も同じ時間に。よく頑張りましたね」

「答案は私が預かっておくね」

と、綾原が終了を宣言し、徳永が答案用紙を回収する。

「綾原先生、徳永先生、ありがとうございます！」

私は急いで筆記用具を片付けて教室をあとにする。

割と普通なナビーフイユリナ記念会館を出ると光が広がる。

今日は晴天。

雲ひとつない真つ青な空。

「それえ、急げえ！」

と、私は白い石畳の上を走っていく。

向かう先はもちろん、みんながいる牧舎。

私は強い日差しの中、両手を広げて気持ちよく全力疾走する。

ワンピーススカートの裾から風が入り、身体を駆け上がり、ふわっと襟元から出てきて、前髪をなびかせる。

「気持ちいい！」

超ご機嫌！

「おお！ ナビー、今日も元気がいいな！」

「相変わらずかわいいな！ 大きくなったら結婚しような、絶対だぞ！」

と、前から歩いてくるのは、管理班の神埼竜翔と久保田洋平だった。

「洋平！ 竜翔！」

二人はのこぎりや金鋸など、様々な工具をいっぱい抱えている。

「これから仕事!? 馬車作りに行くの!?!」

と、彼らの横を走り抜けながら大きな声で尋ねる。

「おう、これからだ！」

「ナビーも一緒にどうだ!?!」

そう、返事を返ってくる。

「わかったあ！ こっちが終わったら手伝いにいくね！」

と、二人に大きく手を振りながらそのまま走り抜ける。
牧舎までもう少し、お出迎えはなし。

最近は、私の気配を感じても、子犬のクルビットは駆け寄ってこない。
別に病気なわけでも、ましてや私を嫌いになったわけでもない。

「くるうー！」

彼の声が聞えてくる。

「くるうー！　くるうー！」

牧柵の中を走り回る子犬の姿……、いや、もう子犬とは呼べないかもしれない、それくらい成長している。

「くるうー！」

その彼が牧柵の中で元気に走り回り、子ヤギや子馬たちが柵の外に出ないか見張ってくれていた。

「クルビットそっちお願い！」

「くるうー！」

その他にも、もうひとつ人影があつた。

「いっぱいお食べ！」

「ぴよ、ぴよー！」

「ぴよっぴいー！」

「ぴよおー！」

しゃがんでひよこたちの食事を見守っているのは、黒髪のかわいらしい女の子、シユナンだ。

彼女はエシユリンが通訳として連れて来た姉妹の姉のほうで、暇なときは通訳だけではなく、こつこつと牧舎に来て彼らの面倒も見てもらっていた。

「とおおー！」

私は走る勢いそのままに牧柵の上を華麗に飛び越える。

「10点！」

そして、着地、ビシッ決める。

「ナビー様！」

「くるうー！」

シユナンもクルビットも私を見て大喜び。

「くるうー！」

私の周囲を走り回る。

「よしよし……」

と、クルビットの頭を撫でながらシユナンのところに歩いていく。

「ナビー様」

「なにか問題はなかった？」

私は彼女の隣にしゃがみ、同じようにひよこたちを眺めながら尋ねる。

「問題ないです。ピップもスカークもアルフレッドも食欲旺盛でとても元気です」

と、笑顔をつくる。

「ぴよ、ぴよー！」

「ぴよっぴいー！」

「ぴよおー！」

確かに、ひよこたちが我先にとエサをついばんでいる。

「そう、よかった……、ぴよぴよ……」

と、人差し指でひよこたちの頭を撫でる。

「あ！ クルビット、逃げようとしてるー！」

シユナンが遠くを見て叫ぶ。

「くるうー！」

クルビットがものすごい速さで走っていく。

「もう立派な牧羊犬ね……」

その姿に頼もしさを感じる。

「くるうー！」

立ち上がり、彼の向かう先を見る。

子ヤギ二頭が牧柵の下の土を前足で掘っている。

「穴を掘って逃げようとしているの……？？」

「ええ、油断しているとああやって逃げようとするんです」

と、私の疑問にシユナンが答えてくれる。

「くるうー！」

クルビットが追い付き、子ヤギ二頭を牧柵のそばから遠ざける。

「めええ」

「めええ」

その子ヤギたちの毛色は白地に黒のまらだ模様。

ちようど乳牛みたいな感じの毛並みになっている。

そう、その二頭は真つ白な毛並みの子ヤギ、シウスとチャフではない。

「めえ」

「めええ」

シウスとチャフは真ん中で草をはんでいる。

「めええ」

「めええ」

あの子たちは新しい仲間。

「クルビット、連れてきてー！」

と、大きく声をかける。

「くるうー！」

「めええ！」

「めええ！」

クルビットが子ヤギたちのおしりを鼻先でつついてこちらに誘導する。

あの子たちはシウスたちみたいな孤児ではない。

市場プラグマティツシエ・ザンクツイオンに来ていた商人が売っていた、いわゆるブランドヤギというやつだ。

売れなければ、この場で捌いてBBQにするとか言っていたから、かわいそうになって大枚はたいて買った。

うん、すごく高かった。

二頭が私の前までやってくる。

「めええ……」

「めええ……」

不安そうに私の顔を見上げる。

「ふふふ……」

ブランドヤギ……。

ブランドつてのがまたいい……。

「大丈夫だよお……、ふふふ……」

と、しゃがみ、二頭と視線を合わせる。

「めええ」

「めええ」

「よしよし」

二頭を抱き寄せて頬ずりしてやる。

「おお……、毛並みまで上質だあ……」

そして、すごくいい匂い。

すりすり、すりすり。

「気持ちいい……」

少し顔を離す。

「白と黒のまだら模様もなんか物珍しくていいし……」

いやあ、ホントいい買い物したなあ……。

「めええ」

「めええ」

「よしよし」

また頭を抱き寄せて頬ずりする。

「名前、どうしましょう？ 決まりましたか、ナビー様？」

と、シユナンが尋ねてくる。

「うーん」

頬ずりしながら考える。

最初はフランカーとフルバックにしようと思ってたんだけど、よく見たら、この子たち、男の子と女の子なんだよね。

つがいにしろってことなんだろうけど。

男の子のフランカーはかっこいいけど、女の子のフルバックはかわいそう。

「うーん」

すりすり……。

「名前がないと、なんて呼んだらいいのか、とても不便です……」

「うーん……」
「すりすり……」。

フランカーとフルバックはセツトなんだよ、だから、フルバックが使えないとなるとフランカーもなくなる。

「じゃあ、男の子のほうはルクアーノ、女の子のほうをレイリーにしよう」

それぞれの顔を見ながら命名する。

「ルクアーノにレイリー……、いい名前ですね」

ルクアーノとレイリーは元同僚、あいつら、あの世で元気にしてるかなあ。

「よし、ルクアーノとレイリーもごはん食べておいで」

と、二頭を解放する。

「めええ」

「めええ」

よちよちとシウスとチャフが草をはんでいるところ歩いていく。

「シウス、チャフ！ 仲良くするんだよ！」

「めえ！」

「めええ！」

と、彼らも元気よく返事をしてくれる。

第161話 ラインオフ

ト Tent ト Tent、 トン トン トン……、 ト Tent ト Tent、 トン トン トン……。

広場にトンカチで叩く音が響き渡る。

ギーコギーコ、 ガーガーガー……、 ギーコギーコ、 ガーガーガー……。

ノコギリを引く音も聞える。

「ふう……」

私は額の汗を袖で拭う。

今は馬車作り中。

あの詐欺貴族野郎から受注した馬車作りも佳境に差し掛かり、その作業が急ピッチで進められている。

「車輪のやすりがけまだかあ!」

「蝶番が足らない、誰か取ってきてくれ!」

「ライン詰まってぞ、早くしてしろ!」

トンカチやノコギリの音だけではなく怒号も飛び交う。

作業は完全分業でやらせている。

車輪を作る人、ドアを作る人、ボディを組み立てる人、サスペンションを成型する人、塗装をする人、仕上げをする人、などなど……。

別に効率化を狙って、こんなに作業を細分化しているわけではない。

同じ物を同じように作るためだ。

別々のチームで別々に馬車を作らせたなら、全然違う馬車が出来上がってしまう。

それを防ぐために、大勢で細かく作業を細分化して一台の馬車を作り上げる手法をとっている。

これなら、どの馬車も全く同じ物になる。

例えば、どの馬車の車輪も同じ人が作っているとすると、それはもう規格を統一したのと同じ意味になり、一台の馬車の車輪を見れば、他の馬車の車輪の大きさ、材料もわかり、破損、紛失したとしても、同

じ物が容易に作れ、交換も可能になる。

つまりは、アフターケアも万全ってわけだ。

整備でも金を取る、その馬車を所有している限り、私たちに金が落ちる仕組みになっているのだ。

頭いいよね、くんくんは……。

「ふう、よし」

ちなみに、その分業で言えば、私の役割は仕上げだ。

「ワックスかける！ ワックスとる！」

両手にタオルを持ち、左手でワックスを塗って、右手でそれを拭き取る作業をしている。

「ワックスかける！ ワックスとる！」

一回だけではなく、何回もワックスをかける。

ピカピカにしないとイケないからね。

「ふう……」

すごい重労働……。

ちよつと一息つき、広場を見渡す。

「これで完成だな、運ぶぞー！」

「みんな押して！」

「おう！」

完成品が広場のはじつこに運ばれていく。

「おお……、壮観……」

そこには馬車が30台以上並べられている……。

緑色の葉っぱの上にピンクの桃のような形をした物が乗っている
デザインの馬車。

私のピーチ号より二回りくらい大きく、さらに屋根の上に付いているランタンの形も違う。

私のは桃、こつちのはさくらんぼの形をしている。

「チェリー号……」

そう、イタバナーネ・チェリー号が正式名称、イタバネのサスペンション付きの乗り心地抜群の馬車だ。

「うん？」

並べられているチェリー号の近くに人だかりが出来ているな。

「おやあ？」

その中に体格がよく背の高いやつがいる。

さらに髪を立てているせいか、ひと際大きく見える……。

「おおー！」

あれは、私の東園寺ロボではないか！

その東園寺たちが集まり何かを話し合っているようだった。

あいつ……、さぼっているな……、許せん！　こらしめてやる！

私は東園寺のうしろから忍び寄り、そして、十分に近づいたところでダツシュ！

「こらあー！　さぼってんじゃねえぞおー！　仕事しろおー！」

と、うしろから覆いかぶさるように飛びつく。

「な、なんだ、ナビーフイユリナか、やめろ！」

東園寺がわざとらしく驚く。

こいつ、私がうしろから忍び寄っていたことを知っていたくせに。気に入らない！

「仕事しろおー！　仕事しろおー！　仕事しろおー！」

と、抱き着いたままじたばたしてやる。

「わかった、わかった、何をすればいいんだ？」

「肩車！」

そう、東園寺ロボの仕事といったら肩車しかない。

「またか、ほら……」

と、そのまましゃがんでくれる。

「おおー！」

私はよじ登り、肩車をしてもらう。

「立つぞ」

ゆっくり立ち上がる。

「おお……、高い……」

視界がひらける。

「よし、出発進行！」

と、かかとで胸のあたりをトントンとする。

ちなみに、東園寺ロボの操縦方法は、かかとでトントンすると前進、操舵は行きたいところに顔を向ける、止まるときは頭をうしろに引張る、以上。

「どこにだ……」

かかとでトントンしても動きださない……。

「あれえ、壊れたのかなあ……」

と、上から彼の顔を覗き込む。

長い髪がバサーって前にたれる。

「見えん、見えん……」

その髪を手で払う。

「ということが考えられる……」

東園寺の視線の先からそんな声が聞えてくる。

そういえば、みんなが集まってなにをしているんだ？

と、私もみんなが見ている先に視線を向ける。

「これを見てくれ、これは先程市場で買ったこの世界で作られたロングソードだ」

話しているのは、参謀班の人見彰吾。

「素材は鉄」

そして、彼の隣でそのロングソードを持つのは狩猟班の和泉春月。

「やってくれ、和泉」

「ああ」

と、和泉が直立のまま、目の前にある丸太に向かって剣を振り下ろす。

剣は、ギン、という鈍い音を立てグニヤリと曲がる。

「このとおりだ」

人見が和泉から剣を受け取り、曲がった剣をみんなに見せる。

「次にこれ、これも先程市場で買ったものだ」

同じような剣を和泉に渡す。

「素材は鋼……、やってくれ、和泉」

「ああ」

と、さつきと同じように剣を振り下ろす。

今度は、ピキン、という甲高い音を立て真つ二つに折れる。

「このとおりだ」

また人見が剣を受け取り、真ん中から先がなくなった剣をみんなに見せる。

「これでは使い物にならない」

と、曲がった剣と折れた剣を見ながら言う。

「どういうことだ？ 粗悪品か？」

「いや、全部があんな感じだった」

「それは俺も以前から気になっていた、どういうことなんだ？」

聴衆である管理班の久保田や神崎、狩猟班の秋葉が疑問を呈する。

「素材の問題でも、製鉄が未熟なわけでもない……、もっと単純な話

……、これらの剣が脆い理由は……」

「ああ、浸炭してないのか」

と、思わず言ってしまう。

すると、最後尾で東園寺に肩車してもらっている私に視線が集まる。

「しんたん？」

「なにそれ？」

みんなが首を傾げる。

「あ、ああ……、そ、そうだ、浸炭の話だ……、まさか、ナビー、キミがそれを知っているとは……」

人見がうつむき人差し指でメガネを直す。

「なあんだ、ナビーでも知っていることなのか……、もったいぶってなに言うのかと思ったら……」

「そんなことなら早く言えよホントに、仕事たまってたんだからよ」

「で、なんなんだ、その浸炭っていうのは、もう興味ないけど」

「しかし、人見って大したことないことをさも凄えことのように言う天才だよな」

と、酷い言われようになっている。

「ちよ、ちよつと、みんな聞いてくれ、大事なことなんだ……。鉄の剣は弾力があつて折れ難い、しかし、その反面曲がりやすい、鋼の剣は

その反対、固く曲がり難いが、衝撃に弱く折れやすい……」

人見がしどろもどろに講釈を始める。

「そこで、その鉄の曲がりやすさ、鋼の折れやすさ、それぞれ欠点を補うために考案されたのが浸炭なんだ。知っての通り、鋼とは鉄に炭素を加えたもののことを言う。ならば、その炭素濃度を細かく変え、一本の剣の中に鉄の部分もあり、鋼の部分もある、さらには鉄と鋼の間部分まである、そういうものが出来ないかというのが発想の出発点だった。中心部分が鉄で弾力性があり、そこから表面に向けて少しずつ炭素を配合して鋼化することによって、表面は非常に固く、内部は弾力のある、折れず、曲がらずの剣が出来上がる。浸炭を施した剣の作成に成功したら、ラグナロクソードとしてブランド化出来るかもしれない、ナビーが買ったあのブランドヤギと同じように。そうすれば外貨獲得も楽になるし、何より、我々の戦力の増強にも繋がるはずだ」なるほどね、いい案だと思うよ。

でも、

「全然頭に入ってこない……」

「何言ってるかわかんない……」

「それなら勝手に進めてくれよ」

誰も話を聞いていなかった。

「もう行こうぜ」

「そうだな、忙しいし」

「馬車作り、馬車作り……」

「それにしてもなんなんだよ浸炭って」

「牛タンの仲間じゃないのか？」

みんながそれぞれの持ち場に帰っていく。

「ちよ、ちよつと、みんな待ってくれ、話はこれからなんだ！」

と、人見は手を伸ばすけど、みんなはそのまま帰って行ってしまふ。

「人見、話はわかった、その方向で進めておいてくれ、まかせる」

東園寺も興味なさそうに言い、踵を返す。

「なんか、ごめんね、彰吾……」

とりあえずくくんくん謝っておく。

今もこの広場にはラグナロクの私たちだけではなく、新ナスク村の住民や居候している剣闘士たちが集まり馬車の完成を祝っている。

100人以上は集まっているだろうか……。

「じゃあさ、完成を祝って一本締めでもしないか？」

久保田がそう提案する。

「なんだよ、一本締めって、ナスク村に人たちにもわかるのにしろよ」
神埼が笑いながら言う。

「じゃあ、なにがいいかなあ……」

と、久保田が腕を組み考える姿勢を取る。

「えいえいおー、だよ、えいえいおー！」

私はそれを見て即座に提案する。

「えいえいおー？」

「えー？」

「意味が違くない？」

とか、否定的なことを言っているけど、

「みんなあー！ 私がえいえいおー！ って言ったら、続けてみんなもえいえいおーね！」

と、新ナスク村の人や剣闘士の連中に現地の言葉で説明してやる。

「「おおー！」」

すぐに返事が返ってくる。

「じゃあ、やるよー！」

「ええ、もう!？」

「早い、ナビー！」

私はこぶしを握り締め、

「えいえいおー！」

と、こぶしを突き上げる。

「「えいえいおー！」」

すると、それに続き、みんながこぶしを突き上げ叫ぶ。

「えいえいおー！」

一回じゃ終わらない。

「「えいえいおー！」」

「えいえいおー！」

一回じや終わらない。

「えいえいおー！」

「えいえいおー！」

もちろん、まだまだ続く。

「えいえいおー！」

「えいえいおー！」

暮れなずむ夕暮れの中、その掛け声はいつまでも続くのであった。

第162話 なかりけり

日が明けて納車当日を迎える。

澄み渡る青空の下、完成した馬車はすべて、市場プラグマティツシエ・ザンクツイオンの入り口付近に並べられてある。

市場から伸びる道の両側には色とりどりのアラベスク模様の三角旗、フラッグガーランドが掲げられており、それがそよ風に揺らされ、華やかな雰囲気演出してくれていた。

「ああ……、緊張してきた……、子爵さま、どういう反応するかしら……」

と、福井麻美が緊張した面持ちで子爵さま御一行の到着を待つ。

あの詐欺貴族野郎は私たちに馬車は作れないと思っっているだろうから相当驚くだろうね。

「大丈夫だよ、麻美さん、こんなによく出来てるんだから、文句が出ようはずがない！」

「そうそう、ナビーの仕上げもバツチリだしな、こんなにピカピカだ！」

馬車製作の主導的立場だった久保田と神埼が明るい口調で答える。

「おお、良い馬車ですなあ」

「資金に余裕があれば一台欲しいところですよなあ」

「見事、その一言に尽きますなあ」

と、整然と並べられているイタバーネ・チエリー号の横を通り過ぎていく商人たちが笑顔でそう言ってくれる。

「な、なんて、ナビー？」

現地の言葉がわからない福井が私に翻訳を求めてくる。

「いい馬車だつて、お金があれば欲しいって」

「本当に？」

「本当だよ、あと、お見事とか言ってるよ」

「そ、そう、子爵さまも気に入って快くお金を支払ってくれればいいんだけど……」

それでも自信なげに言う。

「暗い顔しないで、麻美さん、大丈夫だから、みんなも来てるし、それに、契約は契約なんだから、金は払わざる得ないよ」

と、久保田が納車を見届けようと集まった、馬車製作に関わった人たち手で示しながら言う。

「そ、そうだよね、みんな頑張ってくれたからね……、うん、私、強気でいく」

「その意気、その意気」

久保田が笑う。

「それにしても、今日全部持って帰るんだよな？　馬何頭で来るんだろ？」

「さあ？　一応、連結用のロープは多めに用意してあるけど、そんなに何個も繋げたら危ないよな、山道とか？」

「出来れば連結は二台まで、馬24頭以上で来てくれればいいんだけど。その辺の話はしてあるの？」

「さあ？」

うしろでそんな話し声も聞える。

「持つてる帰るの大変だよなあ、これ……」

と、その会話を聞いて、大量に並べられている馬車をぼんやりと眺める。

「あつ！　あれじゃないですか？　麻美ぶーん！　麻美ぶーん！」

福井の隣にいる黒髪の少女シユナンが声を上げる。

彼女には通訳として来てもらっている。

別に私が通訳をしてもよかったけど、この契約をしたときの通訳はシユナンだったので最後までやってもらうことにした。

一応、シユナンのそばには私がついて何かあつたらすぐにフォローするつもり。

「やつぱりあれですよね、ね？　ね？　麻美ぶーん！」

と、シユナンが福井の袖を引っ張りながら興奮気味に言う。

「き、き、き、来た……」

彼女たちの視線の先には舞い上がる砂煙が見える。

おそらく、大人数……、数十頭の馬がこちらに向かって来ている。

「おお、来た、来た……」

「すげえな、何人で来たんだ？」

「まあ、あのくらいの人数じゃないとこれだけの台数は持って帰れないぜ」

砂煙を見ながらそんな話をしている。

やがて、その姿が見えるようになってくる。

先頭を走るのは赤いマントをはためかせた紳士然とした細身の男。顎が細くその先に髭を蓄え、ギラギラとした細い目と酷薄に笑うその口元……。

「嫌な感じだな……」

それが私の第一印象。

「どうどう！ どうどうどう！」

私たちの目の前までやってきた。

「し、子爵さま、お待ちしておりました」

「子爵、お待ちしております」

福井の言葉をシュナンが即座に通訳する。

「出迎えご苦労！ 再会を嬉しく思う！」

「また会えて光栄です、と、言っている、プーン」

子爵の言葉を通訳する。

「馬を引いておけ！」

「はっ！」

子爵が馬を降り、部下に手綱を渡す。

うしろの部下たちも馬を降りる。

30人はいるだろうか……。

「それではお金のほうは用意出来ましたかな、ミス福井？ 大人しく支払っていただけるとは思いますが……、念の為、こんな大所帯で来てしまいました、どうかお許しを……」

子爵がさらに酷薄な笑みを浮かべながら福井の元へ歩いてくる。

「いえ、ご契約の通り、馬車48台、すべてご用意いたしました」

福井が並べられている馬車を手で指し示し、

「締めて1億1520万帝国タウになります。ウォキートル子爵さ

ま」

と、言い、笑みをつくる。

子爵が凍りつく。

「何を言ってるんだ、この馬鹿は？」

が、それも一瞬だけ、即座に言い返す。

「えつと……」

シユナンがどう通訳していいのかわからず言葉を詰まらせてしま
う。

「それになんだ、このガラクタは？ 文明の利器もわからぬ未開の野
蛮人どもが、こんなものが売り物だと本気で思っているのか？ お笑
い種だな」

と、並べられた馬車を一台一台値踏みしながら話す。

「なんて言っているの、シユナン？」

「えつと……」

言葉のわからない福井がシユナンに通訳を頼むけど答えられない。
子爵が馬車の扉を開ける。

「うわあ……、なんだ、これ……、くっせえ……、何使ってたんだ、いつ
たい……、こんな物を人に売りつけるなんて、どういう精神構造して
るんだ、未開の野蛮人どもの考えることはわからん……、恥という概
念がないのか……」

と、口元と鼻をハンカチで押さえ開けた扉をボタンと閉める。

「えつ……」

「なんだ、こいつ？」

「なんだよ、その態度？」

言葉がわからなくても、その表情、その仕草で何を語っているかは
十分に伝わる。

「なんだ、その顔はあ？ 礼儀もわきまえぬ、未開の野蛮人どもがああ
あ!!」

逆に怪訝そうな顔をした福井たちが子爵に怒鳴られる。

「なんなんだよ……」

「なんて言ってたんだよ……？」

「どういう意味なんだ？」

それでも言葉がわからずに困惑する。

「えーい！、兵隊ども！、こんなもの壊してしまえ！、いい、構わん、見るに耐えない！、壊せ、壊せ、全部壊せえ！」

「へい、閣下」

「かしこまりました、ウオキートル卿」

と、子爵の指示の下、うしろで控えていた屈強な兵士たちが馬車の並べられているほうに向かう。

「な、なにをする気なの？」

意味のわからない福井が不安そうにつぶやく。

「おらあ！」

「どやあ！」

「うはあ！」

そして、兵士たちが並べられている馬車に手をかける。

「な、なにをするんだ!？」

「や、やめろ！」

ドアや車輪を引きちぎり、それを私たちのほうに投げつける。

「きやあ！」

「あ、危ない！」

「な、なんてことを!？」

馬車の一部だった木材が次々投げつけられる。

「やめろこの野郎！」

「俺らが一ヶ月以上かけて作った大事な商品なんだぞ!？」

「もう我慢できん！」

頭に血を登らせた久保田たちが殴りかかろうとする。

「ぼ、暴力は駄目よ！」

「ちよつと待ってみんな！」

それを福井たちが止める。

「麻美さん!？」

「どうして!？」

と、久保田たちが不満の声を上げるけど、

「おらあ！」

「どやあ！」

「うはあ！」

やつらはお構いなしに馬車を壊し続ける。

「くそ！ 意外と頑丈だな、なにかハンマーはないか!？」

「俺の馬に斧が積んである、持ってくる！」

釘を極力使わない組み木工法により作られた馬車は頑丈でやつらも破壊するのに手こずっているようだった。

「かてえ！ かてえ！」

と、やつらの一人が馬車に足をかけ、剥がれかけた板を引きちぎろうとする。

「やめてください！」

だが、そこで、ひとりの少女が男の背中にしがみつき止めに入る。

「な、なんだ!？」

「やめてください！」

そう、それは通訳のシュナンだった。

「みんなで一生懸命作った馬車なんです！ 壊さないでください！」

必死に叫び、男にしがみつく。

思えば、自分の通訳がたないせいでもうなつたと責任を感じていたのだろう。

彼女は暇さえあれば馬車作りの手伝いをしていた。

「やめてください！」

「この野郎、放せ、馬鹿野郎！」

と、男が身をよじり、背中にしがみついているシュナンの襟首を掴み、強引に引き剥がし放り投げる。

「きやつ！」

シュナンが尻餅をつく。

「シュナン!？」

「だ、大丈夫!？」

みんなが彼女に駆け寄ろうとする。

「なんだ、この薄汚いガキは……」

しかし、シュナンが尻餅をついた場所はウオキートル子爵の目の前だった。

「この世から消えてなくなれ、薄汚いガキがああ！」

やつが足を振り上げる。

「シュナン！」

「逃げて！」

「誰か助けて！」

みんながそう叫ぶけど間に合わない。

私を除いて。

「なっ……っ？」

子爵が驚きの声を上げる。

「子供に暴力ふるうの、やめてもらえないかな？」

やつのシュナンを蹴ろうとした足、その足のすねに私の足が踏みつけるように乗っている。

まっすぐにやつの顔を見上げる。

「ぐぬぬ……」

やつが力を込める。

だが、微動だにしない。

「うぐぐ……」

やつが諦め、足を下ろそうとする、そのタイミングで私の足も下ろす。

「う……っ？」

しかも、やつの下ろした足のかかとと私のかかとをぶつけるように。

「離れろ」

そして、そのまま、やつの肩を軽く押してやる。

「うおっ、うおっ、うおっ？」

と、子爵がバランスを崩し、ぐるぐると腕を回転させながら、5歩、6歩と後退していく。

「シュナン、大丈夫!？」

「怪我はない!？」

福井たちが駆けつけ、シユナンを抱き起こす。

「だ、大丈夫、ぷーん」

幸いにも怪我はないようだった。

「おまえらも向こうに行け」

馬車を破壊していた兵士たちに鋭く言う。

「閣下……」

「ウォキートル卿……」

兵士たちが子爵の周りに集まる。

「小娘……」

やつが私を睨みつける。

だが、そんなものは意に介さない、逆に睨み返す。